の人人は、峰から谷へ、引きもちぎらず」同（菊花）「此處、彼處の參下向が夥しい事で御座った」

まゐりこむ 參込む【動四】參り入り込む。（葉花）「よろづの人參り込み見たてまつる」

まゐりざかな 參肴【名】『他動詞のまゐる（參る）㈠を見よ』式三獻のにあらざる、普通の食用の肴。（鎌倉年中行事）朝の御祝に、參肴にて、御酒三獻」

まゐりしよ 參所【名】參詣する所。（栗毛）「栗尾の觀音、松尾藥師、宮城の不動などいふ、結構な參所もあるものだんて」

まゐりちがふ 參違ふ【動四自】人人、混雜して參る。（增鏡）上達部（カンダチベ）、殿上人、夜、晝となく、袴のそば取りて參りちがふ」

まゐりつく 參著く【動四自】ゆきつく（行著く）を鄭重にいふ語。參著（マヰリツ）す。（源氏）「ありぬべき人人は、おのづから參りつきてありしを」

まゐりもの 參物【名】『他動詞のまゐる（參る）㈠を見よ』たべもの。食物。（源氏）「まゐり物なるべし、折敷手づから取りて」（葉花）「さるべう親しき上達部（カンダチベ）など呼ばん。その日のまゐり物、御廚子（ヅシ）所わざにすべし」

まゐる 參る【動四自】『參（マヰ）入るの約と用ふなどの敬語。めす。（大鏡）「久世（ク）の鳥、交野（カタノ）の鳥の味は、參り知りたりき」（增鏡）大御酒（オホミキ）參るついでにも」㈡貴人のために、或事を爲したてまつる。奉仕す。（古語）（榮華）御贖參らせたまはんとてなりけり」（竹取）高坏（カ）に參りたるおほとの油なれば」（紫式部日記）「二十人の伴儕をひきゐて、御加持參りたまふ足音」㈢爲さる。あそばす。（源平盛衰記）「轉んで、怪我を參るな」

まを 眞苧 苧麻【名】㈠（植）蕁麻（イラ）科に屬する多年生の草。莖は、木質に近く、高さ三四尺に達し、枝を分つこと少く、葉は互生し、廣心臟形又は卵形にして、先端尖り、邊緣に鋸齒あり。表面は綠色なれども、裏面は白く、長き葉柄を具ふ。夏、葉腋より、四片の花被を有する單性の細花、雌雄株を同じくして開く。山野に自生し、夏秋の頃、莖を刈り、皮の纖維を取りて、絲・綾物等の料に供す。いさう。いみあさ。むし。らみい。をのね。㈡前項の草の纖維にて製したる麻絲。（夫木）「七夕（タナバタ）にまをのにひ絲ひきかけてくることと絕えぬ足合の空」

まをか 眞岡【名】㈠（地）『モオカと發音す』下野國芳賀（ガ）郡にある町。鬼怒（キヌ）川の支流なる五行川の右岸。宇都宮市を距ること五里、その間、輕便鐵道の便あり。

まをしか 眞男鹿・眞牡鹿【名】『ま（眞）は接頭語』をじか（男鹿）の美稱。（古語）（記）「天香山（アメヤマ）の眞男鹿の肩を內拔（ヌ）きて」

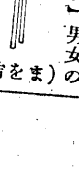
まをしぶみ 申文【名】まうしぶみ（申文）㈠に同じ。（紀）表、マヲシブミ」

まをす 申す【動四他】㈠まうす（申す）㈠に同じ。（古語）（記）山代（ヤマシロ）の筒木（ツツキ）の宮にものまをすあがせの君は涙ぐましも」㈡まうす（申す）㈡に同じ。（古語）（萬葉）「よろづ代に坐（イ）したまひて天の下まをし給はね」同「いにしへに君が三代まで仕へけりわが大王は七世までをさね」㈢まうす（申す）㈢に同じ。（萬葉）天（ア）飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして」

まをつと 間夫・密夫【名】次條に同じ。（運歩色葉集）「密夫、間夫、マヲット」

まをつこ 間男・密夫【名】情夫、又、情夫を持つこと。（後世は、主として、有夫の女にいふ）みそかを。密夫（ミップ）。（著聞集）「男して會合したる所など、さまざまに書きて」（盛衰記）日頃の寢夫（ミコ）を尋ぬる由にて」

まをつこむすび 間男結【名】女の帶の仲を取り持つといふ藥師。いろいろ。



まをつこやくし 間男藥師【名】男女のいふ藥師。いろやくし。

まをむすび まを結【名】緒の結び方の一。下の圖を見よ。



（まを結）

みやうみやうにち 明明日【名】あさつて。（名語記）「明日（アス）の明日（アス）をミョウニチと發音する類

「美」(呉音ミ)の草體、變體平假名來も同字の草體、又は「見」(訓ミ)の草體、云は「三」(訓ミ)の草體より出で、片假名ミは「三」を取れるなりとも、又、「美」又は「尾」(呉音ミ)又は「實」(訓ミ)の草體なる「实」の中部の三線を取れるなりともいふ。萬葉假名としては、前記「美」・「見」・「三」・「尾」・「實」の外、字音に據れるものに「未」・「味」・「寐」・「彌」・「瀰」・「弭」・「微」・「湄」・「民」等、訓を取りたるものに「看」・「視」・「省」・「參」・「身」・「箕」等あり。

み 身【名】一からだ。身體。おのれ。自分。自身。おのれ。枕「これは、身のためにも、人のためにも、さていみじき悦には侍らずや」宇治「よろづにめでたければ、身にも優りておろかならず思へども」二ししむら。肉。皮・骨などに對して)四木の皮の内部。五刀劍の鞘の中なる刃。なかみ。なかご。ぬきみ(拔身)一參照。六蓋ある器物の、物を容るる方。詞花「わが戀はふたみ變れる玉くしげいかにすれどもあふ方ぞなき」七みほば(身幅)の略。「前身(マヘ)」「後身(ウシロ)」

身、衣に勝(タ)へざるが如し【句】『韓詩外傳に「昔者周公事二文王一、行無二專制一、事無レ由レ己、身若レ不レ勝レ衣」、禮記の檀弓篇に「趙文子、退然如レ不レ勝レ衣」とあり』衣服を著るだけの力なきほどなり(恐れ謹むさま、又は體質の虛弱なることの形容)。

身重し【句】一身分重し。增鏡「今は孫(マゴ)の代なれば、いよいよ身重く、勢添ふこと」二『詩經の大雅大明篇に「大任有レ身(ハラメル)、生二此文王一」とありて、毛傳に「身重也」と見ゆ。晴合せり』孕みてあり。姙娠せり。天神記「忍び逢ふ夜の數重なり、身も重くなりけるを」

身が入る【句】心が一途(イチヅ)になる。熱心になる。俳諧古選抽角「實の入って夕顏の宿ひづみけり」

身が固まる【句】身分が定まる、又、身持が正しく落著く。浮世風呂「御物領のお姉(アネ)さんは、たしか、お片附きなさいましたっけね。……。お一人づつも、おみ

身の固まるが、御心やすめさ」

身か、皮か【句】物事の狀態の分別の附き兼ぬること。譯(ワケ)のわからぬこと。皮か、身か。

身が絞る【句】痛疾にて、難澁する形容。

身が狹し【句】「肩身(カタミ)狹し」に同じ。俗曲「主や誰絲の春雨」「せかれて後は、身も狹う、人目忍ぶがあぢきなく」

身が立つ【句】一人前の人として、世に立つ。梅暦「どうか、お前(マヘ)の身の立つやう」

身が身にて有り【句】われ人がましくあり。慶長記「緣者・知音(シルベ)も身が身にてある時こそ、自ら芳心あれ」

身が身に候ふ【句】前條に同じ。曾我「恐れながら、身が身に候はば、源平兩氏の戰に、いづれ甲乙候可き」

身が燃ゆ【句】怒り、嫉み、又は憎みなどする心、烈しく起りて、苦しみ悶ゆ。心火燃ゆ。「身を燃す」參照。狂言「假の袋「さても、さても、腹だちや、腹だちや、身が燃えて、腹が立つ」

身から出た錆【句】『刀の錆は、刀より出でて、その刀を腐蝕せしむるより、み(身)国を、み(身)一の意に言ひかけたるなり』自身の爲せる惡行のために、自ら苦しみ、又は禍害を蒙る。刃(ハ)(イ)から出た錆。自業自得(ジゴウジトク)。「諺語」

身、しやれ・かったね【句】若し背かば、我が身は、髑髏(カシャレコウベ)とも、癩病病(ライビョウ)ともなれとの意にて、誓の時にいひし語。

身で無い物は骨鯁(ホネナシ)【句】『魚などの肉を取りたる殘を、更に骨鯁にするといふ義』いかなる物にても、用ふれば役に立つ譬。「諺語」

身で身を喰ふ【句】「身を喰ふ」に同じ。

身で身を食(ク)ふ【句】自分の爲したる事によりて、自ら苦しむ。身から出た錆。

身で身を詰む【句】前條に同じ。

身に當る【句】身の程を超ゆ。過分に思はる。身に過ぐ。源氏「身に餘れる物ども、多く賜ひて」

身に入る【句】一「身に染(シ)む」に同じ。異本曾我「不孝の罪は、……、身に入りておそろしく覺え候ふ」二その事に心、深く入る。氣に向く。

身に應ぜぬ幸は、子孫の枯るる端【句】次條に同じ。「諺語」

身に過ぎた果報は、災の基【句】「滿(マ)つは損を招く」に同じ。「諺語」

身に負ふ【句】身分に相應す。新古「身に負はぬ鎧をのみ聞くぬけがらの蟬のをりは〳〵ありとやは見る」

身に及ぶ【句】身の程にふさはしくして、爲し遂ぐることを得。講曲「松風」「松風も、村雨も、袖のみ濡れて、よしなやな。身にも及ばぬ戀をさへ、須磨のあまりに罪深し」

身に掛く【名】誓ひて、己が身に引き受く。甲陽軍鑑「もし、敵を討ち損じて、兩人ばかり死し給はば、それは、我等ども、身にかけ、仕(ツカ)へすべし」

身に金(カネ)が入る【句】刃物にて斬らるる夢は、我身に金(金屬)の這入る夢なれば、我身に金(金錢)の這入る前兆なりとの俗說ありていふ語。薩摩歌「いろいろの譯も無い夢見るもの、身に金が入るとて、斬らるるが上夢(ジョウム)」

身に替(カハ)る【句】或人の受くべき罪科・災害などを、その人に代りて、引き受く。身代に立つ。太平記「身に代り、命に代らんと、義を存じ、忠を致しつる郎從も」

身に替ふ【句】身がはりに立つ。拾遺「身に替へてもやなく春を惜しむかな 生きなば後の春もこそあれ」

身に替へて【句】その人のためには、己が身を犧牲にしても惜しからぬ程に。平家「河野が身に替へて思ひける郎等に、讃岐七郎、押並べ、むづと組んで、どうと落つ」

身に染通(シミトホ)る【句】次條一に同じ。萬葉「戀しくにいたき吾が身ぞいちじろく身に染み通りむら肝の心くだけて」

身に染(シ)む【句】一痛切に感ず。骨髓に徹す。芭蕉「身にしみて大根辛し秋の風」二深く思を掛く。心の底より思ひ込む。薩摩歌「通風(トホリ)の吹くやうに、身にも染まぬ一時戀(イッゴト)」

身に過ぐ【句】「身に餘る」に同じ。

身に立ち歸る【句】己が身をかへりみる。反省(セイ)す。續鳩翁漫話「とかくわが身をかへりみるが、學問の所詮でござりまする。身に立歸りさへすれば、忠孝は勘めよい」「歸す。

身に附く【句】己が物となる。所有になる。

身に抓(ツ)さる【句】他人の災難・不運など、我身に引きくらべらる。

身に爲す【句】眞身(シン)の者と思ひて取り扱ふ。卯月の紅葉「幼き時より氣に入りて、幾春秋をふりといふ、年季の下女を身になして、匿す事をも語りしは」

身に成らず【句】食へども、營養にならぬ心地す。

身に爲(ナ)る【句】一その身になる。當事者になる。菅家集「なげきにはいかなる花の咲くやらん身になりてこそ思ひ知るらめ」二その身になりて、身を入る。蘇武「内の者は身にならず、心の合うた友はなし」三肉になる。身體の滋養になる。梅暦「身になる物を、ちっと喰べて見なさいよ」

身にまさる寶無し【句】「身ほど可愛い者は無し」に同じ。「諺語」

身にも皮にもならず【句】食事の時、心の落ちつかぬ形容。

身の秋【句】一秋に厭(ア)を言ひかけたるもの』わが身の、人に厭かれて、淋しく暮すこと。謠曲「阿漕」「波ならで、干すひまもなき海士衣(アマゴロモ)、身の秋いつと限らまし」二秋の淋しさを、わが身の上のみの事のやうに、心細く感ずること。蕪村「身の秋や今宵をしのぶ翌(アス)もあり」

み

身の脂(アブラ)【句】脂汗を流して働き貯へたる金。浮世風呂「茶屋だの、女郎屋だの、と云たは、轉んだはと、内外(ソトヂ)の物入が強くなる。……御親父(オヤヂ)の身の脂を、とうとう無くしてしまった」

身の内の寶は、朽つること無し【句】學問、知識は、終身、その人の身に附きて、亡することなき寶なり。〔諺語〕實語教「庫内財有レ朽、身内寶無レ朽」

身の上【句】一身に關したる事柄。境遇。拾遺「身の上を嘆きて」

身の皮【句】■身體の皮。皮膚。■きもの(著物)の異稱。天の網島「女房・子供の身の皮剥ぎ、その金でお山ぐるひ」

身の毛立つ【句】次條に同じ。盛衰記「手を叩き、聲を擧げて、關白殿を呪咀しけるこそ、聞くも、身の毛竪ちけれ」

身の毛彌立(ヨダ)つ【句】ぞっとして、身の毛が立つ。さうけだつ。謠曲(鐵輪)「身の毛よだちて、恐しや」俗つれづれ「身の毛よだちて嫁ながら」

身の毛を立つ【句】「身の毛、立つ」に同じ。東鑑「同爲二大蛇一……發言聞レ之竪二身毛一」

身の毛を詰む【句】おそろしくて、竦(スク)む。身を冷(ヒ)す。狂言富士松「すは御手討にも遊ばすると存じて、身の毛を詰めてござる」

身の太刀【句】拔身(ヌキ)の太刀。文武五人男「身の太刀、丁丁と合はすれば」

身の種【句】人間の種。ひとだね。出世景清「身の種蒔きし產(ウブ)の神、熱田の宮居伏拜み」

身の詰(ツマ)【句】みづまり(身詰)に同じ。

身の露【句】■己が涙を露に譬へていふ語。夫木「斯くしつつありふるほどに身の露やたまりて沈む淵となるらん」■身の中の精分。持統天皇歌「嫁入して、產まずの德に、身の露を、一度も漏さぬ油足」

身の後(ノチ)【句】しんご(身後)に同じ。太平記「目の前の欲に、身の後の恥を忘れければ」

み

身の蜂を拂へ【句】はち(蜂)の條下を見よ。

身の菱【句】『菱を身のまはりに植ゑてある如きの義とも、挫(ヒシ)く義ともいひ、又、菱は圓からぬ物なるよりいふかともいふ』身體の、思ふままにならぬこと。毛吹草「とり得ずば身のひしになる泥まぶれ」曾根崎心中「賴もしだてが、身のひしで、だまされさんした者なれど」重井筒「お辰さまを離別させ、添うて、そなたの本望ならず、いとしい人の身のひし、一門中のにくしみ受け」

身の程【句】身の分際。みぶん。みのほどしらず(身程不知)參照。梵「家のほど、身のほどに合せて侍るなり」

身の廻(マハ)り【句】身體の外部に著くる物、卽ち被物(カブリ)・著物(キモノ)・穿物(ハキモノ)など。一代女「呉服商賣の若き者が、これを見て沙汰しけるは、あの身のまはりを買値打にして、一貫三百七十目が物と、その道覺えて申しき」

身の身にて候ひし程【句】わが身、一かどの身分にてありし時。平家「身の身にて候ひし程は、出世に紛れ、世務にほだされ、驕慢の心のみ深くして」

身は一代、名は末代【句】「人は一代、名は末代」に同じ。〔諺語〕

身は朽つるも、名は朽ちず【句】前條に同じ。〔諺語〕

身は習はしもの【句】人は、平生の習慣によりて、いかなる困難にも堪へ得るものなり。〔諺語〕古今「人の身もならはしものを逢はずしていざこころみん戀ひや死ぬると」拾遺「手枕の隙間の風も寒かりき身はならはしのものにぞありける」

身は身で通る【句】人は、賢愚貴賤の差別はあれども、それぞれ身分相當には、生活し得るものなり。〔諺語〕

身は身で通る笠の內【句】前條に同じ。〔諺語〕

身一つ【句】おのれ一人。身すがら。生寫朝顏話「杖柱とも賴みし朝香(アサカ)は

み

脆く朝露と消え殘りたる身一つを、さすがに捨てもえん先の」藝「悲しい時は身一つ」

身二つに爲(ナ)る【句】孕みたる子生る。分娩す。身身(ミ)となる。染模樣妹背門松「身二つになり、腹な子を成人させて下さるが」「棄て殺さるる讐。

身、糞土と爲る【句】惡み退けられ、身、木石に非ず【句】『漢書の司馬遷傳に「身非二木石一、獨與二法吏一爲レ伍、深幽二囹圄之中一」とあり』「人、木石に非ず」に同じ。〔諺語〕

身ほど可愛い者は無し【句】わが身ほど大切なる者は無し。〔諺語〕

身も蓋(フタ)も無し【句】露骨なり。含蓄無し。にべなし。「さう言ってしまっては、身も蓋も無し」

身も世も有られず【句】わが身の上も、世人への面目も、顧慮する餘裕もなきまでに、さし迫りて感ず。狂言(墨塗)「身も世もあられぬ樣に悲しうてなりませぬ」

身より出でたる錆【句】「身から出た錆」に同じ。〔諺語〕傾城佛の原「身より出でたる錆、誰か怨に思はん」

身を合はす【句】合體す。一致す。古今「君も、人も、身をあはせたりといふなるべし」

身を出す【句】『漢書に「郅都曰、已背レ親而出レ身、固當レ奉レ職也」とあり』國家のために、わが身を投げ出す。

身を入る【句】事を爲すに、まごころを込む。極めて熱心に爲す。

身を穿つ斧【句】『報恩經に「口舌、穿レ身斧也」とあるに本づく』言葉を愼むべき誡にいふ語。

身を打つ【句】全身を捧ぐ。うちこむ。御伽名代紙衣「心中のよい奥樣を、袖になされて、傾城に身を打ちたまふ」

身を賣る【句】豫め受け取りたる金に替へて、約束の年限の間、藝娼妓などの勤をなす。沙石集「身を賣りて、かはりを母に與へて」

み

身を固む【句】■身體上の防衛の備を調ふ。俗曲「明烏盛衰記「男は、かねて用意の一腰、口にくはへて、身を堅め」■身が固まるやうにす。堅氣になる。一代女「緣なき別に、後夫(ウハキ)を求めず、無常の別に、出家となり、斯く身を固めて」

身を傾く【句】『漢書の張湯傳に「湯傾レ身仕レ之」とあり』爲し得るだけの力を出して働く。

身を變ふ【句】生れかはる、又生れかはりたるやうになる。源氏「身をかへてひとり歸れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く」

身を輕くす【句】身輕に裝ふ。

身を切らる【句】辛(カラ)さ・寒さなどを痛切に感ずる形容。骨身にこたふ。

身を碎く【句】■甚しく骨を折る。盡だしく心身を勞す。薩摩歌「親の敵(カタキ)に身を碎く」■「身を捨つ」に同じ。空穗「身をくだきて、山林にまじる人」

身を食(ク)ふ【句】わが身を亡す。謠「粹(スイ)が身を食ふ」同「貪慾は身を食ふ」

身を汚す【句】■身をけがれしむ。身を不淨ならしむ。新古「身をけがす法(ノリ)の濡衣かわく間もなくなく歎くわが恨かな」■「肌(ハダ)を汚す」に同じ。

身を削る【句】身の痩するほどに苦しむ。骨身を削る。用明天皇職人鑑「我と、我が身を削らるる憂き勤」

身を焦す【句】こがれ悶へ苦しむ。天の網島「娘のお末が、兩面の紅絹(モミ)の小袖に、身を焦す」

身を捧ふ【句】身の裝(ヨソヒ)をなす。一代女「晝は心まかせの樂寢して、八下(ヤツサガ)りより身を捧へ」

身を粉にす【句】『遊仙窟に「粉レ身灰レ骨、不レ能二酬謝一」とあり』「身を碎く」に同じ。

身を粉に刷(ハケ)す【句】『「粉に刷く」を見よ』前條に同じ。丹波與作「身を粉にはたいてやって見た」

身を乞ふ【句】『後漢書の李通傳に「以病上書乞レ身」とあり』「骸骨(ガイコツ)を乞ふ」に同じ。

身を殺して、仁を成す【句】『論語の衛靈公篇に「子曰、志士仁人、無二求レ生以害レ仁、有二殺レ身以成レ仁」とあり』生命をなげうちて、仁の徳を全うす。

身を沈む【句】㊀「身を投ぐ」㊁に同じ。吉野拾遺「山陰の暗き闇路に迷ひなん菜摘の川に身を沈めなば」㊂失意の境遇に身を置く。身を沈淪せしむ。浄瑠璃「中納言になるべかりし身を沈めてし人りな」

身を絞る【句】身の精力を用ひ盡す。著聞「日ねもすに、夜もすがら、身を絞りて、曉懺法をよみて」

身を知る【句】己が身の分際を知る。みしらず(身知らず)参照。方丈「がうなは、小き貝を好む。これよく身を知るによりてなり」

身を知る雨【句】あめ(雨)の條下を見よ。

身を知る袖【句】身を知る雨の降りかかる袖。謡曲(富士太鼓)「心にかかる月の雨、身を知る袖の涙かと、明しかねたる夜もすがら」「雨」を見よ。

身を知る袖の村雨【句】むらさめ(村雨)を見よ。

身を過ぐ【句】活計を立てゆく。くらす。一代女「世の後に、鬼が咎めて舌を抜くべし。これも、身を過ぐる種なればゆるしたまへ」

身を捨つ【句】㊀しゃしん(捨身)を見よ』俗界の望を斷ち、我身を無き物として、佛に仕ふ。太平記「忽に身を捨て、世を避くる人となりて」㊁酒色などに溺れて、一身を過つ。一代女「婬酒・美食に身を捨てさせ、長き浮世を短く見せしを」

身を捨つる藪【句】次條を見よ。重井筒「共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりにけり」

身を捨つる藪は無し【句】「子を棄つる藪は有れど、身を棄つる藪は無し」を見よ。

身を捨ててこそ浮む瀬もあれ【句】『空也上人繪詞傳の巻上に「山川の末に流るる栃殻(トチガラ)の身を捨ててこそ浮む瀬もあれ」とあるに本づく』運を天に任せ、一身を犠牲に供する覺悟にて事を爲さざれば、成就することなし。尤の草子「ものゝふの矢たけ心の一すぢに身を捨ててこそ浮む瀬もあれ」

身を染む【句】熱心になりて、一身を打ち込む。一代男「これも、もとは、女に身をそめて、これより翻し、尊き道に入らせたまふ」

身を立つ【句】『孝經の開宗明義章に「立レ身行レ道、揚二名於後世一以顯二父母一、孝之終也」とあり』世に出づ。世に立つ。徒然「身を立て、大いなる道をも成じ」

身を盡す【句】全身の眞心を傾く。(和歌には、多く澪標(ミヲツク)に言ひかけて用ふ)後撰「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はんとぞ思ふ」千載「難波江の蘆のかりねの一夜ゆゑみをつくしてや戀ひわたるべき」

身を抓(ツ)みて、人の痛さを知れ【句】わが身の苦痛にひきくらべて、他人を思ひやれとの譬。〔諺語〕

身を抓(ツ)む【句】わが身をつめる。(前條の意に本づきて用ふ)捨遺「一程も無く消えぬる雪はかひもなし身をつみてこそ哀と思はめ」

身を投ぐ【句】㊀人水(ジンスヰ)す。投身す。身を沈む。平家「桂川に、女房二人、身を投げたり」㊁疾く走るに、身體をなげうつやうにして、こけつまろびつするをいふ。宇治「狐身を投げて逃ぐれども」㊂一身をなげうちて、熱心になる。源氏「鞠に身を投ぐる若公達」

身を爲(ナ)す【句】「身を沈む」㊁に同じ。一代女「この津に來りて、この道に身をなし」

身を挺(ヌキ)づ【句】『漢書の劉屈氂傳に「挺レ身逃」とあり』大勢の中より、己一人抜け出づ。進退ともにいふ。

身を倫(ヌス)む【句】㊀人に使はれ居る身にてありながら、私かに他の事を爲す。㊁「骨を惜しむ」に同じ。

身を燔(ヤ)む【句】身を打ち込む。生玉心中「嘉永次ゆゑに身をはめて、變るまいとの七枚起請」

身を引く【句】㊀身體を、後方へ移す。後(ウ)へ引きさがる。㊁從事し居たる事と關係を絶つ。退職す。

身を冷す【句】寒さを感ずるほど、おそろしく思ふ。心臟を寒くす。身の毛を立つ。おびゆ。ぞっとす。會我曾稽山「下には、安清御前、身を冷して待ちかくる」

身を開く【句】身をかはして、相手よ身を任(カ)す【句】相手の者の命令のままに行動す。若風俗「親方のためとばかり、うかうかと、客に身を任すもあり」

身を悶ゆ【句】みもだゆ(身悶ゆ)に同じ。狂言「針立雷」「爰に一本立てませう。はっし、……、何と、身を悶えなさるるぞ」

身を持ち崩す【句】身持を惡くす。墮落す。本朝櫻陰比事「あたら身を、無分別に持崩して」

身を持下(モチサ)ぐ【句】次第に賤しき身分となる。一代女「自らも、寄る年に從ひ、身を持下げて、茶の間女となり」

身を持成す【句】自ら求めて、云云の狀態なる身持となる。一代女「身を、ぞんざいに持ちなし」

身を持つ【句】㊀一身を處置す。一代女「本郷六丁目の裏棚へ宿下(ヤドオ)りをして、……身を自由に持ちて」㊁一身を、巧みに處置す。一かどの身分となる。立身す。甲陽軍鑑「城主どもの事は申すに及ばず、少しも、身を持ちたる衆、大かた、身がまへを致しゐ」

身を以て免る【句】何物をも携へず、その身のみ遁るるを得たり。命(イノチ)からがら逃ぐ。

身を揉む【句】いかにせんかと、苦悶す。氣を揉む。太平記「とやせまし、斯くやせましと、身を揉みて、二十日餘を過しける程に」

身を燃やす【句】次條に同じ。一代女「我と、我が身を燃せしが」

身を燒く【句】切なる思慕の思に、自ら苦しむ。情火燃ゆ。身を焦す。身を燃やす。古今「おきのゐて身を燒くよりも悲しきは都島べの別なりけり」

身を分く【句】一つの身體を分けて、二つにす。いったいぶんしん(一體分身)参照。古今「思へども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる」

身を忘れ、家を忘る【句】『漢書の賈誼傳に「化成俗定、則爲二人臣一者、主耳忘レ身、國耳忘レ家、公耳忘レ私」とあり』一身・一家を顧みず。

我が身を抓(ツ)む【句】「身を抓む」に同じ。山家「たのもしき道には入りて行きしかどわが身をつめばいかがとぞ思ふ」

我が身を抓(ツ)めって、人の痛さを知る【句】「身を抓(ツ)みて人の痛さを知る」に同じ。〔諺語〕浮世風呂「わが身をつめて見れば、他(ヒト)の痛さが知れませんはな」

み

實【名】㊀くわじつ(果實)に同じ。〔子〕㊁汁の中に入るる野菜又は肉。㊂なかみ(中身)に同じ。

實が入る【句】實熟す。みいり(實入)の宿ひずみけり」㊁参照。俳諧古選「埋角」「實の入って夕顏

實ならぬ木には、神が憑(ツ)く【句】女が、相當の時に、相當の男を得ざる時は、神これに依りつきて、一生男に添ふことを得ず。〔諺語〕萬葉「玉かづら實成らぬ樹にはちはやぶる神ぞ著くとふ成らぬ樹ごとに」

實を見て、樹を知れ【句】爲す所を見て、その人の心中を測り知れ。〔諺語〕

み巳【名】『蛇(ジャ)の略』㊀十二支の内、第六位にあるもの。㊁方角の一。東南の内、南方に寄れる所。㊂『太陽の位置の、

巳の方角に在る頃の時刻の義』時刻の一。今の約午前十時より正午十二時までの間。

み 箕【名】穀類を簸(ヒ)て、殻・屑(ヌカ)・塵埃などを取り除くに用ふる具。藤蔓又は楮(カウゾ)の皮を經とし、女竹の皮の部分などを緯として編み、塵取の如き形に大きく作り、三方に、木の枝又は竹の縁を附けたるもの。和名「箕、和名美」

み 【名】㊀みづ(水)の略。(熟語として用ふ)「水漬(ミヅ)く」『水(ミ)馴る』『水底(ミナ)』『水鴨(ミカモ)』㊁うみ(海)の略。「古語拾遺」「近江のみ勢多の渡(ワタ)にかづく鳥目にし見えねばいきどほろしも」

み 【名】「動」まみ(貘)に同じ。和名「貘、美」

み 鰾【名】「動」みごひ(白魚)に同じ。和名

み 見【名】見ること。ながめ。ありさま。萬葉「山見れば見のともしく川見れば見のさやけく」

み 身【代】同輩以下に對して用ふる第一人稱。われ。おのれ。紀「朕懐、ミガコロ」狂言「花子」「身は、今晩、花子様へ參るほどに、汝を頼みたい事がある」

み 三【數】一と二とを合はせたる數。みつ。みっつ。三(サン)。

み 御【接頭】物事の名に添ひて、尊敬を示す語。お。おほみ。おほん。おん。ご。「御髪(ミグシ)」「御酒(ミキ)」「御堂(ミダウ)」

み 【接頭】物の名に添ひて、語調を整へ、又その物を美(ホ)めていふに用ふる。古今「夕さればころも手寒しみよし野のよし野の山にみ雪降るらし」

み 【接尾】㊀説明語として用ふる形容詞の語幹に添ひて、これを動詞化し、その狀態にありといふ意をなす語。(その主語の下に、助辭の添はぬ時と、強めの助辭をの添ふ時とあり。一説に、このみの添ひたる形容詞を、形容詞の連用形の一種とす)萬葉「山ごしの風を時じみ寒(サム)る夜おちず家なる妹をかけて忍(シヌ)びつ」同「ぬば玉の夜を長みかも吾がせこが夢(イメ)に夢にし見えかへるらむ」㊁形容詞の語幹又は其の他の語に添ひて、名詞を作り、その狀態・氣味を含める意となる語。「味」「赤味(アカミ)」『暖味(アタタカミ)』『勝味(カチミ)』㊂形容詞の語幹又はその他の語に添ひて、名詞を作り、その狀態の場處なる意を示す語。「深みにはまる」『高みの見物(ケンブツ)』

み 【接尾】二つ連續して用ひられたる動詞の各に添ひて、斯うもし、ああもしてといふ意をなす語。萬葉「脇挟む兒の啼くごとにをのこじもの負ひみ抱きみ伊駒の山を見れば」伊勢「晴れみ曇りみ立居る雲止まず」後拾遺「みちのくの緒絶の橋やこれならん蹈みみ蹈まずみ心まどはす」

み 【接尾】めぐり・ほとりの意。ま。べ。び。「古語」「浦回(ウラミ)」『隈(クマ)み』

み 味【助數】飲食物などを調ふるに用ふる材料の數にいふ。「七味唐辛(シチミトウガラシ)」「百味の飲食(オンジキ)」

みーあかし 御明・御燈【名】神佛の前に供ふる燈火。おとうみやう。おほみあかし。御燈(ゴトウ)。枕「みあかし、常燈にはあらで、内に、又、人の獻りたる、恐しきまで燃えたるに」字治「佛供・御燈なども絶えず」

みーあかしぶみ 御明文・御燈文【名】ぐわんもん(願文)㊁に同じ。源氏「籠るべき由、大徳呼びていふ。御あかしぶみなど書きたる心ばへなど」

みーあかり 御明・御燈【名】みあかし(御明)に同じ。

みーあがり 身上【名】遊女が、身錢(ミゼニ)にて、玉代などを立て換へて、勤を休むこと。「遊廓の語」人心兩面觀「先方でも、實は、この晩、他の客で仕舞ってゐる晩にて、身あがりをしたといふにはあらず」

みーあき 見飽【名】見飽くこと。

みーあきらむ 見明らむ・見諦む【動下二他】物を見て、心をはらす。「古語」萬葉「このくれのしげき思を見明らめ情(コヽロ)やらむと布勢の海に小船(ヲブネ)つらなめ」

みーあく 見飽く【動四自】目馴れて、それ以上見ることを欲せず。度度見て、いやになる。

みーあぐ 見上ぐ【動下二他】㊀上方へ向きて見る。仰ぎ見る。(見下(ミオ)すに對して)源氏「見上げたまへるが、何心なく美しげなれば」㊁人物・力量など、すぐれて見ゆ。崇め尊む。(見下(ミオ)すに對して)狂言(八句連歌)「其方は(ヲッサ)見上げた事をいふ人ぢや」

みーあげ 見上【名】まびさし(目庇)に同じ。甲陽軍鑑「見あげの右脇、鎧(ヨロヒ)の右先に、そと手を附け添へ」

みあげの-いた 見上板【名】前條に同じ。

みあげの-つむじ 見上旋毛【名】やうせん(陽仙)に同じ。

みーあさ 眞麻【名】「植」まを(苧麻)に同じ。

みーあざむ 見淺む【動四他】見て、驚き呆る。字治「これを聞きて、見あざみけり」

みーあせ 三汗【名】貴馬(キバ)の時、馬の汗流れて、睫毛に露の如くに滴ること。(一汗(ヒトアセ)・二汗(フタアセ)に對して)

みーあたる 見當る【動四自】發見す。見つかる。出合ふ。

みーあつかふ 見扱ふ【動四他】よく注意して取りなす。源氏「いと恐しきまで物したまふめりしを、見扱ひはべりし程に」

みーあつむ 見集む【動下二他】多く見て、經驗を積む。源氏「くまなく見あつめたる人のいひし事は、げにとおぼしあはせられけり」

みーあて 見當【名】或事物に目を附けて、それと思ひ定むること。みこみ。めあて。ねらひ。こころあて。見當(ケンタウ)。目的。

みーあて 見當が附く【句】見當定まる。見込が附く。「(見當違)に同じ。

みあて-ちがひ 見當違【名】けんたうちがひ

みーあはし 御合【名】男女の交合の敬語。みとのまぐはひ。みあひ。「古語」紀「合交、ミアハシセント」

みーあはす 見合はす【動下二他】㊀互に見る。相見る。源氏「睨みたまひしに、見合はせたまふと見しけにや御目いたう煩ひたまひて」㊁かれとこれとを見比ぶ。てらしあはす。對照す。醒睡笑「更に合點ゆかねば、……。唯、座上を見合はするばかりなり」㊂うまく場合の合ふやうに見る。巧に見附く。葉花「人笑はれにいじうねたげなりつるに、後は知らず、程なう世を見あはせつるかなと、嬉しうて」一代女「機嫌のよき折節を見合はせ」

みーあはせ 見合【名】㊀互に見ること。㊁見比ぶること。對照。㊂實行を控へて、暫く樣子を見ること。

みーあはたす 見あはたす【動四他】不意に見て、驚かす。「古語」靚詞・火鎭祭「吾(ア)を見たまふなと申すを、吾を見あはたしたまひつと申したまひて」

みーあひ 見合【名】㊀見あふこと。㊁男女が、婚約を結ぶに先だちて、相會して、容子を見合ふこと。その結果、互に承諾したる時、結納(ユヰノウ)を取りかはす。

みーあひ 御合【名】男女の交接の敬語。御結婚。みあはし。「古語」紀「嫁、ミアヒシテ」

みーあふ 見合ふ【動四他】互に見る。落窪「いとつつましうて、うつぶしつつ見あひたり」

みーあふ 見會ふ【動四他】てあふ(出會ふ)に同じ。著聞「馬允(ジョウ)某、御使にて、かの山に參向しけるに、はからざるに、僧正に見あひ奉りけり」盛衰記「大介は、あはれ、同じくは、畠山に見合ひて斬らればや」

みーあへ 御饗【名】あへ(饗)の敬稱。風雅「をしほ井をけふ若水に汲みそめてみあへ手向くる春は來にけり」

みーあやまり 見誤【名】見あやまること。みそこなひ。みちがひ。

みーあやまる 見誤る【動四他】見方をあやまる。見そこなふ。見損(ソン)ず。

みーあらか 御舍・御殿【名】「御(ミ)在所(アリカ)の轉といふ」貴人の御家。御殿(ゴテン)。宮殿。「古語」紀「天(アマ)の御舍(ミアラカ)を造つて」萬葉「宮柱太敷きいましみあらかを高知りまして」

みーあらはす 見顯す【動四他】隱れゐたる物事に目を附けて知る。見つく。見いみあはせ

だす。發見す。源氏「やうやう見あらはしたまひて」續世繼「中頃の人、この事見あらはしたることなど書きて侍るとかや」

みありき 御歩行【名】**ありき**(歩)の敬稱。枕「一の人の御ありき」

みあるき 見歩【名】見あるくこと。巡察。巡視。「りて見る。

みあるく 見歩く【動四自】あるきまはる。

みあれ 御生・御形【名】『祭神の生(ア)れましし日の義なりといふ』■山城國の加茂神社にて、葵祭(アフヒ)の前日、即ち陰曆四月の中の日に行はれし祭。國司檢察して、祭事を行ひしより、加茂の國祭(アフヒ)ともいひ、欽明天皇の御代に始まるといふ。みあれび。貫之集「人も皆かづらかざしてちはやぶる神のみあれにあふひなりけり」■**かもじんじゃ**(加茂神社)の異稱。【古語】源氏「みあれに詣でたまふとて、例の御方方誘ひきこえたまへど」

みあれ-ぎ 御生木【名】山城國加茂神社の木。【古語】鳳雛「みあれ木に木綿(ユフ)して懸けし神山の裾野の葵いつか忘れん」

みあれ-び 御生日【名】**みあれ**(御生)■に同じ。【古語】夫木「みあれ日に引き連れてこそちはやぶる加茂の河波立ちわたりけれ」

みあれ-やま 御生山・御阿禮山【名】【地】**みかげじんじゃ**(御蔭神社)を見よ。名寄「みあれ山岩根を出づるみたらしに宿る月さへ神さびにけり」

みい【數】み(三)の延。「一(イ)・二(ク)・三(ミ)

みーいき 三息【名】次條を見よ。

三息の挨拶(サツ)【句】正しき禮式の挨拶として、頭を下ぐる時に、氣息を內に吸ひ、著くる時に吐き、擡ぐる時に吸ふこと。

みーいくさ 御軍【名】**いくさ**(軍)■の敬稱。皇軍。官軍。みくさ。紀「神兵、ミイクサ」

みいくさ-まつり 御軍祭【名】常陸國鹿島郡鹿島神社にて、明治維新前、每年七月十日に行ひたる祭。七日に、寧藏より、御劍、八龍神の楯などの神寶を取り出し、當日に至り、神官、樓門の前に立ち並べる處へ、氏子村村の者集まり、青竹の葉に、小提燈を幾つともなく結び附けたるを手每に持ち、鬨の聲を上げて押し寄せ來り、皆籌として、一時に燒き上げ、宮司、禰宜(ネギ)は、大小の神劍を抜きて捧げ、又、神官より里人に至るまで、太刀・劍を抜き、女は槍・長刀の鞘をはづして、篠の火影に翳す。三韓征伐を紀念せしむるためといひ、今も、大祭の第一日、即ち九月一日に、ほぼ同樣の式を行ふ。

みーいけ 御池【名】**いけ**(池)■の敬稱。社寺の池。一代男「生玉(イクタ)の御池の蓮葉」

みいけ 三池【名】■【地】筑後國六郡の一。郡役所を三池町に置く。■筑後國三池郡にある町。大牟田(オホムタ)市の北東一里。肥後街道の要衝に當り、又、三池炭鑛、その附近に在り。立花氏の舊藩地。■【地】明治の初年設置の縣の一。**みつま**(三瀦)■參照。

みいけ-かぢ 三池鍛冶【名】中世、今の筑後國三池町の地に在りて、世に聞えし鍛工の總稱。光世といふ者、最も著れたり。

みいけ-たんくわう 三池炭鑛【名】【地】筑後國大牟田(オホムタ)市外二町・三村と肥後國玉名郡平井村外六村に跨れる大炭鑛。

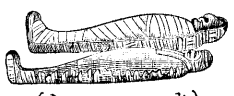
みーいだし 見出【名】**みだし**(見出)に同じ。

みーいだす 見出だす【動四他】■外(ト)の方を見る。眺めやる。落窪「二條殿におはしたれば、雪の降るを見出して、火桶に押しかかりて」源氏「梅の香をかしきを見いだして物したまふ」■探し出だす。見附く。發見す。見あらはす。みだす。■怒り驚きなどして、目を見張る。目をむく。曾我「大きに、目を見出し、とてもかくても、生甲斐なき冠者」「に同じ。

みーいちご 巳苺【名】【植】**へびいちご**(蛇苺)

みーいつ 御稜威【名】**いつ**(稜威)の敬語。

みーいづ 見出づ【動下二他】**みいだす**(見出だす)に同じ。枕「とみに物求むるに、見出でたる」


(らいみ)

みーいはひ 身祝【名】身上の祝。薩摩歌「第一、あの子が身祝、きっと仕立てて送りませう」「語」

みーいみ 【名】み(實)■を云ふ。【幼兒の

みいら 木乃伊(希羅 Myrrha)【名】『木乃伊の字は、阿拉比亞語 Mūmiā 又は Mummy の音譯にて、支那譯の佛經などより出でし文字ならんといふ。又、Myrrha は、亞拉比亞語 Murr より出でし語にて、Murr は、同名の木より製して、Mumia の防腐劑に用ひし藥の名なるを、直ちに Mumia そのものの名をせるなり。又、Mumia は、波斯語 Mumiā (蠟の義)より出でしなりともいふ』古、埃及(エジプト)國にて、人死すれば、屍體の腐爛を防ぐために藥を塗り、麻布にて、幾重にも捲き包みて、地中に埋め置く習ありて、その屍體の年代を經て乾固せるもの。屍體を保存し置かざれば、魂魄脫し去りて、次の世に再生するを得ずとの信仰に基く。にいら。本朝櫻陰比事「次第に木乃伊の如くなり、遂に、睡れるやうに命終りぬ」

木乃伊取るとて、木乃伊になる【句】「木乃伊取が木乃伊となる」に同じ。「諺語」根南志具佐「天下に一人の器量にて、四角四面の大王さん戀ひこがれたまふからは、誰を遣りても、忽ち惚れ、木乃伊取るとて、木乃伊となるは、億萬劫經るとて、たやすく御手に入るまじ」

みいら-とり 木乃伊取【名】木乃伊を掘りて取り出すこと、又それを爲す人。

木乃伊取が木乃伊になる【句】人を連れ戻らんとて出向きたる者が、却りて、先方に入り浸りて戻り來らざる譬。木蔦引(ヒキ)が木蔦に引かる。やんま釣がやんまに釣らる。【諺語】

みーいり 實入【名】■「實が入る」を見よ』穀物などの成熟の度合。俳諧新選「谷「大根のこんと鳴ったる實入かな」■收入。所得。利益。浮世床「和尙の實入も澤山になる理窟だ」

みーいる 見入る【動下二自】執念をかけて目を注ぐ。とりつく。源氏「われに見入れけんたよりに、斯くなりぬる事と思し出づるにも」

みーいる 見入る【動四他】■次條■に同じ。盛衰記「橫目もせず、うちうなづき、うなづき、海、とろとろ乘して見入りたまへり」■執念を掛けて見る。みこむ。みとる。魅(ミ)す。「魅入る」俗曲(主や雜綠の春雨「そなたばかりの子ぢやないに親しい事もなく、……いかなる天魔が見入りしぞ」

みーいる 見入る【動下二他】■奥の方まで見遣る。みこむ。源氏「几帳なども、暑ければにや、打掛けて、いとよく見入れらる」■注意して見る。熱心に見る。諦視す。みこむ。芭蕉「烏などの上は、見入れ、聞入れなどする人、世に無しかし」■深く思ひ込みて、目を附く。執念を掛く。源氏「海の中の龍王の、いといたう物めでするものにて、見入れたるなりけりと思すに」

みーいれ 身入【名】次條を見よ。「じ。

みーいれ 見入【名】■奥深く見すかすこと。源氏「見いれの程なく、物はかなきすまひ」■深く思ひ込みて、目を附くること。執念を掛くること。若風俗「面向不背の髮の結ひぶり、龍宮よりの見いれもあるべし」■みあげ(見上)に同じ。四すはま(砂濱)■に同じ。五みこみ(見込)に同じ。油地獄「この病は、一時(イツ)も早く堪殿を呼び入れて、夫婦になりたいと思ふ氣病(キヤ)に、外の見入あり」

みいろ-ぐみ 三色組【名】紐などを、三種の色絲にて組むこと、又その組方の物。謠曲「烏帽子折」「三色組の烏帽子懸緒取り出し」

みいろ-すみれ 三色菫【名】【植】さんしきすみれ(三色菫)に同じ。

みいろ-もくろく 三色目錄【名】太刀・馬の間に、金子・呉服・魚などを書きつらねたる進物目錄。

みーうく 見受く【動下二他】みかく(見掛く)に同じ。曇華院殿曲輪日記「一度、堀江の相撲(スマヒ)で見受け」

みーうけ 身請【名】身賣(ミウリ)したる者、即ち藝娼妓などを、身代金(ミダイキン)を拂ひて、その商賣より引退せしむること。うけだすこと。落籍。

みーうけ 見受【名】みあげ(見上)に同じ。

みうけーこう 身請講【名】遊女などの、後日の身請の費用に充つる目的にて、金錢をかけあふ講。

みうけじょうもん 身請證文【名】身請の證として、請け出す者より抱主に差し出す證文。

みーうごき 身動【名】身體を動かすこと。みじろぎ。

みーうしなふ 見失ふ【動四他】今まで見てゐたりし物、見えずなる。みはぐる。俳諧新選(比較)「我が形(ナリ)を見失うたる吹雪(ヰブ)かな」

みーうち 身内【名】一身體の全部。からだぢゅう。總身(ソウミ)。全身。俳諧古選「附子羅人「身内から涙をこぼす暑さかな」想南志具佐「吹雪(ヰブ)まじりに吹く風は、身内を切るが如くなれども」二同じ親分に屬せる子分たち。「俠客・博徒などの話」

みーうち 御内【名】一主君の邸宅の内。平家「一人當千の兵ども、御内に夜討入りたりとて、あそこの宿所、ここの屋形より馳せ來る程に」二主君に直屬せること、又その直屬せる家臣。保元「御曹司の御内に、我と思はん兵(ツハモノ)は出で合へやと」太平記「御内・外様(トザマ)の諸軍勢」

みうまのーいち 巳午市【名】はつうまいち(初午詣)に同じ。

みーうまや 御廐【名】うまや(廐)の敬稱。みまや。榮花「御廐の司を召して」續世繼「御廐の舍人(トネ)」

みうら 三浦【名】一【地】相摸國八郡の一。郡役所を横須賀市に置く。上古は御浦と書きたり。二姓氏の一。本姓は平。鎭守府將軍良文の裔。良文の孫爲通、相摸國三浦に住し、因って氏とす。爲通の子爲繼、源義家に從ひ、爲繼の孫義明、その孫義盛は、和田氏を稱し、季子義連の孫盛時、家を繼ぎ、その族分れて、岡崎・眞田等の二十氏となる。三姓氏の一。本姓は平。三浦義明の裔。正重の子正次、徳川家康・秀忠に仕へ、大名に列し、子孫、諸地に轉封の後、正次第六世の孫明次の時、明和元年、美作國勝山に移る。明治維新後、子爵を授けらる。

みーうら み浦【名】『みは接頭語』うら(浦)の美稱。「古語」萬葉「浦回(ウラミ)より漕ぎ來し船を風早み沖つみ浦に宿りするかも」

みうらあんじん 三浦安針【名】「人」『三浦は、采地の名に因り、安針は、水先案内たりしに因る』徳川家康の時、我國に歸化せし英人。本名はキリヤム・アダムス(W. Adams)。英國ケント(Kent)州ギリンガム(Gillingham)に生れ、西暦一五九八年(慶長三年)、和蘭印度會社艦隊の水先案内となりて渡航し、慶長五年、我國平戸に漂着し、家康に召されて、譯官及び砲術の師となり、江戸に邸宅を與へられ、又、相摸國三浦郡逸見(ヘミ)村に采地を賜はる。慶長十四年、蘭船、我國に來りし時、兩國の間に周旋して、毎年二艘づつの貿易船渡來の契約を結ぶ。元和六年、平戸に歿す。その江戸の邸宅は、日本橋區安針町(魚市場の一部)にして、歿後、安針町の人、碑を逸見村に建て、安針塚と呼ぶ。

みうらーあらじらう 三浦荒二郎【名】「人」

みうらーよしずみ (三浦義澄)に同じ。

みうらーちょら 三浦椁良【名】「人」志摩國鳥羽の人。名は各卿、勘右衞門と稱し、無爲庵と號す。畫を蕪村に學び、俳諧は師事する處なし。伊勢風に憚らず、明和四年新風を起し、正風を中興す。安永元年歿す。年五十二。椁良七部集の著あり。

みうらーのーおほすけ 三浦大介【名】「人」

みうらーよしあき (三浦義明)に同じ。

みうらーばいえん 三浦梅園【名】「人」儒者。名は晉、字は安貞。梅園の外、蟠山・洞仙・季山の號あり。豐後國杵築(キツキ)の人。綾部綱齋藤貞一に學び、天地造化の理を究めんと欲し、刻苦精勵、新に一家の語を成し、條理學と稱す。又、詩及び書を善くし、藩の政務に參し、優遇せらる。安政元年歿す。年六十七。梅園三語(玄語・聲語・敬語)・詩轍・富意敎證・梅園詩集等の著あり。

みうらはんたう 三浦半島【名】「地」武藏・相摸兩國の國界より南方に突出し、東方、房總半島と相對して、東京灣を抱し、西方は、伊豆半島との間に相摸灣を擁する半島。大部分は、相摸國三浦郡に屬し、横須賀・浦賀・三崎(ミサキ)・葉山等あり。

みうらもめん 三浦木綿【名】相摸國三浦より産出する木綿。慶長見聞集「三浦木綿と稱し、諸國に賞翫す」

みうらーやすむら 三浦泰村【名】「人」武將。義村の第二子。駿河二郎と稱す。承久の役に功あり、累進して、評定衆となり、執權北條時賴に親任せらる。後、時賴の外祖安達景盛と隙を生じ、鎌倉に戰ひ、敗れて、寶治元年自殺す。

みうらーよしあき 三浦義明【名】「人」武將。相摸國の豪族にして、三浦大介と稱す。源賴朝の、兵を擧げんとして、關東の將士を招くや、悦んで、輔翼を誓ふ。賴朝、石橋山に陣するや、子義澄、孫義盛を遣しかど、及ばずして、賴朝敗れ、畠山重忠の來襲を蒙り、三浦の衣笠(キヌガサ)城に、江戸太郎に斬らる。年八十九。

みうらーよしずみ 三浦義澄【名】「人」武將。義明の第二子。荒二郎と稱す。源賴朝の兵を擧げて、石橋山に陣するや、姪義盛と赴きて、これに會せんとせしが、未だ至らざるに、賴朝敗れしため、衣笠城に歸り、父の命によりて、更に安房に賴朝に會す。平氏の追討、藤原泰衡の征伐、皆、從軍して、功あり。正治二年卒す。年七十四。

みうらーよしむら 三浦義村【名】「人」武將。義澄の嫡子。平六と稱す。父に從ひ、源賴朝に仕へて戰功あり。建保元年、和田義盛、兵を擧ぐるや、北條義時に變を告ぐ。承久の役、亦、弟胤義の勸說を斥けて、官軍を破り、北條氏の親任を得。嘉祿元年、泰時の評定衆を置くや、これに列せられ、延應元年卒す。

みうらりゅう 三浦流【名】一流鏑馬(ヤブサメ)の流派の一。矢を空へ出すを特色とすといふ。流鏑馬には、この外に、小笠原流と武田流とあり。合はせて三流なり。二柔道の流派の一。陳元贇の門人三浦與次衞門義辰を祖とす。

みーうり 身賣【名】身代金(ミダイキン)を受け取りて、約束の年季の間、勤奉公をすること。(身受に對して)「人。

みーうり 箕賣【名】箕を賣ること、又その箕賣。笠にて簸(ヒ)る【句】用ふれば、便利なる物を、惜しみて用ひず、强ひて、不便を忍ぶ譬。「諺語」若鳳奮されば、賣扇(ウチハ)の祖母(ソボ)は、手に日を翳し、箕賣、笠でひるの類なるべし」

みうるゐ 實植【名】みばえ(實生)に同じ。紫の一本「澁谷(シブヤ)の……金王(コンワウ)櫻……の實を、紀伊大納言賴宣卿母公養珠院、御庭にふせさせたまふに、生ひそだち、……我が庭に、實植の櫻あり……とて」

みえ 見【名】衣食住等の體裁を繕ひ飾りて、誇り示すこと。殊更に、生活上の外觀を盛んにす。虚榮。浮世風「女郎も、好い男を廢(ス)てて、醜夫(コブ)をみえにするさうだから」「同じ。

みえ みえを張る【句】みえばる(見張る)に同じ。

みえ 見得【名】『みえ(見)の轉義』芝居にて、役者が、動作又は感情の頂點に達せるを示すために、舞臺の上に、活人畫の如き姿勢をなすこと。最も目立ちたる姿勢をなすを、大見得(オホミエ)といふ。その他、元祿見得、柱巻の見得、書面の見得などの名目あり。又、目得をなすを、極(キメ)るといふ。見得を切る【句】一俳優が、見得を爲す。二相手に對し、殊更に落附きて、勇氣ある態度を示す。

みえーあたる 見當る【動四自】みあたる(見當る)に同じ。狂言盜人連歌「見え當りたりとも、別の事も御座るまい」

みえーあふ 見逢ふ【動四自】あふ(逢ふ)二

に同じ。字通「見えあはば、また頭割らん」

みえ-い 御影【名】えい(影)の尊稱。尊影。榮花「御堂には、故院の御影を書き奉りたり」

みえいく 御影供【名】御影を掲げて供養すること、又その法會。佛者にては、主に、弘法大師のにいひ、又、古、歌人の間には、柿本人麿の御影につきて行はれたり。おめいこう。どえいく。こうぼふだいしをき(弘法大師忌)參照。太鼓「御影供や人の訪ひ寄る守敏(シンセン)塚」

みえいざう 御影像【名】えいざう(影像)の尊稱。榮花「かく人參り込みて、この聖(ヒジリ)は、御影像を書かせんとて急ぎけり」

みえいーだう 御影堂【名】一御影を安置する堂。靈屋。玉葉「大織冠御影堂、已燒了」二京都市五條橋の西、下京(シモギヤウ)區御影堂町にある御影堂派の本山。寺號は新善光寺。一遍上人の弟子王阿の開基。本尊は阿彌陀如來、王阿の自作といふ。又、一遍上人の影像を安置せるによりて、御影堂の名あり。なほ、別に安阿彌作の阿彌陀像及び定朝作の觀音・地藏の像をも安置し、又、一遍の時より、遺風として、春秋の彼岸に、踊躍念佛を修す。三前項の京都の御影堂より折りて出す扇子。同寺の僧は、尼を携へ、扇を折りて販ぐを古來の習とし、平敦盛の後室、尼となりて、この寺に入り、折りはじめしものと傳ふ。また、その折方を、御影堂折又は御影折と呼ぶ。一代女「暫時も人絶なくて、家榮え、御影堂も物さび、幽禪繪もふるされ」四ちやうこうだう(長講堂)三に同じ。東寺文書抄「東寺みえい堂」

みえいだうは 御影堂派【名】(佛)時宗の十二派の一。一遍上人の弟子王阿を祖とし、京都市下京(シモギヤウ)區御影堂町なる御影堂新善光寺を本山とするもの。王阿派。

みえいだうをり 御影堂折【名】みえいだう(御影堂)三を見よ。

みえいをり 御影折【名】前條に同じ。

みえ-がくれ 見隱【名】見えつ隱れつすること。或は見え、或は隱るること。古今「秋霧の露れて曇れば女郎花花の姿ぞ見えがくれする」

みえ-かはす 見交す【動四他】互に、相手に見らるるやうにす。榮花「中に物引きなどして、見えかはさでぞありける」

みえ-かへる 見返る【動四自】幾返(イクカヘリ)も見ゆ。繰り返して見ゆ。〔古語〕萬葉「ぬば玉の夜を長みかも吾がせこが夢(イメ)に夢にし見え還るらん」

みえ-きこゆ 見聞ゆ【動下二自】見え申す。榮式部日記「八百萬(ヤホヨロヅ)の神も、耳振り立てぬはあらじと見えきこゆ」

みえ-ぐるし 見苦し【形二】見らるることと苦し。見えにくし。〔古語〕源氏「すずろに見えぐるしう恥かしくて」

みえしぬ 三吉野【名】〔地〕みよしの(三吉野)の古稱。萬葉「みえしぬの水隈(ミクマ)が菅を編まなくに刈りのみ刈りて亂りなむとや」

みえ-しらがふ 見えしらがふ【動四他】『しらがふは接尾語。他動詞のみゆ(見ゆ)を見よ』わざと人に見らるるやうにす。〔古語〕源氏「ことさらに見えしらがふ人もありし」

みえ-すく 見透く【動四自】『みすかす(見透す)に對する自動詞』一奥深く透きとほりて見ゆ。續猿蓑俗水「見え透くや子持比目(ヒラメ)の薄氷」二うはべを飾れる言行なること、直ちに察し知らる。若風俗「戀の山、さながら見え透きて」

みえにくし 見難し【形一】みえぐるし(見苦し)に同じ。〔古語〕源氏「おとどをば、打解けて見えにくく、ことごとしき物に思ひ聞えたまへり」

みえ-はう 見坊【名】衣食住等の體裁を繕ひ飾りて誇り示す性質、又その人。虛榮家。

みえ-ばる 見張る【動四自】衣食住等の體裁を繕ひ飾りて、誇り示すことを努む。みえを張る。玄關を張る。見張るより頬張れ【句】見えばるよりも、實利を得るやうにせよ。〔諺語〕

みえひきーくま 【名】〔動〕ねずみ(鼠)の異稱

なりといふ。みくゐさもそ。〔古語〕能藏抄「さ夜ふけてあさくままぬにあひぬるかみえひきくまのうらぶれて鳴く　みえひきくまとは、鼠をいふなり」

みえ-まがふ 見紛ふ【動四自】或物が、他の物のやうに見ゆ。見まがはる。後撰「み吉野の山の櫻ばな白雲とのみ見えまがひつつつ」榮花「海の色も、空の綠に見えまがひてをかし」

みえ-わかる 見分る【動下二自】次條に同じ。〔古語〕源氏「劣り優るけぢめ、ふとしも更に見えわかれず」

みえ-わく 見分く【動四自】明かに、他の物と區別し得るやうに見ゆ。よく見ゆ。見分(ミワケ)が附く。みえわかる。榮花「さやかなる月とはいさや見えわかずただかき曇る心ちのみして」

みえ-わたる 見渡る【動四自】全部行きわたりて見ゆ。一目に見渡さる。榮花「日、やうやう霽れて、汀の鴛(オシ)の、霞の絕間より見えわたり」一代女「御上(オカ)臺所の次に居て、見えわたりたる諸道具を取捌の奉公なり」

みおき み沖【名】『みは接頭語』おき(沖)に同じ。山家「播磨潟灘のみおきに漕ぎ出でてあたり思はぬ月を眺めん」

みおく 見置く【動四他】一わたり見ておく。續猿蓑(涼菓)「星合を見置きて語れ朝がらす」二面倒を見て、後(ノチ)に殘しおく。世話をして、殘しおく。源氏「娘どもも、あるべきさまに見おきて、下りなんとす」續後拾遺「草枕旅寢の程もいかならん宿に見おきし常夏(トコナツ)の花」

みおくり 見送【名】一見送ること、又その人。土佐「見おくりに來る人」二〔商〕相場の有樣を見て居るのみにて、手を出さぬこと。〔取引所の語〕「切立」に同じ。

みおくる 見送る【動四他】一別れ去る人を、後方より眺めて、なつかしむ。目送す。萬葉「松の木(ナ)の並(ナ)みたる見れば家人(イヘヒト)の吾を見おくると立たりしもころ」二人の旅立つを送る。みたつ。送別す。三埋葬するを、墓所まで送りゆく。送葬す。四目上の人に對して、死ぬるまで、世話をなす。「親を見送る」

みおくる 見後る【動下二自】見て、氣おくれす。見て臆す。源氏「烏帽子折「見おくれたまふか、庄司殿」

みおこす 見遣す【動下二他】遠き場處に居る人、此方を見る。竹取「月の出でたらん夜は、見おこせたまへ」源氏「こたてを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり」

みおこなひ 御行【名】おこなひ(行)一の敬稱。枕「少し歩み出でさせたまへば、ふと居させたまひしこそ、なほ、いかばかりの御おこなひの程ならめと見奉りしこそ、いみじかりしか」

みおし 水押【名】和船の舳に出でて、波を切る木。造り方により、一本水押・二枚水押・吾妻(アヅマ)水押などの種類ありて、海船は一本水押、河船は二枚水押なるを、普通とす。みよし。によし。ねうし。をなごだつ。

みおち 見落【名】次條に同じ。國姓爺「何の見落・仕落がある」

みおとし 見落【名】見おとすこと、又、見おとしたる物。みおち。みのこし。

みおとす 見貶す【動四他】みさぐ(見下ぐ)に同じ。源氏「若き御心には、見おとしたまひてけり」鳩翁道話「人にも見落され、大恥を書かねばならぬ」

みおとす 見落す【動四他】目を通しながら、注意足らずして洩す。見もらす。

みおとり 見劣【名】見劣ること。(見まさりに對して)源氏「まことかと見もて行くに、見劣せぬやうはなくなんあるべき」

みおとる 見劣る【動四自】以前に比べて、又は他の事物に比べて劣りたりと見ゆ。(見まさるに對して)若風俗「念も無い繪などは見劣りて」

みおひ 實生【名】みばえ(實生)に同じ。

みおぼえ 見覺【名】見おぼえてあること。見知りて居ること。めおぼえ。

みおぼす 見果す【動下二他】見果つ。

見終ふ。源氏「手など、こよなくまさりけりと見おほせたまひて」

みおぼゆ 見覚ゆ【動下二他】前に見たる事ありて、今も忘れず。見知りてあり。(見忘るに對して)若鳳曾かの男に、顔をあげさせ、その方(ヲ)は見覚えたり、以前は侍ぞと尋ねたまへば」

みおも 身重【名】孕みてあること。みもち。姙娠。懐胎。(身輕に對して)

みおもひ 御思【名】りやうあん(諒闇)に同じ。「古語」

みおや-のかみ 御祖神【名】神漏伎(カムロギ)・神漏彌(カムロミ)二神を申す。

みおよぶ 見及ぶ【動四他】見るに至る。遂に見おほす。源氏「人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚(ウヲ)の姿」若鳳曾迷惑なる折ふし、藤田・竹中兩太夫殿、その座に御入(オハリ)を見及び」

みおろし 見下【名】見おろすこと、又、見おろしたる眺。

みおろす 見下す【動四他】一下の方を見る。見くだす。下瞰す。俯瞰す。俯視す。(見上ぐに對して)源氏「ここ・かしこ、僧坊どもあらはに見おろさる」二みさぐ(見下ぐ)に同じ。太平記「この勢(セ)にては輙くこそと、六波羅を直下(ヂカ)しける山法師の心の程」

みか 甕【名】専ら酒を醸すに用ひし大なるかめ。「古語」字鏡「甕、美加」

みーか 三日【名】一日の數三つ。みっか。二月の第三の日。みっか。三婚姻の日より數へて、三日目の日。古、この夜、餅を作りて、男女共にこれを食ふ習ありて、その夜を餅(モチ)の夜といひ、その餅を三日の餅、三日の夜の餅、又は三夜の餅といひ、古は、これを四つの土器に盛りて、伊弉諾(ナギ)・伊弉册(ナミ)の二神に獻りたりといふ。落窪「物の具・餅など召すは、御聟どりしたまひて、三日のまうけしたまふか」

みーか 三日の月【名】三日月に同じ。續俳家奇人談・牧童「蚊柱の際ほのぼのと三日の月」

みーか 三日の餅(モチ)【句】みか(三日)二を見終ふ。源氏「手など、こよなくまさりけりと見おほせたまひて」

みかい 三日の餅(モチ)【句】みか(三日)三を見よ。

みかい 三日の夜【句】産養(ウブヤシナヒ)の、三日目の夜行はるるもの。三夜(ミヨ)。葉花「次次の御産養(ウブヤシナヒ)、おろかならんや。三日の夜關白殿、五日の夜、女院・皇太后宮より、七日の夜はおほやけより、例の作法もて參れり」

みかい 三日の夜の餅(モチ)【句】「三日(カ)の餅」に同じ。後拾遺「かの北の方、三夜(ミヨ)のもちひ食へとて出しけるによめる、みかの夜のもちひは食はじわづらはし聞けばよどのに母子つむなり」

みーかい 未開【名】一花の、いまだ開かぬこと。二いまだ開化せざること。三いまだ開拓せざること。

みーかいけん 未開顯【名】【佛】みけんしんじつ(未顯眞實)に同じ。

みかいーこう 未開紅【名】【植】梅の一品種。花、八重にして、大きく、蕾の時より紅色を呈するもの。俳諧新選・異郷「見ても見ぬ心通ふや未開紅」

みーかいだう 實海棠【名】【植】薔薇(ウバラ)科に屬する落葉灌木。高さ一丈餘に達し、葉は長楕圓形にして、微なる鋸齒を有し、質やや厚く、葉柄ありて互生す。花は五瓣淡紅色にして、海棠のに似、果實は球狀なり。「守」の音便。

みかいもり 御垣守【名】みかきもり(御垣守)の音便。

みかいもり-のつかさ 御垣守府【名】みかきもりのつかさ(御垣守府)の音便。

みーかうし 御格子【名】一かうし(格子)の敬語。枕「つとめて、いととく御格子參りわたして」二「御格子をおろして、御寢なる義」天子の御寢なること。

みかう-のこ 【名】『御神の子の音便』みかんこ(御巫)に同じ。「古語」

みーかき 御垣【名】かき(垣)の尊稱。(禁中・神社などのにいふ)源「宮牆、ミカキ」續世繼「御垣の柳も、池のはちすも、昔を戀ふるつまとぞなりはべりける」「同じ。

みーかき 身缺【名】みかきにしん(身缺鯡)に

みがき 磨【名】磨くこと。研磨。磨を掛く【句】一磨きて、清くし、又は光澤の出づるやうにす。二一とほりまとまりたる上に、更に一きはの努力をなして、完全なるものとす。仕上ぐ。

みがき-あぐ 磨上ぐ【動下二他】磨きゆきて、完全に清くし、又は光澤を出す。俳諧新選・可兆「臘から磨き上げたり今日の月」

みがき-いる 磨入る【動四他】『いる(入る)は接尾語』磨きたる上にも更に磨く。入念に磨く。書の門松「木蘗子(シタヾレ)も、磨き入りては、色になる」

みかき-がはら 御垣原【名】禁中の御垣の邊。詞花「ふる里は春めきにけりみよしの野のみかきが原は霞こめたり」(天武天皇の吉野山におはせし事につきて詠める歌なり)徒然「みかきが原の露わけ出でん有明の空も、わが身ざまに忍ばるべくもなからん人は」

みがき-こ 磨粉【名】金屬性の器物を磨くに用ふる粉。砥の粉などの類。

みがき-ずな 磨砂【名】金屬性の器物を磨くに用ふる、一種の白堊(ハクアク)。粘氣なく、水に溶けず、酸(サン)に遭へば、沸騰す。成分は、産地によって一定せざれども、主として、炭酸石灰、時に珪酸を交ふ。名古屋・大阪・廣島・宮城地方に多く産し、研磨用のみならず、玄米の精白、下等なる齒磨粉の材料などにも供す。みがきこ。雪女五枚羽子板「眉の引鯊(ヒキザメ)、男眉、鐵漿(カヌ)落す磨砂、磨楊子の青柳に」

みがき-ずるめ 磨鰯【名】槍烏賊(イカ)を原料とし、その薄き表皮を剝ぎ取りて製したる鰯。

みがき-だうぐ 磨道具【名】けしやうだうぐ(化粧道具)に同じ。鳩翁道話「鼈甲の櫛笄ちやの、緋鹿子の髷くくりぢやの、生白粉(オシロイ)ぢやの、流白粉(シヤガイオ)ぢやのと、さまざまの磨道具」

みがき-たつ 磨立つ【動下二他】一さかんに磨く。みがきあぐ。二うつくしく裝ふ。盛裝す。葉花「女房……おのおの我がままに磨き立てて」

みがき-つけ 磨著【名】銀などの薄金を延べ著けて磨きたること。太平記「銀の磨著の瞞當に」

みがき-にしん 身缺鯡【名】鯡の鰓を除き、腹部を切開して、卵巢又は白子(シラコ)を出し、臟腑を去りて、二三日乾し、半乾きたる時、又、小刀にて、脊骨に沿ひ、且つ背部と腹部とに縱截し、尾部を僅かに接續せしめおきて、再び乾し、三週間程にて、全く乾くを待ち、その背部のみを、百尾づつ一把に束ねたるもの。品質良好なる鯡にて製するを普通とす。かきわり。

みがき-の-つかさ 闈司【名】かぎのつかさ(闈司)二の尊稱。

みかぎのつかさ-のかみ 尚闈【名】闈司「(ツカサ)」の次官。

みかぎのつかさのすけ 典闈【名】闈司「(ツカサ)」の長官。

みがき-ます 磨增す【動四他】ますます磨く。源氏「庭よりはじめ、見所多く、磨き增したまへる御かたがたの有樣、まねびたてんも、言の葉足るまじくなん」

みかきもり 御垣守【名】衞門府(エフ)の職員及びその下に屬せし衞士(エジ)。古今「外重(トヘ)守(モ)る身の御垣守、をさをさしくも思ほえず」續世繼「その年のしはすに、あさましき亂、都の内に出で來にしかば、……かの御垣守も、その報に、思はぬかばねになんなりにける」

みかきもり-のつかさ 御垣守司【名】『宮城の諸門を警固する役所なるよりいふ。この(外重)參照』ゑもんふ(衞門府)に同じ。

みがき-やうじ 磨楊枝【名】ほみがきやうじ(齒磨楊枝)に同じ。雪女五枚羽子板「鐵漿(カヌ)落す磨砂、磨楊枝の青柳に」

みーかぎり 見限【名】見限ること。みきり。甲陽軍鑑「源五郎みだりなるふりを致すに付、御見かぎりをかうぶり」

みーかぎる 見限る【動四他】見込無しとして、そのままに置く。その時を最後として見棄つ。見切る。見捨つ。見はなす。とりあはぬ。斷念す。平治「これほどに見限られ奉り」

みかく 味覺【名】〔醫〕味の知覺。物質先づ唾液によりて溶解せられ、舌の味細胞に觸れて、これを刺戟し、味神經の媒介によりて、その味を感知す。味感。

みーかく 見掛く【動下二他】㊀見始む。㊁偶然に見る。見受く。俳諧新選(二柳)「蟬鳴くや見かけて遠き峯の寺」

みがく 磨く・研く・琢く・瑩く【動四他】㊀擦りて、清くし、又は光澤を出す。とぐ。研磨す。琢磨す。㊁飾り裝ふ。源氏「いと玉の臺(うてな)に磨き綴ひ」㊂髮を繕ひ、顏を磨きなど、騷ぎたり。㊃入浴し、垢磨(かすり)などを用ひて、顏面に光澤の生ずるやうにす。㊄智能・體面などの向上するやうにす。源氏「對(つい)の上の御もてなしに磨かれて、人の思へる樣なども、かたほにはあらぬなりけり」

みかく-き 味覺器【名】〔醫〕五官の一。味覺を司る器官。味ふべき物質が、溶液となりて、舌の味孔と稱する小孔より入りて、味細胞を刺戟し、その興奮が、神經の一部によりて、腦の味覺中樞に傳へらるる時、味覺を生ず。味覺器官。味器。味官。「條に同じ。

みかく-きくわん 味覺器官【名】〔醫〕前條に同じ。

みかく-さいはう 味覺細胞【名】〔醫〕味覺を掌る細胞。別にこれを支持する細胞あり、相依りて、叢酒樽(むらさきだる)の如き形をなし、相集まりて、味覺器を成す。

みかく-し 身隱【名】ごろかべ(胴壁)を見よ。「ひし藥。

みーかくし【名】昔、下痢などを止むるに用ゐた振(ふり)をなす。見て知りながら隱す。源氏「いみじき方はありとも、我は見隱してもたらん」同「片生(かたなま)ならん事をば見隱し教へきこえつべからん人」

みーかくす 身隱す【動四自】己が身を、物の陰に隱す。蜻蛉「なべて世の憂くなる時は身がくさん巖の中のすみか求めて」

みかぐら 御神樂【名】かぐら(神樂)の敬稱。内侍所・清暑堂などに行はるる、禁中の神樂。枕「神、臨時の祭、御神樂の折など、いとをかし」

みかーぐり 三日厨【名】奥羽地方にて、國司著任の時、三日の間、管内の重だてる人たちに饗應すること。

みかぐり-の-みや 甕栗宮【名】いはれのみかぐりのみや(磐余甕栗宮)を見よ。

みーかくる 身隱る【動下二自】身、物の陰にありて、見えず。順集「人に隱れん身の、みがくれて、おもてあらはせる心地なんしける」

みーがくる 水隱る【動下二自】水の中に入りて、見えず。水中にありて見えず。みごもる。後撰遺「みがくれてすだく蛙の諸ごゑに騷ぎぞわたる井手の浮草」法門百首「さみだれに入江のあやめみがくれて、引く人なしに朽ちぬべきかな」

みがくれ 水隱【名】みがくること。みごもり。六帖「晉(ネ)に立てて夜はわぶてふ浮鴨の我がみがくれに飛びも來(ネ)ななん」

みーかけ 見掛・見懸【名】見掛くること、又、見掛けたるさま。みえ。みば。外見。外觀。胸算用「さてもさても、見懸によらぬ悲しき宿の」謠「人は見掛に依らぬ者」見懸の膨脹【句】〔理〕『英 Apparent expansion』液體又は氣體を器に容れて熱するとき、器も共に膨脹すれども、容器の膨脹は省略して考へず、單に液體又は氣體の外見上の體積の增加の稱。從ひて、眞の膨脹よりも、器の膨脹したるだけ小なり。

みーかげ 御影【名】㊀みたま(御靈)に同じ。和名鈔「美太萬・美加介」㊁みえい(御影)に同じ。袖中抄「みみらくのわが日の本の島ならばけふも御影にあはましものを」

みーかげ 御蔭【名】扶け養はるることの尊敬。おかげ。御恩。御庇蔭。古今「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭に增す蔭は無し」源氏「頼もしき御蔭に、幼き者を奉りおきて」

みーかげ 水陰【名】水におほはれたる場處。萬葉「谷川の水陰に茂る山菅のやまずも柚の濡るる頃かな」

みかげ 御影【名】㊀〔地〕『住吉神社の背後に位せる山の、神祠に對して、陰翳をなすを、三笠山の春日神社に於けると同樣の意にていへるものの、その附近一帶の名となるに至りしなり』攝津國武庫(むこ)郡の町。もとは、菟原(うはら)郡に屬し、灘(なだ)鄉屈指の大邑にして、住吉村の西南五町に位し、酒造家多かりき。續古今「世にあらば又歸りこん津の國の御影の松よ面がはりすな」㊁〔鑛〕次條の略。

みかげ-いし 御影石【名】〔鑛〕『攝津國武庫(むこ)郡の山より產し、山下の海濱なる御影町にて加工して出だすよりいふ』くわうせき(花崗石)に同じ。

みかげ-おり 花崗織【名】繻子の組織を基礎とし、その經(たて)絲と緯(よこ)絲の接結點の前後又は左右などに、一個若しくは數箇の接結點を附加する綾方。

みかけ-ぐさ みかけ草【名】〔植〕いね(稻)の異稱。

みかげ-じんじや 御蔭神社【名】山城國愛宕(をたぎ)郡修學院(しうがゐん)村大字高野(たかの)にある神社。比叡山の西麓に位し、所在の山を、御蔭山又は御生山(みあれやま)といふ。上賀茂の祭神別雷(わけいかづち)の降臨の地と傳ふ。

みかけだふし 見掛倒【名】見掛の立派なる割に、實質の甚だ劣りてあること。

みかげ-ぶね 御影船【名】攝津國御影の地にて、花崗石を運ぶに用ふる船。その製、傳道船(でんどうせん)に類す。

みかげ-まつり 御陰祭【名】昔、毎年、四月中の午の日に、京都下賀茂(しもがも)社の神官などが、儀仗を整へて、神輿に供奉し、愛宕(をたぎ)郡修學院(しうがゐん)村大字高野(たかの)なる御蔭神社に參向せし祭禮。

みかげ-やま 御蔭山【名】〔地〕みあれやま(御生山)に同じ。

みーかさ 水嵩【名】みづかさ(水嵩)に同じ。續古今「さみだれに水嵩まさりて浮きぬればさしてぞ渡る佐野の船橋」

みかさ 御笠【名】かさ(笠)の美稱かとも、簑笠(かさ)の略かともいふ。萬葉「さ男鹿の來立ち嘆かく、……、吾が角(つの)は御笠のはやし」東關紀行「夕つ方、雨、俄かに降りて、みかさも取りあへぬ程なり」

御笠の神事【句】伊勢大神宮の別宮七所の一なる風日祈宮(かざひのきのみや)の祭。船帛と御笠縫內人(うちんど)の造れる蓑笠とを奉りて、風雨の災無からんことを祈る。毎年四月七日に行はる。風日祈祭(かざひのまつり)。〔三笠の神事〕

みかさ 御笠【名】〔地〕筑前國の舊郡の一。明治二十九年廢せられて、筑紫(つくし)郡に入る。

みかさ-づけ 三笠附【名】〔文〕笠附の一種。宗匠より、冠の五文字を三つ出し、その一つ一つに、それぞれ七文字・五文字を附けしむるもの。寶永の頃より行はれ、後には、題一つに、句二十一を書き添へ、その中の何れかを組み合はせて、三句に仕立てしめ、三句共に、出題者の考と一致したる者を勝として、金を與へ、又、甚しきは、卷紙を懷紙と名づけ、その內に、和歌三神を書き、一より二十一までの中の數三つのみを記して封じたる上、正面に掛けおき、附くる者は、各、帳面に、又、一より二十一までの中の數三つを組み合はせて一句とし、一句の中の數が、三つながら當りたるを第一等、二句だけ當りたるを第二等として、賞金を與ふるが如きものとなり、ほとんど一種の賭博となるに至れり。

みかさ-の-もり 御笠森【名】〔地〕筑前國筑紫(つくし)郡大野村に屬する古蹟。織道九州線の雜餉隈(ざふしやうくま)驛の東北に當り、街道より二町ほど隔れたる所に在り。神功皇后、羽白熊鷲を平げ給はんとて、香椎(かしひ)宮より松峽(まつを)宮に移り給ふ道にて、御笠を風に吹き落されしに、その笠、この森にかかりし由の傳說あり。古は大木茂りゐたりとの事なれども、今は、その名を存するのみ。續千載「思はぬを思ふといはば大野なる三笠の森の神ぞ知るらん」

みかさ-やま 三笠山【名】㊀〔地〕『形、笠

に似、春日神社に對して、陰翳をなせるによりていふ。みは美稱の接頭語にて、數を示せるに非ずとも、又、山容三層をなせるに因るともいふ』大和國奈良市の東方に在る山。春日山の西に連續し、高さ九二八尺。蝙蝠窟・七本杉などあり。一說に、**かすがやま**(春日山)に同じと。「御笠山、御蓋山」祝詞(春日祭)「春日の三笠の山の下つ岩根に宮柱廣知り立て」古今「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に見でし月かも」㊁〔地〕常陸國鹿島(カシマ)郡鹿島神社の周圍にある山。㊂『三笠は、御蓋にて、君の御蓋となりて、守護し奉る義なりといふ』近衞の長官(大將)・次官(中將・少將)の異稱。〔古語〕右京大夫集「同大臣の、大將にて、よろこび申したまへりし、勢ゆゆしく見えしかば、いとどしく咲き添ふ花の梢かな三笠の山に枝を連ねて」㊃『三笠山の笠といふ語によりて、笠を頭に戴くに譬へていふ』人人に戴き尊ばるる人の譬。榮花「大后の宮、天の下に、三笠山と戴かれたまひ、日の本には、はは木と立榮えおはしましてより」㊄挽茶(ヒキチャ)を入れたる餡を、カステエラの皮にて包みたる菓子。

みかし 嚴【形ク】いかし(嚴し)に同じ。〔古語〕字鏡「酽、彌加支阿知波比。又、加良志」

みかしぎ 御炊【名】内膳司の下級の職員の一。

みかしぎどの 御炊殿【名】神に供ふる御饌を炊ぐ所。

みかしぎやひめ 御炊屋姫【名】にぎはやびのみこと(邇藝速日命)を見よ。

みかしほ 【枕】嚴潮(イカシホ)の義あるより、はや(速)にかくとも、三日潮の義にて、月の初、三日の潮速きより、はやまち(早待)にかけていふともいふ。記「みかしほ播磨はやまち岩くやすかしこくともあれ養はむ」

みかず 御數【名】かず(數)の敬稱。油糟「思ふままにはいはれざりけり(ごといふ句に)君の代の御數は濱の眞砂にて」

みかた 御方・身方・味方【名】㊀方の敬稱。おん方。保元「左大臣殿の召によって、新院の御方に參ずるなり」㊁わが方。又、その人人。かたうど。平家「味方の兵ども、與一が後を、遙かに見送って」【句】『味方と身最屓とは、頭語をなす』味方をし、身最屓をなすこと。

みかた 御形【名】しんたい(神體)に同じ。儀式帳「稱二大神宮荒魂宮御レ鏡坐」

みかた 三形【名】四肢と胴體と。〔相撲の語〕

みかた 三形の固(カタメ)【句】〔相撲の語〕力足を踏むこと。

みかた 見方【名】見るしかた。觀察する方法。みやう。

みかた 美方【名】〔地〕但馬國の五郡の一。郡役所を村岡町に置く。

みかた 三方【名】〔地〕若狹國三郡の一。郡役所を八(ヤ)村に置く。

みがたち 身黨【代】われら。みども。〔豐前國・豐後國の方言〕

みかたうち 味方討【名】味方の者を討つこと。同士討。北條九代記「やれ、味方討よといひしかども、敢て咎むる人無し」

みかたがはら 三方原【名】㊀〔地〕遠江國濱名郡と引佐(イナサ)郡とに亙れる曠野。濱松市の北に當り、南北二里、東西一里に及び、近世、開墾の功を加へたれども、なほ荒蕪の地廣し。今は、歩兵第六十七聯隊の兵營・練兵場となる。古稱、曳馬野(ヒクマノ)。㊁若狹國三方郡にある野。六帖「戀しくば三方の原に出でて見よまだ朝顏の花は咲くやと」

三方原の戰【句】武田信玄、將軍足利義昭の密使を得て、織田信長を討ち、大擧して、京都に入らんとし、先づ信長の與國たる徳川家康を傾けんがために、元龜三年十月、遠江國に進出して、三方原に陣し、徳川家康、濱松城を出でて、これと戰ひしこと。家康利あらず、信玄、連りに追擊して、濱松城を圍む。家康、敵の虚を衝きしため、信玄退軍し、翌年、又、三河國に入りて、野田城を抜きしが、疾に罹りしため、守兵を長篠に留めて、國に歸れり。

みかたこ 三方湖【名】〔地〕若狹國三方郡の西北にある湖。周回二里餘。その北に水月湖、水月湖の東北に久久子(ククシ)湖あり。三湖、堤塘狀の小丘によりて、相隔たり、その水は狹水路ありて相通じ、久久子湖の水は、寛文年間の開鑿以來、外海に注ぐ。

みかたのうみ 三方海【名】〔地〕前條に同じ。萬葉「若狹なる三方の海の濱清みい行きかへらひ見れど飽かぬかも」

みかたひいき 味方贔屓【名】味方に贔屓なること。味方に力を添ふること。

みがため 身固【名】㊀身を固むること。身の支度。宇治つと抱きて、身がためをし」㊁身の堅固なる樣に加持すること。東鑑「參二廣東寄戸一、勤二御身固一」

身固の六具【句】身固を爲すに要する六つの具、卽ち鉢卷(ハチマキ)・忍緒(シノビ)・上帶(ウハオビ)・繰締緒(クリシメ)・高紐(タカヒモ)・腰當緒(コシアテノヲ)、又、高紐を除きて、控緒(ヒカヘ)を加へたる說もあり。

みがたり 身語【名】己が身につきて物語ること。みのうへばなし。榮華「いつしか、まのあたりにて、つぶさなる身がたりも申したまはらん」

みがち 實勝【名】實の、他の部分に比べて多きこと。太鼓「朝顏も實がちになりぬ破垣」

みがち 身勝【名】**みがって**(身勝手)に同じ。狂言(水論聟)「身がちな、そちへばかり水を取る」

みかぢひめ 御梶姫【名】阿遲鉏高日子根(アヂスキタカヒコネ)神の御女。

みかづき 三日月【名】㊀陰曆にて、月の第三日に出づる月。さんや。新月。㊁『俗曲に「樣(ヤウ)はさんや(山谷・三夜)の三日月さまよ、宵にちらりと見たばかり」とあるに本づく』登樓して、招きたる遊女の、初にちよっと顏を見せたるのみにて、あとは出て來らざること。㊂**みかづきなり**(三日月形)の略。

三日月の板【句】**むないた**(胸板)㊂に同じ。「同じ。

三日月の餅【句】**みなこもち**(皆子餅)に

みかづき 箕被【名】龍(カ)の狂言の一。妻、夫の連歌に執心して、農作を怠るを嫌ひて、離緣を求むるに、離緣の證據に與ふべき物なしと云はれて、ただ朝夕手馴れし、箕のみをかづきて、家を出でゆく姿を、夫見送りて、發句をせしに、妻、これが脇を附けたるより、夫、大いに感嘆して、めでたく復緣する由を作れるもの。

みかづき 三日月【名】㊀〔地〕播磨國佐用(サヨ)郡の村。姫路市を距る八里半餘。森氏の舊陣屋の在りし地。㊁明治の初年設置の縣の一。**ひめぢ**(姫路)㊂參照。「じ。

みかづきがた 三日月形【名】三日月に似たる形。みかづきがた。一心二河白道「三日月なりの細月は」

みかづきなり 三日月形【名】三日月に似たる形。みかづきがた。明治の初年設置の縣の一。**ひめぢ**(姫路)㊂參照。「じ。

みかづきのなかやま 三日月中山【名】〔地〕美作國と伯耆國との界にありて、山陰・山陽兩道間の交通路に當りし山。今の四十曲(マガリ)峠なるべしといふ。地鏡「三日月の中山にて、昔、後鳥羽院のせられけん事、おぼし出づるさへ憂かりける」

みかづきのもり 三日月森【名】〔地〕前條の地にありし森。增鏡傳へ聞く昔語ぞ憂かりける昔ふりぬる三日月の森」

みかづきぼね 三日月骨【名】馬の頰骨。弓象(キヤウゾウ)の骨。

みかづきまち 三日月待【名】『待は、祭の訛といふ』正月三日の夜、月の出づるを拜すること。

みかづきまゆ 三日月眉【名】㊀三日月形の眉。曲眉(キヨクビ)。地藏眉。**ほんだふ**(本多風)・**やくびやうほんだ**(疫病本多)參照。㊁幼き人に施す、一種の作眉(マユズミ)。

みがって 身勝手【名】己が身に都合よきやうにのみ計ること。わがまま。みびいき。自分勝手。

「下を見よ。

みがてり 早がてり【句】**みる**(見る)の條

みかど 御門【名】㊀**かど**(門)の敬語。榮花「賀茂の行幸……、この一條殿の北の御門よりぞ渡らせたまふべかなれば」㊁皇居の門。宮門。禁門。記「まきさく檜(ヒ)の御門」大鏡「花山天皇……、御門

より東ざまにゐて出しまゐらせたまふに」 ㊁皇居。皇宮。 記「皇宮、ミカド」 ㊂天皇の御家筋。皇室。朝廷。 紀「王室、ミカド」 ㊃『直ちに、その御身を指すを憚りて、御居所につきて申すものにて、皇族をみや(宮)と申し、大臣をおとど(大殿の義)といふと同類の語』天皇の尊稱。「帝」古今「仁和のみかどの、みこにおはしましける時に」 ㊄帝王の治めたまふ國土。國家。國朝。 伊勢「わがみかど六十餘國の中に、關路といふ所に似たる所なかりけり」 源氏「もろこしにても、わがみかどにも」

みーかど 三角 【名】〔植〕そば(蕎麥) ㊀を云ふ。〔女の語〕

みかどーがしは みかど餅 【名】〔植〕いづせんりやう(伊豆千兩)に同じ。

みかどーがね 御門料・帝料 【名】『がね(料)は接尾語』將來即位せられて、天皇となりたまふべき御方。古語 榮花「いと平らかに、えも言はぬ男御子、生れさせたまへり。……七日の程の御有樣、御門がねと、いみじうかしづききこえさせたまふ」

みかどーごろも 朝服 【名】てうふく(朝服)に同じ。 記「朝服、ミカドゴロモ」

みかどーづかさ 闈司 【名】ゐし(闈司)に同じ。 紫式部日記「みかどづかさなどやうの者にやあらん」

みかどーまつり 御門祭 【名】古、六月と十二月とに、邪神の禁門に入り來るを防がんがために、櫛磐間門(クシハマド)神・豐磐間門(トヨハマド)神に祈りし祭事。延喜式に、その時に讀む祝詞を載せたり。

みかどーまゐり 朝參 【名】てうさん(朝參)に同じ。 記「朝參、ミカドマヰリ」

みかどーもり 御門守・闈人 【名】御門(ミカド)を守ること、又その人。 和名「闈人、三加止毛利」 源氏「みかどもり、寒げなるけはひ、うすすき出で來て、とみにも、えあけやらず」

みかどーわざ 帝業 【名】天皇の行はせたまふ政務。帝業(テイギヤウ)。〔古語〕 紀「行天皇事、ミカドワザシタマフ」

みかどーをがみ 朝拜 【名】てうはい(朝拜)に同じ。 紀「元日禮、ミカドヲガミ」

みーかぬ 見兼ぬ 【動下二他】 ㊀容易に見ることを得ず。見られず。 ㊁見るに堪へず。「見るに見兼ねたる仕打」「見兼ねて仲裁す」

みかぬしーのーかみ 甕主神 【名】あめのみかぬしのかみ(天甕主神)の略。

みかのはら 瓶原 【名】〔地〕山城郡相樂(サガラ)郡の村。木津川(古の和泉川)を隔てて、木津町の東北三十町ほどに在り。元明天皇以來離宮を置かれし地にして、聖武天皇の恭仁(クニ)の都も、この邊なりしならんといふ。古くは、三日原・三香原・甕原・御香原・御鹿原などとも書きたり。 萬葉「みかの原ふたぎの野邊を清みこそ大宮どころ定めけらしも」

みーかは 御溝 【名】みかはみづ(御溝水)に同じ。 徒然「御溝に近きはかは竹」 禁秘抄「御溝(ミカハ)」

御溝の池 【名】みかはみづ(御溝水)に同じ。 齋宮女御集「宮の御前の遣水を、みかはの池となんいふ」

みーかは 【名】にかは(膠)の轉訛。

みかは 三河 【名】〔地〕 ㊀東海道十五箇國の一。行政上、豐橋・岡崎の二市と碧海(ヘキカイ)・幡豆(ハヅ)・額田(ヌカタ)・西加茂・東加茂・北設樂(キタシタラ)・南設樂・寶飯(ホヒ)・八名(ヤナ)・渥美(アツミ)の十郡に分れ、愛知縣に屬す。舊くは、參河と書きたり。三州。 ㊁明治の初年設置の縣の一。元年に、三河裁判所を置きて、駿河・遠江・三河三國を總管せしめしを、同年改稱せしもの。二年、廢して、信濃國伊奈縣に屬せしめ、四年、額田(ヌカタ)縣の設置と同時に、その事務をこれに合併す。

みかはーあざみ 三河薊 【名】〔植〕きくあざみ(菊薊)に同じ。

みかはーあへ 寅皮韜 【名】胡瓜(キウリ)を、皮と共に刻み、鹽を振り揉み、花鰹を入れ、酢・酒にて韜へたる食品。

みかはーげんじ 三河源氏 【名】清和源氏の内、三河國に居りし一派。二流ありて、一は美濃源氏の一流及び尾張源氏と同じく、經基の子滿政より出で、滿政の裔右兵衞尉重長、三河國加茂郡に住して、加茂六郎と稱し、源爲朝の女を娶りて、子重秀を生み、重秀、後に同郡足助(アスケ)に居りて、姓を足助と稱し、その裔重範等、元弘年中、官軍に屬して戰死せり。他の一流は、源三位賴政の孫顯綱の、額田(ヌカタ)郡大河內に住みて、大河內氏を稱せしより出づ。

みかはーざけ 三河酒 【名】三河國より產する酒。 江戸職人歌合「酒屋。戀ふるとも今はたあはん三河酒胸痛きまで何思ふらん」

みかはざむらひ 三河侍 【名】三河國より出でし侍。 甲陽軍鑑「輝虎に劣らぬ弓取と、家康を譽めたまふ。……三河侍も多き中に」

みかはーさんぱく 三河三白 【名】『三白は、三河白木綿の略』三河木綿の一。經(タテ)に通常十六番の紡績絲、緯(ヨコ)に水車紡絲の丸綛(カセ)といふを用ひて、緻密に織り、絆纏・股引地及び暖簾(ノレン)地などに用ふ。三白(サンパク)。

みかはしま 三河島・三河嶋 【名】 ㊀〔地〕武藏國北豐島(キタトシマ)郡の町。荒川の南岸。 ㊁矢條の略。

みかはしまーな 三河島菜 【名】〔植〕『武藏國北豐島(キタトシマ)郡三河島町の產、東京地方の需要盛んにして、有名なるよりいふ』たうな(唐菜)に同じ。

みかはーしゆう 三河衆 【名】德川時代に、一萬石以下の采地を領して、特に三河國に住し、那須衆・美濃衆・信濃衆と同じく、參觀交替等の規式、すべて交替寄合の大名に准ぜられし家格のもの。松平太郎左衞門・中島與五郎の二氏にて、營中の柳間(ヤナギマ)に祇候したり。

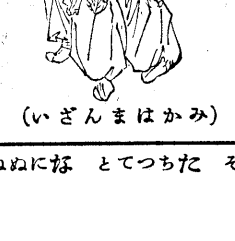
みーかはず 見交す 【動四他】互に見る。見あふ。相見る。 大鏡「翁、ふたり、見かはしてあざわらふ」

みかはーたけ 御溝竹 【名】古、清涼殿の御溝の近くに植ゑてありし川竹又は呉竹。弘長百首「百敷や玉の砌のみかは竹君がよ長く植ゑやめけん」

みーかぶち 樹蜂 【名】〔動〕膜翅類に屬する昆蟲。蜂類中の大形なるもの。雌雄によりて體色異なり、雌は、尾端に、長き產卵管と劍狀の突起とを具ふ。松樹に集を營みて、大害をなす。

みかはーはんぽう 三河半紡 【名】三河木綿の一。三河國の幡豆(ハヅ)・碧海(ヘキカイ)・額田(ヌカタ)の三郡を主たる產地とし、經(タテ)に十六番の紡績絲、緯(ヨコ)に水車紡絲の七分綛(セカ)といふを用ひて織り、衣服の裏地などに用ふ。半紡。

みかはーまんざい 三河萬歲 【名】萬歲 ㊁の、三河國より出づるもの。德川時代に、江戸に來る萬歲は、大抵これなり。京都には、大和國より出づる者多く、中國には、美濃國の者多くして、又、大和萬歲・美濃萬歲の稱あり。なほ、尾張國島津より出でて、島津萬歲と呼ばるるもありたり。



(いざんまはかみ)

みかはーみそ 三河味噌 【名】さんしうみそ(三州味噌)に同じ。

みかはーみづ 御溝水 【名】『御川(ミカハ)水の義』古の禁中の庭中を流るる溝の水。みかは。みかはの池。古今「東宮の雅院にて、櫻の花の、みかは水に散りて流れけるを見て詠める」

みかはみづーまつり 御溝水祭・御川水祭 【名】古、四月と十二月とに、御溝水を祭りしこと。

みかはーもの 三河者 【名】三河國の人。 丹波與作「これへ見えた飛脚の足元のねばいは、三河者にきまったぞ」

みかはーもめん 三河木綿 【名】三河國より產出する白木綿。卽ち三河半紡・三河三白などの總稱。

みかはやーうど 御廁人 【名】『御廁人(ニ)の音便』禁中の御廁の掃除に從事せし下衆の女。かはやびと。 空穗「我を、いかな

れば、宮のをさめ・みかはやうどのしりに立つらんと腹立つ」 枕「をさめ・みかはやうど・たびしがはらといふまで、いつかは、それを恥ぢかくれたりし」

みーがはり 身代【名】 ㊀他人の受くべき罪科・災害などを、その人に代りて引き受くること。 宴曲「わが子の身がはりに、我こそ死なめと、臥しまろびたまふ」 ㊁〔商〕解合(ワケ)又はその他によりて、處分したる寶玉(ホウギョク)又は買玉(バイギョク)の代りに、更に寶建(ホウケン)又は買建(バイケン)をなすこと。その寶建をなす場合を身代寶、買建をなす場合を身代買といふ。〔取引所の語〕 **みがはりーうり** 身代賣【名】〔商〕前條㊁を見よ。 **みがはりーがひ** 身代買【名】 **みがはり**(身代)㊁を見よ。

みがはりーくわんおん 身代觀音【名】『音の字、觀の讀に引かれて、ノンと發音す』人の身代りになりし觀音。 柔園小說「身代觀音、善光寺如來の、百姓幸助が身代に立たせたまひし事は、あまねく知る所なり。享和年中、淺草觀音の影像、身代の事を聞けり」

みかはーわん 三河灣【名】〔地〕南方なる三河國渥美(アツミ)半島と北方なる尾張國知多(チタ)半島とにて包擁せる一大灣。東と北とに分れて灣入し、前者を渥美灣、後者を知多灣といふ。

みーかふ 見變ふ【動下二他】 ㊀或物事を見て、その物事に心を移す。 室町千句「いかに見變へらるとも、慰に人を殺すとは、餘りむごい、情無い」 ㊁一變して、今までとは異なる物のやうに見る。 禁秘抄女房訓「憎いは、この家(ヤ)の女めに見かへられしが口惜しいと」

みかふちーやき 三河内燒【名】肥前國東彼杵(ヒガシソノギ)郡折尾瀨(オリオセ)村字三河内より産する磁器。色純白にして、獅子・象・蕉などの置物多く、水指その他、日用の器物は、その製作、頗る巧妙、殊に唐子(カラコ)を描きたるもの、賞玩せらる。 **なかのやき**(中野燒) ㊁・**ひらざやき**(平戸燒)參照。

みかふつーのかみ 甕布都神【名】ふつのみたま(布都御魂)に同じ。

みーかへし 見返【名】 ㊀見返すこと。 曾我「眼(マナコ)の見返・顏魂(マンラバク)」 ㊁書籍の表紙を開きたる裏の部分。通常、模樣、又は繪などをあらはしたる紙にて裝ふ。緣(フチ)ある時は、小緣(コフチ)と呼ぶ。

みーかへす 見返す【動四他】 ㊀後方を振り向きて見る。みかへる。かへりみる。宇治「狐、見返し、見返し走りゆく」 鬼貫「月花を見返すや年の峠より」 ㊁人に見られし時、直ちに、又その人を見る。 ㊂相手の性質、一變して、再び元の如く立派なる人として見る。 ㊃繰り返して見る。一代男「手前に香爐の廻る時、しめやかに聞きとめ、すこし頭をかたぶけ、二三度も香爐を見返し」

みーがへり 身返【名】 **ねがへり**(寢返)に同じ。

みかへりーさう 見返草【名】〔植〕脣形科に屬する落葉小灌木。葉は對生し、革質の楕圓形又は卵狀楕圓形をなし、鋸齒あり、上面は、全體又は脈に沿へる部分に短毛生じ、下面は白色にして、葉脈著しく隆起し、花は四箇乃至八箇づつ輪狀の聚繖花序に排列し、萼は薄き膜質にして剛く、倒卵狀菱形をなし、花冠の上脣は、淺く鈍き四齒を有し、下脣は、突出して、圓頭をなす。我國、中部の山地に生ず。いとかささう。きばなのてんにんさう。

みかへりーたんぽ 見返擔保【名】〔商〕中央銀行が、特定の有價證券又はその他の物件を擔保として、各種の銀行に貸附をなすこと。その擔保として引き取る有價證券又はその他の物件を、見返品(ミカヘリヒン)といひ、又、中央銀行が、見返品を受け取りて、貸附をなす制度を、見返制度といふ。(根抵當(コンテイ)に對して) 「見よ、

みかへりーひん 見返品【名】〔商〕前條を見よ。 **みかへりひんーせいど** 見返品制度【名】〔商〕 **みかへりたんぽ**(見返擔保)を見よ。

みかへりーめ 見返目【名】見返る時の目つき。 吉野忠信「二度も、三度も見返目で、しめ棄にして行けば」

みーかへる 見返る【動四他】 **みかへす**(見返す)㊁に同じ。 源氏「猫の、いたく鳴けば、見返りたまへるおももち、もてなしなど、いとおいらかにて」

みーかほ 御顏【名】 **かほ**(顏)の敬稱。 謠曲「文殊の御顏を拜むなり」

みーがほし 見が欲し【形二】見たし。見まほし。「古語」 紀「大和べに見がほしものは忍海(オシノミ)のこの高きなる角刺(ツヌ)の宮」 萬葉「春の日は山し見がほし秋の夜は川しさやけし」

みーがほる 見が欲る【動四他】見がほしく思ふ。見んと欲す。「古語」 萬葉「誰が國の梅にかありけむここだくも咲きにたるかも見がほるまでに」

みーかまぎ 御薪【名】 **かまぎ**(薪)の敬稱。 徒然「みかま木に煤けたれば、黑木といふとぞ」 ㊁王朝時代に、毎年正月十五日、在京の文武官及び五畿内の國司より、年中の用料に充つるために、宮内省に進獻せし薪、又それを進獻せし儀式。御湯殿料百八十荷、御匣殿(クシゲドノ)料百八十荷、御沐料百八十荷、御脚水料二百四十荷、御炊(カシキ)料七百八荷、儒料二百荷、御鷲殿(ワシドノ)五荷等と定まり、官人は、位階の上下に從ひて、進獻の數も一定し、一位の十擔より、初位以上の二擔、無位の一擔(一擔は、最長七尺のもの二十株を結束したるもの)に至り、王族もこれに准じ、辨官及び式部・兵部・宮內諸省の官人の檢校を經て、主殿(トノモ)寮に貯納せられ、又當日殘中の官人は、その期限經過の後、進獻したり。大寶の雜令中に規定せらるるに至れり。年中行事歌合「ももしきの百のつかさのみかま木に民のけぶりも賑ひにけり」 ㊂德川時代に、正月十五日に、武家にて、割りたる薪に、靈にて、十二本(閏月ある年には十三本)の線を引き、その屋敷の門の左右柱に寄せかけて建てしもの。

みーがまふ 身構ふ【動下二自】敵に對し、負けぬやうに、姿勢を整へて向ふ。 蝶曲輪日記「黑髮(スス)捕ったと打附くる銀の手裏劍、高頬(ホホ)にぴっしやり、はっと身がまへ、母は楯」

みーがまへ 身構【名】身がまふこと。

みかみ 三上【名】〔地〕 ㊀備後國の舊郡の一。明治三十一年、惠蘇(エソ)・奴可(ヌカ)の二郡と合して、比婆(ヒバ)郡となる。 ㊁近江國野洲(ヤス)郡にある村。遠藤氏の舊陣屋の在りし地。 ㊂次條の略。 芭蕉「比良(ヒラ)三上雪かけ渡せ鷺の橋」

みかみーやま 三上山・三神山【名】〔地〕近江國野洲(ヤス)郡にある山。高さ一四一一尺。鏡峯(カガミネ)山塊に屬して、東は鏡山に、南は甲賀郡岩根山に續き、山峯、雄山・雌山に二分し、琵琶湖を隔てて、遙かに比叡・比良の諸峯に對す。異稱、近江富士・蜈蚣(ムカデ)山。 玉葉「しがの浦やしぐれて渡る浮雲に三上の山ぞなかば隱るる」

みーかん 蜜柑【名】〔植〕芸香(ウンカウ)科に屬する常綠小喬木。高さ一丈餘に達し、葉は、卵形にして、互生し、透明なる油腺を有し、葉柄・葉身の間に關節あり、白色・五瓣の花を著け、黃赤色にして、扁球形なる漿果を結び、果實は特殊の香氣を發散し、甘味と酸味とを有す。原產地は、亞細亞の東南部にして、果實用及び觀賞用として、廣く栽培せられ、溫州(ウンシウ)蜜柑・八代(ヤツシロ)蜜柑・紀州蜜柑などの品種あり。かうじ。かん。こかうじ。みっかん。

蜜柑が黃色くなれば、醫者が靑くなる【句】蜜柑熟して、黃色になる頃は、病人少く、醫者は閑暇になり、隨って、收入も少きを以て、靑くなる。柚(ユ)が黃色くなれば、醫者が靑くなる。〔諺語〕

蜜柑の猿【句】 **みかんざる**(蜜柑猿)に同じ。 洛陽集「向嶺や蜜柑の猿の腸を斷つ」

蜜柑の御獅子【句】蜜柑の袋を噛み破りて、指頭にてひっくりかへしたるまま弄ぶこと。蜜柑猿の類。

みーかん 味感【名】 **みかく**(味覺)に同じ。

みーかん 未刊【名】書籍・雜誌などの、未だ刊行せられざること。

みーかん 未看【名】未だ看ぬこと。未見。

みかんいろ 蜜柑色【名】 ㊀蜜柑の實の皮の表の色の義。赤くして黃ばみたる色。

みかんーうり 蜜柑瓜【名】〔植〕ひめうり(姬

瓜)に同じ。

みーかんこ 御巫【名】『御(ミ)神子(カンコ)の音便』**みかんなぎ**(御巫)【名】に同じ。

みかんーざる 蜜柑猿【名】蜜柑の袋の中部を、絲にて括り、上下を丸めて、括猿の形に作りたるものといふ。

みかんーしゆ 蜜柑酒【名】蜜柑の實の汁にて醸造したる酒。「じたる醋。

みかんーず 蜜柑醋【名】蜜柑の搾汁を混じて、官内に鎮祭する二十三座の神等に奉仕せし童女。「みかんのこ」と訓むべしとの説もあり。祝詞(新年祭「座摩(ヰカガ)の御巫の稱辭(タヽヘゴト)竟(ヲ)へ奉(マツ)る皇神(スメガミ)たちの前に白(マヲ)さく」㊁明治四年、神祇省に置かれ、祭典に從事せし職。元は、刀自(トジ)、これに任ぜられ、正と權とに分れ、共に判任なりしが、同年、内掌典と改稱せられたり。

みかんなぎーでん 御巫田【名】不輸租田の一。御巫㊁に班ち給せしもの。

みーかんのこ 御巫【名】**みかんなぎ**(御巫)㊁を見よ。

みかんーばたけ 蜜柑畑・蜜柑畠【名】蜜柑を栽培してある畑。

みーかも 水鴨【名】〔動〕『水に浮ぶ鳥なるより、みづ(水)を添へていふ』**かも**(鴨)に同じ。〔古語〕萬葉「はしきやし妹がありせば水鴨なす二人雙(ナラ)みて」

みーがら 身柄【名】㊀身の分際又は姿。新次代藏「世上の妻を夜にして遊ぶ。金銀につかへぬ身がらは、さりとは、これも、人のかまひにならず」㊁からだ。身體。平家「叶はじとや思ひけん、身がらは、逃げて、京へ上る」俗つれづれ「身骸一つも暮らしかね」

みーかり 御狩・御獵【名】**かり**(狩)の敬稱。新古今「みかりする交野(カタノ)のみのに降る雪にうづもれて鳥立(タヽ)も見えず草がくれつつ」

みかりーば 御狩場・御狩塲【名】**かりば**(狩場)の敬稱。續古今「はし鷹の身よりの翼身に添へてなほ雪拂ふ宇陀の御狩場」

みーがる 身輕【名】㊀身がるきこと。㊁孕みゐたる子を產み落したること。(身重に對して)「て、快し。

みーがるし 身輕し【形一】動作の輕くしなるべしといふ』**みか**(甕)に同じ。〔古語〕

みかーわ 甕【名】『わは、鍋・甕類の總稱なるべしといふ』**みか**(甕)に同じ。〔古語〕

みき 幹【名】『身木の義』㊀植物中、通常木と呼ぶものの莖。木質をなし、多年に亙りて枯れざる莖。㊁物事の重要なる部分。幹部。㊂**みみき**(耳木)に同じ。

みき 御酒・神酒・三寸【名】神祇に供ふる酒。おほみき。おみき。記「このみきは吾がみきならずくしの神常世(トコヨ)にいます石(イハ)立たす少名御神(スクナミカミ)の神祝(カムホ)ぎ祝ぎもとほし寧祝(ヤスホ)ぎ祝ぎもとほしまつり來しみきぞ」

御酒の勅使【句】古、節會(セチヱ)の時、參會せる群臣に酒を勸めに行きし官人。江次第「二獻、仰二御酒勅使一」

みき 造酒【名】**みきのつかさ**(造酒司)の略。「造酒正(ミキノカミ)」

みき 御木【名】神社などの建築用材の敬稱。曠野龜洞「伊勢の浦や御木引き休む今朝の春」

みき 御棺【名】**き**(棺)の敬稱。御ひつぎ。御棺(ゴクワン)。〔古語〕紀「棺槨、ミキ」

みき 味器【名】〔醫〕**みかき**(味覺器)の略。

みき 三木【名】〔地〕讃岐國の舊郡の一。明治三十二年、山田郡と合して、木田郡となる。

みぎ 右【名】㊀左の正反對。みぎり。右方(ウハカタ)。㊁『蓬窓日錄に「禮、吉事尚レ左、凶事尚レ右、毛晃曰、人道尚レ右、以二左爲一レ卑、又或以爲、手足便レ右以二左爲一レ僻也、故凡曰二左道一左遷一左官一曲禮「祥車曠レ左、魏公子從二車騎一虛レ左以迎二侯生一、我朝官制、初尚レ右、後改尚レ左、吳元年丁未十月丙午命二百官一、禮儀俱尚レ左、禮記骾卿任レ左、注凡立者、尊レ左、座者尊レ右、今禮猶レ古也」とあり』二つ相並びたる内の優る方。盛衰記「事を嫌ひ、三浦は、千葉が右立たん事を欲って、非に出仕を留めければ、平家の嫡子小松の大納言重盛の、右大將にておはしましけるが、左に遷り、弟の宗盛卿の、中納言にておはしましけるが、右になり」㊂文書にて、前行に書ける語句を指していふ語。前條。前項。前件。「右の者、今般何何致候處』取敢へず右御知らせ申上候」㊃**うだいじん**(右大臣)の略。(左に對して)源氏「右のすけも辱加へたまへや」㊄**みぎて**(右手)㊁の略。

みぎ 右から左へ【句】次條の略。

みぎ 右から左へ渡す【句】或人より受け取りたる物を、直ちに、他の或人に渡して、暫くも、己が手に留めおかぬ形容。

みぎ 右といへば左【句】相手の主張に對して、その主張の正否に關せず、殊更に反對する形容。ああ言へば、斯う言ふ。

みぎ 右に出づ【句】『史記の田叔傳に「漢廷諸臣、無二能出一其右一者上とあり』優る。紀「正直仁勇、通二於兵事一、今無レ出二於龐鹿火(ホウロクワ)右一」

みぎ 右の獄【句】古、刑部(ギヤウブ)省囚獄司に屬し、京都右京(ウキヤウ)の中御門(ナカミカド)の北、堀河の西にありし牢獄。西獄。「左の獄」に對して)盛衰記「文覺は、右の獄に入れられたりけれども」

みぎ 右の脇の弟子【句】〔佛〕三尊の中、右方の脇士(ワキジ)。右脇士(ワキジ)。(「左の脇の弟士」に對して)

みぎ 右は京道(キヤウヂ)、左は伊勢道【句】最初の僅かの差異も、末には、大なる相違を生ずるに至る譬。〔諺語〕

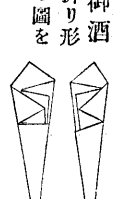
みぎ 【名】**みぎに**同じかるべしといふ。〔古語〕萬葉「さ牡鹿の來立ち嘆かく、……、わが肉(シシ)はみ膾(アヘ)はやし、……、わがみぎはみしほのはやし」「ひ。

みぎーあか 【名】〔植〕**びやくしん**(柏槇)に同

みぎーあかり 右上【名】㊀右方が左よりも高くなること、又その狀態なる物。(左上に對して)㊁次條の略。(左上に對して)

みぎーぐさ 御酒草【名】〔植〕次條に同じ。

みぎーくち 御酒口【名】折り形の一。下の圖を見よ。



(ちくきみ)

みぎこーぐさ 御酒古草【名】〔植〕『古、宮中にて、三月三日の節句に、その花を、御酒に漬して用ひしよりいふ』もも(桃)㊁に同じ。藏玉集「御酒古草。桃三月三

みぎまゆえぼし(右眉烏帽子)に同じ。(左上烏帽子に對して)

みぎーいと 右絲【名】右撚の絲。(左絲に對して)空穗「左絲・右絲に撚りて」

みぎえぼし 右烏帽子【名】**みぎりえぼし**(右折烏帽子)に同じ。

みぎーかたむすび 右片結【名】**かたむすび**(片結)を見よ。

みぎーかって 右勝手【名】㊀**ぎゃくがって**(逆勝手)に同じ。(左勝手に對して)㊁**ひかって**(非勝手)に同じ。(左勝手に對して)

みぎーがは 右側【名】右の方のかは。うそく。(左側に對して)

みーききーすぐす 見聞過す【動四他】見聞きたる事を、そのままに打ち捨ておく。源氏「大方の世につけてだに、心苦しき事は見聞きすぐさぬ業に侍るを」

みーきく 見聞く【動四他】見又は聞く。見もし、聞きもす。大鏡「昔の人に對面して、いかで、世の中の見聞く事ども聞えあはせん」著聞「昔より、未だ、斯かる事見聞かず」「に同じ。

みききーいる 見聞入る【動下二他】見入れ、又、聞き入る。源氏「見聞き入れべくもあらざりしを、名殘なく南の御簾(ミス)の前にする奉る」

みききーげん 酒機嫌【名】**ささきげん**(酒機嫌)に同じ。諸國はなし「御酒機嫌の小唄淨瑠璃」

みーききーすぐす 見聞【名】見又は聞くこと。見ることと、聞くことと。けんもん。ぶんけん。源氏「人の見ききも、若若しきものを」

みききーいる 見聞入る【動下二他】見入れ、又、聞き入る。源氏「見聞き入れべくもあらざりしを、名殘なく南の御簾(ミス)の前にする奉る」

みききーげん 酒機嫌【名】**ささきげん**(酒機嫌)に同じ。諸國はなし「御酒機嫌の小唄淨瑠璃」

日、内裏にて、御美酒に入るる桃なり）飲む人や千代を送らんみきこぐさかなふ齢の心なりせば」

みきこゆ 見聞ゆ【動下二他】見たてまつる。見舞ひ申す。佳言「ともすれば、見きこえわたりて」

みきしやう 三木城【名】播磨國美嚢(ミ)郡三木町に在りし城。戰國時代、赤松氏の裔徽に來じ、中國の名族別所氏、これに據りて、盛を揮ひ、豐臣秀吉の中國征伐の時、城主別所長治、よく禦ぎ、三年の長圍を受け、陷落す。後、杉原氏、一時この城に居りしが、尋いで廢城となる。一名、參山(サンザン)城。

みぎす 右す【動佐變自】右に向ふ。右方に進む。

みぎせいがん 右星眼・右青眼・右精眼【名】ひらせいがん(平星眼)を見よ。

みぎせいさもん 右青瑣門【名】せいさもん(青瑣門)㊁を見よ。

みぎちやう 御几帳・御木丁【名】きちやう(几帳)の敬稱。枕「宮の御前の御几帳押しやりて」源氏「ことさらに御几帳きつくろひ、隔てたまふ」「音便。

みぎつかは 右側【名】㊀みぎがは(右側)の音便。

みぎて 右手【名】㊀右の方の手。めて。うはう。

㊁右の方。

右手の規則【句】〔理〕ふれみんぐのきそく(フレミングの規則)を見よ。

みぎどころ 右巴【名】紋所の一。巴の右の方に卷きたるもの。太平記「左巴・右巴……書きたる旗ども」

みぎどもえむすび 右巴結【名】紐の結び方の一。右巴の如き形に結ぶもの。

みぎねよね 三杵米【名】臼にて、三度搗きたる米。伊勢神宮にては、これを用ひて、御饌(ミケ)に炊ぐといふ。「の略。

みぎのうまつかさ 右馬寮【名】次條

みぎのうまのつかさ 右馬寮【名】うまれう(右馬寮)に同じ。和名「右馬寮、美岐乃牟萬乃豆加佐」

みぎのおとど 右大臣【名】うだいじん(右大臣)に同じ。空穂「宰相・右のおとどさぶらひたまへば」源氏「右のおとどの御勢は、物にもあらずおされたまへり」

みぎのおほいおほともひ 右大辨【名】うだいべん(右大辨)に同じ。

みぎのおほいまうちぎみ 右大臣【名】うだいじん(右大臣)に同じ。古今「右のおほいまうちぎみ、すまずなりにければ、かの昔おこせたりける文どもを取り集めて返すとて」「條に同じ。

みぎのおほいまちぎみ 右大臣【名】前

みぎのおほおほいまうちぎみ 右大臣【名】前

みぎのおほおほねり 右大舍人【名】㊀右大舍人寮の大舍人。(左大舍人に對して)

㊁みぎのおほおほねりれう(右大舍人寮)の略。(その職員の上につきていふ) 續紀「右大舍人寮頭」

みぎのおほおほねりのつかさ 右大舍人寮【名】次條に同じ。

みぎのおほおほねりれう 右大舍人寮【名】おほおほねりれう(大舍人寮)を見よ。

みぎのおほおとど 右大殿【名】うだいじん(右大臣)に同じ。空穂「右の大とのにも、御はんせさせたてまつりたまふ」

みぎのすけ 右佐【名】檢非違使(ケビヒシ)廳の佐、二人の内、右衞門權佐より兼補せられたるもの。(左佐(ヒダリノスケ)に對して) 著聞「開結の二經は、左佐經兼、右佐賴資、けちえんしはべりけり」

みぎのすないおほともひ 右少辨【名】うせうべん(右少辨)に同じ。

みぎのたいしやう 右大將【名】うだいしやう(右大將)に同じ。空穂「九日の夜は、右の大將の御うぶやしなひ」

みぎのちかきまもりのつかさ 右近衞府【名】うこんゑふ(右近衞府)に同じ。空穂「右のちかきまもりのつかさのかみ藤原の仲忠」

みぎのつかさ 造酒司【名】古の宮内省の被官の一。正(カミ)・佑(スケ)・令史(サカン)各一人及び酒部(サカベ)六十人、使部(ツカヒベ)十二人、直丁(アタヒノヨボロ)若干の職員ありて、皇室の供御(クゴ)・饗宴の用に供する酒・醴及び酢などを釀造し、饗宴に觴を行ふことを掌りし所。酒戶百八十五戶、これに附屬して、調徭を免ぜられ、又、酒殿(サカドノ)の設ありて、酒壺を置く所とせり。釀酒の事は、上古、酒部公(サカベノキミ)の世襲なりしが、大寶令制定の時、この司設けられ、酒部公の氏人、その屬官に充てられしが、天長八年、酒部の氏人のみにては、數員不足のため、他氏二十名を採用したり。さけのつかさ。

みぎのつつかさ 酒司【名】さけのつかさ(酒司)に同じ。

みぎのつつかさ 右司【名】右近衞府、又その官人。玉葉「忘れずよ右のつかさの袖觸れし花橘や今かをるらん」

みぎのつつはものとねりのつかさ 右兵衞府【名】うひやうゑふ(右兵衞府)に同じ。

みぎのつつはもののくら 右兵庫【名】うひやうご(右兵庫)に同じ。

みぎのつなかのおほともひ 右中辨【名】うちうべん(右中辨)に同じ。

みぎのつふで 右筆【名】ふぎやうしゆう(奉行衆)に同じ。鎌倉年中行事「椀飯(オウバン)奉行、直垂にて出仕、これは、右の筆勤之」

みぎのつまちぎみ 右大臣【名】みぎのおほいまうちぎみ(右大臣)に同じ。

みぎのつみかいもりのつかさ 右衞士府【名】うゑじふ(右衞士府)に同じ。

みぎのつみさとづかさ 右京職【名】うきやうしき(右京職)に同じ。和名「右京職、美岐乃美佐止豆加佐」「條に同じ。

みぎのつみさとのつかさ 右京職【名】前

みぎのつゆげひのつかさ 右靱負府【名】うきもんふ(右衞門府)を見よ。

みぎは 汀【名】『水(ミ)際の義』地の、水に接する所。みづぎは。みなぎは。土佐「行く人もとまるも袖の涙川汀のみこそ濡れまさりけり」源氏「あはれに悲しき事どもを書き集めたまへり。ひきあくるより、いとど汀まさりぬべくかきくらす心地したまふ」

汀勝(マサ)る【句】汀の水增す。(和歌に、多くは、涙の意を含めて用ふ) 貫之集「君を惜しむ涙落ちそふこの川のみぎはまさりて流るべらなり」

みぎは 身際【名】身のあたり。身體のきは。甲陽軍鑑「身ぎはへ、互に寄る程に

て、臨指心無き故なり」

みぎはがくれ 汀隱【名】汀に隱れてあること。新葉「蘆根はふ汀がくれの鳰鳥の下(シタ)のかよひも絕えはてよとや」

みぎはまさり 汀勝・汀優【名】特に目立つほど勝りてあること。きはだちて勝ること。曾我「五郎時致は、みぎはまさりの大力と、他所(ヨソ)の人まで知りにけり」

みぎはむ 見極む【動下二他】物事の成行意義・眞僞などを、確實に認む。見て、歸著する所をたしかむ。見さだむ。見すう。見すます。名殘の友「わが目にて見極めたる所、一厘も違はじ」

みぎはめ 見極【名】見きはむること。俗つれづれ「物に馴れたる人の見極め」

みぎばらみ 右孕【名】胎兒の、胎内の右側に偏してあること。(左孕に對して)

みぎひだり 右左【名】㊀右と左と。さいう。俳家奇人談(美津女)「右左知れぬ蒙の手先かな」㊁右にも左にも存在すること。俳諧新選(宋屋)「水音や野咲の梅の右左」㊂「右から左」に同じ。㊃右と左とを取り違ふること。續俳家奇人談(超波)「紙鳶を男が立てて右左」

みぎひとつどもゑ 右一巴【名】ひとつどもえ(一巴)を見よ。

みぎふ 末給【名】給はるべき年給を、未だ給はらぬこと。縣召(アガタメシ)の除目停止の時、申給者の都合によりて、申文を出ださざる時、又は難書などのために生ず。

みぎふたつどもゑ 右二巴【名】ふたつどもえ(二巴)を見よ。

みぎまき 右卷【名】右方へ向けて卷くこと、又その卷方の者。(左卷に對して)

みぎまはり 右廻【名】右方に向ひてまはること。(左廻に對して)

みぎまんじ 右卍【名】紋所の一。卐の各屈折を、右方へ向けて描けるもの。

みぎまゆ 右眉【名】次條の略。(左眉に對して)

みぎまゆえぼうし 右眉烏帽子【名】烏帽子の、右方にのみ眉のあること、又その造り方の烏帽子。右あがり烏帽子。みぎ

あおえういかおこけくきかそせすしさてとつちたのねぬになほへふひはもめんむみまよゆやられるりわゐゑをゐゑをゐゑを

あがり。みぎまゆ。(左眉烏帽子に對して)

みぎ-みつちやうじども 名 右三丁字巴(三巴)を見よ。

みぎ-みつどもゑ 名 右三巴(三巴)を見よ。

みぎん 砌【名】**みぎり**(砌)の音便。謡曲 清成寺「哀愍肖謹のみぎんなれば」 同(石橋)「獅子圖…旋のみぎんなれば」

みき-もだいふ 三木茂太夫【名】〔人〕砲術家。播磨國三木の人。棒火矢を巧にす。三木流砲術の祖。

みーぎやう 御經【名】**きやう**(經)の敬語。續世繼「神落ちて、御經なども、紙の所ばかり燒けて、文字は殘り」

みぎやう 味境【名】〔佛〕五境又は六境の一。舌根の所緣たる境界。

みぎーやう 右樣【名】『さやう(然樣)に左樣の字を充つるより生じたる語』右のとほりなること。前述の如くなること。

みーぎり 見切【名】見切ること。甲陽軍鑑「この合戰、信玄公の負(マ)なるを、山本勘介と加藤駿河と、見切をよくして」

みぎる 見切る【動四他】一 切(リ)まで見て賣ること。なげうり。

みぎりの-みさごのつかさ 右京職【名】ろきやうしき(右京職)に同じ。朝野群載「左右京職、ヒダリミギリノミサトノツカサ」

みぎり-ひん 見切品【名】次條に同じ。

みぎり-もの 見切物【名】見切りたる商品。見切賣の品物。みきりひん。

みーぎる 見切る【動四他】一 切(リ)まで見る。見果つ。二 歸著する所を、たしかに見る。見て取る。見きはむ。甲陽軍鑑「仕負けて、城へつぼむ。それがし見切り、明日……攻めんと定むる」三 見込無しと見て取る。見かぎる。四 商品を、甚しく價を減じて賣る。

みぎーをり 右折【名】一 右の方へ折ること。(左折に對して)二 風折烏帽子(カザエボシ)の先を、右の方へ折ること。(左折に對して)

みぎをり-えぼし 右折烏帽子【名】右折二の折り方なる風折(カザ)烏帽子。

みーくさ 御軍【名】**みいくさ**(御軍)の約。〔古語〕萬葉「霰降り鹿島の神を祈りつつすめらみくさに我は來にしを」

みーくさ 眞草【名】『み(眞)は接頭語』**まくさ**(眞草)に同じ。一說に、すすき(芒)一の美稱なりと。〔古語〕萬葉「秋の野のみくさ刈り葺き宿りし宇治の都の假庵(カリ)し思ほゆ」

みーくさ 水草【名】**みづくさ**(水草)に同じ。萬葉「古のふるき堤は年深み池のなぎさに水草生ひけり」枕「池などある所は、水草ゐ」

みくさ 三草【名】〔地〕一 播磨國加東郡上福田(カトガベ)村の大字。丹羽(ニ)氏の舊陣屋の在りし地。東に三草山あり。二 明治の初年設置の縣の一。ひめぢ(姫路)三 參照。

みくさ-の-かんだから 三種の神寶【句】次條に同じ。

みくさ-の-たから 三種の寶【句】たから(寶)の條下を見よ。

みくさ-の-たからもの 三種の寶物【句】たからもの(寶物)の條下を見よ。

みーくさみ 水轄【名】にくさび(荷轄)に同じ。

みくさ-やま 三草山【名】〔地〕播磨國加東・多可二郡の界を成し、丹波國多紀郡と攝津國有馬郡との境に連接し、東條・加古兩川の谿谷地に夾まれる高原地。壽永四年、源義經、唐櫃(カラト)越を經て、丹波路より、この山の東口に出で、西口なる平資盛の軍を破りし事あり。今も丹波より東播磨に通ずる驛道たり。

みーぐし 御髻【名】神社・佛閣に備へありて、參詣者の、心事の吉凶を判斷するために探り引く竹。細く削りたる竹又は金屬の棒などにて製し、箱又は筒に入れたるを振り動かして、ふき孔より現はれたる一本を抜き取り、それに相當する吉凶の紙片を見れば、判斷し得るやうにし、佛閣のは、元三(グワンザン)大師の百籤と稱するものにて、五言四句の詩百首を、一首づつ記し、上欄に吉と凶とを記せり。おみくじ。

みーぐし 御首【名】くび(首)の敬稱。紀「首、ミグシ」源氏「御ぐしも痛く、身も熱きここちして」出世繼「御戸(ト)を開きて候へば、觀世音の御ぐし切れて失せさせたまひ」

みーぐし 御髮【名】くし(髮)の敬稱。おぐし。紀「髮、ミグシ」榮花「御ぐしの、紅梅の縫物の御衣の裾にかからせたまへる程」同「御ぐしこまやかに」

御髮上ぐ【句】「髮(カミ)上ぐ」の敬語。榮花「宮の御前、白き御よそほひにて、大床子に、御ぐし上げておはしまし」

御髮の縣【句】「髮(カミ)の懸(カケ)」の敬語。源氏「御ぐしのかかり、はらはらと清らにて」

御髮を下す【句】「髮(カミ)を下す」の敬語。榮花「院の御惱、いと重らせければ、御髮おろさせたまはんとて、……かくて、御髮、六月十九日辰の時におろしはてさせたまひて」

御髮を削ぐ【句】髮削(ソギ)をなしたまふ。榮花「上、いづらは、若宮はと問はせたまへば、命婦(ミヤウブ)の乳母(メノト)抱き奉りて參る。御ぐしをそがせたまへれば」

みぐしあげ 御髮上【名】一 かみあげ(髮上)の敬稱。源氏「御ぐしあげの內侍のすけのぼれなどいはせよと仰せらるれば」二 古、禁中にて、十二月の下の午の日、天皇、東宮などの一年中の御髮の屑を、主殿寮(トノモリ)にて燒きし公事。公事根源「御髮上、下午日、藏人、御髮のけづり屑を賜はりて、主殿寮にむかひて燒くなり」

みぐし-おろし 御髮下【名】御髮を剃りおとすこと。落髮。剃髮。

みーくしげ 御櫛笥・御匣【名】くしげ(櫛笥)の敬稱。萬葉「わたつみの神の宮のみくしげに」

みくしげ-どの 御櫛笥殿・御匣殿【名】一『御櫛笥、その他、後宮に關係ある文書などを納めてありし中に、櫛は特に婦人の大切とする物なるより出でし名稱なるべしといふ』古、禁中の貞觀(ヂヤウグワン)殿の中、后町(キサキマチ)の北に在り、內藏寮(レウ)にて調進する以外の御服の裁縫を掌りし所。上臈の女房を長官として、別當といひ、その下に、女藏人(ニヨウラウド)數人ありしが、冷泉天皇の頃より、別當は、天皇の侍妾となり、公卿の女入內して、この職に就き、それより進んで、女御となる例を生じ、後冷泉天皇の時より、一時中絕せしが、後、又その風行はれて、後深草天皇の頃に及べり。一說には、ちやうぐわんでん(貞觀殿)の異稱なりと。榮花「御匣殿別當可レ爲二女御一之事」二 前項の御櫛笥殿の別當の略稱。榮花「四の御方、いと若うおはすれど、內の御匣殿と聞えさす」

みくしげ-の 御櫛笥の・御匣の【枕】櫛笥(クシゲ)には蓋(フタ)あるより、ふたにかけていふ。萬葉「紀路(キヂ)にこそ妹山ありと御櫛上(ミクシゲ)の二上山(フタカミヤマ)もいもこそありけれ」

みくじ-ぼん 御鬮本【名】身の吉凶を判斷し得る文句を記せる書籍。柳亭「七りんのそばで讀んでるみくじ本」

みーくせ 身癖【名】身を動かし振舞ふにつきての癖。雪女五枚羽子板「襠(カイドリ)の身癖・顔癖引包む殿御(トノ)模様の重著(カサネ)の」

みーくだしぶみ 御下文【名】くだしぶみ(下文)の敬稱。

みくだしぶみがみ 御下文紙【名】かまくらがみ(鎌倉紙)に同じ。

みーくだす 見下す【動四他】㊀みおろす(見下す)に同じ。㊁みさぐ(見下ぐ)に同じ。源氏「参りつどふ人の有様ども、見下さるる方なり」

みくだりーばん 三行半【名】『三行(ミクダリ)半に書く習はしなるとも、結婚の時の證文が七行にて、離縁の時は、これを二つに引き裂くより出づともいふ』妻を離縁する時に與ふる書狀。離縁狀。嬉山蛟「厭かぬ夫婦(フウ)の中をさへ、三くだり半の生別(イキワカレ)」

みーくたる 身腐る【動下二自】物ぐたに柔かになるをいへるなるべしといふ。[古語]拾玉「そもやこの年經ぬる身はみくたれて見と見る人は後生(ゴショウ)の角」

みーくづ 水屑【名】水の中のあくた。大鏡「流れゆく我はみくづになりはてぬ君しがらみとなりてとどめよ」

みーくづれ 見崩【名】戰を交へぬ内に、敵の勢に怖れて、崩れ立つこと。關八州古戰錄「臆病神にや引かれけん、或は見くづれし、聞きくづれして」

みーくに 御國【名】我國の敬稱。皇國。

みーくに 三國【名】[地]越前國坂井郡にある町。古來、北國有名の港にして、九頭龍(クズリュウ)川の北岸、竹田川の合流する所に在り。水路、福井市に至る咽喉に當り、鐵道三國線の終點。

みくにーあらそひ 御國爭【名】天皇の位に即かんとて爭ひたまふこと。保元「夜討などいふ事、汝等が同士いくさ、十騎二十騎の私事なり。さすが、主上・上皇の御國あらそひに、源平、數を盡して、兩方に在って、勝負を決せんに、無下に然るべからず」

みくにーじんじゃ 三國神社【名】越前國阪井郡三國町に鎭座せる縣社。祭神は大山咋(オオヤマクヒ)神及び繼體天皇。繼體天皇、御卽位以前よりこの地に住みたまひしより、崩御の後、土民の齋き祀りしものならんといふ。和銅七年、僧泰澄再建し、延喜の制、小社に列し、仁孝天皇の時及び明治初年、一時、櫻谷神社と稱せしことあり。

みくにーたらげ 三國峠【名】㊀[地]尾張・三河・美濃三國の交界にある一峯。㊁『上野信濃・越後三國の交界にありとて、この名あれど、信濃國には關係なし』越後・上野二國の境にある山。越後山脈の中央部橫斷の通路にして、山路險惡。高さ四五一四尺。古、越後國と坂東諸州・江戸との間の交通上、人馬の往來繁く、又戰時の要害たりしが、近年、國道はその東方なる清水(シミズ)越を通ず。㊂『昔、竹田・佐伯名(サエキ)・白杵(キツキ)三藩の交界なりしよりの名なりといふ』豐後國大野・南海部(ミナミアマベ)二郡の境をなす山。豐後國と日向國との間の國道、山上を通ず。㊃みくにやま(三國山)㊀を見よ。

みくにーだうじやうじ 三國道成寺【名】ももちざりむすめだうじやうじ(百千鳥娘道成寺)を見よ。

みくにーだけ 三國嶽【名】㊀[地]山城・丹波・近江三國の交界にある山。㊁丹波・丹後・若狹三國の交界にある山。㊂播磨・丹波・但馬三國の交界にある山。㊃大和國大臺原山(オオダイガハラヤマ)の別稱。

みくにちーなす 三九日茄子【名】九月の九日・十九日・二十九日に、茄子を菜(サイ)に供ふること。

みくにーぶみ 御國書【名】こくてん(國典)㊀に同じ。

みくにーぶり 御國風【名】㊀御國の風習。㊁御國の文學。

みくにーまなび 御國學【名】御國文(ミクニブミ)の學問。國學。皇學。[國學者の語]

みくにーやき 三國燒【名】越前國坂井郡三國より産出する陶器。明和年間、同郡喜寶町の札場嘉右衞門といふ者、京都にて、樂燒を學びて創めしものにて、札場燒とも稱せり。現今は、生海鼠釉結晶釉の花瓶・茶器等を製す。

みくにーやま 三國山【名】㊀[地]攝津・丹波・播磨三國の交界にありて、攝津國有馬郡藍村に屬する山。山路を三國峠といひ、丹波國多紀郡小津(オヅ)に出づ。萬葉「みくに山梢にすまふむささびの鳥待つがごと我待ちやせむ」㊁上野・信濃・武藏三國の交界にある山。高さ六四五八尺。神流(カンナ)川・筑摩(チクマ)川・荒川の分水嶺をなす。㊂駿河・相摸・伊豆三國の交界にある山。高さ三九〇一尺。東南は箱根山に連なり、北は足柄山脈に連なる。㊃加賀・能登・越中三國の交界にある山。㊄備後・出雲・石見三國の交界にある山。㊅備後・備中・伯耆三國の交界にある山。㊆筑後・肥後・豐後三國の交界にある山。高さ二八九〇尺。

みくにーゆづり 御國讓【名】じやうゐ(讓位)に同じ。萬葉「御國ゆづりも、近くあへかなるに」

御國讓の節會(セチヱ)【句】御國讓の時に行はるる節會。雄然「御國ゆづりの節會行はれて、劒璽・內侍所渡し奉らるる程こそ、限無う心細けれ」

みーくばり 御賦【名】昔、將軍の呢近の衆より奉行へ書き出だし文書。

みーくびる 見縊る【動四他】價値なしと見きはむ。輕んじ侮る。和合人「なるほど、人は見くびれねえものだ」

みーくま 水隈【名】川などの汀の彎曲せる處。かはくま。[古語]萬葉「み吉野のみくまが菅を編まなくに刈りのみ刈りて亂りなむとや」

みくまーくわてん 三熊花顚【名】[人]畫家。名は思孝。字は海棠、通稱は主計(カズエ)。加賀國の人。嘗て長崎に遊びて、畫を月湖に學び、風俗畫を善くし、又、俳諧に通じ、又、櫻花を愛して、奇行多し。後、京都に住み、伴蒿蹊と續近世畸人傳を著し、大いに世に珍重せらる。寛政六年歿す。年八十六。

みーくまぬ 三熊野【名】[地]次條㊀の古稱。萬葉「三熊野の浦の濱木綿(ハマユフ)百重(モモヘ)なす心はもへど直(タダ)にあはぬかも」

みーくまの 三熊野【名】㊀[地]『み接頭語、三は假借の字』くまの(熊野)の美稱。みくまぬ。まくまぬ。㊁三の字に意味あるやうに思ひ誤りて、轉用せるなり』

くまのさんざん(熊野三山)に同じ。謠曲飛雲「南無や、開山役(エン)の優婆塞(ウバソク)、殊には三熊野三所權現、力を添へて賜(タ)びたまへ」假坂反魂香「南無や三熊野本地(ホンヂ)の三尊、迎へたまへや、導きたまへと」

みくまーまうで 三熊詣【名】くまのまうで(熊野詣)に同じ。萬葉「見なへの三熊まうでや蝸牛(カタツブリ)」

みーくまり 水分【名】『水配(クバ)りの義』山より流れ出づる水の分岐する處。[古語]靚詞(新年祭)「三分に坐(マ)す皇神(スメ)たちの前に白(マヲ)さく、吉野・宇陀・都祁(ツゲ)・葛木(カヅラキ)と、御名は白して」

みくまりーじんじゃ 水分神社【名】大和國吉野山八神の一。山中の一部、水分山に鎭座せる神社。祭神は、天水分(アメノミクマリ)神・國水分(クニノミクマリ)神。今、水分を訛りて、御子守(ミコモリ)と呼び、土俗、同じ八神の一なる勝手明神を父神、この水分神を母神といふ。

みくまりーのーかみ 水分神【名】天水分(アメノミクマリ)神と國水分(クニノミクマリ)神との併稱。後世、訛りて「みこもりの神」といふ。前條參照。

みくまりーみやうじん 水分明神【名】前條の舊稱。

みくまりーやま 水分山【名】[地]大和國吉野山の一部、子守(ミコモリ)明神社の在る所。訛りて「みこもりの山」ともいひ、水分明神をも、中世以後、子守明神と呼ぶに至れるなり。萬葉「神さぶる岩根こごしき吉野の水分山を見れば悲しも」

みくみ 美含【名】[地]但馬國の舊郡の一。明治二十九年、城崎(キ)郡に合併せらる。

みーくもん 未公文【名】古、國司の任期は終りたれども、年貢上納の帳簿に對する勘解由(カゲユ)の調査の未だ濟まぬこと。名目抄「未公文、ミクモン」

みーくら 御座【名】くら(座)㊀の敬稱。今

鑑「女院こそ、すぐれておはしますさまは、並ぶ御方方難くおはしますなるに、今の皇后宮にや、いづれにかおはしますらん、参らせたまへりけるに、人のみくらへ参らせけるこそ、とりどりに、いとをかしく見えさせたまひけれ」

みーくら 御倉・御蔵【名】㊀くら(倉)の敬称。大織冠萬代不易の御寶(カシク)と名づけ、御蔵の中に檀を構へ、七重の箱に、この心をいはひこめられ候ふやらん」㊁奈良の正倉(シャウサウ)院の敬称。「三倉」 栄花「奈良……心のどかに三日おはしまして、御堂・御倉など開かせて御覧ずるに」 大和志「正倉院、一名三倉」㊂古、禁中藏人所又は内藏(クラ)寮などに附属せし倉庫。藏人所のは、その小舎人(コトネリ)、これを保管し、その小舎人を、御倉の小舎人、又は御倉の舎人と呼びたり。 禁中名目抄「御倉は、藏人所の官人預かるなり。小舎人、出納方の御倉を預かるなり」㊃次條の略。十訓「藏人所の衆・瀧口・出納(スヰダウ)・御倉・女官・主殿司(トノモ)・下部どもに至るまで」

みくら-まち 御倉町【名】建て連ねたる御倉。 源氏「御倉町・納殿(ヲサメドノ)、なにかの事まで、……宣ひ預く」

みーくり 御厨【名】**みくりや**(御厨)に同じ。 今鑑「神の御厨ばかりぞゆるされて」

みーくり 黒三稜・三稜草【名】【植】黒三稜科に屬する多年生の草。葉は細長くして、蒲(ガマ)のに似、高さ二三尺に達し、夏より秋にかけて、筴葉の間より、多肉にして、三稜形をなせる莖出でて、梢上に、數箇の頭狀花序、穗狀をなして著生す。花は單性・雌雄同株にして、白色を帶び、花後、圓くして、刺を具ふる核果を結ぶ。暑中に葉を採取し、陰乾にして、繩に綯ひて用ふ。うきやがら。おほやがら。かはすげ。こすげ。さんりよう。 和名「三稜草、美久里」 栄花「網代屏風(アジロビヤウブ)、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつし出でたり」

みくり-くわ 黒三稜科【名】【植】顯花植物・被子類・單子葉門に屬する科。一屬二十種あり。熱帶及び寒帶に分布し、沼池に生ずる草本にして、我國に自生するもの、凡そ五種あり。涉草科(リクヤウ)に併合せしむる學者もあり。

みくり-すげ 三稜菅【名】【植】涉草(カヤツリ)科に屬する草。高さ一尺餘に達し、葉は互生し、細長くして尖り、平行脈を有す。花は穗狀花序をなし、雄花のは、莖の頂に一箇、雌花のは、その下方に二箇存す。我國山野に自生す。おにすげ。

みくり-なは 黒三稜繩【名】黒三稜の莖を綯ひて作りたる繩。 新千載「水錆(ミサビ)ねる淺澤沼のみくり繩くるしき世には住まれやはする」

みくり-まうけ 御厨辱【名】次條㊀に同じ。 東鑑「相摸國大庭御厨庫(クラ)一宇燒、依レ召參上、奉二行濫宮事一」

みくりや 御厨【名】『くりや(厨)を見よ』㊀『倭訓栞に「みくり、白居易が詩に、珍羞降二御厨一と見えたり。御饌を奉る所をいふなり。大明會典に、神厨の字見えたり。御供所といふ、これなり」とあり』古、伊勢神宮又はその他の神社に附屬して、神饌を調進せし所、又、神領にして、神饌の材料を供給せし土地。伊勢神宮のは、その土地、鎌倉時代には數百箇所に達せりといひ、河内國中河内郡意岐部(オキベ)村の大字、下野國足利郡の村、駿河國駿東(スルガ)郡の町、遠江國磐田(イハタ)郡の村などに、今も御厨(ミクリヤ)の名あるは、何れも、その遺跡なりといふ。みくり。 著聞「御厨供御備進のために下りける時、件のみくりやに山あり」 百練抄「賀茂上下社……分置園御厨於諸國二」㊁古、内膳司に屬し、職員に別當及び御厨長ありて、供御(クゴ)の調進を掌りし所。みくり。 拾芥抄「御厨子所(ミクリヤノコロ)、以二内膳・内藏・造酒・大膳及御厨・衙府御贄一、供二朝餉及朝夕御膳一」

みくりや 御來屋【名】【地】伯耆國西伯(ホウキ)郡にある町。山陰道の一驛。北には隱岐の諸山を望み、南には大山(ダイセン)船上山を仰ぐ。名和長年の領邑たりし所にして、鐵道山陰本線の一驛。

みーぐるし 見苦し【形二】見るに忍びざるなり。みにくし。 落葉「北の方、しばしは、見苦しきまで戀ひ泣きけれど」 源氏「ここらの人目も見苦しう、かの思はん事も若若しう」

みーぐるべかす 見くるべかす【動四他】日をくるめかして見る。きよろきよろと見まはす。 榮華「眼を、車の輪のごとく見くるべかして」

みーくるま 御車【名】くるま(車)の敬稱。平當主上は、北の陣に御車を立て」

みくろ-こすもす (英 Micro cosmos)【名】【哲】せうちう(小宇宙)に同じ。

みーくわん 味官【名】㊀みかく(味覺器)に同じ。㊁(佛)ぜっこん(舌根)㊁に同じ。

みーくわん 未完【名】未だ完全せざること。「ぬこと。未成。

みくわんせい 未完成【名】未だ完成せざること。

みくわんちゃう 未灌頂【名】【佛】未だ灌頂を經ざること。

みくわんさもそ 【名】【動】みえひさまに同じ。【古語】 異竹集「夜ふけてあさくさまぬに逢ひぬるかみくわさもそのうらぶれて鳴く」

みけ 御食・御饌・御膳【名】『け(食)を見よ』神前又は天皇に供進する食物。神饌又は供御(クゴ)。おほみけ。 親訓(新年祭)「この六つの御饌(ミケ)に生(ウ)出づる甘菜(アマナ)・辛菜(カラナ)を持參(マヰ)來て、皇御孫命(スメミマノ)の長御膳(ナガノミケ)の遠御膳(トホノミケ)と聞しめすが故に」

みーけ 三毛【名】㊀鷹の背の一部。㊁猫の毛色の、白・黒・褐の三色のまじれるもの、又その毛色なる猫。 新可笑記「牡猫に三毛と申す事、世に無き物と申し上くる」

みげ 【名】牛の胃腑。又、牛・羊などのにれかみたる食物とも、その胃腑の肉なりともいふ。みぎ。【古語】 字鏡「胘、下年反平肚也。牛百葉。三介又三乃」

みーげうしよ 御教書【名】『けうしよ(教書)』㊀を見よ』古、天皇・上皇、三位以上の公卿及び武家の棟梁たる人より下だしし公文書。末には、大抵「何某謹狀、依レ仰執達如レ件」「所レ被二仰下一也、仍執達如レ件」等の語句を用ひ、天皇の場合は綸旨、上皇の場合は院宣といふも同一、又、公卿のは、家司(ケイ)、その意を承けて出だしたため、奉る人より見て、奉書とも呼び、武家の場合は、源頼朝以來行はれしが、北條氏權を得るに及びてより、執權連署の加判ある關東御教書、六波羅兩探題の加判ある六波羅御教書といひ、室町時代には、管領の署名・加判するを普通とし、義滿將軍の時より、將軍自身の署名・加判あるものも行はれ、これを特に、御判の御教書といひ、その署名のみなるを、御書の御教書といひ、なほ、内容・手續の差異により、補任(ブニン)御教書・吹擧御教書・安堵御教書・御感御教書・問狀御教書・召文御教書・裁許御教書・廻文御教書等の區別あり。江戸時代には、老中が加判して、將軍の命令を傳達する公文書を、奉書といひ、御教書の稱は用ひざりき。 八陣守護城「時政公より父への使、何にもせよ、燭(アカ)を照し、御教書御披見下されと」

みーけしき 御景色【名】**けしき**(氣色)の敬稱。 伊勢「帝(ミカド)の御氣色悪しかりけり」 榮花「俄かにあくばせたまひて、御氣色いと苦しげなりければ」

みけしきばる 御氣色賜はる【句】「氣色(ケシキ)賜はる」の敬語。 落葉「御氣色賜はりし事は、い

かが侍らんと申したまへば」

みけつ 未決【名】㊀未だ決定せぬこと。㊁〔法〕犯罪の嫌疑ありて、刑事裁判所に繋屬してはあれども、未だ有罪とも無罪とも決定せぬこと。㊂**みけつかん**(未決監)㊃の略。「未決に入れらる」

みーけつ 見消つ【動四他】㊀興味なしと見る。榮花「ふりがたく降りつる今朝の初雪を見けたぬ人もあらせてしがな」㊁缺點なりとして見る。〔古語〕源氏「思ひあがれるさまをも見消ちて侍るかな」

みけつーかみ 御食津神・御饌津神・御氣津神・三狐神【名】『つ(津)』は領格の助辭。氣も三狐も假借の字にて、三狐の字より、この神を祀れる稻荷(ヰナリ)神社の使はしめを狐なりといふに至れり』**こゆけのかみ**(豐受神)を見よ。御鎭座傳記「宇賀之御魂(ミタマ)神、亦名專女三狐神(タツカミ)云云、故云曰二御饌津神一也」

みけつーかん 未決監【名】㊀監獄の一部、刑事被告人を拘禁する所。㊁明治四十三年以前に於ける陸軍監獄の一。刑事被告人を拘禁せし所。

みけつーぎ 未決著【名】未決監に入れられたる者の、制規の服。綿衣なり。

みけつーくに 御食津國・御食國【名】『つ(津)』は領格の助辭』御食(ミケ)の贄(ニヘ)を供進する國。〔古語〕萬葉「御食つ國日の真と淡路の野島(ノジマ)の海士(アマ)の」同「御食つ國志摩のあまならしま熊野の小舟に乘りて沖べ漕ぐ見ゆ」

みけっさん 未決算【名】未だ決算せぬこと。

みけっさんーかんぢやう 未決算勘定【名】㊀簿記にて、當季に決濟すること能はずして、次季に繰り越すべき勘定。㊁簿記の勘定科目の一。勘定の性質の確定せぬもの。即ち未拂金・假受金などを、一時整理するもの。

みけつーしう 未決囚【名】〔法〕次條に同じ。(既決囚に對して)

みけつーしうさ 未決囚徒【名】〔法〕未決監に拘禁せられてある刑事被告人。未決囚。(既決囚徒に對して)

みけつーもの 御食物【名】『つは領格の助辭』御食(ミケ)となるべき物。〔古語〕紀「饌、ミケツモノ」

みけーどの 御饌殿・御膳殿【名】神社に附屬して、神饌を調進する殿舍。正統記「神龜年中より、外宮に御饌殿を立てて」

みけーねこ 三毛猫【名】三毛㊁の猫。

みけーのかみ 御食神・御饌神【名】**みけつかみ**(御食神)に同じ。正統記「神龜年中より、外宮に御饌殿を立てて、內宮のをも、一所に奉るとなん。かやうの事によりて、御饌の神と申す說あれども、御食と御氣との兩義あり」

みけーびと 御食人【名】御食を調ふる人。〔古語〕記「喪屋(モヤ)を作りて、河雁(カリ)を岐佐理持(キサリモチ)とし、鷺を掃持(ハキモチ)とし、翠鳥(ソニ)を御食人とし」

みけーむかふ 御食向ふ【枕】『むかふ(向ふ)は向くの義にて、御食を供へ奉る意なるべしとも、御食に對(ムカ)ふ意にて、食膳の上の食物の名に續けたるなるべしともいふ』㊀御食といふによりて、副食物の名と同音なる又は同音を含める地名**きのへ**(城上)・**あはぢ**(淡路)・**みなぶちやま**(南淵山)にかけていふ。城上は、葱(キ)又は葱(キ)の轟(ソ)といふ意に取りて續けしならんとも、酒(キ)の瓮(ヘ)といふ意に取りて續けしならんともいひ、淡路は粟の意に取り、南淵山は蜷(ミナ)か眞魚(マナ)かの意に取りたるならんとも、肉(シ)か御魚菜(ナ)かの意に取りたるならんともいふ。萬葉「御食向ふ城上(キ)の宮を」同「御食向ふ南淵山の巖には散れるはだれか消え殘りたる」㊁御食の美味なる意に取りて、地名の**あぢふ**(味原)にかけていふ。萬葉「御食向ふ味原の宮は」

みけん 眉間【名】眉と眉との中間、即ち額の中央。まゆあひ。

眉間の光毫(クワウガウ)【句】〔佛〕「眉間の白毫」に同じ。榮花「眉間の光毫は、右にめぐりて、宛轉せること、五須彌の如し」

眉間の光【句】〔佛〕眉間の白毫より放つ光。方丈「障子を隔てて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて、眉間の光とす」盛衰記「曉の月、軒の下より洩れて、自ら眉間の光かと誤たれ」

眉間の白毫(ビヤクガウ)【句】〔佛〕佛の眉間にありといふ、白色の毛。內外映徹して、白琉璃の如く、右方に宛轉せること、日の正中するが如く、これを放てば、光明あり、初生の時は長さ五尺、成道(ジヤウダウ)の時一丈五尺ありといひ、三十二相の一に數ふ。

眉間より光を放つ【句】〔佛〕眉間の白毫より、光發す。十訓「忽ち普賢菩薩の形に現じ、六牙(ゲ)の白象(ビヤクザウ)に乘りて、眉間より光を放ちて」

みーけん 未見【名】未だ見ぬこと。未だ曾見せぬこと。

みけんーくわう 眉間光【名】〔佛〕「眉間の光」に同じ。

みけんしんじつ 未顯眞實【句】〔佛〕『無量壽經に「以二諸衆生等性欲不同一種種說レ法、以方便力、四十餘年未レ顯二眞實一」とあるに本づく』釋迦牟尼佛成道(ジヤウダウ)の後、四十餘年間、諸種の法を說きて、諸種の機に投じたれども、それらは、晩年に、法華經を說きて、眞實成佛(ジヤウブツ)の道を示さんがための方便・梯梧たるに過ぎざりしこと。未開顯。謠曲・身延「始、華嚴(ケゴン)の御法(ミノリ)より般若(ハンニヤ)に及ぶ四十餘年、未顯眞實の方便、成佛(ジヤウブツ)の誠あらはれて、妙法蓮華經ぞかし」

みけんさき 眉間先【名】眉間のところ。百合若大臣野守鏡「鐙の鳩胸、兄弟の眉間先に蹈み反(カヘ)らし」

みーげんじや 御驗者【名】**げんじや**(驗者)の敬稱。增鏡「御驗者櫻井の宮の僧正(覺仁法親王)を始め奉りて、次次、皆祿賜ふ」

みけんーじやく 眉間尺【名】馬琴の著なる昔語質屋庫に、この傳說詳しく記載あり。絶狂劍本地「異國の眉間尺とやら、首を討たれて、劍の先、くひ切り含んで、本望を遂げしと聞く」

みけんーびやくがうーさう 眉間白毫相【名】〔佛〕「眉間の白毫」を見よ。

みけもち-のーかみ 御食持神【名】高御產靈(タカミムスビ)神の御子にて、工匠の術を傳へたまへりといふ神。

みーこ み籠【名】『みは接頭語』こ(籠)の美稱。〔古語〕萬葉「籠(コ)もよみ籠持ち」

みーこ 御子【名】㊀天皇の子又は子孫たる方の敬稱。御生誕の順序によりて、一の御子、二の御子などいふ。皇子(ワウジ)。古今・式部卿のみこ、閑院の五のみこに住みわたりけるを、幾ばくもあらで、女のみこの身まかりにける時に」㊁**しんわう**(親王)に同じ。源氏「今まで、この君をみこにもなさせたまはざりけるを」續世繼「三條院の御子師明親王と聞えたまひし、まだちごにおはしまして、御子の名得たまひければ」

御子の尊(ミコ)【句】**くわうたいし**(皇太子)の尊稱。萬葉「日並知(ヒナメシ)の皇子(ミコ)のみことの馬並(ナラ)めてみ狩立たしし時は來向ふ」

御子の宮【句】㊀**みこ**(御子)の敬稱。大鏡「御裳著の屏風に、公忠の辨、行きやらで山路くらしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに と詠むは、このみこの宮なり」㊁前條に同じ。**みこのみやのつかさ**(春宮坊・東宮職)參照。記「東宮、ミコノミヤ」同「春宮、ミコノミヤ」今鏡「すべらぎの御よそひ、みこの宮の御ぞの色變りて珍しく」

みーこ 神子・御子・巫女【名】『かみこ(神子)の略かともいへど、**みあかし**(御明)・**みき**(御酒)などのと同じく、みは神につきていふ敬語の接頭語なるべし』㊀神祇に仕へ、神前にて、神樂の舞をなしなどする未婚の少女。かんなぎ。かんのこ。神巫(カンナギ)。巫女(フジヨ)。㊁**あづさみこ**(梓巫)の略。若風俗「寵拂(カマビ)の神子、男ばかりの家を心懸くる」繪入繪卷「卯月の紅葉」上手と聞きし神子の門(カド)、ああ申し、ちと口寄(クチヨセ)を頼みませう」

みーご 稈心【名】『身子(ミ)の義』藁の莖の、皮を去りたるもの。

みこあいさ 【名】〔動〕遊禽類に屬する鳥。海あいさ・川あいさよりは小けれど、小鴨よりはやや大きく、嘴と脚とは灰色、翼は黒くして、その端白く、體の下面白色、雄の老いたるものは、羽色、一體に白色に富み、眼の邊、冠羽と共に黒く、背も黒く、胸側に二條の半月形なる黒帶あり。雌と幼鳥とは、頭上後頸共に赤褐色、背は灰色。冬季、我國、沿岸に往往見る。

みこう 獼猴 【名】■〔動〕**びこう**(獼猴)に同じ。■〔佛〕『涅槃經の卷二十九に「衆生心性、猶如二獼猴一、衆生心性、亦復如レ是」とあり』凡夫の妄心の譬。猿猴。

獼猴、水月を捉(ト)ふ 【句】〔佛〕『涅槃經の卷九に「喩如二獼猴捉二水中月一」とあり』■一群の獼猴、林中を遊行して、樹下の井中に月影を認め、獼猴の主長、共にこれを出して、世間をして、長夜の闇に迷はしめざらんことを發議し、主長自ら樹枝を捉へ、他の獼猴をして、その尾を捉へしめ、斯くの如くにして、漸次相連なりて下垂し、水面を離ること僅かにして、枝折れ、一同悉く井水の中に墮ちたりといふ說話。その獼猴の主長は、提婆達多(ダイバダッタ)なりといふ。■愚人の、身の程を知らずして、終に命を喪ふに至る譬。猿猴が月、猿猴、月を取る。水の月取る猿猴。〔諺語〕

獼猴、帝釋天(タイシャクテン)を嘲る 【句】愚者が智者を嘲る譬。〔諺語〕 曾我會稽山「獼猴が帝釋天を嘲るとやら、おのれが足らざるを以て、人の大智を計らんとして、却て愚痴が顯るる」 「を見よ。

みこう 味孔 【名】〔醬〕**みかく**(味覺器)

みごえ 身肥 【名】糞・肉類・糠類を肥料として用ふるもの。

みこき 御國忌 【名】**こき**(國忌)の敬稱。古今「深草のみかどの御國忌の日」 「稱」

みこくき 御國忌 【名】**こくき**(國忌)の敬稱。

みこくじ 彌谷寺 【名】讃岐國三豐(ミトヨ)郡大見村にある眞言宗小野派の寺。彌谷山の中腹に位し、本尊は千手觀音。四國八十八箇所の第七十一番。劍御山・千手院と號す。行基菩薩の草創といひ、普通には、「いやたにでら」と呼ぶ。

みこくち 神子口 【名】烟管の吸口(スヒクチ)。

みこころを 御心を 【枕】『をは感嘆の助辭』■神の御心の遠く廣く見そなはす意にて、地名の**ひろた**(廣田)にかけていふ。紀「御心を廣田の國」■神の御心の長く廣くましまします意にて、地名の**なかた**(長田)にかけていふ。紀「御心を長田の國」■景色をよしと見て、天皇の御心の慰む意にて、地名の**よしぬ**(吉野)にかけていふ。萬葉「御心を吉野の國の」

みこし 御輿・神輿 【名】『神輿の字は、神體を安置せるもののみに用ふ』■(輿)■の敬稱。神體を安置せるもの、天皇皇后などの乘りたまへるものにいひ、今は、主として、神體にいふ。萬葉「わづか山御輿立たして久方の天(ア)知らしぬれ」 增鏡「東(アヅマ)の門(カド)は四足(シヾ)になして、それより、御輿は入らせたまふ」 增鏡「君の御輿に向ひて、弓を引くことは」


(しごみ)

御輿の綱 【句】古、行幸の鳳輦の屋形より掛け垂れ、行幸の時、大舍人助(オホトネリノスケ)の手に取りて供奉せし綱。みつな。「御綱(ミツナ)の次官(スケ)」參照。今鷲かちより、おのおのしまうまにて、御輿の綱を長くなされたりしにや」

御輿の長(ナガ) 【句】古、行幸の時、近衛(コノヱ)の內、膂力ある者五人の、選ばれて、弓箭を帶びず、紅染の布衫を著、鳳輦に附き添ひしもの。 延喜式「御輿長五人」

みこし 神輿を擔ぐ 【句】他人をおだて上ぐ。

神輿を据う 【句】坐りこみて、容易に起たんとせぬ譬。

みこし 見越 【名】■隔の物を越して見ること。■邸宅の、外圍を隔てて見ゆる所。**みつけ**(見附)■參照。「船板塀に見越の松」 一代男「あやめ葺きかぬる軒の端(ハ)、見越の柳茂りて」 ■成行(ナリユキ)をおしはかること。四花あはせの語。下の方に居て、場にある役札の上の方の人に取られずに、自分の方にまはり來ること。

みこしあらひ 御輿洗・神輿洗 【名】京都の祇園社にて、御靈會(ゴリヤウヱ)の前日、卽ち五月晦日と、御靈會の終りたる六月十八日とに、四條橋の東にて、御輿に鴨川の水を灌ぐ儀式。

みこしうり 見越賣 【名】相場の變動を見越して、商品などを賣ること。

みこしがさき 御輿崎 【名】〔地〕相摸國鎌倉町稻村崎(イナムラガサキ)の古稱なるべしといふ。平家、小磯・大磯の浦、やつまと・砥上(トガミ)が原御輿が崎をも打過ぎて」

みこしかひ 見越買 【名】〔商〕相場の變動を見越して、商品などを買ふこと。

みこしがや 御輿萱 【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する草。高さ一二尺に達し、葉は細長くして尖り、平行脈を具へて、三縱列に排列して、互生し、花は小穗花序をなしたるもの、更に多數集まりて、複穗狀花序をなす。原野に自生す。さるぐく。

みこしぐさ 御輿草 【名】〔植〕**ふうろさう**(風露草)に同じ。

みこしぐんばい 見越軍配 【名】相撲(スマヒ)の行司が、相撲の勝負の今や決せんとする際に、見越して、軍配を上ぐること。熟練せる行司は、これを爲すを得といふ。

みこしぐら 御輿倉・神輿庫 【名】神社の御輿を入れおく倉。みこしやどり。

みこしさうば 見越相場・見越相場 【名】商品の直段の變動を見越して立つる相場。

みこしだいこ 神輿太鼓・神輿太皷 【名】神輿の前驅として、擔ひゆく大なる太鼓。鬼貫「天滿祭を見て、菅原やみこし太鼓の夜の音」

みこしたうげ 三越峠 【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ムロ)・西牟婁(ニシムロ)二郡の交界にある山。熊野街道これに懸りて、日熊野と熊野との境をなし、往時は、山嶮なる東牟婁郡三越(今は三里)村に屬す)に、熊野本宮の搦門なる發心門ありしが、今はその礎を存するのみ。散木「雲の居る三越岩かみ越えん日は添ふる心にかかれとぞ思ふ」 「を見よ。

みこしたかひ 御輿遣・神輿遣 【名】次條御輿迎及び神幸の行幸 【句】古、京都祇園社の御輿迎及び神幸の日、皇居の方位、神幸の路に禁忌ある場合に、天皇・上皇又は皇后の、他所に行幸又は行啓あらせられしこと。 增鏡「新院、六條殿に渡らせたまひし頃、祇園の神輿たがひの行幸ありし時、御對面のやうを、故院へ尋ね申されたりしにも」

みこしぢ 三越路 【名】■〔地〕『みは接頭語、三は假借の字』**こしぢ**(越路)に同じ。萬葉「かしこみとのらずありしをみこしぢのたむけに立ちて妹が名のりつ」 謠曲「山姥「彌陀の劍(ヤイバ)の砥並(トナミ)山、雲路うながす三越路の國の末なる里間へば」 ■『三の字に意味あるやうに思ひ誤りて、轉用せるなり』越前・越中・越後の三國。八代集抄「越前・越中・越後を、三越路といふ」

みこしにふだう 見越入道 【名】■法師の姿をなし、頸長く、丈高く、金棒などを杖に突きたる形に描く妖怪。 鷹筑波「影ぼしやみこし入道山の月」 孕常盤「二王のやうなる法師武者、入か、見越入道か」 ■〔動〕**あまのじやこ**(天邪鬼)■に同じ。

みこしのさき みこしの崎 【名】〔地〕**みこしがさき**(御輿崎)に同じ。萬葉「鎌倉のみこしの崎の岩くえの君がくゆべき心はもたじ」

みこしふり 御輿振・神輿振 【名】『ふる(振る)■參照』昔、延曆寺の僧徒などの、御輿を奉じ、振り動かして、嗷訴に及びしこと。 增鏡「一とせの御輿振の時、情なく防がせたまひしかば」

みこしべや 御輿部屋・神輿部屋 【名】神社の御輿を入れおく部屋。 曠野(尚白)「木枯や里の子のぞく神輿部屋」

みこしやどり 御輿宿・神輿宿 【名】次條

に同じ。枕「ここは何する所ぞと問ひしかば、神輿やどりといひしも、めでたし」

みこし-やどりや 御輿宿屋・神輿宿屋【名】神社の御輿を入れおくための建物。みこしやどり。みこしべや。みこしぐら。百練抄「七月廿七日、稲荷社御輿宿屋、無レ風顚倒」

みこし-ゆにふ 見越輸入【名】〔商〕一定の貨物に就きて、新に輸入税を課し、又はその税率を増さんとする法律の發布或は改正ある場合に、その課税を免れ、且つその新法律施行後の騰貴を見越して、豫め貨物を輸入すること。

みこしらへ 身拵【名】身の裝(ヨソヒ)をなすこと。裝束をととのふること。みじたく。みづくろひ。狂言「唐相撲」「身拵なさるる程に、それへ寄つて待ちやれ」若鳳俗「坂東又九郎樂屋に入りて見るに、未だ身拵する太夫子の風情」

みこしろ 御子代【名】**みなしろ**(御名代)を見よ。先代舊事本紀「詔二侍臣物部大連公一曰、皇后久經二數年一不レ生二皇子一、以二爾大別一定二皇子代一、后號爲レ氏、以爲二氏造一、改賜二矢田部連公姓一」

みこしろ 三越絽【名】經(タテ)絲を左右に綟りたる部分間に、三本の緯(ヨコ)絲にて、平織を組織したる絽。

みこしをか 御輿岡【名】〔地〕山城國京都の郊外、北野の西南、紙屋川の西岸の道の北にある岡。後撰「北野の行幸に、みこし岡にて、みこし岡幾重の世世に年を經て今日のみゆきを待ちて見つらん」

みこす 見越す【動四他】㊀隔の物を越して見る。太平記「塀の上より見越せば、これこそ大將の陣と覺えて」㊁成行(ナリユ)きを推し測る。㊂他の物事に比べて、それよりもすぐれたる物として見る。一代男「木村(ムラ)屋の和州、一盛(モリ)は、吉野の花を見越し、全盛の春にぞありける」

みごと 御言・命【名】**こと**(言)の敬稱。おほせ。みことのり。記「各(オノオノ)、依さしたまへる命(ミコト)のままにまに知ろしめすが中に」萬葉「三吉野の玉松が枝ははしきかも君が御言を持ちて通はく」

みごと 命・尊【名】『御事の義とも、御言の義ともいふ。古事記には、すべて、命の字を用ひしに、日本書紀にては、その古註に「至貴曰レ尊、自餘曰レ命、並訓二美擧等一」とあるが如く、二字の間に用法の差別を設け、神代に對しては、神代七代より三貴子(ミハシラノウヅノミコ)までに、尊を用ひ、自餘には、命を用ひ、人代に及びては、天皇にのみ尊を用ひ、ただ、日本武(ヤマトタケル)尊と息長足彦(オキナガタラシヒコ)尊とには、その功業の天皇に準じ奉るべきものあるによりて、尊を用ひたり』神又は人の名又は稱呼に、敬意を示すに用ふる語。記「余(ア)が汝妹(イロセ)の命」平藏記「天神の代より、至りて尊きを尊といひ、その次を命といふ」

みごと 見事【名】㊀見るべき事柄。みもの。ものみ。見物事(ケンブツ)。徒然「さやうの人の祭見し様、いと珍かなりき。見事、いと遲し、その程は、棧敷不要なりとて」㊁美しく又はすぐれてある事。りっぱ。「美事」狂言「鱸庖丁」「鱸を料理なされた御手元、近頃見事でござる」曉野釣雪「置く露や小町が骨の見事さよ」

みごと 見事【副】**みごとに**(見事に)に同じ。安達原「畜生の樣な腹から、見事、犬猫をも產みをらず」曉野(荷今「嵯峨までは見事歩みぬ花ざかり」

みことつかひ 勅使【名】**ちよくし**(勅使)に同じ。「古語」記「勅使、ミコトツカヒ」

みごと-に 見事に・美事に【副】立派に。たくみに。みんごと。嵐雪「山伏の見事に出立つ師走(シハス)かな」

みことのり 詔・勅【名】『御言宣の義。古、文書上の規定にては、詔の字は、臨時の大事に用ひ、勅は、常の小事に用ふることとなりゐたり』㊀みこと。おほみこと。天皇のおほせ。勅諚。詔勅。勅旨。詔旨。詔命。風土記「勅、ミコトノリシタマハク」㊁**ちよくご**(勅語)㊁に同じ。

勅の書(フミ)【句】**ちよくしよ**(勅書)㊀に同じ。記「勅書、ミコトノリノフミ」

みことーもち 宰司【名】『天皇の御言を承け持ちて、政を行ふ義』古、勅を承けて、任國に下り、その政務を掌りし官人。記「國司、クニノミコトモチ」同「新羅幸、シラギノミコトモチ」同「任那日本府、ミマナノミコトモチ」

みことり 巫鳥【名】〔動〕『和名抄に「鵜、音巫、漢語抄云、巫鳥、之止止」とあるが如く、鵜の字を分解して「訓讀せしなるべしといふ』**しさ**(鵜)に同じかるべしといふ。「古語」枕「鳥は、……水鵜(ウ)、鵜(サギ)、みこ鳥・ひわ・ひたき」

みごなし 身熟【名】㊀身體を、自由に動かすこと。ふるまひ。㊁**うんざう**(運動)㊀に同じ。津國女夫池「徒歩(カチ)、おひろひもお身ごなし」「下(クダ)ぐ」に同じ。

みこ-なす 見こなす【動四他】**みさぐ**(見さぐ)に同じ。

みこ-の-すず 神子鈴【名】〔植〕**すずふりばな**(鈴振花)を云ふ。〔備前國の方言〕

みこ-の-まひ 神子舞【名】〔動〕**かたつぶり**(蝸牛)を云ふ。〔美作國の方言〕

みこのみや-の-うまのつかさ 主馬署【名】**しゅめしよ**(主馬署)に同じ。和名「主馬署、美古乃美夜乃半馬乃豆加佐」

みこのみや-の-かしはでのつかさ 主膳監【名】**しゅぜんげん**(主膳監)に同じ。和名「主膳監、美古乃美夜乃加之波天乃豆加佐」

みこのみや-の-くらのつかさ 主藏監【名】**しゅぞうげん**(主藏監)に同じ。

みこのみや-の-たくみのつかさ 主工署【名】**しゅこうしよ**(主工署)に同じ。

みこのみや-の-つかさ 春宮坊【名】**とうぐうばう**(東宮坊)㊀に同じ。

みこのみや-の-つかさ 東宮職【名】**とうぐうしき**(東宮職)㊀に同じ。拾芥抄「東宮(トウグウ)職」

みこのみや-の-つはもののつかさ 主兵署【名】**しゅへいしよ**(主兵署)に同じ。

みこのみや-の-とねりのつかさ 舍人監【名】**しゃじんげん**(舍人監)に同じ。

みこのみや-の-とのもりのつかさ 主殿署【名】**しゅでんしよ**(主殿署)に同じ。和名「主殿署、美古乃美夜乃止乃毛里乃豆加佐」

みこのみや-の-ふんのつかさ 主書署【名】**しゅしよしよ**(主書署)に同じ。

みごばうき 稈心帚【名】稈心(ズイ)を材料として作りたる帚。つつおばうき。

みこ-ばな【名】天皇の御子孫。皇統。「古語」記「帝皇之裔、ミコバナ」同「跌蕚、ミコバナ」

みこ-ばら 御子腹【名】皇女の生みたまへる子。源氏「我も同じ大臣(オトド)と聞ゆる中にも、御おぼえ異なるが御子腹にて」

みごひ 白魚【名】〔動〕**にごひ**(白魚)の轉訛。

みこひだり 御子左【名】㊀〔人〕『百練抄に「貞元二年四月廿一日、以二左大臣源兼明一爲二親王一、彼二一品一任二中務卿一號二御子左一」とあり』**かねあきらしんわう**(兼明親王)の異稱。㊁姓氏の一。本姓は藤原。道長の第六子長家より出で、長家、次條の御子左殿を傳領せしに本づく。長家の曾孫俊成及びその子定家、和歌を善くして、世に二條家といひ、その一門、京極、冷泉(イヅ)と入江の諸家に分る。

みこひだり-どの 御子左殿【名】京都三條坊門の南、大宮の東にありし兼明(カネアキラ)親王の邸。前條參照。榮花「御子左殿と、大宮なる所を、いとおもしろく造りてぞものせさせたまひける」

みこ-まち 神子區・御子町・巫女町【名】㊀神子の家の多くある町。榮花「巫女町によき衣(ス)ますすめ卯月から」㊁〔地〕大阪天王寺の北、綿屋町に隣接せる町。昔は神子多く住みて、口寄(ヨセ)・祈禱などを渡世としたり。若鳳俗「天王寺の彼岸に詣でける。……神子町に行きて、深井作之助が亡き跡を、梅の木のさんに口寄さすも可笑しく悲しく」

みこみ 見込【名】㊀つくづくと見たる樣子。五人女「皮薄に色白く、……身ぶりよく、笹笠に、とら打ちて、千筋(スヂ)ごよりの緒を附け、見込のやさしさ」㊁見て、成行(ナリユ)きを思ひ定むること。將來を見定むること。みあて。豫想。㊂必ずすぐれたる所あるべしと、當(テ)にすること。望を屬すること。のぞみ。伊賀越道中

雙六まあ、第一、放しにくいと言はしやった故、見込に思うた佛壇が、こりや、百が物はかない」「が附く。

見込が立つ【句】見込定まる。見込見込が附く【句】前條に同じ。

みこみ-ぎやく 見込客【名】將來顧客たるべしと思はるる人。

みこみ-しん 神子神子し。御子御子し【形二】加持祈禱占などを好む所、いかにしても神子の如し。

みこみ-ちがひ 見込違【名】見込の外(ソト)るること。みあてちがひ。みこみはづれ。

みこみ-はづれ 見込外【名】前條に同じ。

みこむ 見込む【動四他】一下二段活用のみいる(見入る)に同じ。若鳳奪古歌を吟じておはしけるに、眼(マナコ)をするて見込めば」二見て、成行(ナリユキ)を思ひ定む。考へ定む。三將來必ず將來を見定む。善かるべしと思ふ。有望なりと思ふ。齋の門松「吾妻を見込んで賴むとは、いとしらしい祖母(ソボ)さん」四四段活用のみいる(見入る)に同じ。魅(ト)す。澀世風呂「お前、捨てて行きや、何所までも追はへて往ぬる。わしに見込まれたが因果ぢや」

みこん 未婚【名】未だ結婚せぬこと。(既婚に對して)

みこんしや 未婚者【名】未婚の男子、又は女子。(既婚者に對して)

みごも 水孤【名】水の中に生ふる菰。千載「時しもあれ美豆(ミヅ)の水孤を刈上げて干さでくたしつさみだれの空」

みこもさーしま 神子元島【名】〔地〕伊豆國に屬する島。下田(シモダ)港の西南二里二十五町、石廊(イロウ)崎の東東南二里十一町にある大岩礁にして、島頂に燈臺あり。

みごもり 身籠【名】身ごもりてあること。みもち。懷姙。姙娠。

みーごもり 水籠【名】一みごもること。水の中に入り隱るること。みがくれ。捨玉「みごもりにつのぐむ葦をはむ駒の影さかさまになれるこの世か」二口には出さず、人知れず思ふことに譬へていふ。萬葉「眞弧刈る大野が原の水隱(ミゴモリ)に繁ひ來(コ)し妹が紐解く我は」拾遺「奥山の岩垣沼のみごもりに繁ひやわたらん逢ふ山を無み」

みーごもり 已籠【名】毎月一日・二日・三日の中に、己の日あること。俗に、火の祟ありとて忌む。

みごもりーぐさ 水籠草【名】みごもりてある草。水の中に生ひて、隱れてある草。萬葉「天の川水陰草(ミカゲグサ)の秋風に靡かふ見れば時來たるらし」

みごもりーぬま 水籠沼【名】生ひ茂れる草などのために、水面の見えぬ沼。相撲集「いかにせんみごもり沼の下にのみ忍びあまりて言はまほしきを」

みこもりーのーかみ 水分神【名】みくまりのかみ(水分神)を見よ。枕「みこもりの神、いとをかし」

みこもりーやま 水分山【名】〔地〕みくまりやま(水分山)を見よ。

みーごもる 身籠る【動四自】一身重(オモ)になる。孕む。懷姙す。姙娠す。二身を潛めて、こもり隱る。俳諧新選「蛾眉「木がらしや身ごもる犬の眼に涙」

みーごもる 水籠る【他四自】水の中に入りて、見えず。みがくる。空蟬「いつ見てもつひにとまらぬ水の泡をみごもりてこそあるべかりけれ」

みこーやどり 御子宿・太子宿【名】古、禁中の日華門の東、宣陽殿の背後にありし建物。東宮の御休息所に充てられし所といふ。江次第「御子宿四面砌外、南面去三丈許、自餘三方去二丈許、廻二引斑幔一」

みこよせ 神子寄・御子寄・巫女寄【名】【名】くちよせ(口寄)に同じ。

みーこらし 見懲【名】見懲るやうに仕向くること。甲陽軍鑑「早早搦め取り、かみの城月(ツキ)にて、見こらしのため、彦介をいりころしあるべく候」

みーこらす 見懲す【動下二他】『こる(懲す)の他動詞は、四段活用のこらす(懲す)の他動詞は、四段活用なれば、この語も、正しくは、四段活用なるべし』見懲るるやうに仕向く。見せしめとす。太平記「今、降人になりて出でたらん者をば、人に見こらせじとて、討つ事あるべからずと存ずるなり」

みーごり 見懲【名】見懲ること。太平記「合戰の事始なれば、軍神(イクサ)に祭りて、人に見ごりさせよとて、六條河原に引出し、一人も殘さず、首を刎ねて懸けられけり」

みーこる 見懲る【動上二自】災害に遭ふを見て、懲る。落窪「いといみじげに蹈伏せて、事に掛けて引きやるに、男ども、見懲りて、怖ぢわなきて、元事に附かず」

みーごろ 身頃・衿【名】『頃は距離・廣さの義』衣服の、胴體より足にかけての前面と背面とを被ふ部分。前面も、背面も、共に二幅(ノ)にて作る。「どき。

みーごろ 見頃【名】見るに最もよき頃。みごろし 見殺【名】人の死なんとするを見ながら、救ふことを得ぬこと。本朝十種香「見す見す夫を見殺にするは、いかなる身の因果」

みさ 【名】次條を見よ。

みさ みさの枝【句】上の方にある枝なりといふ。〔古語〕散木「雪重みしだれるみさの枝なればさはる小笠にしづれ落つなり」

みさ 彌撒【名】〔基〕一みさまつり(彌撒祭)に同じ。二〔音〕基督舊教の教會にて、聖晩餐の儀式の間に唱ふる歌曲。

みーさい 未濟【名】一貢物などを納むることの、未だ濟まぬこと。未納。未進。東鑑「被レ優免去年以往未濟物一」二未だ返濟せぬこと。

みーさい 微細【名】びさい(微細)に同じ。

みさいぎやうてん 微細行天【名】〔佛〕三十三天の一。「を見よ。

みさいゑ 御齋會【名】ごさいゑ(御齋會)に同じ。

みーさう 御莊・御庄【名】さう(莊)の敬稱。〔古語〕源氏「領じたまふ・みさう・みまきより始めて、さるべき所所の券など」續世繼「美濃國とかや、御庄の券奉らせたまへりけれ」

みーさうし 御障子【名】さうじ(障子)の敬稱。枕「清涼殿の丑寅の隅の、北の隔なるみさうじには、荒海のかた、生きたる物どものおそろしげなる手長・足長をぞ書かれたる」

みーさうし 御精進【名】さうじ(精進)の敬稱。〔古語〕源氏「かくうき世に、罪をだに失はんとおぼせば、やがて御精進にて、あけくれ行ひておはす」

みーざうし 御曹司【名】ざうし(曹司)一の敬稱。伊勢「ある人の御曹司の前の講に」

みーさか 眞坂・眞阪【名】『み(眞)は接頭語』さか(坂)の美稱。〔古語〕萬葉「足柄のみさかかしこみ曇夜の吾(ア)が下延(シタバ)を言出(コ)でつるかも」

みさか-さんみやく 御坂山脈【名】〔地〕次條を見よ。

みさかーたうげ 御坂峠【名】〔地〕甲斐國東八代(ヤツシロ)・南都留(ミナミツル)の兩郡の交界にある、急峻なる山道。駿河東街道に當り、海拔五〇三三尺、登降約三里、頂上よりは、富士山の、正南に峙ち、影を河口湖に浮ぶるを見、富士見三景の一に數へらる。東北は笹子(ササゴ)峠に、西南は黒嶽節刀ヶ嶽・鍵懸峠等に連なり、御坂山脈を形成す。

みさかーぢ 御坂路【名】〔地〕前條に同じ。

みさかひ 見境【名】みわけ(見分)に同じ。

みさかふ 見境ふ【動下二他】見境を違へず。見分く。甲陽軍鑑「あわてもの候うて、敵味方を見さかへず、切りつ突きつするものなれば」

みーさかり 眞盛方【名】まさかり(眞盛)に同じ。紀「方、ミサカリ」

みーさき 御先【名】さき(先)四の敬稱。源氏「十七日の月さし出でて、河原のほど、御先の火もほのかにて、いと忍びて出でたまふ」榮花「御先參りのしる」御先を追ふ【句】「先(サキ)を追ふ」の敬稱。

御先を拂ひ追ふ【句】前條に同じ。紀「駈二仙蹕一、ミサキハラヒオヒテ」

御先を拂ふ【句】「先を拂ふ」の敬語。謡曲「梅」「天皇(スメラギ)の大儀(タイホウ)の御場(ハラ)にも、主殿(トノモ)の舎人(トネリ)等が、梅のずはえを捧げつつ、紫の蓋(キヌガサ)の頭に仕んまつれるは、御先を拂ふ由にして、やがて神代の傳なり」

みさき 岬【名】陸地の、海中に突出せる尖端。さき。はな。紀「島曲(謂二海中島曲崎岸一也、俗云二美佐祁一)」

みさき 三崎【名】〔地〕相摸國三浦郡にある町。三浦半島の南端。城(ジョウ)ゲ島、その前面に横たはる。東京灣口に近く、相摸洋に於ける要港。東京帝國大學の臨海實驗所あり。

みさき-おひ 御先追【名】さきおひ(先追)の敬稱。紀「警蹕、ミサキオヒ」

みさき-かぐま 【名】〔植〕ほそばのいたちだ(細葉鼬鼠羊齒)に同じ。

みさき-がらす 御前烏【名】市子(イチコ)の口寄(クチヨセ)の時、死者の側に居て、それに手向くる物を奪ひ食ふといふ烏。浮世床「溝に流れる米粒を拾ってゐれどな、みさき烏が、皆食って、おれが口へは這入らぬはいなう」

みさき-ばらひ 御先拂【名】さきばらひ(先拂)の敬稱。卯月の潤色「御先ばらひの道清め」

みさき-ぶぎやう 三崎奉行【名】徳川幕府の職制の一。相摸國三崎に駐在せし遠國奉行。元祿九年に廢止せり。

みさき-み 岬回【名】次條を見よ。

みさき-わ 岬回【名】岬のほとり。〔古語〕萬葉「三崎廻の荒磯(アリソ)に綠(ミドリ)する五百浪(イホナミ)立ちても居てもわが心(モ)へる君」〔三崎廻は、「みさきみ」と訓ずべしともいふ〕

みさく 見放く【動下二他】遠く見遣る。萬葉「うま酒三輪の山……しばしばも見さけむ山を心なく雲の隱さふべしや」

みさぐ 見下ぐ【動下二他】下目(シタメ)に見る。侮り見る。見おとす。見おろす。見たふす。蔑視す。輕視す。輕蔑す。(見上ぐ[二]に對して)

みさぐ 見探る【動四他】手にて探りて見る。

みさぐ 御先供【名】さきぐ(先供)の敬稱。

みさぐ 御先具【名】さきぐ(先具)の敬稱。

みさぐ 御先供【名】さきぐ(先供

「紅梅もよけれども、なほ、見ざめこよなし」

みさやま 御射山 【名】〔地〕信濃國諏訪(スハ)郡富士見村の字。甲州街道に當る。往時、諏訪神社にて、毎年七月、狩を行ひ、神主等、その狩屋を作るに、薄を葺きしより、穂屋の神事の稱あり。玉葉「尾花葺く穂屋のめぐりの一むらにしばし里ある秋のみさ山」 「條を見よ。

みさやまーしんじや 御射山神社 【名】次

みさやまーまつり 御射山祭 【名】信濃國の官幣大社諏訪神社の神事。同神社上社の東方、八ケ嶽(ヤツガタケ)の麓なる穂屋野にあるその攝社御射山神社に、八月二十四日、假屋(穂屋)を作り、二十六日に、神職、各、騎馬にて、登山、假屋に宿泊し、二十七日尾花の幣帛を奉り、翌日に亙りて神事を行ふ。祭神建御名方(タケミナカタ)命、今の諏訪郡富士見村の原野にて、薄の穂にて假屋を作り、宿泊して、遊獵したまひしに起るといふ。穂屋(ホ)祭又は穂屋の神事ともいふ。

みーざろん 實品字梅・重葉梅 【名】〔植〕品字梅(ウメ)の一品種。一花に數箇の實の結ぶもの。すずなり。

みさを 水棹 【名】淺き川又は港にては、船を進むるに用ひ、常には、舌を掛くるに用ふる棹。新六「堀江漕ぐ小舟のみさを水馴れつつみなぎは去らぬ都鳥かな」

みーさを 眞青 【名】『み(眞)』は接頭語』まさを(青青)に同じ。千載「あはれにもみさをに燃ゆる螢かな聲立てつべきこの夜と思ふに」

みーさを 操 【名】名利などの慾望に惑はされず、固く正しき道を守ること。節操。節義。貞操。落葉「身貧しけれど、よき人は、格(カク)ことに、操にをかしうぞある」三日太平記「女の操、奥床し」

操を立つ 【句】『晉書の鄭沖傳に「卓爾立ノ操」とあり』操を破らぬやうにす。操を作る 【句】苦しき事に遭ひても、心を變へず。我慢す。源氏「見知らぬ樣に忍びて、上には、つれなくみさを作りて一方丈「さのやは操も作りあへん」操を破る 【句】女子など、夫又は相契れる男に背きて、他の男に心を許す。

みし 【貌】ひし(堅)【一】に同じ。著聞「立ちながら、衣(キヌ)ごしに、みしと抱きて」

みーしうし 未收支 【名】未だ收入も支出もせぬこと。

みしうしけっさん 未收支決算 【名】簿記にて、財産の增減せる現狀によりて、營業の損益を打算する決算方法。(既收支決算に對して) 「こと。

みーしうにふ 未收入 【名】未だ收入せぬこと。

みしうにふーかんぢやう 未收入勘定 【名】簿記の勘定科目の一。後日確かに收入する筈なれども、未だ收入してはあらぬものを整理するもの。

みしうにふーりそく 未收入利息 【名】簿記にて、未決算勘定の一。當季内に收入する筈なれども、未だ收入してはあらぬ利息を、一時整理するもの。

みじか 短 【接頭】みじかき意。「短夜」

みーしかう 未施行 【名】昔、官より或漢籍の講說を許可せざりしこと。例へば、孟子など。風雲月作鎌「吾朝用二漢土書一、必有二朝廷施行之命一、如二孟子一則未施行之書也」

みじかーうた 短歌 【名】三十一音より成る和歌。即ち和歌の最も普通なるもの。みそひともじ。短歌(カタウタ)。(長歌に對して)

みじかーがたな 短刀 【名】たんたう(短刀)に同じ。北條五代記「みじか刀の柄(カラ)」

みじかきーこたつ 短木小立 【名】ゆりたつ(搖立)に同じ。

みじかし 短し 【形一】【一】長さ少し。(長しに對して) 【二】高さ少し。ひきし。親詞「大畝「高き山の末、短き山の末」枕「みじかき燈臺」 【三】時を經ること少し。長く續かず。久しからず。 【四】心短し。氣短なり。短氣(キ)なり。短慮なり。本朝櫻陰比事「慾心より銀子(ギン)借したる人に無理を申し懸けしに、相手も短き者にて、一つ二つ言分(イヒブン)の上に切伏せ」 【五】すぐれてあらず。淺はかなり。つたなし。いやし。源氏「身は沈み、位みじかくて」方丈「折折のたがひ目に、おのづから短き運を悟りぬ」

みじかーて 短手 【名】音を低く打つ拍手(カシワデ)。延喜式「拍二短手一再拜」

みじかーてん 短點 【名】歌に打つ黒の、丈短きもの。(長點に對して) 東鑑「申下供奉人御點……左長點隨兵、短點帶レ劍」

みじかむ 短む 【動下二他】短くなす。

みじかーめ 短目 【名】短しと思はるる程あひ。

みじかーものがたり 短物語 【名】長く續かぬ物語。短時間の話。(長物語に對して) 若風俗「夏の夜の短物語といふ草紙に」

みじかーやか 短やか 【貌】短きさま。(長やかに對して) 榮花「御格子を、みじかやかにし渡して」

みじかーゆ 短湯 【名】短時間の入浴。(長湯に對して) 浮世風呂「長湯も、短湯も」

みじかーゆふ 短木綿 【名】たけの短き木綿(ユフ)。萬葉「神山の山邊眞蘇木綿(マソユフ)短木綿斯くのみからに長くと思ひき」

みじかーよ 短夜 【名】暮れてより明くるまでの時間の短き夜、即ち夏の夜。平家「ほととぎす來鳴くさつきの短夜もひとりし寢(ネ)ねば明しかねつも」

みじかーらか 短らか 【形】みぢかやか(短やかに)に同じ。枕「素絹の衣の短らかなるに、白き大口踏みくくみ」

みーじくる 身動る 【動四自】みじろく(身動くに)同じ。枕「すずろなる事腹だちて、同じ所にも寢ず身じくり出づるを」

みーじたく 身支度 【名】みごしらへ(身拵)に同じ。

みーしね み稻 【名】『みは接頭語』いね(稻)の美稱。〔古語〕神樂(篠波)「さざ波や志賀の辛崎やみしね搗く女(ラ)のよさよさ」

みしは 【名】〔植〕すげ(菅)の異稱。〔古語〕秘藏抄「かくま江の沼のみしはを蹈みわけて鳴く鶴(タヅ)の聲はあかぬ君かな。みしはとは、笠縫ふ管をいふなり」

みしはせ 肅愼 【名】〔地〕『肅愼は、支那周代に、東北民族を呼びし名稱なりしを、單に方角の上より、樺太の住民にもこの文字を充てしなるべしといふ。一に、アシハセとも訓じ、古來、ミシハセの方を正しとしたれど、白鳥庫吉博士の說に依れば、ツングウス語にて、樺太をAgali-bouen又Adali-bouen(大島又は大洲の義)といへるもの、アシハセの原音なるべければ、ミシハセの方、却りて誤にて、上古、片假名のアはミと混じ易かりしより、兩訓を生ぜしなりといふ』上古、我國にて、今の樺太島を指して呼びし語。

みーしぶ 水澁・水渋 【名】みさび(水銹)に同じ。新古今「みしぶつき植ゑし山田に引板(ヒタ)延(ハ)へて又袖ぬらす秋は來にけり」

みーしほ 御鹽・御塩 【名】ししびしほ(肉醬)の敬稱。萬葉「さ男鹿の來立ち嘆かく、…わが肉(シ)はみ膾(アヘ)はやし、わがみぎは御鹽のはやし」

みーしほ 御修法 【名】〔佛〕みしゆほふ(御修法)の訛。太平記「子を抱いて御階(ミハシ)を上る御修法かな」

みしま 三島・三嶋 【名】【一】〔地〕攝津國七郡の一。郡役所を茨木(イバラキ)町に置く。【二】〔地〕伊豆國田方(タガタ)郡にある町。國中第一の繁華の地にして、舊東海道五十三驛の一。古稱、賀茂(三島神社を移してより、三島と改む)といふ。【三】〔地〕伊豫國宇摩郡にある町。海濱に沿ひ、讃岐街道の一驛たり。三島神社あり。 【四】みしまごよみ(三島神社)の略。

みしまえ 三島江 【名】〔地〕淀川の一部、攝津國三島郡三箇牧(サンガマキ)村の邊。古來、歌に、眞菰・蘆などの名所として詠まれ、今も、同村の大字に、三島江の名を留め、德川時代、淀川上下の三十石舟の盛んなりし頃は、船客に飲食物を商ふ者多く、晝夜賑ひたり。新古今「三島江や霜もまだひぬ蘆の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く」

みしまごよみ 三島曆 【名】昔、伊豆國三島にて頒行せし、假名の細字にて記したる曆。

る曆。起原は詳かならねど、鎌倉時代には、既に製作せられたり。もとは、その地の曆博士の推歩に依りたれども、貞享以後は、德川幕府より頒行曆の寫本の下付を受けて、三島明神の川合氏の手にて調製の上開版・頒行し、相摸・伊豆の二國に限りて、頒布を許されたり。空華日工集「三島曆、以二是日一爲二上巳節一、故作レ詩記」

三島曆の樣【句】こまごまとしたる物事の譬。

「（三島手）に同じ。

みしまごよみ-て 三島曆手【名】**みしまさいこ** 三島柴胡・北柴胡【名】「植」繖形科に屬する多年生の草。高さ三尺餘に達し、葉は互生し、披針形にして尖り、又は鎌狀をなせるもあり。黃色の小花、複繖形花序をなして開く。我國、原野に自生す。にらばさいこ。はまあかな。

みしまじんじや 三島神社【名】㊀伊豆國田方郡三島町にある官幣大社。大山祇（オホヤマツミ）神（明治維新の際、平田篤胤の古史傳の說によりて、事代主（コトシロヌシ）神に變更したれど、なほ舊說に依るべしといふ）昔は、當國の一ノ宮にして、殊に、武家時代には、伊豆・箱根の兩權現と相並びて、武門の崇敬厚かりき。もと伊豫國の三島より勸請す。創始は、仁德天皇の御代にありといふ。㊁おほみしまじんじや（大三島神社）を見よ。

みしましんたう 三島神道【名】昔、伊豆國三島神社にて唱道せし神道。唯一・兩部の何れに屬せしかは、詳かならず。

みしますがさ 三島菅笠【名】昔、攝津國三島にて造りし菅笠。萬葉「三島菅いまだ苗なり時待たば著ずやなりなむ三島菅笠」

みしますげ 三島菅【名】伊豆國三島の地に生ひたる菅。萬葉「三島菅いまだ苗なり時待たば著ずやなりなむ三島菅笠」

みしますすり 三島摺【名】次條を見よ。

みしまごよみ（三島曆）に同じ。菅笠日記「三島摺曆事」

みしまだら 三島鱈【句】〔動〕いたちうを（鼬鼠魚）に同じ。

みしまちゆうしう 三島中州【名】〔人〕漢學者。備中高梁藩士。名は毅、明治の初年職を司法省に奉じ、後退きて、二松學舍を開き、專ら漢學を教授す。晚年東宮侍講に徵さる。大正八年卒す。年九十。中洲文集の著あり。

みしまて 三島手【名】『三島曆の文字の細かきに譬へていふ』細かき紋ある高麗燒の陶器。こよみで。

みしまぬ 三島野【名】〔地〕次條の古稱。萬葉「矢形尾の鷹を手に据ゑみしま野に狩らぬ日まねく月ぞ經にける」

みしまの 三島野【名】〔地〕越中國射水（イミヅ）郡にある古蹟。二口（フタクチ）・堀岡（ホリカ）二村の間に位し、上古の放鷹の地にして、今も田野平遠なり。萬葉「みしま野や蒼るれば結ぶやかた尾の鷹は眞白に雪は降りつつ」

みしまのあねぬ-のみささぎ 三島野陵【名】繼體天皇の御陵。攝津國三島郡大字太田字奧山に在り。

みしまひ 身仕舞【名】身形（ミナリ）を裝ひ繕ふこと。化粧。箱根靈驗記「仇討あまりの嬉しさに、身仕舞もそこそこ」

みしまひ-ぶろ 身仕舞風呂【名】身仕舞をするための入浴。傾城反魂香「よね樣たちの身仕舞風呂の、手洗水の、髮洗の、鍋よ、杓子よ、臼よ、杵よ、正月しまへば、節句・朔日（ツイタチ）」

みしまひ-べや 身仕舞部屋【名】身仕舞をする部屋。化粧室。萬葉千載「身仕舞部屋に浮女（ウカレメ）の群りゐる書に」

みしまみやうじん 三島明神【名】**みしまじんじや**（三島神社）の舊稱。

みしまゆふ 三島木綿【名】古、伊豆國の三島より產せる木綿（ユフ）。神樂「韓神「みしまゆふ肩に取掛けわれから神のからをぎせんや」

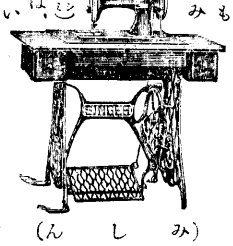
みしまり 身締【名】㊀身のまはりの始末をすること。みじたく。㊁身持の引き締りてあること。品行のよきこと。

みしまをこぜ 三島　【名】〔動〕硬鱗類に屬する魚。全體筒形をなし、頭、甚だ大きく、骨板を以て掩はれ、頭部と背面とは、褐色をなし、不整の斑點あり。春鱘は一箇にて、圓形又は卵圓形の大なる白點あり。我國及び支那の近海に產す。おきのじよう。めがねうを。むしまをこぜ。

みし-みし【貌】**ひしひし**（莽莽）に同じ。大隅「馬・車に乘りつつ、みしみしとありきければ」夫木「夏刈の葦の古葉のまたばえにみしみし溜る冬の白雪」

みし-ん 末進【名】年貢などの未納。未濟（ミサイ）。類聚三代格「調庸並官物未進」丹波與作「四年この方、二石二斗の御未進にて、水牢に入れられたを」

みしん 彌鍼（英 Sewing machine の略轉）【名】裁縫用の器械。車輪を、手にて廻轉して使用するも、足にて踏み動かすものとの二種あり。前者を手ミシン、後者を足踏（フミ）ミシン、又は、蹈（フ）ミシンといひ、普通、單にミシンといへば、後者をいふ。



（ん　し　み）

みし-んけい 味神經【名】〔醫〕**みかくしんけい** **みしん-ばり** 彌鍼針【名】ミシンに使用する針。縫針とは異なり。

みしん-まい 未進米【名】未納の年貢米。丹波與作「親の未進米、この六日の吉書に立てねば、もとの水牢」

みじん-まく 身愼莫【名】㊀『しんまく（愼莫）を見よ』身のまはりを引き締めとのふること。浮世風呂「飯を焚いて、菜物を縫って、內外（ウチソト）の者の身じんまくをして、物に廢（スタ）の出ねえやうにすれやあ、女房の役は澤山だはな」㊁金錢などを、隱し貯ふること。

みし-しめ 御標・御注連【名】しめ（標）㊁の敬稱。夫木「頼もしな御たらし川をせきかけてみしめ延（ハ）へたるみたしろの稻」新拾遺「年經ぬるわが神山の榊葉に幾重みしめを引き重ねけん」

みしめなは 御標繩・御注連繩【名】しめなは（標繩）の敬稱。

みし-しやう 未詳【名】未だ詳かならぬこと。

みし-しやう 實生【名】**みばえ**（實生）に同じ。根陶志具佐「この人、先（サキ）菊之丞が實生にはあらがねの土の中より掘出したる分根（ネ）なるが」

みし-じやう 身性【名】一身上の事。性質。

みしやう-いぜん 未生以前【名】〔佛〕㊀生れぬさき。前生（ゼンジヤウ）。前世（ゼン）。過去世（ゴウゼ）。㊁遠き過去。疾くの昔。丹波與作「松坂の七二は、何として見えぬぞ。……むむ、その七二とは、九郎助のことか。それは、未生以前で、今は挨拶きりぎりす」

みし-しやうけ 未生家【名】次條に同じ。

みし-しやうりう 未生流【名】生花（イケバナ）の流派の一。嘉永の頃、大阪の人上田未生齋廣市を祖とす。

みしやぐ【動下二他】前條に同じ。

みしやこ【名】魚の鰭の一部。

みしやしやき【名】〔植〕**ひさかき**（柃）に同じ。

みし-しやれかったね【句】み（身）の條下を見よ。

みし-じゆく 未熟【名】㊀果實の、未だ熟達せぬこと。ふじゆくれん。㊁學藝などの、未だ熟達せぬこと。ふじゆくれん。

みじゆく-もの 未熟者【名】學藝などの未熟なる者。

みし-じゆほふ 御修法【名】〔佛〕**みずほふ**（御修法）に同じ。

様子。そしらぬ顔。 枕「あなかまかまと招きかくれど、君見知らず顔にて」

みーしり 見知【名】■見知ること。嘗て見たるために、知りてあること。 生玉心中「あれ、誰やら、見知のある柏屋の提灯」 ■交りて、相知れる人。面識ある人。しりあひ。 **みぞしらず**(不見不知)参照。

みしり【貌】みしに同じ。

みしりーあひ 見知合【名】見知りあふこと、又その人。相識。

みしりーあふ 見知合ふ【動四他】見て知りあふ。互に見知る。 曠野「荷兮」「見知りあふ人のやどりの時雨かな」

みしりーおき 見知置【名】後日のために、相手の顔を見覚えておくこと。(主として、見知らるる事を希望する人よりいひ、従ひて、接頭語お(御)を添へて用ふ)

みしりーがほ 見知顔【名】或物事を見知りてあるが如き顔つき又は様子。 源氏「空の景色さへ見知りがほなるに」 葉村「川狩や樓上の人の見知顔」

みしりーごし 見知越【名】以前より見知りてあること。一代男「戀も、遠慮も、むしやうやみに見しりごしなる悪口、……一町に九所の喧嘩」

みしりーなき 見知泣【名】小兒が、人見知(ミシリ)をして泣くこと。 夫木「世の中はいわけなき子の面(オモ)ざらひ見知なきには音(ネ)こそ泣かるれ」

みーしる 見知る【動四他】■見て知る。嘗て見たる事あるために知る。見おぼゆ。 伊勢「京には見えぬ鳥なれば、皆人、見知らまち、ひっしやりと見知らせ」

みしるし 御璽【名】しるし(印)■の敬稱。ぎよじ。 紀「天皇之璽玉、……ミシルシ」

みしろ 實白【名】實の色の白きこと。 和名「糠、美之倍乃以」 稱、青稲白米也」

みしろぎ 身じろぎ【名】身じろぐこと。みうごき。 蓬莱「六人まで乗りたりければ、いと狭(セバ)くて、身じろぎもせず」

みしろぐ 身じろぐ【動四自】自らその身を動かす。身動(ミジロ)ず。 源氏「几帳のすきまに、晴けれど、うち身じろぎ寄るけはひ、いとしるし」 葵花「泣く泣く壽量品を讀ませたまふに、大將殿うち身じろぎたまひて、うちあざ笑はせたまふ」

みす 御簾・翠簾【名】■す(簾)の敬稱。 枕「みすの、いと青くをかしげなるに」 葵花「おはします所の翠簾(ミス)の帽額(モカケ)も破(ヤ)れたれば」 ■神宮・宮殿などに垂れてある簾。細く削りたる竹にて編み、綾・緞子(ドンス)などの縁を附けたるを用ふ。 ■寄席(セキ)にて、義太夫節の太夫の出演の前、高座の前面に垂れおき、出演と同時に、捲き上げ、演じ終れば、また垂るること、幕と同様に用ふる簾。縁を取り附けたるを用ふ。前項のに似たれど、竹も太く、縁も幅廣し。 ■みすがみ(御簾紙)の略。 見た京物語「女郎、鼻紙にみすを用ひず、皆、のべなり」

御簾の役【名】御簾を捲き上ぐる役。 增鏡「兩院・內の上の御簾の役、關白さぶ

風(カゼ)の下などを、養張にせる處といふ。 古語

みす 三栖【名】「地」山城國紀伊郡にありし村。伏見町の西。村民は禁裏の轝輿を舁く賦役を奉仕し、平生は京都より針金を買ひ來りて、針に造り、更に京都三條通なる福井勝秀方に送り、村名をそのままに三栖針(ミスバリ)と呼びて賣り弘め、京都名物の一となれり。針屋に「みす屋」を屋號とするもの尠からぬも、これに本づく。

みす 見す【動四他】みる(見る)の敬語。見たまふ。 古語 紀「みもろが上にのぼり立ち吾(ア)が堤せば」 萬葉「埴安(ハニヤス)の堤の上に在り立たし見したまへば」

みす 見す【名】【動下二他】見るやうに仕向く。見しむ。示す。

みす 見す見す【句】「見る見る」に同じ。 蕉「白妙の衣に似たる梅の花月に見す見すも衰ふるかな」

みす 魅す【名】【動佐變他】不思議なる力にて、相手を迷はす。

みすあみ 御簾編・翠簾編【名】御簾を編むことを職業とする人。 書記「御簾編等令(ノ)召、遣二成長許一畢、今日內令二編出一料也」

みすーいり 御簾入・翠簾入【名】昔、內親

みせーかまへ 見世構・店構【名】見世の構へ方。商店としての構造。 みせごしらへ。

みせつき

みせーぎぬ 見衣【名】輿又は座敷などに掛けて、人に見する衣裳。 今川大雑紙「御輿又は座敷などに見せぎぬを掛くる事、きる物の表の方を簾へ附くべし。袖の裏を表へ出すべし。又、褄を出すべきなり」

みせーきん 見金【名】みせがね(見金)に同じ。

みせーぐら 見世藏・店藏【名】藏の前面を見世として、商品を並べたる家。土藏づくりの商店。

みーすかし 見透【名】見すかすこと。

みすかしーがほ 見透顔【名】見すかしたるが如き顔つき。 和泉式部集「あらはにも見ゆるものかな玉垂の見すかしがほは誰も斯くなる」

みすかす 見透す【動四他】■すかして見る。見とほす。洞見す。 咎められ「顔は日に向はせて、陰より見すかし」 ■將來又は裏面の物事をさとり知る。見とほす。見ぬく。洞察す。 太平記「敵、さまでの大勢ならずと見すかして」

みすーかみ 御簾紙・三栖紙【名】『簾中にて用ふる紙の義なるべしといふ』昔、大和國吉野に產し、上流の鼻紙に用ひし紙。大・中・小の三種ありたり。みす。 娼妓絹麈「部屋持女郎、左の袖で口を隱し、右の手にみす紙を持ち添へて、褄を取る」

みすがら 身すがら【名】一身のみにて、係累なき生活。 天の網島「我等、女房子なければ、姑なし、親も無し、伯父持たず、身すがらの太兵衛と名を取った男」

みすぎ 身過【名】なりはひ。生計。職業。くちすぎ。 若風俗「義理にも、涙はこぼれず、仕組狂言に泣く事、これを思ふに、身すぎほど悲しきはなし」

みすぎよ 身過と死病に徒(ダ)な事は無い【句】人の世に生きて行く事の苦難なる形容。 諺語「身過は草の種(タネ)、尽きず生ずる」 新永代藏「身過は草の種、盡きる事無し」

みすぼらし 小舎人(コドネリ)所は、酒を飲みののしりて」

みすぼーはん 未遂犯【名】【法】**みすゐざい**(未遂罪)に同じ。(既遂犯に對して)

みすゐざい 未遂犯【名】【法】減輕の一。未遂犯なるを理由として、既遂犯の刑よりも輕くするもの。

みすゐーはんざい 未遂犯罪【名】【法】**みすゐざい**(未遂罪)に同じ。

みーすゑ 見据【名】見すうること。見きはめ。見さだめ。「大かたの見すゑが附く」

みせ 見世・店【名】『**みせだな**(見世棚)の略』商店にて、家の端の、往來の人の目に觸れ

みせいねんしゃーとうきほ 未成年者登記簿【名】【法】商業登記簿の一。未成年者にして、商業を營む者を登記するもの。

みせいーひん 未製品【名】■**そせいひん**(粗製品)■に同じ。 ■將來いかに成り行くべきか明かならぬ人物。 俚語

みせいーひん 未成品【名】未成の品。出來上らぬ品。

みーせう 微笑【名】**びせう**(微笑)に同じ。「拈華(ネンゲ)微笑」參照。 盛衰記「待受けて手を取り組み、微笑して、歌を唱へていはく」

みせーざらし 見世晒・店晒【名】■**たなざらし**(店晒)に同じ。 ■遊女を、張見世(ハリミセ)に置きて、素見客(ヒヤカシ)の見るに任すること。 風來山人六部集「菩提樹の碑「引四(ヒキヨ)すぎまで見世ざらしの新造っ子」

みせーざを 見竿【名】**かけざを**(掛竿)■を云ふ。 上野國の方言

みせーじまひ 店仕舞【名】店を閉ぢて、營み終けたる商賣を止(ヤ)むること。

みせーしめ 令見【名】惡事の結果たる苦痛を見せて、他の者に懲りさすること。見

撥かせて、見勢になしてぞ置きたりける」

みせせり 身撰【名】自らその身を揺り動かすこと。身ぶるひ。狂言「盆山」猿ぢや。猿ならば、身せせりをして鳴かう事ぢやが」

みせ-ぞなへ 見備【名】見勢(ミセゼ)を張ること。虚勢を示す陣立。

みせ-だな 見世棚・店棚【名】『商品を並べて、人に見する棚の義』**みせ**(見世)に同じ。浮訓往来「今見世棚、絹布之類、賛菓子有二賣買之便一様、可レ被二和訓一也」

みせ-ぢょらう 見世女郎・店女郎【名】大阪新町(シンマチ)の遊女中、第三位のもの、即ち太夫・天神に次ぎしもの。京都島原の端(ハシ)女郎と、大抵同格なりしなり。寒塗飛脚「天神・太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた、見世女郎の淺ましさと、世間のとなへ」「設に對して」

みせ-つ 未設【名】未だ設けぬこと。(既)

みせ-つき 見世附・店附【名】『商家の見世の造り方。みせがまへ。若風俗「世間むきの見世つきとて、紙を商賣させて、その年は送りぬ」見世先に坐りて、客を待つ、下等なる遊女。膝栗毛「くぐり戸の内を見れば、店附のおやま並び居たりけるにぞ」

みせ-つく 見附く【動下二他】殊更に人に見す。見せて、羨ましがらす。見せびらかす。

みせ-てんじん 見世天神・店天神【名】大阪新町(シンマチ)の遊女中、見世女郎の上位

みせばやさう みせばや草【名】『植』景天(イヤサウ)科に屬する多年生の草。莖も葉も肉質にして、葉は下垂し、葉は淡綠色を呈し、周邊の白色なるもあり。形、殆ど圓くして、三箇づつ輪生し、莖の頂に、淡紅色の小花叢生す。觀賞用として栽培す。みせばや。

みせびらかす 見せびらかす【動四他】見せて誇る。見せつく。

みせ-びらき 店開・見世開【名】店を設けて、新たに商賣を爲すこと。開店(カイテン)。膝栗毛「此處(ココ)、旅籠屋になりまして、即ち今日に於て、見世開で御座ります」

みせ-ぼん 見本【名】**みほん**(見本)に同じ。

みせ-まはり 見世廻・店廻【名】**めあかし**(目明)を云ふ。「江戸吉原の遊廓の語」

みーせん 味煎【名】あまづら(甘葛)に同じ。字治「湯わかすかと見れば、この水と見ゆるは、みせんなりけり」

みーせん 彌山【名】『地』大和國吉野郡の中央にある山。紀伊山脈に屬し、高さ六一九一尺、近畿第一の高峯たり。「御山」安藝國佐伯(サヘキ)郡嚴島(イツクシマ)の東北部にある、その島最高の山。登路十八町、頂上に大日堂あり。「御山」出雲國簸川(ヒカハ)郡の西部杵築(キヅキ)町の東にある山。高さ一六三五尺。周防國玖珂(クカ)郡の東部、岩國川の北にある山。高さ一五一四尺。

みーぜん 未然【名】未だ然らぬこと。未だその狀態の發生せぬこと。

みぜん-けい 未然形【名】『語』しやうぜんけい

みせもの-こや 見世物小屋・觀物小屋【名】見世物を興行する小屋。

みせもの-し 見世物師・觀物師【名】見世物の興行を職業とする人。續膝栗毛「いやさうも言はれねえ、ひよつと見世物師なら買はうも知れねえ」

みせもの-ば 見世物場・觀物場【名】見世物を設くる場處。

みせ-や 見世屋・店屋【名】見世を設けてある家。商店。「同じ。

みせ-やぐら 見櫓【名】**せいろう**(井樓)に同じ。

みせ-わたし 店渡【名】『商』『英 Ex office』賣買したる商品を、買主の店にて引き渡すこと。みせさきわたし。(甲板渡・停車場渡・現場渡などに對して)

みせ-をんな 見世女・店女【名】商家の見世先に居て、客をあしらふ女。一代女「見せ女に拵へ、侍衆をあしらはせ」

みそ 味噌・未醤・味醤【名】『朝鮮語より出づ』大豆を蒸して、搗き碎きたるものに、麹(麥麹なるも、米麹なるもあり)と食鹽とを和して、大なる桶に入れ、時時攪拌し、徐徐に醱酵せしめて製する、家庭必須の調味用品。赤味噌・白味噌・玉味噌・田舍(カホサ)味噌などの種類あり。又、産地によりて、飛騨味噌・仙臺味噌・備前味噌・三州味噌などと呼ぶ。延喜式「未醤、和名「溝、美奈太利」味噌」膝栗毛「味噌ぢやあねえが、醉色(ヱヒ)は、江戸でも一番といふ男さ」狂歌百人一首「織島立長「山椒の朝くらあたり時鳥きいたを味噌にしたる里人」「に同じ。【諺語】

みそ 味噌【名】『そ(衣)を見よ』**ころも**(衣)の敬稱。おんぞ。みけし。【古語】祝詞式「祈年祭「御服(ミソ)は明妙(アカルタヘ)・照妙(テルタヘ)」膝栗毛「御ぞ・御むつぎ」

みそ-あげぐち 味噌上口【名】誇りて、述ぶる口上。自慢ばなし。傳奇「鬼怒川背暉「美しい花嫁子に、狐が六四、一度に憑き、……持扱ひてゐらるるを、ひと祈てよく致した……と、味噌あげ口をきき散らし」

みそ-あへ 味噌和へ【名】味噌にてあへること。又その食品。

みそ-あん 味噌餡【名】味噌を混ぜてつくりたる餡。

みぞ-いし 溝石【名】溝の岸に据ゑたる石。一代女「立ちながら、逆手(サカテ)に持つ【句】自己の專門の道を殊更に說き立つるは、畢竟、物事を大體より見る識量なきがためなる譬。【諺語】

味噌を擧げる【句】「手前味噌を擧げる」の略。根南志具佐「味噌を上げるとは、自慢といへる、東都の通言なり」

味噌を摺(ス)る【句】**一**味噌を、擂鉢にて擂る。**二**「手味噌(テミソ)を擂る」の略。

味噌を附ける【句】醜態を示す。失敗す。

みそ 溝【名】**一**地を細長く掘りて、水を通はせたる處。どぶ。せせなぎ。溝渠。和名「溝、美奈太」**二**建具(タテグ)・器具などに、四く細長く附けたる處。例へば、戸・障子を立つるために、鴨居・敷居に設け、線を引く時のために、物差に設けたるものの類。**三**へだて。間隙。

みそ 三十【名】**さんじふ**(三十)に同じ。

みぞ 溝【名】**一**地を細長く掘りて、水を通はせたる處。どぶ。せせなぎ。溝渠。和名「溝、美奈太」**二**建具(タテグ)・器具などに、四く細長く附けたる處。例へば、戸・障子を立つるために、鴨居・敷居に設け、線を引く時のために、物差に設けたるものの類。**三**へだて。間隙。

みそ-ぎ 御衣【名】『そ(衣)を見よ』**ころも**(衣)の敬稱。おんぞ。みけし。【古語】祝詞式「祈年祭「御服(ミソ)は明妙(アカルタヘ)・照妙(テルタヘ)」膝栗毛「御ぞ・御むつぎ」

みそ-あげぐち 味噌上口【名】誇りて、述ぶる口上。自慢ばなし。傳奇「鬼怒川背暉「美しい花嫁子に、狐が六四、一度に憑き、……持扱ひてゐらるるを、ひと祈てよく致した……と、味噌あげ口をきき散らし」

みそ-あへ 味噌和へ【名】味噌にてあへること。又その食品。

みそ-あん 味噌餡【名】味噌を混ぜてつくりたる餡。

みぞ-いし 溝石【名】溝の岸に据ゑたる石。一代女「立ちながら、逆手(サカテ)に持つ

みすぼらし 身窄らし【形シク】『身の窄(ス)ぼるやうなる義、即ち世人の前に立ちて、肩身の狹きやうに感ずる義』人の身形(ミナリ)、物の體裁など、貧弱にして、見ぐるし。見る影もなし。見ばえなし。すぼたん」**目**見すぼらしき狀態を呈すること。

みすぼらしさ 身窄らしさ【名】**みすぼらし**に同じ。

みすぼらしげ 身窄らしげ【形動ナリ】**みすぼらし**に同じ。

みすぼらしや 身窄らしや【名】**みすぼらし**に同じ。

みすぼらしや 身窄らしや【感

て、小便(ベン)をする。音羽の滝の如く、溝石をこかし、地の掘るる事、おもひの淵となりて」

みぞ-いた 溝板【名】溝の上に覆ひて、通路に充つる板。どぶいた。世間胸算用「溝を深め、駒寄(コマヨセ)、ひっしと打ち、溝板は、夜夜繰引に致しおきました」

みぞ-いちごつなぎ 溝苺繋・溝谷草木【名】〔植〕禾本科に属する一年生の草。高さ二尺内外に達し、莖も葉も平滑・柔軟にして弱く、花は極めて繊細なる枝に、小穂花序をなして開く。濕地に自生す。

みぞう【名】おみそう(御みそう)を見よ。

みぞ-う 未曾有【名】未だ曾(カツ)てあらざる珍しきこと。稀有。

みぞ-う-う 未曾有【名】前條の誤讀。八犬傳「いと高き閣の棟にして死を爭ひし爲體(テイタク)、げに未曾有の晴業なれば」

みぞう-づ 味噌水・御增水【名】『御增水は假借の文字』**ざふする**(雜炊)【三】に同じ。(女の語にては、「お(御)みそう」といへり)傳中群要「如二糒飯餅・味噌水・芋之類一」著聞「きのふ見し法師子の稻よき程にみそうづまでになりにけるかな」「訛。

みぞ-おち 鳩尾【名】**みづおち**(水落)【三】の**みぞおちさき** 鳩尾先【名】**みづおちさき**(水落先)の訛。慳嚢反魂香「鳩尾さきを抉つて、肺の臟に押込んだり」

みそ-か 三十日【名】日數三十。十日間の三倍。十餘日の經ぬる數を、けふいくか、はつか・みそかと數ふれば」

みそ-か 三十日・晦日【名】毎月の第三十日。但し月には、大の月と小の月とありて、陰曆にては、大の月は三十日まであれども、小の月は二十九日まで、又、太陽曆にては、小の月が三十日(二月のみは、二十八日、閏年は二十九日)までにて、大の月は三十一日まであれども、通じて、月末の日を「みそか」と呼ぶこと、通俗の用法なり。十二月の最末の日は、又、一年の最末なるが故に、特に「大みそか」といひ、陰曆にては、二十九日にて終る月を、「九日(ココノカ)みそか」と呼ぶ。堀杏「月よめば十月に餘り二月のみそかになるは今宵なりけり」

みそか 密か【貌】**ひそか**(密か)に同じ。〔古語〕伊勢「昔、男、みそかに通ふ女ありけり」竹取「よろづの人にも知らせたまはで、みそかに宮(ミヤ)にいまして」

みそ-かうじゆ 溝香需【名】〔植〕**ゆきみさう**(雪見草)に同じ。

みそか-かんぢやう 三十日勘定【名】毎月、その月の支拂を、月末の日にすること、又その支拂の金額。

みそ-かくし 溝隱・半邊蓮【名】〔植〕『半邊蓮は、花冠の舌狀部一側に偏して、恰も一花を半截したるが如くなるに因る漢名』桔梗科に屬する多年生の草。莖は地上に匍匐し、節ごとに根出でて、地中に入り、莖の上部は扛起すること四五寸、葉は互生し、上部のは、無柄にして披針形、下部のは、有柄にして倒卵形、葉腋より、長き花梗生じて、頂端に一箇づつの花を著く。花は下部は筒狀、上部は一側に偏して、五裂せる舌狀にして、淡紫色の花冠を有す。有毒にして、庭際・田野等の濕地に自生す。あぜむしろ。からくさ。はたけむしろ。

みそ-かけ 御衣掛【名】**いかう**(衣桁)に同じ。〔古語〕和名「箴、美曾加介、懸衣架也」源氏「御衣掛の御裝束など、例のやうにしかけられたるに」

みそかけ-ぐさ 御衣掛草【名】〔植〕**みそはぎ**(みそ萩)に同じ。

みそか-ごころ 密心【名】一人に隱してする心。二密事(ゴトカ)【三】の心。いろけ。〔古語〕源氏「この世馴れたる物語などな讀み聞かせたまひそ。みそか心附きたる者の娘などは」

みそか-ごと 密事【名】一人に隱してする事。祕密なる事。ないしょうごと。蓑笠雨「今川氏兼朝臣の御許へ、みそか事傳へね」二密通。私通。大鏡「おとど殿は、みそか事は無才にぞおはしましかど、若らかに愛敬づき、なつかしき方はまさらせたまひしかば」

みそか-ごと 密言【名】他人に聞えぬやうにする話。ないしょうばなし。ひそひそばなし。〔古語〕蓑笠「單(ヒトエ)の御袴の程は、斯く太政大臣の北の御方、后の御母と見えたまはざりきとぞ、なほ、昔の人人は、みそか言もいひける」

みぞ-がし 溝樫【名】〔建〕敷居の溝の底に差込める、赤樫の薄く細き木。うめがし。すべりぎ。

みそ-かす 味噌滓【名】一味噌を笊などにて漉したるあとに殘るかす。みそっかす。二一團の人の中にて、極めて價値なき者。みそっかす。

みそかすぼうず 味噌滓坊主【名】價値なく、少しも尊ばれぬ僧。續紫加留を「四十ばかりの味噌かす坊主」

みそか-そば 晦日蕎麥【名】『東京の俗にて、月末にこれを食する時は、小遣錢に不足を生ぜずとの迷信よりいふ』晦日に蕎麥を食ふこと。〔東京の語〕

みそか-ぬすびと 密盜人【名】**せったう**(竊盜)に同じ。〔古語〕和名「竊盜、美曾加奴須比止」

みぞ-がね 溝金【名】敷居の溝の底部に取り附くる、薄き金。その上を動かす引戸の重き時などに、溝の損滅を防ぐために取り附く。

みぞ-がは 溝川【名】溝を流るる川。堀次「夕立にをちの溝川まさりつつ降らぬ里まで流れ來にけり」

みぞかは-さう 溝川草【名】〔植〕脣形科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は對生して、長卵形をなし、鋸齒あり。花は青紫色なる脣形花冠を有す。我國。山地に自生す。

みそか-ばらひ 三十日拂・晦日拂【名】毎月、その月の支拂を、月末の日にすること。みそかんぢやう。

みぞ-がひ 溝貝【名】〔動〕**からすがひ**(烏貝)に同じ。夫木「江の淀に溝貝拾ふうなゐ子がたはぶれにだに訪ふ人も無し」

みそか-びと 密人【名】**みそかきこ**(密男)に同じ。〔古語〕雲葉「時時物など聞えたまへど、夢にも人には知れたまはず、みそか人のやうにてぞ聞えたまふ」

みそか-ほふし 密法師【名】密男(ミツナン)なる法師。人妻などの許に通ふ法師。〔古語〕著聞「ある宮腹の女房、みそか法師を持ちて、夜な夜な局(ツボネ)へ入れられけり」

みぞ-かんな 溝鉋【名】鴨居・敷居などの溝を削るに用ふる、一種の鉋。刃の形は、狹くして、鑿の如し。又臺は腰高くして、幅狹く、平鉋の如く側立てたるが如き形をなす。俗に「へしやくり」といふ。

みそ-がゆ 味噌粥【名】**ざふする**(雜炊)に同じ。

みそか-をとこ 密男【名】密事(ゴトカ)をする男。密通する男。まをとこ。密夫。〔古語〕宇治「新羅國に后おはしけり。その后、忍びて、密男を設けてけり」

みそぎ 禊・御祓【名】『身滌(ミソギ)の略』河原・湖岸などに赴き、水にて、身を洗ひ淨むる一種の祓(ハラヘ)。伊弉諾(イザナギ)尊、黄泉(ヨミ)の國より歸りたまひし時、橘の小戸(オド)にて、海水に浸りて、御身を滌ぎたまひしは、その最も古きものなり。伊勢「戀せじとみたらし川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな」俳諧新選「雁宕「川風の幣を奪ひゆく御祓かな」

みそぎ 禊の輪【句】**ちのわ**(茅輪)に同じ。(水無月祓)「水無月の名越(ナゴシ)の祓する人は、……御祓(ミソギ)のこの輪をば、越えたり」

みそぎ-あした 晦日(ツゴモリ)の禊【句】**おほばらへ**(大祓)に同じ。枕「故殿の御服(ミブク)の頃、六月(ミナヅキ)晦日の御祓といふ事に出でさせたまふべきを」

みぞぎ 御衣木【名】神佛の像を造る時の材料とする木。檜・杉などを用ひ、佛像の場合には、加持したる上に用ふ。新古今「ちはやぶる香椎(カシヒ)の宮のあや杉は神のみそぎに立てるなりけり」東鑑「五大尊御衣木」

みそぎ-がは 禊川・御祓川【名】禊を行ふ川。源氏「御心もや慰むと立ち出でたまへりしみそぎ川の荒かりし瀬に」俳諧古選(蕉宮)「年も早なかば流れつ御祓川」

みそぎけう 禊教【名】神道の教派の一。天保年間、井上正鐵(マカミノミチ)の開創に係り、天御中主(アメノミナカヌシ)神・高皇産靈(タカミムスビ)神・神皇産靈(カムムスビ)神・伊弉諾(イザナギ)神・伊弉册(イザナミ)神・天照大御神・須佐之男(スサノヲ)神・大國主神・瀛繼津姫(オキツカシ)神・速開都姫(ハヤアキツヒメ)神・氣吹戸(イブキド)神・速佐須良姫(ハヤサスラヒメ)神・産土(ウブスナ)神及び教祖の神靈を祭神とし、禊祓(ハラヒ)の神教を擴張するを主旨とするもの。正鐵の歿後、一時統一を失ひしを、明治五年、その門人東宮千別・村越金久等相計りて、吐菩加美(トホカミ)講を起し、教部省の許可を得て、翌年、今の名に改め、東京市淺草區小島町に本部を置き、同八年、坂田鐵安等、別に下谷(シタヤ)區西町に惟神教會禊社を起し、兩派軋轢を續けしが、前者は、後、大成教に歸屬し、後者は、鐵安の子安治の時に至り、明治二十七年、獨立の許可を得たり。

みそぎーだいえ 禊大會・御祓大會【名】豐前國の宇佐八幡にて、六月の晦日に行ふ禊の神事。

みそぎーはらふ 禊祓ふ【動下二自】禊祓(ミソギハラヘ)をなす。みそはらふ。記「伊邪那岐(イザナギ)の大神詔(ノ)りたまはく、……、筑紫(ツクシ)の日向(ヒムカ)の橋の小門(ヲド)の阿波岐(オギ)原に到坐(イデ)して、禊ぎ祓へたまひき」

みそぎーばらへ 禊祓【名】おほばらへ(大祓)の轉。萬葉「相摸根の小峰見そぐし忘れ來る妹が名呼びてわをねしなくに」

みーそぐ 禊ぐ【動四自】禊(ミソギ)をなす。萬葉「久方の天の河原に出で立ちて潔身(ミソ)ぎてましを」「昔之集「みそぎつつ思ふ心はこの川の底の深さに通ふべらなり」

みぞーくぐり 溝潛【名】〔動〕みそさざい(溝三歳)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

みそーくさ みそ草【名】〔植〕みそなほし(味噌直)に同じ。

みーそぐす 見過す【動四他】みすぐす(見過す)の轉。萬葉「相摸根の小峰見そぐし忘れ來る妹が名呼びてわをねしなくに」

みそぎーまつり 禊祭【名】前條に同じ。

冠者清光の曾孫惟義、承久の時、功により、常陸國鹿島郡溝口村を賜はり、第十世勝政、尾張國中島郡溝口鄉に轉住して、氏とす。その子於竹、織田信長に仕へ、又、豐臣秀吉に仕へて、加賀國大聖寺城を賜り、豐臣姓と秀吉の片諱とを與へられて、秀勝と稱し、慶長三年、越後國新發田(シバタ)に移り、明治維新後、伯爵を授けらる。

みぞぐちーがみ 溝口紙【名】文祿の頃、越前國今立(イマダテ)郡五鹿の僧日源の、筑後國下妻(シモヅマ)郡溝口村(今は、八女(ヤメ)郡古川村の一部)に駐錫せし時抄出して、村民に傳授せしより、明治維新前まで、その地の名産なりし美濃紙。

みぞぐちーまつかは 溝口松皮【名】紋所の松皮菱の一。大中小の菱形を、大さの順序に重ねて、その輪郭のみを描きたるもの。

みぞぐちーりう 溝口流【名】書道の一派。御家(オイ)流より出づ。溝口莊司千谷を祖とするもの。

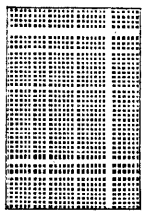
みぞーこし 味噌漉【名】■棯物(ヒゲモノ)に、竹を薄く削りて編みたるを張りて、底とし、篩(フルヒ)の如き形とし、味噌汁を漉して、滓を去るに用ひしもの。みそとほし。■**みそこしぎる**(味噌漉笊)の略。味噌漉で、水を掬(スク)ふ【句】「籠(カゴ)で水を汲む」に同じ。〔諺語〕

みそこしうり 味噌漉賣【名】味噌漉を賣ること、又その人。本朝二十不孝「馬士(カマカ)・古著買・味噌漉賣をば招き」「に同じ。

みそこしご 味噌漉碁【名】ござご(笊碁)に同じ。

みそこしざる 味噌漉笊【名】味噌汁を漉して、滓を去るに用ふる小き笊。みそこし。

みそこしじま 味噌漉縞【名】味噌漉■の底に張る竹の編方の如き、こまかなる縦横の縞。



(まじしこそみ)

みそこしづきん 味噌漉頭巾【名】味噌漉の如き形の頭巾。

みーそこなひ 見損【名】見そこなふこと。「〔見誤る〕に同じ。

みーそこなふ 見損ふ【動四他】みあやまる

みぞーごばう 溝牛蒡【名】〔植〕みづかしは(水擧)に同じ。

みぞーどぢ 溝鯉【名】〔動〕さどに同じ。

みぞーどね 溝五位【名】〔動〕『羽色に本づく名にて、實は味噌五位の義といふ』渉禽類に屬する鳥。形、五位鷺に似、一體に暗黑の赤褐色を呈し、下面は淡褐色、日中は、樹林の中に、首をすくめ、圓くなりて立つ。いぼごゐ。おすめどり。ひのくちまもり。やまいぼ。「鷺」に同じ。

みそーさぎ みそ鷺【名】〔動〕あをさぎ(蒼鷺)に同じ。

みそーさざい 溝三歳・鷦鷯・鶺鴒・巧婦鳥【名】■〔動〕燕雀類に屬する鳥類。形、雀に似て小く、全身焦茶色にして、腰・翼・尾及び腹の各羽には、黑色の細小なる横條あり。嘴は尖り、尾は短くして、上方に向ひ、山地にて棲殖し、冬季平原に出づ。巣は樹洞、家屋の缺隙などの中に、苔蘚羽毛等を材料とし、一蔕に出入の小孔を作り設け、構造巧なり。蜘蛛などの小蟲を食とし、囀聲愛すべし。かぶとてう。こどり。ささぎ。せうれう。たくみどり。みそくくり。みそつくり。みそつどり。みそぬすみ。一茎「みそささいちと云うても日が暮れる」■そそかしき人を罵りていふ語。

みぞーさらひ 溝浚【名】ざぶさらひ(溝浚)を云ふ。〔京都の語〕

みそーしる 味噌汁【名】味噌の擂りつぶしたるを、水にて稀釋し、實を入れて煮たる汁。おつけ。おみおつけ。しる。

みそーすひもの 味噌吸物【名】味噌汁の吸物。

みそーすまし 味噌清汁【名】味噌汁の、味噌を沈澱せしめて澄みたるを、酌み取りたる者汁。

みそーすり 味噌擂【名】■味噌を、擂鉢にて擂ること。■**みそすりばうず**(味噌擂坊主)の略。■「味噌を擂る」■を見よ。〔諺〕ふこと、又その人。おべっか。追從(ツイジュウ)。

みそすりーばう 味噌擂坊【名】次條の略。俳諧新選(戊洲)「あら碁や味噌擂坊のいれぼくろ」

みそすりーばうず 味噌擂坊主【名】■寺院にて、炊事などの雜務を勤むる僧。■僧を罵りていふ語。みそすり。

みそーせんべい 味噌煎餅【名】味噌をまぜて作りたる煎餅。

みぞーそ【名】**かけぎを**(掛竿)■を云ふ。〔下總國猿島(サシマ)郡の方言〕

みそーそば 溝蕎麥【名】〔植〕蓼(タデ)科に屬する一年生の草。高さ二尺乃至四尺に達し、莖と葉柄とには、小刺あり。葉は戟形、夏、十箇内外の深紅又は淡紅の花、頭狀に排列して開く。水邊又は濕地に群生す。いすりば。たそば。はちのじさう。はちもんじさう。

みそーだま 味噌玉【名】たまみそ(玉味噌)に同じ。一代男「屠屋の軒に貰きしは、味噌玉か、何ぞと、人のひもじがる時」

みそーだまり 味噌溜【名】たまり(溜)■に同じ。

みそぢ 三十・三十路【數】『ぢは接尾語』さんじふ(三十)に同じ。枕「みそぢばかりなる女」

さんじふにさう(三十二相)【句】〔佛〕さんじふにさう(三十二相)に同じ。拾遺「みそぢあまり二つの姿備へたる昔の人の踊める跡ぞこれ」

みそぢーひともじ 三十一文字【名】みそひともじ(三十一文字)に同じ。太平記「石碓の上に消殘れる三十一字(ヒトモジ)を見る人、感涙を流さぬはなかりけり」謠曲 白樂天「三十一文字(ヒトモジ)の詠歌なりけり」

みそーづ 味噌水【名】『みそうづ(味噌水)の約』ざぶする(雜炊)■を云ふ。〔加賀國・越中國・但馬國の方言〕

みそーっかす 味噌滓【名】みそかす(味噌滓)の音便。

みそーつく【名】〔動〕みそさざい(鷦鷯)に同じ。

みそづけ 味噌漬【名】㊀魚肉などを、炙り食ふ前、暫くの間、味噌に漬けおくこと、又その魚肉。㊁野菜類を、味噌の中に永く貯へおき、味噌の氣(ケ)の染みて、褐色を呈するに至りたる頃、取り出し、香物(コウノモノ)の物として食ふもの。

みそづけやき 味噌附焼【名】魚肉に、味淋にて溶きたる味噌をまぶして焼くこと、又その焼方にしたる魚肉。みそやき。

みそつーどり 【名】〔動〕みそさざい(鷦鷯)に同じ。

みそつーばし 味噌齒【名】みそは(味噌齒)の「音便。

みそつーもの 御衣物御服物【名】『つは領格の助辭』御衣(ミソ)などの物。〔古語〕紀「服御之物、ミゾツモノ」

みそて 眞袖【名】『み(眞)は接頭語』まそて(眞袖)に同じ。〔古語〕萬葉「豐國の企救(キク)の池なる菱の末(ウレ)を摘むとや妹が御袖濡れけむ」「漉(コ)」㊀に同じ。

みそーとぼし 味噌通【名】みそこし(味噌漉)に同じ。

みそーな 溝菜【名】〔植〕みづに同じ。

みそーなはかす 見備はかす・儵かす【動四他】次條に同じ。『儵の字は、この語の意義なければ、鷽の字の誤用に出づるならんといふ』みる(見る)の敬語。古今「今も見そなはし、後の世にも傳はれとて」

みそなふ 見備ふ【動四他】前條に同じ。〔古語〕新古今「法(ノリ)の舟さして行く身ぞもろもろの神も佛も我を見そなへ」

みそーなほし 味噌直【名】〔植〕苣(チシャ)科に屬する落葉亞灌木。高さ一尺餘に達す。葉は、三小葉より成る複葉にして、各小葉は全緣なる廣披針形をなし、淡黄白色の蝶形花、總狀花序をなし、後、細長き莢を結ぶ。葉は味噌に生ぜし蟲を殺す効ありといふ。我國、暖地に自生す。うじくさ。

みそーに 味噌煮【名】味噌を入れて煮ること、又その煮方の食品。〔同じ。

みそーぬすみ 【名】〔動〕みそさざい(鷦鷯)に同じ。

みそのの 御園【名】古、神社に附屬して、その地の産物を神供とせし園(ソノ)。東鑑「伊勢國神宮御領御園・御廚地頭等」

みそのーちゆうきよ 御園中渠【名】〔人〕畫家。名は書尹、字は廷贍、通稱は主計助(カズエノスケ)。京都の人。鍼醫博士にして、兼ねて畫書を善くし、竹を畫くに妙を得。淺井閑南・宮崎筠圃・山科梨蹊と共に、世に平安の四竹と稱せらるる。寛延・寶曆頃の人。

みそのーふた 味噌蓋【名】〔植〕かくれみの(隱蓑)㊁に同じ。

みそのーや 三十輻【名】一箇の車輪に、輻(ヤ)の數三十本あるもの。太平記「三十輻も、少少折れにければ、御車は、路頭に顚倒す」

みそば 味噌齒【名】小兒などの齒の、齲齒(ムシバ)となりて缺け損じ、殘部の黄褐色を呈せるもの。みそっぱ。

みそーはぎ 【名】㊀〔植〕千屈菜(ハギ)科に屬する多年生の草。莖は方形にして、高さ二三尺餘に達す。葉は對生し、披針形にして、七八月の頃、葉腋より、花莖出で、六瓣・淡紅紫色の花輪生す。盂蘭盆會(ウラボンエ)の時に、佛前に供へ、水に漬して、迎火・送火の餘燼を消すに用ふ。しやうりやうばな。せんくつさい。たまのやぐさ。みそかけぐさ。みそはぎ。〔千屈菜〕㊁あきのたむらさう(秋田村草)に同じ。〔鼠尾草〕本草和名「鼠尾草、美曾波岐」

みそーはぎ 溝萩【名】〔植〕前條㊀に同じ。心中及は氷の朔旦「盆には、我は新精靈、親子の盃、溝萩の露の手向と引きかへて」

みそはぎーくわ 千屈菜科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區に屬する一科。草・木あり、二十一屬、凡そ四百五十種を含み、溫帶と熱帶とに分布し、我國に自生し、又は栽培せらるるもの、七屬、凡そ十五種、千屈菜・百日紅(サルスベリ)など、これなり。せんくつさいくわ。

みそはーぐさ みそ葉草【名】〔植〕のだけ(前胡)に同じ。

みそーばこ 御衣箱・御衣宮【名】ころもばこ(衣箱)に同じ。空穗「御衣(ミソ)、みぞ箱に入れて」

みそはこべ 溝瓢蔓【名】〔植〕溝瓢蔓(ハコベ)科に屬する水生の草。莖は細くして、下部は匍匐し、長さ二三寸に達し、節毎に根生して、地中に入る。葉は對生し、小形無柄にして、全緣・鈍頂の披針形をなし、夏、葉腋毎に、三瓣・淡紅色の微細なる花、二箇づつ對生す。我國の水田に生ず。

みそはこべーくわ 溝瓢蔓科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區に屬する一科。草又は半灌木にして、溫帶より熱帶にかけて分布し、二屬・十五種を含む。我國には、二屬、凡そ五種を産す。

みそはらふ 祓祓ふ・祓ふ【動下二他】みそぎはらふ(禊祓ふ)の略。〔古語〕名義抄「祓、ミソハラフ」

みそーばり 溝針【名】針頭扁平にして溝あるもの。太き絲の、通りよからしむるために設く。

みそーびつ 御衣櫃【名】みそばこ(御衣筥)に同じ。蓬萊蒔繪の御衣櫃一よろひに、片つ方には、かづけ物一襲に、袴具しつつ」

みそひともじ 三十一文字【名】『一首は、三十一音より成るによりていふ』みじかうた(短歌)に同じ。源氏「みそひと文字の中に、異文字(コトジ)は少く添へたる事の難きなり」

みそーひめ 御衣姫・御衣糀糠【名】御衣に附けて、地(ヂ)を固くするに用ふる姫糊(ノリ)。枕「取所なき物、……、みそひめの濡れたる」

みそーぶた 味噌蓋・味噌盞【名】〔植〕かくれみの(隱蓑)㊁に同じ。

みそーぶた 溝蓋・溝盞【名】みぞいた(溝板)に同じ。二代男「溝蓋の石も蹈みへらして」

みそーへ 【名】『身添の義なるべしといふ』てちど(調度)に同じ。〔古語〕紀「調度、ミソヘ」

みそーへや 味噌部屋【名】味噌を貯へおく部屋。續猿蓑夕可「味噌部屋の匂に肥える三葉かな」

みそーぼたる 溝螢【名】〔動〕つちぼたる(土螢)に同じ。

みそーぼほづき 溝酸漿【名】〔植〕玄參(ゴマノハグサ)科に屬する草。高さ五六寸乃至一尺ほどに達す。葉は對生し、卵形をなし、粗鋸齒あり。葉腋ごとに、長き花梗生じ、その頂に淡黄色の俯形花を著く。我國、山野の濕地に自生す。みづほほづき。

みそーぼらし 見窄らし【形二】みすぼらし(見窄らし)の轉。

みそーまめ 味噌豆【名】㊀味噌の原料とするために煮たる大豆。㊁〔植〕だいづ(大豆)に同じ。味噌豆は七里歸りても食へ【句】味噌豆は、いかなる犠牲を拂ひて食ひても惜しからぬ程に美味なり。〔諺語〕

みそーみそ 味噌味噌【名】あへもの(和物)を云ふ。〔女の語〕

みそみそ 【貌】びしやびしやに同じ。沙石集「あらゆる蛇、一口づつ咬みて、みそみそと咬みなして」

みーそむ 見初む【動下二他】㊀始めて見る。始めて面會す。源氏「大將の母君を、幼かりし程に見そめて」㊁始めて見て、戀著心起る。一見して、戀に陷る。「見染む」源氏「見そめつる契ばかりを捨てがたく思ひとまる人」平家「誠に、人は十三、吾は十五より見初め奉りたれば」

みそむぐら 溝葎【名】〔植〕やへむぐら(八重葎)㊁に同じ。「同じ。

みーそんじ 見損【名】みそこなひ(見損)に同じ。

みーそんず 見損ず【動佐變他】みそこなふ(見損ふ)に同じ。

みそもじ あまりーひともじ 三十文字餘一文字【名】みそひともじ(三十一文字)に同じ。古今「すさのをの命よりぞ、みそもじあまり一もじは詠みける」

みそーや 味噌屋【名】味噌を賣る店。

みそーやか 密やか【貌】ひそやか(密やか)に同じ。

みそーやき 味噌燒【名】みそつけやき(味噌附燒)に同じ。一言芳談「ほたの上に、味噌やきなど打置きて食ふ風情」

みそ-やっこ 味噌奴【名】人を嘲り卑しめていふ語。雙生隅田川「揩粉木頭(アスリコギ)の味噌奴」

みそ-やなぎ 溝柳【名】〔植〕**みづおとぎりさう**(水弟切草)に同じ。

みそ-ようにん 味噌用人【名】祿高少き旗本(ハタモト)の用人。

みそ-らし 御空【名】**そら**(空)の敬稱。

みそ-らし 御空【名】前條に同じ。記「亦の名は、天のみそら豐秋津根別といふ」

みそ-らし 眞空【名】『み(眞)は接頭語』**そら**(空)[一]に同じ。萬葉「み空行く月の光にただ一日相見し人の夢にし見ゆる」

みそ-らし 身空【名】次條を見よ。

みそらし 若い身空で【句】若年の身にて。浮世床「若い身そらで、數珠を出しやあがって拜んだあす」[一]に同じ。

みそらいろ 眞空色【名】**そらいろ**(空色)

みそらいろ-をどし 眞空色縅【名】鎧を、淺葱(アサギ)色の絲にて縅したること。

みそる 見逸る【動下二他】**みわする**(見忘る)に同じ。(但し、接頭語**お**(御)を添へ、下に「申す」を續けて用ふ)「ついお見それ申しました」

みぞる 霙る【動下二自】霙(ミゾ)降る。壬二「かき曇りみぞるる空やさえそめて氷りもはてぬ時雨なるらん」千載「春雨に散る花見ればかきくらしみぞれし空の心地こそすれ」

みぞれ 霙【名】雪の、地表に近づきたる時、濕暖なる氣層を通過し、半ば溶解して降るもの。(氣象學上には、この語を用ひず、これを、單に雨雪として觀測す)和名「霰、美曾禮」

霙の吸物【句】**うけいれ**(請入)に同じ。〔冬季に限りて用ひし語〕

みぞれ-かん 霙羹【名】料理の寄物(ヨセモノ)の一。道明寺麩(フ)を混ぜて、つくりたる水羊羹。

みぞれ-ざけ 霙酒【名】**あられざけ**(霰酒)に同じ。傾城反魂香「今は名のみに奈良坂や、この手、かの手の枕の酒、霙・霰と隔つれど、解くれば同じかすりの水をかりなる戲も」

みそろ 泥濘『水泥(ヒヂ)の轉訛かといふ』**ぬかるみ**(泥濘)に同じ。

みぞろ-いけ 御菩薩池【名】〔地〕山城國愛宕(オタギ)郡岩倉村幡枝(ハタエダ)の南にある池。周圍十八町餘。多く蓴菜を産し、池邊に地藏堂あり。昏(クレ)つづむ「みぞろ池の大蛇と飲み競べても負けぬ仲間」

みぞろ-やき 御菩薩燒【名】粟田燒の一種。仁清(ニンセイ)の弟子運助の、山城國愛宕(オタギ)郡御菩薩池の附近にて、その池の土を用ひて、始めて製し(一說に、仁清も、その創始に關與せりともいふ)、後、京都の粟田口にて製作せるもの如し。製作、頗る纖巧・優美にして、下繪は多くは黑色、上繪は五彩・金銀を使用すれども、模樣は、瀟洒・淡泊なるを普通とし、「みぞろ」又は「御菩薩」の銘あり。「めの桶。

みそ-をけ 味噌桶【名】味噌を入るるた味噌桶の蓋(フ)をせよ【句】『續博物志』「傳雷不ノ蓋ヲ、令二入腹中雷鳴一とあるに本づくならんといふ』糠味噌が腐る」に同じ。禁裏毛べ「べべ三味線の音、不斷、味噌桶の蓋を開(ア)くる間(マ)とてはなかりける」

みた 御田・屯田『み(御)は敬意の接頭語』牧種物を神饌又は供御(グゴ)の料とする田。みやけだ。紀「天照大神、以二天狹田長田一、爲御田一、アメテラスオホミカミ、アメノサタ・ナガタノ、ミタトシタマヒ」

みた 三田【名】〔地〕[二]東京市芝區の一部。[三]慶應大學及その前身たる慶應義塾の俗稱。

みた 箕田【名】〔地〕[一]武藏國北足立(アダチ)郡の村。[二]**わたなべ**(渡邊)を見よ。

みだ 彌陀【名】〔佛〕**あみだ**(阿彌陀)の略。著聞「我、もし生身(シャウ)の彌陀を見奉らずば、永く伽藍(ガラ)の門閾を出でじ」

彌陀感應の日【句】〔佛〕俗に、十佛を十齋日に、又、三十佛を一箇月三十日に配當するに、その十五日を阿彌陀佛の緣日なりと定めていふ語。古今傳「伏して惟みれば、釋尊圓寂の月に進めること一月、荼毘(ダビ)の烟異なりと雖も、彌陀感應の日に退くこと十日」

彌陀願力(グワンリキ)の船【句】〔佛〕「彌陀の御船(フネ)」に同じ。慶長記「筒井淨妙、俄に彌陀願力の舟に心を係けて、宇治川に沈むを見れば彌陀ぼとけ誓の舟ぞいとど戀しき」

彌陀の光明【句】〔佛〕光明は佛の智慧の相(ソウ)なるが中に、阿彌陀佛のは、他の諸佛にすぐれたりとて、特にいふ語。講曲「諸佛の御誓いづれ勝劣なけれども、超世の悲願あまねき影、彌陀光明に若くはなし」

彌陀の願行(グワンギャウ)【句】〔佛〕阿彌陀佛の誓願と、これを實行にあらはして、一切衆生を救濟すること。慶長記「淨土の法門、彌陀の願行、大要、かくの如し」

彌陀の三尊【句】〔佛〕「阿彌陀の三尊」に同じ。平家「一搓手半(シャクテハン)の彌陀の三尊、三國無雙の靈像なり」

彌陀の淨利【句】〔佛〕「彌陀の淨土」に同じ。慶長記「彌陀の淨刹に往生せん」

彌陀の成道日【句】〔佛〕「彌陀感應の日」に同じ。

彌陀の淨土【句】〔佛〕阿彌陀如來の「極樂淨土。

彌陀の誓願【句】〔佛〕**しじふはちぐわん**(四十八願)に同じ。

彌陀の劍【句】〔佛〕「彌陀の利劍」に同じ。講曲「山姥」「消えぬ憂き身の罪を切る、彌陀の劍の砥並(トナミ)山」

彌陀の願【句】〔佛〕「彌陀の誓願」に同じ。夕霧「阿波鳴渡」肌に袷の破紙衣(ヤブレカミコ)、四十八枚、彌陀の願」

彌陀の光【句】〔佛〕「彌陀の光明」に同じ。著聞「圓路をば彌陀の光に任せつつ春の半ばの月は入りにき」

彌陀の光も金次第【句】「阿彌陀の光も金次第」に同じ。〔諺語〕

彌陀の悲願【句】〔佛〕「彌陀の誓願」に同じ。講曲「夢行柳」「彌陀の悲願を頼まずば、いかで佛果に至るべき」

彌陀の寶號【句】〔佛〕「陀彌の名號」に同じ。

彌陀の本願【句】〔佛〕**ほんぐわん**(本願)[二]を見よ。平家「彌陀の本願を、强く信じて、ひまなく名號を稱へ奉るべし」

彌陀の御國【句】〔佛〕**ごくらくじやうど**(極樂淨土)に同じ。著聞集「今ぞこれ入日を見ても思ひ來(コ)し彌陀の御國の夕ぐれの空」

彌陀の御船【句】〔佛〕彌陀の誓願を船に譬へていふ。「弘誓(グゼイ)の船」參照。風雅「急げ人彌陀の御船の道ふ世に乘りおくれなばいつか渡らん」

彌陀の名號(ミャウガウ)【句】〔佛〕「阿彌陀佛」といふ四字。又、普通には「南無阿彌陀佛」の六字をいふ。彌陀號(ガウ)。保元「彌陀の名號、一萬遍唱へ申す」

彌陀の名願(ミャウグワン)【句】〔佛〕『阿彌陀佛が、その名號を以て、衆生を救濟する誓願の義』「彌陀の本願」に同じ。

彌陀の來迎(ライガウ)【句】〔佛〕念佛行者の臨終の時、阿彌陀如來、極樂より來りて、これを迎接・引導したまふこと。

彌陀の利劍【句】〔佛〕『般舟讚に「利劍、卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除」とあり』彌陀の名號(ガウ)を、一たび唱ふれば、罪障悉く除かるといふによりて、利劍に譬へていふ語。「谷響記「いたはしながら、蕉谷は、御後に立廻り、彌陀の利劍と、心に唱名」

彌陀の病、明王(ミャウワウ)の醫【句】〔佛〕『元亨釋書の卷十一に釋餘慶筑州人也。慶闍二藤大師一。忽空也法師入來。也臂不レ便。慶問レ所二以患一。對曰、我稚孩時、父母相嫗。母患捉レ我投レ地。自レ爾左臂不レ順。久閒レ顯二法驗一。乞見レ惠乎。慶諾。於レ是乎、相家子弟齊集見レ之。慶瞑目持誦。乃執二也臂一引レ之。爆然牽出、屈伸如レ右。也作レ禮三拜。大師莫レ不二嘆伏一。時人曰、彌陀之病、明王之醫」とあるに本づく』すぐれたる者の上にも、なほすぐれたる者あり。〔諺語〕

彌陀は導く【句】〔佛〕阿彌陀佛は、念佛の聲を聞きて、衆生(シュジョウ)を來迎(ライガウ)・引導す。(「釋迦は遣る」に對して)謠曲(當麻)「釋迦は遣り、彌陀は導く。一筋に心許すな」

みーだい 御臺【名】一だい(臺)二の敬稱。空穂「御臺立てて物參る人の奉れるも、いと多かり」續世繼「御臺・高坏(ツキツ)、しろがねの銚子など、一つづつ捧げて持ちたるは」二食物。おもの。源氏「御臺參りなどして、のどかになりぬる晝つ方」榮花「日頃、水がちに、御だいなどもいかなる事にかとまできこしめせど」三みだいどころ(御臺所)を見よ。太平記「足利殿こそ、御臺・君達まで、皆、引具して進らせて御上洛候ふなれ」曩嚢抄「大内殿在京の時、京より御臺へ、……、大内殿御臺の返歌」

みだいさま 御臺様【名】前條三に同じ。〔徳川時代の語〕

みだいさまーごようにん 御臺様御用人【名】ひろしきようにん(廣敷用人)に同じ。

みだいだい 御臺代【名】御臺所の代(ハ)となりて、その事に當る人。

みだいーどころ 御臺所【名】『だいどころ(臺所)』參照』みだいばんどころ(御臺盤所)を見よ。東鑑「以二土肥彌太郎遠平一爲二御使一被二進三御臺所御方一」「の敬稱。

みだいばん 御臺盤【名】だいばん(臺盤)

みだいばんーどころ 御臺盤所【名】だいばんどころ(臺盤所)二の敬稱。鎌倉時代に入りては、略して、御臺所。御臺といひ、なほ、後世、御臺様ともいひ、その適用の範圍も、御臺所は、將軍の妻をいひ、御臺は、安土(アヅチ)・桃山時代にかけて、將軍のみならず、諸大名の妻をも稱したれど、江戸時代には、又、將軍家の妻に限るに至れり。

あまみだいどころ(尼御臺所)・**うへみだい**(上御臺)・**しんみだい**(新御臺)・**きたのだい**(北臺)參照。平家「御女八人……。一人は、……花山院左大臣兼雅の御臺盤所に成らせたまひて、公達數多ましましけり」

みーたり 未到【名】未だ到らぬこと。「先人未到の境地」

みーたち 味到【名】理智の了解に止まらず、情味を十分に會得すること。味得。

みーだち 御堂【名】一本尊を安置せる堂の敬稱。榮花「さるべき御堂・御堂、方方、様様造りつづけ」著聞「安樂寺……多寶塔一基を建てて、胎藏界の五佛を安じ、法花千部を納め奉る。これを東の御堂と名づく」二ほふじやうじ(法成寺)の敬稱。榮花「天喜六年……二月二十三日の夜、御堂焼けぬ」三〔人〕次條の略。榮花「御堂よりも、よろづ、こまやかに推しはかり聞えさせたまふ事どもあり」正統記「親王の女祇子の女王は、宇治の關白の室なり。この故に、御堂・宇治をば、遠祖の如くに思へり」

みだうくわんばく 御堂關白【名】〔人〕『みだう(御堂)二を建立して、そこに住みしによりていふ』ふぢはらみちなが(藤原道長)の異稱。

みだうくわんばくーき 御堂關白記【名】〔書〕藤原道長の日記。もと三十六卷なりしものの如くなれど、近衛公爵家に現存する道長自筆の本は、長徳四年秋・冬の卷より寛仁四年春・夏の卷まで十三卷、又、道長の子賴通の筆寫に係るものは、十六卷にて、長徳元年の僅少の記事と、寛仁五年の記事との、前後に添加せるもの、又、中間にも、闕逸を補ふに足る者あり。道長公記・御堂御記・藤原道長日記・御堂御暦日記。「同じ。

みだうーどき 御堂御記【名】〔書〕前條に同じ。

みだうーどのきーにっき 御堂御暦日記【名】〔書〕みだうくわんばくき(御堂關白記)に同じ。

みーだうし 御導師【名】だうし(導師)の敬稱。禁宮の御佛名の初夜(ヤ)の御導師聞きて出づる人は」

みーだうしゆ 御堂衆【名】だうしゆ(堂衆)四の敬稱。

みだうーどの 御堂殿【名】〔人〕一つちみかどの(土御門殿)二に同じ。三みだうくわんばく(御堂關白)に同じ。徒然「京極殿・法成寺など、……、御堂殿の造りみがかせたまひて、莊園多く寄せられ」

みだうーぶぎやう 御堂奉行【名】鎌倉幕府寺社奉行の一。京都京極法成(ハウジヤウ)寺の事を管掌せしもの。東鑑「式部太夫入道光西(御堂奉行)」

みだうーまうで 御堂詣【名】御堂に詣づること。盛衰記「文覺配流の後、籠居したる所をば、名古屋寺といふ。文覺、我、目出たき相人(サウ)なりと披露しければ、事を御堂詣に寄せて、男女、多く入集まって相せらる」

みーたうーむなし 見度無し【形ク】次條の轉訛。浮世風呂「關東べいぢゃ。どうしべい、斯うしべい、行(イ)くべい、歸(カ)るべいとは、さて見たうむないなあ」

みーたうーもなし 見度無し【形ク】二見たくも無しの音便』みさもなし(見とも無し)に同じ。

みだえ 水絶【名】水の絶ゆること。好忠集「小山田のみだえせしより雨にます岩間の神をねがぬ日はなし」六帖「天の川みだえもせなん鵲の橋も渡さでただ渡りなん」

みだえーぐさ 水絶草【名】〔植〕ほす(蓮)一の異稱。〔古語〕夢傳抄「花咲かば波とや見らん水絶草青葉に浮ぶ咲かね先には」

みだーがう 彌陀號【名】〔佛〕「彌陀の名號(ミヤウガウ)」に同じ。平家「利劍即(ソク)是(ゼ)彌陀號を頼めば、魔緣近づかず」

みーたから 【名】〔植〕せきこく(石斛)に同じ。

みだきやう 彌陀經【名】〔書〕ぶっせつあみだきやう(佛說阿彌陀經)の略。俳諧新選(西谷)「彌陀經も知らぬ庵主や罌粟(ケシ)の花」

みだぐ 彌陀供【名】〔佛〕あみだこま(阿彌陀經)に同じ。

みだくさん 實澤山【名】汁などの中に入れてある實の、多くあること。

みたくーても-なし 見度でも無し【句】みる(見る)の條下を見よ。

みーたけ 身長・身丈【名】一身體のたけ。せい。二衣類の、襟を除きて、脊筋の裾までの長さ。

みーたけ み嶽【名】『みは接頭語』たけ(嶽)の敬稱。みやま。和名嶽、美太介」

みたけ 御嶽【名】〔地〕一『黄金を產すとて、古は金御嶽(カネノ)とも金峰山(キンブ)ともいひしものの略』おほみね(大峰)に同じ。地「御嶽に詣でて歸る人など」二甲斐國中巨摩(コマ)郡宮本村に屬する山。金峰(ブ)山南方の支脈なる一嶺。高さ二九〇四尺。縣社金櫻(カナザ)神社ありて、日本武(ヤマトタケル)尊外四座を祀り、奥宮は金峰山にあり。この神社、もと藏王(ザワ)權現といひ、大和國の御嶽即ち大峰(オホミネ)に擬して、修驗道(シュゲンダウ)の行場たりしが、社前に金櫻と呼ぶ老櫻樹あるに因みて、今の名に改む。三武藏國西多摩(ニシタマ)郡の中央にある山。高さ三五三一尺。山中、老杉鬱蒼、氣候清涼、來りて暑を避くる者多し。

みたけじんじや 御嶽神社(御嶽山)を見よ。

みたけさん 御嶽山【名】

みだけーいと 亂絲【名】亂れたる絲。薩摩歌「思へば、心みだけ絲」

みたけーけう 御嶽教【名】神道の教派の一。信濃國御嶽山(オンタケサン)御嶽神社に因めるものにて、その信徒の一人、下野國足利の人、下山應助の盡力により、教部省の許可を得て、明治十五年獨立の教派となり、平山成齋管長となり、國常立(クニノトコタチ)尊・大己貴(オホナムチ)命・少彦名(スクナヒコナ)命を主神として、御嶽大神と稱し、なほ宮中所祭の神、歴代の皇靈、天神・地祇八百萬(ヤホヨロヅ)の神神をも配祀し、惟神(カムナ)の大道により、主神の大道を發揚し、尊皇・愛國の大義を宣明するを本旨とす。おんたけけう。

みたけーさうじ 御嶽精進【名】御嶽詣(オンタケマウデ)なりといふにより、その菩薩の名を唱へて行ふ。源氏「みたけさうじにやあらん、ただ翁びたる聲にぬかづくぞ聞ゆる」榮花「今年は、大嶽、御嶽さうじせさせたまふべき御年にて」

みたけーじんじや 御嶽神社【名】一武藏の敬稱。

國西多摩(ニシタマ)郡御嶽の山中に鎮座せる府社。祭神は大己貴(オホナモチ)命・少彦名(スクナヒコナ)命。もとは藏王(ザヲ)權現といひ、大和國の御嶽、即ち大峰(オホミネ)に擬したるもの。「みたけ」ともいひ、修驗道(シュゲンダウ)の行場たりき。〔二〕信濃國西筑摩(ニシチクマ)郡御嶽山(オンタケサン)の一部、三岳(ミタケ)村黒澤に鎮座せる縣社。祭神は大己貴(オホナモチ)命・少彦名(スクナヒコナ)命。延喜二十一年の創建といひ、天文二十三年、木曾義康、若宮を造營し、慶長以後は、名古屋藩及び地頭山村氏、社殿の修理をなせり。**みたけけう**(御嶽教)參照。

みたけーしやうじ 御嶽精進【名】**みたけさうじ**(御嶽精進)に同じ。講曲「半部」「隣を聞けば、三吉野や、御嶽精進の御聲にて、南無當來導師彌勒佛とぞ稱へける」

みたけーすげ 御嶽菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達す。葉は互生し、平行脈を有して、三縱列に排列し、花は短き穗狀花序をなし、上部の花序は殆と無柄、下部のは柄を具ふ。本州の高山及び北海道等に自生す。

みたけぜに 亂錢【名】**みだしぜに**(亂錢)に同じ。一代女「かの男の、袖より、みだけぜにを取出し」綴蟹「貧者は、我と身を引いて、僅かなるみだけ錢のそばへも寄りかね、心にやるせなかりし」

みたけーまうで 御嶽詣【名】金峯山に參詣すること。**行者參**(ギャウジャマヰリ)。空穗「初瀬(ハツセ)より御嶽まうでと思ほし立ちて出でたまふに」宇治「七條に箔打あり、御嶽まうでしけり」

みたけーまゐり 御嶽參【名】前條に同じ。

みたけーやま 御嶽山【名】〔地〕**みたけ**(御嶽)〔一〕に同じ。夫木「古の芳野をうつすみたけ山こがねの花もさこそ咲くらめ」

みだこう 彌陀講【名】〔佛〕阿彌陀佛を念ずる講會(カウ)。鎌倉時代に多く行はれたり。

みだ-ごま 彌陀護摩【名】〔佛〕**あみだごま**(阿彌陀護摩)の略。

みだ-さん 彌陀讃【名】**あみだわさん**(阿彌陀和讃)の略。

みだ-さんぜん 彌陀三尊【名】〔佛〕「彌陀の三尊」に同じ。正統記「昔、佛在世に、天竺の月蓋(ガツカイ)長者鑄奉りし彌陀三尊の金像(コンザウ)を傳へて渡し奉りける」

みだし 見出【名】〔一〕多くの中より、すぐれたる者を選びて、引き立つること。拔擢。玉藻前曦袂「愛き年月を送りし内、思はず皇子の見出に預かり」〔二〕書籍・帳簿などの内容を檢索するに便ならしむるために設くる題目。索引。

みだし-がき 亂書【名】順序を立てずに書くこと。亂雜に書くこと。みだりがき。盛衰記「裏書・端書、滋く薄く、みだし書にぞしたりける」

みだし-ぜに 亂錢【名】錢さしに貫かず、取り散らしてある錢。みだけぜに。狂言「座敷は、みだし錢で、山の如くぢや」

みだしなみ 身嗜【名】身のまはりを見にくからぬやうにし、又は藝能をたしなみなどして、體面を保つこと。狂言「吟醤」「いつものやうに見苦しくてござらずとも、上﨟衆も、身だしなみを肝要でおぢやる」

みだしり 三田尻【名】〔地〕周防國佐波(サハ)郡にある港。山口町の南方約五里に位し、もと同郡の村名にて、明治三十五年、佐波村と合して、防府(ホフ)町と稱す。鐵道山陽本線の要驛にして、防長米と鹽との集散地。

みだしろ 御田代【名】**みさしろだ**(御戸代田)に同じ。夫木「たのもしな御たらし川をせきかけてみしめ延(ハ)へたるみたしろの種」

みたす【動四自】來る。行く。進む。〔古語〕紀「來意、ミタセル……」同「歸來、カヘリミタシテ」同「進行、ミタスコト」

みたす 滿す・充す【動四他】滿つるやうにす。滿ちしむ。滿つ。

みだす 亂す・燒す【動四他】亂るるやうにす。亂れしむ。三代實錄「故實を燒(ヤ)き失ひ賜ふな」

みだす 見出す【動四他】〔一〕**みいだす**(見出す)の約。曙抄(心苗)「山あひの花を夕日に見出したり」〔二〕多くの中より、すぐれたるものを選びて引き立つ。ぬきんづ。拔擢す。

みだそう 密陀僧【名】〔化〕**みつだそう**(密陀僧)の略。一茶「彌陀堂の土になる氣かきりぎりす」

みだだう 彌陀堂【名】**あみだだう**(阿彌陀堂)の略。

みたち 御館【名】館(タチ)〔三〕の敬稱。御伽草子「鉢かつき」「色深く物恥をしたまひて、おぼろげ事までもつつましげなるみたちにて渡らせ候へども」

みたつ 見立つ【動四自】見て立つ。落窪「あこぎ、來て、少し遠がくれて見てもに」

みたつ 見立つ【動下二他】〔一〕よく見屆けて立つ。記「天(アメ)の御柱(ミハシラ)を御立(ミタ)て、八尋殿(ヤヒロドノ)を見立てたまひき」〔二〕旅立つ人を見送る。送別す。萬葉「赤駒が門出(カドデ)をしつつ出でがてにせしを見たてし家の子らはも」若鳳曾「明日見立てて、江戸へ送り申せ」〔三〕見分けて定む。鑑定す。宇治「この蛇、大ならんかし、外樣(マヂ)に昇らんとするにやと見立てける程に、蛇、頭をもたげて」狂言「三本柱「材木を見立てて、山に三本切らせておいた」〔四〕世話をなす。後見す。生玉心中「せめて三十二三まで、とくと見立て、人になして、死ねば藥ぢや」〔五〕假りに、その物事と見做して言ふ。なぞらふ。擬す。浮世風呂「それやあ、小間物店に見立てたのか」

みたて 御楯【名】楯の敬稱。又、主君を守護し奉る身を楯に譬へていふ。萬葉「今日よりは顧みなくて大君の醜(シコ)の御楯と出で立つ我は」

みたて 見立【名】〔一〕旅立つ人を見送ること。みおくり。送別。〔二〕見分けて定むること。鑑定。傾城禁短氣「財寶諸色かけて、七百貫目の身代といひ出づれば、その見立は格別」〔三〕なぞらへ譬ふること。芭蕉「何事の見立にも似ず三日の月」

みたて 見立【名】**みばえ**(見映)に同じ。源氏「顯燒衣の、あまり見馴れ、見だてなくおぼさるるにや」油揚「袖も箒も雪によごれり(といふ句に)見だてなく枯るる薄や玉かつら」「立直」に同じ。

みたてがへ 見立替【名】**みたてなほし**(見立直)の診斷を誤ること。

みたてーちがひ 見立違【名】醫者が、病氣

みたてーて 見立人【名】見立つる人。鑑識。和合人「傍に見立人のある日にや、おいらを除けて、誰れぞやとくる」

みたてーなほし 見立直【名】一旦見分けて定めたる物を止めて、更に他の物を見立つること。**みたてがへ**。浮世風呂「常住、取替(トリカヘ)へ、引替(ヒキカヘ)へ、見立なほしの女房を持つ人は、氣が無(ネ)えなら」

みたてーめ 三立目【名】〔一〕昔の芝居にて、序開(ジョビラキ)・二立目(ニタテメ)の濟みたる後、立役者(タテヤク)の出演するもの。序開・二立目は、芝居の稽古ともいふべきものにて、その間、立役者は、これを見物して、技の巧拙を品評し、三立目より本式の狂言となり、拍子木を打ちて、幕を明く。みつつめ。〔二〕後世、序開・二立目といふもの無くなりたる後も、舊稱を存していふ。**じよまく**(序幕)に同じ。

みたに み谷【名】〔一〕**みは**接頭語。**たに**(谷)〔一〕に同じ。記「み谷二(フタ)渡らすあぢしき高日子根(タカヒコネ)の神ぞや」

みたに 深谷【名】『前條の語の轉義』深き谷。山奥の谷。謠曲(永富)「木深き陰の、日影もささぬ深谷なれば」

みたに 三谷【名】〔地〕備後國の舊郡の一。明治三十一年、三次(ミヨシ)郡と合して、雙三(ソウサン)郡となる。

みだによらい 彌陀如來【名】〔佛〕**あみだによらい**(阿彌陀如來)の略。紫花陀彌如來の御手(ミテ)の絲をひかへ」

みたにーろくえふさう 【名】〔植〕**かたばみ**(酸漿草)〔一〕に同じ。

みだぬき 貛狸【名】〔動〕**まみ**(貛)に同じ。

みだ-ねんぶつ 彌陀念佛【名】〔佛〕彌陀の名號を唱へて、念佛すること。廣衰記「後生菩提(ゴシャウボダイ)のためならば、乃至十念若不生者不取正覺と誓ひたまへり。彌陀念佛をも唱ふべし」

みたのうぐせいさくじょ 三田農具製作所【名】農務省農務局の管理の下に、東京市芝區三田に置き、所長(判任)・屬の職員ありて、農具の製作・改良を圖るを目的とせし所。明治十四年設置、同二十年、民間に賣却せり。

みたは 三田派【名】『東京市芝區三田にあるよりいふ』慶應義塾の學派。

みたびーぐり 三度栗【名】〔植〕さんざぐり(三度栗)に同じ。

みーたふし 見倒【名】見たふすこと。

みーたふす 見倒す【動四他】㊀價値なしと見る。見下ぐ。新永代藏「下坂(ガカリ)と見ゆる大商人を見倒すやうにするものなり」㊁商品を、價値なしと見て、買はず。

みだーぶつ 彌陀佛【名】〔佛〕あみだぶつ(阿彌陀佛)の略。一葉「彌陀佛の土産に年を拾ふかな」

みたへーぐさ 水堪草【名】〔植〕ほず(蓮)㊀の異稱。〔古語〕藏玉集「水堪草・蓮。花咲かば泣くとや見えん水堪草庭もさみみに見ゆるこの頃」

みだーぼとけ 彌陀佛【名】〔佛〕みだぶつ(彌陀佛)に同じ。農業記「宇治川に沈むを見れば彌陀ぼとけ誓の舟ぞいとど戀しき」

みーたま 御靈【名】たま(靈)の敬稱。みかげ。「荒(ア)御魂」『和(ニギ)御魂』幸(サキ)御魂」

みたまうつし 御靈遷・御魂遷【名】御靈代(ミタマシロ)を、他の場處に遷すこと、又その式。御遷座。

みーたましろ 御靈代・御魂代【名】たましろ(魂代)の敬稱。

みたまふり 御靈振・御魂振【名】御靈を振ひ動かして、勢あらしめ、加護を垂るるやうにすること。〔古語〕紀「爲二天皇一招魂之、……ミタマフリシキ」「に同じ。

みーたみ 御民【名】民を、天皇を主にしていふ敬稱。おほみたから。萬葉「そを取ると騒ぐ御民も家忘れ身もたな知らず」

みーたむな 見度無【形】次條の語幹にて、次條の意。感動句に用ふ。正章千句「ゑごゑどしたる形(ナリ)は見たむな(ざいふ句に)「いつしかも一寸法師年たけて」

みーたむなし 見度無し【形二】みさもなし(見度無し)に同じ。狂言(八尾地藏)「九郎が女房も推量した。汝に似たらば、みたむなかろ。いやいや、私には似ませぬ。美しうござる」

みーため 見た目【句】みる(見る)の條下を見よ。

みーため 身爲【名】身のため。自身の利「益。

みーたもーなし 見度無し【形二】『みたらもなし(見度無し)の略』みさもなし(見度無し)に同じ。太平記「ここなる僧の臆病げなる、見たもなさよ」

みたや 御田屋【名】御田に建てて、その番人の詰めをる小屋。萬葉「かみなびの清きみた屋の垣内田(カキツ)の池の堤の」

みーたやう 見た樣【句】みる(見る)の條下を見よ。

みたやーもり 御田屋守【名】御田屋に居て、御田を守る人。後拾遺「みたやもり今日は五月になりにけり急げや早苗(サナ)おいもこそすれ」

みーだゆ 水絶ゆ【動下二自】水絶ゆ。公任集「白川の流れて今日を流れめや……みだえて淺き瀨とはなるとも」

みだら 淫【名】男女の間の品行のみだれてあること。みだり。淫猥。猥褻。

みだらーごと 淫事【名】みだらなる事柄。

みーたらし 【名】みたらし(御執)の轉。紀「弓、ミタラシ」

みーたらし 御手洗【名】㊀手水を使ひ、口を漱ぎなどすること。空穗「きんだち、御たらし遊ばすほどに」㊁みたらしがは(御手洗川)の略。新千載「みたらしやみそぎに流す大ぬさのつひに寄る瀨は秋風ぞ吹く」徒然「實方は、みたらしに影のうつりける所と侍れば」㊂みたらしまつり(御手洗祭)の略。㊃みたらしだんご(御手洗團子)の略。

みたらし 御手洗【名】〔地〕むろづみ(室積)を見よ。山家「みたらしにけがれすすぎて宮人の眞手にささげて御戸開くなり」

みたらしーがは 御手洗川【名】神社の附近に流れて、參詣者が、その水にて、身そぎし、手水(チョウズ)を使ひなどする川。古今「戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」謠曲「水無月祓」「御手洗川は濁れども、澄みてます賀茂の宮」

みたらしーだんご 御手洗團子【名】山城國の下鴨の社にて、六月祓(ハラヘ)の時、茶店にて賣る、小き團子。狂歌咄「みたらし團子、細き竹に插して、前なる土竈の爐に立て並べたるは」

みたらしーまつり 御手洗祭【名】京都市上京區の北野神社にて、七月七日に行ふ祭。前日の夕、神饌を供へ、內陣の煤を拂ひ、當日、七夕(タナバタ)祭の歌を詠じたまふ料にとの意にて、內陣に、神寶中の松風の硯と塗物の淨器に清水を盛り、梶の葉を添へたる御盥を供ふ。菅原道眞は、書道の神と崇められるに因めるなるべし。又、古は、六日に祭を行ひ、七日に煤拂ありたりといふ。みたらし。

みたらひ 御手洗【名】〔地〕次條を見よ。十訓「周防ひろづみの中なるみたらひに風は吹かねどもさざら波立つ」

みたらひーじま 御手洗島・御手洗鴨【名】〔地〕安藝國豐田郡に屬する大崎下(オオサキシモ)島の古稱。周圍五里半。今も、その東端に、御手洗町の名あり、又、御手洗港あり。

みたらを 鵜【名】あしげ(葦毛)に同じ。和名「騅、美太良乎乃宇萬、青白雜毛馬也」

みーたり 三人【名】さんにん(三人)に同じ。狂言「暇の袋」「あのやうな男は、二人(フタリ)や三人は」

みだり 妄・漫・濫・猥【名】規律の立たぬこと。筋道の立たぬこと。亂雜。

みだり 淫【名】『前條の語の轉義』みだら(淫)に同じ。

みだりーあし 亂足【名】歩み疲れて、足の痺(シビ)るること。みだれあし。源氏「御中道の程、みだり足こそ痛からめ」

みだりーあしのけ 亂脚氣【名】かくけ(脚氣)に同じ。【古語】「に同じ。

みだりーがき 亂書【名】みだしがき(亂書)に同じ。

みだりーかくびやう 亂脚病【名】かくけ(脚氣)に同じ。【古語】空穗「みだりかくびやういたはりはべるとて」源氏「みだりかくびやうといふもの、所せくおこり煩ひて」

みだりーかぜ 亂風【名】かぜ(風)㊁に同じ。【古語】蜻蛉「みだり風おこりてなん、聞えしやうには、え參らぬ」榮花「內より召あれど、みだり風など、さまざまの御さはりどもを申させたまひつつ」

みだりーがはし 濫がはし・猥がはし【形二】みだりなる樣なり。亂雜なり。みだりがましし。みだれがはし。源氏「みだりがはしき中を分け入りて」

みだりーがまし 濫がまし・猥がまし【形二】前條に同じ。

みだりーごころ 亂心地【名】例ならぬこころ。病氣。みだれごころ。【古語】落窪「みづから參らんとするを、罷り歸りしままに、みだりごころ惡しくてなん」榮花「みだりごころおこたるまでも、本意遂げはべりなん」

みだりーごと 亂言・漫言【名】深く考へず、秩序も無く物言ふこと、又その言葉。たはぶれごと。みだれごと。字鏡「論萬、口無二擇言一也。亂語也。多言也。彌多利加波志。彌太利己止。又、佐和加波志。又、左比左比之」

みだりーに 妄に・漫に・濫に・猥に【副】規律なく。掟に從はずに。むやみに。やたらに。亂雜に。

みだりーむね 亂胸【名】胸の病氣。【古語】服藝「みだり胸、いと不豫におこりて」

みだりーを 亂尾【名】亂れてある尾。萬葉「にはつ鳥かけの垂尾(ヲ)の亂尾の長き心も思ほえぬかも」

みたる 見足る【動四他】十分に見る。飽くまで見る。(多くは、打消の形にて用ふ) 俳諧御奇人談・柳居「一人前に見足らぬ花や庭の雪」俳諧新選(雅因)「見足らぬを初雪とこそ申すなれ」

みだる 亂る・紊る【動四自】『動詞としての用例は見當らねど、みだりあし(亂足)・みだりかくびやう(亂脚病)・みだりむね(亂胸)などの熟語によりて、この語の存在を推測し得べし』次條に同じ。【古語】

みだる 亂る・紊る【動下二自】㊀規律立たず。まとまらず。亂雜になる。㊁心まとまらず。惑ふ。萬葉「伊豆の海に立つ白波のありつつもつきなむものをみだれしめめや」伊勢「みちのくの信夫(シノブ)もじずり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに」㊂禮儀くづる。儀式ばらず。源氏「こまやかなる御直衣(ナホシ)、帶、しどけなくうち亂れたまへる御さまにて」榮花「いみじう醉ひみだれつつ」㊃雜卵、腐敗せんとして、黄味と白味との區劃失す。一代男「とかく酒にして、……、後は亂れて、盃に少しは言ひかかり」

みだる 亂る・紊る【動四他】みだす(亂す)に同じ。【古語】伊勢「ぬきみだる人こそあるらし白玉の間なく散るか袖のせばきに」大鏡「御裝束も引きみだりて、御車さし寄せつつ、人にかかりて乘りたまふを」十訓「奈良の先帝、世をみだりたまひしに」

みだれ 亂【名】㊀亂るること。規律の立たぬこと。亂雜。㊁心の亂るること。思ひ惱むこと。萬葉「玉の緒の絕えたる戀の亂には死なまくのみぞ又も逢はずして」㊂喪中にて、心の亂るること。源氏「斯かるみだれに添へて、わりなき御心なん、いみじうつらき」㊃國の亂ること。世の亂ること。騷亂。増鏡「保元のみだれ」同「平治のみだれ」㊄りんせう(臨訴)に同じ。㊅みだれざき(亂咲)の略。㊆刀劍の刃文(ハモン)の、入りみだれたる形。丁字亂(チヤウジミダレ)・瓢箪亂(ヘウタンミダレ)・五目亂(ゴモクミダレ)・大亂(オホミダレ)等の種類あり。㊇能樂にて、歌謠の伴はぬ舞の一種。「猩猩」と「鷺」との兩曲にあれども、普通、單に亂といへば、前者のを指し、足の運び方により、海中にて、醉舞する狀態を示す。伊賀越道中雙六「その足取を狂言師に見せたいはいの。亂などと云うて、傳授事になりさうなこと」㊈芝居の囃(ハヤ)しの、太鼓入なるもの。㊉雞卵の、腐敗せんとして、黄味と白味との區劃分明ならぬに至りたるもの。㊋こじき(乞食)を云ふ。【大阪の語】膝栗毛「みだれめが言ふやうな事ぬかしけつかる」㊌雜曲段物の一。十二段あり。

みだれ 亂あさ 亂麻【名】模様の一。あさのは(麻葉)㊀の一種。

みだれ 亂あし 亂足【名】㊀みだりあし(亂足)に同じ。㊁足の蹈處(フミド)の亂れがちなること。太平記「三尺八寸の長刀、莖短に取りて、亂足を蹈み、人まぜもせず、只二人、火を散らして斬りあひける」

みだれ 亂あし 亂蘆【名】入りみだれてある蘆。續千載「深き江に流れもやらぬ亂蘆のうき節ながらさてや朽ちなん」

みだれ 亂あふ 亂合ふ【動四自】互に亂る。新續古今「しのぶ草葉末の露の亂れあひて消えば消ゆべき限をぞ待つ」

みだれ 亂あるき 亂歩【名】亂姿(スガタ)にてあるくこと。入りみだれてあるくこと。五人女「大かたは、女中乘物、見ぬが心にくし。亂あるきの一むれ、いやなるも無し」

みだれ 亂いる 亂入る【動四自】規律立たぬさまにて入る。亂れて入り込む。増鏡「荒磯に高潮などのさし來るやうにて、泰時と、時房と、亂れ入りぬれば」太平記「二十餘人の者ども、大勢の中へ亂れ入りて」

みだれ 亂おる 亂織る【動四他】模様を亂れたるさまに織りあらはす。増鏡「われもから亂れ織りたる枯野の御狩衣」同「しのぶを亂れ織りたる萌黄の御狩衣」

みだれ 亂がき 亂書【名】みだりがき(亂書)に同じ。

みだれ 亂がさ 亂笠【名】破れ亂れてある笠。謡曲(富士太鼓)「みだれ笠・みだれ髪」

みだれ 亂がはし 濫がはし・猥がはし【形シク】みだりがはし(濫がはし)に同じ。狹衣「みだれがはしく、心を分くる方だになく」

みだれ 亂がみ 亂髪【名】㊀散亂してある髪。亂髮。平治「胄を免(ユ)ぎて、手に提(サ)げ、亂髪を面(オモ)に振掛け」曾我物語「肯のてへんに手を入れ、亂髪を引仰けて、頸を搔落す」㊁髪を振り亂してある女。鬼貫「すず風やあちら向きたる亂髪」俗つづれ「上戸丸裸、みだれ髪」㊂てんがく(田樂)を云ふ。【女の語】

みだれ 亂ぎく 亂菊【名】㊀らんぎく(亂菊)㊁に同じ。㊂〔植〕るりさう(琉璃草)に同じ。「同じ。

みだれ 亂ぐさ 亂草【名】〔植〕すすき(芒)に

みだれ 亂ぐら 亂鞍【名】前輪と後輪(シヅ)とに居木(イガ)を結び附けぬ鞍。

みだれ 亂ご 亂碁【名】らんご(亂碁)に同じ。國姓爺「軍は花のみだれ碁や」

みだれ 亂ごころ 亂心地【名】みだりごころ(亂心地)に同じ。顯輔集「亂心地まさりて、さし出づべくもおぼえざりしかば」

みだれ 亂ごころ 亂心【名】思ひ惱む心。らんしん。謡曲(百萬)「春の物狂、みだれ心か」傾城佛の原「誰にか見せん、この黒髪を、今は仇なる亂心か」

みだれ 亂ごと 亂事【名】㊀規律なく騷しき事。亂雜にて、落ちつかぬ事。戲事(ザレゴト)。源氏「靜かならぬみだれ事なめれど、所がらなりけり」㊁みだらなる事。猥なる事。堀川波の鼓「帶紐解き、男と添ひしみだれ事」

みだれ 亂ごと 亂言【名】みだりごと(亂言)に同じ。源氏「まめだちて……、みだれごとも打出でさせたまはで」

みだれ 亂ごひ 亂戀【名】思ひ亂るる戀。戀のみだれ。萬葉「山菅のみだれ戀のみせしめつつ逢はぬ妹かも年は經につつ」

みだれ 亂ざき 亂咲【名】植物の花の、培養に咲くもの。みだれ。

みだれ 亂ざけ 亂酒【名】亂れ騷ぎて、酒を飲むこと。亂酒(ランシュ)。一代男「事過ぎて、跡は、やつして亂酒、いつに變りての慰」

みだれ 亂ざしき 亂座敷【名】人人の興じ浮れ、亂れ騷ぎてある座敷。亂酒の席。若風俗「芝居子ぐるひ、……。折ふしこの亂座敷に交はりし猩猩の源兵衛といへる男の語りぬ」

みだれ 亂しやうじやう 亂猩猩【名】猩猩の、亂咲なるもの。

みだれ 亂すがた 亂姿【名】締(シマ)なき姿。取り亂したる姿。一代男「九たびまで取って締め、……いかな强藏(ガウザウ)も、亂姿になって」若風俗「つれなく申さば、あの上に、又もや病氣もと思ひ、心に染まぬ亂姿となり」

みだれ 亂ずみ 亂墨【名】亂れたる眉墨。謡曲(百萬)「眉根黒き亂墨」

みだれ 亂すり 亂摺【名】亂雜なる摺模様。

みだれ 亂そんず 亂損ず【動佐變自】亂れて惡くなる。十訓「この程、世の中亂れ損じて、愛する人も無し」

みだれ 亂どり 亂鳥【名】㊀入りみだれて飛ぶ鳥。㊁一番鳥・二番鳥などの鳴きたる後、多くの鷄の、入りみだれて鳴き立つること。甲陽軍鑑「一切、晝夜の辨も無く、夜は亂鳥までの狂、晝は丸(クワコ)時分までおより候へば」

みだれ 亂ば 亂葉【名】入りみだれてある葉。夫木「とりあへぬ早苗の末のみだれ葉に村さめながら騷ぐ夕風」

みだれ 亂はぎ 亂萩【名】〔植〕みやぎのはぎ(宮城野萩)に同じ。

みだれ 亂ばこ 亂箱・亂筥【名】うちみだりのはこ(打亂箱)に同じ。一代女「烏羽玉(ウバタマ)の髪の落(オチ)、みだれ箱、一寸鏡(ガネ)の二面」

みだれ 亂はらじろ 亂腹白【名】指貫(サシヌキ)の括り方の一。腹白㊁の如くにて、その末を、組まず、ただ押し亂すこと。

みだれ 亂も 亂藻【名】波などのために、入りみだれてある藻。夫木「とにかくに人の心は亂藻の靡くと見るも賴まれぬかな」

亂緒の藁沓(わらぐつ)【句】古、衛府(ゑふ)の官人の用ひし藁沓。鼻緒の前方に、藁稈(わらがら)の如く裂きたるを附け、それを左右へ分けて、房の如くに出したるもの、又、鼻緒の前方に附くる藁稈の、折り曲げ連ねて、笹の葉の如くにしたるもありて、舌地沓(したじぐつ)又は六葉沓(むつばぐつ)と呼べり。江次第「亂緒藁履、塗鞭」

みち 道【名】『ち(道)に接頭語みの添ひたるもの』一通り行くための場所。往來するための所。通路。道路。【路】二出發の場所と到著の場所との間。途中。中途。半途。中道。【途】三**みちのり**(道程)の略。蜻太「道問へば一里一里と秋の暮」四道路を進みゆくこと。「道が捗取る」「道が達者」五人として、履み行ふべきすぢめ。世に立ちゆくにつきて守るべき條理。道理。義理。道徳。道義。人道。萬葉「斯くばかりすべなきものか世の中の道」六教義又は學問。「道同じからざれば、相謀らず」七才藝技術。榮花「あそびの方の人も、ふみの道の人人も召集め」八佛の道。佛道(ぶつだう)。佛教。のりのみち。榮花「御戒(かい)受けさせたまはんとて、その御用意あり。……。みちの御事なれば」九てだて。手段。方法。術。保元「合戰の道をば、武士にこそ任せらるべきに」十方ざま。方面。増鏡「御土器たびたび聞こしめす。その道にもいとはしたなう物し給ふ」

道有り【句】各自の履み行ふべきすぢめを辨へてあり。世の中に、正しき道行はる。(「道無し」に對して)増鏡「奥飛びて、數間の所に止まり、再び近づけば、又、飛びて、案内するが如きよりいふ』

はんめう(斑猫)に同じ。

みちすう 未知數【名】一數『英Unknown number 又Unknown quantity』値の知れぬ數。方程式にて、その値を算出せんとする數。二いかに成り行くべきか、豫想のつかぬこと、又その物事。

みちすがら 道次【副】『すがらは接尾語』出發の地より、到著の地までの間。道を進みながら。途中。途上。源氏「いかなりけん契ぞと、道すがら思さる」鶉衣「守りたまへ神も御旅(おたび)の道すがら」

上。路傍。字通「道づらなる人の家にとどまり」

みちづれ 道連【名】道を行くに、連れ立つこと。同行。又、同行者。同伴者。都のつと「その夜は、道づれの僧ども、數多ありしも」

みちとせ 三千年・三千歳【名】一千年の三倍。みちよ。二清元節の一曲。本外題は「忍途春雪解(おしのはるゆきどけ)」。

みちとせにーなるーてふーもも 三千年に成るてふ桃【句】も(桃)の條下を見よ。

みちとせのーもも 三千年の桃【句】もも(桃)の條下を見よ。

生(なり)の國原(くにはら)に我はありと親に申したべ心あひの風やきんだちや」新六「辛くして入りしは何ぞ桑の門(かど)道の心よその驗(しるし)あれ」

道の心【句】**だうしん**(道心)の直譯。

道の師【句】**だうし**(導師)に同じ。榮花「七日の夜御葬送、……。かやうの道の師などは、いみじき御門の御事と申せど」

道の後(しり)【句】古、京より下る道筋の遠近によりて、一地方を二つ又は三つに分ちたる、その後なる國。【道の尻】(「道の口」「道の中」に對して)「道の後」

しかどもあひ枕まく」(この歌のは、日向國を指したるにて、當時、筑紫(つくし)の南部を、北部に對して廣く「道のしり」と呼びしなり)

道の空(そら)【句】道中の身の置きどころ。通りてある土地。途中。(よるべなき感じにつきていふ)狹衣「葛の葉にまがきの霧も立添ひて心もゆかぬ道のそらかな」榮花「曉方には、御骨など、師の宮殿など取らせたまひて、……返らせたまふ道のそらもなし」

道の空路(そらぢ)【句】前條に同じ。「古語」萬葉「夢(いめ)のごと道のそらぢに別(わか)れする君」

道の直路(ただぢ)【句】まがらぬ道路。一路。夫木「青柳のかづらの里の深みどり道のただぢに春風ぞ吹く」

道の侶(とも)【句】一わが志す學藝の仲間。

みちのーかみ 道神【名】さへのかみ(障神)に同じ。

みちのーき 道記【名】たびにっき(旅日記)に同じ。

みちのーく 道奥・陸奥【名】【地】『東海・東山二道の奥に當るより、道の奥の義』我國本州の東北部の古稱。もとは、出羽の地に紙の厚ごえたるに」

みちのくにーのーおくのさうぐん 陸奥國奥將軍【名】ちんじゅふしょうぐん(鎮守府將軍)に同じ。狹衣「思ひわびてみちのくにのおくのさうぐんといふ者の妻(め)になりて」

みちのくのーちんざうしやうぐん 陸奥鎮東將軍【名】古、臨時に任命して、陸奥國と東國地方とを鎮定せしめし將軍。

みちのくやま 陸奥山【名】【地】陸前國金華山の別稱。萬葉「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山に黄金(こがね)花咲く」

「道の日記といふものは、紀貫之の土佐日記、阿佛の尼の、文をふるひ、情を盡してより、餘は、皆、佛(ほとけ)通ひて、その精粗を改むること能はず」

道の人【句】次條一に同じ。榮華「難き題出さんとて、學問せさせたる道の人にもあらず」榮花「あそびの方の人も、ふみの道の人人も召集め」

道の者【句】一その道の人。その才藝技藝の專門家。道の人。増鏡「劍などを御覽じ知る事さへ、いかで習はせたまひたるにか、道の者にも、ややたちまさりてかしこくおはしませば」二藝・娼妓。くろうと。鳳流軍配圖「私の目には、そのまま丈夫と見て樂しみ、道の者の、無いとは、思ひあはぬ仲の事」

道は須臾(しゅゆ)にも離るべからず、離るべきは道に非ず【句】『中庸に「道也者、不可須臾離也。可離非道也」とあり』道とは、日用の事物に關する條理にして、何れの事物、何れの時を問はず、離るべからざる筈の者なり。正統記「この故に、古の聖人、道は須臾も離るべからず、離るべきは、道に非ずと說けり」

道は邇(じ)きに在り、これを遠きに求む【句】『孟子の離婁上篇に「孟子曰、道在邇、而求諸遠、事在易、而求之難、人人親其親、長其長、而天下平」とあり』學問の道は、己の身に本づくべきものなるに、世人、多くは、反りて、これを外に求むるは誤れり。

に禊(ミソギ)せられし時、投げ棄てたまひし御帯より化成したりといふ神。道路の安全を守る。一名、長道磐(ナガヂノイハ)神。

みちのべ 道邊【名】**みちばた**(道端)に同じ。萬葉「道のべのうまらの末(ウレ)にはふ豆のからまる君をはかれか行かむ」新古今「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ」

みちのり 道法・道程・路程【名】道路の距離。行程。里程。

みちはか 道果【名】道のりの進度。

みちはか 道果が行く【句】道のり捗る。東海道名所記「砂原は三里ゆけば二里もどるとかや道はかのゆかぬものなり」

みちはし 道橋【名】道に掛け渡してある橋。隆信集「中川の水にせかれし道橋を渡してけりと聞くぞ嬉しき」

みちばた 道端【名】道筋のほとり。みちづら。みちのべ。みちべた。みちっぱた。路傍。慶長記「東寺の門の道ばたに、札を立てたり」

みちばち 蜜蜂【名】〔動〕**みつばち**(蜜蜂)に同じ。〔古語〕和名「蜜蜂、美知波知」

みちはづれ 道外【名】道筋を外れてあること。道理に叶はぬこと。法外。

みちばらひ 道拂・路拂【名】**さきばらひ**(先拂)【一】に同じ。

みちひ 満干【名】海水の満つることと、干(ヒ)ることと。満潮と干潮と。ひみち。

満干の珠【句】鹽滿珠(シホミツタマ)と鹽乾珠のたませても」

みち 道【名】道路を造り設く。通路を修繕す。榮花「宮司(ミヤツカサ)、さべき人人參りこみて、さまざま思しおきて仰せらる。道つくりのしる」

みち 道を拂ふ【句】通り行く道に居る雜人などを拂ひて、避けしむ。先拂(サキバラヒ)【一】を爲す。先(サキ)追ふ。榮花「我が心のかぎりは、人めかしうもてなして、道拂はせなどして」

みち 道を開く【句】通路の邪魔となる物事を拂ひのけて、案内す。啓行(カイカウ)す。路をつく。記「啓行、ミチヒラキユカム」

ちびと。案内者。記「導者、ミチビキビト」

みちびく 導く【動四他】『道引くの義』【一】道路の方向を教へ示す。道しるべをなす。先導す。案内す。萬葉「もろもろの大御神たち船(フネ)の人に導引(ミチビ)きまをし」【二】男女の間の仲立をなす。手びきをなす。とりもつ。【三】示しいざなふ。教へ示す。さとし勸む。指導す。源氏「住吉の神のみちびきたまふままに」

みちびと 道人【名】**みちびきびと**(導人)に同じ。記「導者、ミチビト」

みちびと 道人【名】**みちゆきびと**(道行人)に同じ。「火線。

みちびーなは 道火繩【名】道火の線。導

みちびらき 道開【名】道ぶしん成りて、交通を開始すること、又その儀式。

みちひる 滿干る【動四自】潮滿ち、また干る。源氏「千ひろともいかで知らん定なく滿ち干る潮ののどけからぬに」

みちぶぎやう 道奉行【名】德川幕府の職制にて、若年寄支配の下に、江戸府内の道路と水道との事を掌りしもの。明和五年に廢止せり。一話一言「江戸大路の道つくらるる時は、道奉行より札をたて」

みちぶしん 道普請【名】道路を造り、又は修繕すること。みちづくり。

みちぶり 道觸【名】**みちゆきぶり**(道行觸)【一】の略。赤染衛門集「道ぶりのたよりばかりは待ちもせん融けては見えじ雪の下草」

みちべ 道邊【名】**みちばた**(道端)に同じ。

源氏「道道の物の上手ども」增鏡「御修法(ミヅホ)の僧どもをはじめ、道道の祿賜はる」

みちみち 道道【副】道路を進み行きながら。途中。途中にて。道すがら。狂言「渡」「道道、名所あらば、語れ」鳳谷文選「露川」「草刈の道道こぼす野菊かな」

みちみち 【貌】**みしみし**に同じ。

みちみちし 道道し【形二】道【一】に關係してあり。道義にかなへるさまなり。源氏「三史・五經の道道しき方を、明かにさとりあかさんこそ、愛敬(アイギヤウ)なからめ」

みちむらりう 通村流【名】和樣の書道の一派。世尊寺流より出づ。中院通村(ナカノヰンミチムラ)を祖とす。

みーぢん 微塵【名】【一】こまかき塵。微細なる塵埃。びぢん。【二】〔佛〕物質の、甚だ微細なるもの。極微なるを極塵(ゴクジン)といひ、微塵は、その七倍、更に七倍せるを、金塵といふ。太平記「一(ヒト)金剛力士、杵を以て、この山を、微塵の如く打碎く」【三】微細なる物。こみぢん。こなみぢん。みぢんこっぱい。こなごな。太平記「楯の板を、微塵に打碎かるるのみに非ず」【四】**みぢんじま**(微塵縞)の略。

みーぢん 微塵卿か【句】『同義の語を重ねたるもの』微塵程も。いささかも。櫻鍔恨鮫鱗「あいつばかりは、ああした不心底があらうとは、微塵卿か思はねども」

みーぢん 微塵積りて山となる【句】「塵積りて、山となる」に同じ。〔諺語〕

みーぢん 味塵【名】〔佛〕五塵又は六塵の

みぢん-こはひ 微塵粉灰【名】**みぢん**(微塵)【三】を强めていふ語。曾我會稽山「微塵粉はひになればとて」

みぢん-じま 微塵縞【名】經(タテ)・緯(ヨコ)共に、同一なる二色の絲を、一本おきに織り合はせて、極めて、細かなる縞を織り出し、一見、霜降(シモフリ)などの如く見ゆるもの。絲の色によりて、茶微塵・薫微塵などの名あり。みぢん。はけめ。

みぢん-せつ 微塵說【名】〔理〕**びぢんせつ**(微塵說)に同じ。

みぢん-ぼう 微塵棒【名】微塵粉に砂糖を加へて煮固め、細長く、棒狀に振ぢたる駄菓子。

みぢん-も 微塵も【副】塵ほども。少しも。

みぢん-りう 微塵流【名】劒術の一派。諸岡一羽の門人なる根岸菟角を祖とす。

みちもせ 道も狹【名】『道も狹(セ)に』の意義を誤解せしに出づ』道路の全部。みち。梅暦「胸苦しくも恥かしき貌さし入るる懷の、泪にしめる道もせや」

みちもとめーぐさ 道求草【名】〔植〕**うつぎ**(空木)に同じ。

みちもり 道守【名】**ちもり**(道守)に同じ。萬葉「追はむとは千たび思へどたわや女のわが身にしあれば道守の問はむ答をいひやらむすべを知らにと立ちてつまづく」

みーちやう 御帳【名】**ちやう**(帳)【二】の敬稱。神殿又は帳臺などのにいふ。枕「后(イサ)の宮には、縫殿より、御藥玉(オホムダマ)とて、いろいろの絲を組み下げて參らせたれ

を喰ふ驛路(ウマヤ)の氣散じは、高麗に咄ものして辿り行く程に」

みちくさ 道草を摘む【句】【一】道ばたの草を摘み取りつつ、暇をつぶす。【二】前條【一】に同じ。津國女夫池「行きやすらひて、道草を摘めど、いづれをいづれとも」

みちくだり 道下【副】歩み行く途中、處處にて。炭俵「桃隣「道くだり拾ひ集めて案山子(カガ)かな」

みちくらべ 道競【名】壺打(ツボ)の類。和名「弥道、美知久良閇」

みちさ 未知差【名】〔數〕『英 Unknown difference』對數計算に於ける、未知數の

ば、御帳たてまつる身屋(ヤモ)の柱の左右に附けたり」 源氏「御帳の帷子(カタビラ)などを御帳臺の御座(オマス)【句】みちやうだい(御帳臺)に同じ。 榮花「御帳のおましの下などを御覽ぜば」

みぢやう 未定【名】みてい(未定)に同じ。 運歩色葉集「未定、ミヂヤウ」

みぢやく 味著【名】〔佛〕『無量壽經の卷下に「雖レ有二此食一實無二食者一但見レ色聞レ香自然飽食、身心柔軟、無レ所二味著一」とあり』食味に執著すること。 正徹記「地よりも、甘泉湧出す。味、酥蜜の如し。……これを嘗めて、味著を生ず」

みぢやくくわぶつ 未著貨物【名】未だ到著せぬ貨物。

みぢやくしやうひん 未著商品【名】一未だ到著せぬ商品。未著品。二簿記の勘定科目の一。未著の商品を整理するもの。未著品。

みちやくひん 未著品【名】前條に同じ。

みちやなぎ 道柳【名】〔植〕にはやなぎ(庭柳)に同じ。

みちゆき 道行【名】一道を行くこと。 萬葉「若ければ道行知らじまひはせむしたべの使負ひて通らせ」 長能集「道ゆきに見れどもあかぬ紅葉かなうべこそ人も家居せりけれ」 二旅行の途上の光景と、これに對する悲喜の感とを、多くは、七五調等の律語體にて敘したる文。軍記物・謠曲・淨瑠璃などの中に見ゆ。 三淨瑠璃の道行を歌舞伎に移し、男女の情死などせんとして、連れ立ちて旅行するさまを演ずるもの。 五人女「曾我の道行を語り出す」 四事の順序・手續。すぢみち。 五被風(ヒフウ)に似て、襟の極めて細き、コオトの如きもの。多く女の間に行はれ、男は僧侶・茶人など用ふ。 六雅樂にて、舞人の、樂屋より舞臺に行き向ふ間に奏する音樂。これに用ふる舞は、蘇合・太平樂・賀殿・青海波・皇麞・菩薩・陪臚・妓樂・新羅陵王・賀王恩・勇勝・越殿樂なり。みちき。

みちゆきうら 道行占・路行占【名】みちうら(道占)に同じ。 萬葉「玉鉾の路行占にうらなへば妹にあはむと吾に言ひつる」

みちゆきこひのさんどがさ 道行戀三度笠【名】常磐津節の歌曲の一。梅川と忠兵衛との情事を記せるもの。

みちゆきごころも 道行衣【名】旅行する時の著物。たびごろも。 夫木「春雨はいたくな降りそ旅人の道行衣濡れもこそすれ」

みちゆきさんどがさ 道行三度笠【名】近松門左衛門作の淨瑠璃「冥途飛脚」の道行の段。

みちゆきずり 道行摺【名】一みちゆきぶり(道行振)一に同じ。 狹衣「思ひかけずあさましかりし道ゆきずりに、心うかりし法(ノリ)の師の足もと」 二道を行く時、衣の、草に摺られて染まること。 堀河「ひまもなくまく萩しげれる秋の野は道ゆきずりも嬉しかりけり」

みちゆきづと 道行苞苴【名】旅行して、持ち歸りたるみやげ。いへづと。 萬葉「をみなへし秋萩たをれ玉鉾の道ゆきづとと乞はむ子のため」

みちゆきびと 道行人・路行人【名】道を行く人。みちびと。たびびと。 萬葉「戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉鉾の路行人にことも告げけむ」 拾遺「夏山の蔭をしげみや玉鉾の道ゆき人も立ちとまるらん」

みちゆきぶり 道行觸【名】一すれちがふこと。途中にて出逢ふこと。みちぶり。 萬葉「玉鉾の道ゆきぶりに思はぬに妹を相見て戀ふる頃かも」 古今「春くれば雁(カリ)歸るなり白雲の道ゆきぶりに言やつてまし」 二みちのき(道記)に同じ。

みちゆきぼん 道行本【名】道行二を記したる本。 新版歌祭文「さっきに買うた、清十郎の道行本」

みちよ 三千代【名】みちとせ(三千年)に同じ。

みちよぐさ 三千代草【名】〔植〕みちさせぐさ(三千年草)に同じ。 藏玉集「三千代草。桃。けふごとに酒に浮べて飲む人や三千代の草の名を祝ふらん」

みちより 道寄・路寄【名】道序(イヂヨ)に立ち寄ること。よりみち。 狂言「荷文「一人遣れば、道寄をするやら、遲い程に、二人遣る」 「けゆくこと。

みちわけ 道分・路分【名】道を奥深く分け入つた分道分の石【句】山奥・野道などの道案内(ニ)の石。みちいし。 吉野忠信「道わけの石、筆の跡」

みちわる 道惡・路惡【名】ぬかりなどして歩みにくきこと、又その道。

みちをしへ 道敎・路敎・斑猫【名】〔動〕はんめう(斑猫)に同じ。

みつ 【名】一みつひに同じ。二鳥類の頸の横に腰部に續く部分と、縱に陰部を蔽へる部分との、背面にて、丁字形をなして交叉せる處。よつつじ。よつ。 八笑人「又飛込まれようかと思って、この通り褌(フンドシ)の三つを押へづめだあ」

みつ 【名】一みつひに同じ。二鳥類の頸の横に腰部に續く部分と、縱に陰部を蔽へる部分との、背面にて、丁字形をなして交叉せる處。よつつじ。よつ。 八笑人「又飛込まれようかと思って、この通り褌(フンドシ)の三つを押へづめだあ」

みつ 密【名】一外部に漏れ聞えぬこと。祕密。二隙間の無きこと。まばらならぬこと。緻密。濃密。(疎に對して)三手ぬかりの無きこと。綿密。周密。四〔佛〕みつけう(密敎)に同じ。(顯(ケン)に對して)

みつ 蜜【名】一はちみつ(蜂蜜)に同じ。 謠曲「口に蜜あり、腹に劍あり」 二みつざたう(蜜砂糖)の略。

みつ 御津【名】つ(津)の美稱。 萬葉「住吉(スミノエ)の三津(ミツ)に舟のりだ渡り」 伊勢「難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる船」

みつ 御津・三津【名】一〔地〕『前條の語の義轉。然るに、三津とも書くより、難波には、高津(コウヅ)・敷津(シキ)・難波津の三の津のあるための名なりといふ俗説も生ずるに至れり』 なにはづ(難波津)に同じ。 萬葉「いざ子どもはやも大和へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ」 二みつのはま(御津濱)に同じ。 三備前國の六郡の一。郡役所を石井村に置く。

みつ 三【數】一一に二を加へたるもの。みっつ。三(ミ)。 二生れてより三年を經たる年齡。三歲。 「の鳥」に同じ。 二ながら保てる鳥【句】〔動〕「三の賓に同じ。

みつ 【名】一みつひに同じ。二鳥類の頸の横に腰部に續く部分と、縱に陰部を蔽へる部分との、背面にて、丁字形をなして交叉せる處。よつつじ。よつ。 八笑人「又飛込まれようかと思って、この通り褌(フンドシ)の三つを押へづめだあ」

みつ 密【名】一外部に漏れ聞えぬこと。祕密。二隙間の無きこと。まばらならぬこと。緻密。濃密。(疎に對して)三手ぬかりの無きこと。綿密。周密。四〔佛〕みつけう(密敎)に同じ。(顯(ケン)に對して)

みつ 蜜【名】一はちみつ(蜂蜜)に同じ。 謠曲「口に蜜あり、腹に劍あり」 二みつざたう(蜜砂糖)の略。

みつ 御津【名】つ(津)の美稱。 萬葉「住吉(スミノエ)の三津(ミツ)に舟のりだ渡り」 伊勢「難波津をけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる船」

みつ 御津・三津【名】一〔地〕『前條の語の義轉。然るに、三津とも書くより、難波には、高津(コウヅ)・敷津(シキ)・難波津の三の津のあるための名なりといふ俗説も生ずる

三の舎を避く【句】「三舎(サンシャ)を避く」に同じ。 朝衣「我、常に日を驚かして、三つの舎を避くるに至る」

三の瀬【名】みつせがは(三瀬川)に同じ。 源氏「なき人を慕ふ心に任せても影見ぬみつの瀬にや惑はん」

三の寶【句】■「三種の神器(ジンキ)に同じ。 新葉「四方の海浪も治まるしるしとて三の寶を身にぞ傳ふる」 ■【佛】さんぼう(三寶)■に同じ。

三の寶の鳥【句】【動】ぶつぼふそう(佛法僧)■に同じ。 枕内侍日記「とにかくにかしこき君が御代なれば三の寶の鳥も鳴くなり」

三の袂【句】【佛】「三つの衣」に同じ。 講曲(女郎花)「日もかげろふの岩清水、苔の衣も妙(タヘ)なりや。三つの袂に影映る」

三の綱【句】【佛】三障(サンショ)■を、繋縛(ケバク)の綱に譬へていふ語。みつのきづな。 講曲(春栄)「羊鹿牛車(ようろくぎうしゃ)に乗り、火宅の界(サカヒ)を出でずして、煩惱・業(ゴフ)・苦(ク)の三つの綱に繋がれ來ぬるはかなさよ」

三の友【句】さんいう(三友)に同じ。 源氏「琴(キン)をぞ、なつかしき語らせ人と思へると聞ゆれば、三の友にて、今一くさや、うたてあらん」

三の階(シナ)【句】【佛】「三道の寶階(ガカイ)」に同じ。 榮花「御階の有樣、かの持地菩薩の構へたまへりけん、金・銀・水精の三のはしに劣らず見えたり」

三の始【句】さんし(三始)■の直譯。三の朝。 夫木「あら玉の年も月日も行きかへり三のはじめの春は來にけり」

三の花【句】『六(ム)の花』に對していふか』しも(霜)の異稱。

三の鼻綱【句】三本にて括り合はせたる鼻繋(ビケイ)。

三の光【句】さんくわう(三光)■に同じ。 夫木「久方の空の限もなき世かな三のひかりのあらんかぎりは」

三の船【句】詩・歌・管絃の三者に秀でたる人を、分載せし三隻の船。藤原道長、山城國の大井川遊覽の時、又、白河天皇この川に行幸の時、これを泛べし由、前者は大鏡と古今著聞集とに、後者は古今著聞集に見えたり。三舟(サンシュ)。

三の道【句】■さんさい(三才)■に同じ。 新『三才、ミツノミチ』 ■【佛】さんづ(三途)■に同じ。 源氏「天に生るる人の、あやしき三のみちに歸るらん一時(イトキ)に思ひながらへて、今日永く別れ奉りぬ」 ■【佛】さんじょうけう(三乘教)に同じ。 四さんけい(三徑)■に同じ。 源氏「この淋しき宿にも、必ず分けたるあとなる、三のみちと辿る」

三の山【句】【地】さんざん(三山)■に同じ。 盛衰記「熊野參詣……。三位の入道、三の山の參詣、事ゆゑなく遂げられければ」 傾城反魂香「月はかけても、三の山、婆婆のたよりは片便宜(カタビン)」

三の病【句】人間一生の生・老・死の三を病としていふ語。しく(四苦)參照。 拾玉「さとりゆくひじりの位それならで三のやまひをたれか望まん」

三の世【句】【佛】さんぜ(三世)に同じ。 講曲(愛宕空也)「三つの世も、ただ一佛ぞ、一乘の法(ノリ)も妙(タヘ)なる一念阿彌陀佛と唱へたまへや」

三の輪【句】【佛】『三輪(サンリン)を直譯したるもの。三輪の輪は、法輪の輪と同じく、佛は、これを以て、衆生(シュジョウ)の惑業(ゴフ)を破摧するによりていふ』さんごふ(三業)に同じ。 講曲(三輪)「三の輪は、清く淨きぞ唐ころも」

三の緒【名】さんげん(三絃)■四に同じ。「四(シ)の緒」、「六つの緒」參照。 聖德太子繪傳記「雪折竹の一ふし唄ふ聲のあや、調べあはせし三の緒を」

みつ 滿つ・充つ・盈つ【動四自】足らぬ所無くなる。缺けたる所無くなる。十分にひろがる。一杯になる。行きわたる。ふさがる。 萬葉「潮の滿つを見たまひて」 源氏「年頃の願の滿つここちして」 太平記「帝德を稱し奉る聲、洋洋として、耳に盈てり」

みつ 滿つ・充つ・盈つ【動上二自】前條に同じ。 太平記「潮の滿つる時は、岩の上にあがり」 俳諧古選(宋阿)「物ごとの滿つるに卑し十三夜」

盈つるを缺く【句】「天道(テンダウ)は盈つるを虧く」を見よ。

盈つれば虧(カ)く【句】「月、盈つれば虧くに同じ。 諺語】

みつ 滿つ・充つ・盈つ【動下二他】滿つやうにす。みたす。 萬葉「玉敷かず君が悔いていふ堀江には玉敷き滿ててつぎて通はむ」 平家「この瀧に三七日打たれて、慈救(ジク)の三洛叉を滿てうと思ふ大願あり」

みづ 水【名】【化】■酸素と水素との化合によりて成り、無色・透明にして、無味・無臭、常温にては液狀をなして、地表の約四分の三を占め、瓦斯體となりて、空氣中にも混在し、又、動・植物體の主要部を組成せる物質。百度にて沸騰し、四度にて最大の密度となり、零度にて氷結す。 ■『水を飲ませて休まする義』相撲(スマヒ)にて、勝負決せずして、取り疲れたる時、引き離して、暫くの間休まること。 ■跡かたをもとどめずはかなくなることの譬。 谷曲(恨葛藤高尾)「これまで盡した忠義も水、短氣な事して下さりますな」

水至って清ければ、則ち魚無し【句】『孔子家語及び東方朔の客難に「水至清則無魚、人至察則無徒」とあり』人あまりに明察なれば、畏憚せられて、友無き譬。 諺語】

水到りて、魚行く【句】『餘冬序錄に「東坡與人書、問及二生一事不レ決、輒自解云、水到渠成、不須二煩慮一、愚謂、水到魚行、水到渠成、其意同也、皆事任二自然一、時至輒濟之意」とあり』事物は、時節到來すれば、成る譬。 諺語】

水到りて、渠(キョ)成る【句】『朱子文集に「答二路德章一曰、所レ喩水到渠成之說、意思畢竟在二渠上一未レ放、水東流時、已先作二屈曲整備了矣」とあり』學を積めば、自ら道の修まる譬。 諺語】

水打つ棹【句】水にさをさす棹。 實國集「あまをぶねさして入江の菰がくれ水打つ棹の音のみぞする」

水落つ【句】『入蜀記に「十二月正月、水落石盡出時」、蘇軾の後赤壁賦に「山高月小、水落石出」とあり』谷川・水田などの水量減ず。 蕪村「水落ちて細脛(ホソハギ)高き案山子(カカシ)かな」

水送り、山迎ふ【句】『吳融の詩に「水送山迎入二富春一、川如レ畫晩晴新」とあり』山水の間を過ぎゆく形容。

水が切れる【句】■水無くなる。水涸れて無くなる。 ■水にて洗ひたる物、水氣が殆ど殘らぬやうになる。

水が垂れさう【句】みづみづしく美しき容貌の形容。

水が出る【句】■水が、地中より湧き出で、又は水道の口などより流れ出づ。 ■洪水となる。出水(シュッスイ)す。

水清ければ、魚棲まず【句】「水至って清ければ、則ち魚無し」に同じ。 諺語】 落葉「白河の水清ければ魚棲まず濁る田沼の昔戀しき」

水滴りて、石穿たる【句】『鶴林玉露に「一日一錢、千日千錢、繩鋸木斷、水滴石穿」とあり』水滴も積れば、石に孔を生ずるが如く、何事も、漸を積めば、大事に至る譬。 諺語】

水と魚【句】「魚と水」に同じ。 諺語】

水とす【句】流產せしむ。

水と火【句】互に調和せぬ譬。 諺語】

火に油が交ったやう【句】調和せぬ譬。

水に飢う【句】喉がかわく。渇す。 名義抄「渇、水ニウエタリ・水ナシ・ウウ」

水に鏡せず【句】『人に鏡す』 『靈子に「君子不レ鏡二於水一而鏡二於人一」とあり』他人の行爲を龜鑑とせよ。

水に數書く【句】「行く水に數書く」を見よ。

水にす【句】消え失せしむ。徒(イタヅラ)にならしむ。水泡に歸せしむ。 甲陽軍鑑「跡の勝利を水にせぬやうにさへあれば、末代まで、名は殘る」

水に流す【句】過去の事を咎めぬ譬。「今までの事は、何事も、水に流す」

水に爲す【句】胎兒を流産せしむ。墮胎す。歌祭文「子も孫も可愛(カヒ)といふに、初孫(ウヒマゴ)を、日の目も見せず、水になせとの胴慾を教へる母が心の中は」

水になる【句】徒(ツイ)になる。水泡に歸す。妹背山女庭訓「命ながらへ居るならば、一世一度の送物、五丁・七丁續く程美美しうせんと、樂みに思うた事は引きかへて、水になったる水葬禮」

水に離れし魚【句】死ぬるより外なき譬。〔諺語〕

水に文字を書く【句】次條に同じ。

水に畫(カ)く【句】『涅槃經の卷一に「是身念念不レ住、猶如二電光瀑水幻炎一。亦如レ畫レ水。隨畫隨合」とあり』努力しても、はかなく消え去る譬。行く水に數書く。

水の秋【句】秋の景色の、水に映りて見ゆるさま。續千載「唐錦立田の川のもみぢ葉に水の秋こそなほ殘りけれ」

水の文(アヤ)【句】水面にあらはるる波紋。謠曲(水無月祓)「步みよるべの水のあや」

水の泡【句】一水面に浮ぶ泡。みなわ。二消えやすくはかなき物事の譬。泡沫(ウタカタ)。古今「水の泡の消えて憂き身といひながら流れてなほも願まるるかな」三折角の物事の、徒(イタヅ)になること。水泡に歸すること。今宮心中「きさめと已を夫婦にして、末では世帶に嫉けんと、この年寄が苦に持ったも、斯う破れては、水の泡」

水の色【句】〔動〕ます(鱒)を云ふ。〔女「の語」〕

水の上に數書く【句】消えやすくはかなき譬。行く水に數書く。萬葉「水の上に數書くごときわが命を妹に逢はむとうけひつるかも」

水の海【句】みづうみ(湖)に同じ。散木集「水の海と落つる涙はなりにけりあふべきしほもなきと聞くより」

水の影【句】水面に映れる物の影。芭蕉「かきつばた似たりや似たり水の影」

水の神【句】水を司るといふ神。みなかみ。水神(スヰジン)。紀「水神罔象女、ミヅノカミミヅハノメ」

水の烏【句】〔動〕う(鵜)の異稱。萬玖波集「夜川にや水の烏を遣ふらん」

水の烟【句】みづけむり(水烟)に同じ。爲尹千首「淀川や水の烟のあけくれに立ち消えて鳴く村千鳥かな」

水の心【句】水を、心のあるものとしていふ語。袋草子「白川の水の心もいにしへの秋をぞ今日は思ひ出づらん」

水の如し【句】「門は市の如く、心は水の如し」を見よ。

水の白浪に【句】『新古今集の春上に「降りつもる高ねのみ雪儕けにけり清瀧川の水の白浪」とあるに本づく』若返るさまに譬へていふ。增鏡「永福門院の御さしつぎの姫君、はや御さかりも過ぐる程なりしを、この法皇に參らせ奉らせたまへりしが、かひがひしく水の白浪に若やがせたまひて」

水の民【句】『晏子春秋の諫上篇第一に「河伯以レ水爲レ國、以二魚鼈一爲レ民」とあるに本づく』うを(魚)の異稱。散木「おろされてなますけありと見つるより水の民さへ戀しきやなぞ」

水の垂る様(ヤウ)【句】艷(ヤウ)ありて、極めてうるはしき形容。小島の日すさび「水の垂るやうなる宵の鍬形、……夕日に輝く」

水の月【句】一すあげつ(水月)二に同じ。二目には見ゆれど、手に取ること能はざる物の譬。謠曲采女「及なき水の月取る猿澤のいける身と思(オモ)すかや」

水の月取る猿【句】「猴猿(コウエン)、水月を捉ふ」に同じ。〔諺語〕

水の月取る猿猴(エン)【句】前條に同じ。〔諺語〕雙生隅田川「水の月取る猿猴は、及ばぬ事の譬ながら」

水の手(テ)【句】自然の流を利用し、又は、殊更に引きて、城中の飲用、內地の灌漑又は消火などに用ふる水。

水の出端(ナテ)【句】一出水の出はじめ。みづばな。一代女「お年寄られたれば、物事氣みじかなれども、それは、水の出ばなの如く、跡も無く御機嫌なほるなり」二若き男女の思ひ募りて、戀ひ慕ふ譬。新版歌祭文「若い水の出端には、そこらの義理も絲瓜(ヘチマ)の皮と」

水の中、火の中【句】「火の中、水の底」に同じ。心中宵庚申「水の中、火の中でも、先の世までも、此方(オナタ)樣と、夫婦(フウフ)になってゐる」〔諺語〕

水の流と人の身【句】次條に同じ。

水の流と身の行方【句】人の運命は、流れ行く水と同じく、變化多くして、豫測しがたし。〔諺語〕冥途飛脚「水の流と身の行くへ、戀に沈みし浮名のみ、難波に遺し留まりし」

水の雞【句】〔動〕『水雞の字の直譯』くひな(水雞)に同じ。草根集「夕まぐれ入江にかかる船ばたをたたくやいづれ水のものにはとり」

水の花【句】一蓮の花。みづきばな。二〔動〕すずき(鱸)の異稱。〔女の語〕

水の春【名】春の景色の、水に映りて見ゆるさま。古今「波の花沖からさきに散り來(ク)めり水の春とは風やなるらん」

水の低きに就くが如し【句】『孟子の梁惠王上篇に「民歸レ之、由二水之就一下一沛然誰能禦レ之」とあり』自然の勢の止めがたき譬。

水の様【句】一汗を流す形容。源氏「水のやうにわななきおはす」同「水のやうに汗も流れて」二凍えて冷き譬。

水の戰(イクサ)【句】冷汗を流してわななくこと。〔古語〕空穗「水のわななきして、汗にしとどに濡れて、屈まり臥したまへれば」

水の尾【句】みを(澪)に同じ。盛衰記「矩(ノリ)に渡して過(スギ)すな。水の尾に附いて渡せや、渡せよ」

水は窪(クボ)に身を寄せ、鳥は梢を慕ふ【句】物おのおの、相當の處に安んずる譬。〔諺語〕色音論「世間の語にも、水は窪に身を寄する、鳥は梢を慕ふとは、よくこそこれを言はれたれ」

水は逆様(サカサマ)には流れず【句】『「水をして逆流せしむ」を見よ』自然の道理に背きては、何事も成就せぬ譬。飢渴八島「水は逆さまには流れずといふに、一生、男を持たねばとて、姉をさし置く緣やある」

水は方圓の器に隨ふ【句】一韓非子の外儲說傳の卷一に「孔子曰、爲二人君者一、猶二盂也一、民猶二水也一、盂方水方、盂圓水圓」、荀子の君道篇に「君者槃也、槃圓而水圓、君者盂也、盂方而水方」とあり』民の善惡は、君の善惡に隨ふ譬。〔諺語〕二實語教に「水隨二方圓器一、人依二善惡友一」とあり』人の性質の、境遇又は交友の如何によりて變化する譬。〔諺語〕三事の、思ふがままになる譬。〔諺語〕醒睡笑「元日の夜、湖を引傾けて飲むと夢見る。目さめて思ふ、水は方圓の器に隨ふなれば、思ふに、思ふ事かなはんといふ告なるかやと」

水廣ければ、魚游(ア)ぶ【句】『貞觀政要に「林深則鳥棲、水廣則魚游」とあり』德あれば、人おのづから歸服する譬。〔諺語〕

水も狹(セ)に【句】水面も狹きほどに。發聲「水もせに浮きぬる時はしがらみのうちのものとも見えぬもみぢ葉」

水も溜(タ)らず【句】刃の切味(キレアヂ)の鋭き形容。狂言武惡「此御太刀でもつて……水もたまらずぶちはなして御座る」

水も飲まれず【句】生計の立ちゆかぬ形容。重井筒「ええ、鈍(ドン)げな一言、おれがいはねば、もうそれ程、間(マ)があく。……これでは、水も飲まれぬ」

水も洩さず【句】一攻圍・防禦又は警戒などの、少しの隙間も無きほどに、嚴重なる形容。蟻の這ひ出す隙も無し。二男女の間柄等の極めて親密なる形容。伊勢「などてかく逢ふ則(ソク)かたみになりにけん水洩さじと結びしものを」

水洩るまじげ【句】前條㊀のさま。榮花「三位殿は思しわくる方なり、水もるまじげにて過させたまふ程に」

水能く舟を載せ、又舟を覆(クツガヘ)す【句】『荀子の王制篇に「君者舟也、庶人者水也、水則載レ舟、水則覆レ舟」とあり』君は、民によりて立ち、又民によりて亡ぶる譬。「諺語」

水を浴(ビ)す【句】㊀水を、相手にそそぎ掛く。㊁次條に同じ。淀鯉出世滝徳「請け出すといふその日より、衣裳をも、皆、町風(マチブリ)に、縫針の茨木(イバラキ)屋より嫁入とて、婿は八幡(ヤハタ)の石清水(イハシミヅ)あびせませんと非筒屋の亭主は逃る」

水を祝ふ【句】水祝(ハヒヰ)をなす。一茶「逃げしなや水祝はるる五十聲」

水を得【句】水泳の術に達す。最明寺殿百人上臈「いかに水を得たればとて、三里・五里は泳がれず」

水を打つ【句】㊀水をまく。打水(ウチミヅ)をなす。太鼓「水打って露こしらへる門邊かな」㊁聽衆の熱心になりて、靜まり返りたる譬。

水を落す【句】田などに湛へたる水を流しやる。太鼓「小山田の水落す日やしたり顏」

水を切る【句】水にて洗ひたる物を、水氣の殆ど殘らぬやうにす。

水を括(クヽ)る【句】水を括染(クヽリゾメ)にす。古今「ちはやぶる神代も聞かず立田川からくれなゐに水くくるとは」

水を呉れる【句】水賚(ミヅヲ)を行ふ。傾城反魂香「重ねて詮議には、水を呉れる、用心せよ」

水を差す【句】㊀湯を微温(ヌル)くするため、又は濃き液體を薄くするために、水を注ぎ入る。㊁睦じき間柄を裂き、又は成立しかけたる相談を破らしむるやうに仕向く。吾吟我集「片口に怨はいはじわが中へ水さす人のよるも知らねば」

水をして、逆流せしむ【名】『管子に「不レ明二於決塞一而欲二嚴レ衆移レ民、猶レ使二水逆流一」とあり』自然の道理に背く譬。「水は逆樣(サカサ)に流れず」參照。

水を背にして、陣を張る【句】「背水(ハイスヰ)の陣」に同じ。太平記「韓信が水を背にし陣を張りしは、此なり」「よ。

水を樂む【句】「智者は水を樂む」を見よ。

水を流す【句】㊀水を流れしむ。㊁水の流るる形を、繪などにてあらはす。榮花「唐衣(カラギヌ)・裳の腰など、山を立て、水を流し、おきぐちをし、螺鈿蒔繪をし」

水を飲む【句】㊀「菽を嚼り、水を飲む」を見よ。㊁溺れて、水、多く口に入る。八笑人「川へ遊さに倒れ込む。……水も、よっぽど呑んだらう」

水を離れた河童(カハツパ)【句】活動力を失ひたる譬。「諺語」

水を向ける【句】相手の心を或物事の方に向はしむるやうに誘ふ。もちかく。いざなふ。膝栗毛「なう、おくんさんと、水を向けると」

水をむすびて、石を打つ【句】『李嶠遠の運命論に「張良……游二於群雄一、其言也、如二以レ水投レ石、莫二之受一也、及レ其遭二漢祖一也、其言也、如二以レ石投レ水、莫二之逆一也」、日本書紀の推古天皇の條に「有レ財之訟、如二石投レ水、乏者訟、似二水投レ石一」とあり』努力の効果なき譬。相撲集「言ひ出でて心の中にくだくれば水をむすびて石や打つらん」

水を貰ふ【句】近隣の家などより、水を分けて貰ふ。俳諧新選雅因「五月雨や水を貰ひに峯の寺」

水を遣る【句】草木を養ふために、水を灌ぐ。俳諧新選(瓜流)「日ざかりに水遣る畑の暑さかな」

水を論ず【句】水論(ミヅロン)をなす。水爭(ミヅアラソヒ)をなす。書經「田に水まかする頃、村人、水を論じて、とかく爭ひて」

水を割る【句】濃き液體を薄くするために、水を加ふ。「酒に、水を割る」

みづ【名】針の、絲を通すための孔。めど。みぞ。

「不レ明二於決塞一而欲二嚴レ衆移レ民、猶レ使二水逆流一」とあり』自然の道理に背く譬。「水は逆樣(サカサ)に流れず」參照。

水を背にして、陣を張る【句】「背水(ハイスヰ)の陣」に同じ。太平記「韓信が水を背にし陣を張りしは、此なり」「よ。

水を樂む【句】「智者は水を樂む」を見よ。

水を流す【句】㊀水を流れしむ。㊁水の流るる形を、繪などにてあらはす。榮花「唐衣(カラギヌ)・裳の腰など、山を立て、水を流し、おきぐちをし、螺鈿蒔繪をし」

水を飲む【句】㊀「菽を嚼り、水を飲む」を見よ。㊁溺れて、水、多く口に入る。八笑人「川へ遊さに倒れ込む。……水も、よっぽど呑んだらう」

水を離れた河童(カハツパ)【句】活動力を失ひたる譬。「諺語」

水を向ける【句】相手の心を或物事の方に向はしむるやうに誘ふ。もちかく。いざなふ。膝栗毛「なう、おくんさんと、水を向けると」

水をむすびて、石を打つ【句】『李嶠遠の運命論に「張良……游二於群雄一、其言也、如二以レ水投レ石、莫二之受一也、及レ其遭二漢祖一也、其言也、如二以レ石投レ水、莫二之逆一也」、日本書紀の推古天皇の條に「有レ財之訟、如二石投レ水、乏者訟、似二水投レ石一」とあり』努力の効果なき譬。相撲集「言ひ出でて心の中にくだくれば水をむすびて石や打つらん」

水を貰ふ【句】近隣の家などより、水を分けて貰ふ。俳諧新選雅因「五月雨や水を貰ひに峯の寺」

水を遣る【句】草木を養ふために、水を灌ぐ。俳諧新選(瓜流)「日ざかりに水遣る畑の暑さかな」

水を論ず【句】水論(ミヅロン)をなす。水爭(ミヅアラソヒ)をなす。書經「田に水まかする頃、村人、水を論じて、とかく爭ひて」

水を割る【句】濃き液體を薄くするために、水を加ふ。「酒に、水を割る」

みづ【名】針の、絲を通すための孔。めど。みぞ。

みづ【名】〔植〕蓼麻(クサ)科に屬する草。高さ一尺餘に達す。莖は粘汁に富みて、柔く、葉は互生し、不等邊の卵形をなして、先端尖り、鋸齒あり。花は葉腋より生ずる花軸に簇生す。我國山間の濕地に自生す。あをみづ。みぞな。

みづ 美豆【名】〔地〕山城國綴喜(ツヾキ)郡の村。古、美豆の御牧とて、馬寮附屬の牧場たりし頃は、全部、木津川の西岸に位し、八幡(ヤハタ)に接しゐたれども、近代、水脈の變化によりて、その一部は、淀町に續くに至り、久世(クゼ)郡に屬して、御牧(ミマキ)村といふ。榮花「くらぶべき駒もあやめの草もみな美豆の御牧に引けるなりけり」

みづ 瑞【接頭】みづみづしくうるはしき意。記「汝(イマシ)のみづの小佩(ヲビト)は、誰かも解かむ」祝詞(大殿祭)「瑞の八尺瓊(ヤサカニ)の御吹(ミフキ)の五百(イホ)つ御統(ミスマル)の玉」記「瑞宮、ミヅノミヤ」

みづ-あか 水垢【名】水中に溶解せる物の、容器に沈澱附著し、又は水面に浮べるもの。又、水中の微細なる苔藻。みあか。みしぶ。俳諧新選(蒼舒)「水垢の白けてへげる暑さかな」

水垢が拔く【句】垢拔(アカヌケ)す。小町踊「水垢の拔けしや蓮の花の色」

みづ-あげ 水揚【名】㊀にあげ(荷揚)に同じ。日本永代藏「この濱に、西國米水揚の折節」㊁切り取りたる、植物の一部に、水を吸收せしめて、永く凋まぬやうにすること。又その方法。生花(イケバナ)などに、その必要多し。㊂年若き娼婦の、始めて男子に接すること。はつどこ。「水上」一代男「吉崎樣と申す太夫樣、今日、水揚にて、丸屋七左衞門方に御出でなされて」

みづ-あげ-いし 水揚石【名】鉢石の斜の後方に据ゑて、手水鉢に、水を汲み込む時に上(ア)る石。

みづ-あさがほ 水朝顏【名】〔植〕みづおほばこ(水車前草)に同じ。

みづ-あさぎ 水淺黃・水淺葱【名】淺葱色よりは淡く、水色よりは濃き色。

みづ-あさみ 水葱【名】〔植〕さはあぎみ(澤蔥)に同じ。

みづ-あし 三足【名】㊀動物の、三本の足を有せること、又その物。三足(サンソク)。㊁かなわ(金輪)㊀を云ふ。「昔の女の話」三足の烏(カラス)【句】㊀三本の足を有する、畸形の烏。記「遣二天唐一使者、持二死三足烏一來」㊁「三足(サンソク)の烏」に同じ。延喜式「赤烏・三足(日之精也)」

みつあし-じろ 三足白・三明【名】馬の毛色の三本の足の白きもの。

みづ-あそび 水遊【名】水上又は水中にて遊び、又は水をもてあそぶこと。みづいたづら。みづなぶり。新六「うき鳥のさながら濡るる水あそび何ぞはさてもかしらからげて」新永代藏「生玉(イクタマ)の蓮池、花散るあとの水あそび」

みづ-あたり 水中【名】水を飲みて、病に罹ること。

みづ-あつかひ 水扱【名】陰陽(オンミヤウ)家にて、井に向ひて行ふ、一種の呪術。支那の風水家の說より出でしものならんといふ。

みづ-あび 三合【名】三節を攪りあはすること。萬葉「わが持たる三合によれる絲もちてつけてましもの今ぞ悔しき」

みづ-あび 水浴【名】㊀水をあぶること。㊁暑さを忘るるため、水中に入り、泳ぎなどすること。水泳。

みづ-あびせ 水浴【名】みづいほひ(水祝)に同じ。醫規「子供數多、大人まじりの解賑しく、水あびせ・水あびせと囃したて通るに」

みづ-あぶ 水虻【名】〔動〕雙翅類に屬する昆蟲。虻の類にて、幼蟲は水中に棲息し、成蟲も水邊に多し。

みづ-あふぎ 三扇【名】紋所の一。要を中心として、開きし扇三箇を組み合はせたるもの。



(ぎふあつみ)

みつ-あふひ 三葵【名】紋所の葵の、最も普通なるもの。みつばあふひ。あふひ(葵)㊐參照。

みづ-あふひ 水葵・雨久花【句】〔植〕雨久花科に屬する多年生の草。高さ一尺ほどに達し、葉は互生し、全緣の卵狀心臟形にして、先端尖り、葉柄は鞘となりて、莖を抱く。夏・秋の候、花莖抽でゝ、その頂に、花蓋六枚の花、總狀花序をなして開き、青紫色又は白色にして美し。觀賞用として、庭池、又は鉢に栽培す。ことなしぐさ。なぎ。 炭俵「仙花」「蛍見し雨のゆふべや水あふひ」

みづあふひ-くわ 雨久花科【名】〔植〕顯花植物、被子類、單子葉門に屬する一科。すべて、水生の草にして、六屬凡そ二十一種を含み、亞細亞・亞弗利加及び亞米利加の熱帶乃至温帶地方に分布し、我國に自生し、又は栽培せらるるもの、二屬凡そ三種あり。

みづあふひ-のき 水葵木【名】〔植〕むしかりに同じ。

みづあぶら 水油【名】一毛髮に塗りて、その發育を助け、色澤を美ならしむるに用ふる、液狀の油。多くは植物より製したる不乾性油にして、椿油・胡麻油・オレエフ油・落花生油など、これなり。二ごぼしあぶら（燈油）に同じ。もとの水芭蕉「水あぶら無くて寢る夜や窓の月」

みづあへ 水韲【名】五寸切（ゴスンギリ）・田作（タヅクリ）・鯣（スルメ）・海參（コノワタ）・燒きたる小鳥・乾鮭（カラサケ）・青瓜・蕺荷子（ミヤウガ）・木耳（キクラゲ）・牛蒡（ゴボウ）等の內、適宜に取り合はせたるを、煎酒（イリザケ）に酢を加へて韲へ、なほ山椒の葉を刻み入れなどしたる食品。「に同じ。

みづあみ 水浴【名】みづあび（水浴）に同じ。

みづあめ 水飴【名】麥芽（バク）の糖化酵素により、澱粉を糖化せしめ、麥芽糖に變ぜしめし食品。濃厚なる液體をなせるもの普通なれど、少許の寒天を加ふれば、固形體となすを得。消化・吸收の容易なるが故に、老人・小兒・病人などの食料に適す。ぎやうせん。しるあめ。「に同じ。

みづ-あらそひ 水爭【名】**すまろん**（水論）に同じ。

みづ-あらひ 水洗【名】石鹼・藥品などを用ひず、單に水のみにて洗ふこと。

みづ-あね 水藍【名】水田に植ゑつけて育つる藍。京都地方に行はれ、染料として上品なり。

みづ-あを 水青・騮【名】馬の毛色の、淡き青毛なるもの。薄青毛。泥葦毛（ドロアシゲ）、

みづあを-ざめ 水青鮫【名】『鮫は假借の字。さめ（白眼）參照』馬の、毛色は水青にて、兩眼白きもの。

みつ-い 密意【名】祕密の趣意。內意。

みづ-いか 水烏賊【名】〔動〕**あふりいか**（障泥烏賊）に同じ。

みついし 三石【名】〔地〕一日高國七郡の一。浦河支廳の所管。二備前國和氣（ワケ）郡にある町。郡の東部、船坂（フナサカ）山の西に近く位し、鐵道山陽線の一驛。

みついし-こんぶ 三石昆布【名】〔植〕北海道日高國三石郡の沿岸に多く產する、一種の昆布。幅四五寸、長さ四五尺に達し、元揃昆布・長切昆布は、多くこれより製し、支那に輸出すること多し。うらかはこんぶ。

みつ-いしだたみ 三石甃【名】紋所の一。三箇の同一なる方形を、杉形（スギ）に積みたるもの。

みづ-いた 水板【名】一打敷の上に置く板。花瓶の水を防ぐ意にて用ふるものなるべし。二茶湯（チヤユ）の道具の一。

みづ-いたち 水鼬鼠【名】そそり四をなす人。俳諧新選「嚊山」「夏草や物失へる水いたち」「に同じ。

みづ-いたづら 水徒【名】**みづあそび**（水遊）に同じ。

みつ-いたらがひ 三伊多良貝【名】紋所の一。伊多良貝三箇を、輻射狀に組み合はせたるもの。

みつ-いちご みつ苺【名】〔植〕**へびいちご**（蛇苺）に同じ。

みつ-いてふ 三銀杏【名】紋所の一。小き圈を中心として、銀杏の葉三枚を、輻射狀に組み合はせたるもの。

みづ-いてふ 水銀杏【名】〔植〕**いはいてふ**（岩銀杏）に同じ。

みつ-いなづま 三稻妻【名】紋所の一。稻妻三箇を以て、六角形に組み合はせたるもの。

みづ-いはひ 水祝【名】昔、新婚後、初めての正月に、親戚・朋友等、酒肴を携へて、その家に至り、聲に水をあびせて祝ひしこと。金納を置きたる手桶、銀箔の柄杓、衣裳づくしの笠鉾、龍張の立烏帽子など、種種の作物を造り、多數の人人、その家に赴きて行ふ等の事もあり。後には、往往鬪爭の原因となるに至り、元和元年、町觸を以て、學式に制限を加へ、享保元年、遂に嚴禁せしかど、地方には、なほ往往行はれ、明治維新前まで存せし處ありたり。火止（ヒドメ）を祝する義に出づるも、日本書記に「未嫁之女始適人時、妬二斯夫婦一、使二祓除一多」とある祓除の義に出でしなるべしともいふ。はなみづいはひ。みづあびせ。みづかけ。水かけのことぶき。炭俵（沾圃）「なほいきれ門徒坊主の水いはひ」

みつ-いん 密印【名】〔佛〕諸の佛・菩薩の、各自の本誓を示したる、特異の印契（インケイ）。著聞「初は密印を結び、後には法華經を誦す」

みづ-いも 水芋【名】一薩摩芋の、ふかし又は燒きても、なほ、水氣多きもの。（果芋に對して）二〔植〕**みづぎぜん**（水座禪）に同じ。「じ。

みづ-いも 水疱【名】**すゐほう**（水疱）に同じ。

みづ-いらず 水不入【名】『親密にして、水を差（サ）す餘地なき義なるべし』近親の者の、親密なる間柄。雲女五枚羽子板、父權頭殿は、赤沼入道幸滿と、水入らずの伯父甥とて」

みつ-いり 三入【名】**やなぎいり**（柳入）に同じ。

みづ-いり 水入【名】一ふなあし。吃水。二芝居の男の臺の一。討死の平知盛などの用ふるもの。

みづいり-ずねしやう 水入水晶【名】〔鑛〕內部に液體の炭酸瓦斯などを含める水晶。みづずねしやう。

みづいり-な 水入菜【名】〔植〕『京都邊にて、畑の畦の間へ、水を湛へて作るよりいふ』蕓（ウン）・鷺菜などの野菜の總稱。

みづいり-ば 水入場・水入塲【名】田地などの、ややもすれば水に浸りやすき場所。

みづ-いれ 水入・水滴【名】硯の傍に置きて、これに注ぐ水を貯へおく小器。金屬又は磁器にて造る。運歩色葉集「水滴、ミヅイレ」「（三枡）に同じ。

みつ-いれこます 三入子枡【名】**みます**

みつ-いろ 水色【名】極めて淺き淺葱色（アサギ）。みはなだ。水色（ヨスルホン）。太平記「水色の厚總の鍬（クハ）」

みづ-うす 水碓・水臼【名】水車を動力とする臼。そふづうす。起「水碓、ミヅウス」

みつ-うち 【名】しん（軫）二に同じ。

みづ-うち 水打【名】一水をまくこと。うちみづ。みづまき。二紙などを、水分を加へて打つこと。三しらばやし（白囃子）に同じ。

みづ-うちは 水團扇【名】漆引・どうさ引などして、耐水性を與へ、夏日水を注ぎて煽ぐやうに造りたる團扇。

みづ-うに 水雲丹【名】水分を多くして、鹽辛（カラ）のやうにしたる雲丹。

みづ-うまや 水驛【名】一驛路を急ぎ行く時、驛にて、食を取らず、水のみを、人も飲み、馬にもかひて過ぐること。又、鄭重なるもてなしを受くべき處ならぬに曾へていふ。「古語」源氏「小荏（コエ）重なりたる細長の、人なつかしうしみたるを、……引きとどめてかづくれど、水うまやにて、夜更けにけりとて、逃げにけり」二古、男蹈歌（アトカコ）にて、蹈歌の人の、歌舞しつつ、禁裡より、諸院諸宮を巡りて、饗應を受くることありし、その饗應の、簡略にして、酒・湯漬などを用ひしものをいふ。饗應の鄭重なるは、飯驛（イヒウマヤ）又は鈴驛（スヅウマヤ）といへり。蹈歌の人の所所を巡るを、驛路に譬へていふなり。「古語」源氏「男蹈歌あり、……朱雀院の后（キサキ）の宮の御方など巡りける程に、夜も、やうやう明けゆけば、水うまやにて、事そがせたまふべきを」

みづ-うみ 湖【名】『水海、卽ち鹽をまじへぬ海の義』池・沼の如く、陸地に圍まれたる水の天然に存して、面積の大なるもの。あはうみ。水のうみ。潮（シホ）ならぬ海。

(多くは淡水なれども、鹹水なるもあり)平家「この河は、近江の水海の末なれば」和名「湖、美豆宇美」

みづ-うみ 水膿【名】水の如くに薄き膿汁。うみしる。

みつ-うん 密雲【名】密集せる雲。「密雲、空を鎖す」

みづ-うり 水瓜【名】常磐津節の曲の一。本外題は「閨妓委八景(ノヤウカハツケイス)」中の「水瓜の夕照(セキセウ)」。江戸氣質を寫せるもの。

みづ-うるし 水漆【名】〔植〕景天(ベンケイサウ)科に屬する多年生の草。高さ二三寸に達し、肉質にして、匍匐莖を生ず。葉は互生し、小形・柔軟・淡黃綠色を呈し、匍匐莖のは、廣倒卵形にして、直立莖のは、線狀箆形をなす。初夏の頃、黃色・五瓣の小花、聚繖花序をなして開く。山地に自生す。こまんねんぐさ。ひめれんげ。

みつ-うろこ 三鱗【名】紋所の一。同じ大さの三角形を、杉形(スギ)に積み重ねたもの。北條氏の家紋として有名なり。

みつうろこ-がた 三鱗形【名】前條に同じ。(太平記に、その由來を記せり)

みつうろこ-づる 三鱗鶴【名】紋所の一。三鱗の各底邊より、左向の鶴の頸を三つ出したる狀に描けるもの。

みづ-え 瑞枝【名】『みづ(瑞)は接頭語』みづみづしき枝。若枝(エダ)。萬葉「瀧の上(ヘ)の御舟(ミフネ)の山に水枝(エ)さし繁(シ)に生ひたるとがの木の」「同じ。

みつ-えだ 三枝【名】〔植〕**みつまた**(三椏)

みつ-えり 三襟【名】三枚の小袖を、別別にせず、一つに合はせて著ること。(一襟(エリ)に對して)「光起」を見よ。

みつおき 光起【名】〔人〕**ささみつおき**(土佐

みづ-おしろい 水白粉【名】水に溶解したるおしろい。

みづ-おち 水落【名】■溢へたる水の落ちゆく場所。夫木「はらの池のいりの水おちふしいけてたもすす朝ぞ氷りそめぬる」■胸骨の下、腹部の上なる中央の、窪みたる所。みぞおち。むなおち。むなもと。鳩尾(キウビ)。心下。心窩。「鳩尾」

みづおち-さき 水落先・鳩尾先【名】水落■の一部分。みぞおちさき。

みづ-おと 水音【名】水の落ち又は流るる音。玉葉「庭の上の水音近きうたた寢に枕涼しき月を見るかな」「略。

みづ-おとぎり 水弟切【名】〔植〕次條の

みづ-おとぎりさう 水弟切草【名】〔植〕金絲桃(ビヤウヤナギ)科に屬する草。高さ二尺に達す。葉は葉柄を缺き、長楕圓形にして、基部やや廣く、左右相對して、莖を抱き、葉脈に、淡紅色の小花簇生ず。山地に近き沼澤に自生す。みそやなぎ。みづやなぎ。みづおとぎり。

みつ-おひひらぎ 三追柊【名】紋所の一。柊の葉三枚を組み合はせて、略圓形にせるもの。

みつ-おひめうが 三追襄荷【名】紋所の一。茗荷三箇を組み合はせて、外邊の略圓形をなすやうにせるもの。

みづ-おほばこ 水車前草【名】〔植〕水鼈(オホバコ)科に屬する一年生の草。水中に沈生し、高さ一尺に達す。根は纖維狀をなし、莖は短く、葉は、これより簇生して、卵形・楕圓形又は心臟形を呈し、葉柄長く、葉叢より出でたる花梗に、一箇づつ帶紫白色の花を著く。みづあさがほ。

みづ-おもだか 水澤瀉【名】紋所の一。屈曲せる五本の線を描きて、水に擬し、その中央なる一つの立澤瀉の左右より、花を覗かせたるもの。「同じ。

みづ-およぎ 水泳【名】**すゐえい**(水泳)に

みっ-か 三日【名】**みか**(三日)の音便。

三日先知れば長者【句】先見の明ある者の、世に稀なる形容。〔諺語〕俳諧古選(重頭)「翌(ア)知らで三日先見つ富士の雪」

三日の月【句】**みかづき**(三日月)に同じ。盛衰記「三日月といふ栗毛馬……。この馬、鞭打に、三日の月ほどなる月影のありければ、名を得たり」

三日見ぬ間の櫻かな【句】『大島蓼太の俳句に「世の中は三日見ぬ間に櫻かな」の句に本づく』櫻の花の咲くと見る間に散る形容。推移變遷の速かなるに譬へていふ語。

みづかいだち 水海道【名】〔地〕下總國結城(ユフキ)郡にある町。郡の南端に位し、水陸交通の便に富み、鐵道常總線の一驛。

みっかいち 三日市【名】〔地〕明治の初年設置の縣の一。**にひがた**(新潟)■參照。

みっ-かう 密交【名】親密なる交際。

みっ-かう 密航【名】禁制を犯し、祕密に渡航すること。

みっ-かう 密行【名】■祕密に行きめぐること。しのびあるき。■祕密にその地へ赴くこと。■次條の略。

みっかう-じゅんさ 密行巡査【名】夜間、警戒のために、密行する巡査。

みっかう-ぶ 密航婦【名】外國に密航する醜業婦。

みつ-かうほね 三河骨【名】紋所の一。小き圈を中心として、三枚の河骨の葉を輻射狀に配りたるもの。

みづ-かがみ 水鏡【名】物の影の映る水面を、鏡と見立てていふ。**水鏡**(スヰキヤウ)。夫木「天の川影を宿せる水かがみたなばたひめの逢ふ瀨知らんよ」俳諧新選(續洲)「人になる鹿か閼伽井(アカヰ)を水かがみ」

水鏡の汁【句】薄き味噌汁を嘲りていふ語。

みづかがみ 水鏡【名】〔書〕大鏡に記せる時代より前、神武天皇より仁明天皇までの五十四代の間の事蹟を、國文にて、簡單に記せるもの。內大臣中山忠親の撰といふ。三鏡(サンカヾミ)の一。

みづ-かき 水掻・蹼【名】兩棲類・遊禽類又は哺乳類中の一部などの動物の、足の指と指との間を連結し、水を掻きて、游泳するに應ずる皮膜。和名「蹼、美豆加岐」

水掻の鰭【句】魚類の尾鰭の下端。一說に、胸鰭なりと。

みづ-がき 瑞垣・瑞籬・水垣【名】『みづ(瑞)は接頭語』**かき**(垣)■の美稱。一說に瑞枝さす若木にて結ひたる垣。(神社の垣にいふ)たまがき。かみがき。和名「瑞籬、美豆加岐」

みづかき-ぐるま 水掻車【名】**ぐわいしや**(外車)に同じ。

みづがき-の-みや 瑞籬宮【名】**しきのみづがきのみや**(磯城瑞籬宮)の略。(ヤマト)。

みつ-がく 密學【名】〔佛〕密敎の學行(ガウ)

みつ-かけ 三掛【名】的碟(マトヒキ)の、拇指以下二指に著くるもの。**よつかけ**(四掛)參照。

みづ-かけ 水掛・水懸【名】■水を、相手の人に灌ぎ掛くること。■**みづいはひ**(水祝)に同じ。■**かはづがけ**(河津掛)に同じ。

四鋼の下顎の一部。

水掛の祝【句】**みづいはひ**(水祝)に同じ。

水掛の壽(コトホ)【句】前條に同じ。

みづ-かげ 水影【名】水のすがた。水の樣子。源兵「荒れたるくづれより、池の水かげ見えて、月だにやどるすみかを過ぎむもさすがにて」

みづ-かけあひ 水掛合【名】■臭、水邊にて、組を分ちなどして、互に水をあびせて、戲に勝負を爭ふこと。■**みづかけろん**(水掛論)に同じ。狂言(長光)「兩方、水かけあひのやうにいうては、埒があかぬ」

みづかけ-いはひ 水掛祝・水懸祝【名】**みづいはひ**(水祝)に同じ。

みづかけ-ぐさ 水陰草【名】水の陰に生ひてある草。萬葉「天の川水陰草の秋風に靡くを見れば時來たるらし」(一說に、この歌のは、「みこもりぐさ」と訓みて、水の分派する處に生ひたる草をいふと)新勅撰「天の川水かげ草におく露やあかぬ別の涙なるらん」「にあふ毛。

みづかげ-の-け 水陰毛【名】鷹の肘の內

みづかけ-ぶるまひ 水掛振舞・水懸振舞【名】水祝を受けたる新婚の家にて、謝禮のために爲す饗應。

みづ-かげん 水加減【名】湯又は他の液體などに、水の加はれる程度。

みづかけろん 水掛論【名】互に身勝手なる事のみを言ひ張りて、容易に解決せぬ議論。みづかけあひ。

みづかけをけ 水掛桶【名】蓑・綿・菜類などの苗に、水を灌ぐに用ふる桶。底に孔ありて、木綿の袋を取り附け、孔に插したる栓の柄を引き上ぐれば、桶の水、袋を傳ひて程よく流出す。そこぬけ。

みっかーころり 三日ころり【名】『三日を經れば、鰹るとていふ』これら(虎列剌)の異稱。

みづーかさ 水嵩【名】水の分量。みかさ。水量。「數本降りそめし日を數ふれば水かさの久しくなりぬ五月雨の空」若鳳翁「海は、堀の水嵩を增し」

みづーがさ 水瘡【名】水膿を含む、小き腫物。犬子集「朝顏に出來(ヲ)る水瘡や露の玉」

みづーがさね 三重【名】三つ重なるやうに組み合はすること、又その組み合はせ方の物。一代女「三がさねの衣裝著こなし」

みづがさねいとまき 三重絲卷【名】紋所の一。絲卷に擬せる、四角なる三箇の形を、大中小の大さの順に重ねたるもの。

みづーがしは 三柏【名】紋所の一。柏の葉三枚を、輻射狀に描けるもの。

みづーがしは 水槲睡菜【名】〔植〕龍膽(カ)科に屬する多年生の草。根莖は、太くして、水底の泥中を匍匐し、高さ一尺餘に達す。葉は三箇の小葉より成る複葉にして、互生し、葉柄長く、六七月頃、根莖より、花莖抽で、帶紅白色にして、五裂し、內部に毛ある合瓣花、總狀花序をなして開く。有毒にして、葉は睡菜葉(イヘサフ)と稱し、苦味藥に供し、沼・池の淺水中に自生す。かしのは。かはみつば。きじんさう。たうおもだか。てうせんおもだか。ぬまごばう。みぞごばう。

みづーがしら 三頭【名】刀のきっさき。謠曲烏帽子折「三頭より火を出して、鎬(シノ)を削って戰ひしが」

みづがしらあはせーやまがた 三頭合山形【名】紋所の一。三つの山形の各頂點を、一點に集中したる狀に描くもの。頭合三山形(カシラアハセミツヤマガタ)。「瓦斯」に同じ。

みづーがす 水瓦斯【名】すゐせいがす(水性瓦斯)に同じ。

みっかーたいへいき 三日太平記【名】近松半二・三好松洛・八民平七・竹本三郎兵衞の合作に係る淨瑠璃。明智光秀の事蹟を中心とし、松永久秀・織田信長・小西行長・豐臣秀吉・森蘭丸などを配して脚色せるもの。十段より成る。

みづーがち 水勝【名】水の多きこと。葉花「日頃水がちに、御臺(ミダイ)なども、いかなる事にかとまで聞しめせど、怪しう、ありし人にもあらず細りたまひにけり」

みっかーぢのは 三梶葉【名】紋所の一。梶の葉三枚を輻射狀に組み合はせたるもの。

みっかーてんか 三日天下【名】勢力地位などを得ても、少時にして失ふこと。「明智(アケチ)の三日天下」

みつーかど 三角【名】㊀三つのかど。三稜。三隅。㊁道路の、三方面に分岐せる辻。三辻(ミツツヂ)のかど。㊂〔植〕莎草(カヤツリグサ)科などに屬する植物の、莖の橫斷面の三角形なるものの總稱。〔三稜〕

みつーがなへ 三鼎【名】三方に相對して坐ること。鼎坐(テイザ)。

みつーがなわ 三金輪・三鐵輪【名】『かなわ(金輪)㊀を見よ』前條に同じ。一谷嫩軍記「熊谷戻らば、三鐵輪の詮議」

みづーかね 水銀・汞【名】〔鑛〕『液狀をなせる金屬の義』すゐぎん(水銀)に同じ。和名「水銀、美豆加禰」柳樽「水かねで胸の疊を磨(ト)いでおき」

みづーかね 水金【名】みづをがね(水絡金)に同じ。今川大雜書「鐙(アブミ)の水金のもとを、右の手にてひねり」

みづーがね 水銀の滓(カス)【句】はらや(輕粉)に同じ。和名「汞粉、美豆加禰乃賀須。燒時飛著二釜上一之名也。俗名二之水銀灰一」

みづがねの烟 【句】輕粉(ハラヤ)を採る時の煤烟。和名「鎭粉、美豆賀禰乃介布利。燒二朱砂一爲二水銀一、其上黑烟名也」

みづーかぶ 水株【名】泡沫會社の株式。

みづかぶーつみ 徒罪【名】づざい(徒罪)に同じ。〔古語〕記「徒罪、ミツカフツミ」

みづーかぶり 水被【名】水を、頭上より浴ぶること。

みづーかへ 水替【名】㊀水を替へ出すこと。㊁みづかへにんそく(水替人足)に同じ。

みづかへーにんそく 水替人足【名】鑛坑の水を替へ出す人足。みづかへ。

みづかへぼっと 三日法度【名】發布して間もなく改正し、又は發布したれども、實行しがたきため、廢止せると同樣なる禁令を嘲りていふ語。

みづーがみ 水髮【名】油を用ひず、水のみにて撫でつけ、又は結ひたる頭髮。浮世床「油を附けて貰はうぜ。水髮にばかり結うと、毛が切れるといふから」

みづーがみしも 水上下【名】水色の上下。昔、切腹などの時に著用したり。

みづーがみなり 水神鳴・水雷【名】落雷しても、火を發して、物を焦すなどの事無き神鳴。(火神鳴に對して)〔德川時代の語〕若鳳翁「子ども買うて遊ぶ座敷へ、水神鳴の落つると、傾城と染(ソ)まぬ內に、死んで下されいと、剃刀を出すと」

みづーがみね 三個峯【名】〔地〕『稻荷神社三座の舊社所在の地なりしによりていふかといふ』京都の稻荷山の最高頂。

みっーかん 蜜柑【名】〔植〕**みかん**(蜜柑)に同じ。一代男「蜜柑(ミカン)一つ、わが口添へし跡ながら、手から、手に渡して」

みづーがめ 水瓶【名】㊀水を貯へおくための瓶。「水甕」和名「水瓶、美豆賀米」增鏡「御前にてしたためて、しろがねの水瓶に入れて」㊁〔天〕南方の星座の一。支那十二宮の寶瓶宮に同じ。寶瓶。

みづかね 水銀商・汞商【名】水銀の商賣。今昔「京に水銀あきなひする者ありけり」

みづかねほり 水銀掘・汞掘【名】水銀を採掘すること、又その人。七一職人歌合「汞ほり。あぢきなやにぶのみ山に掘る金のみづから人に思ひ入りぬる」

みづーがのこ 水鹿子【名】水色の鹿子絞(シボリ)。一代男「下には、水鹿子の白無垢(ムク)、上には紫綾に青海波」

みづーがは 三河【名】〔地〕近江國にある川。御津(ミツ)㊁の邊なるべしといふ。萬葉「三河の淵瀨もおちずさでさすに衣手ぬれぬ干すことはなしに」

みっかーばう 三日坊【名】次條に同じ。

みっかーばうず 三日坊主【名】飽きやすくして、何事をしても、永續せぬ性質の者を嘲りていふ語。みっかばう。

みつがはま 三津濱【名】〔地〕伊豫國溫泉(ヲンセン)郡にある町。松山市の門口に當れる港市。瀨戶內海の一要港。萬葉集にいへる熟田津(ニキタツ)は、この地の古稱といふ。

みづーがはり 水變【名】住地の變るに連れて、水質の相違すること。

みづーがひ 三番【名】番舞(ツガヒ)の、左右三回づつなるもの。「かひ。」

みづーかひ 水飼【名】みづかふこと。うまかひ。

みづーかび 水黴・水生菌【名】〔植〕水中に落ちたる昆蟲等の死骸、又は生活せる魚類にも寄生する一種の菌類。

みづーがひ 水貝【名】なまがひ(生貝)を見よ。

みづーかふ 水飼ふ【動四自】馬に水を飲ます。萬葉「さ檜隈(ヒノクマ)檜隈川に駒とめて駒に水かへ吾よそに見む」新古今「駒とめてなほ水かはん山吹の花の露添ふ井手の玉川」

みづかふーつみ 徒罪【名】づざい(徒罪)に同じ。〔古語〕記「徒罪、ミツカフツミ」

みづーかぶり 水被【名】水を、頭上より浴ぶること。

みづーかへ 水替【名】㊀水を替へ出すこと。㊁みづかへにんそく(水替人足)に同じ。

みっかーへいじ 三日平氏【名】永くは世を保つまじき平家。盛衰記「西國の住人等、散散に蒐(カ)立てられて、自ら先立つ者は遁れけれども、後陣は多く討たれにけり。……平家重代の家人(ケニン)なり。相傳恩顧の好(ヨシ)忘れがたうして、思ひ立ちける志は哀なれども、大人氣なしとぞ覺えたる。三日平氏と笑ひけるは、この事なり」

みづかへし 瑞復【名】しもさかわ(下賢輪)に同じ。

みづかへしいし 水返石【名】鉢前(ハチマヘ)の石の一。手水鉢(テウヅバチ)の直前に据ゑて、手を洗ひたる水の落下する時、その飛沫の緣の下に散り濺ぐを防ぐ橫長き石。

みづ-がめ 水龜【名】〔動〕いしがめ(石龜)に同じ。

みつ-かめのまる 三龜丸【名】紋所の一。三つの龜を、三巴の如き狀に配合したるもの。

みづ-がやつり 水莎草【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺内外に達し、葉は細長くして尖り、平行脈を有し、三縦列をなし、花は多數集まりて、小穗花序をなしたるもの、又、多數集まりて、複穗狀花序をなし、この花序、更に集まりて、圓錐花序をなし、この圓錐花序は、又、繖狀に排列す。平野の濕地又は淺水に自生す。

みづ-から【名】『水から、卽ち水中より採りたる物の義といふ』山椒を入れなどして、すべて菓子として食ふ昆布。結(ムス)昆布・髭(カモ)昆布などの種類あり。浮世床「みづから……、昆布をおつに結んだもので、かりかり噛みつぶすと、中に山椒がはいってゐるはな」膝栗毛「水から・砂糖餅。畑酒よござりますかいな」

みづ-から 自ら【代】『副詞のみづから(自ら)の轉義』おのれ。自身。自分。古今「萬葉集に入らぬ、古き歌、みづからのをも奉らしめたまひてなん」栞花「うき世の中に、今は、ただ、自らの事になりぬる心地のみすれば」

みづ-から 自ら・躬ら・親ら【副】『身づからの義にて、づからは接尾語』自身にて。その身親しく。てづから。

自ら侮り、然る後、人、之を侮る【句】「人、必ず自ら侮り、然る後、人、之を侮る」を見よ。

みづから-くり 水絡繰【名】水を利用して、物を動かすやうに仕掛けたる見世物。生玉心中「心太屋(テンロウ)の水からくり」會我曾稚山「見世先に富士を作り、御狩(ミカリ)の體(テイ)を人形にして、水機關(カラクリ)に仕懸けて」

みづ-がらし 水芥子【名】〔植〕みづたがらし(水田芥子)に同じ。

みづ-がらす 水硝子【名】〔化〕『英 Water glass』無水珪酸の粉末を、炭酸アルカリ又は苛性アルカリと共に融解せしめたる、無色にして、水飴の如き粘液。成分は珪酸アルカリにして、任意の割合に、水に溶きて、透明液を作る。色素を固著せしむるがために、捺染術に用ひ、布・木材等に塗りて、防火の用に供し、その他、洗濯石鹸の混合物、硝子・陶磁器・木材・革等の接合劑・人造石など、種種の工業に用ふ。

みつ-かりがね 三雁金【名】紋所の一。頭部を外邊に向けたる雁三つを組み合はせたるもの。

みつ-かる 見附かる【動四自】見附くるを得。目に入る。めつかる。

みづ-かわき 水乾【名】洗ひたる物の、水の滴らぬ程度に乾くこと、卽ち生乾(ナマガ)までの程度に達せぬこと。

みづ-き 見突【名】水中の魚を、船の上よりねらひて、突きて、捕ること。そこみ。

みつ-き 見付【名】一物の、外面より見たる所。みば。外觀。春の門松「心も心ならねども、見つきはきつい服部(ハットリ)そだち」二芝居の舞臺の正面の飾。春花五大力「本舞臺、三間(ケン)、共におっとほし平舞臺(ヒラブタイ)」見附鼠壁押入・唐紙・納戸口(ナンドグチ)」

みっ-き 密機【名】〔佛〕眞言の祕密を聞くべき機根。正統記「眞言の祖師、中天竺の善無畏(ゼンムイ)も來りたまへりしが、密機、未だ熟せずとて、歸りたまひにけりともいへり」

みつ-つぎ 貢御調・調【名】一つき(調)の敬稱。記「御調の大使名(オホヒ)は、金波鎭漢紀武(コムハムチム)とぞいひける」記「弓弭調、ユハズノミツギ」萬葉「みつぎの舟は堀江よりみをびきしつつ」二屬國より、時期を定めて獻る財物。みつぎもの。貢物(ミツ)。

みつ-つぎ 見繼【名】見繼ぐこと。しおくり。合力。心甲切は氷の朔日「父様(サマ)・母様(カカ)が浪人でなければ、こなさんたちへ見つぎの筈」梅暦「丹次郎も、来八(ライハ)が見繼に月日を送る故」

みつ-つぎ 密議【名】ひそかに評議すること。

みつぎ 御調【名】〔地〕備後國九郡の一。郡役所を尾道(オノミチ)市に置く。

みづ-き 水城【名】天智天皇の三年、筑前國太宰府の近傍に、外敵の襲來に備ふるため、堤を築きて、水を湛へたる所。今、同國筑紫(チクシ)郡水城村に、その遺址存し、東堤は百五十六間、西堤は三百二十三間、高さは凡そ五間、根盤凡そ二十七間、兩堤の間の、今田となれる處に、水を湛へたりしものなるべく、東方の大路の筋に、門の跡と思はるる大礎も殘存せり。文永の蒙古襲來の時にも、ここを要害として、敵を禦ぎたり。萬葉「ますらをと念へる吾や水莖の水城の上に涙拭はむ」

みづき 承籠・七寸【名】みづつき(承籠)の略。和名「承籠、美豆岐。俗云、三都都岐」平治「鎌田、馬より飛んで下り、七寸に立ちて申しけるは」

みづき 瑞木【名】〔植〕山茱萸(サンシュ)科に屬する落葉喬木。高さ五六丈に達す。枝は紅色を帶びて、輪狀に出で、幼枝は毛を帶ぶれども、後、脫落す。葉は互生し、倒卵形又は卵形をなし、下面は白色を帶び、且つ葉脈著しくして、下面に隆起し、初夏の頃、四瓣白色の小花、聚繖花序をなして開き、球形紫赤色の小核果を結ぶ。我國山地に自生し、木材は、小器具、又、薪炭の料に供す。くるまみづき。みづくさ。はしかのき。

みづ-き 水著【名】水中に入りて、游泳などする時に、身に著くる物。海水著。

みづき-かせん 水木歌仙【名】〔人〕踊の師匠。俳優水木辰之助の弟子。娘師匠の祖。安永八年歿す。年七十。二代はその養女、三代は二代の實子。

みづき-ぐさ みづき草【名】〔植〕はす(蓮)一に同じ。

みつぎ-ごめ 貢米【名】貢として奉る米。「租米。

みつぎ-さう 【名】〔植〕おごのり(於期海苔)に同じ。

みつき-すごとり 三月過鳥【名】〔動〕『祕藏抄には、四・五・六の三月ほど、我國に居るとの意にて、時鳥なりといひ、藻鹽草には鶯なりといへり』ほととぎす(時鳥)一の異名とも、うぐひす(鶯)の異名ともいふ。〔古語〕祕藏抄「さみだれの雲間に鳴きて過ぐるなり思はずがほのみつきすごとり」援兵。

みつぎ-ぜい 見繼勢【名】增派する軍勢。

みつぎ-そう 貢僧【名】百濟・高麗(コウライ)より時時、我國に渡來・歸化せしめし僧。

みづき-たつのすけ 水木辰之助【名】〔人〕俳優。貞享三年の頃、露川龍之助といひ、若衆方なりしが、後、水木を姓とし、且つ女方に轉じ、芳澤あやめと對立して、名聲を博す。晩年、廢業して、大和屋宇左衞門といひ、延享二年歿す。年七十三。

みつきっかふ 三龜甲【名】紋所の一。龜甲を三つ杉形(スギナリ)に重ねたるもの。

みつぎぬ 三衣【名】小袖を三枚重ねて著ること。五衣(イツツ)・二衣(フタツ)などと同類の語。增鏡「紅の匂の三衣、同じ單(ヒトヘ)」

みづぎは 水際【名】水と相接したる處。みぎは。みなぎは。水邊。水際(ミヅギハ)。字鏡「濱、水支波」枕「船……物をいと多く積入れたれば、水ぎはは、ただ一尺ばかりに無きに」

水際の立つ【句】みづぎはだつ(水際立つ)に同じ。俗曲「花舞臺霞猿曳「見れば見る程、くっきりと、水際の立つよい男」

みづぎは-だつ 水際立つ【動四自】著しく際立つ。きはやかに目立つ。賀古敎信七葉翁「さすが名におふ流とは、水ぎはだちて知られたり」

みづき-ばな みづき花【名】蓮の花。みづのはな。

みづ-ぎぼうし 水擬寶珠【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。濕地に自生し、高さ一尺餘に達す。葉は互生し、細長くして、平行脈を有し、葉叢の間より花莖生じ、紫色又は白色の花、總狀花序をなして開き、觀賞用として栽培す。さじぎぼうし。

みづき-むすび 水木結【名】帶の結び方の一。寶永の末頃、水木辰之助といふ役者の創めたるもの。



(びむすびづき)

みづきん 水金【名】『湯水(ユノミ)のやうに』を見よ』惜しげなく遣ふ金錢。八笑人「いづれ、濡事師は、水金(キン)は遣ひうちの事、頓と厭ひはござりませぬ」

みづ-きんばい 水金梅・水菫【名】〔植〕柳葉菜(ヤナギバ)科に屬する多年生の草。莖は細き圓柱形にして、地上を匍匐し、葉は、互生して、倒卵狀披針形をなし、邊緣やや波狀をなし、秋、梢葉の葉腋に一寸ほどの花梗生じ、五瓣黃色の美花を著け、果實は蒴をなす。濕地に自生し、又、觀賞用とす。すゐきんばい。ぬまめぐり。みづちやうじ。

みづぎ-もの 貢物・御調物・調物【名】みつぎとして奉る物。みつぎ。こうぶつ。記「調、ミツギモノ」正統記「國國の御調物をも、齋藏(クラ)に納めて」

みっ-きやう 密經【名】〔佛〕ひみつきやう(祕密經)に同じ。

みつ-ぎやう 密行【名】〔佛〕精密に戒行(カイギヤウ)を持すること。「見よ。密行第一【句】〔佛〕「忍辱(ニンニク)第一」を

みづ-ぎれ 水切【名】井水・水道などの、涸れて無くなること。

みっ-く 密供【名】〔佛〕護摩をたき、諸尊を供養する、密教の修法(シュホフ)。甲陽軍鑑「信州戸隱(トガクシ)に於て、……密供を修(シュ)す」

みつ-く 見附く【動四自】常に見て、親しく思ふ。見馴る。〔古語〕源氏「幼き人は、見ついたまふままに……何心もなくむつれ」葵花「曉に出でさせたまふべけれど、なほしばし、宮見つくまで、今四五日はと申させたまひて」

みつ-く 見附く【動下二他】一たしかに見る。みとむ。めつく。二探して見いだす。發見す。めつく。

みつ-ぐ 見繼ぐ【動四他】一みさぐ(見屆く)に同じ。萬葉「人さへや見繼がずあらむ彦星の妻呼ぶ舟の近づきゆくを」二金品を送りて、生活を助く。しおくる。合力す。平治「朝長(トモナガ)をも見繼ぎたま〻」盛衰記「朝夕の事をも見繼ぐべし」

みづ-く 水漬く【動四自】水に漬(ツ)る。水にひたる。みづづく。萬葉「海ゆかばみづく屍山ゆかば草むすかばね」同「父母えいはひて待たね筑紫なるみづく白珠取りて來(ク)までに」

水漬く邊(へ)【句】水に漬(ツ)るあたり。みぎは。一說に、**みづく**(水漬く)の連用形「みづき」の延にて、水に就くこと、卽ち水のある谷間なりと。〔古語〕記「ならのはさまに、ししじものみづくへこもり」

みづ-くき 水潛【名】水の、地にくぐり入ることとなるべし。〔古語〕元眞集「水無瀨川流れてとまる水くきの見えぬたえまは涙なりけり」

みづ-ぐき 水莖【名】『玉梓といふ語あるより、その梓(アヅ)をみづみづしき木として、消息文をみづぐきといひしが、一轉して、廣く筆跡をいひ、又、筆をもいふに至りしなるべしといふ』一ふで(筆)二の異稱。源氏「見たまふ人の涙さへ、水ぐきに流れ添ふ心ちして」喜撰式「筆、みづぐきといふ」二「水莖の跡」に同じ。空穗「涙だに川となる身の年を經て書く水莖やいづち行くらん」三消息文。たまづさ。盛衰記「水莖の數積れども」

水莖の跡【句】筆の跡。筆跡(ヒツセキ)。榮花「水ぐきの跡を見るにもいとどしく流るるものは涙なりけり」講曲(夜討曾我)「皆人の形見には、手跡に勝る物あらじ。水莖の跡をば、心にかけて弔(トム)ひたまへ」

みづぐき-の 水莖の【枕】みづみづしき草木の莖の義より、瑞木と同義なるみづを(水城)にかけ、又、わか(若)と音相近きをか(岡)にかけていふ。一說に、筑前國洞海(ウキミ)より出でし言葉にて、その海の西、遠賀(オンガ)川の河口なる蘆屋の地を、古、岡水門(ヲカノミナト)といひしより續けたるものにて、「さざ波や」を「しが(志賀)」に續くると同樣なりと。萬葉「ますらをと念ふ吾や水莖の水城の上に涙拭はむ」同「あまぎらひひかた吹くらし水莖の岡の水門に波たちわたる」

みづ-ぐくり 水潛【名】水の下にくぐり入ること。みづもぐり。

みづ-くさ 水草【名】一水の中に生ふる草。みくさ。すゐさう。著聞「外國(トツクニ)は水草清し事しげき天(アメ)の下には住まぬまされり」二〔植〕がま(蒲)(一)に同じ。三〔植〕はす(蓮)(一)に同じ。四〔植〕みづを(水木)に同じ。

みづ-くさ 水瘡【名】しんみさう(浸淫瘡)にあり。水多くまじりゐて、旨味(ウマミ)少し。沙石集「水くさき酒」俳家奇人談・玄札「香(カ)のあらば水臭からん雪の花」二うはべのみにて、眞の愛情無し。心をうちあけず。隔がまし。よそよそし。うとうとし。狂言・内沙汰「そのやうに水くさう思はれてからは、……さこ殿の處へ行きますなるぞ」

みづ-ぐし 三櫛【名】一梳(ケヅ)櫛と蟹櫛と水櫛との三種の櫛。用明天皇職人鑑「ひくや夕なのすき櫛や、亂れ蟹櫛、人はよも水櫛とこそ思ひしに、誰が三櫛に名を立てて」二遊女などの、頭に櫛を三つ插すこと、又その櫛。ふたつぐし(二櫛)參照。

みづ-ぐし 水櫛【名】水に浸して梳るに用ふる、齒の粗き櫛。あらぐし。一代男「黃楊(ツゲ)の水櫛落ちてけり」

みつ-くす 見盡す【動四他】殘らず見る。終まで見る。「藥。水藥(スボ)。

みづ-ぐすり 水藥【名】水にとかしたる一。琴柱三箇を組み合はせたるもの。

みつ-ぐそく 三具足【名】佛前に供ふる花瓶と蠟燭立と香爐とを併せていふ語。胸算用「青銅(カネ)の三具足、代代持傳へて」

みつ-くち 三口・兎口【名】いぐち(兎缺)二に同じ。

みづ-くち 水口【名】一田に水を引き入れ、又、田の水を流し落す口。みなくち。狂言・水論「まんまと水を仕掛けておいたが、身どもの水口を止(ト)めて、隣の田へ水を取る。さても、さても、憎い事かな」二臺所の、水を吸ひ込む口。基盤太平記「内より、水を、どうどうと汲み入れ汲み入れ流せども、水口割れて、したたりの」

みつくに 光圀【名】〔人〕さくがはみつくに(德川光圀)を見よ。

みつ-くはがた 三鍬形【名】一兜の前立物の一。左右に鍬形、中央に劍形の三本を並べ立てたるもの。太平記「三鍬形打ったる冑を、猪頸(イノクビ)に著なし」二紋所の一。三箇の鍬形を凸合(ハメアハセ)にせるもの。

みづ-ぐひ 水杙・水杭【名】一水勢を遮り防ぐために、川の水際に列ね打ちたる杙。二みづしやく(水尺)に同じ。

みづくへ 【名】「水漬(ツ)く邊」を見よ。

みつ-ぐみ 三組【名】三箇組み合ひて、一揃(ヒトソロ)をなすこと、又その組み合はせ方の物。「三組の盃」

みづ-くみ 水汲【名】一水を汲み取ること、又その人。二流人(ルニン)の妻。「伊豆國八丈島の方言」

みづ-くみ 屐斗【名】なげづるべ(投釣瓶)に同じ。

みづくみ-あふご 水汲杓【名】水桶を擔ぶに用ふるあふご。薩摩歌「水汲あふご押取り延べ、……撲據(スヘ)ゑてくれるぞと敲きまはりし勢は」

みづくみ-いし 水汲石【名】手水鉢の左右何れかの前方に据ゑ、給仕人又は侍者の、立ちて、水を汲みて、客人に進むる趣の石。

みつぐみ-くはがた 三組鍬形【名】紋所の一。三箇の鍬形を交互に組み合はせたるもの。

みつぐみ-ことぢ 三組琴柱【名】紋所の一。琴柱三箇を組み合はせたるもの。

みつぐみ-どもえ 三組巴【名】紋所の一。三箇の細巴を交互に組み合はせしもの。

みつぐみ-にんぎやう 水汲人形【名】つり**あひにんぎやう**(釣合人形)に同じ。

みつぐみ-をけ 水汲桶【名】水を汲み入るるに用ふる桶。盛衰記「小家の女の怪しきが、水汲桶を戴きて」

みつ-ぐむ 水含む【動四自】『ぐむ(含む)は接尾語』水分を過度に含む。著しく瓜を取り出でたりけるが、悪くなりて、水ぐみたれば」

みづ-ぐも 水蜘蛛・水黽【名】【動】**あめんぼう**(蚊坊)に同じ。

みづくも-がみ 水雲紙【名】『すゐうん(水雲紙)の直譯』**かみやがみ**(紙屋紙)に同じ。

みづ-くらげ 水水母・美都水母【名】【動】水母類の一。我國、何れの海にも産し、無色・透明、その鐘狀部はあまり深からざれども、大さ徑尺餘に達する者あり。鐘緣より多數の絲狀を出し、四箇の脣瓣あり、鐘狀部の伸縮によりて、泛泛として浮游す。生殖は、世代交番に依る。

みつ-ぐり 三栗【名】一つの毬(イガ)に三箇の實(ミ)を含める栗。

みつ-づくり 箕作【名】箕を作ること、又それを職業とする人。三二職人歌合「みづくり。いたづらにふるみの果をいかがせん人のひいづる事をなしても」

みづ-くり 水栗【名】【植】**ひし**(菱)に同じ。若鳳仙柳葉の煮染物(ニモノ)、水栗酢味噌に天木藜(アカザ)」

みづ-くり 水繰【名】【建】勾欄・地覆(ヂフク)などの下端を刳り取り、その間より、雨水の流れ出づるやうにせるもの。

みつくり-げんぱち 箕作元八【名】【人】史學者。文學博士。作州津山の蘭醫箕作秋坪の第四子。明治十八年東京帝國大學理科大學を卒業し、翌年獨逸に留學し、三十二年佛國に學び、歸朝後、文科大學教授となり、西洋史講座を擔任す。側ら陸軍大學・海軍大學・法科大學に講ず。又、川柳及び俳句を善くし、南亭と號す。大正八年卒す。年五十八。

みつくり-げんぽ 箕作阮甫【名】【人】蘭學者。美作國津山侯の侍醫。初、貞一・惠廸・玄甫・阮甫などいへり。父は貞固。遠祖は佐佐木氏、世世、近江國琵琶湖の東、箕作に居りしより姓とす。十七歲、京都に上りて、漢方の醫術を學び、後、藩侯の侍醫となり、江戸に出でて、宇田川榛齋に蘭方の醫術を學び、藩命によりて、天文臺に蘭書を翻譯し、嘉永六年、露國の使節長崎に來りし時、應接使筒井肥前守・川路聖謨に隨行し、翌安政元年、下田條約締結に際し、その議に參す。三年、蕃書調所の教授職に補せられ、文久二年擢でられて、幕臣となり、三年歿す。年六十五。


(ぼんげりくづみ)

みつくり-じやう 箕作城【名】近江國神崎郡建部(タケベ)の西南に在りし城。觀音城址と、中山道を挾みて相對せり。永祿・天正の頃、佐佐木義賢・義弼父子、これに居り、觀音寺城と共に、織田氏に攻陷せられたり。

みつぐり-の 三栗の【枕】三栗の三箇の實(ミ)の中といふ意にて、**なか**(中)にかけていふ。記「三栗のその中つ國を」

みつくり-りんしやう 箕作麟祥【名】【人】西洋學者。通稱貞一郎。江戸鍛冶橋内津山藩邸に生れ、祖父阮甫に養はれて、その三女を娶る。阮甫の歿後、その家督を繼ぐ。蘭學・英學を家庭に、漢學を藤森天山・安積艮齋に學ぶ。慶應二年、徳川民部大輔に隨ひて、佛蘭西に赴き、歸朝後、開成所御用掛を命ぜられ、爾來、文部・司法兩者に衆職し、教授に翻譯に、又、法典の編纂に力を盡す。二十一年、法學博士を授けられ、後、司法次官・貴族院議員・法典調査會委員・行政裁判所長官となり、正三位に敍せられ、三十年卒し、男爵を授けらる。年五十二。「狂」を見よ。

みづ-ぐるひ 水狂【名】「土佛(ツチボトケ)の水」

みづ-ぐるま 水車【名】㊀水力を動力として廻轉し、その力を他の機械に傳へて、米などを搗く仕掛の車。水車(スヰシヤ)。徒然「御池に水をまかせられんとて、……水車を作らせられたり」㊁敵に攻めかかる時、武器をはげしく振りまはすこと。平家「蜘蛛手・かく繩・十文字・蜻蛉返(トンボガヘリ)・水車、八方透さず切りたりけり」㊂【動】**まひまひむし**(舞舞蟲)を云ふ。「上總國の方言」

みつぐるま-さう 三車草【名】【植】**まうせんごけ**(毛氈苔)に同じ。

みつ-くろひ 見繕【名】見つくろふこと。

みづ-くろひ 身繕【名】**みじたく**(身仕度)に同じ。盛衰記「水の上にて身繕すな」太平記「馬より飛んで下り、甲(カブト)を脱ぎて、閑閑と身繕をする程に」

みつくろふ 見繕ふ【動四他】見て計る。見て程を計る。みはかる。みはからふ。平治「敢て敵の勢(セイ)をも見繕はざりける處に、三十二騎の兵(ツハモノ)、打ち物を抜き、冑の錏を傾けて、かはと駈入り」若鳳俗「晝は、世間を見繕ひ、夜は、外(カホ)の用心を固め」

みつ-ぐわ 密畫【名】綿密に書きたる畫。

みつ-くわい 密懷【名】他人の妻などを、ひそかになづけて、手に入るること。密通。御成敗式目「密懷他人妻、罪科事」

みつ-くわい 密會【名】㊀秘密に會合すること。㊁男女の、ひそかに出逢ふこと、あひびき。

みづ-ぐわし 水菓子【名】『水分を多く含める菓子の義』果物(クダモノ)を食用とする時の稱。「賣る家、又その人。

みづ-ぐわしや 水菓子屋【名】水菓子を賣る家、又その人。

みつ-くわん 密灌【名】【佛】**ひみつくわんぢやう**(秘密灌頂)の略。

みつ-つけ 見付【名】㊀見付くること。㊁すぐ向に見ゆる處。とつつき。狂言(富士松)「あの見付の松でござる」源平布引「帝(ミカド)の御座は、廊下つづきの見付の御殿」㊂城の外門、即ち武者溜(ムシヤダマリ)の出入口の、外方に面する方の門。

みつけ 見付【名】【地】遠江國磐田(イハタ)郡の町。舊東海道五十三驛の一。袋井町より一里二十三町、中泉(ナカヰヅミ)町へ十八町。古、國府(コフ)を、この邊より中泉町に亙りたる所に置かれたり。謠曲「舞車」「遠江國見附の國府(コフ)の者にて候ふ」「密宗。

みつ-け 密家【名】【佛】密教の宗教家。又

みづ-け 水氣【名】物に含める液體。水分。

みつ-けい 密計【名】秘密にめぐらすはかりごと。秘計。

みつ-けい 密契【名】内密に契ること。庭訓往來「密契無二其甲斐一、隔心之至」

みづ-げい 水藝【名】水を使用して演ずる遊藝。

みつ-げう 密教【名】【佛】法身佛なる大日如來の内證の境界を說きたるものといふ。秘奥・深密なる教法。金胎(コンタイ)兩部の佛教の新婆羅門教(印度教)の影響を受くるに至りしを傳へたるものにて、善無畏(ゼンムヰ)・金剛智・不空の三藏によりて支那に傳はり、我國にては、早くも敏達天皇の時に、その萌芽を發し、役小角(エンノヲヅヌ)なども、その系統に屬するものなれども、完全にこれを傳へたるは、弘法大師の眞言宗と傳教大師の天台宗の一部とにして、前者を東密(東寺の密教の義)、後者を台密といふ。印度に於ける起源は、龍樹菩薩が、南天竺の鐵塔を開きて、祕密經を世に弘めしに出づと稱し、龍樹の弟子龍智これを承けて、前記の善無畏・金剛智に傳ふ。我國にて、この教の世間的に發達せるは、修驗道(シユゲンダウ)にして、東密の醍醐寺派と、台密の聖護院(シヤウゴヰン)派とに分る。(顯教に對して)

みつ-げつ 密教五部【句】【佛】「金剛界五部」に同じ。

みつ-げつ 蜜月【名】『英 Honey-moon 又 Honey-Month』**ほねむうん**に同じ。

みつけ-てんじん 見付天神【名】**やなひめじんじや**(矢奈比賣神社)を見よ。

みつけ-ばしら 見付柱【名】龍舞臺の四隅にある柱の内、前部左方にあるもの。めつけばしら。

みつけふしおり 見附節織【名】越後國南蒲原(ミナミカンバラ)郡見附町より織りて出す絲織。同地の主要物産の一たり。

みづけぶり 水烟・水煙【名】次條に同じ。根南志具佐「檜(ヒノキ)の上より、ざんぶりと水中に飛入れば、ぱっと立つたる水けぶり」

みづけむり 水烟・水煙【名】一水面上の水蒸氣。濛氣(モウキ)。天の網島「野田の入江の水烟、山の端白く、ほのぼのと」太鼓川淀や霧の下這ふ水烟」二水の、物に打ち當り、物の、水に打ち當りて、その水碎けて、跳ねあがるもの。しぶき。飛沫。蕪村「月に對す君に唐綱(トウ)の水烟」

みつけもの 見附物【名】一探し出したる物。めつけもの。二人を雇ひ、又は品物を手に入れたる後、豫想外の價値を認めえたる時にいふ語。ほりだしもの。まうけもの。めつけもの。

みつーけん 三劍【名】紋所の一。丸を中心に、劍の形を三方に出したるもの。

みつけん-あふひ 三劍葵【名】紋所の一。前條の形の、劍と劍との間に、葵一葉づつ配したるもの。

みつけん-じやのめ 三劍蛇目【名】紋所の一。三劍(ケン)の、劍と劍の間に、蛇の目一箇づつを配したるもの。

みつーご 三子・三兒【名】一度の出産に、三人打ち續きて生れたる小兒。二三歳の小兒。浮世風呂「善惡は三歳兒(ゴ)にもわかるものだから」

三子に習つて、淺瀬を渡る【句】「貧うた子に教へられて、淺瀬を渡る」に同じ。【諺語】

三子に教へられて、淺い川を渡る【句】前條に同じ。【諺語】

三子に教(ケウ)はる【句】前條に同じ。

三子の魂、八十まで通る【句】次條に同じ。【諺語】女房氣質「三子の魂は、八十まで通るともいふ諺の如く、幼きより、教を守らず、心のままに育ちし故なり」

三子の魂、百まで【句】生來の性質は、老いての後までも殘るものなり。【諺語】浮世風呂「三子の魂百までと譬のとほり」

みつーご 三子【名】**もろより**(諸撚)を見よ。

みつーご 密語【名】一ひそかに語ること、又その話。二【佛】祕奥・深密の語。三【佛】密教の陀羅尼(ダラ)。

みつーご 蜜語【名】『蜜の如く甘き言語の義』瞻じく語る言葉。

みつーこ 水子【名】『水は假借の字、みづ(瑞)の義にて、みづみづしき意』出産後、日を經ざる子。あかご。みづっこ。嬰兒。御所櫻「水子を抱へ、樣樣と、さまよひめぐりし憂艱難」

みつーこう 密講【名】【佛】密經の講演。

みづーごえ 水肥【名】糞尿、魚鳥の洗水、流(ナガ)、風呂・洗濯などの水等、すべて液體をなせる肥料。液肥(エキ)。すゐひ。

みつーこく 密告【名】一ひそかに告げ知らすること。二人の罪惡を、警察署裁判所などに、ひそかに告げ知らすること。ひそかに告發すること。

みづーごけ 水苔【名】水の容器又は水底の石などに附著する、苔の如きもの。みづあか。水苔(スイタイ)。

みづーごけ 水蘚【名】一【植】水蘚科に屬する多年生の蘚類。一屬にして、一科をなせるものの總稱にして、種類も、形狀も、非常に多く、分類甚だ困難なれども、何れも、濕地に自生し、多數の枝を出し、葉は濃綠色、帶白色又は青綠色を呈し、生植物を輸送する時、その根を包むに用ふ。

みづーごころ 水心【名】一水泳の心得。游泳のたしなみ。保元「舟は、底へぞ卷き入りける。水心ある者は、楯・かい楯に乘つて漂ふところを」二「魚、心あれば、水心」の略。

みづーこし 水漉【名】**すあなし**(水嚢)に同じ。二桶などに、水を漉す裝置をなしたる器。一代男「暫しありて、勝手より、久次郎が、宇治から、只今歸りましたと申し、水こしの詮義あり」

みづこし-あな 水越孔【名】海船の舵の身木(ミキ)にある孔。おほみづこし。ゆりこし。

みづこし-づな 水越綱【名】水越孔に通して、舵を自由に動かす綱。

みづこし-しま 三子島・三子嶋【名】【地】**とりしま**(鳥島)一に同じ。

みづーごたつ 水火燵・水炬燵【名】火氣の衰へはてたる、つめたき火燵。本朝世四孝「ええ、こりや、ぬるい水火燵ぢや」

みづこひーどり 水乞鳥【名】【動】**みやませうびん**(深山魚狗)に同じ。伊勢集「夏の日の燃ゆるわが身のわびしさに水戀鳥の音をのみぞ鳴く」

みつこ-ぶし 三子節【名】出雲國安來(ヤスキ)町の藝妓三子の謠ひ出したりといふ俗曲。安來節は、これより脫化せるものなりといふ。

みづーこぼし 水翻・水覆【名】室内に置き、茶碗を洗ひたる水などをこぼし入るるに用ふる器。こぼし。建水。三體人歌合「火鉢賣、風爐(フウロ)火鉢ぐわとうぬり桶水こぼしよきあきなひとなら土かな」

みつーごま 三駒【名】紋所の一。將棋の駒を三箇並列したるもの。

みつーごま 三獨樂【名】紋所の一。心棒を中心として、三つの獨樂を輻射狀に描きたるもの。

みつーごん 密嚴【名】【佛】一三密を以て、莊嚴(シャウゴン)すること。二**みつごんごく**(密嚴國)の略。

みつごん-けざう-せかい 密嚴華藏世界【句】【佛】**みつごんけざうせかい**(蓮華藏)參照。

みつごん-じやうど 密嚴淨土【名】【佛】前條に同じ。

みつごん-ごく 密嚴國【名】前條に同じ。

みつごん-じやうど 密嚴淨土【名】【佛】前條に同じ。講曲卷附「御嶽(ミタケ)は金剛界の曼荼羅(マンダラ)、華藏(ケザウ)世界、熊野は胎藏界、密嚴淨土、有難や」

みつごん-せかい 密嚴世界【名】【佛】前條に同じ。

みつごん-ど 密嚴土【名】【佛】前條に同じ。

みつごん-ぶつこく 密嚴佛國【名】【佛】前條に同じ。

みづーごもる 水籠る【動四自】水に籠りたるやうに、明かに聞えず。浦島年代記「うんと叫ぶも、聲、水ごもり」

みつごらう 三津五郎【名】【人】**ばんざうみつごらう**(坂東三津五郎)を見よ。八笑人「三津五郎の身振で燒香して」

みづーごり 水垢離【名】**こり**(垢離)に同じ。

みづーごろも 水衣【名】『主として、僧に扮する者著用すれども、漁翁漁人なども用ふること妙からざるによりていふかといふ』能裝束の一。織模樣なき、白・茶・藍・綠・紫などの無地の薄き絹にて仕立て、僧の脇、老翁・女などの仕手などの、袴(ハカマ)又は厚板の上に著用するもの。織方によりて、紬(ツムギ)・綾(アヤ)の二種あり。

みつ-さう 蜜槽【名】【植】『英 Nectary』花又はその外の部分に於て、蜜汁を分泌する腺。花部に存するものは、蟲媒花に限るものにして、油菜・葡萄などにては、雄蕊の基脚に、球狀又は棒狀の小體をなして存し、鳳仙花・纏斗菜(ウヅ)などにては、萼片又は花瓣の一部、特に嚢狀に變じて成る。又、花部以外のは、蠶豆(ソラマメ)の托葉、

土。密嚴國密嚴佛國。密嚴世界。

みつごん-きやう 密嚴經【名】【書】『梵 Ghana vyūha-sūtra の譯語』佛、出過三界密嚴國に住せし時、金剛藏菩薩、第一義法性を問ひ、佛、これに答ふるに、不生(フシヤウ)・不滅の如來藏を以てし、次ぎに金剛藏菩薩、諸土に對して、如來藏・阿賴耶識(アラヤ)等の大乘の法相を開說せしもの。唐の地婆訶羅(カダラ)の譯と、唐の不空の譯とあり、共に三卷。註釋には、唐の法藏の疏(四卷、但し一卷を缺く)あるのみ。「じ。

櫻の葉柄、猪籠草（カツボ）の瓶狀葉に於ける類にて、昆蟲を誘引する作用をなすものなるべしといふ。蜜腺。

みつ-さう 密葬 【名】㊀内密に葬ること。㊁〔佛〕密教の法式によりて葬ること。

みつざう 密造 【名】㊀秘密に製造すること。㊁政府に届け出づることなく、又は届出額以上に、酒類を醸造すること。

みつざう 密藏 【名】〔佛〕密教の經典、又その教。正統記「弘法は、……惠果和尚の告にも、我と汝と久しき契約あり、誓ひて密藏を弘めんとあるも、この故にや」

みづ-ざうげ 水象牙 【名】海象（セイウチ）の上膊の牙。せいくる。

みづ-さうしき 水葬式 【名】**すゐさう**（水葬）に同じ。

みづ-さうれい 水葬禮 【名】前條に同じ。

みづ-さかづき 水盃・水杯 【名】訣別の時に、水を、酒の代りに、盃に注（ツ）ぎて酌みかはすこと。みづさかもり。心中宵庚申「親子夫婦が水盃」

みづ-さかもり 水酒盛 【名】前條に同じ。心中宵庚申「飲めども醉はぬ水酒盛」

みづ-さき 水先 【名】㊀水の流れゆく前方。西遊記「その水先に當る所は、人家・山地の差別なく、唯一刻の間に、大海へ突出せり」㊁船筏などの進みゆく時、水を掻き分け碎く處。鴛鴦集「大井川くだす筏の水先は波も碎けて玉と散りける」㊂船の進みゆく方向。㊃**みづさきにん**（水先人）の略。

みづさき-あんない 水先案内 【名】艦船が港灣・海峽等を出入・航過せんとする際、航路に、暗礁、又は水の深さ變化し易き等のため、危險を感ずる時、その航路の安危に通熟し、豫て、その筋の免狀を有する者の、艦船の要請に應じ、規定の料金を得て、その操導をなし、以て安全に、その地點を出入・通航するを得しむること。

みづさきあんない-しや 水先案内者 【名】水先案内をなす人。水先案内人。

みづさきあんない-にん 水先案内人 【名】前條に同じ。

みづさきあんない-せん 水先案内船 【名】

みづさきせん（水先船）に同じ。

みづさきあんない-れう 水先案内料 【名】**みづさきれう**（水先料）に同じ。

みづさき-き 水先旗 【名】水先人が、晝間その業務に從事するために、水先船に乘り込みたる時、その船の見えやすき所に掲ぐる、上半白色、下半赤色なる方旗。（夜間は、航海中なると、碇泊中なるとに從ひ、海上衝突豫防法の規定により、燈火及び信號を掲ぐるものとす）

みづさきく 水先區 【名】諸海國が、水先案内に關する行政の便宜上、必要なる海面に設定する區劃。東京灣の如く、一方のみ開放せる所は、その外端を境界とし、瀨戸内海の如く、數條の水道によりて、外海に通ずる所は、各水道の外端を境界とするを例とし、内地の分は、東京海灣・和泉灘・内海・下關・長崎・島原海灣・函館港の七箇所、朝鮮の分は、鴨綠江・大同江・仁川港・群山港・木浦港・釜山港・元山港の七箇所、臺灣にては、基隆の一箇所とす。

みづさき-しんがう 水先信號 【名】水先人を要招せんとする艦船のなす信號。

みづさきせん-めんじやう 水先船免狀 【名】『英 Pilot boat's license』水先船を使用せんとする水先人に、遞信省の授與する免狀。

みづさき-にん 水先人 【名】水先區にて、艦船のために、水路を嚮導するを營業とする人。水先案内人。

みづさきにん-くみあひ 水先人組合 【名】同一の水先區に屬する水先人が、營業上、相互の便宜と出入艦船の便利とを謀り、且つ營業上の風紀・秩序を維持するを目的として組織する組合。

みづさきにん-しけん 水先人試驗 【名】合格したる者は、水先人たるを得る試驗。まづ體格試驗を行ひ、それに合格したる者に就きて、學術試驗を行ふ。

みづさき-はふれいしよ 水先法令書 【名】水先人に關する法令を蒐集せる文書。遞信省より水先人に交付し、水先人その職務に從事する時は、水先免狀と共に、これを携帶するを要す。

みづさき-めんじやう 水先免狀 【名】水先人試驗に合格し、水先人名簿に登錄せられたる者に、遞信者の交付する免狀。前條參照。

みづさきれう 水先料 【名】水先案内を要請せる艦船が、水先人に支拂ふべき案内料。水先區と、案内を要請せる艦船の汽船・帆船の別、吃水總噸數の多少とによりて、定むること多し。水先案内料。

みづ-さし 水差・水注子 【名】他の器に注ぎ入るべき水を貯へおく器。鐵瓶・花瓶などに注ぎ入るるためのものは、注口（ソソギ）を具へ、茶湯（ユ）にて、釜にさすに用ふるものは、茶杓にて汲み出すやうにせり。みづつぎ。俳諧古選附錄（五始）「水さしもこぼしも春の野川かな」

みづ-ざぜん 水座禪 【名】〔植〕天南星（テンナンシヤウ）科に屬する多年生の草。根莖は衛矛し、太くして圓く、節部より多く根を生ず。葉は心臟形にして、全緣、頂端鋭く尖り、葉柄は長く、肉質にして、基部は根莖を抱き、七八月の頃、根莖より、葉とほぼ同長なる花梗抽で、頂に肉穗花序を著く。その花苞は、卵狀披針形をなし、内部白色、外部綠白色を帶び、花軸は、肉質にして、花苞より高く、上部に雌花、その下に雌雄兩全花を生じ、共に花被なく、楕圓形なる果實を結ぶ。北海道・樺太の濕地に自生す。根より澱粉を採取す。ひめかいう。

みづ-ざたう 蜜砂糖 【名】未だ精製せざる砂糖の、黑色をなせる液。みつ。

みづさは 水澤 【名】㊀〔地〕陸中國膽澤（イサハ）郡にある町。北上（キタカミ）川の西岸、陸羽街道に當り、もと仙臺藩の家老伊達將監の居りし所。鐵道東北線の停車場・郡役所あり。㊁明治の初年設置の縣の一。一ノ關縣を改稱せしもの。二年、陸中國の内に、膽澤（イサハ）・江差（エサシ）・九戸（クノヘ）の三縣を置き、九戸縣は、三戸縣と改め、江刺縣に合併し、四年一ノ關藩を縣とし、同年膽澤・一ノ關・江刺の三縣を廢して、一ノ關縣の治を一ノ關に置き、陸前國の五郡と陸中國の三郡とを管せしめ、五年、治を陸前國登米（トヨマ）に移し、八年、磐井（イハヰ）縣と改稱し、再び治を一ノ關に移し、九年、磐井縣を廢して、陸中國に於ける膽澤・江刺・磐井の三郡を岩手縣に屬せしめ、陸前國に於ける五郡を宮城縣に屬せしむ。

みづさはじやう 水澤城 【名】陸中國膽澤（イサハ）郡にありし城。天喜四年、源頼義の築造に係るといふ。永和中、葛西（カサイ）氏の臣八谷右京義胤、これに居り、慶長元和中、伊達氏の臣留守宗利、これに住し、子孫相繼ぎて以て、明治維新に及べり。

みづ-ざふすゐ 水雜炊 【名】水多くして、味薄き雜炊。一代男「水雜炊を好みしは」

水雜炊を食（ク）はす 【句】懲らしめのため、水中に投げ込み、水を呑ます。名手本忠臣藏「それ平右衛門、食（ク）ひ醉うたその客に、加茂川でな、水雜炊（ウスヅミ）を食はせい」

みつ-さみごま 三三味駒 【名】紋所の一。三味線の駒に象（カタド）れるものを、上に一つ下に二つ重ねあはせて描けるもの。

みつ-さん 密參 【名】〔佛〕祕密に參禪すること。

みつさん-くわじよ 密繖花序 【名】〔植〕『英 Fasciole』聚繖花序の一種。數多の短き花梗ありて、殆ど同所より出で、且つ頂端は扁平なる頭狀をなすもの。例へば、楠（クス）の花に於ける類。

みつ-し 密使 【名】祕密に遣す使者。

みつ-し 密旨 【名】㊀祕密の事の旨意。正統記「頼朝、……、以仁（モチヒト）の王の密旨を承り」㊁〔佛〕密教の要旨。

みつ-じ 密寺 【名】密教の寺院。

みつ-じ 密事 【名】祕密なる事件。

みつ-じ 密遡 【名】隙間なき程に遡（サカ）づくこと。接近。

みつ-じ 御廚子 【名】㊀**づし**（廚子）㊁の敬稱。枕「今、一すぢ、御づしのもとなりけるを取り出させたまへれば」㊁古、御廚子所にて、煮炊の事を勤めし女。落窪

「御手水(ヲチヤウヅ)・粥、いかで參らんと思ひて、御廚子にや語らはましと思へど」

みづし 水仕【名】『水仕は假借の字にて、實は、前條[一]の轉義』臺所にて働く下女。下働(シタバタラキ)の下女。はしため。みづしめ。五十年忌歌念佛「炊婦(スヰフ)の玉」

みづし 【名】かっぱ(河童)[一]を云ふ。〔加賀國・能登國の方言〕

みづーじけ 水濕氣【名】梅雨の候など、雨降りつづきて、濕氣(シツキ)あること。柳營水じけにぎうの音(ネ)も出ぬ吉田町」

みっしーじけん 密使事件【名】はあぐみっしじけん(海牙密使事件)を見よ。

にっかんしんけふやく(日韓新協約)參照。

みつーしげめゆひ 三繁目結・三滋目結【名】三目結の形をこまかくあらはしたる模様。英泉記「三繁目結の直垂(ヒタタレ)」

みづーしごと 水仕事【名】[一]水を用ふる仕事。[二]臺所にて、水を用ひて働くこと。俗曲「越後獅子」「飯(メシ)も炊いたり、水仕事」

みづーしだな 御廚子棚【名】

みづーしつ 【名】みづし(御廚子)に同じ。

みっしつ 密室【名】密閉したる室。外出又他人の出入を許さぬ室。

みっしつーかんきん 密室監禁【名】〔法〕豫審判事が、豫審中、事實の發見に必要なりと思惟したる時、その職權又は檢事の請求により、拘留狀を受けたる刑事被告人を、一人づつ別室に置き、免許を得るにあらざれば、他人との接見又は書類・物品の授受を許さぬこと。

みっしつかんきんーしゃ 密室監禁者【名】密室監禁に處せられたる人。

みづーしどころ 御廚子所【名】[一]古、內膳司に屬し、別當・預(カアツ)・小預(コカアツ)・所衆(コトコロシユ)・膳部などの職員ありて、朝夕の御食事の供進、及び節會(セチヱ)などの酒肴の調進を掌りし所。清涼殿の西廂に在り。別當は、四位以上の者を補し、又は內藏頭(クラノカミ)の兼職、預は、もと民部大輔の兼職なりしが、後、高橋氏の世職となれり。きよどころ。[二]「御廚子所のおもの棚といふ物に」拾芥抄「御廚子所、以二內膳・內藏・造酒・大膳及諸御廚・衞府御贄、供二朝餉及朝夕御膳一用二土器一有二別當衆一云云」[三]貴人の家の臺所。「水仕所」宇治「親の、水仕所に使ひける女」

みづーしどころーわざ 御廚子所業【名】御廚子所の仕事。榮花「さるべう親しき上達部など呼ばん。その日のまかり物、御廚子所わざにすべし」「ること。

みっしふ 密集【名】隙間なき程に集合すること。

みっしふーたい 密集隊【名】〔兵〕列伍の間を密集したる軍隊。

みづーしぼうこう 水仕奉公【名】他人の家に奉公して、水仕の業を勤むること。水奉公。下女奉公。

みづーしま 水島・水嶋【名】〔地〕[一]肥後國八代(ヤツシロ)郡金剛村の屬島。球磨(クマ)川の口。景行天皇巡狩の時、船を繫ぎ、食を取らせたまひし地。もと八代海中の寄港地なりしが、球磨川より排出する土砂のために、今は殆ど陸地と接續するに至れり。萬葉「長田王被レ遣二筑紫渡水島一之時歌二首、聞きしごとまこと貴く奇(クス)しくも神さびをるかこれの水島」[二]備中國の古戰場。壽永二年源平兩軍の戰ひし地にして、今の淺口郡柏崎村の邊に當る。今は陸岸なれども、古は、淺水に圍まれて、洲を成しゐたりしなり。盛衰記「壽永二年閏十月一日、水島にて、源氏と平家と合戰を企つ」[三]次條を見よ。

みづしまーなだ 水島灘・水嶋灘【名】〔地〕『海上に羅列せる島嶼の中に、上水島(備前國に屬す)・下水島(備中國に屬す)の二島あるより起りたるものといふ』瀨戶內海の一部、備中國淺口郡の近海。東方には、備前國の兒島半島あり、兒島灣と分ち、海上には、北木(キタギ)島・神島・白石島以下の島嶼羅列す。

みづしまーぼくや 水島卜也【名】〔人〕禮法家。名は元成(一說に元也)、通稱は傳左衞門。小笠原流より出でて、別に水島流を開く。元祿十年歿す。年九十一。

みづしまーりう 水島流【名】武家の有職(ユウソク)の流派の一。水島卜也を祖とす。

みづーしめ 水仕女【名】みづし(水仕)に同じ。

みづーじめ 水締【名】地形(ヂギヤウ)などの時、砂又は土を落ちつかするために、水を打つこと。

みづーしめし 水濕【名】水に浸すこと。

みづーしも 水霜【名】[一]「戶開(アケ)の水」に同じ。續膝栗毛「いこ下(ヲ)りますか。……そりや、大方、水じもの下りよるのであらずに」[二]つゆしも(露霜)[三]を云ふ。〔關東の方言〕

みづーしも 水下【名】水の如くになつて排泄せらる糞便。極めて水分の如き下痢便。續膝栗毛「いと下(ヲ)りますか。……そりや大方、水じもの下りよるのであらずに」

みっしやう 密商【名】禁制を犯し、規定に違反などして、竊かに賣買取引すること、又その商人。密賣。「私娼。

みっしやう 密娼【名】ぢごく。密賣婦

みづーしやう 水性【名】[一]水の性質。[二]五行(ゴギヤウ)を人の生年月日等に配し、その內の、水に當る性。[三]女の浮氣(ウハキ)なる性質。

みっしやうーしや 密商者【名】密商を營む者。密賣者。

みづーしやうばい 水商賣【名】『はかなく定なきを、水に譬へていふ』あたれば、利益も多き代りに、外るれば、全部の損害となるが如き營業。例へば、妓樓・待合などの類。

みっーしやく 密迹【名】〔佛〕『梵Guhyaka-pati の譯語』常に佛に親近して、その祕密の事迹を聞かんとの本誓なるによりていふ。新譯には、祕密主といふ』金剛の武器を手にして、佛を警固する夜叉神の總稱。密迹金剛。密迹力士。密迹士。金剛密迹、金剛密迹天。金剛神。金剛手。金剛力士。**にわう**(二王)[二]參照。

みづーしやく 水尺【名】尺度を盛りて、水中に立ておき、出水の高を知らするやうにせる標柱。みづぐひ。

みっしやくーこんがう 密迹金剛【名】〔佛〕

みっしやくーし 密迹士【名】〔佛〕前條に同じ。

みっしやくーりきし 密迹力士【名】〔佛〕前條に同じ。

みつーじやのめ 三蛇目【名】紋所の一。三箇の蛇目を一箇は上に、二箇はその下に、並べ重ねて描けるもの。

みっーしゆ 密衆【名】〔佛〕密教の衆徒(シユト)。

みつーじゆ 密呪・密咒【名】〔佛〕だらに(陀羅尼)に同じ。

みっーしゆう 密宗【名】〔佛〕『天台宗にも、台密とて、密教の融合せる點あれども、その全部に非ざるに對して、眞言宗は、全部密教の宗旨に依るものなるよりいふ』しんごんしゆう(眞言宗)に同じ。正統記「後宇多院、……密宗を究めて、大阿闍梨をさへさせたまひし事、いとありがたき御事なり」

みっーしよ 密書【名】密事を記したる文書。

みつーじよう 密乘【名】〔佛〕密宗の教義。

みっしよん 【名】こんみっしよんの略。〔俚語〕

みっしよんーすくうる (英 Mission school)【名】基督教の團體にて、布教の目的を以て設立したる學校。

みっしり 【副】『みしりの音便』心に隙(ヒマ)なく、熱心にするさま。みっちり。「みっしり稽古す」『みっしり戒む』「みっしり稼ぐ」

みつーじろ 三白【名】〔植〕次條の略。

みつじろーぐさ 三白草【名】〔植〕かたしろぐさ(形白草)に同じ。

みつーすあま 三洲濱・三灘【名】紋所の一。洲濱を、三つ杉形に重ねたるもの。みつすはま。太平記「一引兩(ヒキリヤウ)に三灘の笠符(カサヂルシ)」

みづーすかし 水透【名】鮸又は鰯などの油を水面に散じ、波を穩かならしめて、水中を透し見る法。

みづーすぎな 水杉菜【名】〔植〕千屈菜(ミソハギ)科に屬する多年生の草。莖は、一部は、泥水を這ひ、直立する莖は、多くは下部にて分岐したる上、柔軟なる圓柱狀をなして、上部、水面上に出で、葉は、水中のと、空氣中のとあり。前者は、極めて細く、殆

ど絲狀をなして、多數輪生し、後者は、やや廣く、葉腋に、白色の小花輪生す。

みつすぎのまる 三杉丸【名】紋所の一。圈の內に、三つの杉を描きたるもの。

みづーすげ 水菅【名】〔植〕べにすげ(紅菅)に同じ。

みづーすぢ 水筋【名】㊀みるみやく(水脈)㊁に同じ。諸國はなし「池を掘りけるに、世間より土を深くあぐれども、水筋にあたらぬ事を悔み」㊂地上を流るる水路。かはすぢ。西鶴記「海を切り落せるが如き大水、眞っさかさまに落ち來る事なれば、……、その水筋は、谷となり」

みつーすはま 三洲濱・三州【名】みつすあま(三洲濱)に同じ。

みづーすひ 水吸【名】魚の下顎の突端。(水吐(ミヅハキ)に對して)

みづーすまし 水澄・水馬・魚蚊・蚊蟲【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。種類多く、我國に産するもののみにても、十餘種あり。形態楕圓にして、長さ二分餘乃至五六分、頭・尾の兩端尖り、多少扁平にして、邊緣は稜狀に尖り、黑色にして、靑銅樣の光澤を有し、前肢は細長く、中・後肢は短くして幅廣く、複眼は、上・下の二箇に分れ、上部のものは空中を、下部のものは水中を見る用をなす。常に水面に圓形運動をなし、靜止すること殆ど無く、幼蟲は、水中に住し、長形にして、腹部の各節には、氣管鰓を有す。あまむし。あめんぼ。いたこむし。うづむし。かつをむし。ごきはし。さうとめ。じやうせん。まぐさむし。まひまひむし。俳諧新選「麥麩ヲ「水馬(アメンボ)足を伸して休みけり」

みづーずみ 水墨【名】するへいせん(水平線)に同じ。〔測量上の語〕

みづーずゐしやう 水水晶【名】〔鑛〕みづいりずゐしやう(水入水晶)に同じ。

みっーせい 密生【名】隙間(スキマ)なく生ずること。

みっーせう 密詔【名】祕密に下したまふみことのり。內內のみことのり。密勅。

みづーせがき 水施餓鬼【名】ながれくわんちやう(流灌頂)に同じ。薩摩歌「男は朝(アシ)、女は宵、一夜ばかりは隔つれど、末の逢瀨は、一筋に流れ寄るべの水施餓鬼」

みつせーがは 三瀨川【名】さんづのかは(三途川)に同じ。拾遺「三瀨川渡る水棹(ミヅサ)もなかりけり何に衣を脫ぎてかからん」

みづーせき 水堰【名】水の流をせき止むること、又その堰。

みっーせつ 密接【名】㊀隙間(スキマ)なく接し著くこと。ひたと著くこと。㊁關係の、極めて近く深きこと。

みづーぜめ 水攻・水責【名】㊀城攻(ゼメ)の法の一として、城外の用水の道を斷ち切りて、城兵を渴に苦しますること。㊁城攻(ゼメ)の法の一として、城の周圍に高き堤を連ね、その中に河水などを導き入れて、城を水浸(ツカリ)にすること。㊂全身を水に浸し、又は、水を、顏面に、絕えず注ぎて行ふ拷問。後者は、縛して仰向かしめたる顏面に注ぐ。上代より存し、德川時代にも行はれたり。水刑。水問。

みっーせん 蜜腺【名】〔植〕みっさう(蜜槽)に同じ。

みっーせん 蜜餞【名】パイナップル・丸佛手柑(ブンタン)・赤大根などを砂糖漬にしたる食品。支那廣東省に産す。

みっーそ 密疏【名】祕密に上疏すること。

みっーそ 密訴【名】祕密に訴ふること。

みっーそう 密僧【名】密敎の僧。「と。

みっーそう 密奏【名】祕密に奏聞すること。

みづーそこ 水底【名】水のそこ。みなそこ。「じ。

みつーそそぎ 【名】〔植〕けいとう(鷄頭)に同じ。

みづーそん 水損【名】するそん(水損)に同じ。(干損に對して)

みつーぞろひ 三揃【名】三品にて、一まとまりに揃ひてあること、又その物。例へば、儀式の時の頭髮の裝飾品なる櫛・中差・後差(ウシロザシ)、洋服の上衣(ウハギ)・チヨッキ・ズボンなどの類。みつもの。「略。

みつーづ 密陀【名】みつだそう(密陀僧)の略。

みづーた 水田【名】稻などを作るための、水を湛へたる田、卽ち普通の田。するみん。夫木「かりがねの浮べる襞うち垂れて水田の穗たち蹈みしだくらし」鬼貫「空に鳴くや水田の底のほととぎす」

みつーだい 三大【名】次條の略。俗曲(江戸)「三笠の松に三大は、模樣も同じまするをの」

みつーだいのじ 三大字【名】紋所の一。大の字を、各、頭部を中心にして、三つ組み合はせ、圓形を成すやうに描きたるもの。昔、俳優坂東三津五郎の定紋として名あり。みつだい。俗曲「ラ」連の橋「三大の字に結綿(ユヒワタ)の、その中中に、橘や、今の浮世の名取草」「じ。

みっーたう 蜜糖【名】はちみつ(蜂蜜)に同じ。

みつーだう 三堂【名】〔建〕柱の上に取り附くる、桝形の組物。

みつーたううちは 三唐團扇【名】紋所の一。三つの唐團扇を、三方に放射狀に描けるもの。

みつーたうがらし 三唐辛【名】紋所の一。三箇の唐辛の實を組み合はせて、巴形に描けるもの。

みつーだうぐ 三道具【名】㊀「禁獄(キンゴク)の三道具」を見よ。㊁「番所(バンドコロ)の三道具」を見よ。㊂渡海の船の櫓と桁(ケタ)と舵と。㊃懷中道具の錐と小刀と鋏と。㊄鯛の頭部にある三箇の骨の形のそれぞれに、鉞と鋤と鎌とに似るもの。

みづーたから 瑞寶【名】みづみづしき寶。立派なる寶。

みつーたからし 水田芥子【名】〔植〕十字花科に屬する多年生の草。莖は、高さ一二尺に達して、所所に根を生じ、葉は三箇乃至十一箇の卵形にして、平滑深綠色なる奇數羽狀複葉。花は白色にして、總狀花序をなす。嫩葉と莖とは、辛味を有し、葉は西洋料理のつまとして用ひらる。原產地は歐羅巴。おらんだがらし。みづがらし。

みつーたき 水叩【名】㊀魚の尾鰭の上部。㊁〔植〕ねずみたけ(鼠茸)を云ふ。〔筑前國の方言〕

みつーたちばな 三橘【名】紋所の一。三つの橘を向ひ合はせて、圓にて圈みたる形に描く。

みつーたつなみ 三立波【名】紋所の一。圈の內に、波頭を三つ、その下部に、五つの橫線を引きたる形に描けるもの。足利將軍末期の臣松田氏の定紋なりしより、松田波ともいふ。

みつーたて 三立【名】普通の矢の羽の四立(ヨツダテ)なるに對して、征矢(ソ)などの、走羽(ハシリバ)・外懸羽(ソトガケ)・弓摺羽(ユミズリ)の三羽にして、造羽(ツクリバ)を缺けること。みつば。

みづーたて 水楯【名】昔、軍船に用ひし楯。「に同じ。

みづーたて 水蓼【名】〔植〕かはたで(川蓼)

みづたてーを 水蓼を【枕】水蓼は、穗を摘むものなるより、地名の「ほづみ(穗積)」にかけていふ。萬葉「みてぐらを奈良より出でて水蓼を穗積に至り」

みづーだな 水棚【名】あかだな(閼伽棚)に同じ。傾城反魂香「常陸小萩も、夫(ツマ)ゆゑ、身を旅籠屋の水棚の」

みつだーのーあぶら 密陀油【名】みつだそうのあぶら(密陀僧油)に同じ。

みづーたばこ 水烟草・水煙草【名】〔植〕いはたばこ(岩烟草)に同じ。

みづーだくさん 水澤山【名】水量の多きこと。膝栗毛「干からびししうとの畑に引き替へて水澤山の嫁が田ぞよき」

みづーたけ 水竹【名】〔植〕みづがしは(水樫)に同じ。

みつだそう 密陀僧【名】〔化〕「支那本草家の說に依れば、もと釐語にして、波斯語に出づといふ」さんくわえん(酸化鉛)に同じ。

みつだそうのーあぶら 密陀僧油【名】密陀僧を、荏油(エゴアブラ)に溶したるもの。油繪などに用ふ。みつだのあぶら。

みづ-たびらこ 水田平子【名】〔植〕紫草(ムラサキ)科に屬する多年生の草。高さ七八寸に達す。葉は、互生し、全緣、楕圓形にして、先端尖り、花冠五裂して、碧色を呈し、白色の密鱗を具ふる花、穗狀花序をなして開く。山地の水邊等にある砂石の間に自生す。

みづ-たふば 水塔婆【名】長さ一尺ほどの經木にて造れる塔婆を、千反らぬために、水に浸して、墓碑の傍に添へておくもの。主に、近畿地方に行はる。

みづたへ-ぐさ 水堪草【名】〔植〕ほす(蓮)【一】に同じ。

みづ-たま 滿珠【名】まんじゅ(滿珠)に同じ。(干珠(シホ)に對して) 講曲「鵜羽」「干珠・滿珠の玉のありか」

みづ-たま 水玉【名】【一】水の、物に當り、玉の如く碎けて飛散するもの。【二】水滴の、玉の如く丸き形をなせるもの。【三】硝子にて、中空に作りたる玉に、水を入れたるもの。女兒の戲などに用ふ。【四】みづたまがみ(水玉紙)の略。【五】〔植〕からすびしゃく(烏柄杓)に同じ。【六】〔植〕みづたまさう(水玉草)の略。

みづ-たまうき 瑞玉盞【名】みづみづしき玉の盃(ツキ)。たまうき。「古語」記「ありぎぬの三重の子がささがせるみづ玉うきに浮きし脂(アブラ)」

みづたまがみ 水玉紙【名】鳥子(トリノコ)紙の一種。漉きて、未だ乾かざる時、適當なる染料を溶かしおきたる水滴を、紙面に撒布して、水滴の模樣をあらはしたるもの。古くは賞用せられしが、現今は、襖紙等に用ふる外、餘り行はれず。越前國の産、最も巧みなり。みづたま。

みづたまさう 水玉草・穀精草【名】〔植〕【一】ほしくさ(星草)に同じ。【二】めこしつ(雌牛漆)【一】に同じ。

みづ-たまり 水溜【名】地上の窪みなどして、水の溜れる所。にはたづみ。みづったまり。夫木「雨過ぐるたのきのさ井の水たまりあり果つまじき世をや頼まん」

みつ-だん 密談【名】祕密に談話すること、又その談話。密話。

みつ-だんご 三團子【名】指物(サシモノ)【一】の一。三箇の團子を串に貫ける形のもの。

みづ-ため 水溜【名】水を溜めおく處。

みつ-づ 三地【名】鉦鼓・小鼓(コツヅミ)などの打方の一。義經記「鉦鼓は三地・大流(オホガヘ)と」 傾城酒呑童子「三地・五地(ツイヂ)、一せいの音に紛らす忍路や」

みづ-ち 蛟・虬【名】『みは蛇の義、つは領格の助辭、ちはいかつち(雷)・のづち(野槌)をろち(大蛇)などのと同じく、荒ぶる神の通稱』蛇に似て、角と四脚を具へ、毒氣ありて、人を害すといふ、想像上の動物。萬葉「虎に乘りふるやを越えて青淵に蛟龍(ミヅチ)とりこむ劍太刀かも」和名「蛟、美豆知」

みつ-ちがひくはがた 三違鍬形【名】紋所の一。鍬形三箇を交互に打交(ウチカ)に組み合はせたるもの。

みづ-ちどり 水千鳥【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は互生し、細長くして、先端尖り、基脚は莖を包む。六月頃、花梗抽て、灰白色の花、穗狀花序をなして開き、佳香あり。我國、原野の濕地に自生す。じやかうちどり。

みづち-の-こ 蛟子【名】〔動〕たつのおとしご(龍落子)に同じ。

みっ-ちや 痘痕・菊石【名】あばた(痘痕)に同じ。三代男「よしや、みっちやなりとも、心こそなれ」

みつ-ぢやう 密場・密塲【名】〔佛〕密教の道場。

みつ-ぢやう 密定【名】祕密に定むること。浮世草子「密定、ミツヂヤウ」

みつぢやう 御圖帳【名】づちゃう(圖帳)の敬稱。

みづ-ちやう 水帳【名】『水は假借の字にて、實は前條の語の轉義。一說に、水土の事に關する帳簿の義とも、又、田は水を第一とするによりていふともいふ』德川時代に、土地の段別の圖に、所有主の名・年貢高などを記して、村村に備へおきし、重要なる帳簿。檢地帳。 南留別志「水帳といふ物、村村にあり、御圖帳と書くべし。民部省の圖帳といふ事あり」

みつ-ちやうじ 三丁子【名】紋所の一。丁子を三箇、放射狀に描きたるもの。

みづ-ちやうじ 水丁子【名】〔植〕みづきんばい(水金梅)に同じ。

みつ-ちやうじどもゑ 三丁字巴【名】紋所の一。丁子三箇にて作りたる巴。左卷なるを左三丁字巴、右卷なるを右三丁字巴といふ。

みつ-ちやうはん 三打板【名】紋所の一。雲版(ウンバン)三箇を組み合はせて、略圓形に描きたるもの。

みっ-ぢやく 密著【名】密接に附著すること。

みっ-ちやく-くちや 【名】みっちや(痘痕)に同じ。續膝栗毛「給仕したは、五十ばかりのみっちやくちやの婆樣(ババ)だ」

みっちやーづら 痘痕面・菊石面【名】あばたづら(痘痕面)に同じ。淀鯉出世瀧徳「色はまっ黒に横ぶとったるみっちやづら」

みつ-ちやのみ 三茶實【名】紋所の一。圈の內に、茶の實三箇を向ひ合はせに描きたるもの。

みづ-ぢやや 水茶屋【名】往來の人を休ませ、煎茶(センチャ)などを賣る店。五人女「芝居すぎより、松屋といへる水茶屋に居流れ」

みっちやり 【貌】混雜して別ちがたきさま。

みっ-ちよく 密勅【名】祕密なるみことのり。內內の勅旨。祕勅。密詔。

みっちり 【貌】みっしりの轉訛。

みーつつ 耳筒【名】馬の耳殼。

みっつ 三【數】みつ(三)の音便。

二、三日(カ)と、頭韻を成す。持つは、保つ義』三歲前後の兒の病氣の甚だ危險なる形容。〔諺語〕

みっつう 密通【名】男女、ひそかに情を通じあふこと。みそかごと。私通。

みづ-づか 水塚【名】下總國などにて、水害を防ぐために、農家にて、家の周圍に小高く築く塚。

みづ-づかひ 水遣【名】【一】水仕事に、水を遣ふこと。【二】金錢の浪費。 世間娘氣質「算用なしに、水づかひといふものに遣ひ果して」

みづ-つき 承鞚・七寸【名】【一】『水(ミ)附の義といふ』轡の一部、手綱を結び附くる所。みづき。ひきて。和名「承鞚、美豆岐。俗云、三都都岐」【二】手綱の兩端。

みづ-つき 水つき【名】和船の一部。十二船梁(カハラ)の一。

みづ-つき 水注【名】みづさし(水差)に同じ。二代男「水つき持って參って」

みづ-づく 水漬く【動四自】みづく(水漬く)に同じ。土佐「池めいて窪まり、水づける所あり」

みづ-つくり 水作【名】あらひ(洗)【二】に同じ。

みつ-づけ 蜜漬【名】果物を蜜に漬くること、又その漬けたる果物。

みづ-づけ 水漬【名】飯を食する時、水を掛けて浸すこと、又その飯。水飯(スイハン)。(湯漬に對して) 宇治「冬は湯づけ、夏は水づけにて、物を召すべきなり」

みーつづく 見續く【動下二他】【一】續け合はせて見る。狹衣「破反古(ホゴ)を得たまひて、切(セチ)に繼ぎつつ見續けたまへる心ち」【二】長き間見る。止めずに見る。

みづ-っ-と 水子【名】みづこ(水子)の音便。

みつ-つし 三辻【名】【一】道路の、一地點を通じて、三方面に通じてある所。三角(カド)【二】を形づくれる辻。よつつぢ(四辻)參照。【二】みつ(三)に同じ。 曾我「うしろの三辻と前のほろを取って、わが身に引き附け」

みつ-つた 三蔦【名】紋所の一。蔦の葉三つを組み合はせて、略圓形とせるもの。本朝二十不孝「丸に三蔦の暖簾(ノレン)」

みづ-つたふ 水傳ふ【枕】水の傳ひめぐる所の義にて、いそ(磯)にかけていふ。萬葉「水傳ふ磯の浦まの岩つつじもくさく道を又見なむかも」

みづ-っ-たまり 水溜【名】みづたまり(水溜)の音便。

みつ-つづみどう 三鼓胴・三鼓胴【名】紋所の一。鼓胴三箇を、三角形に位置したるもの。

みづづて-の 水傳の【枕】『萬葉集に「水傳(ミヅツタ)ふ磯の浦回(ミヅマ)乃」とある、その誤

訓に本づくといふ』**みづつたふ**(水傳ふ)に同じ。「音便。

みづっぱな 水洟【名】**みづばな**(水洟)の**みっつめ** 三目【名】**ふたたため**(二立目)に同じ。

みつつるあふひ 三蔓葵【名】紋所の一。葵の葉三つを放射狀に配置し、その各葉の間より、端の反卷せる蔓三つを出したる形に描けるもの。

みつつるがしは 三蔓柏【名】**つるがしは**(蔓柏)に同じ。「じ。

みつて 【名】〔植〕**かくれみの**(蘞蔾)[二]に同

みづて 水手【名】葦手の類にて、文字を水の流るるさまに擬して書くこと。

みづて 水出【名】**でみづ**(出水)に同じ。

みづてうし 水調子【名】[一]三味線の調子の、甚だ低きもの。[二]**すゐてう**(水調)に同じ。

みつてら 御津寺【名】[一]**してんわうじ**(四天王寺)に同じ。〔三津寺〕[二]大阪市南區御津八幡宮の東南、三寺(ミツ)町にある古義眞言宗の寺。大福院と號す。本尊は十一面觀音(僧行基の作と稱す)。大阪に於ける觀音順拜の札所の一にして、又その御影(みえ)堂の本尊も、大師めぐりの一なり。

みっと (英Mitt)【名】ベエスボオルにて、投げたる球を受け取るに用ふる、非常に厚く造りたる手袋の如きもの。拇指の部のみ離れ、他の四指の部分は、相合てし、一箇の空洞をなせり。



(とっみ)

みつでん 密殿【名】〔佛〕三十三天の一。

みつでんてん 密殿天【名】〔佛〕三十三天の一。

みづてんま 水傳馬【名】**みづぶね**(水船)[一]に同じ。

みつてもみぢ 三手楓【名】〔植〕[一]**みつてかへて**(三手楓)に同じ。[二]**たうかへて**(唐楓)に同じ。

みつど 密度【名】[一]〔佛〕密教を學ばしむるために、人を度して、僧となすこと。[二]〔理〕『英Density』物體の單位容積に含まるる質量、即ち物體の質量をあらはす數を、その體積をあらはす數にて除したる商。又、比重を比較的密度といふこともありて、これに對して、前者を絕對密度ともいふ。

みづど 水門【名】**すゐもん**(水門)[一]に同じ。名義抄「水門、ミヅト」

みづどくさ 水木賊【名】〔植〕**いぬどくさ**(犬木賊)に同じ。「に同じ。

みづどけい 水時計【名】**ろうこく**(漏刻)

みづどころ 水所【名】水質のすぐれてある土地。太平記「尊萊やしるよししける水どころ」

みつとびかり 三飛雁【名】次條に同じ。

みつとびかりがね 三飛雁【名】**さんばかりがね**(三羽雁)に同じ。

みつとびてふ 三飛蝶【名】紋所の一。三羽の蝶が斜に列をなして飛べる形に描けるもの。

みつでんてん 密殿天【名】〔佛〕三十三天の一。「[一]に同じ。

みづてんま 水傳馬【名】**みづぶね**(水船)[一]に同じ。

みつてもみぢ 三手楓【名】〔植〕[一]**みつてかへて**(三手楓)に同じ。[二]**たうかへて**(唐楓)に同じ。

みつてら 御津寺【名】[一]**してんわうじ**(四天王寺)に同じ。〔三津寺〕[二]大阪市南區御津八幡宮の東南、三寺(ミツ)町にある古義眞言宗の寺。大福院と號す。本尊は十一面觀音(僧行基の作と稱す)。大阪に於ける觀音順拜の札所の一にして、又その御影(みえ)堂の本尊も、大師めぐりの一なり。

みっと (英Mitt)【名】ベエスボオルにて、投げたる球を受け取るに用ふる、非常に厚く造りたる手袋の如きもの。拇指の部のみ離れ、他の四指の部分は、相合てし、一箇の空洞をなせり。

(とっみ)

みつど 密度【名】[一]〔佛〕密教を學ばしむるために、人を度して、僧となすこと。[二]〔理〕『英Density』物體の單位容積に含まるる質量、即ち物體の質量をあらはす數を、その體積をあらはす數にて除したる商。又、比重を比較的密度といふこともありて、これに對して、前者を絕對密度ともいふ。

みづど 水門【名】**すゐもん**(水門)[一]に同じ。名義抄「水門、ミヅト」

みづどくさ 水木賊【名】〔植〕**いぬどくさ**(犬木賊)に同じ。「に同じ。

みづどけい 水時計【名】**ろうこく**(漏刻)

みづどころ 水所【名】水質のすぐれてある土地。太平記「尊萊やしるよししける水どころ」

みつとびかり 三飛雁【名】次條に同じ。

みつとびかりがね 三飛雁【名】**さんばかりがね**(三羽雁)に同じ。

みつとびてふ 三飛蝶【名】紋所の一。三羽の蝶が斜に列をなして飛べる形に描けるもの。

みつでんてん 密殿天【名】〔佛〕三十三天の一。「[一]に同じ。

みづてんま 水傳馬【名】**みづぶね**(水船)[一]に同じ。

みつてもみぢ 三手楓【名】〔植〕[一]**みつてかへて**(三手楓)に同じ。[二]**たうかへて**(唐楓)に同じ。

みつてら 御津寺【名】[一]**してんわうじ**(四天王寺)に同じ。〔三津寺〕[二]大阪市南區御津八幡宮の東南、三寺(ミツ)町にある古義眞言宗の寺。大福院と號す。本尊は十一面觀音(僧行基の作と稱す)。大阪に於ける觀音順拜の札所の一にして、又その御影(みえ)堂の本尊も、大師めぐりの一なり。

みっと (英Mitt)【名】ベエスボオルにて、投げたる球を受け取るに用ふる、非常に厚く造りたる手袋の如きもの。拇指の部のみ離れ、他の四指の部分は、相合てし、一箇の空洞をなせり。

(とっみ)

みつど 密度【名】[一]〔佛〕密教を學ばしむるために、人を度して、僧となすこと。[二]〔理〕『英Density』物體の單位容積に含まるる質量、即ち物體の質量をあらはす數を、その體積をあらはす數にて除したる商。又、比重を比較的密度といふこともありて、これに對して、前者を絕對密度ともいふ。

みづど 水門【名】**すゐもん**(水門)[一]に同じ。名義抄「水門、ミヅト」

みづどくさ 水木賊【名】〔植〕**いぬどくさ**(犬木賊)に同じ。「に同じ。

みづどけい 水時計【名】**ろうこく**(漏刻)

みづどころ 水所【名】水質のすぐれてある土地。太平記「尊萊やしるよししける水どころ」

みつとびかり 三飛雁【名】次條に同じ。

みつとびかりがね 三飛雁【名】**さんばかりがね**(三羽雁)に同じ。

みつとびてふ 三飛蝶【名】紋所の一。三羽の蝶が斜に列をなして飛べる形に描けるもの。

發する癲癇。(火癲癇に對して)

みつでんてん 密殿天【名】〔佛〕三十三天の一。「[一]に同じ。

みづてんま 水傳馬【名】**みづぶね**(水船)[一]に同じ。

みつてもみぢ 三手楓【名】〔植〕[一]**みつてかへて**(三手楓)に同じ。[二]**たうかへて**(唐楓)に同じ。

みつてら 御津寺【名】[一]**してんわうじ**(四天王寺)に同じ。〔三津寺〕[二]大阪市南區御津八幡宮の東南、三寺(ミツ)町にある古義眞言宗の寺。大福院と號す。本尊は十一面觀音(僧行基の作と稱す)。大阪に於ける觀音順拜の札所の一にして、又その御影(みえ)堂の本尊も、大師めぐりの一なり。

みっと (英Mitt)【名】ベエスボオルにて、投げたる球を受け取るに用ふる、非常に厚く造りたる手袋の如きもの。拇指の部のみ離れ、他の四指の部分は、相合てし、一箇の空洞をなせり。

(とっみ)

るもの。

みつさむなし 見度無し【形二】**みっともなし**(見度無し)に同じ。和合人「みっともねえ、おれが意見だから、どうぞ止めさつし」

みっつさむよし 見度善し【形一】**みっともよし**(見度善し)の轉訛。和合人「あんまり見っとむよくも無かったぜ」

みづさんぼ 水蜈蚣【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。莖は纖細にして、高さ一尺五六寸に達し、葉は線形にして、莖を包みて、數箇互生し、下方より上部に至るに隨ひて、漸次短小となる。夏、莖頂に、帶白淡綠色の花數箇を著く。山麓の濕地に自生す。

みっつさもなし 見度無し【形一】**みさもなし**(見度無し)の音便。

みっつさもよし 見度善し【形一】**みっさもよし**(見度善し)を、態と反對にいふ語。

みつつどもゑ 三巴【名】紋所の一。巴の廻轉の方向によりて、左三巴・右三巴の二種あり。

みつつどもゑびし 三巴菱【名】紋所の一。三巴を菱形に描けるもの。

みづとらのを 水虎尾【名】〔植〕[一]脣形科に屬する草。高さ一尺內外に達し、葉は三箇づつ輪生し、線形にして無柄、先端尖りて、細鋸齒あり。葉腋より分岐する枝の頂端に、淡紅色の小花簇り開く。我國、濕地に自生す。せいすゐさう。[二]**さはとらのを**(澤虎尾)に同じ。

みづとり 水鳥【名】鷆(かも)ありて、水に入りて泳ぐ鳥。游禽類。水禽。はますどり。枕「鷲野(ワシ)の池、初瀨に參りしに水鳥のひまなく立ち騷ぎしが」

水鳥陸(カク)**にさまよふ**【句】次條に同じ。生駒親語「戀し戀しに目を泣きつぶし、物の文色(アヤ)も水鳥の陸にさまよふ悲しさは」

水鳥陸(カク)**に惑ふ**【句】便(タヨ)を失ひて取り附く所なき體。源氏「豐後のすけといふ顏もし入も、ただ水鳥の陸に惑へる心地して」

みづとり 水取【名】[一]水を汲み取ること。[二]大和國奈良市東大寺の二月堂にて、毎年、陰曆二月七日と十二日とに、年中の香水(コウスヰ)の料とするために、堂の傍なる若狹井(ワカサヰ)といふ井より、その水を汲み取りて、法會を修する儀式。又その水を飲めば、よく病を癒すともいひ、信徒は、尊みて御水取りといふ。[三]**みづとりぶね**(水取船)の略。[四]**てぬぐひ**(手拭)を云ふ。〔女の語〕

みづとりの 水鳥の【句】[一]水鳥は、水上に浮寢をし、又、あわただしく飛び立つより、**うきね**(浮寢)**たつ**(立つ)にかけていふ。萬葉「浪高しいかに梶取り水島の浮寢やすべきなほや漕ぐべき」同「水鳥の立(タ)てのいそぎに父母に物はずけにて今ぞくやしき」[二]鴨を、水島の中なる主なる物と考へ、その羽の色の青きより、**かも**(鴨)**あを**(青し)にかけていふ。萬葉「水鳥の鴨の羽の色の春山のおぼつかなくも思ほゆるかも」同「秋の露はうつしたりけり水鳥の青羽の山の色づく見れば」

みづとりぶね 水取船【名】**みづぶね**(水船)[一]に同じ。

みづとるたま 水取玉【名】古、月光の下に置けば、月より水を取り得と考へし玉。(火取玉に對して) 和名水玉。一名、月珠、美豆止留太萬。水精也」

みつな 御綱【名】[一]**つな**(綱)の敬稱。[二]「御輿(シヨ)の綱」に同じ。枕「水葱(ナギ)の花、いと花やかに輝きて、御輿の帷子の色・艷などさへぞいみじき。御綱張りて出でさせたまふ」

みつなのすけ(御綱助)

御綱の近衞【句】**みつなのすけ**(御綱助)に同じ。新古「數數に御綱の近衞ひき連れて進むみはしの袖ぞのどけき」

みづな 水菜【名】〔植〕[一]**みぶな**(壬生菜)の轉訛』十字花科に屬する二年生の草。葉は長さ一尺餘、一根より叢生して、多きは千葉に至るもあり。葉柄も、葉片も纖細にして、缺刻多く、黃色・四瓣の花開く。九・十月頃播種し、性寒氣に堪ふるを以て、冬の間もよく生長し、二・三月頃收穫し、鹽漬とし、又は煮て食ふ。いせな。いとな。きやうな。せんすぢな。みぶな。[二]

すなびきさう(砂引草)に同じ。「よ。

みつなか 満仲【名】まんぢゅう(満仲)を見

みつなかしは 御綱柏【名】㊀みつのがしは(三角柏)に同じ。記「大后(オホキサキ)、豐樂(トヨノアカリ)したまはむとして、御綱柏を採りに、木の國に幸行(イデ)でませる間に、……、御綱柏を御船に積盈てて還幸(カヘリ)ります時に」㊁【植】かくれみの(蘞蕪)㊂に同じ。

みづーながれ 水流【名】『火といふを忌みて、殊更に反對にいひたる語』火事。火災。【古語】紀「失火、ミヅナガレ」

みづーなぎ 水水葱【名】【植】㊀こなぎ(小水葱)に同じ。㊁ひるむしろ(蛭蓆)に同じ。

みづなぎーどり 水凪鳥【名】海燕(カイエン)科に屬する海鳥。嘴長く、その上部兩側に、各一箇の鼻管を特徴とす。翼長く、端尖り、尾羽は十二枚、趾は四本にして、蹼あり。背面は暗色、腹面は暗色なると、白色なるとあり。多く熱帶に棲み、わが近海に來るもの六七種あり。繁殖の少きと、漁業上有益なるとにより、保護鳥となる。

みづなーさうば 水名相場・水名相場【名】徳川時代に、鯛・鰒を漁獲して陸あげしたる時、漁師・魚商及びその濱の役人の立會の上にて定めし相場。

みつーなし 不佞不才【形ク】才なし。不才なり。【古語】紀「不佞、ミツナウシテ」同「不才、ミツナシ」

みづーなし 水梨・消梨・雪梨【名】梨の一品種。果實に、水氣多きもの。

みづなしーがは 水無川【名】㊀水の涸れたる川。みなしがは。みなせがは。㊁【地】薩摩國出水(イヅミ)郡にある川。水源は高尾野村の山中。北流して、中出村に至り、海に注ぐ。毎年秋より春にかけて、水流地に潛む。一名高尾野川。

みづなしーのーいけ 水無池【名】【地】山城國綴喜(ツヅキ)郡普賢寺村にある池。枕「池は、……水なしの池、あやしうなどて附けるならんといひしかば、五月(サツキ)など、すべて、雨いたく降らんとする年は、この池に水といふもの無くなんある」

みづーなづな 水薺【名】【植】たねつけばな(種附花)に同じ。

みつーなてしこ 三撫子【名】紋所の一。正面より見たる撫子の花を三箇、三つ星のごとく配置したるもの。日向國財部(タカラベ)の舊藩主秋月氏の家紋。

みつなーのーすけ 御綱助【名】古、行幸の時、御綱㊀を執りて供奉せし大舍人助(トネリノスケ)。枕「行幸になずらふる物は何かあらん。……、御綱のすけ 中少將など、いとをかし」

みづーなは 水繩【名】㊀みづもり(水盛)に同じ。㊁檢地の時、地積を測るに用ふる繩。孝を、三繰(クリ)に、太さは筆の軸ほど、長さは五六十間ほどに綯ひ、柿澁又は蠟を引きたるもの。初は、管繩とて、繩の伸縮せぬやうに、一間づつに切り、節を抜き兩端を銅にて覆ひたる女竹の管に通したるを用ひしが、取扱上の不便のために、多くは、管なきを使用し、なほ白き革にて、間數を標記し、十間毎に、下札(サゲフダ)を附けたり。㊂屋に水をあびするに用ふる繩。

みづーなぶり 水嬲【名】みづあそび(水遊)に同じ。浮世風呂「水なぶりをなすつてお嬉しがる筈だが」

みづーなみ 水波【名】㊀なみ(波)㊁に同じ。繁式部日記「池の水波立ちわぎて」㊁かいふ(海浦)に同じ。千載「我妹子が上裳(ウハモ)の裾の水波にけさこそ冬は立ちはじめけれ」

みづーなら 水楢【名】【植】おほなら(大楢)

みつならびーかはわ 三並金輪【名】紋所の一。鎖の如くに連續せし金輪三つを、横に並べしもの。

みづーなるこ 水鳴子【名】そうづからうす(添水唐臼)に同じ。柳樽「水鳴子事ともせずに島の寢」

みづーに 水煮【名】砂糖・醤油などを加へず、水のみにて煮ること。「え」

みづーにかは 水膠【名】液體の膠。「るぜ 娼妓絹飾「水膠を見るやうな笄を插してゐる」

みづーにくわんづめ 水煮鑵詰【名】肉又は野菜・果實などを、生のまま用ひ、薄き鹽水を加へて製したる鑵詰。

みづーにほ 水帆【名】紋所の一。水と帆とを描けるもの。

みづーにんじん 水人參【名】【植】みづわらび(水蕨)に同じ。

みづーにら 水韮【名】【植】水韮科に屬する羊齒植物。水中に沈生し、莖は甚だ短くして、地中に在り、その莖より、細長くして尖りたる多數の葉叢生して、長さ一尺餘に達し、下部に小舌あり。いけにら。かはにら。

みづにらーくわ 水韮科【名】【植】隱花植物、羊齒類、石松(セキシヨウ)門、水韮族の一科。凡そ一屬六十二種ありて、何れも水中に沈生する多年生の植物。我國に自生するもの二種あり。

みづーぬき 水拔【名】水を溜めおく器の一部分に設けて、その水を、必要に應じて流れ出でしむる處。みづぬけ。

みづーぬけ 水拔【名】前條に同じ。

みづーぬし 水主【名】「水の神」に同じ。

みづーねこのめさう 水猫眼草【名】【植】ねこのめさう(猫眼草)に同じ。

みーつの 御角【名】かけつの(懸角)に同じ。

みづーの 水野【名】姓氏の一。本姓は清和源氏。尾張源氏の一派。多田滿仲の弟なる滿政の裔。尾張國の住人、浦野四郎重遠の子重房、同國小河に居りて、小川三郎と稱し、その後、藏人貞時、同國春日井(カスガヰ)郡水野に移りて、氏とす。貞守の曾孫忠政の後は、諸所轉封の後、元祿十四年以後、下野國結城(ユフキ)に居り、その分家に、駿河國沼津と出羽國山形との兩藩主あり。なほ、沼津の分家に、上總國市原郡鶴牧の藩主たりし家あり、沼津のは、維新の際、一時、上總國嘉久間に移され、山形のも、一時近江國淺井郡に遷されて、朝日山藩と稱し、何れも明治維後後、子爵を授けられ、なほ、結城藩主の分家にて、紀伊家に仕へて、家老となりしものは、男爵を授けられたり。

みづーの 美豆野【名】【地】山城國美豆にある野。藤曲(藏刺)「淀舟や水野の原の曙に」

みづーのーいりえ 美豆入江【名】【地】山城國久世(クゼ)郡五椋(イツラ)池の一部。池畔二重の堤あり。みづ(美豆)參照。

みづーのーえ 壬【名】『水の兄(エ)の義』十干の中にて、九番目に當るもの。倉丹集「みづのえ。ゆく水のえにだにあらば藤川の流れて人にすまざらめやは」

みづーのーえ 水江【名】【地】『外洋に面せる地形に本づく名なるべしといふ』丹後國與謝(ヨサ)郡本莊村、筒川(ツツ)村の中の古稱。萬葉「水江の浦島の子が……」

みつのえの【名】三吉野を讀み誤りたる語なるべしといふ。續後撰「朝霞立てるを見ればみつのえの吉野の宮に春は來にけり」

みつのーがしは 三角柏・御角柏・三津野柏【名】宮中の宴會に、御酒を受けて、飲むに用ひし木の葉。葉の先端尖りて、三岐に分れたる柏なりといふ。蘞蕪(カラノ)㊁の葉なるべし。みつながしは。延喜式「三津野柏二十把、長女柏(ナガシ)四十八把」續古今「思ひあまりみつの柏にとふことの沈むに浮くは涙なりけり」

みづーのき 【名】【植】みづきに同じ。

みづーのこ 水粉【名】こがし(焦)㊁を云ふ。【東國の方言】

みつーのーさき 御津崎・三津崎【名】【地】㊀古の難波津の海門。今、大阪市南區島之内(シマノウチ)なる三津寺町は、その遺址なりといふ。萬葉「難波潟三津の埼より大船に眞楫しじぬき」㊁近江國御津濱(ミヅハマ)の附近。萬葉「みつの崎浪をかしこみもり江の船漕ぐ君が往くかわびまに」

みづのーしふらうざゑもん 水野十郎左衛門【名】【人】徳川幕府旗本の士。名は成之。攝津守成貞の子。小普請たり。姦落不羈、旗本奴の團體大小神祇組の頭梁となり、俠客幡隨院長兵衛の名聲高きを妬みて、これを誘殺し、又その徒唐犬(トウケン)權兵衛と爭ひ、寛文四年、切腹を命ぜらる。時に、年三十五(一説に、五十二)。

みづのーただくに 水野忠邦【名】【人】徳川氏の臣。忠光の第二子。幼名は於莵(オト)

五郎。大阪城代・京都所司代・西丸老中を經て、天保五年、本丸老中となりたれども、將軍家齊と相合はず。薨後、家慶を輔けて、銳意、世の流弊を矯めんとし、却つて、士民の怨恨、旗本の反抗を買ひ、十三年、職を免ぜらる。弘化元年、復職し、翌年、又、職を退き、在職中不正の事ありきとて、領地を削られ、蟄居・謹愼を命ぜられ、嘉永四年歿す。年五十九。

みづのーただなか 水野忠央【名】〔人〕紀伊國新宮(シング)の城主。國學に通じ、丹鶴又は黃菊壽園と號し、朝儀部類・千とせのためし・丹鶴叢書等の編著あり。

みづのたひらやき 水平燒【名】『天草郡本渡(ホント)町水の平にて製するよりいふ』**あまくさやき**(天草燒)に同じ。

みづのーと 癸【名】『水の弟(オト)の義』十干の內にて、九番目に位するもの。 倉丹集「みづのと。近江なるみづのとまりを打過ぎてふなでていなん事をしぞ思ふ」

癸の祭【句】古、每月癸の日、禁中陰陽寮にて行ひし祭。 增鏡「平野といひける御釜は、陰陽寮にするて、みづのとの祭といふ事に用ひられけれど、中頃より、かの祭は絕えぬ」

みつーのーはま 御津濱・三津濱【名】〔地〕近江國坂本邊の琵琶湖の沿岸。 宇治「斯くて行く程に、三津の濱に、狐、一つ走り出でたるを見て」

みつーのーはままつ 御津濱松【名】〔書〕は**まつちゆうなごんものがたり**(濱松中納言物語)に同じ。

みつのぶ 光信【名】〔人〕**ささみつのぶ**(土佐光信)を見よ。

みづーのみ 水飲・水呑【名】一水を飲むに用ふる器。 千載「みづのみ、稻荷山しるしの杉の年ふりてみつのみやしろ神さびにけり」 二**みづのみびやくしやう**(水飲百姓)の略。

水呑の緒(ヲ)【句】鎧の袖に取り附け、胴の總角(アゲマキ)に結ひ附くる緒。

みづーのみ 水呑【名】〔地〕次條の略。 十訓「比叡山の西塔(サイタフ)に住みける僧、……、山へのぼるに、水呑の程にて」

みづのみびやくしやう 水飲百姓・水呑百姓【名】耕すべき田地を所有せぬ、貧しき農民。 新版歌祭文「高の知れた水呑百姓、わづかの田地・著類(キルモノ)著そけ」

みづのーりう 水野流【名】居合(ヰアヒ)術の一派。寛永の頃、安藝國廣島の人水野新五左衞門重治を祖とするもの。

みづのーゑちぜんのかみ 水野越前守【名】〔人〕**みづのただくに**(水野忠邦)に同じ。

みづのを-やま 水尾山【名】〔地〕**みのをのやま**(水尾山)に同じ。 名寄「うちつけにみづのを山の秋風を岩間にたぎつ音かとぞ聞く」

みつーは 三羽【名】**はばうき**(羽帚)に同じ。 鶉衣「水さす人にふはふはと乘るは三羽の輕はずみ」

みつーば 三羽【名】**みつたて**(三立)に同じ。 蟬丸「三羽の征矢(ソ)」

みつーば 三葉【名】〔植〕一繖形科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は互生し、復葉にして、三箇の小葉より成り、各小葉は、卵形にして、鋸齒あり。白色の小花、繖形花序をなして開く。芳香ありて味佳く、變種に絲三葉(イトミツバ)といふものあり。山野に自生し、又、園圃に栽培す。みつばぜり。〔鴨兒芹〕 二〔植〕**うまごやし**(苜蓿)に同じ。 三〔植〕**なんてん**(南天)に同じ。 四**くらぶ**二に同じ。

みづーは 瑞齒【名】『みづ みづしき齒の義』年老いて、齒の脫落したる跡に、更に生ずる稚齒。

瑞齒の嫗(オミナ)【句】みづはぐみたる嫗。 夫木「かまどもるみづ齒の嫗(オミナ)庇よりはひいでの小田の早苗取るなり」

みづーは 罔象【名】**みづはのめのかみ**(罔象女神)に同じ。

みづーば 水場・水塲【名】時時、出水(デミヅ)のある場處。 辰巳婦言「穴を掘るの、掘らねえのと、水場の施主が、掘拔井戸の地主が聞いてあきれらあ」

みつばーあけび 三葉木通【名】〔植〕木通(アケビ)科に屬する蔓生灌木。普通の木通に酷似し、用途も同樣なれども、葉は三小葉より成る。

みつばーあふひ 三葉葵【名】〔植〕一**えんれいさう**(延齡草)に同じ。 二**みつあふひ**(三葵)に同じ。「と。 三次條の略。

みつばいみつ 密賣【名】一ひそかに賣ること。

みつばいいんさい 密賣淫罪【名】密賣淫を爲したるによりて成立する罪。密賣淫の媒介をなし、又は自己の管理する場處にて、密賣淫の所行を認容する者も、密賣淫と同一の處分を受く。

みつばいーしや 密賣者【名】**みっしやうしや**(密商者)に同じ。

みつばーいちご 三葉苺【名】〔植〕一**なはしろいちご**(苗代苺)に同じ。 二**へびいちご**(蛇苺)に同じ。

みつばいーちよ 密賣女【名】**みつばいふ**(密賣婦)に同じ。

みつばいーひん 密賣品【名】密賣せる品

みつばいーふ 密賣婦【名】**いんばいふ**(淫賣婦)に同じ。 「と、又その報告。

みつーばう 密報【名】祕密に報告すること。

みつばうぎん 三寶銀【名】**さんばうぎん**(三寶銀)に同じ。

みつばうさう 水疱瘡【名】**すゐとう**(水痘)に同じ。

みつばうしーぎん 三寶字銀【名】**さんぼうぎん**(三寶銀)に同じ。 「(溝酸漿)に同じ。

みつばうず 水坊主【名】〔植〕**みそほほづき**

みつばうつぎ 三葉溲疏・省沽油【名】〔植〕省沽油科に屬する落葉小喬木。高さ一丈餘に達し、葉は對生し、復葉にして、三箇の小葉より成り、葉柄長く、各小葉は尖れる卵形にして、鋸齒あり。五月頃、花冠も萼も白色にして、五片より成る花、枝頭に圓錐花序をなして簇り開く。山野に自生し、材は、木釘・簞などに製す。

みつばうつぎーくわ 省沽油科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區の一科。凡そ五屬、二十五種、これに屬し、灌木又は喬木にして、我國に產するもの、三屬、三種あり。

みつばうふう 水防風【名】〔植〕**みづわらび**(水蕨)に同じ。

みつばーがしは 三葉柏【名】紋所の一。中央の一葉を挾んで、左右に、各一葉を配したる三箇の槲の葉を描けるもの。

みづばかり 水準【名】**みづもり**(水盛)に同じ。 和名「準繩、美豆波賀利」

みづはき 水吐【名】一溜水を流し遣ること、又その處。 二**みづはけ**(水捌)に同じ。 三魚の頭の一部、鰓蓋(エブタ)の處。(水吸(スヒ)に對して)

みつばーぐさ 三葉草【名】〔植〕一**のだけ**(前胡)に同じ。 二**ふうろさう**(風露草)に同じ。 三**ひのき**(檜)の異稱。 藏玉集「大內や名もむつまじきみつば草家づくりする陰ぞ久しき」

みづはーぐむ 瑞齒含む【動四自】『みづはぐむ(瑞齒含む)の義。一說に、三齒の義にて、老人の齒の脫落して、僅かに三齒のみさし合ひ、組み合へるをいふと』瑞齒生ず。甚しく老いたるにいふ語。みづはさす。みづわぐむ。みづわさす。〔古語〕後撰「年ふれば吾が黑髮も白川のみづはぐむまで老いにけるかな」

みづーはけ 水捌【名】水の滯らず流れ去る工合。 みづはき。

みづーはけ 水刷毛【名】水を引くに用ふる刷毛。最も軟かなるを要するが故に、鹿の脇毛にて作る。

みづはこべ 水馬齒【名】〔植〕水馬齒科に屬する一年生の草。高さ五六寸に達し、莖は水面に浮び、或は水中にありて、細長く、葉は對生し、無柄にして、箆形・全緣、二月頃、葉腋に、單性・小形の花、雌雄

同株に開く。雄花には雄蕊一箇、雌花には雌蕊一箇あるのみにて、花被を缺く。水田・池澤などに自生す。

みづはこべーくわ 水馬齒科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區に屬する一科。凡そ一屬・二十六種、これに屬し、水生又は陸生の草にして、我國に自生するものは、二種なり。すべばしくわ。

みづばーざいこ 三葉柴胡【名】〔植〕**みづばつちぐり**(三葉土栗)に同じ。

みづはーさす 瑞齒さす【動四自】**みづほぐむ**(瑞齒含む)に同じ。〔古語〕今昔「みづはさす八十(ヤソ)あまりの老の波海月(クラゲ)の骨に逢ふぞ嬉しき」續世繼「みづはさしたる女の、杖にかかりたるが」

みづはし 水橋【名】水の上に渡したる橋。若鳳盒「里の水橋危く渡りて」

みづーはじき 水彈【名】空氣の壓力を利用して、水を彈き上ぐるやうに仕掛け、消火・撒水などに用ふる具。ポンプ・龍吐水の類。太平記「火矢を射れば、水はじきにて打消し候ふ」 靑葉野中の螢井「水はじきかと、由兵衞(ヨシ)が、澁紙出して上包(ウハツツ)」

みづーはしぶね 水端船・水端舟【名】水を汲み取りて運ぶに用ふる端船。

みづばーしようま 三葉升麻【名】〔植〕毛茛(ケンポナシ)科に屬する多年生の草。大升麻(オホンマ)の變種。全體に大升麻より小く、有毒にして、高さ二尺餘。葉は互生し、複葉にして、三小葉より成り、各小葉は、心臟形にして、掌狀に淺裂し、鋸齒を具ふ。短き花梗を有し、白色の小花、穗狀花序をなして開く。山野に自生す。いぬしようま。

みづーばしら 三柱【名】鳥居の、柱を三方に、三角に三本立て、上の笠木等も、皆、持ち合はせて、鼎の足の如き形にせるもの。

みづーばしら 水柱【名】水の、空中に、高く迸りて、柱狀をなすもの。すゐちゆう。

みづーばせう 三芭蕉【名】紋所の一。芭蕉の葉三枚を、杉形(スギガタ)に並べ描けるもの。

みづーばせう 水芭蕉【名】〔植〕天南星(テンナンシヤウ)科に屬する多年生の草。高さ二尺餘に達す。葉は楕圓形にして、大きく、やや芭蕉のに似、花は小くして、肉穗花序をなし、大なる佛燄を具ふ。山間の池沼等に自生す。

みづば(三葉) 「つば(三葉)」に同じ。

みづばーぜり 三葉芹・鴨兒芹【名】〔植〕傘(セリ)科に屬する多年生の草。全體に香氣あり。莖は中空にして、高さ二尺餘。葉は互生し、複葉にして、三小葉より成り、各小葉は、心臟形にして、掌狀に淺裂し、鋸齒を具ふ。短き花梗を有し、白色の小花、穗狀花序をなして開く。山野に自生す。いぬしようま。

みづーはち 蜜蜂【名】〔植〕膜翅類に屬する昆蟲。蜜蜂科中の一屬の總稱。王蜂と、一定の雌蜂を中心とする團體生活を營み、王蜂の外に、働蜂(ハタラキバチ)・雄蜂あり。王蜂は、全群を統一し、又、産卵に從事す。働蜂は、雌蜂の生殖器の發達せぬものにして、一巢中、多數に達し、食物の採集、蜜の釀造、巢の造營、仔蟲の飼育等に從事す。雄蜂は、働蜂より稍大きく、交尾後、初秋に至れば、働蜂に咬み殺され、又は巢外に放逐せらる。蜜は、働蜂の、春より秋に亙り、諸種の花を訪ひて、花蜜を嘗め、胃の一部なる蜜囊に貯へて歸り來り、更に吐き出して貯へたるものなり。働蜂は、又、若き時には、腹部より蠟を分泌して、巢を造る。蜜の香氣と色とは、花の種類によりて一定せず。蠟は、蠟燭、膏藥の原料とする外、工業上にも用ふ。

みつーはちまん 御津八幡【名】次條の略。

みつーはちまんぐう 御津八幡宮【名】大阪市南區島之内木綿(モメン)橋通・佐野屋橋筋の角に鎭座せる神社。祭神は應神天皇。島之内の鎭守の社にして、この社あるによりて、木綿屋橋通を、八幡筋ともいひ、東西約四町の間、骨董店・道具屋多し。

みつばーちやうじ 三葉丁子【名】〔植〕**せんじゆぎく**(千壽菊)に同じ。

みつばーつちぐり 三葉土栗【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。根は塊根にして、莖は横臥し、葉は三小葉より成る複葉にして、各小葉には、著しき鋸齒あり。春、莖頭に黃色の花を開く。みつばざいこ。みつばのぶくりやうさう。

みつばつつじ 三葉躑躅【名】〔植〕**いはつつじ**(岩躑躅)【一】に同じ。

みつばーてつせん 三葉鐵線【名】紋所の一。三鐵線(ミツテツセン)の間に、葉を一枚宛配して描けるもの。

みづーばな 水端【名】【一】「水の出端(ハナ)」に同じ。萬葉、卯の花をくたす長雨(ナガ)の始水(ハナミヅ)に寄るこづみなす寄らむ子もがも」【二】出でばじむること。太平記「先んずる敵には、水ばなに少し退(ス)きて、赤、味方立てなほして」

みづーばな 水洟【名】水の如く薄き鼻汁。みづっぱな。堀川狂歌集「水洟に風の吹きしく秋の夜は髭にも露の玉ぞ散りける」

みづっぱなし 見放【名】**みばなし**(見放)の音便。

みつゃはなづな 三鼻綱【名】三本を一本に撚(ヨ)合はせたる鼻綱。盛衰記「門よりは外、右の脇に、法師の頭(カブ)を切りかけて、金(カナ)ざを以て、大なる木を掘立てて、三鼻綱に繫き附けたり」

みづーはなび 水花火【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する一年生の草。高さ一二尺に達す。葉は細長くして、根生し、莖の上部、數葉の生ずる所より、多數の小梗出で、各梗、更に數個に分岐し、扁平・楕圓形にして、茶褐色なる小穗を著く。我國、濕地に自生す。

みづーばなれ 水離・水放【名】【一】水中に在る物が、水より離れ、又それを水より離すこと。狂言鱸庖丁「鯉は、水はなれが大事ぢや」 俳諧續明月の紅葉「かたぢの父の親の手を、水ばなれせぬお龜とは」【二】水氣によりて、物の離れ、又は物を離すこと。【三】水を煮立てて、僅かに溫くなる程度。

みつばーにんじん 三葉人參【名】〔植〕【一】**えんれいさう**(延齡草)に同じ。【二】**むかごにんじん**(零餘子人參)に同じ。

みつばね 三羽【名】【一】語尾に「ん」の音ある語の三つ重なれる物の名などを言ひあふ遊戲。きのふはけふの物語「田樂をあぶり、何にても、三つはねたる事をいひて、賞翫せんといひて、雲林院の、南藝人の、神泉苑などといひて」【二】**あんぽんたん**(安本丹)【一】の隱語。

みつーばね 三羽根【名】紋所の一。羽根三つを番へて、略圓形を作りしもの。みつよせばね。

みづーはね 水刎【名】蛇籠(カゴ・牛(ウ)ご)を用ひて、水勢をくひとめて、その方向を轉ぜしむる裝置。

かみ(岡象神)【名】**みづはのめのかみ**(岡象神)に同じ。

みづはーのーかみ 岡象神【名】**みづはのめのかみ**

みづはーのーぶくりやう 三葉茨苓【名】〔植〕**みづばつちぐり**(三葉土栗)に同じ。

みづはーのーまつ 三葉松【名】〔植〕**さんこのまつ**(三鈷松)に同じ。

みづはーのーめ 岡象女【名】次條に同じ。

みづはのめーのーかみ 岡象女神【名】伊弉諾(イザナギ)・伊弉册(イザナミ)二神の女にて、水を司るといふ女神。「【一】藥木」に同じ。

みづばーはな 三葉花【名】〔植〕**めぐすりのき**

みづばーふぢ 三葉藤【名】紋所の一。圓の內に、葉三枚と花房一箇とより成る藤三つを、各相對せしめて描けるもの。

みつーはまぐり 三蛤【名】紋所の一。蛤貝三つを、杉形(スギガタ)に重ねしもの。

みづーはみがき 水齒磨【名】液狀に製したる齒磨。

みつーばん 三半【名】火事の告知に、半鐘を、三つづつ續けて打つこと。一半(ハンツ)・二半(ハンツ)・擦半(スリハン)などに對して、近距離の出火を知らす。

みづーはんげ 水半夏【名】〔植〕【一】**ねこのめさう**(猫眼草)【一】に同じ。【二】**みづがしは**(水檞)に同じ。

みづはやーのふまさ 水早信正【名】〔人〕柔術家。通稱は長左衞門。技を僧制剛に學びて、制剛流を開く。

みづばーよつば 三ば四ば【名】『ばは、間(マ)卽ち棟の義、又、端(ハシ)にて、幾棟にも分れたる意なるべきかともいふ』家屋の、三棟・四棟と建て續けて、立派なること。古今「この殿はうべも富みけりさき草のみつばよつばに殿づくりせり」枕「檜、人近からぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし」

みづばらすと 水ばらすと【名】『ばらすと』は英 Palmood の訛』船の吃水の釣合を取るために、二重底又は特別に設けたるタンクの中に滿せる水、又は船艙內に積載する砂礫。

みづ-ばり 水張【名】糊を用ひず、水のみにて、布帛を張り乾かし、又、紙などを張り附くること。

みづ-ばりつけ 水磔【名】徳川時代に、罪人を、倒に海中につるし、潮の満ち來る時は、頭、波に浸りて、苦痛のために、暫時息絶え、潮干れば、又蘇生し、數日の後には死ぬるやうにせし刑。

みつば-りんだう 三葉龍膽【名】紋所の一。三箇の葉と花とを有する龍膽三箇を、略三角形に組み合はせたるもの。

みづ-ばれ 水腫【名】水氣を含みて腫ること。みづぶくれ。

みつば-わうれん 三葉黄蓮【名】〔植〕毛茛(カラゲン)科に屬する多年生の草。高さ三四寸に達す。葉は複葉にして、葉柄長く、簇生し、小葉は卵形又は倒卵形をなして、鋸齒あり。花莖の頂端に、一箇の白色・五瓣の小花を著け、果實は蓇葖にして、藥用に供す。高山に自生す。かたばみわうれん。

みづはかけてんわう 水齒別天皇【名】〔人〕はんしやうてんわう(反正天皇)を見よ。

みつ-ひ 【名】『三結(ユヒ)』の約』みつ(三)に同じ。

みつ-び 三火【名】ひとつび(一火)㊁を見よ。

みづ-びえ 水稗【名】〔植〕のびえ(野稗)に同じ。

みつ-ひき 三引【名】みつひきりやう(三引兩)の略。若鳳舍「一重菱の内に、三引を切りぬ。これこそ小りんが定紋なれ」

みづ-ひき 水引【名】㊀麻などを絲に作るために、水に浸したる上にて、皮を剝ぐこと。後鶯「水引の白絲はへて織る機は旅の衣にたちや重ねん」㊁佛前・神輿などに張り渡す、金襴などの帷。新可笑記「雲龍の水引冷風にひるがへし」㊂元結(モトユヒ)と同樣なる細き紙捻(カミヒネリ)に、糊水を引きて乾し固め、進物を包みたる上より結ぶに用ふるもの。多くは、半分づつ染め分け、數條を合はせて用ひ、普通の場合には、關東にては、紅・白又は金・銀の染分、關西にては、金・紅又は紅・白のを用ひ、凶事には、關東・關西とも、青水引、黒水引とて、黒又は藍との染分のもの、又は全部白なるを用ふ。㊃鎧の化粧板(ケサイタ)の下に、白・赤二色の綾にて打ちたるもの。㊄矢條の略。

みづひき-ぐさ 水引草・金線草【名】〔植〕蓼(タデ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。節大にして、葉は互生し、大形にして、楕圓形又は卵形をなし、全緣にして頂尖り、夏、莖梢・枝端に、深紅色の細花、一尺ほどの穗をなして開く。花被は四片ありて、一片よりは白色、他は帶紅色なるが普通なれど、全く白色なるものありて、銀水引といひ、又、八幡(ヤハタ)水引とて、葉に黒褐色なる八字形の斑點あるものあり。果實は卵形にして、鉤を具へ、他物に附著しやすし。はちのじみづひき。みづひき。みづひきしようま。


(さぐきひづみ)

みづひき-とうりやう 水引虹梁【名】〔建〕

みづひき-さう 水引草・金線草【名】〔植〕

みづひきぐさ (水引草)に同じ。

みづひき-しようま 水引升麻【名】〔植〕

みづひきぐさ (水引草)に同じ。

みつ-ひきだし 三引出・三抽斗【名】上下に重なれる三箇の引出ありて、手まはりの物などを入れおく箱。

みづひき-づつみ 水引包【名】進物を、紙にて包みて、水引を掛くること、又その進物。浮世風呂「男衆への水引包は、二つの三方にうづ高うして」

みづひき-のれん 水引暖簾【名】よこのれん(横暖簾)に同じ。

みづひき-まく 水引幕【名】劇場にて、舞臺の正面・上方に、又、相撲場(スマヒバ)にて、四本柱の周圍・上方に張る、横に細長き幕。みづひき。

みづひき-も 水引藻【名】〔植〕眼子菜(ヒルムシロ)科に屬する草。淡水中に自生し、莖細長く、葉は楕圓・全緣にして、葉柄長きもの。

のと、細長き線形にして、葉柄を缺けるものとあり。小花、穗狀花序をなして開く。

みづひき-もどゆひ 水引元結【名】ぶんしちもとゆひ(文七元結)に同じ。

みつ-ひきりやう 三引兩【名】紋所の一。白地に、三筋の太き黒條を横に引きたるもの。みつひき。太平記「三引兩の笠標」

みつ-びし 三菱【名】㊀紋所の一。菱形三箇を組み合はせて、三柏(ミツガシハ)と同樣なる形に描きたるもの。㊁矢條の略。

みつびし-ぐわいしや 三菱會社【名】『創立者岩崎彌太郎は、土佐の藩士なるより、藩侯山内家の紋所なる三柏(ミツガシハ)を變形したる三菱を會社の紋章と定め、社名にも、その語を用ひたるなり』にっぽんいうせんくわいしや(日本郵船會社)を見よ。

みつびし-むら 三菱村【名】〔地〕『十萬圓以下の建築を許可せぬ方針のため、暫く空地多かりしため、村と呼びしなれど、その後、漸次、大建築物櫛比するに及びて、村を、特殊の地域といふ程の意味に轉用して、今も、舊稱のままに用ふ』三菱合資會社の所有に係る、東京市宮城前一帶の土地。

みづ-びたし 水浸【名】水に浸すこと、又浸ること。

みづ-びなは 水火繩【名】苧を綯ひて作り、鐵醬(ミ)にて煮たる火繩。又、灰を附け、鐵醬を掛け、干して作れるもあり。

みつ-ひばりげ 三雲雀毛【名】馬の雲雀毛の一種。

みづ-びん 水便【名】水を汲み取る都合。平家「ここは、馬の草飼(クサカヒ)・水便、共によげなり」

みづ-びん 水鬢【名】水にて鬢を撫でつくること、又その鬢。古事談「以二扇妻一撮レ鬢、猶如二水鬢一」

みつ-びやうし 三拍子【名】二人以上の者が、同時に事を爲さんとて、合圖(アヒヅチ)とする「一(イチ)・二(ニ)・三(サン)」の掛聲。狂言「文山だち」「この太刀の柄(カ)も、三拍子で離しやれ」

みつ-ひらきがさ 三開傘【名】紋所の一。開きたる傘三箇を、品字形に並べたるもの。

「じ。

みづ-びる 水蛭【名】〔動〕ひる(蛭)に同じ。

みつ-つぶ 水粒【名】みつぼ(水粒)に同じ。

みつ-ぶ 密夫【名】かくしをとこ。まをとこ。みそかを。情夫。「をんな。情婦。

みつ-ぶ 密婦【名】かくしをんな。みそかをんな。

みつ-ぶう 密封【名】隙間なく封ずること。嚴重に封をなすこと。

みづ-ぶき 水蕗・茨【名】〔植〕おにばす(鬼蓮)に同じ。枕「おそろしき物、……みづぶき・菱」

みづ-ぶくれ 水脹【名】皮下に水膿を生じ、又は水を多量に飲みたるため、身體の張りふくらむこと。みづばれ。

みつ-ぶくろ 三袋【名】紋所の一。袋三つを品字形に向ひ合はせて、その周邊を略圓形にせるもの。

みづ-ぶくろ 水袋【名】㊀水を入るるに用ふる袋。㊁うきぶくろ(浮袋)㊁に同じ。

みつぶし-ぐさ 三節草【名】〔植〕いね(稻)㊀に同じ。

みつ-ぶさん 三蒲團【名】三枚布き重ねたる蒲團。白石噺「突出されたる田舍の娘、あたり、きよろきよろ、紗に見ぬ三蒲團」

みづ-ぶさん 水蒲團【名】丈夫なる布の中に、綿の代りに、古繩・枯草などを入れて作りたる蒲團。昔、船軍の時、水に浸して、矢玉を防ぐに用ひたり。

みづ-ぶさり 水太【名】身體の、しまりなく肥えたること。

みづ-ぶね 水船・水舟【名】㊀飲水を汲み取りて運ぶ船。みづとりぶね。みづとり。みづでんま。㊁飲水・使水などの水を湛へおく、大なる箱又は桶。饅湯にも、洗(シヤ)の一隅に設けあり。すゐさう。「水槽」太平記「大なる木を以て、水槽を二三百打たせて、水を湛へおきたり」

みつ-ぶんどう 三分銅【名】紋所の一。分銅三箇を、品字形に重ねたるもの。

みづ-ぶんわん (椀)に同じ。

みづ-ぶぶき 水蕗【名】〔植〕おにばす(鬼蓮)に同じ。産寶「よき菱、大きなる水ふぶき」和名「茨、三豆布木」

みづぶるひ 水篩【名】みづこし。水嚢(スヰナウ)。和名「漉水嚢、美豆布流比」

みづぶろ 水風呂【名】湯の代りに、水を用ひて浴すること。「こと。

みっぺい 密閉【名】隙間なく閉ぢふさぐこと。

みっぺいおん 密閉音【名】〔語〕**へれつおん**(破裂音)に同じ。

みづへん 水偏【名】**さんずゐ**(三水)に同じ。

みづべんじょ 水便所【名】『英 Water-closet』排泄したる大小便を、直ちに、水にて洗ひ流すやうに装置したる便所。

みづつぼ 水粒【名】水の泡。みづたま。みなつぼ。水滴。萬葉「みつぼなす假れる身ぞとは知れれどもなほし願ひつ千とせの命を」名義抄「泡、ミナツボ・ミツボ・ア」「稱。おつぼ。

みづつぼ 御坪・御壺【名】**つぼ**(坪)[一]の敬稱。

みづつぼ 御坪の召次(メシヅギ)【句】院の御壺の中に伺候する召次。慶長記「重國、院宣を帶して、西國へ下向、院よりは御壺の召次に、花方といふ者を副へ下されけり」

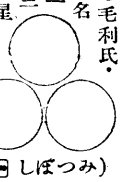
みづつぼ 瑞穂・水穂【名】みづみづしき稻の穂。正統記「豐葦原の千五百秋(チイホ)の瑞穂の地あり。汝往きて知らすべし」

みづつぼう 密謀【名】祕密のはかりごと。密計。

みづつぼうこう 水奉公【名】**みづしぼうこう**(水仕奉公)に同じ。紅梅千句「武家の内をし見るもひやか(さいふ句に)町方に居つかん秋の水奉公」

みづつぼこり 水ぼこり【名】〔植〕**みづおほばこ**(水車前草)に同じ。

みづつぼし 三星【名】[二]紋所の一。支那にて、三武又は將軍星といふより、武家にては、これを用ひしもの多く、これの上に、一文字を副へたるを「一文字に三星」といひ、大江氏より出でし毛利氏。永井氏の定紋として名高く、又、これの下に一の字を副へたるは、「三星に一文字」又は「三星一引(ミツボシヒキ)」と稱し、攝津源氏の出なる渡邊氏の定紋として名高く、渡邊星の名あり。單純なる三星は、肥前國平戸藩主松浦氏の定紋として名あり。[三]**さん**(參)を云ふ。〔江戸の語〕[三]徳川時代に行はれし、瘡毒の藥。[四]**はいざ**(梅毒)の隱語。柳樽「三星の氣づかひはなし二星(ニツクシ)」


(二)しぼつみ

二星の盃(サカヅキ)【句】造物(ゾウモツ)無き洲濱(スハマ)の臺に、品字形に並べたる大・中・小の盃。貞丈雜記「三星・五星(ゴセイ)の杯といふは、洲濱(スハマ)の臺に、花鳥などの作物(ツクリモノ)なくて、杯ばかり、∞の如く、大・中・小を並べおくを、三星といひ、∞の如く置きたるを、五星といふ」

みつぼしがや 三星蚊屋【名】〔植〕次條の略。

みつぼしがやつり 三星蚊屋釣【名】〔植〕**ひんがやつり**(品字蚊屋釣)に同じ。

みつぼしこもん 三星小紋【名】三つ星の模様を小紋にせるもの。日本永代藏「三星小紋の布子に、綿(ワタ)の肩衣」

みつぼしーにーいちもんじ 三星に一文字【名】**みつぼし**(三星)[二]を見よ。

みつぼしひとつびき 三星一引【名】**みつぼし**(三星)[二]を見よ。

みつぼね 御局【名】**つぼね**(局)の敬稱。枕「主上も、宮の御局に渡らせたまひて」

みづほのくに 瑞穂國・水穂國【名】〔地〕**ごあしはらのみづほのくに**(豐葦原瑞穂國)の略。萬葉「鳥が鳴く吾妻の國の御軍士(ミイクサ)を喚(ア)したまひて、……定(ソ)めてし水穂の國を」「法。

みづーぼふ 密法【名】〔佛〕眞言祕密の教。

みづーぼほづき 水酸漿【名】〔植〕**みぞほほづき**(溝酸漿)に同じ。

みづーぼり 水堀【名】水の湛へてある堀。(空堀(カラボリ)に對して)醒睡笑「頃しも、師走(シハス)寒(カン)の前、雪も霜も白妙なる水堀のありしを渡りかかり」

みつま 三潴【名】〔地〕[一]筑後國の六郡の一。郡役所を大川町に置く。[二]明治の初年設置の縣の一。四年藩を廢して、縣としたる柳川・三池(ミイケ)・久留米(クルメ)の三縣を合併して置きしもの。九年、一時、佐賀縣を併せしが、直ちに、又、長崎縣に屬せしめて、元の地域に復し、同年、福岡縣に入る。

みつま 水間【名】〔地〕和泉國泉南(センナン)郡木島(キノシマ)村の大字。五十年忌歌念佛「和泉の國水間の里の佐治右衞門」

みつーまう 密網【名】[一]編目のこまかなる網。[二]法令の苛細なること。

みづーまき 水撒【名】砂塵の立つを防ぐ目的にて、地上に水を撒くこと、又それを職業とする人。撒水(サンスヰ)。

みづまきーかは 水巻革【名】地(ヂ)を薄樺色に燻べたる革に、細き筋を筋違に引きたるもの。

みづまきーぐるま 水撒車【名】車臺の上に水槽を取り附けて、水を湛へ、管にて、その水を、下部の如露(ジョロ)に導き、車の廻轉と共に、道路に撒水するを得るやうにしたる車。

みづまきーじどうしゃ 水撒自働車【名】水撒車としての裝置を施したる自働車。

みづまきーにんぷ 水撒人夫【名】水撒に從事する人夫。

みづまく 水幕【名】木綿にて、袷又は綿入に作り、十文字に刺しかがりたる幕。昔、船軍の時、水に浸し、矢玉を防ぐに用ひしもの。

みつまーぐさ 三間草【名】〔植〕『**みつばよつば**(三ば四ば)參照』**ひのき**(檜)に同じ。藏玉集「三間草。檜。大内や名もむつまじき三間草家づくりする影ぞ久しき」

みづーまくら 水枕【名】讀談又は防水布にて作り、中に水を入れて用ふる枕。夏季の用に供し、又、病人の解熱を助くるに用ふ。

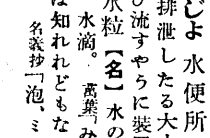
みつーまさかり 三鉞【名】紋所の一。鉞の刃三箇を、圓周にて圍みたるもの。

みづーまさーぐも 水增雲【名】この雲の空に現るるは、水嵩の增す前兆なりといふもの。拾玉「末はれぬ水まさ雲にもる月を空しく雨の夜半や思はん」

みづーます 水枡【名】液體を量るに用ふる枡。その一升枡は、內法(ウチザシ)の深さ二寸七分にて、普通のに比して、一厘少し。

みつーまた 三叉【名】或一點より三方に分岐せる處。

みつーまた 三極・結黃・黃瑞香【名】〔植〕『前條の語の轉義、卽ち莖より枝の分岐する形によりていふ』瑞香(ヂヤウカウ)科に屬する落葉灌木。高さ六七尺、莖は平滑、柔軟にして、彈性あり。三叉狀に分枝する特性あり。葉は互生し、廣披針形・全緣、先端尖


(たまつみ)

して、裏面の脈上に、毛茸疎生し、花は晩秋、葉の脫落する時、すでに蕾を生じ、その頭狀に排列して、下垂するさま、蜂の巢の如く、二月に至りて開く。花冠を缺き、花托は黃色、萼は管狀をなし、絹絲樣の毛茸を生じ、花後、葉を生ず。秋、枝條を伐り取りて、製紙の料とす。みつえだ。みつまたやなぎ。みまたやなぎ。むすびぎ。ゆづぶさ。

みつーまた 三股・三俣・三派【名】〔地〕東京市日本橋區中洲(ナカス)の附近、隅田川の水の、淺草川・新堀・靈岸島の三方に分れ、流るる處。月の名所として名高く、明和の末年、川中の洲渚の中洲と呼ばれしものを基礎として、酒井侯邸前より永代橋の方へ、三四千坪の新地を築出し、料理屋・水茶屋、その他、家屋建續き、夏は納涼の船も、この新地にのみ集まり、兩國橋畔の賑を奪ふに至りしが、寬政六年、取拂を命ぜられ、明治十九年、復築き立てて、中洲の舊稱を用ひ、今も劇場を始とし、茶店・料理屋など多し。葉の一本「兩國橋の上、御藏前(オクラマヘ)のあたりより、下は三股を限り」

みつまたーぎり 三股錐・三俣錐【名】蜂の、三叉をなせる錐。後世のは、主に酒樽の孔などを穿つに用ひ、中央の鋒は、三目(ミツメ)錐の如き刃を有し、左右のは扁く尖れる刃を有す。太神宮儀式帳「三俣入柄」

みつ-まつ 三松【名】紋所の一。松三筒を抱き合はせたるもの。

みづまてんさく 水間沾徳【名】〔人〕俳人。江戸の人。名は友兼、通稱は次郎左衛門。合歓堂と號す。刀研(トギ)を業とし、早くより俳諧を好み、福田露言の門に入り、後、飛鳥井雅章(マサキ)の勸によりて、内藤露沾に教を受け、初、沾葉といひしが、後、沾徳と改む。又、榎本其角に私淑し、其角の歿後、その門人、多くこの人に就く。能書の譽あり。享保十一年歿す。年六十二(一説に、六十六)。

みづまてら 水間寺【名】和泉國泉南(センナン)郡木島(キノシマ)村大字水間にある寺。天平十六年、僧行基の草創といふ。龍谷山と號す。古は堂宇壯麗なりしが、今は衰頽して、僅かに開山堂・藥師堂・護摩堂を存す。數多の古文書を藏す。

みつ-まと 三的【名】㊀歩射(ブシャ)にて、徑五寸のと九寸のと一尺二寸のとの小的を、三金輪(カナワ)に近寄せて立つること。㊁「的の數三つにて行ふよりいふ」**やぶさめ**(流鏑馬)に同じ。

みづまつり 水間祭【名】和泉國水間寺の法會。二月初午の日に行はる。

みつ-まめ 蜜豆【名】ゆでたる豌豆に砂糖蜜をかけたる食品。寒天を刻み入るることあり。

みつ-まめざら 三豆造【名】紋所の一。豆造三つを、品字形に組み合はせたるもの。

みづまり 身詰【名】身の行き詰ること。身の處置に窮すること。俗曲「明烏花濡衣」長居するほどそなたの身づまり」

みづ-まり 水鞠【名】水玉(ミヅタマ)㊀の、形大なるもの。盛衰記「水鞠、さと蹴させつつ、馬と馬とを馳せ並べて取り組み」

みづ-まり 水椀【名】水を盛るに用ふる椀。〔古語〕太神宮儀式帳「水眞利三百口」

みつ-み 三身【名】著物の裁方の名。布帛を三折にして、その中部を前身に裁ち、兩端部を後身と衽(オビ)とに裁つ裁方。四歳前後の兒童の著物は、この裁方にて仕立つるなり。(一身(ヒトミ)・四身(ヨミ)・本立(ホンダチ)に對して)「じ。

みづ-みち 水道【名】**みづすぢ**(水筋)に同じ。

みつ-みつ 密密【貌】㊀親密なるさま。しんみり。こまやか。庭訓往來「互忘二密密雜談一誠不レ奠之至也」㊁きはめて秘密なるさま。しのびやか。内内。内密。吉野忠信「密密に伺ひ申す事あり」

みづ-みづ 瑞瑞【貌】みづみづしきさま。御所櫻「おお、存じたとは違うて、御顔色もみづみづと御機嫌の體(テイ)」

みつ-みつし【形二】『みつはみいつ(眞御威)の約ならん』才德智勇、具はれり。〔古語〕記「みつみつし久米の子が頭椎(クブツチ)い石椎(イシヅチ)いもち撃ちてしやまむ」

みづ-みづし 瑞瑞し【形二】光澤ありて、若若し。勢よく、つややかなり。

みつ-みどり 【名】〔植〕**かはみどり**(排香草)に同じ。

みつみね 三峰【名】〔地〕㊀**みつみねさん**(三峰山)の略。㊁**みつみねじんじや**(三峰神社)の略。

みつみね-じんげん 三峰權現【名】**みつみねじんじや**(三峰神社)の舊稱。

みつみね-さん 三峰山【名】〔地〕『三峰秀出せるによりていふ』武藏國秩父(チチブ)郡の南部にある山。甲斐國との境界に起りて北走し、雲取(六六五八尺)・白石(六三三九尺)・妙法ヶ嶽(四三九七尺)の三峰秀出し、妙法ヶ嶽の山上に三峰奥山あり、その西北に三峰神社あり。

みつみね-じんじや 三峰神社【名】武藏國秩父(チチブ)郡大瀧村三峰に鎭座せる縣社。祭神は伊弉諾(イザナギ)神・伊弉册(イザナミ)神。景行天皇・文武天皇・聖武天皇を相殿とし、天御中主(アメノミナカヌシ)神・高皇産靈(タカミムスビ)神・神皇産靈(カミムスビ)神・天照大神を合祀す。明治元年神佛分離以前は、寺を觀音院高雲寺といひ、聖護(ショウゴ)院派の修驗(シュゲン)道の本山たりき。

みつみね-もみ 三峰樅【名】〔植〕『武藏國の三峰山に多きよりいふ』**うらじろもみ**(裏白樅)に同じ。

みづ-みまひ 水見舞【名】洪水の難に遭ひたるを見舞ふこと。其角、唐稅を流るる音や水見舞」

みつ-むす 見詰む【動下二他】視線を、或一つの物に注ぎて、暫くの間續けて見る。見入る。凝視す。

みづ-むけ 水向【名】㊀靈前に、水を手向くること。本朝櫻陰比事「水ゆる命を取れければ、……その井戸を水むけにして跡弔へ」㊁誘ひて、端緒を捉へんとすること。

みづ-むし 水蟲【名】〔動〕㊀有吻類に屬する水棲の小昆蟲。體は短艇形にして扁平、大さ、僅かに一二分に過ぎず。肢にて、水中を游泳す。㊁〔醫〕水仕事・多汗症などのために、手掌・足蹠の表皮中に、粟粒大乃至豆大の水疱多く發して、濕疹狀をなし、度度再生し、甚だ痒く感ずる皮膚病。汗症。浮世風呂「襁の油を取って、浸淫瘡(ツビ)の藥にするし」㊂**うを**(魚)㊀の異稱。藏玉集「沖つ島さしての磯にまとむしてみづむしならずみなこもどり」

みつ-むね 三棟【名】船屋形の造り方の一。平家「熊野詣・天王寺詣などには、二瓦(ガワラ)・三棟造りたる船に乘り」

みつ-め 三目【名】㊀人・鳥・獸などの、目㊁の、三つあること。㊁一つの物に、孔の三つあること。盛衰記「三目の鏑矢」㊂婚姻又は出産の日より數へて、三日目の日、又その日の祝事。**みか**(三日)㊂參照。「三日の祝」㊃**みつめゆひ**(三目結)の略。

みづめ 【名】〔植〕樺木(カバノキ)科に屬する落葉喬木。嫩枝平滑、葉は下方のは圓形、上方のは長楕圓形、何れも、先端尖り、鋸齒あり。花は單性にして、雌雄同株。樹皮に臭氣あり。材は堅くして、器具の製作に用ふ。

みつ-めうがくづし 三嚢荷崩【名】紋所の一。嚢荷の花三箇の各花被を、輻射狀に四出せしめしもの。

みづ-めがね 水眼鏡【名】水中にても見得るやうにしたる眼鏡。

みつめ-ぎり 三目錐【名】㊀刃の三稜をなせる錐。三稜錐(サンリョウスイ)。**よつめぎり**(四目錐)參照。㊁〔人〕『目をめ(妻)の義に取りなしていふ』**ふじはらかねいへ**(藤原兼家)の異稱。盛衰記「村上の御門の御宇、左中將兼家、北の方を三人持ちたれば、異名には、三目錐と申しけり」

みつめ-こぞう 三目小僧【名】目を三つ具へたりといふ妖怪。その入道の姿なるを、三日入道といふ。「はん。

みづ-めし 水飯【名】水漬(ミヅ)の飯。するみつめ-にふだう 三目入道【名】**みつめこぞう**(三目小僧)を見よ。

みつ-めゆひ 三目結【名】紋所の一。近江源氏より出でたる吉田氏の家紋として、有名なり。

みづもぐさ みづも草【名】菱(ヒシ)の實。

みづ-もぐり 水潛【名】**みづくぐり**(水潛)に同じ。「條下を見よ。

みづ-もせ-に 水も狹に【句】**みづ**(水)の

みづ-もち 水餅【名】冬、黴(カビ)・蟯(ヒル)などの生ぜぬやうに、水に漬けて貯ふる餅。

みつ-もっかう 三木瓜【名】紋所の一。普通の木瓜を、品字形に、三つつれ重並べたるもの。但馬國造(クニノミヤツコ)の後、日下部宿禰(クサカベノスクネ)姓なる日下部・朝倉・八木等諸氏の家紋なり。**ふたつもっかう**(二木瓜)參照。

みつ-もと 狼牙【名】〔植〕薔薇(ショウビ)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘に達し、葉は互生し、複葉にして、三小葉より成り、各小葉は披針形又は卵狀披針形、鋸齒あり。夏、葉腋より花莖出で、數箇の黃色五瓣の花、聚繖花序をなして開き、花後、黃色の痩果を結ぶ。こまつなぎ。だいこんくさ。とくさ。のだいこん。みつもとさう。みなもとさう。「同じ。

みつもと-さう 狼牙草【名】〔植〕前條に同じ。

みつ-もの 三物【名】㊀武具の內、鎧の胴・袖と、兜と。太平記「この馬にひたと打乘りて、由井ヶ濱の浦風に、濃き紅(クレナイ)の大笠符(オホカサジルシ)を吹きそらさせ、三物・四物取著けて」㊁騎射にて、流鏑馬(ヤブサメ)・笠懸(カサガケ)・犬追物(イヌオウモノ)の三式。㊂射術にて、犬追物(イヌオウモノ)と笠懸(カサガケ)と歩射(ブシャ)との

三式。(前項の三物の内、後世、流鏑馬の行はるること稀なるに及びて、これを省き、歩射を加へていふに至れるなり) 四饗膳に於ける口取・刺身・焼肴の三品。 五[文]連歌の第一句(發句)・第二句(脇)・第三句の三つの句。これを作るを榮として、特に言ふ。 六米の三斗俵。[大阪繁昌詩「米……有三物(三斗苞)・二牛(ハウクツ)之稱」] 七田樂にて、鼓・笛など、同種の鳴物を三つ揃へて用ふること。**ふたつもの**(二物)[一]参照。

みづ-もの 水物【名】一酒以外の液状の飲物、又、水氣を多く含める食物。例へば、氷水・ソオダ水・果物、又、菓子ならば葛餅・水羊羹・ジエリイなど。 二一時の利益のみにて、永續の見込なき仕事。とりとめなき物事。

みつもの-うり 三物賣【名】寛永の頃、正月元日に、連歌の宗匠の家に、弟子ども集まりて、連歌の會を催し、その朝、作るに隨ひ、阪木師彫刻して、「連歌の三物」と高聲に呼ばはりつつ、市中を賣りあるきしこと。

みつ-もん 三紋【名】背と両袖の後とに一つづつ附けたる紋。(一(ヒト)紋・二(フタ)紋・三(ミツ)紋・七(ナナ)紋に對して)

みつ-ももち 三百【數】百の三倍。三百。堀杰「みつももちむそぢ盡きぬるこの夜は思へば年のつもるなりけり」

みつもり 見積【名】見つもること、又、見つもりたる數額。目算。

みづ-もり 水盛【名】水を盛り、その平面に照して、傾斜の度を測り、又は傾斜の無きやうに改むること。みづばかり。みづなは。水準。「(見積書)に同じ。

みつもり-がき 見積書【名】**みつもりしよ**

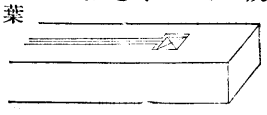
みつもり-からはな 三盛唐花【名】紋所の一。三つの唐花を、一つは上に、二つはその下に並べて描けるもの。

みつもり-かぶと 三盛鍬甲【名】紋所の一。三つの鍬甲を一つは上に、二つはその下に並べて描けるもの。

みつもり-しよ 見積書【名】見積の次第を記したる書面。みつもりがき。

みつもり-すみのきりくち 三盛炭切口【名】紋所の一。三つの炭の切口を一つは上に、二つは下に並べて描けるもの。

みづもり-だい 水盛臺【名】長き角材の一面の中央に溝を刳り、これに水を湛へて、水盛をなすに用ふるもの。


(いだりもづみ)

みつもり-づた 三盛蔦【名】紋所の一。蔦の葉三葉を、一葉は上、二葉はその下に並べて描けるもの。

みつもり-どもゑ 三盛巴【名】紋所の一。三つの左巴を、一つは上、二つは、その下に並べて描けるもの。

みつもり-なしのはな 三盛梨花【名】紋所の一。三つの梨花を、一つは上に、二つは、その下に並べて描けるもの。

みつもり-なでしこ 三盛撫子【名】紋所の一。三つの撫子の花を一つは上に、二つは、その下に並べて描けるもの。

みづもり-ばん 水盛盤【名】水を湛へて、水盛をなすに用ふる盤。

みつもり-ふうたい 見積風袋【名】(商)**さんていふうたい**(算定風袋)に同じ。

みつもり-ねぎた 三森井桁【名】紋所の一。三つの井桁を山形に描けるもの。

みつもる 見積る【動四他】一目に見て、數量を、大よそに測る。目分量にて計る。目算す。 二大體を測り知る。概算す。つもる。

みづ-や 水屋【名】一神社・寺院にて、參詣者の手・顏などを洗ふために、鉢を据ゑて、水を湛へ、屋根を設けたる所。みたらし。みづやかた。謡曲「春日龍神」「澄める水屋の御影まで、塵に交る神心」 二茶湯(ヂサ)にて、茶器を置くために、室の片隅に棚を設けたる所、即ち茶室の勝手先。棚は、大さ一定せざれども、普通、幅六尺、高さは、これに準ず。又、置水屋とて、横三尺、高さ四尺ほどにて、持ち運びて、座敷中の適當なる所に据うるやうにせるものあり。 三飲量水を運びて賣る者。 四夏、路傍にて、氷水を賣る者。

みづ-や 水屋【名】[植]柳葉菜(ヤナギサイ)科に屬する多年生の草。莖は地に匍匐し、上部は水上に延ぶ。葉は互生し、倒卵形又は楕圓形をなし、葉腋に、短き花莖生じ、淡黄綠色の小花開く。水邊に自生す。

みづ-やかた 水屋形【名】**みづや**(水屋)一に同じ。

みづ-やく 密約【名】秘密の約束。

みづ-やぐら 水矢倉水櫓【名】矢倉の、水上に築きたるもの。

みづ-やなぎ 水柳【名】一**みづおこぎりさう**(水弟切草)に同じ。 二**やなぎらん**(柳蘭)に同じ。

みづやの-やしろ 水谷社【名】大和國水谷社にて、祭日、即ち毎年四月四・五兩日に行はるる能樂。

みづ-やうかん 水羊羹【名】寒天を多量に加へて作れる煉(ネリ)羊羹。「に同じ。

みづ-やかた 水屋形【名】**みづや**(水屋)一に同じ。

みつ-やく 密約【名】秘密の約束。

みづ-やぐら 水矢倉水櫓【名】矢倉の、水上に築きたるもの。

みづ-やなぎ 水柳【名】一**みづおこぎりさう**(水弟切草)に同じ。 二**やなぎらん**(柳蘭)に同じ。

みづやの-やしろ 水谷社【名】大和國水谷社にて、祭日、即ち毎年四月四・五兩日に行はるる能樂。

みづ-やうかん 水羊羹【名】寒天を多量に加へて作れる煉(ネリ)羊羹。「に同じ。

みづ-やかた 水屋形【名】**みづや**(水屋)一に同じ。

みつ-やく 密約【名】秘密の約束。

みづ-やぐら 水矢倉水櫓【名】矢倉の、水上に築きたるもの。

みづ-やなぎ 水柳【名】一**みづおこぎりさう**(水弟切草)に同じ。 二**やなぎらん**(柳蘭)に同じ。

みづやの-やしろ 水谷社【名】大和國水谷社にて、祭日、即ち毎年四月四・五兩日に行はるる能樂。

みづ-やの 水谷の能(ノウ)【句】大和國水谷社にて、祭日、即ち毎年四月四・五兩日に行はるる能樂。

みづ-や 水谷【名】**みづやのやしろ**(水谷社)の略。

みづ-やり 水遣【名】**みづや**(水屋)二に同じ。

みつ-やま 瑞山【名】みづみづしき山。鮮かに美しき山。【古語】萬葉「畝火(ウネビ)のこのみづ山は日の緯(ヨコ)の大御門(オホドカド)にみづ山と山さびいます」「じ。

みづ-やり 水遣【名】**みづや**(水屋)二に同じ。

みつ-ゆ 密輸【名】『輸の字の音、正しくは**しゆ**』密輸出又は密輸入。

みづ-ゆきのした 水雪下・水虎耳草【名】[植]柳葉菜(ヤナギサイ)科に屬する多年生の草。莖は地に匍匐し、上部は水上に延ぶ。葉は互生し、倒卵形又は楕圓形をなし、葉腋に、短き花莖生じ、淡黄綠色の小花開く。水邊に自生す。

みつ-ゆしゆつ 密輸出【名】『輸の字の音、正しくは**しゆ**。出の字の音、正しくは**すゐ**』禁令を犯して、ひそかに貨物を輸出すること。(密輸入に對して)

みつゆしゆつ-こく 密輸出者【名】『前條を見よ』密輸出をなす人。(密輸入者に對して)

みつゆしゆつ-にん 密輸出人【名】『前前條を見よ』前條に同じ。

みつゆしゆつ-ひん 密輸出品【名】『みつゆしゆつ(密輸出)を見よ』密輸出せる貨物。(密輸入品に對して)

みつ-ゆにふ 密輸入【名】『輸の字の音、正しくは**しゆ**』禁令を犯して、ひそかに貨物を輸入すること。(密輸出に對して)

みつゆにふ-しや 密輸入者【名】『輸の字の音、正しくは**しゆ**』密輸入をなす人。(密輸出者に對して)

みつゆにふ-ひん 密輸入品【名】『輸の字の音、正しくは**しゆ**』密輸入せる貨物。(密輸出品に對して)

みつ-ゆび 三指【名】一親指・人指指(サシユビ)・中指の三本の指。 二三指を突くこと。二指を突く【句】恭しく届み、両手の三指を、疊などの上に突きて、禮を爲す。きのふはけふの物語「座敷へ罷り出でて、三指突きて申しけるは」

みつゆび-しゆぎ 三指主義【名】三指を疊の上に突きて、しとやかに禮をなすこと。(窮屈なるを嘲りていふ)

みづ-よけ 水除【名】水を防ぐための設備、即ち堤防などの類。

みつよせ-いてう 三寄銀杏【名】紋所の一。銀杏の葉三つを品字形に並べ、その外延をして、略圓形ならしめしもの。

みつよせ-かぢ 三寄梶【名】紋所の一。梶の葉三箇を、品字形に並べたるもの。

みつよせ-ぎり 三寄桐【名】紋所の一。圓の内に、五三の桐の一半を三箇容れたるもの。みつわりぎり。

みつよせ-ちやのみ 三寄茶實【名】紋所の一。葉つき茶の實三つを品字形に並べ、その外延をして、略圓形ならしめしもの。

みつよせ-ばね 三寄羽根【名】みつばね(三羽根)に同じ。

みつよせ-めうが 三寄蘘荷・三寄茗荷【名】みつおひめうが(三追蘘荷)に同じ。

みつよせ-ゆひわた 三寄結綿【名】紋所の一。結綿三つを品字形に並べ、その外延をして略圓形ならしめしもの。

みづら 角髪・角子・鬢【名】『耳連(ミヅラ)の約といふ』上代の男子の髪の結ひ方。頭の中央より左右に分け、耳の邊にて綰ねて、その中央部を結びて垂れしもの。後世の總角(アゲマキ)は、その變形なり。ひづら。記「左の御(ミ)みづらに刺させる湯津津間櫛(ユツツ)の男柱(ヲバシラ)一つ取闕きて」同「伊邪那岐(イザナギ)命、……、その右の御(ミ)みづらに刺させる湯津津間櫛(ユツツ)を」


(らづみ)

みづらう 水牢【名】罪人を、下に水を湛へたる牢に入れて、苦しむること、又その牢。水獄。丹波與作「父様(トヽサマ)、二石二斗の未進につまり、六十六で水牢」

みつ-らうか 三廊下【名】「空(ウツ)に三廊下」を見よ。

みつ-らうげ 水らうげ【名】〔植〕くろばならうげ(黒花らうげ)に同じ。

みづら-さざげ 角髪豇豆【名】〔植〕豇豆の一品種。莢の、二叉をなして、形、角髪の如くなるもの。

みづらし 見辛し【形一】見るにつらし。見るに堪へず。見にくし。みぐるし。狂言「二千石」「下座(ゲザ)へ下(オ)らしやりますのが、見づらう存じて」

みつ-らふ 蜜蠟【名】〔化〕『英 Beeswax』蜜蜂が、巣を作るために分泌する蠟。その巣を加熱・壓搾し、又は水と共に熱し、冷却・凝固せしむれば、これを得。普通、淡黄色なれども、漂白すれば、白色となる。造型材料として、使用せられ、又、蠟燭原料・光澤劑・膏藥料等としても用ひらる。

みつ-らんのまる 三蘭丸【名】紋所の一。圓の内に、蘭の花三つを相對せしめて描きたるもの。みつわりらん。

みつ-り 密理【名】緻密なるきめ。

みつ-りうど 三輪鼓【名】紋所の一。輪鼓を三つ並列せしめたるもの。

みつる 【動下二自】疲れ痩す。やつる。〔古語〕「萬葉」ますらをと思へるわれを斯くばかりみつれにみつれ片思(カタモヒ)をせん」

みつ-れふ 密獵【名】禁令を犯して、ひそかに漁獵をなすこと。「船。

みつれふ-せん 密獵船【名】密獵をなす

みづ-ろん 水論【名】『水を論ず』を見よ』**すゐろん**(水論)に同じ。

みつ-わ 三輪【名】女の髪の結ひ方の一。髪の末を三分し、二つを左右に綰ね、他の一つにて、中央を結ぶもの。徳川時代に、女飾匠又は妾などの間に行はれたり。みつわまげ。


(わつみ)

みつ-わ 密話【名】秘密に話すこと、又その話。こそこそばなし。ひそひそばなし。内證話。「紋。

みづ-わ 水輪【名】水面に生ずる圓き波紋。

みづわ 瑞齒【名】**みづは**(瑞齒)の轉。一説に、誤なりといふ。〔古語〕「夫木「窟もるみづわのおみな庵よりはひいでの小田に早苗取る見よ」

みつ-わう 密王【名】〔佛〕『密敎の敎主なるよりいふ』**だいにちによらい**(大日如來)の異稱。

みづわかすゞしんじや 水若須神社【名】隱岐國隱地(オキ)郡一宮村に鎭座せる國幣中社。祭神は詳かならざれども、稚產靈(ワカムスビ)尊なりともいふ。創祀の時代も詳かならず、承和九年、官社の一に列し、延喜式には、名神大社の一たり。

みつ-わくいとまき 三枠絲卷【名】紋所の一。丸を中心に、枠絲卷三つを輻射狀に連接せしめしもの。

みづわぐむ 瑞齒含む【動四自】**みづぐむ**(瑞齒含む)に同じ。〔古語〕「源兵「惟光(コレミツ)が父の朝臣のめのとにて侍りし者の、みづわぐみて住みはべるなり」

みつわぐむ 三輪組む【動四自】『前條の語の誤』年老いて、腰まがり、體軀、三段に屈折したるやうになる。俳諧新選百萬「三輪ぐみ寢て足袋はくや横の内」

みづ-わけ 水分【名】次條を見よ。

みづわさす 水分の鰭【句】魚の胸鰭の一部。

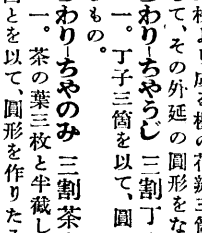
みづわさす 【動四自】一**みづはさす**に同じ。二**そそく**に同じ。名義抄「支離、ミヅワサス・ソソケタリ」「じ。

みづ-わた 水綿【名】**かいめん**(海綿)に同じ。

みづわたしあぶみ 水渡鐙【名】水の溜らぬやうに透(スカ)を設けたる鐙。

みつわとり-むすび 三輪取結【名】緒の結び方の一。

みつわまげ 三輪髷【名】みつわ(三輪)に同じ。


(びすむわつみ)

みつわむすび 三輪結【名】紐の結び方の一。下の圖を見よ。

みづ-わらび 水蕨【名】〔植〕水蕨科に屬する羊齒植物。淺水又は濕地に自生し、莖は短小、葉は羽狀に分裂して、長さ四五寸乃至一尺、その緣、下面に折り返りて、中に子嚢生ず。水中に生ずるものは大く、陸地のは小く、夏の間に、葉を取り、煮て食す。みづにんじん。みづぜんまい。

みづわらびくわ 水蕨科【名】〔植〕隱花植物、羊齒類の一科。

みつ-わり 三割【名】一或物を三分すること。又その三分の一の量。二四斗樽の酒の三分の一の量、又その量を入るる樽。

みつわり-あさのは 三割麻葉【名】紋所の一。麻の葉三つを、品字形に並べたるもの。

みつわり-つるかうほね 三割蔓河骨【名】紋所の一。半截の河骨の葉三枚と蔓三箇とにて、圓形に描きたるもの。

みつわり-なでしこ 三割撫子【名】紋所の一。半截したる撫子の花三箇を相對せしめて圓形に作りたるもの。

みつわり-なんてん 三割南天【名】紋所の一。三枚の葉と、五箇の實とを有する南天を一組とし、これを三組相對せしめて、外延を圓形にせるもの。

みつわり-はうちは 三割羽團扇【名】紋所の一。絲輪の内に、唐團扇の半扇を三つ相對せしめたるもの。

みつわり-ぶき 三割蕗【名】紋所の一。蕗の葉三つを、圓形に作りたるもの。

みつわり-おもだか 三割澤瀉【名】紋所の一。澤瀉の花と葉三箇とを以て、圓形を作りたるもの。

みつわり-ぎやう 三割桔梗【名】紋所の一。五瓣の桔梗の花を半截したるもの三箇を、圓の内に容れたるもの。

みつわり-ぎく 三割菊【名】紋所の一。截半したる菊の花三箇を、品字形に並べて、圓形を作りたるもの。「寄桐」に同じ。

みつわり-ぎり 三割桐【名】みつよせぎり(三寄桐)に同じ。

みつわり-くちなし 三割梔子【名】紋所の一。半截したる梔子の花三箇を、圓にて圍みたるもの。

みつわり-けんかたばみ 三割劍酸漿草【名】紋所の一。截半したる劍酸漿草三つを、圓内に容れたるもの。

みつわり-ざくら 三割櫻【名】紋所の一。三枚より成る櫻の花瓣三箇を品字形に配して、その外延の圓形をなせるもの。

みつわり-ちやうじ 三割丁字【名】紋所の一。丁子三箇を以て、圓形をつくりたるもの。

みつわり-ちやのみ 三割茶實【名】紋所の一。茶の葉三枚と半截したる茶の實三箇とを以て、圓形を作りたるもの。

みつわり-づた 三割蔦【名】紋所の一。圓の内に、半截したる蔦の葉三枚を容れたるもの。

みつわりはなびし 三割花菱【名】紋所の一。半截したる菱の花三箇を相對せしめて、圓周にて圍みたるもの。

みつわりもみぢ 三割紅葉【名】紋所の一。半截したる紅葉三箇を相對せしめて、圓周にて圍みたるもの。

みつゐげた 三井桁【名】紋所の一。井桁三つを組み合はせて、六角形に作りたるもの。

みつゑ 御杖【名】㊀つゑ(杖)㊁の敬稱。記「放棄(ウツ)つる御杖に成りませる神の名(ハ)は衝立船戸(ツキタツフナド)神」㊁**みつゑしろ**(御杖代)に同じ。【古語】紀「天皇以二倭姫命一爲二御杖一、貢二奉於天照大神一」

みつゑ 御杖【名】【人】ふじたにみつゑ(富士谷御杖)を見よ。

みつゑ 水繪・水畫【名】すゐさいぐわ(水彩畫)に同じ。

みつゑしろ 御杖代【名】『しろ(代)は御手に附きて傳(カヨ)き奉る者の義なるべしとも、天皇に代りて仕へ奉る者の義ともいふ』神などに傳き奉る人。みつゑ。【古語】親詞「齋田親王奉入時「今建(タテ)る齋(イツキ)の内親王(ミコ)は、恆の例(ノリ)に依りて、三年(トセ)齋(イハ)ひ清まはりて、御杖代と定めて進り給ふ事は」太神宮儀式帳「以二皇御入姻命一、爲二御杖代一出奉支」

みづゑのぐ 水繪具【名】すゐさいえのぐ(水彩繪具)に同じ。

みつを 三尾【名】金魚の尾の三つに分岐せるもの。盧土産「金魚・銀魚……、淨藻を紅(ベニ)くぐりて、三尾はたらき」

みづを 美豆緒・水緒・鐙靼【名】『孔(ア)緒の義』鐙(アブミ)を鞍に釣るために、居木(シキ)より垂れたる革紐。近世は、專ら力革(チカラガハ)をいふ。みづをがは。和名「鐙靼、美豆乎。一云鐙新」

みづをがね 美豆緒金・水緒金・鐙靼鐵【名】かこがしら(鋏具頭)に同じ。茂齋記「鐙のみづを金」

みづをがは 美豆緒革・水緒革・鐙靼革【名】みづを(美豆緒)に同じ。

みづをけ 水桶【名】水を汲み入るるに用ふる桶。謡曲(加茂)「風も涼しき夕波に、心も澄める水桶の」

みづをさ 水長【名】ふなをさ(船長)に同じ。夫木「かき曇り雨は降り來ぬみづをさが足早小船苫や葺くらん」

みつをり 三折【名】㊀三つに折ること。㊁**みつをりかへし**(三折返)に同じ。㊂備中國より産する、一種の和紙。竪九寸七分、横一尺三寸。

みつをりかへし 三折返【名】男の髪の結ひ方の一。元結・髱・刷毛先(ハケサキ)、各一寸づつに、三段に折るるやうにしたるもの。下賤の者の間に行はれた。


三折返

みつをり。

みて 三手【名】しろみがき(白磨)㊁に同じ。

みて 見手【名】見る人。見物人。

みて 御手【名】手の敬稱。

みて 御手の絲【句】【佛】佛像の手に掛けたる、五色の組絲。人、臨終の時、この絲を手に取る時は、引導を受くといふ。善の綱。榮花「臨終の念佛のみおぼしつづけさせたまふ。……御手には、彌陀如來の御手の絲をひかへさせたまひて、北枕に西向に臥させたまへり」

みてい 未定【名】未だ定まらぬこと。未だ定めぬこと。

みていかう 未定稿【名】未だ十分なる推敲を經ぬ草稿。

みていねん 未丁年【名】みせいねん(未成年者)に同じ。

みていねんしや 未丁年者【名】みせいねんしや(未成年者)に同じ。

みてぐら 幣【名】㊀㊁滿座(マンザ)の義にて、物を滿たし据うる臺の意なるべしとも、又、みてのみ(御)の義、ては(手)の義にて、手にて捧げ獻るよりいふなるべしとも、にぎて(和幣)の義なるべしとも、獻るの「たて」にて、後世のこんだて(獻立)・ぜんだて(膳立)などの立も同じかるべしともいふ』神に獻る物の總稱。布帛・紙・玉・兵器・貨幣・器物・獸類などを用ふ。幣帛。和名「幣、美天久良」續世繼「こがね・しろがね・綾・錦などのみてぐら、神神の社に奉らせたまひき」㊂神樂歌の曲の一。

みてぐらじま 御幣島【名】【地】古、攝津國長柄(ナガラ)川の中にありし島。今、西成(ニシナリ)郡歌島(ウタジマ)郡の大字として、その名殘れり。古、住吉明神の社殿ありきといふ。榮花「長柄……住吉……天王寺……。みてぐら島といふ所御覽ず」

みてぐらしろ 幣代【名】みてぐらとする代物(シロモノ)。盧田社歌合「降る雪のゆふしで掛くる村すすきみてぐらしろに手向けてぞ行く」

みてぐらづかひ 幣使【名】みてぐらを獻るために遣さるる使者。泰幣使。埼玉「御物怪(モノノケ)ども名のりいでて、いみじうかしがまし。……。伊勢のみてぐらづかひなど立てらる」

みてぐらを 幣を【枕】幣は、取り並ぶるものなるより、地名のなら(奈良)にかけていふ。萬葉「みてぐらを奈良より出でて水鬘の穗積に至り」

みてくれ 見て吳【名】みかけ。みばえ。外觀。「みてくれが惡し」「みてくれが立派」

みてくれがし 見て吳がし【名】これみよがし(これ見よがし)に同じ。

みてとる 見て取る【句】みる(見る)の條下を見よ。

みでなは みで繩【名】藁の莖の穗の部分にて造れる繩。この繩は、水中にて光を發して、魚を驚すといふ。

みと 水門・水戸【名】㊀みなと(水門)に同じ。【古語】土佐「船を出して、阿波の水門を渡る」㊁**すゐもん**(水門)㊂に同じ。【古語】和名「水門、美度」

みと 御戸【名】神佛の扉。山家「みたらしにけがれすすぎて宮人の眞手にささげて御戸開くなり」著聞「若くより、賀茂に仕うまつりけるに、……。御戸さしまゐらせて後」

みと 御所【名】御寢所。御閨。【古語】御所あたはす【句】男女交合したまふ。【古語】記「八上比賣(ヤガミヒメ)は、先の期(ゴ)のごとみとあたはしつ」御所のまぐはひ【句】まぐはひに同じ。【古語】記「伊邪那岐命(イザナギノミコト)、……、その妹(イモ)伊邪那美命(イザナミノミコト)に、……吾(ア)と、汝(ナ)と、この天(アメ)の御柱を行き廻(メグ)り逢ひて、みとのまぐはひせなと詔(ノ)りたまひき」紀「共爲二夫婦一、ミトノマグハヒシテ」著聞「それよりこの方、婿嫁(ムコトツ)の因緣、淺からずなりにけり」

みと 水戸【名】【地】㊀常陸國にある市。那珂川の南岸。南に仙波沼(センボヌマ)あり。德川將軍親藩居城の地たりし所。鐵道常磐線の停車場あり。市街は、舊士族町なる上市(カミイチ)と、商業地なる下市(シモイチ)とに分れ、主要なる驛路は、東京より上市を經て北する棚倉街道と、同じく下市を經て北する濱街道となり。㊁明治の初年設置の縣の一。四年、常陸國舊水戸藩の地に立てしもの。同年、茨城縣に入る。

みとあけ 御戸開【名】みとびらき(御戸開)に同じ。

みとう 御燈【名】㊀みあかし(御明)に同じ。盧我會稽山「照せ三島の宮所、御燈の光しんしんと、心も清き瑞籬(ミヅガキ)に」㊁古、京都にて、毎年三月三日、天皇の、北辰菩薩(妙見薩菩)に奉りたまひし燈火。この菩薩、國土を保護し、衆生(シュジョウ)を濟度するによりて、これを祭られしものにて、北山の鷲巖寺の峰に祭りたりといふ。

みとうらき 未登記【名】登記すべき事項の、未だ登記の手續を經てあらぬこと。

みとがく 水戸學【名】『佐藤一齋等の稱へ始めし名といふ。水戸人自らは、天朝正學又は實學などの稱を用ひたり』水戸藩にて興隆せし學派。學風、國學・史學・神道を經とし、儒學を緯として組織せしものと評すべく、藩主光圀の大日本史編修に胚胎し、皇道を扶植し、大義名分を明かにするを本領とし、直接・間接に、王政復古に莫深の關係を有す。天保學。

みとがくは 水戸學派【名】水戸學に屬する學派。水戸派。

みとがむ 見咎む・見尤む【動下二他】見て怪しむ。見て非難し、又は詰責す。源氏「人見とがむばかり大きなるわざは、えし

たまはず」 著聞「左府、見とがめて」

みとき 御齋【名】とき(齋)の敬稱。 空穂「みとき參りすゑたれど、きこしめさず」

みーとき 三時【名】次條を見よ。

三時の鞠(マリ)【句】一日に、朝・晝・夜の三回と定めて行ふ蹴鞠。 親長記「三時鞠行」

みどき 見時【名】**みごろ**(見頃)に同じ。

みとーぎこう 水戸義公【名】〔人〕**さくがは**

みつくに(徳川光圀)に同じ。

みーどきやう 御讀經【名】どきやう(讀經)の敬稱。 枕「大般若の御讀經、一人して讀みはじむる」 榮花「上の御方の御讀經、宮の御方の不斷の御讀經など」

みどきやう-あぶら 御讀經油【名】御讀經を行ふ時の燈火。 枕「暗うなりて、いづら、御讀經油遲しなどいひて讀みやみたるほど、忍びやかに續けゐたるよ」

みーときよく 御時好く【副】折善くの意を敬していふ。一説に、折から御機嫌よく。 榮花「みかど、御ときよく打笑ませたまひて」

みーとく 味得【名】**みたう**(味到)に同じ。

みーとく 見解く【動四他】見てさとる。 空穂「薄く濃く色づく野べの女郎女植ゑてや見まし露の心を。これが心、見とききたまふ人ありや」

みとーくわうもん 水戸黄門【名】〔人〕**さくがはみつくに**(徳川光圀)に同じ。

みとくーねーとく 未得謂得【句】〔佛〕『法華經の方便品に「增上慢未得謂得、未證謂證」とあるに本づく』己の、未だ聖法(ホフヤ)を得ざるに、既に得たりと思ふこと。十訓「この僧、仙を得たりと思ひて、未得謂得の心をさなかりけるも、ことわりなり」 「見よ。

みとーけ 水戸家【名】**さくがは**(徳川)[三]を

みとーこうゑん 水戸公園【名】〔地〕**かいらくゑん**(偕樂園)に同じ。

みーどころ 見所・見處【名】[一]見るによき所。名所。 芭蕉「名月の見所問はん旅寢せん」 [二]見るだけの價値。特別に目立つ

處。長所。 源氏「いと若やかに濡きせぬ御有樣の、見どころ多かるに」 今昔「肉合(アヒ)に見どころあり」

みどころ-ぜめ 三所攻【名】相撲(スマヒ)の手の一。四手(ヨツ)に組みたる時、機を見て、相手の褌を取り、頭を相手の胸に著けて進み寄り、相手の土俵近くに踏み耐ふる時、足を內より掛け、又は相手の足を取りて押し倒すもの。三所詰。

みどころ-づめ 三所詰【名】前條に同じ。

みどころ-どう 三所籐【名】弓に籐を卷くに、矢摺籐(ヤスリ)と上・下の鏑籐(カブラ)との三箇所に分けて卷くこと。**ところどう**(所籐) 參照。 盛衰記「三所籐の弓、中取って」

みどころ-もの 三所物【名】刀劍の附屬品として、重要なる笄(カウガイ)と目貫(メヌキ)と小刀(コガタナ)の柄(ツカ)との三品を、揃の彫刻を施すべきものとして併せ呼びし稱。古く、笄と目貫とを二所物(ニツノモノ)と呼び、これに小刀の柄を加ふ。後藤家五代目德乘の頃よりの事なるべしといふ。

みとーさぎ 蒼鷺【名】〔動〕**あをさぎ**(青鷺)に同じ。 和名「蒼鷺、美止佐岐」 「敬稱。

みとし 御年・御歳【名】とし(年)[三]七]の御子にて、大年神と同じく、五穀を司りたまふといふ神。

みとしーしやう 水戸城【名】水戸家の居城。水戸市の中央丘陵に據り、前に仙波湖を控へ、後に那珂川を帶ぶ。中世、大掾(ダイジヤウ)家の創築といふ。鎌倉持氏の頃、佐竹氏の被官江戸氏の居城となり、天正十八年、佐竹氏、江戸氏を逐ひて、自らこれを治め、關ヶ原の役後、佐竹氏、出羽の秋田に移されてより、德川氏の有に歸す。

みとしろ 御刀代・御戸代【名】『としろは、年代(トシロ)の略、年は稻の義、しろはなはしろ(苗代)などのしろにて、田の義』 **しんてん**(神田)に同じ。 〔古語〕 **みとしろ**「神田、ミトシロ」 親詞「天忌寸祭「皇神(スメ)の御刀代を始めて、親王等(ミコタチ)・王臣等(オホキミタチ)、天の下の公民(オホミタカラ)の取り作る奥(オキ)つ御歳(トシ)は」

みとしろ-おだ 御刀代御田・御戸代御田【名】『御刀代に、更に田の語を加へたるもの。おはをの誤にて、おた(御田)にあらず、をだ(小田)なるべし』 前條に同じ。 〔古語〕 風雅「木綿(ユフ)かけて今日こそ急げ早苗取るみとしろおだの神の宮人」

みとしろ-だ 御刀代田・御戸代田【名】前條に同じ。 太神宮儀式帳「大神乃御刀代田耕始」 「んねん。

みとせ 二年・二歳【名】一年の三倍。さ三年の友【句】親しき友。 榮花「新しき春のはじめに來る人は三とせの友と思ひなるべし」

みとせ-ご 三歳兒【名】三歳ぐらゐの小兒。みつご。幼兒。 枕「さかしきもの、今やうの三とせご」

みとせ-せん 水戸錢【名】我國にて、支那錢、殊に宋朝の祥符通寶・天聖通寶・熙寧通寶・元豐通寶・元祐通寶・紹聖通寶などの錢文を用ひて鑄たる銅錢。蒲生(ガマフ)氏が常陸國水戸にて鑄造せしものとの傳說によりて、この名あるなれども、近時の古錢家は、貨幣祕錄の記す所によりて、萬治二年より貞享二年にかけて、肥前國長崎にて鑄造せるものといふ。

みとせ-せん 水戸線【名】〔地〕東北本線小山(ヲヤマ)驛と常磐線友部驛との間の鐵道線路。もと水戸鐵道會社の建設にて、明治二十二年營業開始、同二十五年、日本鐵道會社に買收せられ、三十九年、國有に歸す。

みとーて 水戸手【名】寬永十四年、常陸國水戸にて鑄造せし寬永通寶。

みとーどく 見屆く【動下二他】[一]見てたしかむ。その場に至りて、よく見る。 俳諧新選「見屆けぬ姿なつかしほととぎす」 [二]終まで見てたしかむ。將來まで見きはむ。 凱陣八島「兄弟どもの成る果が見屆けたや」

みーとどけ 見屆【名】見とどくること。

みーとどむ 見留む【動下二他】たしかに見る。みとむ。 東關紀行「大磯・江ノ島、もろこしが原など聞ゆる所をも見とどむる暇もなくて」

みどの 綠野【名】〔地〕上野國の舊郡の一。明治二十九年、多胡・南甘樂(カンナラ)の二郡と合し、多野(タノ)郡となる。

みとのごもる 御殿籠る【動四自】**おほとのごもる**(大殿籠る)に同じ。 〔古語〕 枕「御草子にけうさんして、みとのごもりぬるも、いとめでたしかし」 「に同じ。

みとーは 水戸派【名】**みとがくは**(水戸學派)

みとーびらき 御戸開【名】御戸(ト)を開くこと。みとあけ。 夫木「瑞垣や五月の今日の御戸びらき飾る菖蒲の香さへなつかし」 著聞「申文を書きて、御戸開の夜參りて、何となき願書の內にて、社司を語らひて、御寶殿に籠めてけり」

みとふーがね みとふ金【名】**みづをがね**(美豆緒金)に同じ。 今川大學無鐘の力革掛くる所をば、みとふがねといふなり」

みとぶらふ 見訪ふ【動四他】面倒を見るために訪ふ。訪問して、世話をす。 源氏「姫君の御有樣の心苦しげなるをも見とぶらひきこえ」

みーとほし 見通【名】[一]彼方の、此方より、一目に見ゆること、又その場處。みやり。みわたし。 榮花「中門のわたり、東(ヒムガシ)の廊の妻戸の見とほしに、さるべき隨身などの見遣らるるに」 太平「見とほしに菊作りりな訪はれぼ」 [二]內部又は將來など、目に見えぬ物事を察し知ること。洞見。洞察。先見。 本朝櫻陰比事「御見とほしの御眼力を感じけるとなり」 [三](建)建築物の諸部分の、一の直線又は平面の內に在ること。 [四]終まで、つづけざまに見ること。 [五]みえ(見)を云ふ。 伊豆國の方言」

みーとほす 見通す【動四他】[一]彼方を、此方より、一目に見る。 源氏「西ざまに見とほしたまへば」 榮花「中門のわたり、東の廊のつま戸などの見とほさるるに」 [二]內部又は將來など、目に見えぬ物事を推し測り知る。見すかす。見ぬく。洞見す。洞察す。 枕「いと斯く、縫ひたる絲・針目までやは見通しつる」 若鳳詞「人種(ヒトネ)を惜しみて、末世の衆道を見とほしたま

へり」 ㊁終まで、つづけざまに見る。若鳳伝「その夜も、夢に、両分(ワケヤウ)の前髪見とほし」

みごぼり 水戸彫・水戸雕 【名】常陸國水戸の彫金工明石與太夫を祖とする一派。雅致乏しけれども、鏨(ノミ)行き届きて、美麗なるを特色とし、與太夫の後、功阿彌を經て、その門人通壽(明和五年死す)に至りて、中興の名あり。明治の彫金家海野(ウン)勝民も、この派より出づ。

みごみつくに 水戸光圀 【名】〔人〕さくがほみつくに(徳川光圀)に同じ。

みごむ 見留む・認む 【動下二他】『見尊(上)むの義』 ㊀見て知る。見定む。見屈く。見取る。認知(チニン)す。若鳳傳「さりとては、落ちつきたる仕方なりと、見とめし諸人、これを譽めざるはなし」 ㊁見て、よろしとす。ゆるす。認容す。認可す。

みごむなし 見度無し 【形二】みともなし(見度無し)の轉訛。八笑人「さう氣抜(ヌケ)がしてゐていけるものか。腹を入れねえと見とむねえもんだぜ」

みごめ 認 【名】㊀みとむること。 ㊁次

みごめいん 認印 【名】㊀實印の外に、日常些細の事件に用ふる印形。多くは、苗字を彫刻す。 ㊁その事柄を認證するために捺す印影。

みごも 身共 【代】同輩以下に對して用ふる第一人稱。われら。わが輩(ハイ)。狂言(鼠捕)「これは、なぜに、身どもに打ち附ける」

みごもしだい 身共次第 【名】みしだい(身次第)に同じ。狂言(三本柱)「仕様があるぞ。身ども次第にしやれ。さあ、さあ、これへ寄って、肩ぎやれ、肩ぎやれ」

みごともなし 見度無し 【形二】『みたうもなし(見度無し)の訛』 ㊀見ること、いとはし。見るを欲せず。見ぐるし。見にくし。見すぼらし。みたらもなし。生玉心中「見ともない。おかっしやれ」 ㊁見らること、いとはし。知られては、はづかし。外聞わるし。みたむなし。みっともなし。國姓爺「どうやら犬の様で、見ともない」

みさよ 三豐 【名】〔地〕讃岐國七郡の一。郡役所を觀音寺町に置く。

みさよりふさ 水戸頼房 【名】〔人〕さくがほよりふさ(徳川頼房)に同じ。

みさらし 御執 【名】『さる(執る)の敬語形なるさらす(執らす)の連用形に、接頭語み(御)を添へたるもの』ゆみ(弓)の敬稱。〔古語〕萬葉「御執の梓の弓のなか筈の音すなり」

みさり 身取 【名】魚類を食用に供する時、その肉を、骨より離して取ること、又その離し取りたる肉。

みさり 見取 【名】 ㊀見て知ること。 ㊁見て寫し取ること。看病。 ㊂徳川時代に、毎年の收穫高不同の土地は、高に算入せずして、毎年、坪刈(カリ)の、檢見(ケン)をなして、輕き納米高を定めしこと。地味成熟し、收穫一定するに至れば、檢地を遂げ、石盛(コクモリ)を附す。〔視取〕

みさり 見取 【名】「選取(エリ)」見取」を見

みどり 綠 【名】㊀みどりいろ(綠色)に同じ。〔翠碧〕古今「みどりなる一つ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける」 ㊁「綠の衣」の略。續世繼「列なれる紫の袖も、事に從へる緋(アケ)も、綠も、花やかなる御垣の内の春なりけるとなん聞え侍りし」 ㊂松の若葉。鬼貫「みどり立つ岸の姫松めでたさよ」

みどりの嵐 【句】綠色なる木の葉を吹く嵐。あをあらし。夫木「紅の梢は雨と降りはてて綠の嵐松に吹くなり」

みどりの髪 【句】りょくはつ(綠髪)の直譯。(美人の髪にいふ)「綠の眉」參照。謠曲(蝉丸)「綠の髪は、空さまに生ひのぼって」

みどりの黒髪 【句】前條に同じ。

みどりの衣 【句】綠色の袍。大寶令の制にて、六位の者は深綠色、七位の者は淺綠色と定めたり。綠衫(サン)。拾遺「住吉(ズミ)の松はいたづら老いぬれど、綠のころも脱ぎすてん春はいつともしら波の」 榮花「宮の下部ども綠の衣の上に、白き當色(トウジキ)著て」

みどりの袖 【句】 ㊀綠の衣の袖。綠衫(サン)の袖。 ㊁位階の六位。源氏「なほ、かの綠の袖のなごり、あなづらはしきにことつけて」 曾丹集「住吉の松は綠の袖ながら名をだにかへば物は思はじ」

みどりの花 【句】『りょくが(綠芽)などの義にていふか』梅の花。【古語】澤瀉草「梅。綠の花」 醍醐抄「唐の綠の花のとりどりに雪くれなゐの花の顏ばせ」

みどりの林 【句】りょくりん(綠林)の直譯。海清記「この山は、……綠の林の人をしきる所ともきこゆれば」

みどりの笛 【句】むぎぶえ(麥笛)に同じ。藻鹽草「笛。みどりの笛」

みどりの洞 【句】せんとう(仙洞)に同じ。新古今「綠の洞、花かうばしき朝(アシタ)、玉の砌(ミギリ)、風涼しき夕(ユフ)」

みどりの眉 【句】黒くして艶よき眉毛。新千載「春風や柳の髪を梳るらん綠の眉も亂るばかりに」

みどり 見取 【名】見渡して、多くの中よりえり撰び取ること。

みどりいし 石蠶 【名】〔動〕珊瑚類に屬する腔腸動物。熱帶地方の淺海に繁殖し、密茂せる樹木のごとき骨格を有し、色白くして、實粗く、多數相集まりて塊狀をなし、終に珊瑚礁を形成することあり。いはむし。

みどりいろ 綠色・翠色・碧色 【名】青と黄との間の色、卽ち草木の葉などの色。もえぎ。みどり。りょくしょく。

みどりの袖 【句】「綠の袖」に同じ。伊勢「くれなゐの涙し濃くはみどり色の袖もみぢても見えましものを」

みどりがは 綠川 【名】〔地〕肥後國の中央部を西流する川。同國四大河の一。源を阿蘇郡の南部なる三方山(サンパウ)に發し、末は島原灣に注ぐ。長さ二十五里弱、支流多く、灌漑の利頗る多し。

みどりぐわ 見取畫 【名】みどりづ(見取圖)に同じ。

みどりご 綠兒 【名】五六歳ぐらゐまでの小兒。嬰兒。幼兒。萬葉「みどり兒の乳乞ふが如くあまつ水仰ぎてぞ待つ」和名「嬰兒。女曰レ嬰、男曰レ兒。一云、嬰孩兒、美止利古」

みどりごやま 綠兒山 【名】〔地〕河内國交野(カタノ)郡にある山。方輿集「わがごとや浮寢は鳴くとほととぎすみどりご山に入りてこそ聞け」 「(畑亘)」に同じ。

みどりささげ 綠豆 【名】〔植〕ほたささげ

みどりじょうぎ 見取定規 【名】兩邊を正しく削れる細き板二本の一端を、扇眼(カナメ)にてとめ合はせ、開閉を自由ならしめたる定規。建築物などの寫生に用ふるものにて、その建築物などの垂直部(例へば柱など)を標準として、定規の一本の板をこれと平行せしめ、他の一本を動かして、その建築物の傾斜せる部分と角度を同じからしめて、そのまま、紙面に持ち來りて、線を引く。

みどりづ 見取圖 【名】實物を見て、大體を寫し取りたる略圖。すけっち。みとりぐわ。

みどりに 綠煮 【名】魚肉又は鳥肉を油にていため、酒・味醂・煮汁(ジ)、醬油少量を加へたる鍋に煮つめ、葛を煮汁(ジル)にときたるを混ぜ合はせ、又、青豆を混ぜ、胡椒をかけたる食品。

みどりぬ 綠沼 【名】綠色に見ゆる沼。〔古語〕夫木「みどり沼に浮きたる蓮くれなゐに水濁るなり波立つなゆめ」

みどりば 見取場・見取塲 【名】見取四の方法にて、納米高を定めし土地。

みどりまい 見取米 【名】見取四の方法によりて取り立つる米。

みどる 見惚る・見蕩る 【動下二自】見て、我を忘る。見入りて、心を奪はる。見ほる。芭蕉「夕顏に見とるるや身もりひょん」

みとる 見取る 【動四他】 ㊀見て知る。見定む。見とどく。みとむ。源氏「斯く御心とどめておはさるる事なめりと見取りて、御けしきたまはりつつ」 ㊁見て寫し取る。 ㊂病人の世話をす。看病す。 ㊃

みいる(見入る)㊀に同じ。著聞「心も心ならず、鬼に見取られたるさまなり」

みこ-れっこう 水戸烈公【名】〔人〕**こがほなりあきら**(徳川齊昭)に同じ。

みどろ 塗【接尾】まみるる意。「血みどろになる」『汗みどろになる』

みーどろし【形シク】 船の進む方のろし。まだるし。「古語」散木「戀草をさし荷に積める船なれば枡もみどろし心せよ波」

みーとをか 三十日【名】**みそか**(三十日)㊁を云ふ。「筑後國の方言」

みな 蜷【名】〔動〕**にな**(蜷)に同じ。萬葉「みなのわたか黒き髪に」和名「河貝子、美奈」

みーな 御名【名】**な**(名)の敬稱。伊勢「佛の御名を、御心に入れて」

みな 皆・咸・僉【代】物事を總括して指していふ語。源氏「御封(フ)加はり、官(サカ)かうぶりなど、皆添ひたまふ」榮花「三の御方、皆が中に、すこし御形も、御心さまも、いと若うおはすれど」「てが。皆が皆【句】その物事の、全くのすべ皆にす【句】次條に同じ。狂言「集かづき(カヅラ)」「妾(ワラ)が持つて來た道具小袖を、代(シロ)なせ、代なせと云うて、皆にさしました程に」

みーなす 見流す【動四他】見て、そのままに捨てておく。見すぐす。

みながは-きろん 皆川淇園【名】〔人〕儒者。京都の人。名は愿、字は伯恭、通稱文藏、淇園はその號。文節齋・有斐齋の別號あり。大井蟻亭・三宅牧羊及び伊藤錦里に學びて、一家を成し、文化二年、舍を建てて、弘道館と呼ぶ。從學する者三千に餘れりといふ。文化四年歿す。年七十四。著書、等身に及ぶ。

みーなかみ 水神【名】『な』は、領格の助辭の轉』「水(ミ)の神」に同じ。「古語」後撰「みなかみに祈るかひなく涙川うきても人をよそに見るかな」

みーなかみ 水上【名】『な』は、領格の助辭の轉』㊀水の流れ來る上の方。かはかみ。上流。(水下(シモツ)に對して)紀「水源、カハノミナカミ」㊁**みなもと**(水本)㊁に同じ。講曲(吉野靜)「景時が、その讒言のみなかみを思へば、渡邊や、流るる水に滿汐の逆艪(サカ)立てんと」同(自然居士)「舟のおこりを尋ぬるに、みなかみ黄帝の御時より事起つて」

みながら 皆乍【副】**みなながら**(皆乍)の約。古今「紫の一もとゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」「を見よ。

みながら 身ながら【句】**み**(身)の條下

みなき 皆黄【名】全部黄色なること、又その物。「同じ。

みーなぎ 水葱【名】〔植〕**こなぎ**(小水葱)に同じ。萬葉「船(フナ)ぎほふ堀江の川のみなぎはに來居つつ鳴くは都鳥かも」

みーなぎはら 漲ら ふ【動四自】次條に同じ。〔古語〕紀「あすか川みなぎらひつつ行く水のあひだもなくも思ほゆるかも」

みーなぎる 漲る【動四自】㊀水(ミ)、さかんに流れはびこる。漲溢(テツイツ)す。太平記「悪風を起し、激浪を漲らしむ」㊁さかんに滿ちひろがる。「烟燄、天に漲る」

みなぐ 見和ぐ【動四自】見て、心なごやかになる。見て、心慰む。「古語」萬葉「ふりさけ見つつ思ひのべ見なぎし山に」

みーなーぐくり 水潜【名】**みづぐくり**(水潜)に同じ。新六「下にのみ鳰(ニホ)のかよひの水潜入りめる磯は見らくすくなし」

みなぐち 水口【名】『な』は領格の助辭の轉』田へ水を引き入るる口。みづぐち。伊勢「水口に我や見ゆらん蛙さへ水の底にて諸聲に鳴く」水鏡「ことに人の田の水口におきて、水を寺の田に入れしかば、人人おぢおそれて、その水口を塞がずなりにき」

みなぐち 水口祭る【句】水口祭(マツリ)をなす。夫木「ますらをがうなでの森にいぐし立てて水口祭るほどは來にけり」

みなくち 水口【名】〔地〕近江國甲賀郡の町。舊東海道五十三驛の一。鐵道東海道線及び近江鐵道の一驛。加藤氏の舊藩地。

みなくち-ぎせる 水口烟管・水口煙管【名】昔、近江國水口より製出せし烟管。桐の紋と「吉久」といふ文字とを附けて、商標とせり。たいかふばり。

みなくち-ざいく 水口細工【名】近江國水口の名物なる、籐又は檜の細工物。

みなくち-じやう 水口城【名】近江國水口にありし城。天正十三年、中村一氏の築きしものといふ。文祿中、長束正家居りて、關ヶ原の役に、西軍のために、徳川家康を此に害せんとして果さず、東軍池田長吉に攻められて出で降りしより、徳川氏の有に歸し、天和二年、加藤嘉明の裔明友を、石見國吉永(ヨシナガ)より移封し、元祿八年、鳥居忠救(タヾフサ)、これに代りしが、正徳二年、舊に復して、明治維新に至れり。

みなくち-どぢやう 水口泥鰌【名】㊀水口(ミナクチ)に集まる泥鰌。丹波與作「姥が餅、一口・二口、水口どぢやう踊り越え」

みなくち-まつり 水口祭【名】陰暦二月頃、苗代(ナハシロ)を作りて、始めて苗代水を引く時、水口に幣などを立てて行ひし祝の祭。萬葉「百早苗取る門田の庵にいぐし立て水口祭急ぐ賤(シヅ)の男」

みなくち-やき 水口燒【名】文化文政の頃、近江國水口に住める一休齋といふ茶人の造りし陶器。製品に「一休齋」の彫銘ありといふ。

みなくれなゐ 皆紅【名】全部紅色なること、又その物。榮花「皆紅の打ちたる櫻の織物のうは著」平家「皆紅の扇の、日出したるを、船のせがいに挾み立て」

みなげ 身投【名】水中に飛び込みて自殺すること。入水(ニフスヰ)。投身(トウシン)。宇治「桂川に身なげせんずる聖(ヒジリ)」

みなこさもどり みなこさも鳥【名】〔動〕**みさご**(鶚)の異稱。〔古語〕祕藏抄「沖津島指出(サシ)の磯にまとゐして水蟲ならすみなこさもどり、……みなこさも鳥とは、みさごといふ鳥なり」

みなこ-むすび 蜷子結【名】緒の結び方の一。めなこむすび。

みなこ-もち 皆子餅【名】徳川時代に、婚禮後三日目に、聟と舅との雙方にて、餅を搗かせて、五百八十七に丸め、藁の莚にて造りたる臥(カス)に入れて、使者に持たせやり、雙方の使の、途中にて出逢ひ、互に餅を交換して持ち歸りたるを受け取りて祝ひし、その餅。古の三日(ミカ)の餅の習より出でしなるべし。三日月(ミカヅキ)の餅。

みなごろし 皆殺・鏖【名】全部を殺すこと。鏖殺(サツ)。

みーなし 實無【名】汁の中に、實の入りてあらぬこと、又その汁。

みーなし 看做【名】見做すこと。和泉式部續集「手折れどもなに物思の慰まん花はにほひの見なしなりけり」

みなし-うま 巳無午【名】二月朔日が、午の日に當ること。俗に、火に祟らるとて忌む。

みなし-がに 實無蟹【名】殼の中に肉のあらぬ蟹。續俳家奇人談(無腸)「月に遊ぶ已

みなおり-ふなばり 水繩下船梁【名】は**さみふなばり**(挾船梁)に同じ。

みなか 眞中【名】**まなか**(眞中)に同じ。紀「誓約之中、此云二字氣譬能美那箇一」

みなーがけ 皆掛【名】**かいがけ**(皆掛)に同じ。

みーながす 見流す【動四他】見て、そのままに捨てておく。見すぐす。

みながは-きろん 皆川淇園【名】〔人〕儒者。京都の人。名は愿、字は伯恭、通稱文藏、淇園はその號。文節齋・有斐齋の別號あり。大井蟻亭・三宅牧羊及び伊藤錦里に學びて、一家を成し、文化二年、舍を建てて、弘道館と呼ぶ。從學する者三千に餘れりといふ。文化四年歿す。年七十四。著書、等身に及ぶ。

みーなかみ 水神【名】『な』は、領格の助辭の轉』「水(ミ)の神」に同じ。「古語」後撰「みなかみに祈るかひなく涙川うきても人をよそに見るかな」

みーなーかみ 水上【名】『な』は、領格の助辭の轉』㊀水の流れ來る上の方。かはかみ。上流。(水下(シモツ)に對して)紀「水源、カハノミナカミ」㊁**みなもと**(水本)㊁に同じ。講曲(吉野靜)「景時が、その讒言のみなかみを思へば、渡邊や、流るる水に滿汐の逆艪(サカ)立てんと」同(自然居士)「舟のおこりを尋ぬるに、みなかみ黄帝の御時より事起つて」

みながら 皆乍【副】**みなながら**(皆乍)の約。古今「紫の一もとゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」「を見よ。

みながら 身ながら【句】**み**(身)の條下

みなき 皆黄【名】全部黄色なること、又その物。「同じ。

みーなぎ 水葱【名】〔植〕**こなぎ**(小水葱)に同じ。萬葉「船(フナ)ぎほふ堀江の川のみなぎはに來居つつ鳴くは都鳥かも」

みーなぎはら 漲ら ふ【動四自】次條に同じ。〔古語〕紀「あすか川みなぎらひつつ行く水のあひだもなくも思ほゆるかも」

みーなぎる 漲る【動四自】㊀水(ミ)、さかんに流れはびこる。漲溢(テツイツ)す。太平記「悪風を起し、激浪を漲らしむ」㊁さかんに滿ちひろがる。「烟燄、天に漲る」

みなぐ 見和ぐ【動四自】見て、心なごやかになる。見て、心慰む。「古語」萬葉「ふりさけ見つつ思ひのべ見なぎし山に」

みーなーぐくり 水潜【名】**みづぐくり**(水潜)に同じ。新六「下にのみ鳰(ニホ)のかよひの水潜入りめる磯は見らくすくなし」

みなぐち 水口【名】『な』は領格の助辭の轉』田へ水を引き入るる口。みづぐち。伊勢「水口に我や見ゆらん蛙さへ水の底にて諸聲に鳴く」水鏡「ことに人の田の水口におきて、水を寺の田に入れしかば、人人おぢおそれて、その水口を塞がずなりにき」

みなぐち 水口祭る【句】水口祭(マツリ)をなす。夫木「ますらをがうなでの森にいぐし立てて水口祭るほどは來にけり」

みなくち 水口【名】〔地〕近江國甲賀郡の町。舊東海道五十三驛の一。鐵道東海道線及び近江鐵道の一驛。加藤氏の舊藩地。

みなくち-ぎせる 水口烟管・水口煙管【名】昔、近江國水口より製出せし烟管。桐の紋と「吉久」といふ文字とを附けて、商標とせり。たいかふばり。

みなくち-ざいく 水口細工【名】近江國水口の名物なる、籐又は檜の細工物。

みなくち-じやう 水口城【名】近江國水口にありし城。天正十三年、中村一氏の築きしものといふ。文祿中、長束正家居りて、關ヶ原の役に、西軍のために、徳川家康を此に害せんとして果さず、東軍池田長吉に攻められて出で降りしより、徳川氏の有に歸し、天和二年、加藤嘉明の裔明友を、石見國吉永(ヨシナガ)より移封し、元祿八年、鳥居忠救(タヾフサ)、これに代りしが、正徳二年、舊に復して、明治維新に至れり。

みなくち-どぢやう 水口泥鰌【名】㊀水口(ミナクチ)に集まる泥鰌。丹波與作「姥が餅、一口・二口、水口どぢやう踊り越え」

みなくち-まつり 水口祭【名】陰暦二月頃、苗代(ナハシロ)を作りて、始めて苗代水を引く時、水口に幣などを立てて行ひし祝の祭。萬葉「百早苗取る門田の庵にいぐし立て水口祭急ぐ賤(シヅ)の男」

みなくち-やき 水口燒【名】文化文政の頃、近江國水口に住める一休齋といふ茶人の造りし陶器。製品に「一休齋」の彫銘ありといふ。

みなくれなゐ 皆紅【名】全部紅色なること、又その物。榮花「皆紅の打ちたる櫻の織物のうは著」平家「皆紅の扇の、日出したるを、船のせがいに挾み立て」

みなげ 身投【名】水中に飛び込みて自殺すること。入水(ニフスヰ)。投身(トウシン)。宇治「桂川に身なげせんずる聖(ヒジリ)」

みなこさもどり みなこさも鳥【名】〔動〕**みさご**(鶚)の異稱。〔古語〕祕藏抄「沖津島指出(サシ)の磯にまとゐして水蟲ならすみなこさもどり、……みなこさも鳥とは、みさごといふ鳥なり」

みなこ-むすび 蜷子結【名】緒の結び方の一。めなこむすび。

みなこ-もち 皆子餅【名】徳川時代に、婚禮後三日目に、聟と舅との雙方にて、餅を搗かせて、五百八十七に丸め、藁の莚にて造りたる臥(カス)に入れて、使者に持たせやり、雙方の使の、途中にて出逢ひ、互に餅を交換して持ち歸りたるを受け取りて祝ひし、その餅。古の三日(ミカ)の餅の習より出でしなるべし。三日月(ミカヅキ)の餅。

みなごろし 皆殺・鏖【名】全部を殺すこと。鏖殺(サツ)。

みーなし 實無【名】汁の中に、實の入りてあらぬこと、又その汁。

みーなし 看做【名】見做すこと。和泉式部續集「手折れどもなに物思の慰まん花はにほひの見なしなりけり」

みなし-うま 巳無午【名】二月朔日が、午の日に當ること。俗に、火に祟らるとて忌む。

みなし-がに 實無蟹【名】殼の中に肉のあらぬ蟹。續俳家奇人談(無腸)「月に遊ぶ已

が世はありみなし璽」

みなしーがは 水無川【名】㊀みづなしがは（水無川）に同じ。㊁あまのがは。銀河。萬葉「久方のあまつしるしと水無川隔てておきし神代しうらめし」

みなしーがひ 身無貝【名】㊀【動】いもがひ（芋貝）に同じ。㊁うつせがひ（うつせ貝）に同じ。

みなしーぐさ みなし草【名】【植】むらさき（紫草）に同じ。【古語】

みなしーぐり 實無栗【名】殻の中に實の無き栗。しひなの栗の實。千載「これもさこそは實なし栗、朽葉が下に埋もれめ」

みなしぐり 虚栗【名】【書】寶井其角の、天和三年輯めたる俳諧集。主に蕉門の連句發句を載せ、交ふるに談林を以てす。一卷。其角の序と芭蕉の跋とあり。なほ、貞享四年、同じく其角の、同門の俳諧を集め、山口素堂の序を附したる續虚栗一卷ありて、共に其角七部集の一なり。

みなしぐりーしふ 虚栗集【名】【書】前條に同じ。其角「虚栗集に題す。木枯よ世に捨はれぬみなし栗」

みなしーご 孤【名】『身無兒、卽ち身寄（ミヨリ）無き兒の義』父親又は兩親共に無き兒。孤兒（ミナシゴ）。萬葉「たらちねの親に別れし身なし兒の憂きはわが身に限りけるかな」

みなしごーぐさ 白薇【名】【植】ふなばらさう（白薇）に同じ。和名「白薇、美那之古久佐。一云、久呂久佐。一云、阿末奈」

みなしーじんじや 水無神社【名】飛驒國大野郡宮村に鎮座せる國幣小社。祭神は、御年（ミトシ）神とも、天火明（アメノホ）神とも、神武天皇とも、高照姫（タカテルヒメ）命とも、高降姫（タカフリヒメ）命とも、天熊人（アメクマヒト）とも、太歳（オホトシ）神とも、天照大神とも、少彦名（スクナヒコナ）神とも、又八幡神ともいふ。延喜式には、小社に列し、建保以來、僧徒の奉仕に歸し、本地堂を建てて、釋迦の像を安置せしより、水無大菩薩と呼びたり。「條を見よ。

みなしーだいぼさつ 水無大菩薩【名】前

みなしたーふ 水下經【枕】**みなそこふ**（水底經）に同じ。紀「いはれの池のみなしたふ魚も上にでて歎く」

みなしーば みなし羽【名】鷹の腹の毛。

みなしーばら 身無腹【名】助骨の下の邊。

みなしーむぎ 實無麥【名】殻のみにて實の無き麥。狂歌咄「實なし麥の、吹けば飛び散るやうに」

みーなしも 水下【名】『なは、領格の助辭の轉』水の流れゆく下の方。かはしも。下流。（水上（ミナカミ）に對して）拾遺「山川のみなしもなりし諸人も動かぬ岸にまもり上げて沈む水屑（ミクヅ）のはてはては」

みなしろ 皆白【名】全體の白きこと、又その物。

みなしろ 御名代【名】上古、天皇皇后又は功業顯著なる皇族の御名を後世に傳へんがために、その御名又は御居所の名を負はせて、皇室及び皇族の附屬とし、併せて、供御その他の費用の資とせられし部民。記錄の備はらざりし時代の制度にして、もし、その天皇皇后又は皇族に子孫ましまさぬ時は、御名代が、その御名を記念する事、恰も子孫が御名を記念するが如きものありしより、かかる場合には、御子代（ミコジロ）ともいひたり。古事記の垂仁天皇の條に「次伊登和氣（イトワケ）王者（因レ無レ子而爲二子代一定二伊登志部一）とあるは御子代の名の史上に見えたる初にして、日本書紀の景行天皇の四十年、日本武（ヤマトタケル）尊崩御の後に「因欲レ錄二功名一卽定二武部（タケベ）一」とあるは、卽ち御名代なり。大化の改新に至りて、私有の部民を止められしため、この制も廢せらる。記「大雀（オホサヽギ）の命（ミコト）、……。この天皇（スメラミコト）の御世に、大后（オホキサキ）石之日賣（イハノヒメ）の命の御名代として、葛城部（カヅラキベ）を定めたまひ、亦、太子（ヒツギノミコ）伊邪本和氣（イザホワケ）の命の御名代として、壬生部（ミブベ）を定めたまひ」

みなしろーべ 御名代部【名】御名代として設けたる部民。

みーなす 見成す・看做す【動四他】㊀見て、假りにそれと定む。萬葉「照れる日を闇に見成して泣く涙衣濡しつ干す人なしに」宇治「沖の方に、島の浮びたるやうに見なして」㊁見るやうにす。夫木「山科（ヤマシナ）の山をうしろに見なしつつ」㊂見做して（ミナシテ）認定して、反證發生するも爰すことを許さず（推定に對して）「なること、又その物。

みなすはう 皆蘇枋【名】全體の蘇枋色

みなずゐしやう 皆水精・皆水晶【名】數珠の、すべての玉を、水精にて造りたること。本裝束。狂言「鶯蛍」「八十ばかりの老僧が、香（カウ）の衣（コロモ）に香の袈裟、皆水精の數珠を爪繰り」

みなせ 水無瀬【名】㊀【地】攝津國三島郡の地。今の島本村大字廣瀬の地にて、山城國大山崎村と相接し、世俗、通じて山崎驛と呼ぶ。東は淀川を隔てて、男山に對し、西北は山嶺を負ふ。惟喬（コレタカ）親王及び後鳥羽院の離宮ありし地。伊勢「昔、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり」㊁姓氏の一。本姓は藤原。藤原道隆の第四子隆家の第六世親信を祖とし、その子親兼、孫信氏、後鳥羽上皇に寵ありて、攝津國水無瀬に住みしより氏とす。明治維新後、子爵を授けらる。昔は、坊門とも呼びたり。㊂謠曲の一。攝津國水無瀬の住人なる爲世といふ者、出家の後、わが子の家に一泊して、亡母の後世を弔ひしが、親子の名乘をせざりしとて、亡母の靈現れて、これを引き合はする事を作れるもの。

みなせーがは 水無瀬川【名】㊀**みづなしがは**（水無川）に同じ。萬葉「戀にもぞ人は死にする水無瀬河下ゆ吾痩す月に日にけに」㊁【地】攝津國三島郡の東北にある小流。源を大澤池及び尺代（シヤクダイ）山に發し、屈曲して、島本村大字廣瀬に至りて、淀川に入る。長さ三里。古は、柳・山吹の名所にして、古歌多し。古今「言（コト）に出でていはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて戀しきものを」

みなせーがは 水無瀬川【枕】水無瀬川は、水の、表面は絶えたるが如くにて、下には流れ通ふより、**たゆたふ**下（シタ）に通ふにかけていふ。萬葉「事せけば中は淀まず水瀬川たゆたふ事をありこすなゆめ」古今「言（コト）に出でていはぬばかりぞ水無瀬川したに通ひて戀しきものを」

みなせーじんじや 水無神社【名】飛驒國大野郡宮村に鎮座する國幣小社。祭神は、單に水無神といひ、神武天皇なりとの說もあれど、確かならず。式内の古社にして、古來、當國一ノ宮として、尊崇せられたり。

みなせーどの 水無瀬殿【名】攝津國水無瀬にありし、後鳥羽上皇の離宮。今、官幣社水無瀬宮の在る所、その遺址なるべしといふ。著聞「後鳥羽院の御時、……、水無瀬殿へ參りたりけるに」撰集「院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせたまひて」

みなせーどり みなせ鳥【名】【動】ふくろふ（梟）に同じ。【古語】秘藏抄「深山路の木影こぐらき夕ぐれにややすさまじく鳴くみなせ鳥。みなせ鳥とは、梟をいふなり」

みなせーのーみや 水無瀬宮【名】攝津國水無瀬に鎭座せる官幣中社。祭神は、後鳥羽上皇御門、順徳の三上皇。明治六年創建。

まののみや（眞野宮）參照。

みなせーやま 水無瀬山【名】【地】攝津國水無瀬の西北にある連嶺。壬二集「水無瀬山せき入れし水の秋の月思ひ出づるも涙なりけり」

みーなそこ 水底【名】『なは、領格の助辭の轉』**みつそこ**（水底）に同じ。萬葉「大き海のみなそこ深く思ひつつ裳（モ）引き馴らしし菅原の里」

みなそこーふ 水底經【枕】水底を經通ふ魚といふ意にて、うをの約なるおの音にかけていふ。みなしたふ。紀「みなそこふおみの少女（ヲトメ）」

みーなそそぐ 水注ぐ【枕】『なは、主格の助辭の轉』水の注ぐといふ意なるより、うを（魚）の約なるおの音、又はしび（鮪）にかけていふ。記「みなそそぐおみの少女（ヲトメ）」紀「みなそそぐ鮪（シビ）の若子（ワクゴ）」

水無月の祓(ハラヘ)【句】みなづきばらへ(水無月祓)に同じ。「輪」に同じ。

水無月の輪【句】「水無月祓(ミナヅキバラヘ)の輪」に同じ。

みなづきばらへ 水無月祓【名】一夏越(ナゴシ)の祓に同じ。〔六月祓〕徒然 六月祓、またをかし」二謡曲の一。夫の行くへを尋ねて狂ひ出でたる女の、賀茂神社の水無月祓の日、めぐりあひたる事を作りたるもの。

水無月祓の輪・六月祓の輪【句】ちのわ(茅輪)に同じ。謡曲「水無月祓」水無月祓の輪を持ち、人人に茅の輪のいはれを聞かせてくぐらせ候ふが」

みなづきむらい 水無月無禮【名】水無月の暑さに、身をくつろぐること。長門卒家「水無月無禮とて、紐解かせたまへ」

みなづきゑ 六月會【名】昔、延曆寺にて、傳教大師の忌日なる陰曆六月四日より十日間、大講堂にて修(シュ)する法會。法華十講と廣學立義(クワウガクリフギ)の論義とを行ふ。建曆三年より御齋會(ゴサイエ)に准ぜられ、後世は、十一月會(キエ)と合はせて、春秋の好時期に修(シュ)することとなれり。

みなつぼ 水粒【名】『なは、領格の助辭「の」の轉』みつぶ(水粒)に同じ。〔古語〕名義抄「漏、ミナツボ」

みなづる 水鶴【名】水中に棲む鶴。山家「みなづるは澤の氷の鏡にて千とせの影をもてやなすらん」

みなと 水門・水戸【名】『なは、領格の助辭「の」の轉』河・海などの、水の出入する處。せと。みと。海峽。〔古語〕萬葉「水門なる葦のうら葉を誰か手折りしわが背子が振る手を見むと我ぞ手折りし」古今「年ごとにもみぢ葉流す立田川みなとや秋のとまりなるらん」

みなと 港・湊【名】『前條の語の轉義。港の字は水につきていひ、湊は陸につきていふ』水の、深く陸内に彎入し、船舶の風別を立つ。港灣(カウワン)。和名「港、水上人所會也。三奈止」

みなと 湊【名】一〔地〕常陸國那珂郡にある町。那珂川口の北岸。水戸市より三里五町。この國の外洋第一の港。水戸市との間には、那珂川の水運あり、鐵道常磐線の勝田驛よりは、私設の湊鐵道通ず。二肥前國南高來(タカキ)郡にある町。島原半島の東岸。三上總國君津郡にある町。湊川の河口、富津(フッ)洲の東南。安房國西街道の一驛。鐵道房總の停車場あり。

みなといで 港出・湊出【名】船の、港を出でゆくこと。出港。(港入に對して)萬葉「湊入の葦わけ小船さはり多み今來む吾を淀むと思ふな」

みなといり 港入・湊入【名】船の、湊に入ること。入港。(港出に對して)萬葉「湊入の葦わけ小船さはり多み今來む吾を淀むと思ふな」

みなとーいりえ 港入江・湊入江【名】次條に同じ。萬葉百首「人知れず港入江のあやめ草滿干る潮や今日は引くらん」

みなとえ 港江・湊江【名】港に連なりたる入江。みなといりえ。續古今「夕立のまだ過ぎやらぬ港江の葦の葉そよぐ風の涼しさ」

みなとーかぜ 港風・湊風【名】港に吹く風。萬葉「みなと風寒く吹くらしなどの江につま呼びかはし田鶴(タヅ)さはに鳴く」

みなとーがは 湊川【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡の西部より神戸市を貫きて流るる川。神戸市の中、この川より西を、兵庫とす。神戸市の北なる山田村より發する烏原(カラスバラ)川・天王谷川の合流。もと、東南流して、海に入りしを、近年の改修以來、石井橋畔より西南に轉じ、會下(エゲ)山の隧道を過ぎ、曲流して、長田を過ぎ、東池尻を經て、刈藻(カリモ)川に注ぐ。河床甚だ高く、堤防を以てこれを擁し、平時は、水涸れて、一面の砂礫をなし、堤上は、老松並び、

みなとがはーじんじゃ 湊川神社【名】攝津國神戸市多聞(タモン)通三丁目に鎮座せる別格官幣社。祭神は、楠木正成及び同時に殉難の一族。その地は、正成等戰死の跡なれども、元祿五年、德川光圀の「嗚呼忠臣楠子之墓」と題する碑を建てしまでは顧る者少く、平田の間に、梅松の二樹僅かに立てりしのみ。社殿は、明治五年落成し、三十八年に至り、正成の夫人滋子を攝社に祀る。

みなとがみ 湊紙【名】昔、壁の腰張などに用ひし、劣等なる烏子(トウシ)紙。和泉國大鳥(オホトリ)郡湊村にて創製し、後、攝津國有馬郡名塩(ナシホ)の隣村山口の特產となり、名塩の間似合(アヒニ)紙と同じく、粘土を混じて抄造したり。一代男「太夫市橋が定宿金(カネ)の間(マ)も、湊紙の腰張に變りぬ」

みなとぐち 港口・湊口【名】港の、船の出入する所。

湊口で難船【句】成功せんとする間際に失敗する譬。〔諺語〕

みなとしらみ 港白・湊白【名】港の、夜あけて、しらむこと。海上のあかつき。

みなとす 港洲・湊洲【名】港にある洲。夫木「田鶴(タヅ)の鳴く夕しほさゐのみなとすに藻刈小舟も今や寄すらん」

みなとぜい 港稅【名】港に碇泊する船舶より徵集する稅。

みなとだ 港田・湊田【名】港にある田。神樂(湊田)「みなと田に鵠(クグ)八つをり、捕(ト)ろちなや、捕ろちなや」

みなとぢ 港路・湊路【名】港にあるみち。新勅「みるめ刈るあまのゆききの港ぢ思ひ寄るべきたよりだになし」「る町。

みなとまち 港町・湊町【名】港を兼ねたより產する陶器。慶安の頃、京都御室(オムロ)邊より來れる陶工の創めしものといふ。

みなとーやき 湊燒【名】和泉國大鳥郡湊村

みなとーやま 湊山【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡にある山。天王谷・烏原(カラスバラ)谷の間に聳ゆ。新勅撰「みなと山とことはに吹く潮風に繪島の松は波や掛くらん」

みながら 皆ながら【句】ことごとく。すべて。みな。みながら。宇治「ある人、皆ながら、すずろに呂つぼに入りにけり」

みーなぬか 三七日【名】さんしちにち(三七日)一に同じ。續詞花「物申しける女、身まかりて、三七日ばかりになりにけるに」

みなのーがは 水名野川・美奈能川【名】〔地〕さくらがは(櫻川)一を見よ。後撰「筑波嶺の峰より落つるみなの川戀ぞつもりて淵となりぬる」

みなのーわた 蝮腸【枕】蝮の腸(ハラワタ)は色黑き物なるより、かくろし(か黑し)にかけていふ。萬葉「みなのわたか黑き髮にいつの間か霜の降りけむ」

みなは 水繩【名】和船にて、帆桁の中央に結び附け、檣の蟬を通して、艫(モ)に引き、帆を上下するに用ふる繩。船の大小によりて、一(ソヒ)水繩・二(フタ)水繩・三(ミ)水繩・四(ヨ)水繩などの別あり。みなおり(水繩下)參照。

みなはーどめ 水繩留【名】和船にて、水繩の端を引き留めておく、水繩下(ミナハ)の栓。

みなはーなんば 水蝮南蠻【名】ねなんば(根南蠻)に同じ。

みなひと 皆人【名】すべての人。殘らずの人。源氏「皆人、心を寄せきこゆるも、一つ心と見ゆ」

みなひとびと 皆人人【名】前條に同じ。狂言(磁石)「皆人人の申さるるは、若い時、旅をせねば、老いての物語と仰せらるるによって」

みなふ 未納【名】未だ納めぬこと。

みなふいうびん 未納郵便【名】郵便料の未納なる郵便物。その郵便料の二倍を、受信者より徴収し、受信人これに應ぜざる時は、郵便物を發信人に返付して、發信人より、同じく二倍の郵便料を徴集す。

みなふきん 未納金【名】未納の金。

みなふしや 未納者【名】料金・税金などを未だ納付せぬ者。

みなふぜい 未納税【名】未納の租税。

みなぶちーしやうあん 南淵請安【名】〔人〕學者。應神天皇の皇子稚淳毛二派(ワカヌケフタマタ)の裔にして、二派皇子の子佐鹵(サロ)王、始めて、南淵の姓を賜はる。推古天皇の十六年、請安選ばれて、高向玄理(クロカムケノクロマロ)等と支那に遊學し、歸朝の後、王公・大夫、皆敬して單に先生と稱して、名をいはず、天智天皇、皇太子たりし時、藤原鎌足等と、就きて業を受く。著書百餘巻に上るといへど、皆傳はらず。

みなぶちやま 南淵山・雄淵山【名】〔地〕大和國高市郡高市村稻淵にある山。定家「五月雨に渡る淺瀬もなかりけり南淵山の谷の川水」

みーなほす 見直す【動四他】■見て思ひなほす。 祝詞(大殿祭)「言壽(コトホ)ぎ漏落ちむ事をば、神直日(カムナホビ)の命(ミコト)・大直日(オホナホビ)の命、聞直し、見直して」 ■改めて見る。更に見る。一茶「負菊(まけ)をひとり見なほす夕かな」

みーなほす 見直す【動四自】〔商〕景氣恢復(クワイフク)する。

みーなまた 水俣・水派【名】『なは、領格の助辭のの轉』水の流れ分るる所。みまた。字鏡「派、美奈萬太和加留」

みなみ 南【名】■東の方に向ひて、右の方。北の反對の方向。みんなみ。南方。 ■**みなみかぜ**(南風)の略。萬葉「南吹き雪げはふりて」 ■〔地〕和泉國の舊郡の一。明治二十九年、日根郡と合して、泉南(センナン)郡となる。 ■〔地〕大阪市島ノ内を、德川時代、その地に、色茶屋ありし頃に呼びし語。重井筒「かさね井筒屋といふ南の茶屋」 ■〔地〕大阪市十三區の一。

南の大殿(オホトノ)【句】**みなみざの**(南殿)■に同じ。 栄華「南のおとどしつらはれて、あげばり打ちわたしたり」

南の表【句】**みなみおもて**(南表)に同じ。 字鏡「南の表の西の方なる妻戸口」

南の方【句】**みなみおもて**(南面)に同じ。 源氏「君、南の方に出でたまひて」

南の京【句】〔地〕**なんきやう**(南京)に同じ。 字鏡「南の京の永超僧都」

南の國【句】古、後世の南海道の邊をいふ。

南の院【句】貴族の邸宅の一部、南の方に離して建てたる一棟。 枕「南の院におはする頃、西の對に、殿のおはする方に、宮もおはせば」

みなみーあかり 南明【名】南向にて、日光のさし入りてあかるきこと。一代女「南あかりの窓を樂しみ」

みなみーあきた 南秋田【名】〔地〕羽後國九郡の一。郡役所を土崎湊(ツチザキミナト)町に置く。

みなみーあだち 南足立【名】〔地〕武藏國二十郡の一。郡役所を千住町に置く。

みなみーあひづ 南會津【名】〔地〕岩代國十郡の一。郡役所を田島町に置く。

みなみあふりかーれんぱう 南亞弗利加聯邦(英Union of South Africa)【名】〔地〕亞弗利加洲南部にある聯邦。英吉利國に屬す。西曆一九一〇年、ケエプ・オブ・グッドホオプ(Cape of Good Hope)・ナタル(Natal)・トランスバアル(Transvaal)・オレンジ自由州(Orange Free State)の四州の聯合して成立せるもの。

みなみーあまべ 南海部【名】〔地〕豐後國十郡の一。郡役所を佐伯(サヘキ)町に置く。

みなみーあめりか 南亞米利加【名】〔地〕次條の略。

みなみーあめりかーしう 南亞米利加洲(英South America)【名】〔地〕六大洲の一。西半球の南部にあり。パナマ地峽により、北亞米利加洲に連る。面積約百二十萬方里。南米(ナンベイ)。

みなみーいさ 南伊佐【名】〔地〕薩摩國の舊郡の一。明治二十九年、薩摩郡に合併せらる。

みなみいわうーじま 南硫黄島【名】〔地〕南洋群島の火山列島の一。北緯二十四度十四分、東經百四十一度二十八分に位し、平頂の一方形山を成し、高さ三〇三尺に隆起す。明治二十四年、我國の版圖に入り、小笠原島の屬島と定む。サン、オオガスチノ島。

みなみーうけ 南受【名】**みなみむき**(南向)に同じ。 俳諧新選(濁北)「鶯や枕はづれし南うけ」

みなみーうわ 南宇和【名】〔地〕伊豫國十二郡の一。郡役所を御庄(ミシヤウ)村に置く。

みなみーうをぬま 南魚沼【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を六日町に置く。

みなみーおいたま 南置賜【名】〔地〕羽前國十郡の一。郡役所を米澤市に置く。

みなみーおほてら 南大寺【名】**だいあんじ**(大安寺)に同じ。

みなみーおもて 南面【名】宮殿・邸宅の、南に向きたる部分。 枕「女房、南おもてにそよめき出でぬめり」 今昔「寢殿の南おもてに、帽額(モカケ)の簾、所所破れて」

みなみーがしら 南頭【名】馬・牛などの頭を南に向けて立たせ、又は歩まること。 謡曲(雜生馬)「たけなる馬……、二條大宮を、南頭に歩ませけり」

みなみーかぜ 南風【名】南方より吹き來る風。みなみ。なんぷう。おくだり。南風を食つた飴細工のやう【句】『南風は暖きものなるよりいふ。 **くふ**(食ふ)■を見よ』締(シメ)なく相好(サウゴウ)を崩せる體。 [諺語]

みなみーかつしか 南葛飾【名】〔地〕武藏國二十郡の一。郡役所を小松川町に置く。

みなみーかつらぎ 南葛城【名】〔地〕大和國十郡の一。郡役所を御所(ゴセ)町に置く。

みなみーかはち 南河内【名】〔地〕河内國三郡の一。郡役所を富田林(トンダバヤシ)町に置く。

みなみーかんばら 南蒲原【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を三條町に置く。

みなみーかんら 南甘樂【名】〔地〕上野國舊郡の一。明治二十九年、多胡(タゴ)・緑野(ミドリノ)の二郡と合して、多野(タノ)郡となる。

みなみーくはた 南桑田【名】〔地〕丹波郡七郡の一。郡役所を龜岡町に置く。

みなみーくわいせん 南回歸線【名】〔天〕**くわいきせん**(回歸線)を見よ。

みなみーくわいきむふうたい 南回歸無風帶【名】〔地〕**くわいきむふうたい**(回歸無風帶)を見よ。 「東風。

みなみーごち 南東風【名】南に偏りたる

みなみーこま 南巨摩【名】〔地〕甲斐國九郡の一。郡役所を鰍澤(カヂカ)町に置く。

みなみーさいたま 南埼玉【名】〔地〕武藏國二十郡の一。郡役所を岩槻町に置く。

みなみーさうま 南相馬【名】〔地〕下總國舊郡の一。明治二十九年、東蒼飾(ヒガシカ)郡に合す。

みなみーさく 南佐久【名】〔地〕信濃國十六郡の一。郡役所を臼田町に置く。

みなみーさぶらひ 南侍【名】侍所■の、主殿の南部に設けてあるもの。

みなみさもーどり みなみさも鳥【名】〔動〕**みさご**(鶚)の異稱。〔古語〕

みなみーしだら 南設樂【名】〔地〕三河國十郡の一。郡役所を新城(シンシロ)町に置く。

みなみーじま 南島【名】〔地〕小笠原島の母島の別稱。

みなみーせた 南勢多【名】〔地〕上野國舊郡の一。明治二十九年、東群馬郡と合して、勢多郡となる。

みなみーせんぢゆ 南千住【名】〔地〕武藏國北豐島(キタトヨシマ)郡の町。荒川の南岸。奥州街道の第一程。大橋によりて、南足立(アダチ)郡の千住町に接す。もと、千住驛の一部として、千住南組と呼びたり。

みなみーたかく 南高來【名】〔地〕肥前國十四郡の一。郡役所を島原町に置く。

みなみーたま 南多摩【名】〔地〕武藏國二十郡の一。郡役所を八王子市に置く。

みなみーつがる 南津輕【名】〔地〕陸奥國九郡の一。郡役所を黒石町に置く。

みなみーづめ 南詰・南爪【名】南の橋詰。

みなみーつる 南都留【名】〔地〕甲斐國九

郡の一。郡役所を谷村(ヤツ)町に置く。

みなみ-さしま 南巽島【名】〔地〕武藏國舊郡の一。その地域、浙矣、東京市に編入せられしもの多く、明治二十九年、東多摩郡と合して、豐多摩郡となる。

みなみ-どの 南殿【名】㊀貴人の邸宅中の正殿たる、南向の殿舍。みなみのおとど。紫花「年頃造りみがかせたまひつる御佛、南殿より渡し奉らせたまふ」東鑑「於二御所南殿一、被レ轉二讀大般若經一」㊁南・北兩六波羅探題の內の南方。

みなみ-たけ 南竹藪(タカ)【名】殿(ド)隣(トナ)【句】居を移す時には、前以て、隣の如何を察すべし。〔諺語〕

みなみ-とりしま 南鳥島【名】〔地〕南洋群島の火山列島の一。珊瑚島にして、北緯二十四度三十分、東經百五十三度五十七分に位し、大略三角形を成し、低卑にして、沙多く、濃木茂生し、中央は高さ二〇〇尺に隆起し、信天翁(アホウ)多く棲息するを以て、その羽毛の採取と漁業とを目的として、近年移住する者多し。明治三十一年、我國の版圖に入り、小笠原島の所屬と定む。マアカス島。

みなみ-な 皆皆【代】**みな**(皆)を強めていふ語。根岡志其佐「蜆取らんと、皆皆、小舟に乘移る」

みなみ-なか 南那珂【名】〔地〕日向國八郡の一。郡役所を飫肥(オビ)町に置く。

みなみ-にほん 南日本【名】〔地〕我國の富士火山脈以南の總稱。(北日本に對して)

みなみ-の-うみ 南海【名】〔地〕後世の南海道の邊の古稱。謠曲「海士」「三笠山、今ぞ榮えんこの岸の南の海に急がんと行けば、程なく津の國の」

みなみ-の-きやう 南京【句】**みなみ**(南)の條下を見よ。

みなみ-の-くに 南國【句】**みなみ**(南)の條下を見よ。

みなみ-の-せき 南關【名】〔地〕『舊大津山の關(松風の關)の南に當るよりいふ』後肥後國玉名郡の町。筑後國に接する山間に在りて、熊本市の北十一里弱に當る。熊本より筑後國に出づる要路に當る。

みなみ-の-との 南殿【名】なでん(南殿)に同じ。

みなみ-の-やま 南山【名】〔地〕『京都の南方に在るよりいふ』**きたやま**(男山)の異稱。謠曲「放生川」「花の都を守らんと、南の山にすむ月の光もみつの衣手に」

みなみ-ばんがしら 南番頭【名】江戸幕府の大番頭と書院番頭との併稱。後、書院番頭と小姓番頭とを、兩番頭といひ、これに、大番頭を加へて、三番頭といふ。

みなみ-びさし 南庇【名】寢殿造に於ける、南面の庇の間。「大極殿の南庇」

みなみ-へい 南閉伊【名】〔地〕陸中國舊郡の一。明治二十九年、西閉伊郡と合して、上閉伊郡となる。

みなみ-ほっけじ 南法華寺【名】**つぼさかでら**(壺阪寺)を見よ。

みなみ-まくら 南枕【名】寢ぬるに、南の方に枕を置くこと。神道にては、死人を、このさまに臥さしむ。(北枕に對して)

みなみ-まつうら 南松浦【名】〔地〕肥前國九郡の一。郡役所を福江町に置く。

みなみ-まつり 南祭【名】山城國石清水(イハシミズ)八幡宮の臨時祭。陰暦三月午の日(午の日三回なる時は、中の午の日、二回なる時は、下の午の日)行はる。(北祭に對して)江次第「石清水臨時祭使還立事(還立、南祭還立日、出御東遊事、近代不レ被レ行)」

みなみ-まんしうてつだう 南滿洲鐵道【名】大連驛より遼東半島を縱貫し、大石橋に至り、遼河に並行し、長春驛に至る幹線と、大連旅順間・蘇家屯撫順間などの支線との總稱。南滿洲鐵道株式會社の經營に係る。なんまんしうてつだう。

みなみ-むき 南向【名】南に向くこと、又その向きたるもの。みんなみむき。なんめん。

みなみ-むらやま 南村山【名】〔地〕羽前國十郡の一。郡役所を上山町に置く。

みなみ-むろ 南牟婁【名】〔地〕紀伊國九郡の一。郡役所を木本(キノモト)町に置く。

みなみ-もろかた 南諸縣【名】〔地〕日向國舊郡の一。明治二十九年、大隅國東囎唹(ソオ)郡と合して、囎唹郡となり、大隅國に入る。

みなむしろ 水席【名】『なは領格の助辭**の**の轉』水底にある石なりといふ。〔古語〕夫木「水がくれて波の織りしく谷川のみなむしろにも月ぞ澄みける」

みなむすび 蝱結【名】『結び重ねたる形、蝱に似たるよりいふ』緒の結び方の一。徒然「蝱むすびといふは、絲を結び重ねたるが、蝱といふ貝に似たればいふと」

みなん 未男【名】**おみなん**(御未男)を見よ。

みーなもと 水本・源【名】『なは、領格の助動詞**の**の轉』㊀川の水の流れ出づるもと。水源。恐常嘆「源は涸れて、埋れて、濁江の水に離れし魚とかや」㊁物事の起る所。みなかみ。起原。根源。源流。徒然「愛著の道、その根深く、源遠し」源清ければ、流清し【句】『荀子の君道篇に「源清則流清、源濁則流濁」とあり』根源正しき時は、その末もまた正しき者なり。

みなもと 源【名】姓氏の一。嵯峨天皇、弘仁五年詔して、皇室の費用を節せんがために、皇子中、未だ親王たらざる者に、源朝臣を賜ひて、臣位に下されしより起り、後、仁明・文德・清和・陽成・光孝・醍醐・宇多村上・花山・後三條・順德・後嵯峨・後深草の諸天皇も、これに倣ひて、皇子・皇孫に姓を賜ひしより、嵯峨源氏・仁明源氏・文德源氏など、天皇の名を冠して、區別す。多くは、武士となりて、後世に著れたれども、公卿となりし者も尠からず。中にも、子孫の繼衍著しきは、清和・宇多・村上の三源氏にして、清和源氏は、居住の地により、攝津源氏・河內源氏・大和源氏・美濃源氏・尾張源氏・三河源氏・甲斐源氏・信濃源氏等に分れ、宇多源氏も、近江源氏・越後源氏等に分る。各條を見よ。げんじ。

みなもと-あきいへ 源顯家【名】〔人〕武將。北畠親房の長子。建武中興の後、十六歲にして、陸奥守に任ぜられ、父親房監督の下に、皇子義良(ノリナガ)親王を奉じて、奥羽を鎭し、次いで鎭守府將軍となり、足利尊氏・直義(タダヨシ)兄弟の叛するや、西上し、新田義貞等と力を協せて、これを京師に破る。功を以て、權中納言・陸奧大介・鎭守府大將軍となり、尊氏、京師を回復するや、再び西上し、鎌倉に、足利義詮(ヨシアキ)を破る。延元三年、高(コウ)師直の軍と、攝津國安倍野に戰ひ、又、和泉國堺に戰ひ、石津にて戰死す。年二十一。**あべのじんじや**(安倍野神社)參照。

みなもと-あさこ 源朝子【名】〔人〕後土御門天皇の典侍。新大典侍と稱し、玉姿端麗、殊寵を得て、後柏原天皇及び一皇子を生み、三宮に准ぜらる。永正元年薨ず。

みなもと-ありかた 源有賢【名】〔人〕朝臣。後白河・後鳥羽と兩朝に歷事し、音律の事を掌り、中納言に進む。音聲絕佳なるによりて、世に鈴蟲中納言と稱す。

みなもと-ありこ 源在子【名】〔人〕宮人。法勝寺の執行(シユギヤウ)能圓の女。後鳥羽天皇に仕へて、宰相君と稱し、土御門天皇及び一皇女を生み、承明門院と稱す。正嘉元年薨ず。年八十七。

みなもと-ありひと 源有仁【名】〔人〕朝臣。輔仁親王の子。白河天皇の皇孫、母は大納言藤原師忠の女。右大臣兼左近衞大將・從一位に拜せられ、天承二年、左大臣に進む。久安三年薨ず。年四十五。詩歌に長じ、又、音律に巧にして、鳥羽法皇の寵を受く。世に花園左大臣と稱す。

みなもと-かねあきら 源兼明【名】〔人〕朝臣。醍醐天皇の皇子。村上天皇の皇弟、源高明の兄。冷泉・圓融の兩朝に仕へて、左大臣となる。藤原兼通その賢を猜み、天延二年、その官職を罷めて、諸王となし、中務卿に補し、權を奪ひしより、蔥表賦を作りて、龜山に隱遁す。世人、具平(トモヒラ)親王と並べて、前中書王と稱し、又、小倉王といふ。永延元年薨ず。

みなもと-さだ 源定【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。天長五年、姓源朝臣を賜はり、第六の源氏となる。正三位・大納言

みなもと-さだむ 源定【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。天長五年、姓源朝臣を賜はり、第六の源氏となる。正三位・大納言

みなもと-さつき 狼牙【名】〔植〕**みつもとさう**(みつもと草)に同じ。

みなもと-さとし 源聰【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。天長五年、姓源朝臣を賜はり、第六の源氏となる。正三位・大納言

に進み、世に掾梅大納言又は賀陽院(カヤノ)大納言と稱せらる。資性溫雅にして、音樂を好み、貞觀五年薨ず。年四十九。

みなもと-さねとも 源實朝 【名】〔人〕武將。鎌倉幕府第二代の將軍。母は北條政子、賴家の同母弟。幼名は千幡。建仁三年、北條時政偽りて、將軍賴家薨ずと奏せしより、朝廷、從五位下に敍し、征夷大將軍に補し、尋いで、名を實朝と賜ふ。官位、累進して、正二位・左近衞大將に至りたれども、北條義時權を專にして、事、意の如くならず。建保六年內大臣に任じ、大將元の如く、右大臣に轉ずるや、數久元年、鶴ヶ岡八幡宮に拜賀の儀を行ひ、禮畢りて、社前の石階を下る際、賴家の子僧公曉(ギョウ)に殺さる。年二十八。歌集あり、金槐和歌集といふ。

みなもと-したがふ 源順 【名】〔人〕文學者。梨壺の五人の一人、又、三十六歌仙の一人。字は具瞻、大納言定(サダ)の曾孫。天曆七年、文章生に擧げられ、歷任して、從五位上・能登守に至る。永觀元年歿す。年七十三。學識富贍、才和漢を兼ね、詩文・和歌に達し、著す所、馬毛名歌合・和名類聚鈔等あり。

みなもと-たかあきら 源高明 【名】〔人〕朝臣。醍醐天皇の第十皇子。村上天皇及び源兼明の弟。母は更衣周子。冷泉天皇の朝、正二位・左大臣となり、世に西宮左大臣と稱せらる。安和元年、藤原實賴等の讒によりて、太宰權帥に貶せられ、遙れて剃髮し、家を燒かる。天祿三年宥されて京に歸り、天元五年薨ず。年六十九。著あり、西宮鈔といふ。

みなもと-たかくに 源隆國 【名】〔人〕朝臣。左大臣高明の孫、權大納言俊賢の第二子。正二位・權中納言に進み、皇后宮大夫に轉じ、後、權大納言に至る。承曆元年薨ず。年七十四。今昔物語は、その著なりといふ。

みなもと-ただあき 源忠顯 【名】〔人〕朝臣。村上源氏の出にして、家を六條又は禪林寺と稱し、千種(チグサ)忠顯ともいふ。權中納言有忠の子。後醍醐天皇の笠置に幸するに從ひ、建武中興に至るまで、奔走頗る力め、功によりて從三位・參議に至る。豪奢度なく、延元元年、足利尊氏の九州より、東上して、京都に入り、天皇、叡山に難を避けられし時、坊門正忠と松尾口に戰ひて敗死す。

みなもと-ためとも 源爲朝 【名】〔人〕武將。爲義の第八子。母は江口の遊女。體格偉大、よく强弓・大箭を彎き、十三才の時、父に勘當せられて、鎭西に入り、豐後國に居り、鎭西八郎と稱す。自ら九國總追捕使となり、將に九州を徇へんとせしより、朝廷、これを京師に至らしめしに、たまたま保元の亂あり。父に從ひて、崇德上皇に屬し、軍敗れて後、近江國輪田に遁れて、擒へられ、伊豆國大島に流さる。爲朝、以て朝廷の賜ふ所となし、大島の外、三宅・八丈・美計・漁の五島を領し、勢威日に熾なるより、嘉應二年、伊豆介工藤義光、これを訴へ、朝命によりて討伐す。爲朝、海濱に出て、大箭を射て、義光の船艦一隻を沈め、家に歸りて自殺す。年三十二。一說には、舟遊の際、暴風に遭ひ、琉球に漂著し、子孫その王となれりともいふ。

みなもと-ためよし 源爲義 【名】〔人〕武將。義家の孫、對馬守義親の長子。陸奥四郎と稱す。義親罪ありて、隱岐に流されしより、義家、第四子義忠を嗣とし、爲義をして、その後を承けしむ。官、檢非違使尉(ジョウ)に至り、その第六條堀河に在りしより、六條判官(ハンガン)と稱せらる。保元の亂、その子賴賢・爲朝等と崇德上皇に屬し、軍敗るるや、東國に遁れんとして、病んで行く能はず、出でて義朝に降る。義朝累りに奏して、死を減ぜんことを請ひたれど、朝議許さず、平清盛をして殺さしめんとせしより、義朝已むを得ずして、これを戮す。年六十一。

みなもと-ちかふさ 源親房 【名】〔人〕南朝の名臣。村上源氏の出にして、北畠親房ともいふ。權大納言師重の子。官位累進して、正二位・權大納言に至り、淳和奨學兩院の別當を兼ね、後醍醐天皇の第二の皇子世良親王の傅となる。建武中興の際には、從一位・准大臣となり、足利尊氏の叛するや、新田義貞・楠木正成等と畫策し、伊勢・紀伊を根據地として、吉野朝を擁護す。顯家、戰死の後、子顯信と義良親王を奉じて、東國に赴かんとして、遂に、颶風に遭ひ、船四散し、親王は伊勢に著せられ、立ちて皇太子となり、親房は常陸國に著し、畫策に努めたれども、事成らずして、興國四年、海路、吉野に還り、後村上天皇を助けて、京都の恢復を圖る。三宮に准ぜられ、輦車宮に入るを聽され、九年、賀名生(アノウ)に薨ず。年六十三。和漢の學に精しく、又、佛典に通じ、職原鈔・神皇正統記等の著書あり。

みなもと-つね 源常 【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。姓を賜はりて、第三源氏となる。天長七年、兵部卿となり、遂に左大臣に進む。嘗て勅を奉じて、日本後紀の撰に與る。齊衡元年薨ず。年四十三。

みなもと-つねのぶ 源經信 【名】〔人〕朝臣。清和源氏の出にして、民部卿道方の第六子。累進して、正二位・權大納言に至り、皇后宮大夫を兼ね後、太宰權帥となりて、承德元年、任地に薨ず。年八十二。別業を洛西桂の里に構へしより、世に桂大納言と稱せらる。博學多藝、詩歌・管絃通ぜざるなく、三舟の才の名を博す。母も亦和歌を善くし、子基綱は琵琶の名手、俊賴は歌人として著る。

みなもと-つねもと 源經基 【名】〔人〕武將。清和源氏の初祖。清和天皇の第六皇子なる貞純(サダズミ)親王の長子。依つて、世に六孫王といふ。天德五年、源朝臣の姓を賜はり、承平年中、武藏介となる。將門の叛するや、これが討伐を命ぜられ、藤原忠文に從ひて下る。未だ至らざるに、將門誅に伏し、尋いで小野好古に從ひて、藤原純友を討ち、功を以て、正五位下・鎭守府將軍兼上野介となり、應和元年卒す。年四十五。

みなもと-としより 源俊賴 【名】〔人〕歌人。大納言經信の子。堀河・鳥羽・崇德の三朝に仕へて、右近衞少將に任ぜられ、木工權頭・左京權大夫を兼ね、從四位上に進む。和歌を善くし、天治の初、勅を奉じて金葉集を撰ぶ。詠ずる所、詩想橫溢し、用語自由なれども、又、あまりに辭句の新奇を求めたる弊あり、その家集散木奇歌集は、難解の語多きを以て稱せらる。二子顯基・隆國、亦、共に世に顯る。

みなもと-としぼる 源融 【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。母は宮人大原全子。源朝臣の姓を賜はりて、第十二源氏となり、仁明天皇に養はる。承和五年、皇太子と共に、禁中に元服し、官、左大臣に至り、皇太子傅を兼ね、從一位に進む。寬永七年薨ず。年七十四。その宇治の別業は、即ち後の平等院にして、陽成・宇多・朱雀の三帝の臨幸あり。又、嵯峨にも山莊棲霞觀を設け、京都東六條には河原院(今の東本願寺の別邸枳殼邸はその跡といふ)を營み、難波より潮水二十斛を汲み來らしめ、鹽を煮て、陸奥鹽竈の勝概を摸し、世に河原左大臣と稱せらる。

みなもと-のりより 源範賴 【名】〔人〕武將。義朝の第六子。母は遠江國池田の遊女。蒲冠者(カンジャ)と稱す。幼にして、藤原範季の養ふ所となり、兄賴朝の兵を起すや、往きて從ふ。壽永三年、弟義經と共に、木曾義仲を粟津に滅し、又、共に平氏を一ノ谷に破り、九州に入りて、豐後國に居り、平氏をして、西走するを得ざらしむ。建久四年、曾我兄弟復仇の擧あるや、訛傳あり、政子を慰め誤、却りて、賴朝の猜忌に觸れ、伊豆修善寺に幽閉せられ、尋いで自殺す。

みなもと-はくが 源博雅 【名】〔人〕琵琶の名手。克明親王の長子。醍醐帝の皇孫。博雅三位と稱す。縯後拾遺集の作家。天元三年薨ず。年六十二。

みなもと-ひかる 源光 【名】〔人〕仁明帝の皇弟。母は宮人山口氏。第三源氏と稱す。右大臣、左近衞大將正二位に進み、西三條右大臣と稱す。延喜十三年薨ず。年六十九。

みなもと-ひろし 源弘 【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。姓を賜はりて、第二の源氏となり、天長七年、宮內卿となり、累進

して、大納言に至り、廣幡(ひろはた)大納言と稱せらる。貞觀五年薨ず。年五十三。

みなもとーひろまさ 源博雅【名】〔人〕醍醐天皇の皇子兵部卿克明親王の長子。從三位に叙せられ、皇太后宮權大夫に任ぜられ、世に博雅三位と呼ばる。音樂をよくし、又、蟬丸が琵琶の祕曲流泉・啄木の二曲を知ると聞き、每夜、逢坂の關屋に通ひ窺ふこと三年、中秋月明の夜、相語りて、終にその祕曲を受くと傳ふ。天元三年薨ず。年六十二。

みなもとーまこと 源信【名】〔人〕朝臣。嵯峨天皇の皇子。姓を賜はりて、第一の源となり、侍從・治部卿を經て、左大臣に至り、北邊(きたべ)左大臣と稱せらる。草書・隷書及び畫を巧みにし、又馬術に長じ、音樂にも通ず。貞觀十年薨ず。年五十。

みなもとーまさざね 源雅賓【名】〔人〕顯房の長子。右大臣に至る。樂鞨に妙を得。薙髪して蓮覺と號す。その日錄を久我相國記といふ。金葉・千載・新古今・新勅撰などの作家。大治二年薨ず。年六十九。

みなもとーみちなり 源道濟【名】〔人〕方國の男。五位叙後守。寛仁三年卒す。遺拾・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今・續後撰・續古今・續拾遺・金葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新續古今諸集の作家。

みなもとーみつなか 源滿仲【名】〔人〕武將。六孫王經基の長子。攝津國河邊(かわべ)郡多田(ただ)に住して、多田といふ。村上・冷泉・圓融・花山の四朝に仕へ、鎭守府將軍となり、正四位下に至り、內昇殿を聽さる。寛和二年出家し、多田新發意と稱す。天祿元年、多田院を建立し、長德三年卒す。年八十六。和歌を善くす。文明四年、從二位を、又、元祿九年、從一位を追贈せらる。

みなもとーもとこ 源基子【名】〔人〕後宇多天皇の宮人。初、新陽明門院に侍し、東の御方と稱し、後二條天皇を生む。後二條天皇崩ずるに及び、尼となる。正平十年薨ず。年八十七。

みなもとーもろふさ 源師房【名】〔人〕朝臣。具平親王の長子。初名資定。文學・和歌に巧なり。姓を源と賜ひ、太政大臣に累進す。土御門と稱す。叙位除目鈔・土右記の著あり。後拾遺・金葉・千載・新古今などの作家。承曆元年薨ず。年七十五。

みなもとーゆきいへ 源行家【名】〔人〕武將。爲義の第十子。初名は義盛。保元・平治の亂後、熊野の新宮に潛み、新宮十郎と稱す。治承四年、以仁(もちひと)王の令旨を奉じて、東國の諸源を歷說し、その後、平氏と戰ひて勝たず、鎌倉に赴きて、賴朝と合はず、遂に信濃に行きて、木曾義仲に依る。壽永二年、京師に入り、後白河法皇に謁して、從五位下・備前守となり、院昇殿を聽さる。後、又、義仲と隙を生じ、義仲滅び、平氏平(くだ)ぐや、義經と和して、賴朝追討の宣旨を請ひ、賴朝親征せんとするや、二人、西海に遁れんとして、攝津國大物(だいもつ)浦に暴風に遭ひ、行家は和泉國に遁れて擒へられ、赤井河原に斬らる。時に文治二年なり。

みなもとーよしいへ 源義家【名】〔人〕武將。賴義の長子。幼名は源太。七歲の時、石清水(いはしみづ)八幡宮に元服せしより、八幡太郎と稱す。勇武絕倫、最も騎射を善くし、前九年の役の功によりて、從五位下・出羽守となり、累進して、正四位下、陸奥守となり、鎭守府將軍を兼ね、後三年の役に、朝廷、私鬪と認めて、行賞なかりしかど、承德二年、院昇殿を聽さる。嘉承元年卒す。年六十八。威名天下に振ひ、坂東の兵士、心を傾けて服從す。後に、源氏の興起せる、實に此に基す。

みなもとーよしこ 源懿子【名】〔人〕後白河天皇の女御。天皇、未だ皇太子たりし時、女御となり、康治二年、二條天皇を生み、やがて薨ず。二條天皇御卽位の後、追尊して、皇太后とす。

みなもとーよしつね 源義經【名】〔人〕武將。義朝の第九子。幼名は牛若。母は九條院の雜仕(ざふし)常磐。平治の亂後、死を宥められて、鞍馬寺の覺日に預けられ、名を遮那(しゃな)王と改む。父祖の仇を復せんと欲し、剃髪を肯ぜず、金賣吉次及び下總國の人深栖(ふかす)頼重と共に關東に赴き、途中、自ら元服を加へて、源九郎(くらう)義經と稱し、尋いで、藤原秀衡に依る。兄賴朝の兵を起すや、起き助け、木曾義仲を滅し、平氏を平げ、官位累進して、從五位下・伊豫守となり、院廳別當を兼ぬ。後、兄と善からず、行家と共に、西海に逃れんとして果さず、吉野に匿れ、又、京師に入り、文治三年、北陸道を經て、陸奥に至り、秀衡に依る。秀衡卒して、子泰衡等に至り、賴朝の命を奉じて、衣川(ころもがは)の館に襲ふ。義經、妻子を刺殺して自殺す。年三十一。泰衡、首を鎌倉に傳ふ。一說に、遁れて蝦夷に至るとも、支那に入りて、金國に仕へたりとも、滿清の始祖となるとも傳ふ。

みなもとーよしとも 源義朝【名】〔人〕武將。爲義の長子。從五位に敍せられ、右馬助兼下野守に至り、保元の亂、召に應じて皇居を警護し、平清盛と共に、白河殿を夜襲して、これを陷る。父爲義の敗るるや、潛かに義朝に憑る。義朝、屢ばその死を宥されんことを請ひたれども、清盛もその叔父忠正を殺したりとて、强ひて誅せしむ。義朝、已むを得ず、家臣鎌田正家をして、これを殺しめ、尋いで、その弟五人を殺す。後、藤原信西と隙ありて、平治元年、藤原信賴と兵を擧げ、敗れて、東國に走り、尾張國內海(うつみ)に至り、翌年、長田忠致(ながたただむね)に殺さる。年三十八。

みなもとーよしなか 源義仲【名】〔人〕武將。爲義の孫なる帶刀先生(たてはきせんじやう)義賢の第二子。幼名は駒王丸。久壽二年、二歲にして、義賢、姪義平に殺されしより、畠山重能、これを救ひて、齋藤實盛に託し、實盛、これを信濃國に送り、中原兼遠をして傳育せしめ、木曾山下に居らしむ。因つて木曾次郎と稱す。治承四年、以仁(もちひと)王の令旨を奉じて、兵を擧げ、平氏を破り、壽永二年、京師に入り、後白河法皇に謁し、從五位下・左馬頭より進んで、從四位下征夷大將軍に任ぜらる。範賴・義經の來り討つに及びて大敗して、北陸に歸らんと欲し、追騎の爲に、近江國粟津に射殺せらる。年三十一。世に旭將軍、又、木曾義仲ともいふ。

みなもとーよしひら 源義平【名】〔人〕武將。義朝の長子。母は橋本の遊女。十五歲にして、叔父義賢(義仲の父)と武藏國大倉に戰ひて、これを斬りしより、惡源太と稱せらる。平治の亂に、父敗走するに及びて、美濃國青墓に至りて、父と別れ、北國に赴きて、兵を集む。義朝死すと聞くや、兵、悉く離散せしより、竊かに京師に入りて、平氏を覗ひ、露れて遁れ、東近江に赴かんとし、逢阪に至り、捕へられて、六條河原に斬らる。年二十。

みなもとーよしみつ 源義光【名】〔人〕武將。賴義の第三子。近江國新羅(しんら)明神の社前にて元服を加へ、新羅三郎と稱し、又、館(たち)三郎と稱す。左兵衞尉となりて、京師に宿衞せしが、後三年の役、兄義家利あらずと聞き、强ひて官を辭して赴き助く。役後、義家と共に京師に歸り、累進して刑部少輔・從五位上に至り、大治二年卒す。音律を好み、その精妙を窮む。

みなもとーよりいへ 源賴家【名】〔人〕武將。賴朝の長子。幼名は一萬、初、萬壽と稱す。母は政子。正治元年、賴朝の遺跡を繼ぎ、建仁二年、從二位に敍せられ征夷大將軍に拜す。後、遊樂度なく、人心離叛せしより、政子、政事より遠ざからしめ、伊豆國修禪寺に幽し、實朝を鎌倉の主とし、明年、時政、竊かに人をして、これを弑せしむ。年二十三。一幡は此企能員(きのかずかず)の亂に殺され、公曉は、實朝を弑して殺され、千壽丸も、北條氏を圖らんとして事敗れ、十四歲にして、京師に自殺す。

みなもとーよりとも 源賴朝【名】〔人〕武將。義朝の第三子。母は熱田大宮司藤原季範の女。幼名は鬼武者。從五位下・右兵衞權佐に至り、平治の亂、十三歲にして、頗る戰功を著し、軍敗るるに及び、東走の途中、平宗清に捕へられ、伊豆國蛭島(ひるしま)に置かる。蟄居二十餘年、以仁(もちひと)王の令旨を奉じて、治承四年兵を相摸國石橋山に擧げて敗れしが、再擧勢を得、遂に平氏を滅す。關東を平げて、居を鎌倉に構ふ。幾くもなく、弟義經と隙を生じ、行

家の、義經に黨するや、時政に大兵を授けて、京師に入らしめ、勅許を得て、諸國に守護・地頭を置き、公田と莊園とを論ぜず、兵糧米を課するに及びて、天下兵馬の權、その手に歸す。建久三年征夷大將軍に任ず。九年、落馬して、病に罹り、明年出家し、尋いで薨ず。年五十三。世に鎌倉殿とも、鎌倉右大將とも稱せらる。

みなもとーよりのぶ 源賴信【名】〔人〕武將。滿仲の子、賴光の弟。兄賴光と名を齊しくし、又、藤原保昌・平維衡・平致賴と、驍勇を以て並び稱せらる。一條・三條・後一條・後朱雀の四朝に仕へ、官位累進して、鎭守府將軍・從四位上に至る。長元元年、前上總介平忠常の亂を下總に爲すや、賴信等、朝命を奉じて、これを降し、功を以て丹波守となり、美濃に轉じ、又、河內に遷り、永承三年卒す。

みなもとーよりまさ 源賴政【名】〔人〕武將。賴光の玄孫、兵庫頭仲正の子。保元の亂、官軍に屬し、平治の亂には、初、義朝に黨し、後、官軍に屬す。官位右京大夫・從三位に至り、治承三年、剃髮し、世に源三位入道と稱せらる。治承四年、後白河法皇の皇子以仁(モヒト)王を奉じて、平清盛の兒泰を懲さんとし、事泄れ、王を奉じて、園城寺に入り、更に轉じて、奈良に赴かんとして、宇治平等院に駐まり、防戰利あらずして死す。年七十七。

みなもとーよりみつ 源賴光【名】〔人〕武將。滿仲の長子。花山・圓融・一條・三條・後一條の五朝に仕へ、伊豫・美濃・備前・攝津等の國守を經、內藏頭を兼ね、左馬權頭・三條院別當となり、內昇殿を聽され、正四位に至る。長保中、東宮大進に任ぜられて、皇太子に侍し、又、その女、藤原道長の兄右大將道綱に配し、依つて、稀紳と相往來す。治安元年卒す。世に、賴光を音讀して、「らいくわう」ともいふ。

みなもとーよりよし 源賴義【名】〔人〕武將。賴信の長子。長元三年、父に從ひて、平忠常を討ち、後、相摸守となりて、東國の武士の歸服を得、又、陸奧守となりて、安倍賴時・貞任(サダトウ)父子の亂を平げ、陸奧を平定す。功を以て正四位下・伊豫守となり、承保二年卒す。大正四年、正三位を追贈せらる。

みなもとーらいくわう 源賴光【名】〔人〕**みなもとよりみつ**(源賴光)に同じ。

みーならす 見馴す【動四他】見馴るるやうにす。源氏「屢見て馴るるやうにす、委しき御有樣を見馴し奉りし事はなかりしかど」「いとけ遠くもてなし給ひて、

みーならひ 見習【名】一見習ふこと。見て覺ゆること。みまね。枕「見ならひするもの、あくび・ちごども、なまけしからぬえせ者」二未だ本官・本職にならずして、或仕事を練習すること、又その人。日**はんにんくわんみならひ**(判任官見習)の略。

みならひーいくわん 見習醫官【句】師團司令部所在の歩兵隊に配屬し、該隊並びに衞戍病院にて、四箇月以上、衞生部士官の勤務を習得し、後、衞生部現役士官の補充に充つべき、曹長相當の陸軍武官。

みならひーじゅいくわん 見習獸醫官【名】各師團の騎兵・野砲兵・輜重兵隊に配屬し、四箇月以上、獸醫部士官の勤務を習得し、後、陸軍獸醫部士官の補充に充つべき曹長相當の陸軍武官。

みならひーしくわん 見習士官【名】中隊に屬して、六箇月以上、士官の勤務を習得し、後、各兵科の補充に充つべき、曹長級の陸軍武官。陸軍士官候補生にて、士官學校の修學を終へ、卒業試驗に及第して、歸隊せる者の中より、隊長これを命ず。

みならひーやくざいくわん 見習藥劑官【名】師團司令部所在地の歩兵隊に配屬し、該隊並びに衞戍病院にて、四箇月以上、衞生部士官の勤務を習得し、後、陸軍藥劑官の補充に充つべき、曹長相當の陸軍武官。

みならひーねん 見習員【名】一見習(二)を練習する人。二稅務管理局の職員として、酒類鑑定の事務の練習をなす者。

みーならふ 見習ふ【動四他】見て、それを練習す。見て覺ゆ。

みーならふ 見馴らふ・見習ふ【動四自】みなる(見馴る)に同じ。枕「いよいよあやしう鄙びたるかぎりにて、見ならはぬこちぞする」

みーならふ 見倣ふ【動四自】見て之に倣ふ。見て眞似す。一代女「上がたの藝子に見倣ひ」

みーなり 身形【名】衣類を著けたる姿。よそほひ。落窪「身なり、いと惡し」宇治「人の女(ムスメ)の、かたちよく、髮長く、色白く、身なりをかしげに、委らうたげなるを」

みなりーかいだう 實生海棠【名】「植」あかりんご(赤林檎)に同じ。

みーなる 身馴る【動下二自】著物著つけて、肌に馴る。

みーなる 水馴る【動下二自】常に水に浸る。拾遺「夜を寒み寢ざめて聞けばをしどりの妻ましくもみなるなるかな」

みーなる 見馴る【動下二自】屢見て、馴る。常に見て、珍しと思はず。みならふ。目馴る。

見馴れ、磯馴(ナ)る【句】『見馴れ』に「水馴れ」を言ひかけて、「磯馴る」と續けたるなるべし』前條に同じ。源氏「淺はかなるかたらひだに、見馴れそなれて別るる程は唯ならざめるを」

みーなるかね 已成金【名】陰曆にて「已」と「成る」と「金」との重なる日を、俗に實の成る金の義に取りなし、その日、金銀錢米を紙に包みて封じおき、斯くすれば、富むといふこと。

みなれーがほ 見馴顏【名】見馴れたるが如き有樣。千載「昔わが集めしものを思ひ出でて見なれ顏にもくる螢かな」

みなれーぎ 水馴木【名】水馴れたる木。相摸集「みなれ木に鹽燒く蜑の程よりは烟の高き物をこそ思へ」

みなれーぎ 見馴木【名】見馴れたる木。めなれぎ。清輔集「二葉より花咲くまでに見なれ木の四とせの春や霞みへだてん」

みなれーごろも 身馴衣【名】きなれごろも(著馴衣)に同じ。源氏「かたみに添へたまふべき身なれ衣も、しほ垂れたれば」

みなれーぎを 水馴棹【名】水馴れたる棹。拾遺「大井川くだす筏のみなれ棹見馴れぬ人も戀しかりけり」

みーなわ 水泡【名】『なは、領格の助辭のの轉』水のあわ。あわ。祝詞(祈年祭)「手肱(タナ)に水沫(ミナ)晝垂(カキ)れ」萬葉「この川にみなわ逆巻き行く水の事かへさずぞ思ひそめてし」

みーなわがくれ 水泡隱【名】水泡の下に隱るること。新六「みやま川こなたかなたの落合のみなわがくれにめぐる流木」

みなわた 背腸【名】せわた(背腸)に同じ。名義抄「背腸、ミナワタ」

みなゑりーぼね 皆彫骨【名】扇骨の一種。全部に彫刻を施したるものなるべし。增鏡「しやう木の皆ゑり骨、紅の紙に貼りて持ちたる用意、氣色いみじくもてつけて」

みーにく 見惡醜【形】「みにくし」の語幹。みにくしの意。感動句にいふ。紀「大醜、此云二鞅奈瀰儞句一」

みーにくし 見惡し【形一】一見るに難し。よく見えず。(見易しに對して)二見るに厭はし。美しからず。みぐるし。みっともなし。(見安しに對して)「醜し」萬「患百首「難波がた葦手に書ける玉づさを見にくしとてや返す白波」

みにくーやか 見惡やか・醜やか【貌】みにくきさま。源氏「例はことに思ひ出でぬはらからの、みにくやかなるも戀しく」

みーにげ 見逃・見遁【名】見て怖れて逃げ去ること。平家「軍には、見逃をだに淺ましき事にするに、平家の人人は聞逃したまへり」

みにーしふ 壬二集【名】〔書〕『壬生二品集の略』藤原家隆の歌集。一名、玉吟集。

みにすとる (蘭 Minister)【名】こうし(公使)に同じ。佐久間象山手簡「開港之儀難二相成一、ミニストル差置き候儀は、尤も以て難被二下一成二御許容一趣に相成りたく」

みにふーかんぢやう 未入勘定【名】〔商〕取引所にて、帳入(イリヤウ)値段の定まらぬ前、證據金を納付せずして行ふ取引の勘定、卽ち前日の後場(ゴバ)にて賣買・取引し、翌日の本場(ホンバ)又は本場以前に、その轉賣・買戻をなしたるものの勘定。

みーにく 御贄【名】にへ(贄)㊀の敬稱。

みにまむ (英 Minimum)【名】數量の小なる極度。極小。(まきしまむに對して)

みぬ 三野・美濃【名】〔地〕**みの**(美濃)の古稱。

みーぬきやう ものがたり 不見京物語【名】㊀京見物を爲さずして、爲したるやうに裝ひ語ること。**しらかはよふね**(白河夜船)參照。㊁みずして、見たるやうに裝ひ語ること。三河物語「そのあたりへも來ずして、いらざる事を仰せ候ふ。見ぬ京物語はせざるものに候ふ間」

みーぬく 見抜く【動四他】㊀みとほす(見通す)㊁に同じ。醒睡笑「神明は、人の心を見抜いて、何としたりと、えこらへまい」㊁見て、多くの中より抜き取る。選ぶ。

みーぬけ 身抜【名】己が身を、その物事より抜け出づるやうにすること。その物事との關係より離るること。脫退。壽の門松「身ぬけのならぬこの苦患(クヮン)」渡世身持談義「身ぬけのならぬ手形を書いて渡し」

みーぬま 水沼【名】水の湛へる沼。萬葉「大君は神にしませば水鳥のすだくみぬまを都となしつ」

みぬめ 敏馬【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡の邊の古の地名。次條參照。

みぬめ-じんじや 汝賣神社【名】攝津國武庫(ムコ)郡西灘(ナダ)字大村岩屋に鎭座せる神社。延喜式内の古社。この地は、即ち古の敏馬(ミヌメ)浦にて、神功皇后征韓の時、神託によりて奉祀す。戰に功ありし韓人を祀れるなるべしといひ、後世、新羅の使來朝の度毎に、この地にて、住吉の神酒を賜はる例なりき。

みーね 峰・峯・嶺【名】『ね(峯)に接頭語みの添ひたる語』㊀山の高き處。ね。山頂。和名「峯、三禰。山尖高處也」㊁物の高まれる處。空穗「耳のはた、鼻のみね」保元「目九つ差したる鏑(カブラ)の、……手先六寸、鏑(カブラ)を立てて、前一寸には、峯にも刃をぞ附けたりける」㊂刀劍の刃の背。むね。「刀背」盛衰記「太刀のみねにて、左の肩を、頸懸けて、したたかに打ちたりけるに」㊃烏帽子の頂部。㊄〔建〕隅木(スミキ)などの上方の稜(カド)。

みーね 御哭【名】ね(哭)の敬語。紀「哭、ミネシテ」同「泰哀於殯、カリモガリニミネタテマツル」

御哭泣く【句】「哭(ネ)泣く」の敬語。紀「哭之、ミネナキテ」

みね 美禰【名】〔地〕長門國五郡の一。郡役所を大田村に置く。

みね 三根【名】〔地〕肥前國の舊郡の一。明治二十九年、某肆(イチ)・養父(ヤブ)の二郡と合して、三養基(ミヤキ)郡となる。

みねーいも みね芋【名】〔植〕**つくねいも**(佛掌薯)に同じ。

みねーいり 峯入・峰入【名】『峯は大峯の略』昔、修驗者(シュゲンジヤ)が、役行者(エンノギヤウジヤ)の事跡に倣ひて、春と秋とに、大和國の大峯(オホミネ)卽ち御嶽(ミタケ)に分け入りしこと。修驗者に、天台宗聖護院(ゴシヤウ)派・眞言宗、三寶院派の二派ありて、前者は、春三月には、葛城(カヅラギ)より熊野を經て、大峰に入り、これを順(ジュン)の峯入、又は略して、順の峯といひ、秋八月には、大峯より入りて、熊野へ下り、これを逆(ギヤク)の峯入、又は逆峯(サカミネ)と呼びたり。後者は、七月に逆の峯入をなすのみにて、春には行はず。逆の峯入の時は、これを終へたる修驗者等、京都に出でて、家家に齋料(サイレウ)を乞ひ、檀那の家へは、前鬼木鉢(ギヤウバチ)・奈良硫黄などを贈る習ありたり。大峰入(オホミネイリ)。入峰(ニフブ)。謠曲「葛城」「この山の、度度峰入して通ひ馴れたる山路」芭蕉「峯入や一里後るる小山伏」

逆の峯入【句】前條を見よ。和漢三才圖會「役行者(エンノギヤウジヤ)、白雉三年十二月三十日、始入二葛城一大峯一、是爲二順峯入之始一也。翌年七月十六日復入二大峯一修行、是爲二逆峰入之始一也」

順の峯入【句】**みねいり**(峯入)を見よ。

みねいり-せんだち 峯入先達・峰入先達【名】せんだつ(先達)㊁に同じ。謠曲「葛城天狗」「これは、峰入先達の山伏にて候」

みねうち 峯打・峰打・刀背打【名】刀の峰にて打つこと。むねうち。

みねーうつり 峰移・峯移【名】一の峰より、他の峰へと移りゆくこと。夫木「いつのまに峰うつりして過ぎぬらん一村雨の夕立の空」

みねーかくぎう 峰貉丘【名】〔人〕醫師。名は逸、字は斑如、五翁と稱す。長門國の人。江戸に住む。醫を吉益(ヨシマス)東洞に學び、名聲、當時に比なし。經傳を好み、暇あれば子弟と共に講習す。文化年中歿す。

みねーかげ 峰陰・峯陰【名】峰に隱れてある地。やまかげ。夫木「谷深み峰陰近ぎすまひには暮れぬに暮るるここちこそすれ」

みねーかへで 峰楓樹・峯楓樹【名】〔植〕槭樹(カヘデ)科に屬する落葉喬木。我國中部及び北部の山地に自生し、葉は五裂乃至七裂せる心臟形。花は深山楓樹のよりやや大きく、且つその數も少く、五六個乃至十個づつ總狀花序をなして開き、小花梗は、長さ花の二三倍ありて、花瓣は、蓴片よりもやや長く、平滑なる雙翅果を結ぶ。ひめをがらばな。

みねーごえ 峰越・峯越【名】次條に同じ。千載「峰ごえに楢の葉づたひ音づれてやがて軒端にしぐれ來にけり」

みねーごし 峯越・峰越【名】峰の一方より他方へと移動すること。をごし。みねごえ。新六「峰ごしの谷の柚木の綱よわみあがらで捨てし名こそ惜しけれ」「見よ。峰越の田【句】**ちぐらがおき**(竹羅沖)を入峰(ニフブ)。謠曲「葛城」「この山の、度度峰入して通ひ馴れたる山路」芭蕉「峯入や一里後るる小山伏」

みねーずはう 峰蘇枋・峯蘇枋【名】〔植〕**いちぢ**(一位)に同じ。

みねーぞう 峰ぞう・峯ぞう【名】〔植〕前條「の訛。

みねーぢ 峰路・峯路【名】峯にある路。やまみち。やまぢ。夫木「筑波根のみねぢに見ゆるともしかな端山が裾に鹿や入るらん」

みねーつづき 峰續・峯續【名】峰の連なり續きてあること。又その峰。拾遺「吉野山消えせぬ雪と見えつるは峰つづき咲く櫻なりけり」

みねのやくし 峰藥師・峯藥師【名】三河國鳳來寺の本尊なる藥師如來。淨瑠璃十二段草子「その頃、三河國にはやらせたまふ峯の藥師へ參りつつ、さまざまの宿願をこそ申されたれ」

みねばり 峰榛【名】〔植〕夜叉附子(ヤシャブシ)の變種。北海道と本州北部及び中部の山地に自生し、殊に加賀國白山に多く、高さ一二丈に達す。葉は卵狀楕圓形にして、夜叉附子のに似たれど、支脈、夜叉附子にありては、十七八本なるに、二十本以上ある點に於て異なり。小鋸齒を具へ、小形單性の花、雌雄同株に開き、果實は球形の塊をなす。材は、堅硬なること槭樹(カヘデ)のに似、邊材は淡褐色、心材は淡赭黒色を呈し、床柱・器具・薪炭などに供す。がけしばり。はげしばり。ひめやしゃぶし。やましばり。みやまやしゃぶし。をのれかんば。

みねーべ 峰邊・峯邊【名】峰のあたり。萬葉「谷せばみ峰邊にはへる玉かづらはへてしあらば年に來ずとも」

みねまはりーぎやうじや 峰廻行者・峯廻行者【名】昔、山城國延曆寺にて、住職の衆徒(シュト)、門主に願ひ出で、毎早朝、密法を修(シュ)したる上、直ちに麻衣を著け、檜笠を被り、草鞋を穿ち、幣袋(ヌサブクロ)を頸に懸けて、自坊を出で、一日中に滿山三塔十六谷の佛堂・神祠を巡禮し、西塔(サイタフ)より横川(ヨカハ)に出づる途中、玉體杉の下なる玉體石といふ大石の上に坐し、京都の皇居に向ひて玉體を加持せしこと。斯くの如くにして、千日滿行(マンギヤウ)の者の中より、參內して、加持を命ぜらるる者もありきといふ。「の敬稱。

みーねんじゆ 御念誦【名】**ねんじゆ**(念誦)

みねーやま 峰山【名】〔地〕㊀丹後國中郡の町。郡中第一の都會。京都市より三十七里十二町、宮津市より五里八町。交通やや不便なれども、近傍は、丹後縮緬の產地にして、商業盛んなり。京極氏の舊藩地。㊁越後國峰岡の舊稱。〔三根山〕㊂明治の初年設置の縣の一。四年、丹後國舊峯山藩の地に立てしもの。同年京都府に入る。

みねをか 峰岡【名】〔地〕㊀越後國西蒲原(ニシカンバラ)郡の村。角田(カクダ)山の南。もと長岡藩の分家なる牧野氏の館ありし地。㊁明治初年設置の縣の一。にいがた(新潟)㊂参照。

みねをか-やま 峰岡山【名】〔地〕安房の北部、加茂川の南に沿ひ、東海岸より西海岸に連亙せる、丘陵性の山脈。最高一三三三尺。山中に牧場あり。徳川將軍吉宗の種馬を放ち養ひしに起る。

みの 蓑簑【名】㊀茅又は菅などの莖と葉とを編みて、インバネスの如き形に作りたる雨具。主として、農夫・漁夫などの用ふるもの。にの。和名「蓑、美能。雨衣也」㊁ひんみの(蓑裳)の略。㊂〔植〕みのごめ(蓑米)に同じ。

みの 蓑【名】㊀茅又は菅などの莖と葉とを編みて、インバネスの如き形に作りたる雨具。主として、農夫・漁夫などの用ふるもの。和名「蓑、美能。雨衣也」㊁ひんみの(蓑裳)の略。㊂〔植〕みのごめ(蓑米)に同じ。

蓑著て、火事場へ入る【句】ことさらに進んで、禍の中に身を投ずる譬。〔諺語〕

蓑造る人は、笠を著る【名】人は、何れも、他人の力によりて、社會に生存する者なり。〔諺語〕

蓑になり、笠になり【句】さまざまに手段を變へて庇ひ助くる譬。

みの 三幅・三布【名】『の幅(ノハバ)を見よ』㊀布の幅(ハバ)の、一幅(ヒトノ)を三枚合はせたもの。一代女「三布なる下紐、常の女より高く結び」㊁みのぶとん(三布蒲團)の略。太閤記「三布に寢て蚊帳ごしの蚊に食はれけん」

みの 美濃【名】〔地〕㊀東山道十三箇國の一。岐阜(ギフ)・大垣の二市と稻葉・羽島・海津(カイヅ)・養老・不破・揖斐(イビ)・安八(アンパチ)・本巣(モトス)・山縣(ヤマガタ)・武儀(ムギ)・郡上(グジョウ)・加茂・可兒(カニ)・土岐(トキ)・惠那(エナ)の十五郡とに分れ、今、岐阜縣の管轄に屬す。濃州。㊁〔地〕石見國六郡の一。郡役所を益田町に置く。㊂みのきぬ(美濃絹)の略。宇治「唐綾一をば、唐には、美濃五疋が程にぞ用ゐるなる」㊃みのがみ(美濃紙)の略。

美濃の廣絹【句】じゃうぼん(上品)㊁に同じ。夫木「山道や美濃のひろぎぬ織るはたの及びぐるしき繼もするかな」

みの 美嚢【名】〔地〕播磨國十三郡の一。郡役所を三木町に置く。

みの 御野【名】〔地〕備前國の舊郡の一。明治三十三年、津高郡と合して、津多郡となる。

みの 三野【名】〔地〕讃岐國の舊郡の一。明治三十二年、豐田郡と合して、三豐郡となる。「編」に同じ。

みの-あみ 蓑編・簑編【名】むしろあみ(筵編)

みの-いち 蓑市・簑市【名】昔、三月と十二月との十九日に、江戸淺草觀音の雷門(カミナリモン)前、馬道の邊に、近郷の農夫の蓑・笠を持ち來りて賣りし市。隔年三月十八日は、同觀音境内の三社(サンジャ)祭にて、その祭無き年は、三月のこの市、十八日に行はれたり。柳樽「蓑市ばかりは江戸をあてにせず」

みの-うち 身内【名】みうち。身體。俗つれづれ「夫婦となれる身體(シンタイ)いづれか此方の物にあらずや」

みの-うへ 身上【名】㊀我身の境遇。捨遺「しはすのつごもり頃に、身の上を歎きて」㊁我身の運命。「身の上判斷」

みのうへ-しらず 身上不知【名】己が運命を知らぬこと、又その人。諺「陰陽師(オンジャ)、身の上知らず」

みのうへ-ばなし 身上話【名】身の上の話。生寫朝顏日記「そちも、腹からの非人でもあるまい。身の上話も、又一興。話して聞かせ」

みの-うり 蓑賣・簑賣【名】蓑を賣ること、又その人。庭訓往來「笠張・蓑賣」

みのうへ-ばなし 身上話【名】身の上の話。生寫朝顏日記「そちも、腹からの非人でもあるまい。身の上話も、又一興。話して聞かせ」

みの-うり 蓑賣・簑賣【名】蓑を賣ること、又その人。庭訓往來「笠張・蓑賣」

みのうへ-しらず 身上不知【名】己が運命を知らぬこと、又その人。諺「陰陽師(オンジャ)、身の上知らず」

みのお 箕面【名】〔地〕㊀みのおさん(箕面山)の略。箕面の富(トミ)【句】徳川時代に、攝津國箕面の瀧安寺にて行ひし富籤。正月元旦より七日間、修正會(シュショウエ)を行ひ、その最後の日に、大福法會と名づけて、これを行ひ、二月三日にも、修二會といひて、行へり。參詣の者、木札を乞ひて、各、自己の姓名を記し、觀音堂に備へたる三箇の唐櫃に投入し、その唐櫃を回轉動搖したる後、寺僧、長柄の鉾にて、唐櫃の小孔より、木札を刺して捧げ出し、大鞏にて、第一の富、第二の富、第三の富と呼び、修正會祕法の守護札を授與す。當らざりし者は、守護札を買ひ受けたり。

みのお-さん 箕面山【名】〔地〕攝津國豐能(トヨノ)郡の東部にある山。箕面村に屬し、最高、一六五〇尺。大阪市の北約四里半、箕面有馬電氣鐵道の便あり。楓樹多く、瀑布あり。その谿谷は、明治三十一年以來公園となり、大阪府三大公園の第一に居る。古は箕尾山とも書き、又、訛りて、「みげもさん」ともいふ。

みのお-てら 箕面寺【名】攝津國箕面山にある瀧安寺。

みの-かいだう 美濃街道【名】〔地〕みのぢ(美濃路)に同じ。東海名所記「美濃海道には、近江路に入りて」

みの-かさ 蓑笠・簑笠【名】蓑と笠と。さりつ。萬葉「久方の雨の降る日を吾が門(カド)に蓑笠著ずて來たる人やたれ」

蓑笠はてんで持(モ)たず【句】各自の必要なる物は、各自に携帶すべし。〔諺語〕

蓑笠を著て、人の家に入らぬ者【句】『日本書紀の神代の卷上に「世諱著笠蓑一以入中他人屋內上、又諱著二束草一以入中他人家內上、有レ犯レ此者、債二解除一、此太古之遺法也」とあり』素盞男(スサノヲ)尊の、追放せられたまひて、諸神に宿を乞はれしに、皆拒絕したまひきといふ故事より出でて、蓑笠を著たるまま、他人の家に入るを忌みしこと。門(カド)に入りては、笠を脫ぐ。〔諺語〕

みの-がし 見遁・見逃【名】みのがすこと。丹波與作「少少の事は、見のがしにして置きめされっちや」

みの-がす 見遁す・見逃す【動四他】㊀見ながら、そのままに濟ます。みすつ。著聞「いみじく近まさりして、見のがすべくも覺えざりければ」㊁見ても咎めず。「よ。みゆるす。

みの-かは 身皮【句】み(身)の條下を見よ。

みの-がひ 蓑貝・簑貝【名】〔動〕蠣蛤類に屬する軟體動物。我國、中部以南の海に產し、殼は三角形をなし、長さ三寸七八分に至り、覆瓦狀の放射肋ありて、規則正しき鱗狀突起あり。表も裏も白色を呈す。

みの-かふ 箕甲【名】〔建〕日本建築の破風(ハフ)屋根にて、破風の軒附より屋根の地に移りゆく間の曲線體。

みの-がみ 美濃紙【名】日本紙の一種。厚くして、質强く、寸法は、普通縱九寸三分、橫一尺三寸三分、半紙に次ぎて、需要多く、四十八枚を一帖、十帖を一束、五束を一締、四締を一丸とす。初、美濃國武儀(ムギ)郡より漉き出だしものにて、今も同國の產、最も名あり。元來は純楮皮製の一種のみなりしが、今は改良紙及び混成紙の兩種も存すること、半紙に同じく、用途廣けれども、主としては、公衙往復文書・帳簿・障子用等なり。舊稱、書院紙・直紙(ジキシ)(ジキ)。今昔「美濃紙油」

みの-がみ-ばん 美濃紙判【名】美濃紙と同樣なる大さの紙面。みのばん。

みの-がめ 蓑龜・簑龜【名】㊀甲に、藻の、毛の如く著生したる石龜。俗間めでたきものとする風あり。㊁〔動〕

あをみがめ(青海龜)に同じ。

みの-き 三軒【名】〔建〕垂木(タルキ)を三重に取り附けたる軒。我國、現存のものは、紫宸殿・仁和寺の金堂(コンダウ)・興福寺の北圓堂・南圓堂などにて、甚だ稀なり。

みの-きかう 美濃紀行【名】〔書〕ふぢかはのき(藤川の記)に同じ。

みの-きぬ 美濃絹【名】美濃國より產出する絹。みの。

みの-ぐさ 蓑草・簑草・兩草【名】〔植〕みのごめ(茵草)に同じ。赤染衛門集「三笠山麓の露の露けきに刈り試みし野邊のみの草」

みの-ぐんだい 美濃郡代【名】徳川幕府の職制にて、郡代中、關東郡代の次席に位し、美濃・伊勢兩國の幕領を支配せしもの。定員二人、陣屋を美濃國羽栗(ハグリ)郡



(一)めがのみ

笠松町に、出張所を下川邊に置き、役料四百俵、手當金八百兩、米百二十人扶持、燒火間(ヤキビ)何候、屬僚に堤方役あり。元和三年始めて設置、元文二年一旦廢止し、延享三年、更に設置したり。美濃國奉行。上方郡代。

みのーけ 身毛【句】み(身)の條下を見よ。

みのーげ 蓑毛簑毛【名】㊀蓑に編みたる菅又は茅の、亂れ垂れたるもの。太平記「矢、二人の者どもが鎧に、蓑毛の如くにぞ立ちたりける」㊁白鷺の、脚より腰に向ひて生ずる、特殊の羽毛。主に繁殖時季に生じ、歐米にては、婦人の帽子の飾に用ふ。毛家子草「ゐる鷺のおのが蓑毛も片よりに岸の柳を春風ぞ吹く」

みのけーだつ 身毛立つ【動四自】寒さ又は怖ろしさなどのために、身の毛よだつ。一代男「生(ウ)まるけしき見るに、身の毛だつておそろしく」

みのーげんじ 美濃源氏【名】清和源氏の一派、美濃國に居りしもの。主なるものは、經基の子滿仲の後裔と、經基の子滿政の後裔との二流にして、滿仲の曾孫國房の後は、土岐郡に居りて、土岐・多治見・淺野・饗庭(アヘバ)・隱岐・蜂屋・原・土居(ヒ)・鷺脇(ワキ)・椙妻(ヒ)・船木・池田・外山(ヤマ)・明智(アケチ)の諸氏となり、今の華族淺野・米津(ヨネ)・植村・土井・土岐等の諸家は、その系統に屬す。國房の兄賴綱の後は、多くは攝津に住せしが、一部は美濃源氏となりて、山縣・飛驒瀨・上有智(カウ)・落合・清水・神野(カウ)等の諸氏となり、滿政の孫重實は、八島に居りて、八島冠者と稱し、重實の弟重長は、木田に住して、木田を姓とし、その一門に佐渡・相摸・小島・浦野・開田(カイ)・上有智・明智等あり、その族の、尾張國に移りしものに山田氏、三河國に移りしものに足助(アスケ)氏あり。

みのーこく 巳刻【名】**みのとき**(巳時)に同じ。太平記「火繩の鎧の、まだ巳の刻なるを、透間もなく召され」

みのこす 見殘す【動四他】全部の內、一部を見て、他を見ず。「代男」物縫の小宿、板橋のたはれ女も見殘さず」「同じ。

みのごひ 身拭【名】ゆかたびら(湯帷子)に同じ。

みのーごめ 蓑米・簑米・苞草【名】【植】禾本(クワホン)科に屬する一年生の草。水田・池沼に自生し、高さ一二尺餘に達し、葉は互生し、細長くして尖り、平行脈を有し、綠色の小花、小穗狀花序をなし、その花序、更に集まりて、複穗狀花序をなし、更に集まりて、圓錐花序を形づくりて開き、扁平なる穎果を結ぶ。種子は、炊ぎて、食用に供す。ゐったむぎ。はるむぎ。みのぐさ。みの。むぎからくさ。

みのーごろ 蓑五位・簑五位【名】【動】ささごろ(笹五位)に同じ。

みのーしま 簑島【名】【地】㊀紀伊國有田郡の西南部にある町。有田川の下流に跨りて、箕島・北湊・小豆島(ショウヅシマ)・新堂(シンドウ)・古江見・山地等より成り、もと宮崎村と呼びたり。和歌山市より七里十町。熊野街道に當り、蜜柑の栽培盛んなり。㊁筑前國筑紫(ツクシ)郡住吉村の一部。檜垣嫗家集「降らば降れ御笠の山の近ければ簑島まではさして行きてん」㊂豐前國京都(ミヤコ)郡今元村の海上五町にある島。東西三町、南北十町。風景すぐれ、全島、一村をなして、簑島村といひ、漸次陸地と接せんとする傾あり。夫木「村雨に濡るる袂のあやなきになほ簑島の名をやからまし」

みのーじま 美濃縞【名】美濃國羽島(ハシマ)郡笠松町・竹ヶ鼻町及びその附近より産出する、粗雜なる木綿又は絹綿交織(コウショク)の織物。

みのーじやうぼん 美濃上品【名】美濃國より産出せし絹布。くふしん。「美濃上品・尾張八丈」

みのーしろ 身代【名】㊀資買する人身に對する代、又その代物。謠曲(櫻川)「幼き人を買取りて候ふ。かの人申され候ふは、この文(フミ)と身の代とを、櫻の馬場の西にて、櫻子の母と尋ねて、慥かに屆けよと仰せ候ふ程に」㊁舟人の給料。

みのーしろ 蓑代・養代【名】**みのしろごろも**(蓑代衣)の略。狹衣「身のしろも我脫ぎ著せん返しつと想ひなわびそ天の羽衣」

みのーじろ 三幅白【名】三幅の白幕。

みのしろーきん 身代金【名】身の代の金。

みのしろーぎん 身代銀【名】前條に同じ。長門本忠臣藏「お二人が身代銀、南鐐で、これにあり」

みのしろーごろも 蓑代衣・簑代衣【名】蓑の代りに用ふる衣。雨の時著る物。みのしろ。後撰「降る雪のみのしろ衣うち著つつ春來にけりと驚かれぬる」

みのしろーごろも 身代衣【名】身代(シンダイ)の衣。謠曲(自然居士)「身代衣一重、三寶に供養し奉る」

みのーたき 身長【名】次條の轉訛。名義抄「身長、ミノタキ・ミノナガサ」

みのーたけ 身長【名】人の身體の高。せい。身長(シンチヤウ)。

みのち 水内【名】【地】信濃國の舊郡の一。明治十三年、分ちて上水內・下水內の二郡とす。平家「信濃國善光寺……、信濃國へ下り、水內の郡へ安置し奉りしより以來、星霜は五百八十餘歲」

みのーぢ 美濃路【名】美濃國の街道。

みのぢのり みのぢ海苔【名】【植】きやうのり(京紐)に同じ。

みのーちりめん 美濃縮緬【名】美濃國より産出する縮緬。皺(シボ)細かく、畦は濱縮緬ほどには著しからず、全體赤みを帶ぶ。會田井(イ)縮緬。

みのーつぼ 美濃壺【名】美濃國より産せし、一種の油壺。きりつぼ(切壺)參照。

みのーて 水手【名】**みなくち**(水口)を云ふ。「上總國の方言」

みのーて 箕手【名】㊀**みのてがた**(箕手形)に同じ。大鏡「太鼓鉦を、箕の手に立て」㊁**てんぷ**(轉風)に同じ。

みのてなり 箕手形【名】左右に出張りたる形。みのて。狂言(鋼鼓炮碌)「繁昌の市は箕の手なりに立つと申すが、あれからこれへ、これからあれへ、さても、さてもよい場でござる」

みのーとき 巳時【名】㊀み(巳)㊁に同じ。巳の刻。枕「曉に急ぎしかど、……巳の時ばかりになりにけり」㊁書間の中程に當る午の刻より早き意にいふ。**なつさかり**(七下)參照』物の新しく、又は事の盛(サカ)の狀態なること。巳の刻。盛衰記「鎧は、緋縅に金物を打ち、未だ巳の時とぞ見えし」甲陽軍鑑「信玄公、御弓矢巳の時にてまします故、かやうに強き敵討なり」

みのーに 巳の時に蓑る雨に傘を離すな【句】雨の巳の時に霽るるは、やがて又降り出すべしといふ俗說。〔諺語〕

みのーに 蓑煮【名】卵を割り落して、散らぬやうにしたる吸物。

みのーのーいへづと 美濃家苞【名】【書】しんこきんしふみのいへづと(新古今集美濃家苞)の略。

みのーのーおやま 美濃御山【名】【地】美濃國南宮(ナングウ)山の異稱。伊勢集「思ひ出づみののお山の一つ松契りし心今も忘れず」

みののくにぶぎやう 美濃國奉行【名】みのぐんだい(美濃郡代)に同じ。

みのーのーなかみち 美濃中道【名】美濃國不破と野上(ノガミ)との間に在る道。近江國より美濃・尾張に出づる本道なり。謠曲(養老)「美濃の道中、程も無く養老の瀧に著きにけり」

みのーは 美濃派【名】【文】『各務支考』は美濃國の人なるよりいふ』俳諧の流派の一。松尾芭蕉の門人各務(カガミ)支考を祖とす。芭蕉の歿後、支考は、自ら師風を正しく傳ふるものなりと稱して、諸國に行脚して、斯風を宣傳せしより、廣く俳壇を風靡せり。支考、庵號を獅子庵といひしより、又、獅子門ともいへり。美濃流。

みのーは 蓑苞【名】【植】そばな(蓑苞)に同じ。和名「蓑苞、佐木久佐奈。一云、美乃波」

みのーばこ 蓑箱・簑箱【名】昔、大名の行列に、蓑を納れて携へし箱。御幸「蓑箱も十日十日に蓋が開き」

みのーはちぢやう 美濃八丈【名】**はちぢやう**(八丈)㊁を見よ。新猿樂記「美濃八丈」

みのーばり 蓑貼・簑貼【名】『下部の貼りてあらぬ形、蓑に似たるよりいふ』襖・屏

風などの下貼(ハリ)をするに、紙の上部と中部とのみに、糊を附けて貼ること。

みの-ばん 美濃判【名】**みのがみばん**(美濃紙判)の略。

みの-ひ 巳日【名】十二支を、順次に、日日に配當したるもの、巳に當る日。榮花「冬の日も、はかなく暮れて、大嘗會のいそぎせさせたまふ。……、辰の日の樂(ガク)の破(ハ)の歌、……、巳の日の樂の破、……同じ日の樂の急の歌」

巳の日の節會(セチエ)【句】大嘗祭の時、巳の日に行ふ、主基(キ)の節會。天皇に御膳を供へ、臣下にも賜饌を配り、主基の國司より多米都物(タメツモノ)・鮮味等を獻じ、又、插頭(カザ)・和琴(ワゴン)等を獻じ、標山(ウハヤマ)を立てなどす。この節會了りたる後、清暑堂の御神樂に臨御あり。又この前日、卽ち辰の日には、悠紀(キ)の節會行はれ、その式、巳の日のと同樣なれど、天皇に御膳と同時に白酒(シロ)・黑酒(キ)を供ふる事、及び插頭・和琴等を獻じたる後、壽詞(ヨゴト)の奏ある事、この日に異なり。

巳の日の道者(ダウシヤ)【名】辨天の賽日なる巳の日に、辨天堂に參詣する者。其角「鰹荷のあとは巳の日の道者かな」

巳の日の祓(ハラ)【句】次條に同じ。諸曲「松風」「心、狂氣になれごろもの巳の日の祓や木綿四手(シデ)の神の助も」

巳の日の祓(ハラ)【句】昔、三月の上の巳又は中の巳の日に、人形(ヒトガタ)を作りて、身體を撫で、氣息を吹きかけ、災厄をその人形に移せりとして、これを河海に流ししこと。天皇のは、前日、陰陽頭(オンヤウノカミ)より、人形を獻り、女房これに衣を著せて、一夜、御枕頭に置き、翌日巳の刻に、式の如くしたまひたる上、內侍に賜ひ、內侍これを臺盤所の妻戶より出すを、殿上の侍臣、受けて、鴨河原に出でて流し棄てたり。上の巳の日なると中の巳の日なるとによりて、上巳(カミノミ)の祓、中巳(ナカノミ)の祓の名あり。大鏡「三月上の巳の日の御祓に、やがて逍遙したまふとて」

みの-び 蓑火・簑火【名】**みのむし**(蓑蟲)㊀を見よ。

みのぶ 身延【名】〔地〕㊀**みのぶさん**(身延山)の略。㊁謠曲の一。日蓮上人、身延山にて、法華を修(シュ)せらるるに、日毎に、時を違へず詣で來る女性(ニョシヤウ)の亡者(モウジヤ)あり、值遇の緣重なりて、早く苦患(クゲン)を免れ、正覺(シヤウガク)に入らんとし、妙經の功力(クリキ)を感じて、歡喜する事を作れるもの。

みの-ぶ 見延ぶ【動下二他】遠く視線を送ること。源氏「見返りたるまみ、いたう見延べたれど、目皮(メカハ)はいたく黑み陷りて」「風。

みの-ふう 美濃風【名】〔文〕美濃派の俳風。

みのぶ-さん 身延山【名】㊀〔地〕甲斐國南巨摩(コマ)郡にある山。富士川の西岸、七面山の東に連なる。高さ三七八八尺。その南麓に、日蓮宗の總本山久遠(クヲン)寺あり。㊁**くおんじ**(久遠寺)の別稱。

みの-ぶとん 三幅蒲團・三布蒲團【名】布三幅(ミハバ)を縫ひ合はせて仕立てたる蒲團。みの。

みのふ-の-うら 蓑生浦・簑生浦【名】〔地〕**みのふはま**(蓑生濱)に同じ。馬內侍「うかりけるみのふの浦のうつせ貝むなしき名のみ立つは聞きやいかに」

みのふ-は 身延派【名】〔佛〕**にちれんしゅう**(日蓮宗)㊁を見よ。

みのふ-はま 蓑生濱・簑生濱【名】〔地〕筑前國宗像(ムナカタ)郡下西鄕(シモガタ)村の海濱。謠抄「みのふ濱何かは波のよるを待つ晝こそ貝の色は見えけれ」

みのぶ-まうで 身延詣【名】次條に同じ。

みのぶ-まゐり 身延參【名】甲斐國の身延山久遠(クヲン)寺に參詣すること。

みの-ぶろしき 三幅風呂敷【名】布三幅(ミハバ)を縫ひ合はせて作りたる風呂敷。

みの-ぼし 美濃干【名】次條の略。

みのぼし-だいこん 美濃干大根【名】『美濃國邊より多く產出するによりていふ』**きりぼしだいこん**(切乾大根)に同じ。

みのほど-しらず 身程不知【名】身の分際を辨へぬこと、又その人。

みの-ぼら 蓑法螺・簑法螺【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。我國、南海に產し、殼は、法螺貝のに似て、長さ二三寸に至り、表面に、皮膚突起より成る長き粗毛狀の附屬物の簇生せるさま、恰も蓑を著けたるが如し。

みの-ぼり 美濃彫【名】美濃國大垣の彫金家光曉・光伸・光友・昌安・吉長などの製作物。地厚くして、彫方深く、殊に、龍の彫方は、目深くくぼみて、眼小くして、美濃龍の名あり。

みの-ぼろ 蓑ぼろ・簑ぼろ【名】〔植〕禾本(カホン)科に屬する多年生の草。山野に自生し、又、牧草として栽培す。高さ一尺餘に達し、葉は細長くして、平行脈を有し、銀色の花、小穗狀花序をなし、その花序、又、集まりて、穗狀の長き圓錐花序をなして開く。

みのぼろ-すげ 蓑ぼろ菅・簑ぼろ菅【名】〔植〕莎草(サウ)科に屬する多年生の草。我國、北部の山地に自生し、高さ七八寸に達し、葉は叢生し、細長くして尖り、茶褐色の花、小穗狀花序をなして開く。

みの-まい 美濃米【名】美濃國より產出する米。隣國の江洲(ゴウシウ)米と共に有名なり。「見よ。

みの-まはり 身廻【句】**み**(身)の條下を

みの-まんざい 美濃萬歲【名】**みかはまんざい**(三河萬歲)を見よ。

みの-むし 蓑蟲・簑蟲【名】〔動〕㊀鱗翅類に屬する昆蟲。幼蟲は、枯葉・樹枝等を嚙み切り、絹絲にて巢となし、その中に棲息す。種類多く、我國には、その六種を產す。最も普通なるは、茶蓑蟲(チヤミノ)にして、一年に一回發生し、七月、孵化せる幼蟲は、巢を去りて、葉に移り、始めて葉を嚙み切りて、小片とし、集めて巢に造りて、これに棲み、巢を負ひながら移行して、食を取り、靜止する時は、絲にて、巢を枝に留む。十二月頃以後は、巢を枝に固著せしまま冬眠に入り、翌春、新芽萌發の頃より、再び活動して、食物を攝取し、六月下旬老熟し、再び巢を枝に固著して、蛹(サナギ)となり、次きて羽化す。何れの種類のも、雌雄、甚しく形を異にし、雄は趨ありて、よく飛翔すれども、雌は、これを缺きて、長き一個の袋狀をなし、腹部には卵子充滿し、產卵三千の多きに達すれども、幼時又は冬期に於て死する者も亦多し。この蟲鳴くとの說あれども、誤なりといふ。かのはは㊁とり。熱「蓑蟲、いとあはれなり」㊁北越地方にて、暗夜、雨の甚しき時に、農夫が、蓑を著て、田間を步く際、その蓑より落つる雫の、火に化し、遂に全身火に圍まるるに至り、而も少しも熱さを感ぜずといふもの。近江國琵琶湖邊にも、同樣の說ありて、蓑火と呼べり。俗には、狐の所爲なりといへども、實は燐火の一種ならんとも、地氣の作用ならんともいふ。

みの-も 水面【名】『**のも**』は、領格の助辭**の**の轉』水のおもて。水の表面。水面(メナモ)。散木「濁なきみのもに月の宿らずばいかであさぢの數を知らまし」

みのも 簑面【名】〔地〕次條の略。

みのも-さん 簑面山【名】〔地〕**みのおさん**(箕面山)を見よ。

みの-やき 美濃燒【名】美濃國土岐(トキ)・惠那(エナ)・可兒(カニ)の三郡地方より產出する陶磁器。文化元年、大阪の陶商西川茂平の、肥前國の磁器を同地に齎して、作りしに始まる。德川時代には、製品を名古屋に出して、四方に輸送する制なりしため、その名顯れざりしが、今日にては、土岐郡の多治見(タジミ)燒ともいふ。たちみやき。

みの-やま 美濃山【名】〔地〕㊀美濃國の山。催馬樂(美濃山)「みの山にしじに生ひたる玉がしは豐の明(アカ)にあふが樂しさやあふが樂しさや」㊁催馬樂(サイバラ)の呂の曲の一。〔蓑山〕榮花「大夫、かはらけ取りて、そなたに出でたまへり。蓑山うたひて、御遊さまばかりなれど」

みの-のり 實【名】實のなること、又、實のなる多少。結實。

みの-のり 御法【名】**のり**(法)㊂の敬稱。記「能仁之教、ホトケノミノリ」榮花「三十講行はせたまふ。……、遣水の音さへ流れあ

ひて、よろづに御法を説くと聞えなさる」

御法の師【句】〔佛〕「法(ホフ)の師」の敬稱。續世繼「御法の師」講曲當麻「十方の衆生(シュジャウ)を、唯西方(サイ)に迎へ行く御法の舟の水馴棹(サヲナレ)」

みーのり 已糊【名】巳の日に糊仕事を爲すこと。俗に、身に糊をするとの意に取りなして忌む。「苔、コケ・ミノリ」

みーのり【名】〔植〕**こけ**(苔)に同じ。名義抄

みのーりう 美濃流【名】〔文〕**みのは**(美濃派)に同じ。

みのりよう 美濃龍【名】**みのぼり**(美濃彫)を見よ。

みーのる 實る【動四自】草木の實成る。實を結ぶ。結實す。紀「五穀不レ登、タナツモノミノラズ」

實る稻田は頭垂る【句】「菩薩は、實る程頭垂る」に同じ。〔諺語〕

實る程、頭を下げる【句】前條に同じ。〔諺語〕

みのるか(英 Minorca)【名】〔動〕雞の一品種。地中海のミノルカ島(西班牙領)の原産なりといふ。產卵用のもの。體質强健にして、鏃の成育佳良、卓熟形やや短大、頸短く、胴太く、脚短く、冠肥ひ、顏面赤く、耳朶白く、肉髯大きく、卵は、雞の種類中、最も大にして、一箇の重量十六匁乃至二十二匁ほどあり。

みーのわた 三膓【名】**さんせう**(三膓)に同じ。和名「三膓、美乃和太。孤立爲二中濱之府一」

みのを 簑尾【名】〔地〕**みのをさん**(箕尾山)の略。山家「雨しのぐみのをの里の柴垣に巢立ちはじむる蕊の聲」

みのを 水尾【名】**みのをのみかど**(水尾帝)の略。伊勢「水尾の御時なるべし」

みのをーさん 簑尾山【名】〔地〕**みのおさん**(箕面山)を見よ。

みのをーのーみかど 水尾帝【名】〔人〕『御陵の所在地によりて申す』**せいわてんわう**(清和天皇)に同じ。

みのをーのーやま 水尾山【名】〔地〕山城國葛野(カヅノ)郡嵯峨村大字水尾にある山。みづのをやま。

みのをのやまのみささぎ 水尾山陵【名】清和天皇の御陵。山城國葛野(カヅノ)郡嵯峨村大字水尾の西清和山の半腹に在り。水の尾は、天皇讓位の後、居りたまひし地なり。

みーば 見場【名】外部より見たる有樣。外觀。みえ。

みばうーじん 未亡人【名】**びばうじん**(未亡人)に同じ。

みーばえ 實生【名】草木の、種子より萌え出でて生長すること、又、その草木。みおひ。みしやう。みうゑ。芭蕉「この松の實ばえせし代や神の秋」「みだて。

みーばえ 見映【名】見て、映(エ)あること。源氏「御墓は、道の草しげくなりて」

みーはか 御墓【名】**はか**(墓)の敬稱。

みーはかす 御佩刀【名】『みはかす(御佩かす)の居名詞』貴人の佩刀。みはかせ。はかし。おんはかせ。〔古語〕紀「御刀、此云二彌波迦志一」

みはかしを 御佩刀を【枕】『をは感嘆の助辭なるべしといふ』御佩刀よ、その佩きたまへる劍といふ意にて、**つるぎ**(劍)にかけていふ。萬葉「みはかしをつるぎの池の蓮葉に」

みーはかす 御佩かす【動四他】**はかす**(佩かす)に同じ。〔古語〕紀「所レ帶十握劍、ミハカセルトツカツルギ」

みーはかせ 御佩刀【名】■**みはかし**(御佩刀)の轉。謠曲(正尊)「御佩刀を取つて、靜靜と、中門の廊に出でたまひ」□儀式用に作れる、一種の太刀。

みはかーやま 御墓山【名】〔地〕河内國石川郡にある山。玉葉「消えにしをうしとばかりはみはか山まづ立つ雲のゆくへ知らせよ」

みーはからひ 見計【名】見はからふこと。みつもり。

みーはからふ 見計らふ【動四他】見て、程よくす。みつくろふ。みつもる。斟酌す。

みーはかる 見計る【動四他】**みはからふ**(見計らふ)に同じ。落葉「そこたちの見はかりてしたまへるならん」

みーはぐる 見はぐる【動四他】**みうしなふ**(見失ふ)に同じ。

「奇術、ミハケ」

みーはけ【名】怪しき術。奇術。〔古語〕紀

みーはし 御階【名】**はし**(階)の敬稱。增鏡「御階の左右のそばより」增鏡「昔の躬恒が、御はしのもとに召されて」

御階の櫻【句】『紫宸殿の南階の傍にあり』「左近(サコ)の櫻」の敬稱。孝明天皇「戈とりて守れ宮人九重のみはしの櫻風そよぐなり」

御階の橘【句】『紫宸殿の南階の傍にあり』「右近(ユコ)の橘」に同じ。

御階の花【句】「御階の櫻」に同じ。拾遺「雲の上近きまもりに立ち馴れしみはしの花の陰ぞ戀しき」

御階の左【句】左近衞大將の異稱。

御階の間(ま)【句】「階隱(ハシヂ)の間」の敬稱。增鏡「大臣上達部(カンダチベ)、皆、うへのきぬにて、左右に分れて、御階の間の高欄につきたまふ」

御階の右【句】右近衞大將の異稱。藤原實俊「仕へ來てみはしの右も近づきぬ花橘よ心して待て」

みーはし 御橋・三橋【名】東京市下谷區廣小路通なる忍川(オシカハ)に架れる橋。もと、德川時代に、將軍が、上野寬永寺參詣の時の通路に當りしより、御橋と呼びしを、明治初年、御橋の稱を嫌ひ、同處に三箇の橋を並架して、三橋の名に改め、附近に三橋町の名もあるに至れり。三枚橋。

みーはじめ 見始【名】始めて見ること。見馴れぬこと。根岡志具佐「一派開基以來、かかる器量は見はじめなれば」

見始の見納【句】始めて見て、それが、又、やがて最後となること。冥途の飛脚「あの縞(シマ)の肩衣が、孫右衞門樣か、……見始の見納、私は嫁で御座んする」

みーはしーやま 三階山【名】〔地〕石見國那賀郡にある山。濱田町の南。麓を三階村といふ。夫木「渡るとも盡くさじくもなし君が世の御はしの山のうごきなければ」

みーはた 御旗【名】**はた**(旗)の敬稱。

みーはつ 未發【名】■未だ發見せざること。□未だ發生せぬこと。

みーはつ 見果つ【動下二他】■終まで見る。古今「命にもまさりて惜しくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり」源氏「昔も、今も、物念じしてのどかなる人こそ、さいはひは見はてたまふなれ」□**みそむ**(見初む)□を見よ』一生妻として連れ添ふ。源氏「世の人にも似ぬ御有樣を見奉り果てんとこそは、ここら思ひ靜めつつ過しつるに」

みーはづす 見外す【動四他】誤りて見ず。見おとす。見そこなふ。みはぐる。太平記「五百の阿羅漢に供を引きけるが、いかがして見はづしたりけん、梨軍支一人には引かざりけり」

みーばなし 見放【名】見たるままに捨ておくこと。みつばなし。

みーはなす 見放す【動四他】**みすつ**(見捨つ)□に同じ。落葉「いかが見はなしはべらん」一代男「募れば、義理をつめて見はなし」

みーはなだ 水縹【名】**みづいろ**(水色)に同じ。萬葉「水縹のたへの帶をひき帶なすから帶にとらし」

みーはなつ 見放つ【動四他】**みはなす**(見放す)に同じ。源氏「親添ひて下りたまふ例も、ことになけれど、いと見放ちがたき御有樣なるに」太平記「一族他門の兵ども、誰か見放つもの候ふべき」

みーはば 身幅・身巾【名】■身體の幅。□世人に對する面目。肩身(カタミ)。薩摩歌「うからかとながらへ果つる身幅なし」

みーはん 未判【名】■未だわかれぬこと。□未だ批判せぬこと。

みーはやす 見榮す【動四他】見て、もてはやす。見て、その物事に榮(エ)あるやうにす。古今「山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさん」源氏「花紅葉の色をも、香をも同じ心に見はやしたまひしにこそ慰む事も多かりけれ」

みーはら 三原【名】■〔地〕淡路國二郡の一。郡役所を市(イチ)村に置く。□〔地〕『昔は、ミワラと發音せり』備後國御調(ミツギ)郡の西南部にある町。河田川の河口に

臨み、山陽道及び鐵道山陽本線の要驛に當り、商業盛んなり。㊁**みはらもの**（三原物）の略。今宮心中「衣類の外は、三原の合口（クチ）、時代の印籠」

みはら 御原【名】〔地〕筑後國の舊郡の一。明治二十九年、御井（ミヰ）・山本二郡と合して、三井（ミヰ）郡となる。

みはら-ざけ 御原酒【名】備後國三原町にて醸造する酒。德川時代には、國主淺野侯の獻上品たりき。

みはらし 見晴【名】見晴すこと、又、見晴したる感じ。ながめ。

みはらじやう 三原城【名】備後國三原町の東方にありし城。天正中、小早川隆景の創築に係る。三原灣に臨み、後方に櫻山一帶の丘を負ひ、要害の地にして、文祿の役、豐臣秀吉、この地に留まること、十餘日に及べり。文祿四年以後、隆景これに居り、慶長三年卒し、後、福島正則の屬城となり、淺野氏領國の後は、同氏の一族、城代となりて、明治維新に至れり。

みはらす 見晴す【動四他】廣く遠く一目に見る。みはらかす。

みはらちゆうなごん 三原中納言【名】〔人〕『官、中納言に至り、備後國三原城に隱居せしよりいふ』**こにやかはたかかげ**（小早川隆景）の異稱。

みはらひ 未拂【名】拂ふべき金を未だ拂はぬこと、又、その金。

みはらひ-かんぢやう 未拂勘定【名】簿記にて、未決算勘定㊁の一。後日支拂はるべきことは確かなれども、未だ支拂を受けぬものを整理すること。

みはらひ-きん 未拂金【名】未だ支拂はぬ金、又、未だ支拂を受けぬ金。

みはらひこみ 未拂込【名】未だ拂ひ込まぬこと。

みはらひこみ-かぶきん 未拂込株金【名】未拂込の株金、又簿記の勘定科目の一。未拂込の株金を整理すること。

みはらひこみ-しほん 未拂込資本【名】簿記にて、未拂込の資本を整理すること。

みはらひこみ-はいたらぎん 未拂込配當金【名】簿記の勘定科目の一。前期の配當金にして、未拂なるを整理すること。

みはらひ-りし 未拂利子【名】簿記の勘定科目の一。後日支拂はるべきことは確かなれども、未だ支拂を受けぬ利子を整理すること。

みはら-ふぐ 三原河豚【名】〔動〕**あかめよぐ**（赤目河豚）に同じ。

みはら-もの 三原物【名】備後國三原に住みし刀工正家一派の製作品。鎬（シノギ）高く、反（ゾリ）ありて、柾目（マサメ）多き等、その特色なり。

みはら-やま 三原山【名】㊀〔地〕伊豆七島の一なる大島にある活火山。大島火山の火口丘にして、その舊火口の中央より、やや南方に偏在す。海拔二四八二尺。南側高く、西及び北は低し。㊁伊豆國八丈島にある二座の休火山の一。島の東南部に峙ち、海拔二三一三尺。

みはらゆふなぎ 三原夕凪【名】備後國三原町地方の風氣の甚だ溫和にして、朝は風ありても、夕方は必ず風ぐこと。

みはり 見張【名】見張ること、又その人、又その場所。監守。

みはり 瞭【名】馬の目の上の隆き所。

みはりじよ 見張所【名】見張をなす所。ばんしよ。

みはり-せん 見張船【名】見張をなす船。

みはり-にん 見張人【名】見張をなす人。監視人。

みみり-ばん 見張番【名】**みはり**（見張）に同じ。

みはる 三春【名】㊀〔地〕磐城國田村郡にある町。郡の首邑。磐城街道の一驛。郡山より約三里、福島より二里二十町。三春駒の市場として有名なり。秋田氏の舊藩地。㊁明治の初年設置の縣の一。**ふくしま**（福島）〔一〕參照。

みはる 見張【名】見張ること。【動四他】㊀「目を見張る」を見よ。㊁遍く目を配りて番をす。監視す。監守す。

みはるかす 見霽かす【動四他】遙かに見渡す。みはらす。〔古語〕視詞（祈年祭）「皇神（スメ）の見霽かします四方の國は」

みはるごま 三春駒【名】磐城國三春町附近の產馬の、三春町を市場として賣り出すもの。

みはるじやう 三春城【名】磐城國三春町にありし城。田村利顯永正中、ここに移り、相傳へて、清顯に至り、伊達氏の附庸となる。關ケ原の役後、會津城主蒲生秀行・同忠郷の領となり、屬將來りて鎭せしが、寬永四年加藤民部少輔封ぜられ、翌年松平石見守長綱、二本松より來りて交替し、正保二年、秋田河內守俊秀、又、これに代り、爾來世襲して、明治維新に至る。

みはれ 身晴【名】確かに罪無しとわかること。晴天白日の身となること。諸國咄「只今まで憚か十兩見えしに、めいよの事ぞかし、とかくは銘銘の身晴と、上座から帶を解けば」

みび 御火【名】神前などに燈す火。散木「奇歌」「韓神（カラカミ）の袖振る程は殿もりの伴（モ）のみやつこ御火白くたけ」

みびいき 身贔屓【名】己に關係ある人を、特に贔屓すること。鳩翁道話「滅多に身びいき・身勝手にこじつけ」

みひたき 御火炬【名】古、神祇官に屬して、火たきに從事せし職。

みびらき 身開【名】わが身のいひひらき。後暗（ウシロ）からぬ事を、自ら證明すること。雪女五枚羽子板「折紙道具失せたりと家來は、面面身開に、上下騷いで共吟味」

みひらき-やま 三開山【名】〔地〕但馬國城崎（キ）郡の東南部にある山。形、富士山に似たるより、但馬富士ともいふ。

みひらく 見開く【動四他】㊀目を開きて見る。㊁見出す。發見す。

みひらく 見開く【動四他】**みぬく**（見拔く）に同じ。若鳳翁十八歲の正月二日の曙の夢と、限の命、世間の義理ゆゑに捨つる若衆ぞと、先を見開きての御物語、ありありと聞きしに」

みふ 御封【名】**ふ**（封）の敬稱。源氏「みふの物ども、國國の御庄（ミサ）・御牧（ミマ）などより奉る物ども」同「みふ加はり、官（ツカ）・かうぶりなど、皆添ひたまふ」

みふ 未敷【名】〔佛〕未だ開かぬこと。未發。「未敷の蓮花（ケ）」

みふ 三符【名】筵などの三編（アミ）ほどの廣さ。**ふ**（符）參照。袖中抄「陸奥（ムツ）の十ふの菅ごも七ふには君をしなして三ふに我居ん」

みふ 乳部【名】『御產（ウブ）の略』貴人の產殿に奉仕し、その子女の養育に從事する人。〔古語〕起「乳部、此云二美夫一」

乳部の民【句】**みふべ**（壬生部）に同じ。起「悉聚二上宮乳部之民一」

みふ 壬生【名】㊀〔地〕古の京都の、宮城の美福門の前に通ぜし南北の通路。今、葛野（カドノ）郡朱雀野村の大字に、その名殘れり。㊁姓氏の一。園（ソノ）氏の支族。舊新家の一。園氏第十四代基音の末子基起を祖とす。初、葉川と呼びしが、第四代後平の時より、始めて壬生と號す。子孫相繼ぎ、明治維新後、華族に列せられ、伯爵を授けらる。㊂をつき（小槻）を見よ。㊃〔地〕『小槻氏の支族胤業の、この地に住みしに因るといふ』下野國下都賀（シモツケ）郡の町。宇都宮市より四里半弱。鳥居氏の舊藩地。㊄〔地〕明治の初年設置の縣の一。

壬生の狂言【句】**みぶきやうげん**（壬生狂言）に同じ。壬生大念佛「壬生の狂言を覺えた衆」

壬生の民【句】「乳部の民」に同じ。

壬生の菜【句】〔植〕**みぶな**（壬生菜）に同じ。膝栗毛「東寺の蕪、壬生の菜は、名物選に鼻高し」

壬生の假面【句】壬生狂言の假面。凡董「春雨や鼻うちぐぼし壬生の假面」

みぶ-きやうげん 壬生狂言【名】京都西郊の壬生寺にて、毎年四月二十一日より十四日間（昔は陰曆三月十五日より十日間）、堂前の舞臺にて催す狂言。言語を用ひず、身振のみにて、よく人をして捧腹せしむ。囃子は鐲口（クチ）・太鼓・笛の三種、曲目は、古くは「桶取り」「花盜人」「紅葉狩」「狐釣」「猿」「愛宕詣」「賴光山入」「盲川渡」「節分」「鵺」「閻魔角力」「餓鬼責」「猿引」

「賽の河原」「會我」「性惡坊主」「羅生門」「棒結」「熊坂」「花見」「男伊達」「棒振」「葵の上」「湯立」「燔烙割」の二十五番なりしが、今は四十餘番に達せりといふ。衣裳は、肩衣(カタギヌ)裝束の古風にて、今は、その道の者、特にこれを演ずれども、昔は、近郷の百姓、これを行ひ、蒙昧の輩を誘ひて、菩提の道に入らしむる方便にとて創めたりといふ。又、狂言に用ひし造花・焙烙の破片などを、治病に効ありとし、囃子の鰐口の音を小兒に聞かしむれば、夏痩を免る等の迷信あり。浮世風呂「御前(オマヘ)の形(ナリ)は、壬生狂言の御助踊(オスケヲドリ)と來てゐる」

みぶくわんむ 壬生官務【名】をづき(小槻)及びくわんむ(官務)(二)を見よ。

みぶさた 身不沙汰【名】身の行に氣を附けぬこと。その人の不注意。新可笑記「心おぼえの五百兩包一つ紛失して、……無いに極まり、役人迷惑、その身ぶさたよりおこりぬ」

みぶし 身節【名】筋肉と關節と、又は身體の關節。心中及氷の朔日「お心の鐵槌が、身ぶしにこたへ、染みわたり」

みぶす 見伏す【動下二他】**みさだ**(見定む)に同じ。宇治「ことにもあらずと、かへすがへす思ひ見ぶせて、又、暮るれば、よくよくしたため入らんとするに」

みぶしやう 壬生城【名】下野國壬生町の西部にありし城。壬生嵐業の創築に係り、その後裔義雄に至りて、北條氏に從ひ、小田原陣の時病歿し、家、遂に斷絶す。慶長六年日根野吉明、同十一年阿部忠秋、寛永十六年三浦正次、同安次、同直次、元祿四年松平輝貞、同八年加藤明英、同左膳、正德二年鳥居忠英と相代り、その後は、鳥居氏の子孫相傳へて、明治維新に及べり。

みぶた 御簡【名】日給(ヒノキフ)の簡。

みぶたに 御簡に附く【句】「簡に附く」を見よ。

みぶたを 御簡を削る【句】「簡を削る」を見よ。源氏「終にみぶた削られて」

みぶたのこ 宮の御簡【句】「女房(ニョウバウ)の簡」の敬稱。榮花「御門(ミカド)の御乳母の紀の三位の女、源内侍のすけをはじめ、さかり少將などや、さるべき人人は、皆、宮のみぶたに附きたるども」

みぶだいなごん 壬生大納言【名】〔人〕**ひのすけとも**(日野資朝)の異稱。

みぶだいねんぶつ 壬生大念佛【名】(一)**みぶねんぶつ**(壬生念佛)に同じ。(二)近松門左衞門作の淨瑠璃。備後國の國主高遠(カタトホ)某の御家騷動を敍し、その一部の背景として、京都の壬生狂言を結び附けたもの。具さには、傾城壬生大念佛といふ。

みぶだいねんぶつゑ 壬生大念佛會【名】前條に同じ。

みぶただみ 壬生忠見【名】〔人〕歌人。忠岑の子。醍醐天皇の朝、藏人所に候し、天德の初、攝津大目となり、從六位に叙せらる。曾て、禁中の歌合の時、忠見の「戀すてふ」の歌と、兼盛の「忍ぶれど」の歌と、秀絶にして、判者藤原實頼、判ずる能はず、披講するに及びて、天皇、兼盛の歌を優れりとし給ひしより、失望して、遂に病をおこして、卒すといふ。家集あり。

みぶたたみね 壬生忠岑【名】〔人〕歌人。散位安綱の子。左近衞番長・右衞門府生、御厨子所預・攝津大目に歷任し、延喜中、宮中の歌合に「有明のつれなく見えし別より」の歌によりて、天皇の御隨身に擢んでられ、昇殿を聽され、御書所に候し、古今集撰者の一人たり。三十六歌仙の一人に加へられ、家集一卷あり。

みぶつみやう 御佛名【名】〔佛〕**ぶつみやうゑ**(佛名會)の敬稱。

みぶでら 壬生寺【名】京都の西郊、山城國葛野(カドノ)郡朱雀野村大字壬生にある律宗寶幢三昧寺の通稱。心淨光院と稱す。本尊は地藏菩薩。天平寶字五年の創立。開山は鑑眞中興は、大僧都快賢。大和國招提寺に屬す。

みぶな 壬生菜【名】〔植〕『山城國壬生の原産なるによりていふ』(二)**みづな**(水菜)に同じ。(二)水菜の一品種。矮性にして、葉は濃綠色、杓子形にて、缺刻なし。

みぶなご 御舟子【名】**ふなこ**(舟子)の敬稱。萬葉「夕しほの滿(ミ)のとどみにみふな子をあともひ立てて」

みぶね 御船【名】**ふね**(船)の敬稱。

みぶねのかみ 美船神【名】垂仁天皇の御代に、倭姫(ヤマトヒメ)命の、天照大神を、五十鈴(イスズ)川の川上に奉祀せし時、朝熊水神などと、大神を御船に乘せて遷幸し奉りきといふ神。

みぶねんぶつ 壬生念佛【名】**みぶねんぶつ**(壬生念佛)に同じ。太平記「狂言は南無ともいはず壬生念佛」

みぶねまつり 御船祭【名】常陸國の鹿島(カシマ)神宮にて、九月二日(昔は陰曆七月八日)、即ち御重祭(オヒノマツリ)の翌日の夜、三社の船を、さまざまに飾りて、海土に泛べ、附近を漕ぎめぐること。三韓降伏・天下泰平の意にて行ふといふ。

みぶねんぶつ 壬生念佛【名】京都西郊の壬生寺にて、毎年三月十五日より十日間行ひし法會。住持圓覺の、正安二年に創めしものにて、融通念佛の妙理を遊戲に假託し、兒女を誘引して、勝緣を結ばしむるを目的とす。後に、變遷して、一種の亂行念佛となり、壬生狂言と呼ぶ。眞德文集「昨日、壬生念佛へ無二御誘ニ、出抜候事、遺恨千萬千萬」

みぶねやま 三船山【名】〔地〕大和國吉野郡中庄(ナカノサウ)村菜摘(ナツミ)の東南にある山。遠く望めば、形、船の如し。萬葉「瀧の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はなくに」

みぶのにゐ 壬生二位【名】〔人〕『壬生中納言光隆の第二子にて、位は從二位に至りしより云ふ』**ふぢはらいへたか**(藤原家隆)の異稱。

みぶべ 壬生部【名】(一)上古、皇室の產殿に奉仕せし部民。乳部(ニウブ)の民。記「太子(ヒツギノミコ)伊邪本別氣(イザホワケ)の命の御名代(ミナシロ)として、壬生部を定めたまひ」(二)皇族領の土地の人民。

みぶみはじめ 御書始【名】**ごしよはじめ**(御書始)に同じ。增鏡「文治二年十二月一日、御ふみはじめさせたまふ」

みぶん 身分【名】(一)身の分限。(二)〔法〕人の、法律上の地位。

みぶん 未分【名】未だ分れぬこと。これ、陰陽の元初、未分の一氣なり」

みぶんけん 身分權【名】〔法〕**しんぞくけん**(親族權)に同じ。

みぶんしよ 身分書【名】身分に關する事項を記載せる文書。

みぶんしようめいしよ 身分證明書【名】身分に關する事項を記載し、常人に携帶せしむる文書。多くは、携帶に便ならしむるため、小き一枚の厚き紙などを用ひ、俗には、身分札(フダ)といふ。

みぶんとうき 身分登記【名】大正四年一月一日以前に於て、人の親族關係につきての身分の發生・消滅・變更に關する事項を登記せしこと。その事務は、戸籍役場にて取り扱ひたり。

みぶんとうきぼ 身分登記簿【名】身分登記をなすに用ふる帳簿。戸籍吏の、毎年編製すべきものとし、本籍人身分登記簿・非本籍人身分登記簿の二種に分つ。

みぶんもとなが 身分札【名】**みぶんしようめいしよ**(身分證明書)を見よ。

みぶもとなが 壬生基脩【名】〔人〕朝臣。庭田重基の子、壬生通古の養子。三條實美・姉小路公知等と倒幕の策を運らす。文久三年、七卿落の一人として、長州に下り、尋いで太宰府に轉じ、明治維新後、累遷して、元老院議官、從三位より麝香間祗侯となり、十七年子爵を授けられ、二十四年、特に伯爵を陞授せらる。後、二十八年、平安神宮宮司となり、三十年、貴族院議員に選ばれ、三十九年三月、從一位勳二等に進み、同日、京都に薨ず。七十二歲。

みふゆ 眞冬【名】『み(眞)は接頭語』ふゆ(冬)に同じ。「主として、歌に用ふる語」萬葉「みふゆ盡き春は來たれど梅の花君にしあらねば折る人もなし」「じ。

みふゆ 三冬【名】さんとう(三冬)[一]に同じ。

みふゆのご 三冬の後の冬【句】三冬の中の、最後の月、即ち陰暦十二月。新六「數ふるも三冬の後の冬なればいとど寒さのきはめゆくかな」

みふゆづき 三冬月【名】前條に同じ。藏玉集「十二。三冬月。ゆたかなる時ぞと見えて三冬月いそかに積る雪ののどけさ。冬三月の中、この月を三冬と號す」

みふり 身振【名】身を動かして、意を爲すこと、又その態。姿態。俗つれづれ「身振の利根なるは、只者とは思はれず」

みふるひ 身振【名】[一]身をふるひ動かすこと。平家「馬、……、身ぶるひしてこと立ちたりけれ」[二]寒さ又は怖しさなどのために、身體の、自から振ひ動くこと。ふるひ。わななき。戰慄。續猿蓑「荻子「身ぶるひに露のこぼるる靱(ゆぎ)かな」

みふれん 未敷蓮【名】[佛]未だ花の開かぬ蓮。菩提(ぼだい)心の未だ開かぬに譬ふ。

みふれんげ 未敷蓮華【名】[佛]前條に同じ。

みへ 三重【名】[一]三たび重なりてあること、又その物。萬葉「二つなき戀をしすれば常の帶三重結ぶべく吾が身はなりぬ」蕪村「花の雲三重に重ねて雲の峯」[二]織物にて、模様を、三色の絲にて織り出してあること、又その織物。榮花「三重・五重(いつへ)の袿(うちき)」増鏡「三重の狩衣」

みへ 三重【名】[一]檜扇(ひあふぎ)[二]の、板の幅の、狹く擴がるもの。三重がさねの扇。三重の帶【句】『萬葉集卷四の歌に「一重のみ妹が結ばん帶をすら三重結ぶべくわが身はなりぬ」とあるに本づきていふ』戀に痩せて、一重まはして結ぶべき帶の、三重まはす程になること。謠曲「楊貴妃」「我は又、何なかなかにみへの帶、めぐり逢はんも知らぬ身に」

みへ 三重【名】[一]【地】伊勢・伊賀・志摩の三國と紀伊國の北牟婁(きたむろ)・南牟婁(みなみむろ)二郡とを管轄する縣。縣廳を伊勢國津市に置く。初、明治元年、度會(わたらひ)府を伊勢國山田に置き、二年、度會縣と改め、四年七月、津・龜山・桑名・長島・神戸(かんべ)・久居(ひさい)・鳥羽の諸藩を廢して、すべて縣とし、その十一月、度會・久居・鳥羽の三縣を廢して、新たに度會縣を置き、山田に治して、伊勢五郡・志摩全國と紀伊國牟婁郡の內とを管せしめ、他の六縣を併せて、安濃津(あのつ)縣を津に置き、五年、四日市に屬して、三重縣と改稱し、伊勢八郡と伊賀全國とを管せしめしが、九年、度會縣を三重縣に併せて、今日に及べり。[二]伊勢國十郡の一。郡役所を海藏(かいぞう)村に置く。

みへおりもの 三重織物【名】三重[二]の織物。榮花「梅の三重織物の上著(うはぎ)」

みへがさね 三重重【名】三重に重ぬること、又その重ね方の物。榮花「色色の織物綾薄物など、五重がさね・三重がさねなどにしかさねさせたまひて」

みへのおうぎ 三重の扇【句】「三重の扇」に同じ。枕「三重がさねの扇、五重は、あまり厚くなりて、もとなど、にくげなり」

みへがは 三重川【名】[地][一]伊勢國內部(うつべ)川の古稱。三瀧(みたき)川の古稱といふ說もあれど、誤なりといふ。[二]石見國の和歌の名所。今の同國那賀郡石見村大字黑川に當るといふ。萬葉「わが疊三重の河原の磯の浦にかばかりかもと鳴く蛙かも」

みへぞめ 三重染【名】布帛を、三回ほど重ねて染むること、又その染物。書門松「小松三重染二重染」

みへだすき 三重襷【名】斜線を三條づつ平行せしめて打違(うちちが)ひに(ちが)したる模樣。



(きすだへみ)

增鏡「薄色の裳(も)、三重だすき」裝束文飾推談「三重だすき、これ、菱の重文なり。又の名、大文といふ」

みへ 鳰【名】[動]にほ(鳰)に同じ。

みほ 三穗【名】[一]【地】紀伊國日高郡に屬せし地。日岬(ひさき)の東北の陰に當り、今、三尾(みを)村といふ。[二]駿河國安倍郡、清水(しみづ)市・三保松原(つばらて)の邊。今、その一部に三保村の名あり。[見穗・美穗]

みほ 三穗の痣(あざ)【句】紀伊國日高郡三尾(みを)村にある窟。久米若子(くめわくご)といふ人の隱れをりし處なりといふ。深さ十六間、幅五六間、高さ七八間乃至十二三間。久米若子を顯宗天皇なりとする說もあれど、確かならず、或は久米仙人の類の人かともいふ。萬葉「はたすすき久米の若子がいましける三穗の石室(いはや)は見れどあかぬかも」

みほかぐら 三保神樂【名】『もと或笛吹が、三保明神の祭禮にて、覺え來りしに意匠を加へしよりいふとぞ』芝居の囃子(はやし)の一。曾我の對面などの場合に、笛と大太鼓とにてするもの。

みほがさき 三保崎【名】[地]みほのまつばら(三保松原)に同じ。名寄「清見潟衣とき出でて三保が崎松の上ゆく月を見る哉」

みほぎ 御壽【名】壽(ことほ)ぐことの敬語。祝詞(大殿祭)「齋玉作等(いみたまつくりら)が持齋(いみたまつくり)はり、持淨(きよまはり)まはりて造り仕へまつれる瑞(みづ)の八尺瓊(やさか)の御ほぎの五百(いほ)つ御統(みすまる)の玉」

みほじんじや 美保神社【名】出雲國八束(やつか)郡美保關(みほのせき)村に鎭座せる國幣中社。祭神は事代主(ことしろぬし)命。三保津姫(みほつひめ)命。創祀の年代は詳かならず。延喜式に小社に列す。水夫及び商賈の信仰厚し。

みほじんじや 御穗神社【名】駿河國安倍郡三保村に鎭座せる郷社。祭神は大己貴(おほなむち)命。三穗津姫。

みほす 水乾す【動四他】水を涸らす。萬忠百首「小山田の小田の苗代(なはしろ)みほすとてあぜ切るほどに日は暮れにけり」

みほすすみのみこと 御穗須須美命【名】たけみなかたのかみ(建御名方神)に同じ。

みほつひめ 三穗津姫【名】高御産靈神(たかみむすびのかみ)の御子。

みほどのおのへのみささぎ 御陰井上陵【名】うねびやまのひつじさるのみほどのおのへのみささぎ(畝傍山西南御陰井上陵)の略。

みほどり 鳰鳥【名】[動]にほどり(鳰鳥)に同じ。記「鳰鳥の潛(かづ)き息(いき)づき」

みほのうら 三保浦【名】[地]駿河國三保松原の海濱。玉葉「清見潟富士の烟や消えぬらん月影みがく三保の浦浪」

みほのせき 美保關【名】[地]出雲國八束(やつか)郡の村。松江市の東八里二十五町。伯耆國境港の東方三海里。小灣に臨み、隱岐に渡る要津にして、昔は衞兵ありて、往來を監視したりしより、關と呼ぶ。陸路の便は宜しからざれども、漁船の出入多く、夏季は海水浴行はる。中世、三尾關と書きたり。

みほのまつばら 三保松原【名】[地]駿河國にある名所。安倍(あべ)郡の東南端より、東北に向ひて、駿河灣に突出し、清水(しみづ)市の前面に橫たはる砂嘴。長さ一里半、幅十町乃至二十町。老松森立して、中央に御穗神社あり。古は、御穗松原・美穗松原などとも書きたり。風雅「清見潟磯山寺は暮れそめて入日殘れる美穗の松原」

みほのやくにさし 三保谷國俊【名】[人]武士。源義經の部下。通稱は十郎。武藏國比企(ひき)郡三保谷村廣德寺に、その墓といふものあり。

みほのまつり 三保祭【名】駿河國三保の松原の三穗神社の祭禮。

みほん 見本【名】同種類の物の形態品質等を知らしむるために提示する、一部の品物。

みほんぐらだしさしづしよ 見本藏出指圖書【名】[商]倉庫又は船渠に寄託したる者が、見本としての必要上、その寄託物の一部の出庫を、受託者に請求する書面。

みほんずり 見本摺見本刷【名】見本として印刷すること、又その印刷したる物。

みほんちやう 見本帳【名】布帛紙類などの見本を集めて貼りつけたる帳簿。

みほんどりだしじよう 見本取出證【名】

［商］**みほんぐらだしさしづよ**（見本庫出指圖書）に同じ。

みほんばいばい 見本賣買【名】見本によりて行ふ、賣買の契約。試品賣買。

みほんひん 見本品【名】見本として用ふる商品。

みぼめ 身譽身褒【名】**われぼめ**（我譽）に同じ。枕あまりなる御身ぼめかなと、かたはらいたく」

みぼる 見惚る【動下二自】見て、ほれぼれとす。見て、恍惚とす。みとる。俳諧新選「見惚れてや花の下なる忘杖」

みほ-わん 美保灣【名】［地］伯耆國西伯（ホウキ）郡の沖にある海灣。東方の御來屋（ミキヤ）崎と、西方なる出雲國八束（カヅカ）郡の地藏崎とにて、その口を扼し、灣底に伯耆國境・出雲國美保關（ミホノセキ）等の地あり。

みま 御孫【名】貴人の孫の敬稱。［古語］**すめみま**（皇孫）參照。續紀「あまつ神みまのみことの取り持ちてこの豐御酒（トヨミキ）を今たてまつる」

みま 御馬【名】**うま**（馬）の敬稱。萬葉「人皆のうらぶれをるに立田山みま近づかば忘らしなむか」

みま 美馬【名】［地］阿波國十郡の一。郡役所を脇町に置く。

みまうし 見まほし【形二】見ることを欲せず。［古語］源氏「數ならぬ身を、見まうくおぼし捨てんも、ことわりなれど」

みまかせ 身任【名】**みまま**（身儘）に同じ。嬉門松「年（ネ）も明き、身まかせになる吾妻（アヅマ）」

みまかひ 御馬飼【名】御馬を飼養する人。

みまがふ 見紛ふ【動四他】次條に同じ。

みまがふ 見紛ふ【動下二他】見て、他の物と思ひちがふ。見あやまる。枕「白樫（カシ）……、雪の降りたるに見まがへられて」

みまかる 身罷る【動四自】『身が現世より罷り去る義』**しぬ**（死ぬ）に同じ。古今「姉のみまかりける時によめる」新古今「公守の朝臣の母みまかりて後の春」

みまき 御牧【名】**まき**（牧）の敬稱。榮花「美豆（ミヅ）の御牧」

みまき 實蒔【名】植物を繁殖せしむるに、插木・接木などの方法に依らず、種子を蒔きてすること。

みまきいりひこいにえのすめらみこと 御間城入彥五十瓊天皇【名】［人］**すじんてんわう**（崇神天皇）に同じ。

みまきひめ 御間城姫【名】［人］崇神天皇の皇后。天皇未だ位に卽きたまはざりし時、宮に入り、卽位の年二月、皇后となり、垂仁天皇及び諸皇子を生む。垂仁天皇位に卽かるるに及び、尊びて皇太后と申す。

みまくさ 御馬草・御秣【名】**まぐさ**（秣）の敬稱。萬葉「この岡に草苅る童しかな苅りそねありつつも君が來まさむ御馬草にせむ」催馬樂「飛鳥井」「飛鳥井にやどりはすべしかげもよしみもひも寒しみまくさもよし」

みまさか 美作【名】［地］山陽道八個國の一。眞庭（マニハ）・苫田（トマタ）・勝田（カツタ）・英田（アヒダ）・久米（クメ）の五郡あり。全國、岡山縣の管轄に屬す。作州。

みまさり 見優【名】見まさること。（見劣に對して）源氏「かやうに奧まりたらんあたりの見まさりせんこそをかしかるべけれ」

みまさる 見優る【動四自】噂などに聞きしよりよく見ゆ。見增す。（見劣るに對して）本朝二十不孝「その次の娘お夏、十六になりて、しかも、風俗・姉に見さりて」

みまし 御座【名】**おまし**（御座）に同じ。紀「御席、ミマシ」新撰字鏡「木のもとにまた吹き返す唐錦大宮人のみましかせん」

みまし 汝【代】『前條の語の轉義』第二人稱の輕き敬稱。きみ。まし。續紀「みましの父……みましに賜ひし天下（アメノシタ）」［補］に同じ。

みまし-いし 御座石【名】**かなめいし**（要石）に同じ。

みます 三枡【名】紋所の一。正方形を三重に描けるもの。みついれこます。

みます 見增す【動四自】**みまさる**（見優る）に同じ。曾我「聞きしより見增して盛ゆるものかな」五人女「島原に、揚羽の蝶を紋所に附けし大夫ありしが、それに見增す程なる美形」

みますがうし 三枡格子【名】『三枡を縱橫に續け集めたるさまに見ゆるよりいふ』直線を三條づつ寄せ並べにるを、粗く交叉せしめたる格子編。團十郎格子。

みますじま 三枡縞【名】三枡格子の縞。

みますたけ 三增峠・味增峠【名】［地］相摸國愛甲（アイカフ）・津久井（ツクヰ）二郡の境界にある山。甲斐國と相摸國厚木（アツギ）地方との通路に當り、永祿十二年十月、武田信玄と北條氏康との戰ひし處。みませ。

みますや 三枡屋【名】［人］市川左團次の家號。

みませたうげ 三增峠・味增峠【名】［地］**みますたうげ**（三增峠）に同じ。

みまそかり 在り・御坐り【動下變自】**いまそかり**（在り）に同じ。［古語］伊勢「その時の女御たかい子と申す、みまそかりけり」

みまた 水俣・永派【名】**みなまた**（水俣）に同じ。紀「水派、此云二美麻多一」

みまた 三瀦【名】［地］明治の初年、設置の縣の一。四年十一月、豐後國柳川・三池・久留米三縣の地を合はせて立て、筑後全國を管せしめしもの。九年、一時、佐賀縣を併せしが、直ちに、又、これを長崎縣に屬せしめ、尋いで、廢して、福岡縣に合す。**ふくをか**（福岡）［補］參照。

みまた-やなぎ 三叉柳【名】［植］**みつまた**（三椏）に同じ。

みまち 巳待【名】巳の日の夜に行ふ辨財天の祭。

みまちがへ 見間違【名】**みまちがへ**（見間違）に同じ。

みまちがふ 見間違ふ【動下二他】**みちがふ**（見違ふ）に同じ。

みまちがへ 見間違【名】**みちがへ**（見違）

みまつひこかえしねの-すめらみこと 觀松彥香殖稻天皇【名】［人］**かうせうてんわう**（孝昭天皇）を申す。

みまな 任那【名】［地］『蘇那曷叱知の歸國せんとするや、垂仁天皇厚くこれに賜ひ、且つその道に迷はざりしならば、崇神天皇の御在世中に渡來すべかりしなればとて、その御名御間城入彥（ミマキイリヒコ）を、國名に負はせ、充つるに、任那の二字を用ひたまひしなりとの說あれども、又、任那の字音の轉訛ともいふ』古代の朝鮮の南部、今の洛東江と脊梁山脈との間に在り、百濟と新羅とに介在せし、我國の保護的領地。もと、意富加羅（オホカラ）國又は加羅（カラ）國といひしを、崇神天皇の御代、隣國新羅との不和により、その使者蘇那曷叱智（カシチ）、請援のため、我國へ向けて出發せしに、途中、道に迷ひて、垂仁天皇の御代、始めて來朝せしより、天皇、これに任那の國號を賜ひ、鹽乘津彥（シホノリツヒコ）を宰とし、往きて鎭せしむ。神功皇后の時、征韓の擧ありて、始めて、この地に內官府（ミヤケ）を設置し、尋いで、新羅の一部を攻略して、任那に加へ、日本府を置き、我國の重臣、常に駐劄して、諸般の事を統制せしが、その後、屢ば新羅の侵入を受けて、土地漸く蹙まり、建國以來十六世五百二十年にして、欽明天皇の時、新羅の眞興王に亡され、眞興王、卽ちその地を大伽那郡とせり。後、一時、これを回復せしこともあれど、概して、有名無實にして、大化元年に至り、全くその調貢を罷むるに至れり。おほから。

みまな-の-くに-の-みこともち 任那國司【名】任那國を主宰せし官吏。紀「任那國司、ミマナノクニノミコトモチ」

みまね 見眞似【名】見て、これに倣ふこと。みならひ。

みまの-みこと 御孫命【名】『**すめみまのみこと**（皇孫命）參照』天皇を、天照大神の御子孫といふ意味にて申す語。［古語］續紀「天つ神みまのみことの取り持ちてこの豐御酒（トヨミキ）を今たてまつる」

みまのみや-の-とのもり-の-つかさ 主殿署【名】**とのもりつかさ**（主殿署）に同じ。

みまはし 見廻【名】［補］見まはすこと。目を配ること。重井筆「鈍（ニブ）げな一言、おれが言はねば、もうそれほど間（マ）があく。

いひつけも、見まはしも、口は一つ、目は二つ」 ㊁〔建〕正面より側面へのつづき。

みまはす 見廻す【動四他】此方・彼方を見る。方方を見る。

みまはり 見廻【名】見まはること、又その人、又、その役。みめぐり。巡廻。巡視。

みまはりやく 見廻役【名】見まはる役。

みまはる 見廻る【動四他】廻りあるきて、見物又は監視す。みめぐる。巡廻す。

みまひ 見舞【名】㊀みまはり(見廻)に同じ。狂言・狐塚「後程は、次郎冠者も見舞にやらうほどに、先づ行け」 ㊁とぶらふこと。訪問。狂言・狐塚「久しう参らぬほどに、けふ、この子を抱いて、見舞に参りませう」 ㊂災難・病氣などに罹りたる人をおとづれ、又は書面にて問ひ慰むること。若鳳俗「病氣そもそもよりこの方、毎日三度づつの見舞」 ㊃みまひもの(見舞物)の略。 ㊄みまひきん(見舞金)の略。「餞。

みまひきん 見舞金【名】見舞に贈る金

みまひきゃく 見舞客【名】見舞㊂のために、おとづるる客。

みまひじょう 見舞状【名】病氣・災難などに罹りたる人を見舞ふための書状。

みまひちょう 見舞帳【名】見舞客の姓名を記入する帳面。若鳳俗「見舞帳を取り寄せ、内見するに」

みまひひん 見舞品【名】次條に同じ。

みまひもの 見舞物【名】見舞㊂のための贈物。

みまふ 見舞ふ【動四他】㊀みまはる(見廻る)に同じ。狂言・柿山伏「柿主、……今日も、行(イ)て、又、柿を見舞はうと存ずる」 ㊁とぶらふ。訪問す。狂言・粟売水「只今、次郎の、祖父御(ゴヤ)様を見舞ひに出でられてござる」 ㊂災難・病氣などに罹りたる人をおとづれ、又は書面にて問ひ慰む。

みまへ 御前【名】ま(前)(㊀)の敬稱。おまへ。古今「神垣のみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり」

みまま 身儘【名】心のままに振舞ふこと。みまかせ。じまま。自由。「ふ語。

みまま・ほうだい 身儘・氣儘(ホウダイ)【句】前條を強めていひ

夫の穿鑿を耳に掛け」

耳に聞入る【句】**ききいる**（聞入る）に同じ。宇治「このけいたう房渡せといふに、渡守聞きも入れで漕出づ。……、大方、耳にも聞入れずして漕出す」

耳に釘【句】「耳に針を刺す」に同じ。

耳に口【句】相手の耳元に口を寄せてささやくこと。柳塘「めような晩秀（ばかう）やっべし耳に口」

耳に應（ふ）ふ【句】聞きて、心にことふ。聞きて、耳にしむ。

耳に逆（さか）ふ【句】『韓非子の難言篇に「且至言忤二於耳一而倒二於心一、非二賢聖一莫二能聽一」とあり』聞きて、不愉快に感ず。讒忠言、耳にさかふ」

耳に障（さは）る【句】聞きて、うるさく感ず。みみざはりに思ふ。

耳に熟す【句】「耳熟す」に同じ。

耳にす【句】きく（聞く）Ⅲに同じ。

耳に胼胝（たこ）が出來る【句】同一の話を、幾回も聞かせらるる形容。

耳に立つ【句】「耳に入る」に同じ。百日會我「俗（ぞく）俗を觸れまはる。人人、はっと耳に立ち、あれ聞きたまへと、魂も消ゆるばかりに、身にこたへ」鳥高名して、御馬を貰ふならば、……この朝比奈も、お耳に立つたる覺あらん」

耳にたやすし【句】耳に逆らはず入る。なんでもなく聞ゆ。萬葉「言にいへば耳にたやすしすくなくも心の中にわがもはなくに」

耳に附く【句】聞きたる時の聲、耳に殘れるやうにて、忘れ得ず。宗祇「よもの國に聞きしに、斯くばかりの人聞えず、この女なん、耳に附く、心に附く」芭蕉「短夜や驛路の鈴の耳に附く」

耳に留（と）む【句】「耳に留（と）まる」に同じ。徒然「ある聖（ひじり）の申しし事、耳にとどまりて、いみじくおぼえはべる」

耳に留（と）まる【句】「同じ。

耳に留（と）む【句】「耳に留（と）まる」に同じ。源氏「善き、惡しき事の、目にも耳にもとまる有樣を」增鏡「左のおとど實雄は、中宮の御事、斯くのたまふを、いでやと、耳にとまりてうち思さるらんかし」

耳に留（と）む【句】忘れぬほどに、念を入れて聽く。拾遺「それならぬ事もありしを忘れぬといひしばかりを耳にとめけん」

耳に挾む【句】事柄の一部分を聞き知る。誰よりともなく、ちらと聞く。ききかじる。

耳に針を刺す【句】相手の急所を突くやうに鋭く突く。耳に釘。

耳熟す【句】『漢書の揚惲傳に「酒後耳熱、仰レ天拊レ缶而呼二烏烏一」とあり』酒に醉ひて、耳たぶ熱くなる。

耳の穴を廣ぐ【句】注意して聽く。一代男「これは聞所ぢや。何れもだまれと、耳の穴ひろげて、一つ一つ覺えはべる」

耳の暇（ひま）【句】「耳の間（ま）」に同じ。狹衣「蟲の音も、外よりは耳の暇なかりけり」

耳の獸（けもの）【句】〔動〕うま（馬）の異稱。〔古語〕嬉戲野物語「馬は、昔、唐國（からくに）より渡りし時、耳のけものといひて、すべて稱なりしかば」

耳の御馳走【句】次條に同じ。

耳の正月【句】『「目の正月」參照』聞きて、樂しく感ずること、又、その事。

耳の障子【句】こまく（鼓膜）の俗稱。

耳の根【句】耳の附根（ねっこ）。膝栗毛「箱枕も、耳の根にいたく響く」

耳の垂（た）【句】みみたぶ（耳垂）に同じ。太平記「德附け奉らんと思ひたれば、耳のびくが薄くおはしける」

耳の聞（ま）【句】音聲の聞えぬ時。耳の暇。萬葉「百重なみ立てる木の梢に葉がくれて耳の間も無し蟬の聲聲」

耳の役に聞く【句】耳あるがために、自ら聞き知る。一代女「耳をすまして聞くに、……と、さんざんに詞りゆく。耳の役に聞く程をかしや」

耳の餘所（よそ）に聞く【句】「耳外（よそ）」に同じ。平家「春宮（とうぐう）、御袴著並に御眞魚始（おんまなはじめ）とて、めでたき事どもありしかども、法皇は、鳥羽殿にて、御耳の餘所に聞しめす」

耳は看板【句】耳を持ちながら、注意足らずして、聞かず。〔諺語〕

耳は大（だい）なるべく口は小（せう）なるべし【句】多く聞きて、知識を弘め、言語は愼むべし。〔諺語〕

耳一つに【句】その人だけに聞かする意。源氏「かのおん耳一つには、心得させながら」

耳振立てて聞く【句】「振立てて聞くを見よ。謠詞「耳振り立てて聞くものと、馬牽き立てて」

耳舊（ふる）る【句】聞き馴れて、珍しからず。源氏「朝夕の遊に、耳ふり、目馴れたまひ」

耳へ入る【句】「耳に入る」に同じ。

耳へ達す【句】前條に同じ。甘我會稽山「隱目付（かくめつけ）の者共、皆に耳へ達したり」

耳へ響く【句】みみだつ（耳立つ）に同じ。狂言（八句連歌）「お前の金を貧ひましたのは、もはや案じ暮すによって、かねての字、ああ、いかう耳へ響きました」

耳を洗ふ【句】きよいう（許由）を見よ。

耳を打つ【句】相手の耳元に口を寄せて、ひそかに告げ知らす。みみうちす。世間娘氣質「たしかに見屆けおいた故、そなたに、今、耳を打つ」

耳を潁川（えいせん）の水に洗ふ【句】きよいう（許由）を見よ。

耳を驚かす【句】傳へ聞きて驚く。奥の細道「かねて耳驚かしたる二堂開帳す」

耳を掩うて、鐘（かね）を盜む【句】『呂氏春秋に「范氏亡、有下得二其鐘一者上欲二負而走一則大鐘不レ可レ負、以レ椎毀レ之、鐘鏗然有レ音、恐二人聞一レ之而奪二己一、遽掩二其耳一、惡レ聞二其過一、亦猶レ此也」とあるに本づく』次條に同じ。〔諺語〕

耳を掩ひて、鈴を盜む【句】『能改齋漫錄に「諺有二掩レ耳偷レ鈴、非レ鈴也。亦有レ所レ本、按呂氏春秋、（この下に、前條の文を記せり）」とあり』他人は知るまじと思ひて行ひたる惡事の、實は、既に他人に知られてある譬。〔諺語〕

耳を藉（か）す【句】聞かんとす。「斯かる事に耳を藉す暇なし」

耳を傾（かたぶ）く【句】念を入れて聽く。耳をそばだつ。傾聽す。枕「などか、などかと、耳をかたぶけて問ふに」

耳を借る【句】耳元に口を寄せて、ひそかに告げ、又は、ひそかに相談す。心中及氷の朔旦「さが樣、ちとお耳借ろと、耳に口寄せ」

耳をこする【句】あてこすりて物言ふ。一代男「道すがらの一口咄にも、人の耳をこすり」

耳を肥（こ）す【句】すぐれたる音樂などを幾回も聞きて、その道の趣味を高くす。太平記「今に榮花を開きぬと、目を悅ばしめ、耳をこやす」

耳を信じ、目を疑ふ【句】聞く所を信じて、見る所を疑ふ。〔諺語〕盛衰記「耳を信じ、目を疑ふは、俗弊なり」

耳を濟（すま）ぐ【句】「耳を洗ふ」に同じ。鶉衣「手水鉢銘「纓を洗ひ、耳をすすぎて、長く閑居の契をも結べとぞ」

耳を澄ます【句】きかすます（聞澄ます）に同じ。著聞「人人も、耳をすましてこそざぶらひつれ」

耳を屬す【句】『戰國策に「趙使者來屬レ耳」とあり』次條に同じ。

耳を欹（そばだ）つ【句】熱心に聽く。耳をすます。耳を傾く。著聞「人人、耳を欹てて、いかなる句をか詠ずらんと待つ程に」

耳を揃ふ【句】Ⅲみみ（耳）九の數をまとむ。

耳を立つ【句】「耳を欹つ」に同じ。遍照「耳を立てて聞くにいとたふとく」源氏「目とどめ、耳立てたまはず」

耳を貴び、目を賤しむ【句】『張衡の東京賦に「荒淫而笑曰、若レ客所レ謂末學

膚受、貴ノ耳而賤ノ目也」とありて、註に「荀子新論曰、世咸尊ノ古卑ノ今、貴ノ所ノ聞、賤ノ所ノ見」と見ゆ』見馴れたる物事よりは、ただ耳に聞くのみなる、古代又は遠方の物事を、貴く思ふが、世の常なり。〔諺語〕

耳を潰(ツブ)す【句】聞きても、聞かぬ様を装ふ。そら耳を走らす。浦島年代記「鶏鳴がへしのあて言、耳をつぶして聞(ブン)の大臣」

耳を貰く【句】耳に鉦く響く。茜染野中の清井「お迎へに来ましたと、耳を貰く甲聲(カンゴエ)が、奥へ通って」

耳を留(ト)む【句】聞きて注意す。念を入れて聴く。耳を立つ。ききとがむ。紫式部日記「何ばかりの、耳とどむる事もなかりつる日頃なれど」大鏡「人の御耳ととめさせたまへし昔の事ばかりを、斯く語り申すだに」

耳を留(ト)む【句】前條に同じ。右京大夫集「何となき言の葉ごとに耳とめて恨みし事も忘られぬかな」増鏡「船の内に、楽器ども設けられたれば、……、水の底にも耳とむるものやと、そぞろ寒き程なり」

耳を引く【句】『耳たぶの大なる人は運(ウン)よしとの俗説に本づけるなるべしといふ』幸運なる人にあやかる。伊達娘繊緋鹿子「私(ワシ)が戻って来ぬ中に、もうしっぽりと一汗して、栄耀が餘って、口舌(クゼツ)ぢやな。ちと耳引かうとじやれかかる」

耳を塞ぐ【句】耳に手を當てなどして、聞かじとす。一代男「最前は、耳塞ぎし銅鑼(ドラ)・饒鉢(ニヨバチ)の音も、聞き馴れて慰む態(ザマ)となれり」

耳を振立つ【句】「耳を立つ」を強めていふ語。親詞大蔵「今日より始めて、罪といふ罪はあらじと、高天(タカ)の原に耳振立てて聞く物と」榮花「八百萬(ヤホヨロ)の神も、耳振立てぬはあらじと見えきこゆ」

耳を病(ヤ)ましむ【句】聞きて、心を悩ます。本朝王風「滿座の諸侯、耳を病ましめ、顔を下げ」

みーみ 身身【名】その人人の身。各自の身身となる【句】子を産みおとす。身二(ミフタ)になる。續集抄「たひらかに身身となならせたまひしかば」盛衰記「せめては、この人の身身となりたらんを見て、いかにも成らばや」

みーみ【名】蟬の鳴聲。

みみあか 耳垢【名】耳の孔に生ずる垢。外聽道の皮脂腺及び絲毬狀腺(耵聹腺)の分泌物。みみかす。みみくそ。

みみあたらし 耳新し【形二】聞きて、珍し。初耳(ハツミミ)なり。

みーみいた 耳板【名】㊀和船の帆柵(ホサク)の一部。㊁〔建〕樽緣(エン)の緣板の、最も外方にあるもの。みみぬき。

みみーいと 耳絲【名】**みみ(耳)**㊁を見よ。

みみーうち 耳打【名】相手の耳元に口を寄せて、ひそかに告げ知らすること。みみこすり。耳語。和合人「楊二郎が耳打にて、大いに驚き」

みみーうるさし 耳五月蠅【形一】**みみやかましし(耳喧し)**に同じ。

みみーかき 耳掻【名】耳の孔の痒きを掻き、又は、耳垢などをさらへ取るに用ふる小さき匕(シ)のやうなる具。若風俗「卯木(ウツギ)の耳掻を細工して」

「身。

「耳掻で集めて、熊手で掻出す【句】「爪で拾って、箕で翻す」に同じ。〔諺語〕

みみかきーぐさ 耳掻草【名】〔植〕狸藻科に屬する草。濕地に自生し、花莖は、高さ一寸乃至五寸ほど、頂端に、黄色・小形の脣形花、一個又は二三個づつ開く。泥中に横たはる細莖には、笹形の小葉と、小蟲を捕獲する小嚢とを有す。はながたみ。

みみかきーれう 耳掻子【名】『宇形、耳掻に似たるよりいふ』「了」の字を、同音の他の漢字と區別していふ語。

みみーかくし 耳隠【名】女の髪の結ひ方の一。頭の後部に鬢を作り、髻にて、耳をおほひ隠すやうにする束髪。中年以下の女の間に行はる。「に同じ。

みみーがくもん 耳學問【名】じがく(耳學)の品を附くること、又、その品。

みみーかざり 耳飾【名】耳朶(ジダ)に、装飾

みみーかしこし 耳賢し【形一】**みみさとし(耳疾し)**に同じ。一代男「唄へば、耳かしこき人、只ならぬ唄なり」

みみーかす 耳滓【名】**みみあか(耳垢)**に同じ。

みみーがた 耳形【名】㊀耳朶(ジダ)に似たる形。㊁〔植〕『英 Auricula』葉脚の形の一。

みみーがたし 耳固し【形一】聽覺鈍し。(耳疾(ミミヤマ)しに對して)源氏「耳がたからぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」

みみーがね 耳金【名】金屬製の耳かざりの品。みみくさり。みみわ。紀「鍮、ミミガネ」

みみーかはらけ 耳土器【名】形、耳に似て、箸を載するに用ふる、陶製の品。みみざら。「んぎ。

みみーき 耳木【名】龍の一部。みき。し

みみーきき 耳聞【名】隠れたる出來事を、すばやく聞き出すこと、又その人。密偵。慶長記「入道のはからひにて、十四五もしは十六七ばかりなる童部(ワラハ)の髪を頸のまはりに切りつつ、三百人召仕はれけり。……これは、……耳聞なり」

みみーくさり 耳鎖【名】**みみがね(耳金)**に同じ。和名「璫、美美久佐利」

みみーくじり 耳抉【名】**みみかき(耳掻)**に同じ。字鏡集「厭、ミミクジリ」

みみーくせ 耳癖【名】聞き馴れたる癖。狭衣「聞き分くべうもなくひとりごちたまふを、中納言の佐の耳くせに」

みみーくそ 耳屎【名】**みみあか(耳垢)**に同じ。和名「町聹、耳垢也、美美久曾」

みみーぐみ 耳組【名】織物・莫蓙などの耳の部分を組み合はすこと、又、その組み合はせたる物。一代男「耳組の御座(ゴザ)一枚、松竹鶴亀を染込の木綿夜著」

みみーぐるし 耳苦し【形二】**ききぐるし(聞苦し)**に同じ。小島の日すゞみ「當座のいたづら事は、なかなか耳ぐるしうて」

みみごうしや 耳功者【名】聽音を聞き分くることの巧みなること、又その人。一代女「よろづ、上京と下京の違(ヒガ)ありと、耳功者なる人のいへり」

みみーこしごし 耳腰白・耳白腰華【名】馬の毛色の、耳と腰との白きもの。

みみーこすり 耳擦【名】㊀**みみうち(耳打)**に同じ。㊁**あてこすり(當擦)**に同じ。一代女「揚屋の男めが耳こすりいふは」

みみーごと 耳言【名】前條㊀に同じ。耳語(ジゴ)。舉白集「耳ごとするは何(ナ)ぞ。いとも心得ぬわざなんめりし」

みみーさうだん 耳相談【名】耳打して、相談すること。耳談合(ミミガタリ)。二代男「何の仔細もなき事を、耳相談など仕掛け」

みみーさはり 耳障【名】聞きて、うるさく又は不調和に感ずること。和合人「また耳ざはりな事をいふが、燒餅なんだと」

みみーざら 耳皿【名】**みみかはらけ(耳土器)**に同じ。

みみーしひ 聾【名】つんぼ(聾)に同じ。和名「聾、美美之比、耳不ノ聞ノ聲也」

みみーしへ 聾【名】前條に同じ。字鏡「聾、聾也。彌彌志戸」

みみーじろ 耳白【名】次條の略。

みみじろーせん 耳白錢【名】㊀正徳四年より享保三年にかけて、江戸龜井戸にて鑄造せし寛永銅錢。徑八分强にて、製作精好、銅黄色を呈す。一説に、正徳四年より享保元年にかけて鑄造せしものともいふ。㊁ぶんせん(文錢)に同じ。(元文年間鑄造の寛永銅錢と區別していふ語)

みみじろーのーくげ 耳白黒毛・虎頭【名】馬の毛色の、耳の部分白く、その他は全部黒きもの。

みーみず 蚯蚓【名】〔動〕『目見ずの義といふ』環蟲類に屬する蠕形動物。濕地の土中に棲み、細長き圓柱形にして、暗紅色を呈し、多くの環節より成り、大なるは、長さ二尺餘に達するものあり。雌雄同體にして、前端に口、後端に肛門あり。眼と觸角とを缺き、腹面に、僅かに尖頭を出すのみなる、細小なる剛毛ありて、後退匍匐

の際、支持の用を爲す。腐植土を餌とし、その腐植土は、蚯蚓の體内を通過する間に、有機物の一部は吸收せられ、糞塊として排出せらる。植物の崩芽を食して、害を與ふ。發聲器を有せざるに、古來、この蟲の鳴くといふは、實は、螻(ケラ)の聲を誤りて傳へたるなり。かぢよ。きういん。はちのこ。めめず。字鏡「蜥、彌彌受」一茶「うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づつ」

蚯蚓が土を食ひ盡す【句】とても、力に及ばぬ譬。〔諺語〕

蚯蚓がぬたくる【句】「蚯蚓のぬたくるやう」に同じ。

蚯蚓の木登、蛙の毓立(コソヤナホ)【句】前前條に同じ。〔諺語〕

蚯蚓のぬたくるやう【句】『春蚓(イシン)・秋蛇』を見よ』筆蹟の極めて拙き譬。

みみずーがき 蚯蚓書【名】蚯蚓のぬたくるやうなる書體。文字の、極めて拙き書き方。榮花「姫宮、みみず書にせさせたまへる、……、などか、いと久しく渡らせたまはぬなど、書きつづけさせたまふも」

みみずーばれ 蚯蚓脹【名】『色と、形と、共に蚯蚓に似たるよりいふ』人の肌の、引き掻きなどしたる痕の、細長く赤らみて脹るること、又、その脹れたる痕。

みみーずまひ 耳蚇【名】馬の、人を見て、耳を伏すること。

みみーせせ 完骨【名】次條の略。

みみせせの骨【句】耳の後にある、高き骨。〔完骨〕和名「完骨、美美世世乃保禰。耳後大骨」

みみせせーぼね 完骨【名】前條に同じ。伊呂波字類抄「完角、ミミセセボネ・ミミセセボネ」

みみせーぼね 完骨【名】前條に同じ。伊呂波字類抄「完角、ミミセボネ・ミミセセボネ」

みみーだくな 耳だくな【名】聞きても、役(エ)に立たぬこと。

みみーたけ 耳蕈・海蕈【名】〔植〕じやのめぐさ(蛇目草)に同じ。「あり。

みみーだたし 耳立たし【形二】耳だちてみみだつ 耳立つ【動四自】聞きて、普通とは異なる點なりと感ず。かどだちて聞ゆ。耳に立つ。源氏「ただならず耳だつ事も、おのづから出で來るわざ」

みみーたび 耳垂【名】次條に同じ。和名「耳垂、美美太比」

みみーたぶ 耳垂・耳朶【名】㊀耳の下部の垂れたる肉。みみたび。みみのびく。みみったぶ。じだ。びく。㊁『耳たぶの肥えたるは福相の一なりといふ俗説あるよりいふ』まうけ。しあはせ。みみったぶ。利益。利得。運命。浮世風呂「錢を改めなされや。ひよっと古錢(カバツ)が交って、掘出したら、お前の耳たぶ」

耳垂が大きい【句】福運ゆたかなり。

みみーたぼ 耳垂【名】前條の轉訛。

みみーだま 耳玉【名】珠玉にて造りたる耳かざり。字鏡「珥、彌彌玉」

みみーだんかふ 耳談合【名】**みみさうだん**(耳相談)に同じ。甲陽軍鑑「諸侍、老若共に、大事なき事を、深く取成し、耳談合などをして」

みみーたもち 耳保【名】**ききおぼえ**(聞覺)に同じ。教訓抄「耳たもちなかりける身のくちをしさは」

みみーだらひ 耳盥・耳盥【名】角盥(ツノダラヒ)の角(ツノ)を略して、手かけのみを設け、物に障りて覆ることの無きやうにしたる、一種の盥。もと、木製にて、多くは黑漆を塗り、湯水を入れたる嗽茶碗を內に入れおきて、客に手を洗はしむる料としたるものなりしが、後には、金屬にて製し、鐵漿(カネ)の具として、從前の鐵漿吐(カネ)に代へて用ふるに至れり。


(ひらだみみ)

みみーだり 耳垂・耳漏・耵聹【名】**みみだれ**(耳垂)に同じ。和名「耵耳、美美太利。風熱、耳生二膿汁一也」

みみーたれ 耳垂・耳朶【名】**みみたぶ**(耳垂)に同じ。增補下學集「耳垂、ミミタレ・ミミタブレ」

みみーだれ 耳垂・耳漏・耵聹【名】中耳の種種の原因によりて、その內より膿汁の流れ出づる症候。じろう。運歩色葉集「耵耳、ミミダレ」

「みっちい。〔俚語〕

みみっちい【形二】けちなり。吝嗇なり。みみーぢか 耳近【名】㊀耳に接近してあること。一代女「耳近へ、我等に、何ぞ用があると囁きければ」㊁聞き馴れて、了解しやすきこと。卑近。盛衰記「片山里の荒武士の、耳近に聞知る樣にかき口說き」

みみーぢかし 耳近し【形一】㊀耳に接近してあり。更科「松風、いと耳近う、心細く聞えて」㊁聞き馴れて、了解しやすし。卑近なり。(耳遠しに對して)源氏「同じ佛の御教をも、耳近き譬に引きまぜ」

みみつ 美美津【名】〔地〕明治初年の設置の縣の一。四年七月、藩を廢して縣とせし、日向國高鍋・延岡(ノベオカ)・佐土原の縣を、その十一月合併して立てしもの。日向國の兒湯・臼杵(ウスキ)二郡と那珂・宮崎・諸縣(モロカタ)三郡の一部とを管せしが、六年一月、都城(ミヤコノジヤウ)縣と共に廢し、宮崎縣を宮崎町に置き、以て今日に及べり。

みみづ 【名】めど(目處)㊁に同じ。玉勝間「今、俗に、針の穴を、みみづといふ」

みみーづか 耳塚【名】㊀斬り取りたる敵の耳を埋めて築きたる塚。はなづか。閑田次筆「讃岐由佐邑の人菊池武知、筑紫の紀行に、筑前國男濱といふ所迄きに、耳塚あり」㊁京都市下京區大佛前の路傍に在りて、慶長二年、征韓將士の送り來れる敵人の鼻を埋めて築きたる塚。實は鼻塚なるを、誤り傳へたるなり。

みみづから 身自ら・躬自ら【副】**みづから**(自ら)に同じ。

みみーつき 耳付【名】耳のかたち。綴留「果報なる耳つき、仕合(シアハセ)の備はりし目の中(ウチ)と、一つ一つ譽めそやせば」

みみーつき 耳附【名】㊀特に念を入れて聽くこと、又その事。狹衣「みづからは聽入れぬに、このめのとは、いと耳つきに覺えけれど」㊁耳㊀の附きてあること、又その物。「耳つきの奧蓙」

みみーづく 木菟・角鴟・鵂鶹【名】〔動〕『本名「つく」。毛角の耳殼の如くにて目立つよりいふ』猛禽類に屬する鳥。梟(フクロ)と極めて近緣のものにて、共に夜間活動し、學術上、確たる區別はなけれども、木菟に屬するものは、八種ほどありて、多くは、耳に長毛ありて、耳殼の如く起立す。最も普通なるは、大木葉木菟(オホコノハヅク)なり。その他、鷲木菟(ワシミヽヅク)・木葉木菟・青葉木菟(アヲバヅク)・虎斑木菟(トラフヅク)・小木菟(コヅク)などあり。つく。づく。つくづく。づうとうてう。かくれふと。名義抄「木菟、ミミヅク・ツク」


(くづみみ)

みみつこーいばら 【名】〔植〕**さるとりいばら**(猿捕薔薇)に同じ。

みみっこすり 耳擦【名】**みみこすり**(耳擦)の音便。

みみっーたぶ 耳垂・耳朶【名】**みみたぶ**(耳垂)の音便。古今百馬鹿「膝貧は時の運(ハヤリ)次第、當人の耳ったぶ、その日の荒神樣」

みみっーたぼ 耳垂・耳朶【名】**みみったぶ**(耳垂)の轉訛。

みみっーちい【形】㊀**みみちい**の音便。㊁てきびし。はげし。銳し。〔俗語〕「みみっちく叱りつく」

みみっーつ 耳筒【名】馬の耳。

みみっーとう 耳遠【名】耳の遠き人に言ふごとく、耳の側に、口を寄せて、急に銳き聲にて「耳とう」と叫ぶこと。俗曲「日高川」「これから後は大事な話、とっくりと言はねばならぬ。どれ、耳、ここへ持って御座れ。さあ、その後(ノチ)はえ。みみっとう。吃驚(クリ)する間にすり拔けて、飛ぶが如くに急ぎ行く」

みみーつぶし 耳潰【名】〔植〕**ほこりたけ**(埃茸)に同じ。

みみーつぶれ 耳潰【名】〔植〕前條に同じ。

みみーとし 耳疾し・聰し・聆し【形一】聽覺鋭し。耳かしこし。耳はやし。(耳固(オボク)しに對して)字鏡「聆、彌彌止志」

みみーどほ 耳遠【名】耳どほきこと。

みみーどほし 耳遠し【形一】聞き馴れずして、理解しがたし。ききどほし。(耳近し㊁に對して)增鏡「猛きもののふのおを をゑゐわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

こりを尋ぬれば、いにしへ、田村・利仁(トシヒト)などいひけん将軍どもの事は、耳遠ければ、さしおきぬ」

みみ-な 耳菜巻耳 【名】〔植〕次條の略。

みみなぐさ 耳菜草・耳無草・巻耳 【名】〔植〕『葉の形、鼠の耳に似たるよりいふとぞ』石竹科に屬する一年生又は二年生の草。山野に自生し、莖は、高さ四五寸乃至七八寸に達し、微毛密生す。葉は、無柄にして、對生し、長卵形を呈し、白色、五瓣にして、各花瓣の先端二裂せる小花、聚繖花序に排列して開き、後、圓壔形なる蒴果を結ぶ。七草粥の中に入れて、食用に供す。すずみむしろ。ねこのみみ。ねずみのみみ。ほとけのみみ。みみな。をはこべ。うねは。枕「七日の若菜を、……、耳無草となんいふ、といふ者のあれば」

みみなし-やま 耳梨山・耳無山・耳成山 【名】〔地〕大和國香具山(カグヤマ)の北にある小山。磯城(シキ)郡耳成(ミミナシ)村に屬し、高さ二百尺。土俗、天神山といひ、又、梔樹(チシ)山といふ。山中、耳多きより、梔子(クチナシ)山といふ。山中、耳無山口神社あり。大和(ヤマト)の三山の一。枕「山は、……耳なし山・末の松山」

みみ-なは 耳繩 【名】帆の左右の緣に取り附け、脇取り綱を結び附けて、帆を張るに用ふる小繩。兩方づな。兩方。

みみ-なり 耳鳴 【名】逆上・中耳炎などのために、耳の内部の鳴るやうに感ずること。耳鳴(ミミナリ)。

みみ-なる 耳馴る 【動下二自】**きなる**(聞馴る)に同じ。枕「常に聞く事なれば、耳馴れて、珍しう覺えぬにこそはあらめ」

みみ-なれ 耳馴 【名】耳馴るること、又その物。源氏「うき身のゆかり輕輕しきやうなる耳なれにて侍れば、今はじめていかに物を思ひはべらず」 「**ー**」に同じ。

みみぬき 耳貫 【名】〔建〕**みみいた**(耳板)に同じ。

みみね 【名】女の下帶を云ふ。〔上總國の方言〕「を見よ。

みみ-の-あか 耳垢 【句】**みみ**(耳)の條下

みみのあか-とり 耳垢取 【名】耳垢を取り除くこと、又それを職業とする人。徳川時代には、この職業の者、各地に存在したり。みみほり。

みみ-はさみ 耳挟 【名】古、女の、額髪の垂れ下れるを、耳の上部に挟みて、後方に掻き遣りしこと。源氏「耳はさみして、そそくり繕ひて」

みみはさみ-がち 耳挟勝 【名】女の、日常多くは、耳はさみをなしをること。源氏「まめまめしき筋を立てて、耳はさみがちに美相なき家刀自(ヤモジ)の、偏に打ち解けたる後見(ウシロミ)ばかりをして」

みみ-ばさむ 耳挟む 【動四他】「耳に挟む」に同じ。

みみ-ばやし 耳早し 【形一】耳するどし。

みみ-はゆし 耳映し 【形一】聞きて、不愉快なり。耳ざはりに感ぜらる。慶長記「汝が罵だて、耳はゆし」

みみ-はらひ 耳拂 【名】鳥の柔かなる毛などにて作り、柄を取り附け、耳垢を拂ひ去るに用ふる具。ぼんぼり。

みみ-ひき 耳引 【名】勝負にて、勝ちたる者が、負けたる者の耳を撮みて引き動かすこと。

みみひき-がけ 耳引賭 【名】勝負の遊をするに、耳引を賭とすること。色道大鏡「常のカルタを打たんに、賭(カケ)を定めずしては不興なり。但し、定むるとも、耳引がけか、竹筵(タケムシロ)がけかを宜しとす」

みみひき-ぜに 耳引錢 【名】勝負事に負けたる時、相手に耳引をせらるる代りに出す金錢なるべし。一代女「さても、いそがしき遊興、……、つらきながら、勘とて、ふし所をば、口ばやに語り、すこし位を取り、男を、耳引錢のいる事でもないに」

みみふたぎ 耳塞・塡 【名】支那にて、古、珠玉にて作り、耳に充てて、裝飾としたるもの。和名「塡、美美不太岐。玉充耳也」

みみふたぎ-もち 耳塞餅 【名】我と同年なる者の死にし時に食ふ餅。

みみ-へん 耳偏 【名】漢字の偏の一。「聰」「聯」「職」などの字の左方にあるもの。

みみほり 耳掘 【名】**みみのあかとり**(耳垢取)に同じ。

みみめ-どり 耳目鳥 【名】〔動〕**うぐひす**(鶯)**Ⅲ**の異稱。秘藏抄「みみめ鳥來つつ鳴くなりわが宿の八重紅梅の花ふみちらし。みみめ鳥とは鶯をいふなり」

みみ-もと 耳元・耳本 【名】耳**Ⅱ**に極めて近き處。落窪「口は、耳もとまで笑みまけて」 太平記「匐(ハ)ふる蟻の、只、耳もとに聞えて」

みみ-やかまし 耳喧し 【形二】聞くに、心安らかなり。聞きぐるしからず。源氏「耳やすきものから、さすがにねたく思ふ事こそあれ」

みみ-やすし 耳安し 【形一】聞くに、心安らかなり。聞きぐるしからず。源氏「耳やすきものから、さすがにねたく思ふ事こそあれ」

みみゆ 耳見ゆ 【動下二自】相手の顔を見、又、己が顔を相手に見らる。互に面をあはす。相逢ふ。甘露「さし當りたる別は悲しきに、歸らん事は不定(オボツカ)なり、見見えん事も、今ばかりぞと思へば、氣も、魂も、身に添はず」 「**ー**」にある柘。

みみ-ゆきげた 耳行桁 【名】〔建〕橋の兩

みみ-より 耳寄 【名】早く聞きたく思ふ程に都合よきこと、又、その話。佳言「三の君願ひまさりたまひたるに、……、耳よりにこそたばかりたまへかし」 春花五大力「そりや、まあ、耳よりでござすなあ」

みみらく 美彌良久 【名】〔地〕肥前國五島(ゴトウ)列島の一なる福江(フクエ)島の西北端なる三井樂(ミイラク)村の邊の古稱。一小澳を擁し、古、遣唐使の泊所として有名なりき。萬葉「自二肥前國松浦縣美彌良久埼一發レ船直射二對馬一」

みみわ 耳環 【名】耳垂(ミミタブ)を傷け穿ちて垂るる、金屬製の小き環。みみがね。

みむく 耳向く 【動四自】その方を向きて見る。ふりむく。

みむすこ 御息子 【名】**むすこ**(息子)の敬稱。大和「昔、在(ア)中將の御息子在次君」

みむすめ 御女・御娘 【名】**むすめ**(女)の敬稱。續世繼「宇治のおほきおとどの御むすめは、大殿の一つ御腹にて」

みむね-まさひら 三統理平 【名】〔人〕朝臣。寛平・昌泰の間、大外記となり、文章博士を經て、從四位下・式部大輔に至る。文學を以て著れ、殊に詩を善くし、三代實錄・延喜格式の撰定に與る。延長四年卒す。年七十四。

みむらかねつね 三村包常 【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は次郎左衞門。常陸國稻田の人。淺野長矩に仕へて、庖廚の小吏たり。元祿十六年二月四日、死を賜はる。年三十七。「柴」に同じ。

みむら-さき 實柴 【名】〔植〕**こむらさき**(小

みむら-みやらじん 三村明神 【名】攝津國堺市甲斐町に鎭座せる神社。實の名は、開口(カイグ)神社。祭神は、事勝國勝長狹(コトカツクニカツナガサ)命・素盞嗚(スサノヲ)命・生國魂(イククニタマ)尊。神功皇后三韓より凱旋の時、祟祀せられしもの。中古、兩部に屬し、大念佛敎寺と稱せしより、俗に大寺(オホデラ)と呼べり。

みむら-まつり 三村祭 【名】攝津國堺市三村明神の祭禮。九月十二日(昔は、陰曆八月一日・二日)に行はる。

みむら-やま 三村山 【名】〔地〕近江國にありといふ山。新勅選「時雨ふる三村の山のもみぢ葉は誰が織りかけし錦なるらん」

みむろ 御室 【名】**Ⅰ**貴人の住所。御殿。おむろ。伊勢「惟喬(コレタカ)の御子(ミコ)、……、小野といふ所に住みたまひけり。……、みむろに詣でてよみ奉るに」 **Ⅱ**神を奉祀せる室の義にて、古代は、貴人死にし時は、その家を直ちに神社とする習ありしより、前項の義の一轉せるなり』**みやしろ**(御社)に同じ。夫木「榊葉を神のみむろと祟むれば木綿附鳥(ユフツヅ)のねぐらなりけり」

みむろど 三室戸 【名】〔地〕山城國三室戸寺の在る地。今は、宇治郡宇治村大字菟道(ウヂ)に屬す。草庵集「世の中靜かならず侍りし頃、三室戸の庵室にて」

みむろど-でら 三室戸寺 【名】山城國宇治郡宇治村大字菟道(ウヂ)にある、天台宗寺門派の寺。明星山と號す。本尊は千手觀世

音。西國順禮三十三所の第十番。開山は智證大師、中興は三井寺長吏大僧正隆明（一説に寛空）といふ。屢ば火災に罹りて、舊觀を失ふ。もとは、御室戸寺と書きたり。この寺の東南一里ほどに、喜撰ヶ嶽ありて、一名、三室戸山といふ。「を見よ。

みむろとやま 三室戸山【名】〔地〕前條

みむろーやま 御室山・三室山【名】〔地〕**みもろやま**（三諸山）㊁に同じ。千載「みむろ山谷にや春の立ちぬらん雪の下水岩たたくなり」㊁**みもろやま**（三諸山）㊂に同じ。後拾遺「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は立田の川の錦なりけり」

みん 明【名】支那の王朝の名。朱元璋の、金陵に據りて、群雄を破り、元を滅して、帝位に即きしより、十七世にして、毅宗の代、李自成に、北京を陷れられて亡ぶ。（我國紀元二〇二八年より二三〇四年まで）朱明（シン）。

明の七才子【句】〔人〕㊀支那明代の七人の詩人。即ち李夢陽・何景明・徐禎卿・邊貢・康海・王九思・王廷相。㊁支那明代の詩社を結びし、七人の詩人。即ち李攀龍・王世貞・謝榛・宋臣・梁有譽・徐中行・吳國倫。

明の七子【句】〔人〕前條に同じ。

明の十才子【句】〔人〕支那明代の十人の詩人。即ち李夢陽・何景明・徐禎卿・邊貢・顧璘・鄭善夫・陳沂・朱應登・康海・王九思。

みんーい 民意【名】人民の意思。

みんーいう 民有【名】人民の所有。（公有・官有・國有などに對して）

みんいうーち 民有地【名】民有の土地。民地。（公有地・官有地・國有地などに對して）

みんいうーぶつ 民有物【名】民有に屬する物件。（公有物・官有物・國有物などに對して）

みんいうーりん 民有林【名】民有に屬する林。民林。（公有林・官有林・國有林などに對して）

みんいっとうし 明一統志【名】〔書〕**だいみんいっとうし**（大明一統志）に同じ。

みんーえい 民營【名】民間の經營。私營。（公營・官營などに對して）

みんーえう 民謠【名】㊀『王禹偁の詩に「若有ニ民謠起一、當レ歌ニ帝澤春一」とあり』民間のはやりうた。俚謠。俗謠。㊁〔文〕『英 Folk-song』作者は誰とも知れずして、自然に一般の人口に膾炙し、曲節をも伴へる歌。例へば、船唄・馬子唄など。その、歌詞・曲節の作者の個人的たるに至る時は、技藝となる。「じ。

みんえん 民烟【名】**じんえん**（人烟）に同

みんーがく 明樂【名】明朝㊀の音樂。これに用ふる樂器は、管樂器に笙・簫・栗（ヒチヂ）・龍笛・長簫・絃樂器に小瑟・琵琶・月琴、擊樂器に大鼓・小鼓・檀板、十一種あり。

みんーかん 民間【名】『史記の項羽本紀に「楚懐王孫心、民間爲レ人牧レ羊」とあり』人民の社會。（官府に對して）太平記「天下大いに亂れ、民間靜かならず」

みんき 眠期【名】〔農〕『眠の字の音、正しくは、**めん**』蠶兒の、繭を作るまでに、四回脫皮するその一回ごとに、末期に於て、次第に食慾減じ、身體、半透明となり、蠶座に吐出したる絲に、腹脚の爪を引き掛けて、その上に坐し、頭部を擡げて靜止し、糞を排出し盡して、恰も眠れるが如くにして動かざるに至る期間。脫皮を容易ならしむべき準備なり。

みんきよ 民居【名】**みんをく**（民屋）に同じ。東鑑「止二宿稻瀨河邊民居一給」

みんーくわいてん 明會典【名】〔書〕**だいみんくわいてん**（大明會典）に同じ。

みんけいきよく 民刑局【名】司法省のもとの一局。裁判所の設立・廢止及び管轄區域、民事・刑事及び非訟事件、裁判・檢察・恩赦・復權・死刑執行及び戸籍に關する事項を掌りし所。後、民事・刑事の二局に分れ、大正二年、又合して、法務局と呼び、同八年、再び、民事・刑事の二局に分る。

みんーげふ 民業【名】民營の事業。（官業に對して）

みんーけん 民權【名】『英 People's rights』人民の、政事に參與する權利。

みんけんたう 民權黨【名】民權の擴張を主義とする黨派。

みんーこ 民戸【名】**みんをく**（民屋）に同じ。

みんこうにっそ 岷江入楚【名】〔書〕源氏物語の、むづかしき語を考證詳註せしもの。中院通勝の著。五十五卷。國文註釋全書に收む。びんかうにっそ。

みんーこく 明國【名】明代の支那。明朝。

みんーごと 見事・美事【副】**みごと**（見事）の音便。大鏡「見ん事罰も當らず」

みんーざい 民財【名】人民の財產。人民の資財。民幣。

みんーさん 眠蠶【名】〔農〕『眠の字の音、正しくは**めん**』眠期中の蠶兒。やすみこ。ねむりこ。「作りたる詩。

みんーし 明詩【名】支那明時代の詩人の

みんーし 明史【名】〔書〕二十四史の一。支那明朝の歷史。清の世宗の世、保和殿大學士張廷玉等、勅を奉じて撰す。三百三十六卷（本紀二十四卷、列傳二百二十卷、志七十五卷、表十三卷、目錄四卷）。王鴻緒の明史藁に因りて增損し、康熙十八年編纂に著手して、乾隆四年に完成し、なほ考究の足らざる所は、又この後、勅命を受けて刊正せり。

みんーじ 民事【名】㊀人民の生活に關する事。㊁〔法〕私法上の關係。商事に對して）㊂〔法〕商法以外の私法上の關係。（商事に對して）㊃〔法〕**みんじじけん**（民事事件）の略。

みんじーかう 民事上の責任【名】〔法〕**みんじせきにん**（民事責任）に同じ。（「刑事上の責任」「懲戒上の責任」に對して）

みんしーかう 明史藁【名】〔書〕支那明代の歷史。三百十卷。清の王鴻緒の撰。帝紀を闕き、その他は、すべて整備す。**みんし**（明史）參照。

みんじーきんぢさん 民事禁治產【名】〔法〕民法によりて宣告せらるる禁治產。禁治產。（刑事禁治產に對して）

みんじーきんぢさんーしや 民事禁治產者【名】〔法〕民法によりて、禁治產の宣告を受けたる者。禁治產者。（刑事禁治產者に對して）

みんじーきよく 民事局【名】㊀開拓使の一局。勸業戸籍・驛遞地理等の事を掌りしもの。明治六年に設置し、同十四年に、課に改め、同十五年に、開拓使と共に廢せられたり。㊁司法省の一局。司法大臣統轄の下に、民事上の事件に關して、裁判所を監督する所。**みんけいきよく**（民刑局）・**ほふむきよく**（法務局）參照。

みんじーぐわいしや 民事會社【名】〔法〕商行爲以外の營利行爲を營む社團法人。商事會社に關する規定をすべて準用せらるれども、普通、單に會社と呼ぶものの內には含まれず。（商事會社に對して）

みんじーげんこくにん 民事原告人【名】〔法〕刑事訴訟に於ける原告の一。一の犯罪行爲が、同時に私法上の結果を生じたる場合に、公訴に附帶して、その被害に關する私訴を提起したる者。私權の保護は、民事裁判所に請求するが本則なれども、この場合に於ては、刑事裁判所に提起するものと定めらる。されど、民事原告人の性質は、民事訴訟に於ける原告と毫も異なる所なきものとす。

みんじーさいばん 民事裁判【名】〔法〕民事訴訟に關して、司法裁判所のなす裁判。（刑事裁判に對して）

みんじーさいばんしよ 民事裁判所【名】民事裁判をなす裁判所。（刑事裁判所に對して）**しやうじさいばん**（商事裁判）參照。

みんじーじかう 民事時效【名】〔法〕財產權を取得し、又は消滅せしむる時效。時效。（刑事時效に對して）

みんじーじけん 民事事件【名】〔法〕民事に關する訴訟事件。民事。（刑事事件に對して）

みんじーせいさい 民事制裁【名】〔法〕私法上の權利を侵し、又は、私法上の義務を怠りたる者が、法令の强行手段によりて受くる制裁。民事上の責任。（刑事制裁に對して）

みんじーせきにん 民事責任【名】〔法〕一定の不法行爲に基づきて、民事制裁を受けざるべからざる、法律上の地位。場合

によりては、民事制裁そのものの意に用ひらるる事もあり。民事上の責任。

みんじーそう 明詩綜【名】〔書〕支那明の洪武年間より崇禎年間までの、上は帝后より下は僧尼・道流まで、近くは宗親より遠くは蒂服に至るまでの三千四百餘家の詩を集めたるもの。一百卷。清の朱彝尊の撰。

みんじーそしょう 民事訴訟【名】〔法〕民事制裁を司法裁判所に請求する訴訟。民訴。(刑事訴訟・商事訴訟に對して)

みんじーそしょうーじけん 民事訴訟事件【名】〔法〕みんじじけん(民事事件)に同じ。(民事非訟事件に對して)

みんじそしょうーてつづき 民事訴訟手續【名】〔法〕民事訴訟の手續。

みんじそしょうてつづきーはふ 民事訴訟法【名】〔法〕㊀民事訴訟の手續を定めたる法律。我國現行のは、明治二十三年公布、翌年より實施。(刑事訴訟法に對して)㊁次條の略。

みんじそしょうはふーがく 民事訴訟法學【名】〔法〕民事訴訟法に關する法理を研究する學問。(刑事訴訟法學に對して)

みんじそしょうーひよう 民事訴訟費用【名】〔法〕民事訴訟に關して、當然生ずる費用額。卽ち書類書記料・飜譯料・印紙費・執達吏の手數料及び立替金・公告料・日當・止宿料・旅費等。

みんじーたんたうにん 民事擔當人【名】〔法〕刑事裁判所に、私訴の提起ありたる時、刑事被告人に代りて、損害賠償の責に任ずる者。卽ち被告人たる無能力者の監督義務者、又は、被告人たる被傭者の雇主など。

みんじーはん 民事犯【名】〔法〕ふほふかうゐ(不法行爲)の異稱。(刑事犯㊁に對して)

みんじーはんけつ 民事判決【名】〔法〕民事訴訟に對する、裁判所の判決。(刑事判決に對して)

みんじーひしょうじけん 民事非訟事件【名】〔法〕民事㊁に關する非訟事件。(民事訴訟事件また商事非訟事件に對して)

みんじーぶ 民事部【名】地方裁判所・控訴院・大審院にて、民事事件の審理・裁判をなす所。(刑事部に對して)

みんじーべっさいしふ 明詩別裁集【名】〔書〕ごてうしべっさいしふ(五朝詩別裁集)を見よ。

みんじん 民心【名】人民の心情。民情。民心、常無し【句】『書經の蔡仲之命篇に「皇天無ㇾ親、惟德是輔、民心無ㇾ常、惟惠之懷」とあり』人民の心は、政事に因りて、或は歸し、或は離る。「じ。

みんじん 民人【名】じんみん(人民)に同じ。

みんじゃう 民狀【名】人民の狀態。

みんじゃう 民情【名】㊀みんじん(民心)に同じ。㊁人民のありさま。

みんしゅ 民主【名】『書經の多方篇に「乃惟成湯、克以二爾多方簡一、代ㇾ夏作二民主一」とあり』人民の君主。

みんしゅう 民衆【名】㊀しゅうみん(衆民)に同じ。㊁ぶろれたりやに同じ。

みんしゅうーくわ 民衆化【名】民衆の物事になること。ぶろれたりやの傾向あること。

みんしゅうーげいじゅつ 民衆藝術【名】廣く一般の人人に理解せらるるを程度としたる藝術。

みんしゅうごらく 民衆娯樂【名】廣く一般の人人に理解せらるる程度を標準としたる娯樂。

みんしゅうせいぢ 民衆政治【名】でもくらいに同じ。

みんじゅうがくあん 明儒學案【名】〔書〕支那明代諸儒の小傳及びその學說を分合敍述せるもの。六十卷。清の黃宗羲の撰。「る國。

みんしゅーこく 民主國【名】民主國體なる國家の主權が國民全體に屬する國體。

みんしゅーこくたい 民主國體【名】〔法〕

みんしゅうせいぢ 民衆政治【名】でもくらいに同じ。

みんじゅうがくあん 明儒學案【名】〔書〕支那明代諸儒の小傳及びその學說を分合敍述せるもの。六十卷。清の黃宗羲の撰。「る國。

みんしゅーこく 民主國【名】民主國體なる國家の主權が國民全體に屬する國體。

みんしゅーこくたい 民主國體【名】〔法〕

民主政治の方式に依りて、一國の統治をなす政體。

みんしゅーせいぢ 民主政治【名】〔法〕一定の資格を有する人民の全部、又は、その人民の撰擧せる者を以て、會議體を組織し、その會議體が統治作用を總攬する方法の政治。平民政治。きようわせいぢ(共和政治)參照。

みんしゅーせいど 民主制度【名】民主政治の制度。「じ。

みんしょ 民庶【名】しょみん(庶民)に同じ。

みんしょく 眠食【名】『眠の字の音、正しくはめん』㊀眠ることと、食ふことと。㊁每日の起居。日日の生活。

みんせい 民生【名】『左傳の宣公十二年の條に「篾ㇾ之曰、民生在ㇾ勤」とあり』人民の生活。

みんせい 民性【名】人民の性情。「論。

みんせい 民聲【名】人民の聲。一世の輿

みんせい 民政【名】〔法〕公共の安寧の維持と、國民の幸福の增進とを主なる目的とする政務。(法政國政に對して)

みんせいーし 民政司【名】明治元年、會計官の所管の下に、知司事・判司事・權判司事の職員ありて、民政上の事務を掌る所と定め、開司するに至らずして、同二年、廢せし役所。

みんせいーししょ 民政支署【名】みんせいしょ(民政署)を見よ。「次條を見よ。

みんせいーししょちやう 民政支署長【名】關東州を二區に分ちて、その各區に置かれ、關東都督の指揮・監督の下に、法律命令の施行と、部內の行政事務の管理とをなす役所。又、州內須要の地に、その事務を分掌するために、民政支署あり、民政署には民政署長(都督府の事務官、これに充てらる)、民政支署には、民政支署長ありて、これを統ぶ。「條を見よ。

みんせいーしょーちやう 民政署長【名】前官設に對して)

みんせん 民選【名】人民の選擧すること、又その選擧せるもの。(官選に對して)

みんせんーぎゐん 民政議員【名】人民の選出せる議員。代議士。

みんせんぎゐん 民選議院【名】㊀民選議員を以て組織する議院。代議院。㊁明治七年、前參議副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平・前東京府知事由利公正・前左院少議官小室信夫・前大藏大丞岡本健三郎及び古澤滋(ジヤ)の八人が建議して、代議政治の機關たらしめんとせしもの。當時未だ政府に採用せられず、且つ臺灣・佐賀・熊本・秋月・萩・鹿兒島等の戰亂、並びに江華島の事變等ありて、その說、一時中止せり。されど、この建議により、民權論漸く世に喧しく、十二年、又、愛國社の國會開設の請願となり、十三年、岡山縣の有志者及び福岡の共愛會、亦これを建白し、十四年に至りて、遂に二十三年に國會を開くべき詔勅發せらるるに至れり。

みんそ 民訴【名】みんじそしょう(民事訴訟)の略。「じ。

みんーぞく 民俗【名】みんぷう(民風)に同じ。

みんーぞく 民族【名】『英 People 獨 Volk』

その一部に屬する行政命令。

みんせいーちやら 民政長【名】ふせいし(布政使)を見よ。「次條を見よ。

みんせいーちやうくわん 民政長官【名】關東都督府との一部局。軍政以外の一切の行政事務を掌る所。その長官を民政長官といひ、勅任官にして、臺灣總督府にては關東都督府には臺灣總督、關東都督を佐けて、部務を總理す。

みんせき 民籍【名】㊀『孔氏雜說に「東漢定二民籍一頗苦二勞擾一、今之造二戶口簿一、卽不ㇾ如ㇾ此也」とあり』人民の戶口を調査して記したる帳簿。㊁こくせき(國籍)に同じ。㊂へいみんせき(平民籍)に同じ。

みんせつ 民設【名】人民の設立すること、又、その設立せるもの。民立。(公設・官設に對して)

人民の種族。祖先・言語・習慣・風俗等を同じくせる人類。例へば、日本人は大和民族といふ一類を成し、支那は、漢民族、滿洲民族、蒙古民族、西藏(チベット)民族、土耳古(トルコ)民族の五類より成り、歐羅巴の住民はラテン・チュウトン・スラブの三大民族に大別せらるる類。

みんぞくけう 民族教 【名】『佛 Nationale Religion』各民族に特有なる宗教。

みんぞくし 民族史 【名】或民族の起源、及び發達を敍したるもの。

みんぞくしんりがく 民族心理學 【名】〔哲〕『獨 Völkerpsychologie』心理學の一。各民族に特有なる心理狀態を研究するもの。國民心理學。(社會心理學などに對して)

みんぞくしゅぎ 民族主義 【名】國家は、同一民族を以て組織すべしといふ主義。又、自國の權力の下に、自國民と同一の民族を統一せしめんとする主義。國民主義。

みんぞくせい 民族性 【名】『獨 Volksgeist』各民族に特有なる性質。民族精神。

みんぞくせいしん 民族精神 【名】前條に同じ。

みんそん 民村 【名】人民の住める村。むら。村落。盛衰記「民村・白屋の外土に、八重の褥に埋もれたまへる事」

みんだい 明代 【名】支那明の代。

みんたう 民黨 【名】官に在らざる者より成る政黨。野黨。

みんだん 民團 【名】きよりうみんだん(居留民團)の略。「略。(官地に對して)

みんち 民地 【名】みんいうち(民有地)の略。

みんち 民治 【名】『史記の樂書に「仁以愛之、義以正之、如此則民治行矣」とあり』人民を治むること。國内の政治。

みんちく 閩竹 【名】〔植〕竹の一品種。支那閩(フヒ)地の原産。甚だ矮小、盆栽などとして觀賞す。

みんづり【簔】 みづみづしきさま。紅梅千句(可觀)「みんづりと見ゆる若木やはたち花」

みんていけんぱふ 民定憲法 【名】〔法〕直接又は間接に、國民の制定したる憲法。白耳義(ベルギー)・佛蘭西・瑞西(スヰス)などの憲法、これに屬す。民的憲法。(欽定憲法・議定憲法に對して)

みんてう 明朝 【名】一支那明の朝廷、又その國。二支那宋朝に起りしものなれど、明朝の時、我國に傳はりしよりいふとぞ』木版又は活字の書體の、縱の畫(カク)は太く、横の畫は細きもの。(清朝(テンチヨ)に對して)三掛物の表具法の一。

みんてう 明兆 【名】〔人〕畫僧。淡路國物部(モノノベ)鄉の人。東福寺の大道禪師に師事し、應永中、東福寺の南明院に住し、本寺の殿司(テンス)となりしより、人呼びて、兆殿司といへり。繪は專ら李龍眠の風格を學び、從つて、設色の佛畫多く、巨幅なり。永享三年寂す。年八十(一說に八十一)。兆殿司。

みんてうくわつじ 明朝活字 【名】明朝(二)の活字。(清朝(テンチヨ)活字に對して)

みんてうしき 明朝式 【名】ふくろへうぐ(袋表具)を見よ。

みんてうとぢ 明朝綴 【名】我國在來の製本の上下の、角に二重に、絲を掛けたるもの。

みんてき 明笛 【名】明樂に用ふる横笛。清笛(テキ)と、全長、形狀すべて同一なれども、それよりも、一孔下りて、調子低し。

みんど 民度 【名】人民の生活・開明の程度。

みんど 民帑 【名】みんざい(民財)に同じ。

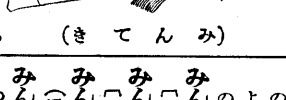
みんとく 民德 【名】人民の道德。社會の道義。

みんな 【名】みな(皆)に同じ。

みんなみ 南 【名】みな(皆)に同じ。

みんなみむき 南向 【名】みなみ(南)の音便。

みんなみむき(南向)の音便。 竺「北にすこし寄りて、みんなみむきにおはす」


(きてんみ)

みんぱふ 民望 【名】『左傳の襄公二十五年の條に「人謂二崔子一必殺レ之、崔子曰、民之望也、舍レ之、得レ民」、孟子の離婁下篇に「寇至則先去爲二民望一、寇退則反」とあり』人民の仰望する所。衆望。輿望。

みんぱふ 民法 【名】〔法〕『佛 Droit civil 獨 Bürgerliches Recht』一私法の一。私人と私人との關係を規定したる普通法。二次條の略。

みんぱふがく 民法學 【名】〔法〕民法の法理を研究する學問。

みんぱふしかうはふ 民法施行法 【名】新民法の實施に關し、舊民法の下に生じたる事件を、それぞれ適當に處置すべき必要の事項を規定したる、民法附屬の一法律。

みんぴ 民費 【名】人民より支出する費用。(公費・官費に對して)

みんぴざ 明人 【名】支那明代の人。娼妓の異稱。…などと、明人も言うておきたれば」

みんぶ 民部 【名】みんぶしやう(民部省)の略。(主に、その職員の上にいふ)

みんぶしやう 民風 【名】人民の風俗。民俗。

みんぶきやう 民部卿 【名】一民部省(一)の長官。かきべのかみ。こぶしやうし。二民部省(二)の長官。たみのつかさのかみ。

みんぶきやうにふだう 民部卿入道 【名】〔人〕ふぢはらためいへ(藤原爲家)に同じ。

みんぶきやうほふいん 民部卿法印 【名】〔人〕まへだけんい(前田玄以)の異稱。

みんぶくわん 民部官 【名】みんぶしやう(民部省)二を見よ。

みんぶしやう 民部省 【名】一王朝時代の八省の一。卿・大輔・少輔・權大輔・權少輔大丞・少丞・大錄・少錄・史生(シジヨウ)・省掌・使部・直丁(ヤクテイ)の職員ありて、人口を檢し、戸籍を勘へ、租・庸・調を知り、國用を支度し、節義を旌表し、課役を免じ、孤寡を優恤し、家人・奴婢を知り、道路・橋梁・津濟・山川・藪澤・田鄉等を管し、圖帳を具して、按檢に便ずる等の事を掌りしもの。廳舍は、大内裏に於ける太政官の南、美福門大路の西に在り。八省の中、中務(ナカツカサ)・式部の二省の次に位し、長官卿は、正四位下なれども、古來、四位にて任官せし者なく、多くは、公卿・納言以上の者兼任せり。淳仁天皇の代、一時戸部省と改稱せしことあり。たみのつかさ。唐名、戸部。二明治初期の各省の一。卿・大輔・少輔・大丞・權大丞・少丞・權少丞・史生(シジヨウ)・省掌・使部の職員ありて、戸籍・租稅・驛遞・鑛山・濟貧・養老等の事を掌りしもの。明治元年設置の内國事務掛に起り、二年、内國事務局と改め、閏四月に廢止し、二年四月、民部官設置せられて、知官事・副知官事・判官事・權判官事・書記・筆生・官掌・給仕・使部・門番の職員あり、聽訟・庶務・驛遞・土木・物産の五司これに屬せしが、七月、又、これを廢して、二年四月、本省の設立を見るに至り、地理・土木・驛遞の三司を管し、八月、大藏省と合併し、三年七月分立し、更に土木・驛遞・鑛山・通商・聽訟の五司を管し、更に社寺・鐵道・傳信機・燈明臺・横須賀製鐵所等の諸掛これに屬せしが、同月、通商司は大藏省に移され、地理・庶務の二司設けられ、その後も、多少の變更ありたる後、四年七月廢止せられ、内務省、これに代れり。「次條に同じ。

みんぶしやうきんさつ 民部省金札 【名】民部省通商局設置の不換紙幣。明治二年發行、二分札・一分札・二朱札・一朱札の四種ありて、表には、雙龍の中に「檢」の字の朱印及び方形に「信」の字の青印、裏には「確證」の二字の朱印あり。同九年通用を禁止せられたり。

みんぶしやうづちやう 民部省圖帳 【名】づちやう(圖帳)に同じ。

みんぶしやうせういふ 民部少輔 【名】民部省(二)の少輔。「の大輔。

みんぶたいふ 民部大輔 【名】民部省(二)の次官の一。民部大輔の下に位せしもの。戸部員外郎。

みんぶのたいふ 民部大夫 【名】民部省(二)の丞(元來は六位の官)にして、五位に

みんぶのじよう 民部丞 【名】民部省(二)の丞にして、大丞は正六位下に敍せられ、少丞は從六位上に敍せられしもの。戸部郎中。

みんぶのせう 民部少輔 【名】民部省(二)の次官の一。民部大輔の下に位せしもの。戸部員外郎。

殺せられしもの。

みんぷの-たいふ 民部大輔【名】民部省(一)の次官の一。民部少輔の上に位せしもの。「義勇兵。

みん-ぺい 民兵【名】民間にて編制する

みん-ぺい 明兵【名】明國の兵。

みんぺい-やき 珉平焼【名】『淡路國三原郡伊賀野村の人賀集珉平の焼きはじめしよりいふ』**あはちやき**(淡路焼)に同じ。

みん-ぼく 民木【名】民有の樹木。

みんぽん-しゅぎ 民本主義【名】『亞米利加合衆國第十六代の大統領リンコルン(Abraham Lincoln)の「人民のための人民の政治」といくる語に本づく』**てもくらしい**に同じ。

みん-まつ 明末【名】支那明代の末期。

みん-みん【名】〔動〕**みんみんぜみ**(蜩蠑)の「聲。略。

みん-みん【名】【貌】みんみん蟬の鳴く

みんみん-ぜみ 蜩蠑【名】〔動〕有吻類に屬する昆蟲。蟬類の一。長(タケ)一寸餘、胸部の中央、幅廣し。黒色にして、綠色の斑紋多く、翅は透明にして、その脈は綠色を呈し、その緣に近く、脈上に、灰色の斑列あり。九州にては、山地にのみこれを見れども、本州中部以北にては、平地にも棲み、鳴く聲、みんみんと聞ゆ。てうれう。みんみん。



(みぜんみんみん)

みん-めい 民命【名】人民の生命。

みん-めいしん-げんかうろく 明名臣言行錄【名】〔書〕朱子の宋名臣言行錄に倣ひ、支那明代の官吏に就きて、官爵の如何を問はず、品行の觀るべきものを集め記したるもの。九十五卷。明の徐開任の撰。

みんやく-けんぽふ 民約憲法【名】〔法〕

みんていけんぽふ(民定憲法)に同じ。

みんやく-せつ 民約說【名】〔法〕『英 Theory of social contract』國家と法律との起源を、人民各自の自由意志の合致の結果に出づるものとする學說。歐羅巴にては、希臘のエピクロス(Epikuros)羅馬のルクレチウス(Lucretius)、和蘭のグロチウス(Grotius)、英國のホッブス(Hobbes)等、これを唱へ、佛蘭西のルソオ(Rousseau)これを完成して、佛蘭西大革命を誘致するに至れり。社會契約說。

みん-りつ 民立【名】**みんせつ**(民設)に同じ。(公立・官立などに對して)

みん-りつ 明律【名】〔書〕支那明代の法律を纂輯せるもの。大抵唐律に擬して編纂し、名例律四十七條、吏律三十三條、戶律九十五條、禮律二十六條、兵律七十五條、刑律七十一條、工律十三條、すべて三十卷。刑部尚書劉惟謙の勅を奉じて撰せり。我國荻生徂徠の明律國字解二十卷あり。一名、大明律。

みん-りん 民林【名】**みんいうりん**(民有林)の略。

みん-りょく 民力【名】人民の財力又は民力休養【句】納稅負擔を輕減して、民力に餘裕あらしむること。

みん-をく 民屋【名】人民の家屋。民家。民居。民戶。

みめ 御妻【名】妃・嬪・女御などの敬稱。〔古語〕枕「妃、ミメ」同「嬪、ミメ」

みめ 見目【名】(一)見たる感じ。すがた。様子(ヤウス)。枕「鳥の寢て、夜中ばかりに、いねさがなく落ちまろび、木傳ひて、寢おびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみめにはたがひて」榮花「みめのおどろおどろしうきらきらかなる事は、又、世にめづらかに候ひつるわざかな」(二)顏の様子。かほだち。容貌。〔眉目〕枕「法師の、……、經、たふとく讀み、みめ清げなるにつけても、女にあなづられて」(三)ほまれ。てがら。みえ。面目。體面。を倒すがみめでは無い。商賣せいでも、大事ない」

みめは果報(クワウ)の基【句】容貌美しき女は、幸運を得。〔諺語〕永代藏「みめは果報の一つと、これを聞傳へて」

みめは幸の花【句】前條に同じ。〔諺語〕平家「みめは幸の花なれば、三位、この女房を賜はりて、互の志淺からず」

みめより心【句】人は、容貌は醜くとも、心のうるはしきが善し。〔諺語〕

みめい 未明【名】夜の、未だ全く明けきらぬ時。昧爽。黎明。

みめう 御廟【名】**べう**(廟)の敬稱。ごべう。平家「この御山に上り、御めうの扉を押開き、御衣を著せ奉らんとしけるに」

御廟の大師【句】〔人〕(一)**じゑだいし**(慈慧大師)の異稱。〔天台宗の話〕(二)**ほふねんしやうにん**(法然上人)の異稱。〔淨土宗の話〕

みめう 微妙【名】**びめう**(微妙)に同じ。(佛教の事物にいふ時に用ふ)太平記「嚴淨(ゴンジヤウ)の宮殿(クウデン)、微妙の淨刹」謠曲(加茂)「影向(ヤウガウ)微妙の相好(サウゴウ)莊嚴(シヤウゴン)」

みめう-だいし 微妙大師【名】〔人〕**ふぢはらぢふさ**(藤原藤房)を見よ。

みめ-かたち 見目形・眉目形【名】見目(一)と、姿と。容貌と風姿と。榮花「みめ形心ばせ、身の才(ザエ)など」

みめ-ぐらす 見廻らす【動四他】**みまはす**(見廻す)に同じ。源氏「やうやう見めぐらして、母君の見えぬを求めて」

みめ-ぐらはす 見廻らはす【動四他】前條に同じ。〔古語〕夫木「いづくぞと見めぐらはせど天の原木の枝だにも見えずもあるかな」

みめぐり 三圍【名】**みめぐりいなり**(三圍稻荷)の略。柳樽「三圍の鳥居思はせぶりに見え」

三圍の雨【句】俳人其角の、三圍稻荷にて、雨を祈りし結果、降りたりといふ雨。柳樽「三圍の雨はゆたかの折句(ヲリク)なり」

三圍の土堤(ヅツミ)【句】東京隅田川の土堤の、三圍稻荷の前に當れる處。

みめぐり 見廻・見巡【名】見めぐること。みまはり。巡廻。巡視。其角「夕立や田をみめぐりの神ならば」

みめぐり-いなり 三圍稻荷【名】次條を見よ。蜀山人「鳥居半出大川端、遙指三圍稻荷壞」

みめぐり-しんじや 三圍神社【名】東京市本所區向島(ムカフジマ)小梅町に鎭座せる社。祭神は倉稻魂(ウカノ)命。鎭座の年代は詳かならず。佛人其角の雨を祈りし事蹟傳はれり。三圍稻荷。

みめぐる 見廻る・見巡る【動四他】**みまはる**(見廻る)に同じ。親詞(出雲國造神賀詞)「天の八重雲を押別けて、天翔り、國翔りて、天の下を見廻りて」

みめ-ざま 見目樣【名】見目(二)のさま。みめかたち。醒睡笑「少人の內、みめざま、世にすぐれしを、こきんと呼ぶ」

みめ-すがた 見目姿【名】**みめかたち**(見目形)に同じ。若風俗「見目姿うるはしき」

みめづ 見愛づ【名】【動下二他】見て愛づ。見て賞す。空穗「うち泣きたまふもあり、見めでたまふもあり」

みめ-めつこ 御女子【名】**めつこ**(女子)の敬稱。〔古語〕蜻蛉「母に奉(マツ)りつやめつこの刀自(トジ)」父に奉りつやみめつこの刀自」

みめより【名】菓子の一。金鍔燒(キンツバヤキ)の、四方を燒きて、上餡を用ひたるもの。

みめ-わる 見目惡【名】見目(二)のみにくきこと、又その人。平家女護島「後家ぐるひせよ、見目わる」

みも 御裳【名】**も**(裳)の敬稱。記「投棄つる御裳に成りませる神の名(ナ)は時置師神(トキオカシノカミ)」

みも 御喪【名】**も**(喪)の敬稱。記「喪禮、「ミモノコト」

みもじ 味文字【名】『**もじ**(文字)は接尾語』**みそ**(味噌)を云ふ。〔女の話〕

みもすそ 御裳濯(ミモスソ)【名】〔地〕(一)次條の略。山家「みもすその岸の岩根に世をこめて圓め立てたる宮柱かな」(二)謠曲の一。伊勢國御裳濯川に、興玉(オキタマ)の神現れて、古事を語り、御代を祝ふ事を作れるもの。

みもすそ-がは 御裳濯川【名】〔地〕『倭姫命(ヤマトヒメノミコト)、御裳の汚れたるを濯ぎたまひし故事に本づきていふ由、倭姫命世紀に見ゆ』**いすずがは**(五十鈴川)に同じ。後拾遺「君が代は盡じとぞ思ふ神風やみもすそ川の淸まん限は」

御裳濯川の末【句】天照大神の御子

孫、卽ち我國の皇統。後鳥羽院集「神風や八重の榊葉かさねても御裳濯川の末ぞ遙けき」

御裳濯川の流(ナガ)【句】前條に同じ。保元「日本は、これ、神國なり。されば、御裳濯川の流絶えずして」平家「今ぞ知る御裳濯川の流には浪の下にも都ありとは」

みもそずのうたあはせ 御裳濯歌合【名】西行法師が、自歌のみを以て、三十六番に組みし歌合。著聞「圓位上人、昔より自らが詠みおきて侍りける歌を抄出して、三十六番につがひて、御裳濯の歌合と名づけて、いろいろの色紙をつきて、慈鎭和尙に清書を申し、俊成卿に判の詞を書かせけり」

みもだえ 身悶【名】みもだゆること。一代男「身もだえして、蚤を探し」

みもだゆ 身悶ゆ【下二自】身を動かす程に苦しむ。娥歟留多「締殺してもらひたい、と身悶えそそる折から」

みもち 身持【名】㊀身の體面を保つこと。一身のとりさばき。おこなひ。品行。一代女「身持卑しく、脚布(キャ)のつぎを黒めるも尤もぞ」㊁子を孕むこと。妊娠。懷胎。大鏡「ただ人にならせたまひぬれば、御果報の及ばせたまはぬにや、さやうの御身持に、久しくはたもたせたまはぬとも定め申すめりき」

みもちあげ 身持上【名】財産の增加に伴なひて、以前より奢りたる生活をなすこと。新永代藏「女房は、以前辛苦せし時の事を忘れず、人に高ぶらず、身持上ぜず」

みもちをんな 身持女【名】子を孕みてある女。はらみをんな。妊婦。

みもと 身元・身許【名】その人の出所。族籍・身分・資力など。素姓(スジョウ)。

みもときん 身元金【名】**みもとほしようきん**(身元保證金)の略。

みもとしようしよ 身元證書【名】人の身元を證明する文書。「調ぶること。

みもとしらべ 身元調【名】身元を取りみもとひきうけ 身元引受【名】**みもとほしようにん**(身元保證人)に同じ。

みもとほしよう 身元保證【名】他の身元を保證すること。

みもとほしようきん 身元保證金【名】身元保證の擔保として提供する金。みもときん。

みもとほしようにん 身元保證人【名】他人の身元を保證する人。みもとひきうけにん。

みもとめいさいしよ 身元明細書【名】身元を明細に記載せる文書。

みもどる 見戻る【動四自】見てより戻る。一代男「紋挑灯の櫺麥(シガデ)、今に替らぬかと、くらがりよりの惡口、離聞違へて見戻れば」

みもの 御食【名】**おもの**(御物)㊀㊁に同じ。【古語】紀「食、ミモノタテマツルコト」

みもの 見物【名】觀て目ざましき物。見事なる物。源氏「人の袖口さへ、いみじき見ものなり」曠野(文臟)「青くとも木賊(トク)は冬の見物かな」㊁傍より物事を見ること。けんぶつ。

みものおもひ 諒闇【名】『**ものおもひ**(物思)の敬稱』天皇の喪。りやうあん。【古語】紀「諒闇、ミモノオモヒ」

みもひ 御水【名】『**もひ**(舀)の轉義。みは接頭語』飲用水の異稱。おもひ。【古語】催馬樂(飛鳥井)「飛鳥井にやどりはすべしかげもよしみもひも寒しみ秣もよし」

みもん 未聞【名】未だ聞かぬこと。

みもらす 見漏す【動四他】**みおとす**(見落す)に同じ。

みもり 見守【名】見まもること、又その役。看守。曾丹集「里遠み作る山田の見もりすと立てるそほづに身をぞなしつる」

みもり 御室・三諸・御諸【名】㊀**みむろ**(御室)㊁に同じ。一說に、**ひむろぎ**(神籬)に同じきかと。【古語】紀「みもろに築(ツ)くや玉壘つき餘し」萬葉「わがやどに御諸を立てて枕邊に齋瓮(イハヒベ)を据ゑ」㊁【地】次條の略。萬葉「三諸は人の守(モ)る山」

御室つく【句】神のために、御室を齋(イ)き造り奉る。或は御室を築(ツ)く意か。【古語】萬葉「三諸(ミモ)著く鹿背(カセ)山の際(マ)に開(サ)く花の色珍しく」

みもろやま 三諸山・御室山・御諸山【名】【地】『神を祀れる山の義にて、元來は固有名詞にあらざるなるべしといふ』㊀大和國三輪山の古稱。三室(ミムロ)山。紀「此(コ)は、御諸の山の上(ヘ)に坐(マ)す神なり」㊁大和國雷岳(ナルカヅチ)の古稱。一名神南備(カミナビ)山。萬葉「月も日もあらたまれども久(ヒサ)に經る三諸(ミモロ)の山の外(ト)つ宮どころ」㊂大和國龍田山の異稱。

みや 宮【名】『御屋の義』㊀格段なる神靈を祀れる家。神宮。又、天皇・皇族・皇親の住みたまへる家の敬稱。宮殿。稀には、佛像を安置せる家、卽ち寺にもいへり。紀「造二佛像一既訖、不レ得二入レ堂一」萬葉「いにしへを思ほすらしもわが大君吉野の宮をあり通ひめす」齋襄記「この宮は、伊豫の三島を祝ひ奉り」㊁皇親・皇族の敬稱。落葉「御女の女御、御后に居たまひぬ。宮の亮(スケ)に、少將を中將になしてなんせさせたまひける」太平記「宮は、不思議の御命を續がせたまひ」㊂親王家の稱號。【地】『熱田神宮の所在地なるよりいふ』尾張國熱田(アツタ)(今は名古屋市の一部)の異稱。あづま路の記「宮(尾張國熱田郡)より鳴海へ一里半、此所に、熱田の宮あり。故に、世人、爰を宮といふ。本名は熱田なり」鵜衣「看は、宮の夕あがりを荷ひ連れ」【地】**うつのみや**(宇都宮)の略。㊃**さいぐう**(齋宮)の略。源氏「大將は、……、宮の御返(カヘ)のおとなおとなしきを、ほほゑみて見ゐたまへり」㊄宮殿に住みたまへるによりていふ』天皇の御子孫。古は皇子又は皇女に限り、中世以來は、皇子の御子をも稱し、後世は、親王家の方方をもいふこととなれり。又、皇子・皇女の場合には、降誕の順序によりて、一の宮、二の宮、三の宮など、男女の別によりて、男宮・女宮・姫宮など、又、雙方を合はせて、男一の宮・女一の宮など申し、長幼等の意にて、兒(ヂ)宮・いと宮・若宮・今宮などいひ、官名・住所を冠して、彈正宮・帥宮(ソチノミヤ)・兵部卿宮・高倉宮などいふ例あり。今昔「村上の御代に、古き宮の御子にて」㊅世襲親王家の制起りてより後、地名などを冠して、何宮と稱し、その親王家の苗字の如く用ふるに至りたるもの。例へば、有栖川宮・閑院宮・伏見宮など。

宮の大饗(ヤウダイキャウ)【句】「二宮(ニノミヤ)の大饗」に同じ。榮花「昨日の宮の大饗いかがありし」

みやいち 宮市【名】仁明天皇の頃、遣唐使などの歸朝せし時、持ち還りたるかの國の貨物を、建禮門の前に置き、官人等に交易せしめしもの。續後記「建禮門前張二立三幄一、置二雜唐物一、內藏寮官人及內侍等交易、名曰二宮市一」

みやう 見樣【名】見る方法。みかた。見樣、見眞似(ミマネ)【名】「見るを見眞似」の訛。浮世風呂「見やう見眞似に、江戸の女までが、この頃は、ちらほら眞似やす」

みやう 名【名】**みやうでん**(名田)の略。東鑑「重安名田(高野冠者)、永平名(二品宇佐美三郎)、松平名(四方田五郎)、弘技名(一河別當)、彌安富名(岡部六郎太)、武久名(加藤太)、高垣名(親能)、安淸名(澁谷五郎)」

みやう 明【名】㊀**みやうにち**(明日)の略。㊁【佛】『煩惱(ボン)の闇(ヤミ)を破するによりていふ』**ちゑ**(智慧)㊁に同じ。㊂【佛】**しんごん**(眞言)に同じ。「鍐字(シッジ)の明」參照。

みやう 冥【名】㊀『冥冥の中にましますよりいふ』神佛。平家「我が威勢のある時は、冥の照覽をも憚らず、人の辛苦をも痛まず」正統記「常に冥の知見をかへりみ、神の本誓を覺りて、正に居せんことを心ざし」㊁【佛】煩惱(ボン)。無知。冥闇(ミャウアン)。無明(ミャウ)。

みやう-あん 冥闇・瞑闇【名】〔佛〕前條㊀に同じ。 平家「父大介も君のために、命を捨てし兵なれば、かの義明が黄泉の冥闇を照さんがため」 太平記「六趣の群類の瞑闇を照す慧光(ヱクワウ)の燈明なるに」

みやう-あん 明闇【名】この世と、あの世と。幽冥(イウメイ)。 謡曲(泰山府君)「そもそも、これは、五道の冥官(クワンヤウ)泰山府君なり。我、人間の定相(ヂヤウサウ)を守り、明闇二つを守護する處に」

みやう-あん 明庵【名】〔人〕えいさい(栄西)の號。

みやうあん-じ 明暗寺【名】前橋市榎町にある眞宗の寺。下總國猿島郡一ノ谷より、親鸞の弟子、成然房の遺跡、妙安寺を移せるもの。

みやう-え 明衣【名】じやうえ(浄衣)㊀に同じ。

みやう-えつ 名謁【名】なだいめん(名對面)に同じ。 侍中群要「名謁事(玄二刻御了)」

みやう-おう 冥應【名】〔佛〕みやうがん(冥感)に同じ。 太平記「偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり」

みやう-おう 明應【名】後土御門天皇の御代の年號(紀元二一五二—二一六一年)。

みやう-おん 冥恩【名】〔佛〕神佛の、冥冥の裡に、衆生(シユジヤウ)に下したまふ恩德。 盛衰記「天照太神の冥恩なり」

みやう-が 冥加【名】〔佛〕㊀神佛の、冥冥の裡に加被する利益(リヤク)。冥助(ミヤウジヨ)。冥利(ミヤウリ)。 新古今「阿耨多羅(タラ)三藐三菩提(サンボダイ)の佛たちわが立つ杣にみやうがあらせたまへ」 ㊁神佛の冥冥の裡に下したまふ罰。天罰。「冥加、恐ろし」

㊂**みやうがきん**(冥加金)㊀㊁の略。

冥加無し【句】㊀冥加を得ず。 盛衰記「勇士たりと云へども、冥加なく、辱疾、軍を破らる」 ㊁勿體(モツタイ)無し。おそれ多し。 保元「兄に向つて弓引かんこと、冥加なきに非ずや」 新版歌祭文「冥加なき事、おっしゃります」

冥加に餘る【句】過分の冥加を得て、非常に忝く感ず。特別の幸運に遭ふ。傾城反魂香「冥加に餘る仕合(シアハセ)ながら」 生駒朝顏話「これは、まあまあ、冥加に餘る事、お禮申さで、殘多い」

冥加に叶ふ【句】冥加を得て、忝く感ず。冥利に叶ふ。

冥加に盡く【句】行ふ所、神佛の意に背き、冥加㊀に預かるを得ざらんとす。神佛に見放さる。冥利に盡く。 蟬丸「二三日、五穀を食せず、……。ええ、冥加に盡きたり、口惜しし」

冥加も無し【句】みやうがなし(冥加無し)に同じ。 夕霧阿波鳴渡「ああ、冥加も無い、ありがたい」 新版歌祭文「冥加も無いお見舞戴きますると」 「誤。

みやう-が 茗荷【名】〔植〕めうが(蘘荷)の誤。

みやう-かい 冥界【名】〔佛〕㊀六道の内、地獄・餓鬼・畜生の三道。三惡道。三途(サンヅ)。冥道(メイダウ)。 ㊁ぢごく(地獄)に同じ。 盛衰記「閻魔羅城大極殿、……開白(カイビヤク)・說法して、十萬僧讀經す。その聲、冥界に充ち滿ちて、その益(ヤク)、罪垢(ザイク)を洗ひぬべし」

みやう-が 名香【名】名高き香。すぐれたる香。 源氏「そらだき物、心にくく薫り出で、名香の香(カ)など、にほひみちたるに」 同「御簾(ミス)の内のにほひ、いと物深き黒方(クロボウ)にしみて、名香の煙も、ほのかなり」

みやう-がう 名號【名】〔佛〕㊀諸佛・諸菩薩の御名。 狂言(枕物狂)「地藏の名號でも唱ひやらいでの」 ㊁「彌陀の名號」の略。 平家「彌陀の本願を强く信じて、ひまなく名號を稱へ奉るべし」 大原問答書「名號の六字に、恆沙(ゴウヂヤ)の功德備はるなり」

名號不思議【句】〔佛〕彌陀の名號の、惡人成佛(ジヤウブツ)の法にして、その廣大無邊の德は、思議すべからざること。九字の名號【句】〔佛〕「南無不可思議光如來」の九字。

十字の名號【句】〔佛〕名號㊁の一。「歸命盡十方無礙光如來」の十字。

名號の六字【句】〔佛〕「南無阿彌陀佛」の六字。

四字の名號【句】〔佛〕「阿彌陀佛」の四字。

六字の名號【句】〔佛〕「南無阿彌陀佛」

みやうがう-うた 名號歌【名】「な・む・あ・み・だ・ぶつ」(南無阿彌陀佛)の七字の假名を、一字づつ頭に置きて詠みたる、七首の歌。 理慶尼の記「みやうがう歌に詠まれけるやう」

みやうかう-ざん 明高山【名】〔地〕めうがうざん(妙高山)に同じ。

みやうがう-れんか 名號連歌【名】天滿宮の名號を記したる軸を床に掛けて、連歌の會を催すこと。平日の連歌の會には、神影を掛けくるなり。

みやうが-えい 冥加永【名】『えい(永)は永樂錢の義』江戸時代に、營業上の特權を與へられたる者の、冥加金㊀として、上納せし金錢。卽ち一種の營業稅。

みやうが-きん 冥加金【名】『冥加の利益を得んとして奉る金の義。又は冥加に感謝する意より獻納する金の義』㊀社寺への寄付金又は賽錢。冥加錢。冥加。 ㊁江戸時代に、豪商などが、幕府に上納せし金。請願して、上納する場合と、幕府よりの命名によりて、上納する場合とありたり。冥加錢。冥加。

みやうがぎん 冥加銀【名】前條に同じ。

みやうがぎ-しらず 冥加不知【名】冥加の忝きを感ぜぬこと、又、その人。 津國女夫池「冥加知らず、命知らず、作法知らずのあばれ者」

みやうがせん 冥加錢【名】みやうがきん(冥加金)に同じ。 萬葉千虹「冥加錢は御心持次第」

みやうが-なし 冥加無し【形 一】『なしは接尾語。無と書くは假借の文字』冥加に叶ひてあり。 淀鯉出世瀧徳「ああ、勿體(モツタイ)ない、冥加ない」 心中宵庚申「結構なお若衆樣の兄樣とは、かたじけない、冥加ない」

みやうが-なみだ 冥加淚【名】冥加を忝く感じて流す淚。 日本武尊吾妻鑑「勿體淚・冥加淚を引替へて、悦淚止まらず」

みやうが-まい-えい 冥加米永【名】『えい(永)は永樂錢の義』江戸時代に、或營業の特權を與へられたる者などが、自ら請願し、又は幕府よりの命令によりて上納せし米と金錢と。

みやう-かん 冥鑑【名】〔佛〕神佛の、冥冥の裡に、衆生(シユジヤウ)を照鑑したまふこと。みとほし。冥見(ミヤウケン)。冥覽(ミヤウラン)。 盛衰記「世世の臣公七社の冥鑑を仰ぐ」

みやう-かん 冥感【名】〔佛〕神佛に感應すること。信心の、神佛の靈に通ずること。冥應(ミヤウオウ)。 保元「諸寺・諸社に仰せて、冥感の政をぞ仰がれける」 謡曲(船辨慶)「神明・佛陀の冥感に背き」

みやうが-もの 冥加者【名】冥加のよき人。しあはせもの。

みやうぎ-しふ 名義集【名】〔書〕ほんやくみやうぎしふ(飜譯名義集)の略。

みやうぎ-き 名吉【名】〔動〕『なよし(名吉)の漢字を音讀したるもの』なよし(名吉)を云ふ。「伊勢國邊の方言」

みやう-ぎやう 明鏡【名】めいきやう(明鏡)に同じ。 謡曲(野守)「鬼神に枉道を正す明鏡の寶なれ」

明鏡臺(ダイ)に無し【句】〔佛〕『本來(ライ)無一物』を見よ』萬有の、假有(ケ)にして、執著すべきに非ざる譬。「諺語」 謡曲(卒都婆小町)「菩提(ボダイ)もと植木に非ず、明鏡また臺に無し」

みやう-ぎやう 明經【名】古の大學寮の學科中、明經道を修めしもの。十訓「明經には善淵(ヨシブチ)愛成(ナカナリ)、紀傳には藤原佐世(スケヨ)等」

明經の家【句】みやうぎやうはかせ(明經博士)を見よ。

みやうぎやう-せい 明經生【名】古の大學寮の學生中、明經道を修めしもの。二經以上に通ずる者は、貢擧(コウキヨ)により出仕するを得ることと定められたり。べつちよくせい(別勅生)參照。

みやうぎやう-だう 明經道【名】古の大學寮の學科四道の一。經書を講究せしもの。博士二人、助敎二人、直講二人(初は

三人）ありて、教授を掌り、經書は、毎帙の大小によりて、禮記（ライキ）・左傳を大經、毛詩・周禮（シウライ）・儀禮（ギライ）を中經、周易・尚書を小經とし、その註は、周易には鄭玄（テイゲン）と王弼（ワウヒツ）との註、尚書には孔安國と鄭玄との註を用ふる等の定制ありき。

みやうぎやうだう-ゐん 明經道院【名】古の大學寮の郭内、都堂院（トタウヰン）の南に在りて、明經道を講習せし學舍。一名、南堂。**さんだうだう**（三道堂）參照。

みやうぎやう-とくげふせい 明經得業生【名】明經生の、試問を經て及第せし者。

みやうぎやう-はかせ 明經博士【名】古の大學寮の博士の一。明經道の教授を掌る。定員一人、初は正六位下相當なりしが、後、五位の官となれり。中世、中原・清原兩氏の人、位次に依りて任ぜらるることとなり、江戸時代に及びては、中原氏は概ね助教となり、明經博士の官は、清原氏の族なる舟橋・伏原（フセハラ）二氏中、位階高き者任ぜられ、明經の家と呼ばる。清原氏のこれに任ぜられたるを傳博士、中原氏のを禮博士と呼びたり。前者は左傳を主とし、後者は禮記（ライキ）を主としに因る。律學博士。もと、單に博士とのみ呼び、又、大學博士ともいひ、後には、大博士と稱へたり。

みやうぐわ 猛火【名】**まうくわ**（猛火）に同じ。平治「猛火、空に滿ちて、暴風、烟雲を揚ぐ」

みやうくわ 冥火【名】〔佛〕冥界の火。地獄の火。平家女護島「吐く息も、冥火となつて、却て身をこそ焼きにけれ」

冥火の魍（アギ）【句】魍の物凄く赤きを、冥火の燃ゆるに譬へていふ語。日本振袖初「大蛇……冥火の魍は、利劍を吐き」

みやうぐわつ-てんし 明月珠【名】〔佛〕江中に生じて、江邊を照すと云ふ珠。又、鯨鯢死して、後、その目化して、明月珠となるとも云ふ。明珠。

みやうぐわつ-てんし 明月天子【名】〔佛〕**ぐわつてんし**（月天子）に同じ。

みやうぐわつ-まに 明月摩尼【名】〔佛〕

㊀熱毒を病む者この珠に觸るれば、病癒ゆと云ふ珠。月精摩尼。月光摩尼。㊁明月珠と摩尼珠と。

みやうくわん 冥官【名】〔佛〕閻魔の廳の官人。著聞「焔魔廳……冥官どもは、大床（ユカ）に列なりゐたり」盛衰記「閻魔羅城大極殿……、中門の廊に、各、十人の冥官有つて」「願」を見よ。

みやうぐわん 名願【名】〔佛〕彌陀の名（妙觀派）に同じ。

みやうぐわん-は 名官派【名】**めうぐわんは**

みやうげつ 明月【名】今月の次の月。來月。**よくげつ**（翌月）參照。

みやうけん 冥見【名】〔佛〕**みやうかん**（冥鑑）に同じ。太平記「冥見について、その恐あり」謠曲（谷行）「冥見、私無きままに」

みやうげん 冥顯【名】〔佛〕冥界と、顯界と。死後の世界と現生の世界と。盛衰記「東大寺と申すは、……伽藍の建立、他に異にして、冥顯にかたどり」太平記「此の如きの御願（ゴグワ）は、只冥顯の歸する所に任せらるべきにて候へば」「㊀に同じ。

みやうご 冥護【名】〔佛〕**みやうが**（冥加）

みやうご-にち 明後日【名】**あさて**（明後日）に同じ。

みやうご-ねん 明後年【名】**さらいねん**（再來年）に同じ。

みやうこん 命根【名】〔佛〕『華嚴經に「如人護ㇾ身先護二命根一」とあり』**めいこん**（命根）に同じ。

みやうこん 命魂【名】**めいこん**（命魂）に同じ。謠曲（土蜘蛛）「頼光の御内（ミウチ）にその名を得たる一人（ヒトリ）武者、いかなる天魔・鬼神なりとも、命魂を斷たん」

みやうさい 名西【名】〔地〕阿波國十郡の一。郡役所を石井町に置く。

みやうじ 名字【名】㊀**めいじ**（名字）に同じ。桑花「十千の魚、十三部經の首題の名字を聞きて、皆、忉利（トリ）天に生れたり」㊁中世以降、源・平・藤・橘、その他、諸氏の一族・次第に繁衍して、全國に擴がるに及び、同姓を以て呼びては區別しがたきより、自然にその開發・永住せる土地、又はその領地の名などを以て相呼ぶこと、一般の風習となるに至りしもの。例へば、藤原氏の中にて、京都の一條に住めるを一條といひ、九條に住めるを九條といひ、近衞通に邸宅あるを近衞といひ、加賀國に居りしを加藤、近江國に居りしを近藤、遠江國に居りしを遠藤といひ、源氏の中にても、上野國新田に居りしより新田、下野國足利に永住せしより足利といひ、又、平氏の中、伊豆國北條に居りて北條といひ、越前國織田に居りて織田と稱するに至りし類。又、地名のみならず、齋宮寮の職員たる藤原氏の義にて、齋藤といひ、木工（モク）寮の職員たる藤原氏の義にて、工藤といひ、武者所の職員たる藤原氏の義にて武藤といひ、藤原氏にして、太宰少貳の官を世襲せしを少貳といへる類の官職の名に本づけるもの、勸修寺（ケジュジ）・甘露寺・德大寺・西園寺などの類の寺號をそのまま用ひたるもの、又、楠木・榎木・柘植（ツゲ）・一柳などの如く、植物に因めるもの、鷲・鷲などの如く動物に因めるものなどもあり。要するに、氏を區分せる名稱にして、中世、姓（カバネ）と氏と混同して、「姓は藤原氏など記すに至りしと同樣に、氏と名字とも亦混同して、同一の性質を有することとなり、一條氏・九條氏など呼ぶに至り、從つて、名字に非ざる氏、即ち佐伯（サヘキ）・中原・大江・伴（トモ）などの類も、寧ろ名字として見る方適當なるに至れり。名字の因由、斯くの如くなるが故に、封建の世に至りても、名字を有するは、武士に限り、百姓町人以下は、ただ名あるのみにて、名字なく、明治維新後、始めて、四民平等に名字を稱すべきこととなれり。苗氏（ビヤウジ）。鷲尾合戰物語「氏・名字・官途等をよくよく糺すべし」醒睡笑「歲の暮の祝に、名字を遣るべき旨なり、目出度き事やといふ」

みやうじ 名字御免（ゴメン）【句】德川時代に、平民にして、特に、名字㊁を稱することを許可せられしこと。

名字帶刀御免（ゴメン）【句】德川時代に、平民にして、功勞ありしために、特に、士人と同じく、名字㊁を稱し、刀を帶ぶることを許可せられしこと。

名字・帶刀を許さる【句】前條に同じ。

みやうじ 名字の親【句】養子先の親。貴古敎信七葉廼「名字の親の孝行なさん」

名字の敵（カタキ）【句】同じ名字㊁に屬する者全部の敵。一門の敵。領城島原駐合戰「我等が名字の敵、親の敵も同然」

みやうじ 名字の侍（サムラヒ）【句】**さぶらひみやうじ**（侍名字）に同じ。

みやうじ 名字の沙彌（シヤ）【句】〔佛〕**みやうじやみ**（名字沙彌）に同じ。

みやうじ 名字の地【句】地名を取りて、名字としたる場合の、その土地。

みやうじ 名字の比丘（ビク）【句】〔佛〕名稱だけの比丘。比丘の名はありても、持戒せざる者。無戒（ムカイ）の僧。

みやうじ 名字の羅漢【句】〔佛〕名稱だけの羅漢。羅漢の名はあれども、羅漢の實なきもの。

みやうじ 名字拜領【句】君主の名字㊁を賜はりて、己の名字とすること。

みやうじ 名字朝臣【名】姓（カバネ）の朝臣を、その人の名の下に連ねて呼ぶこと。四位の參議に限る定なりき。例へば「親房朝臣」など。

みやうじ-き 名色【名】〔佛〕俱舍宗にて、托胎以後、六根が圓滿に成就するまでの間の五蘊をいふ。

みやうじ-さだめ 名字定【名】生れたる子に、名を附くること。東鑑「有二御名字定一、千萬君」

みやうじ-しやみ 名字沙彌【名】〔佛〕『二十歲以上は、僧たるべき年齡なるよりいふ。**みやうじ**（名字）㊁參照』**さんしやみ**（三沙彌）を見よ。

みやうじ-ぬすみ 名字盜【名】他人の名字を詐り稱すること、又、その人。曾我會稽山討手の實否（ジツピ）紛はしく、黃泉（クワウセン）の障（サハリ）も悼ましし、まことの仁田（ニタ）が面を見せ、名字盜を面縛させん、松明（マツ）ども出せと呼ばはれば）

みやうじ-しん 名神【名】創祀の年代古く、神統正しき、有名なる神。延喜式に載する所、伊勢大神宮・出雲大社・賀茂神社等、

すべて三百九座あり。

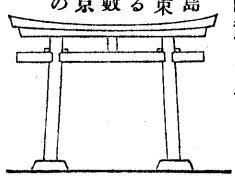
みやうじん 明神【名】一『前條の語の轉義なりといふ説もあれど、名神ならぬ神にもいへる例多ければ、明徳の神といふほどの義なるべしともいふ。或は、又、次項の佛教上の名稱を轉用せるものか』神の尊稱。後世、一層尊びて、大明神ともいふに至れり。二〔佛〕『明は智慧の照了する義、神は威徳測るべからざる義』諸天・鬼神の美稱。三『加茂神社の加茂と同音なるよりいふなるべし』かも(鴨)の隱語。〔俗侶の話〕根南志具佐「今時の坊主、表向は抹香臭い顔しながら、遊女ぐるひに浮身を窶し、曉を明神、葱を神主などと名づけ」

みやうじん-がう 明神號【名】神社の何何明神と呼ぶ名目。

みやうじん-さい 名神祭【名】古、大事ある毎に、諸國の名神に、臨時に使を遣して奉幣し奉られし儀。その幣は、各社共絁五尺、綿一屯、絲一約、五色薄絁各一尺、木綿二兩、麻五兩、裏料薦二十枚とし、大禱ある時は、なほ絁五丈五尺を加へ、布一端を絲一約に代へ得る定なりき。延喜式所載の名神中、二百八十五座あり。

みやうじん-だい 名神大【名】名神にして、大社たる社格あるもの。

みやうじん-どりね 明神鳥居【名】鳥居の形式の一。柱の傾斜甚しく、笠木・島木共に反轉し、額束(ガク)及び楔(ビサ)あるもの。鳥居の大多數は、この種に屬し、京都八阪(カサ)神社のは、最も大なり。



(ねりどんじうやみ)

みやうしやう 明匠【名】〔佛〕ほふしやう(法匠)の尊稱。著聞「比巴の明匠八人を召しける中に」

みやうし-しやう 明星【名】一きんせい(金星)に同じ。神樂歌〔明星〕「あかぼしは、みやうじやうは」二衆人のその徳光を仰ぐほどの人物の譬。三神樂歌の曲の一。一名、ほし。

みやうしゆ 明暁【名】「よ。明(ケ)の明星【句】きんせい(金星)を見よ。宵の明星【句】きんせい(金星)を見よ。

みやうじやう-せう 明星抄【名】〔書〕源氏物語を註釋せるもの。寫本にて、巻數は、十五册十八册・二十三册等、一定せず。三條西實澄の著。

みやうしやう-てんわう 明正天皇【名】〔人〕『元明・元正の兩女帝の御名より一字づつを取りて、諡とせられしなり』第百八代の天皇。御名は興子。後水尾(ゴミヅノヲ)天皇の第二皇女。御母は東福門院源和(ミナモト)子。在位十四年(紀元二二九〇—二三〇三)元祿九年十一月崩ず。御年七十四。

みやうしゆ 名主【名】領主に代りて、名田(ミヤウデン)を管理し、年貢を納めし者。一定の先例以外には、本所の許可を得ずして、漫に貢米を消費し、田地を寄付することを禁ぜられ、豐臣秀吉の諸國の莊(シヤウ)・鄉(ガウ)・保・名(ミヤウ)等の稱を廢するに伴なひて、この職も自ら廢す。名主職。東鑑「藤原行政爲二使節一下二向常陸國一是鹿島社領主名主貞家押二領御寄進地一之旨、御物忌依レ訴二申之一云云所二差遣一也」

みやうしゆ 冥衆【名】〔佛〕梵天・帝釋、諸の鬼神、閻魔王等、すべて人の目に見えぬ諸衆。盛衰記「四海・八方の冥衆」同「梵・釋・四王、龍神八部、冥官・冥衆に至るまで」

みやうしゆ 明珠【名】〔佛〕みやうぐわうしゆ(明月珠)に同じ。諺曲〔海士〕「明珠を、こと沖にて、龍宮人取られしをかづき上げしも、この浦の」

みやうしゆ-しき 名主職【名】みやうしゆ(名主)に同じ。

みやうしゆん 明春【名】明年の春。來春。

みやうしよ 冥助【名】〔佛〕みやうが(冥加)一に同じ。平家「兩箇の救願(グワン)、偏に冥助を仰ぐと、肝膽を摧きて祈念せられければ」太平記「吾が國無爲なりし事は、只、これ、尊神・靈神の冥助に依りしものなり」

みやうしよう 名稱【名】めいしよう(名稱)に同じ。盛衰記「當山は、これ、傳教大師草創の砌、……鎭護國家の道場、名稱まことに憑もしや」

みやうすう 名數【名】〔佛〕めいすう(名數)一に同じ。

みやうすい 【名】蓮の葉。「同じ。

みやうすいせき 明夕【名】みやうばん(明晩)に同じ。

みやうせき 名籍【名】にんべつ(人別)四「跡を相續す」

みやうせき 名跡【名】名字の跡目。「名

みやうせん 名詮【名】名が意を顯はすこと、又名に因みて、意を寄すること。下學集「名詮、ミヤウセン」安齋隨筆「名詮の事、杜魴(ヅハア)を討(テ)と取り、獍魴(ゲツハア)を勝と取り、昆布を廣めとも悦ぶとも取り、橙を代代と取り、交讓木(ユヅリハ)を讓(ユヅ)と取りて祝とする類を名詮といふ」

みやうせんじしやう 名詮自性【句】〔佛〕『唯識論に「依二語聲分位差別一而假建二立名句文身一、名詮二自性一、句詮二差別一」とあり』物の名は、その自體自性を顯はすこと。名實相應。猶豫合戰「鵜……堂塔を固めては散米を拾ひ、市町を廻りては菓子を荒す。誠にこれ名詮自性の黑賊なり」

みやうせん-じしよう 名詮自稱【句】前條の誤。

みやうだい 名代【名】一だいり(代理)二に同じ。三東京の遊郭にて、馴染の遊女の差支ある時、その代りに、同じ家の他の遊女を相方とすること。

みやうだい-にん 名代人【名】名代に立つ人。代理人。

みやうだい-べや 名代部屋【名】東京の遊郭にて、名代の娼妓と寢ぬる部屋。廻(クワイ)部屋と同じ室なるを、名代の娼妓の場合に、特に斯くいふ。

みやうだう 冥道【名】〔佛〕みやうかい(冥界)に同じ。一冥界の神。冥衆。大鑑「この御堂に影向(ヤウガウ)したまふらん神明・冥道たちも聞しめせ」太平記「日本一州の大小の神祇・冥道、皆、勤請に隨ひて、常陸の鹿島に來りたまふ」

みやうだう-ぐ 冥道供【名】〔佛〕台密の供養法の一。現世の罪障を消滅し、福壽を增進するために、閻羅王を本尊とし、蠟燭二百餘位を供養し、禮拜を行ひ、祭文を讀む。最澄の傳來に係るといふ。太平記「星供(シヤウ)・冥道供、藥師の十二神將の法」

みやうたん 明旦【名】みやうてう(明朝)に同じ。めいたん(明旦)參照。

みやうち-びさ 宮內人【名】みやびさ(宮人)一に同じ。金槐集「櫻花散らまく惜しとうち日さす宮內人ぞとのみぜりける」

みやうちん 明珍【名】〔人〕金工。本姓は增田。その祖宗德以後、甲冑並びに鐙の名工として、歷世、その業を次ぎ、名工輩出し、遂に甲冑の如きは、この一門の獨占ともいふべきに至り、明珍の號は、第三十二代宗介、稀世の上手として、名作多かりしより、近衞天皇より賜はりしもの。爾來、一門、何れもこの二字を名に冠す。宗介より宗安(嘉慶年中の人)までを上十代と稱して珍重し、又、第十四代義長の弟なる高義(寶德頃の人)第十六代義保の弟なる義通(大永頃の人)、第十七代信家(永正頃の人)の三人を、後の三作と稱へて、上十代に比すといふ。

みやうちん-おり 明珍織【名】紋博多織の一種。紋樣を繻子地の組織にて出せる、地厚の兩面織なるもの。男女の帶地とし、耳は、普通袋織とす。

みやうちやう 名帳【名】一神又は人の名を列ね記したる帳簿。盛衰記「その名帳の中に、硫黃が島の岩殿といふ神、よもあらじ」二その宗旨の信者の名簿。檀家帳。門徒帳。諺曲〔三山〕「……、名帳に入れて賜はり候へ。易き間の事、さて、御名を誰と廻向(エカウ)申し候ふべき」三〔佛〕融通念佛宗にて、その大念佛の人數に入りたる事を立證するために、名字を記入する帳簿。著聞「壯年の僧の首衣著たる、出で來りて、念佛帳に入るべき由を自稱して、名帳を見て、忽ちに隱れぬ」四計帳の手實ならんといふ。延喜式「凡勘二公文一附入之物、得二多數一(假令至二勘一大帳一、隱首括出損少數、則依二大帳一以爲二定數一、或大帳少數、名帳多數、猶依二名號一勘附之類也)」

みやうちやう 冥帳【名】〔佛〕㊀冥加を祈請するために、金品を喜捨したる人の名を記したる帳簿。義經記「思思に勸進に入り、總じて、冥帳に附く百五人」㊁つわこちやう(過去帳)に同じ。義經記「四國・西國にて討死したる者共、……冥帳に入れて弔へ」

みやうちよく 命濁【名】〔佛〕ごじよく(五濁)に同じ。

みやうつし 宮遷【名】せんぐう(遷宮)に同じ。平家「崇徳院を神と崇め奉るべしとて、昔、御合戰ありし大炊御門(おほいかど)が末に社を立て、宮うつしあり」俳諧新選(乙河)「宮うつし樹に寢ぬ鳥や夜もすがら」

みやうつつし 宮遷【名】せんぐう(遷宮)に同じ。後拾遺「住吉の宮うつりの日」

みやくてい 脈體【名】脈の搏ちやう。脈搏。和合人「最初脈ていを見ました所」

みやうてう 明朝【名】明日の朝。明旦。

みやうでん 名田【名】荒蕪の地を開墾し、又は他人より買ひ取りて所有せる土地に、所有者の名字を附けて、公田と區別せしもの。みやう。**だいみやう**(大名)・**せうみやう**(小名)參照。藩輯譜「永祿七年、清秀先祖の名田、三河國大岡の地に在り」

みやうでんこさく 名田小作【名】徳川時代に、二十年間も同一の小作人に小作せしめたる田畑の、小作米の滯納ありとも、地主にて取り戻すことを得ぬもの。

みやうでんばた 名田畠【名】名田たる畠。

みやうとう 名東【名】〔地】㊀明治の初年設置の縣の一。四年七月、阿波國徳島藩を廢して縣とし、その十一月改稱せしもの。初は、阿波全國と淡路國の一部とを管し、淡路國の津名郡は兵庫縣の兼治に屬せしが、後、津名郡も名東縣の所管となり、六年、香川縣を併せ、讃岐國をも管せしが、八年、香川縣は舊に復し、九年八月、名東縣を廢止して、阿波國は高知縣に、淡路國は兵庫縣に屬し、十三年三月、再び徳島縣を置きて、阿波全國を管せしめ、高知縣も、舊に復して、土佐全國を管せしめ、以て今日に及べり。㊁阿波國十郡の一。郡役所を徳島市に置く。

みやうにち 明日【名】今日の次の日。あす。**めいじつ**(明日)參照。

みやうねん 明年【名】今年の次の年。來年。**めいねん**(明年)參照。

みやうばつ 冥罰【名】〔佛〕神佛の、冥冥の裡に降す罰。「道」に同じ。

みやうばふ 明法【名】**みやうばふだう**(明法道)の家【句】明法道の、中世以後、衰へて、世襲の職たるに至りし時代の、その家、即ち中原・坂上の二家。法家。

みやうばふせい 明法生【名】大學寮の學生の、律令・格式を修めしもの。

みやうばふだう 明法道【名】古の大學寮の學科四道の一。律令・格式を講究せしもの。四道中、明經と紀傳との、主として、支那の書を學ぶに反し、專らわが國の書を修めたり。

みやうばふだう-ねん 明法道院【名】古の大學寮の部内に在りて、明法道を講究せし學舍。さんだうだう(三道堂)參照。

みやうばふ-さくげふせい 明法得業生【名】明法生の、試問に及第せしもの。

みやうばふ-はかせ 明法博士【名】大學寮の職員の一。定員二人。明法得業生の諸司に居る者、これに任ぜられ、明法道を明法生に教授することを掌りしもの。正七位下相當にして、延暦十八年、太宰府にも設けられ、郡内の律令の教授を掌りたり。中世以後は、遂に中原・坂上二家の世業となりぬ。律學博士。

みやうばん 明晩【名】明日の晩。明夜。

みやうばん 明礬【名】〔化〕『光明なる白礬の義』硫酸アルミニウムと硫酸カリウムとの複鹽。無色・八面體の結晶をなし、味澁く、水溶液は、遊離の硫酸發生して、酸性を呈す。明礬石より製し、又、粘土を濃硫酸と共に煮沸して得たる硫酸アルミニウムに硫酸カリウムを加へて製す。アルミニウムの化合物中、極めて重要なるものにて、媒染劑又は藥用に供す。又、アルミニウムの代りに、鐵・クロム等三價の金屬、カリウムの代りにアンモニウム・ナトリウム等一價の根(ラヂカル)又は金屬の入りたるものにて、性狀は右と同樣なるもの等、種種ありて、これらをも、明礬の名の下に包括せしむることあり。礬石。

みやうばん-せき 明礬石【名】〔鑛〕含水硅酸礬土と硫酸加里と合成し、六面體又は塊狀の結晶をなし、白色・淡紅色等を呈するもの。火成岩の變質して生じたるもの、鑛脈の部分をなすもの等あり。明礬の原鑛にして、我國にては、播磨國板原(ばんばら)と臺灣基隆の金瓜石金山とに產す。

みやうぶ 命婦【名】㊀支那にも、内命婦・外命婦の別ありしこと、周禮の天官篇の註に見ゆ』大寶令の制度に於ける、五位以上の婦人、及び五位以上の人の妻。前者を内命婦、後者を外(げ)命婦といふ。時として朝參し、又、朝儀の時、威儀の命婦・婇帳(ぶんちやう)の命婦となることあり。從つて、中務省(なかつかさ)にても、その考課を勘し、又、女王は、無位にても、この稱ありき。大和「監命婦、朝拜の威儀の命婦に出でたりけるを」㊁延喜以後、令制次第に破るるに及びて、中臈の女房の稱。父又は夫の官名を冠して呼ぶこと行はれたり。㊂宮中の女官の階級の一。奏任官にして、權掌侍の下、權命婦の上に位す。**てんじ**(典侍)參照。㊃狐を稻荷の神の使はしめなりとして呼ぶ稱。太平記「稻荷山の命婦比叡山の猿、社社の仕者」

みやうぶ 名簿【名】古、追從のため、又は、降服・入門等の時の證として、官位・姓名・年月日などを記して呈せしもの。なづき。なぶみ。二字(ニジ)。榮花「物おぼえぬ追從をなし、名簿うちしなどせば、片時ありめぐらせじ」今昔「賴信いはく、かばかり名簿に意狀を添へて奉れるは、既に降りにたるなり」

みやうふく 冥福【名】〔佛〕**めいふく**(冥福)に同じ。

みやうみまね 見樣見眞似【句】**みやう**(見樣)の條下を見よ。

みやうみやう 冥冥【貌】**めいめい**(冥冥)に同じ。榮花「生死(しやうじ)流轉(るてん)之罪(つみ)冥冥分(みやうみやうぶん)」

みやうみやうごにち 明明後日【名】明後日の次の日。やのあさて。

みやうみやうごねん 明明後年【名】明後年の次の年。

みやうみやうてう 命命鳥【名】〔佛〕『梵Jīvajīvaka 又はJīvaṃjīvaka(耆波耆波)の譯。もと、鳴聲によりて呼べる名なれども、耆波は、生の義なるより命命鳥と譯し、又、生生鳥・共命鳥などいふ』鸚鵡(あうむ)の類なりといふ一種の鳥。一身兩頭なりといふ。甲陽軍鑑「命命鳥と申して、昔が今に至るまで、三代相恩の主君に逆心致し」

みやうもく 明明日【名】**みやうごにち**(明後日)に同じ。

みやうもく 名目【名】㊀となへ。名稱。名目(めうもく)。㊁こづかひ(諺)に同じ。乳母の草子「名目に、始きらめきと申すことにて候ふ」雜慶物語「すを問へばすを答へ、尺を問へば尺を答ふといふ名目のあるを知らざるか」㊂〔佛〕法門の名稱を集めたる書。七十五法名目・西谷(にしだに)名目・眞宗名目など、有名なり。

みやうもく-か 名目價【名】〔經〕**がくめんかかく**(額面價格)に同じ。

みやうもく-がはせ 名目爲替〔商〕**ほふていへいか**(法定平價)に同じ。

みやうもく-きん 名目金【名】徳川時代に、富民よりの出金を、官社・官寺又は官家より、その餘財なりとの名目の下に貸ししこと。

みやうもく-くわへい 名目貨幣【名】〔經〕『英 Token money 實價が名目價以下なる貨幣の義』**ほじよくわへい**(補助貨幣)に同じ。(實貨幣に對して)

みやうもく-すごろく 名目雙六【名】『初學の僧に、天台の名目を覺えしむるために作りしもの』**ふつぽふすごろく**(佛法雙六)に同じ。

みやうもく-せう 名目鈔【名】〔書〕部門を、恆例諸公事篇より文書篇までの十二に分ち、各部門に屬する諸名目の訓讀を正せるもの。一卷。藤原貞熙(さだひろ)の撰。一名、禁裏仙洞小名目。

みやうもくぢんぎん 名目賃銀【名】〔經〕めいぎちんぎん(名義賃銀)に同じ。

みやうもくろん 名目論【名】〔哲〕ゆるめいろん(唯名論)に同じ。

みやうもん 名聞【名】名聲の、世間に聞ゆること。世間へのきこえ。めいぶん。名譽。「十訓」年七十になりたれば、名聞・利養もあぢきなし」〔傾城酒呑童子〕「名聞離れし御遁世、戀ゆゑとこそ哀なれ」

名聞は焦熱の爪木(ツマ)【句】『焦熱の爪木とは、焦熱地獄の火勢を盛んならしむるための薪木を求むるに等しとの義』名聞を希ふ者の苦しみの形容。〔諺話〕蜻蛉「財寶は、地獄の家づと、名聞は焦熱の爪木とも譬へたり」

みやうもんぐるし 名聞苦し【形ニ】いかにも、名聞欲しげなり。徒然「埒賀ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく、佛の御教(オシヘ)に違ふらんとぞ覺ゆる」

みやうもんごのみ 名聞好【名】名聞を好むこと、又その人。

みやうもんは 名門派【名】めうもんは(妙文派)に同じ。

みやうや 明夜【名】みやうばん(明晩)に同じ。

みやうらいだう 明禮堂【名】八省院十二堂の一。院の東方、承光堂の南方四丈に在りて、北より第四に位し、長さ十五間。會昌門の東廊と相去ること五丈五尺。治部省の被管たる雅樂・玄蕃・諸陵の諸寮司の官人、ここに居りて、執務したり。めいれいだう。「同じ。

みやうらん 【名】〔植〕ひよどりばな(鵯花)に

みやうらん 【名】〔佛〕みやうかん(冥鑑)に同じ。

みやうり 名利【名】〔佛〕名聞(ミヤウモン)と利欲と。名聞と利養と。めいり。徒然「名利に使はれて、しづかなる暇無く」

名利の轡(クツワ)【句】〔佛〕名利の慾に引かるるを、馬の轡に譬へていふ語。太平記「一たび名利の轡を返して、永く寂寞(マンマク)の苔の扉を閉ぢたまふ」「ク」。

みやうり 冥利【名】〔佛〕冥加の利益(リヤク)

冥利が善い【句】「冥利に叶ふ」に同じ。(「冥利が悪い」に對して) 浮世風呂「酒は夷講ばかりで、……それぢやあ、金も溜る筈さね。先づ、第一、冥利が能(イ)いはさ」「同じ。

冥利が盡きる【句】「冥利に盡く」に同

冥利が悪い【句】前條に同じ。(「冥利が善い」に對して)

冥利に叶ふ【名】「冥加(ミヤウガ)に叶ふ」に同じ。百合若大臣野守鏡「鴛鴦皐冥利に叶うた。末代の語句(カタク)に、名香で乘せませう」

冥利に盡く【句】「冥加(ミヤウガ)に盡く」に同じ。(「冥利が悪い」に對して)

みやうりよ 冥慮【名】〔佛〕『幽冥にして測り知るべからざる思慮の義』神佛の御心。盛衰記「平家の惡行(アクギヤウ)、君に歸し、天地の心にも違ひ、冥慮の惠にも背くにあり」太平記「春日大明神の冥慮なりと覺えたり」

みやうれいだう 明禮堂【名】みやうらいだう(明禮堂)に同じ。

みやうわう 明王【名】〔佛〕『明は、光明卽ち智慧の義、智力を以て、一切の魔障を摧破する威德を有する義』一大日如來の敎令を受けて、忿怒(フンヌ)の相を現じ、諸の惡魔を降伏すといふ諸尊。五大明王の外、愛染明王・烏芻沙摩(ウスサマ)明王・六字明王・佛母(ブツモ)大孔雀明王などあり。二ふどうみやうわう(不動明王)の略。講曲「葛城」「明王の索(サク)にて、身をいましめて、今に苦(クヒ)絕えぬ身なり」「同じ。三だらに(陀羅尼)に同じ。

明王の醫【句】〔佛〕「彌陀の病、明王の明王の繫縛(ケバク)【句】〔佛〕不動明王の、惡魔を金剛索(コンガウサク)にて縛りて、自由ならしめぬこと。講曲「安達原」「明王の繫縛にかけて貰めかけ、貰めかけ、祈り伏せにけり」「(皇帝)三の古稱。

みやうわうーけい 明王鏡【名】くわうていみやうわうぶ 明王部【名】〔佛〕諸尊・諸天の內、明王の名を以て呼ばるる一部屬。講曲「鐵輪」「大小の神祇、諸佛菩薩・明王部・天童部・九曜・七星・二十八宿を」

みやうね 冥威【名】〔佛〕神佛の、冥冥の裡に發揮する威德。太平記「代ニ冥威一伏ニ異賊一」

みやうね 明慧【名】〔佛〕三明(サンミヤウ)と三慧(サンエ)と。「同じ。

みやうべ 【名】〔人〕からべん(高辨)に

みやがう 宮號【名】宮といふ稱號。太平記「皇太神宮……年來申し請くる所の宮號、寂感の儀を以て宣下せらるべし」

みやかぐら 宮神樂【名】演劇の囃子(ハヤシ)の一。神前の幕明(マクアキ)、又、神事の場などに、笛・太鼓の鳴物を用ひてするもの。

みやかぎりーづかひ 宮飾使【名】伊勢太神宮の遷宮式にて、宮殿の裝飾の事を掌らしむるために命ずる使。

みやがた 宮方【名】南北朝時代に、南朝の方。太平記「京より南、淀・鳥羽・赤井・八幡(ヤハタ)に至るまでは、宮方の陣となり」同「宮方は、貧くれども、勢、愈よ重り」

みやかは 宮川【名】〔地〕一近江國阪田郡神照(カンテル)村大字國友の字。堀田氏の陣屋ありし處。二伊勢國の南部にある川。源を多氣(タケ)郡の西南境なる大臺ヶ原(オホダイガハラ)山より發して、東北流し、諸支流を併せ、宇治山田市の西方を流れ、大湊の北に至りて、伊勢海に注ぐ。流程、幹川のみにて二十九里餘、その內、十七里半ほどは、舟筏を通ず。新古今「契ありてけふみや河の木綿襷(ユフタスキ)長き世までもかけて頼まん」三明治の初年設置の縣の一。四年七月、近江國舊宮川藩の地に立てしもの。同年十一月、長濱縣に入り、長濱縣は、後、犬上(イヌカミ)縣と改稱し、更に滋賀縣の一部となれり。

みやがはーしゆんすゐ 宮川春水【名】〔人〕畫家。長春の門人。俗稱藤四郎。初、深川に住し、後、芳町(ヨシチヤウ)に移る。武者繪と美人畫とを能くせり。歿年明かならねど、享保より明和に亙れる人なるべし。

みやがはーちやう 宮川町【名】〔地〕京都市下京區の町。加茂川の東、祇園遊廓の南方に隣接して、同じく青樓連なり、德川時代には、江戸の禰宜町、大阪の道頓堀と共に陰間(カゲマ)の巢窟たりし所。長町女腹切「祇園ぐるひか、宮川町か、繩手か」

みやがはーちやうしゆん 宮川長春【名】〔人〕畫家。本姓は尾藤(ビトウ)、通稱長左衞門、後、喜平次と改む。尾張國宮川村の人といふ。元祿の末、江戸に出でて、土佐・菱川の二風を併せ、遂に浮世畫に一派を開く。寛延二年、日光東照宮の堂宇修繕の時、その裝飾畫の彩色を、幕府の畫工狩野春嘉より託せられ、春嘉、工銀を私して與へざりしより、爭端を啓き、遂にその子は、憤死し、長春も、一時、江戸を追放せられたりとも、伊豆國新島(ニヒジマ)に流謫せられたりともいふ。程なく許されて、江戸に歸り、本所區菊川町に住し。寶曆二年歿す。年七十一。

みやがはーなんけい 宮川南谿【名】〔人〕たちばななんけい(橘南谿)を見よ。

みやがはーのうたあはせ 宮河歌合【名】西行の自作の歌合。みもすそのうたあはせ(御裳濯歌合)參照。

みやがはは 宮川派【名】〔美〕浮世繪の一派。宮川長春を祖とす。「同じ。

みやがらす 宮烏【名】みやすずめ(宮雀)に

みやぎ 宮木【名】一宮殿建築の用に供する材木。萬葉「宮材(ミヤキ)引く和泉の柚に立つ民の止む時もなく戀ひわたるかも」諸國はなし「宮木を引き、萱を刈り」二宮殿の庭にある樹木。新葉「荒れにける志賀の都の秋風にひとりや月の宮木もるらん」

みやぎ 宮城【名】〔地〕一陸前國全部と磐城國の互理(ワタリ)。伊具(イグ)・刈田(カツタ)・三郡とを管轄する縣。縣廳を陸前國仙臺市に置く。初、明治二年、陸前國には、桃生(モヽフ)・登米(トメ)の二縣、磐城國には白石(シロイシ)縣及び按察使府を置き、後、桃生縣は、石卷(イシノマキ)縣と改稱して、三年九月、登米縣に合併し、白石縣三年十一月角田(カクダ)縣と改稱し、四年七月、仙臺藩を縣とし、その十一月、仙臺・登米・角田の三縣を合併し

て、仙臺縣とし、五年、宮城縣の名に改めて、仙臺に治し、磐城國の五理(リク)・伊具・刈田(カ)三郡及び宇多郡の一部を兼轄し、九年、舊磐井(ヘイ)縣所轄の陸前國五郡を管し、磐城國の三郡を磐前(イハキ)縣に移し、陸前全國を管せしめしが、幾もなく氣仙(ケセ)の一郡を岩手縣に移し、再び磐城國の三郡を管して、今日に至れり。㊁陸前國十四郡の一。郡役所を原町に置く。

みやぎ 二養基【名】〔地〕肥前國十四郡の一。郡役所を鳥栖(ス)町に置く。

みやぎの 三燒野【名】〔地〕『千住は、死人を燒く所、今戸は瓦を燒く所、吉原は、遊女の、娭妬して、客を燒く所との義にて、**みやぎの**(宮城野)の語呂に合はせていへるもの』江戸市外に在りて、互に近接せる千住(センジュ)と今戸(イマド)と吉原との三箇所の總稱。

みやぎの 宮城野【名】〔地〕陸前國仙臺市(ヂャウ)東郊(ハヅレ)の東方より海濱までの數里の間。古は、渺茫たる平原をなし、秋草、殊に萩茂り、蟲鳴き、雲雀(ヒバリ)・鶉など棲み、歌枕として名高く、禁獵の地たりしが、明治維新後、一半は練兵場となり、一半は田圃と變せり。散本「さまざまに心ぞとまる宮城野の花の色色蟲の聲聲」

みやぎ-もり 宮木守【名】宮木㊁を守る人。枕蓮「さざ波や近江の宮は名のみして霞たなびき宮木守なし」

みやく 脈脉【名】㊀すぢみち。條理。㊁**みやくくわん**(脈管)に同じ。㊂**みやくはく**(脈搏)に同じ。古今百馬鹿「病人が、不承不承(フショウフショウ)に手を出して、脈が知れますかといはぬばかり」㊃(鑛)**くわうみやく**(鑛脈)の略。㊄事業・職業などの前途に繼續し得るか否かの見込。

みやく-が-ある 脈が上(ア)る【句】㊀脈搏絶ゆ。命絶ゆ。死ぬ。五人女「外科よ、氣附よと立騷ぐ程に、……、まだどうぞといふ内に、脈が上るとや。さても是非なき世や」㊁前途の見込絶ゆ。だめになる。絶望となる。浮世風呂「おばば、四十九で信濃へ嫁入といふけれどの、六十ちやあ、脈が上ったよ」

みやく-が-ある 脈が有る【句】㊀脈搏絶えず。なほ生命有り。未だ死なず。未だ枯れず。㊁前途の見込絶えず。世間子息形氣「意見するとは、脈のある子息の事」

みやく-が-かよふ 脈が通ふ【句】前條に同じ。俳諧古選(支考)「片枝に脈や通ひて梅の花」

みやく-が-きれる 脈が切れる【句】「脈が上る」に同じ。

みやく-が-たえる 脈が絶ゆ【句】前條に同じ。

みやく-が-ない 脈が無い【句】㊀脈搏無し。絶命せり。㊁事業・職業などの繼續の見込無し。

みやく-を-とる 脈を取る【句】㊀脈搏の狀態により、病狀を考ふ。太平記「脈を取りまゐらせけるが、いかなる病とも辨へず」㊁事業・職業の繼續の見込を推察す。

みやく-を-ひく 脈を引く【句】前條に同じ。

みやく-を-みる 脈を見る【句】前條に同じ。

みやぐ 見上ぐ【動下二他】**みあぐ**(見上ぐ)の轉訛。狂言(富士松)「急いで見せい。……、さてもさても、見やげましておぢやる。庭が、いかう見事でおりやる」

みやく-がん 脈岩【名】〔地〕『英 Dyke or Dike』脈をなして産する火成岩。

みやく-くわん 脈管【名】動物の體中にありて、血液の運行する管。脈。脈道。血管。

みやく-しるね 脈翅類【名】〔動〕昆蟲類の一目。四翅は、同大、膜質にして、透明、多數の網狀脈を有し、變態は完全、觸角は節數多く、口器は咀嚼に適し、前胸部は自由に動く。草蜻蛉(クサカゲロフ)・薄羽蜻蛉(ウスバカゲロフ)・姬蜻蛉(ヒメカゲロフ)・蟻地獄など、これに屬す。もと翅の外觀を標準として集めたる一大部類なるが故に、種類も多く、系統上の關係も多岐に亙れるを免れず。

みやく-せき 脈石【名】〔鑛〕『英 Vein st-』その中に鑛石を含みて、鑛脈の材料をなす鑛物。例へば、石英・方解石など。

みやく-だう 脈道【名】**みやくくわん**(脈管)に同じ。

みやく-づり 脈釣【名】竿を用ひず、手に絲を執りて、魚を釣ること。

みやく-てい 脈體【名】脈の搏ちやう。脈搏の狀態。和合人「最初脈ていを見ました所、寸・關・尺のうち」

みやく-どう 脈動【名】〔地〕『身體の脈搏の如くなるよりいふ』地の振動の、緩慢微弱にして、吾人の感覺に觸れぬもの。

みやく-どころ 脈所【名】㊀身體の中にて、脈搏の狀態を測り得る所。㊁全體の内にて、重要なる部分。急所。要點。

みやく-はく 脈搏【名】心臟が收縮して、血液を、急劇に大動脈に推し出すと、心臟が擴張して、血液の迸出止むとの、交互の變化によりて、血管壁の波狀の起伏の大動脈の根部より起り、身體の各所に傳播するもの。血管壁は、彈性を有するが故に、この現象を呈す。動脈の淺在せる部分、即ち腕關節上方の拇指側又は頸部・顳顬(コメカミ)に在りては、觸れば、感知するを得。その回數は、心臟の搏つ數と同一にして、年齡・體長・體溫、又、立てると坐れると等によりて、同一ならず。健康なる人に在りては、一分間に平均七十内外を算し、獸類に在りては、象二十八回、馬三十回、牛五十回、兎百二十五回、乃至百五十回、犬九十五回、猫百三十回等なり。脈。

みやく-みやく 脈脈・脉脉【貌】つづきて絶えざるさま。

みやく-らく 脈絡【名】㊀つづき。すぢみち。連絡。㊁**みやくくわん**(脈管)に同じ。

みやくらく-まく 脈絡膜【名】〔醫〕『獨 Aderhaut』眼球壁を構成する薄膜。四層より成り、外面は漿膜と連なり、内面は網膜接合し、多量の小血管と色素細胞とを抱有す。

みやけ 屯倉・屯家・官家・三家・三宅【名】『御(ミ)宅(ケ)の義とも、宮食(ケ)の義ともいふ。倉と官舍とを區別する場合には、倉には屯倉、官舍には、屯家・官家と記せり。三家・三宅の三は、假借の文字』上古、貢調の制ありて、未だ田租の制無かりし時、皇室の御料たる屯田(デン)ある土地に設けて、それより、收穫せる米穀を藏めし倉、又、その倉を管せし官舍。又、その御田(デン)。史に見えたるは、垂仁天皇の二十七年を始として、その後も、諸國に多數設置せられ、中大兄(ナカノオホエ)皇子の如きは、百數十箇所を有したまひし程なれど、大化の改新に至りて全く廢止せられたり。紀「屯倉、此云二彌夜氣一」

みやけ 宮家【名】皇族の御家すぢ。

みやけ 三宅【名】姓氏の一。越智(オチ)益躬(マス)第十二世の孫寺町判官代宗綱より出づ。その子盛宗、備前國兒島郡三宅鄉に移住し、地名に因みて、子孫この姓を稱す。盛宗の孫家嗣は源賴朝に從ひ、その六世の孫に兒島高德ありて、同じく三宅を本姓とし、その第三子高貞、三河國西加茂郡伊保(ホ)に移住し、その七世の孫政定、永祿元年、始めて德川家康に屬し、子孫、武藏國瓶尻(ミカシリ)、三河國皐母(モ)、伊勢國龜山、常陸國新張(ハリ)の諸地に轉封の後、寛文四年、康勝の時、三河國渥美(アツミ)郡田原に移りてより、明治維新に至り、子爵を授けらる。

みやげ 土産【名】㊀旅先にて買ひ求めなどして持ち歸る、その地の産物。いへづと。盛衰記「國の土産、道の粮物(カテモノ)にも所望したまへかし」㊁他の家を訪問する時、携へゆく贈物。

みやけ-さい 三宅寄齋【名】〔人〕儒者。名は島、字は七羊。和泉國堺の人。京都に住む。藤原惺窩に兄事し、專ら漢唐の註疏を講ず。嘗て後陽成天皇・後水尾(ミヲ)天皇に侍講す。慶安二年歿す。年七十二。

みやけ-くわんらん 三宅觀瀾【名】〔人〕儒者。名は緋明、字は用晦、通稱は九十郎、別に端山と號す。石庵の弟。初、淺見絅齋に學び、後、木下順庵に從ふ。二十六歳にして、水戸義公に聘せられて、史館の編輯より、總裁となる。正德二年、新井君美の推薦によりて、室直清と共に幕府の儒官に擢でられ、享保三年、病を病みて卒す。年四十五。明治四十年、從五位を追贈せらる。

みやけ-じま 三宅島【名】〔地〕伊豆七島の一。神津(カウヅ)島の東南八里、御倉(ミクラ)島の北五里に在りて、周圍八里餘、東京よりは海路六十里、伊豆國下田(シモダ)よりは二十六里。島形は鈍圓錐狀を成し、絶頂を雄山と稱し、休火山にして、高さ二五〇〇尺。全島、五村に分る。

みやけしやうさい 三宅尚齋【名】〔人〕儒者。名は重固、字は實操、通稱は、雲八郎、後、儀平、儀左衞門、丹治と改む。天山また高尚と號し、後、尚齋と號す。播磨國明石の人。京都に出でて、醫を學び、傍ら山崎闇齋に從學し、佐藤直方、淺見絅齋と、併せて、崎門三傑の稱あり。東都に教授し、二十六歳にして、忍(オシ)侯の聘に應じ、方直に過ぎて、獄に投ぜられ、赦されて後、京師西洞院(ニシノトウイン)に講說す。元文六年歿す。年八十。

みやけせうざん 三宅嘯山【名】〔人〕俳人。京都の人。名は方隆、字は之元、葎亭。滄浪居等の號あり。儒者三宅觀瀾の同族。妻望月氏は、蕉門の俳人木節の孫。詩作・漢文にも達し、又書を善くせり。享和元年歿す。年八十四。著書多き中に、俳諧古選・俳諧新選有名なり。

みやけせきあん 三宅石庵【名】〔人〕儒者。名は正名、字は實文、又、萬年と號す。京師の人。道悅の子、觀瀾の兄。觀瀾と相携へて、江戸に出で、教授を業とすること數年、三十二歳にして、京師に還り、後に大阪に僑居し、程朱の學を唱へ、遂に、勸められて、中井甃庵の懷德書院の教授となる。享保十五年歿す。年六十六。

みやけだ 御宅田・三宅田【名】古、諸國の官家(ミヤケ)に附屬して、田部に耕作せしめられし御料の田地。みた。

みやけぢ 三宅路【名】三宅といふ地の路。三宅は屯倉(ミヤケ)のありし處の、やがて地名ともなれるもの多し。次の歌のは、河内國のかといふ。萬葉「父母に知らせぬ子ゆゑ三宅路の夏野の草をなづみ行くかも」

みやげーのーかがみ 土産の鏡【名】能(ノウ)の狂言の一。御伽話の松山鏡(マツヤマガヾミ)の物語と同一の說話を綴れるもの。

みやげーばなし 土産話【名】旅行中に見聞したる物事の話。

みやげーもの 土産物【名】みやげの料とする品物。みやげ。「(輪寶)」を見よ。

みやけーりんぽう 三宅輪寶【名】りんぽう

みやこ 都・京【名】『宮處(ミヤコ)の義』皇宮の在る土地。中央政府の所在地。みさと。みやところ。皇都。帝京。首府。萬葉「大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田居を都となしつ」

都島邊(ミヤコジマベ)【句】都と、都を遠く離れたる地方と。古今「おきのゐて身を焼くよりも悲しきは都島べの別なりけり」

都にも田舍あり【句】「京に田舍あり」に同じ。〔諺語〕

都の苞(ミヤコヅト)【句】㊀みやこみやげ(都土産)に同じ。㊁都に歸る時に携へゆくみやげ。伊勢「栗原のあねはの松の人ならば、都のつとにいざといはましを」徒然「この獅子の立てやう、いと珍し、……都のつとに語らんなどいふに」

都は物見猛(モノミダケ)し【句】都の人は、少しにても變りたる物事あれば、珍しがりて集まり見る癖あり。〔諺語〕

みやこ 京都【名】〔地〕豐前國六郡の一。郡役所を行橋(ユカハシ)町に置く。

みやこ 宮古【名】〔地〕琉球國五郡の一。

みやこしよたう(宮古諸島)參照。

みやこーあざみ 都薊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。本州・四國・九州の原野に自生し、莖は高さ二三尺に達し、葉は、互生して、羽狀の深缺刻をなし、狐薊(キツネアザミ)のに似たれども、裏面白色ならず、梢葉は、披針形にして、鋸齒あり。秋、淡紅紫色の花、頭狀花序をなして開き、總苞は、楕圓形にして、多くの鱗片より成る。

みやこーあそび 都遊【名】都にての茶屋あそび。若風俗「限ある都遊、萬の物入を構はず、今の世の噪」

みやこーいっちゆう 都一中【名】〔人〕淨瑠璃一中節の祖。もと京都本願寺派の僧。還俗して、山本土佐掾の門に入り(一說に、岡本文彌の門人とも、都越後掾の門人ともいふ)、角(ミ)太夫節・治(ヂ)太夫節等を參酌して、一派を始む。元祿・寶永の頃、京阪地方に盛んに行はれ、江戸に下りしこともありといふ。歿年詳かならねど、享保の末頃かといふ。

みやこいっちゆうぶし 都一中節【名】いっちゆうぶし(一中節)に同じ。

みやこーいで 都出【名】都を出發すること。都入に對して)講曲(船辨慶「一」とせ、平家追討の都出には引替へて、唯十餘人すごすごと」

みやこーいり 都入【名】都に入ること。入京。(都出に對して)義經記「見物は京とこそ聞くに、なんぞ、日中に京人をばしたまはで、逆にて日を暮したまふぞ」「同じ。

みやこーうた 都歌【名】きやううた(京唄)に同じ。盛衰記「都うつしとて下りたまひたれども」

みやこーうつし 都遷【名】せんと(遷都)に同じ。

みやこーうつり 都遷【名】前條に同じ。千載「都うつりなど噂しける又の年の春、白河の花ざかりに」平家「この日頃、都うつりありぬべしと聞えしかども」

みやこーうり 都瓜【名】〔植〕まくはうり(甜瓜)に同じ。御堂關白集「山城のうちにしなければ立ち出でて都瓜とて參らするなり」

みやこーおち 都落【名】㊀都より逃げゆくこと。平家「主上の都落の事」㊁都を去り、地方に赴きて生活すること。

みやこーおぼぢ 都大路【名】都の大道。

みやこーがた 都方【名】きやうがた(京方)に同じ。講曲(西行櫻)「これは、都方の者にて候ふが」

みやこかたーびと 都方人【名】みやこびと(都人)に同じ。萬葉「こぞの秋あひ見しままに今日見ればおもや珍し都方人」

みやこーがひ 都貝【名】〔動〕こやすがひ(子安貝)に同じ。夫木「ともすれば戀しき方の名に負へる都貝をぞまづ拾ひぬる」

みやこーがへ 都替【名】みやこうつし(都遷)に同じ。

みやこーがへり 都返【名】元の都に返り遷ること。平家「さしも横紙を破られし太政の入道殿、さらば都がへりあるべしとて、同じき十二月二日の日、俄に都がへりありけり」

みやこーがほ 都顏【名】都人らしき顏つき。若風俗「風儀も、それにつれて、都がほになりぬ」

みやこーぎらひ 都嫌【名】都を好まぬこと。俳諧新選「露や都嫁の竹の奥」

みやこーぐさ 都草【名】〔植〕㊀まつ(松)㊁の異稱。篠目抄「ゐなかともいかでかいはん武藏野のちくさにまじる都草かも」㊂ままこな(繼子菜)に同じ。㊂苣(チサ)科に屬する多年生の草。山野に自生し、莖は一株より叢生し、細長くして傾斜し、長さ二三寸乃至一尺餘に達す。葉は、五箇の小葉より成る羽狀複葉にして、各小葉は卵形又は倒卵形を成し、夏、莖頭の葉腋より花莖長く伸び、その頂に、五六乃至七八の鮮黃色なる蝶形花、繖形花序をなして開き、長さ一寸ほどの細莢を結ぶ。又、琉球には、一種、白色の花を著くるものありきれんげ。こがねばな。〔百脈根〕

みやこけんぶつ 都見物【名】都の名所または繁華の狀態などを見物すること。五人女「是非二三日は都見物と、久七とどめけれども」

みやこーごころ 都心【名】都人らしき心もち。夫木「秋ごとに色增す紅葉なかりせば慰めましや都心を」

みやこーこしまき 都腰卷【名】毛絲にて、輪の形に編みたる腰卷。大正十年頃より行はる。「りし劇場。

みやこーざ 都座【名】昔、都傳內の座主たる。

みやこーしぎ 都鴫【名】〔動〕みやこどり(都鳥)に同じ。

みやこーじま 宮古島・宮古嶋【名】〔地〕琉球國宮古諸島中の主島。全島、珊瑚礁より成り、平坦にして、高山なく、樹木少く、雜草繁茂し、水流に乏し。面積十方里弱。

みやこーじやうらふ 都上臈【名】きやうじやうらふ(京上臈)に同じ。

みやこーしよたう 宮古諸島・宮古諸嶋【名】〔地〕琉球國の西南部なる先島(サキシマ)群島の內、東區をなすもの。宮古島を主島とし、その他、伊良部(イラブ)島池間(イケマ)島・大神(オホカミ)島・來間(クルマ)島・下地(シモヂ)島

多良間(タラマ)島・水納(ミヅ)島の八島より成り、相合して、一郡を成し、宮古郡といふ。

みやこ-しゆ 都衆【名】都に住む人人。五人女「都衆と縁組の事を、母親語りければ」

みやこ-すし 都鮨【名】**おしずし**(押鮨)に同じ。

みやこ-ずまひ 都住【名】都に住むこと。

みやこ-そだち 都育【名】都にて育つこと。俗曲「都育ちは蓮葉(ハス)な者ぢやえ」

みやこ-だうじや 都道者【名】神佛へ参詣のために、都より來たる人。謡曲 吉野静「これは、都道者にて候ふが」

みやこ-ぢ 都路【名】■都に通ずる道路。萬葉「都路を遠みや妹がこの頃はうけひて寝(ヌ)れど夢に見えこぬ」■徳川時代に、手習の初に習はせたる文章。江戸より京都への道中の地名を、「都路は、五十(ソ)ぢあまりに三つの宿(シク)、時得て咲くや江戸の花、波靜かなる品川や、はや程ゲ谷(ガヤ)の程も無く」の如く、七五調に、又、各句、文字鎖(モジヅ)をなすやうに綴りたるもの。作者未詳。

みやこぢ 宮古路【名】■「人」**みやこぢぶんご**(宮古路豊後)の略。賤の小手巻「享保中に、宮古路といふ淨るり語下り、その淨瑠璃行はれ」■**みやこぢぶし**(宮古路節)の略。

みやこぢ-かがたいふ 宮古路加賀太夫【名】「人」**ふじまつさうまのじよう**(富士松薩摩掾)を見よ。

みやこぢ-くにたいふ 宮古路國太夫【名】「人」**みやこぢぶんご**(宮古路豊後)を見よ。

みやこぢ-くにたいふ-ぶし 宮古路國太夫節【名】**みやこぢぶし**(宮古路節)に同じ。

みやこぢ-しげたいふ 宮古路繁太夫【名】「人」淨瑠璃繁太夫節の祖。豊後の門人。

みやこぢ-そのはち 宮古路薗八【名】「人」■(初代)淨瑠璃薗八節の祖。豊後の門人。享保の頃、上方にて、この節を語り初む。■(二代目)天明五年歿す。明和九年、薗八、江戸に下りてより、この節、江戸にも暫く行はれたりといふは、この二代目なるべしといふ。

みやこぢ-ふう 宮古路風【名】『宮古路豊後の、京都より江戸に來りて、半太夫・河東(カトウ)などを壓倒せし時、市井の徒の、豊後の風を眞似しに起りて流行せしものなるよりいふ』**ぶんきんふう**(文金風)に同じ。

みやこぢ-ぶし 宮古路節【名】**ぶんごぶし**(豊後節)に同じ。

みやこぢ-ぶんご 宮古路豊後【名】「人」淨瑠璃豊後節の祖。都一中の門人。初、都國太夫半中と稱し、後に宮古路と改めて、一流を創む。享保十五年、江戸に下り、宮古路豊後掾橘盛村と改め、曲節詞章、市井蕩子の好に投じて、大いに流行す。元文四年、幕府より、風俗に害ありとして、禁止を命ぜらるるに至り、同五年歿す。

みやこぢ-ぶんごのじよう 宮古路豊後掾【名】「人」前條に同じ。

みやこぢぶんご-ぶし 宮古路豊後節【名】**みやこぢぶし**(宮古路節)に同じ。

みやこぢ-もじぐさり 都路文字鎖【名】「書」東海道五十三次の名を、文字鎖に作りたるもの。

みやこ-ぢよらう 都女郎【名】■**みやこやらふ**(都上臈)に同じ。狂言 菊花「都女郎と見えて、花やかに出立って」■都の遊女。三代男「都女郎が難波女にもすぐれたるとこそ申せ」

みやこ-づめ 都詰【名】將棋にて、王を、盤の中央に詰むること。娼妓絹麗「將棋…恐るべし、巧計(タクミ)のために、都逗(ツマ)となられんことを」

みやこ-でんない 都傳内【名】「人」江戸の劇場主。同名、前後數人ある中に、初代は、大阪より江戸に來り、寛永十年正月より、堺町に劇場を建てて、都座と名づけしが、明暦の大火に類燒し、傳馬(テンマ)町にて興行す。然るに、神田明神の宮芝居に、京都より同名の放下師下りしため、雙方訴訟となり、葺屋町のは古(イニ)傳内と呼ぶに至りしが、元祿の末より廢絶し、寛政五年、中村座の、負債のために興行を休むに及びて、その控櫓(ヒカヘヤグラ)として、興行を許され、同八年、中村座再興と共に休業し、その後も、中村座休業の間、これに代りて、屢ば興行せり。

みやこ-どり 都鳥【名】「動」■渉禽類に屬する鳥。海濱又は河邊に棲み、體長一尺二三寸に達し、頭・頸より上面一體に純黒、腰と胸腹部とは白く、翼にも大なる白色部あり。嘴は、長くして、紅色を呈し、脚も長くして、淡肉色、介類と蟲類とを食とす。一種、黒(ア)都鳥といふものは、總身黒褐色にして、白色の部分なく、我國にては、千島に在りといふ。みやこしぎ。うはちどり。萬葉「ふなぎほふ堀江の川の水ぎはに來居つつ鳴くは都鳥かな」■**かもめ**(鷗)に同じ。伊勢物語に「富士の山……は、ここに譬へば、ひえの山を二十(ハタ)ばかり重ね上げたらん程して、形(ナリ)は鹽尻のやうになんありける」とあるなどに本づきていふなるべし』山城國比叡山の異稱。五人女「都の富士二十(ハタ)にも足らずして」■貞享の頃流行せし、一種の形の編笠。若風俗「都の富士といふ時花出(ハナイ)の大編笠をかづきつれたるは、叡山の兒若衆(カヂヤウシユ)」



(■)りどこやみ)

みやこ-のぼり 都上【名】地方より都に赴くこと。京(ケイ)のぼり。上京。二代男「始めての都のぼり」

みやこ-はづれ 都外【名】都の町はづれ。蕪村「鎌祭る都はづれや桃の月」

みやこ-ばな 都花【名】「植」**みやこぐさ**(都草)■に同じ。

みやこ-びと 都人【名】都に住める人。みやこかたびと。みやこもの。古今「都人いかにと問はば山高みはれぬ雲ゐにわぶと答へよ」

みやこ-ぶ 都ぶ【動上二自】都らしくなる。萬葉「昔こそ難波田舎と言はれけめ今は都と都びにけり」「風習。

みやこ-ふう 都風【名】都にて行はるる

みやこ-ふじ 都富士【名】「地」**みやこのふじ**(都富士)■に同じ。

みやこ-べ 都邊・都方【名】都の方。萬葉「都べに立つ日近づくあくまでにあひ見て行かな戀ふる日多けむ」

みやこ-ほこり 都誇【名】地方よりの旅に、都に近づきたるを悦びほこること。土佐「都ぼこりにもやあらん、からくしてあやしき歌ひねり出せり」

みやこ-ほとり 都邊【名】■都の近邊。心集「都ほとりを厭ふ心深くて」■都近き地に住める人は、見聞廣く、智識に富めること。大鏡「都ほとりといふ事侍れば、目を見たまへて、產衣(ウブギヌ)に書きおきて侍りける、未だ侍り」

みやこ-まさり 都勝【名】都より又は都の物事よりまさりすぐれたること。若風俗「都まさりの女中、御座幕の物見に面影うつり」

みやこ-の-はな 都花【名】明治二十一年十月、東京市日本橋區の、書肆金港堂より發行せし小說專門の雜誌。

みやこ-の-てぶり 都の手ぶり【句】「書」『萬葉集の卷五に「天さかる鄙(ヒナ)に五とせ住ひつつ都の手ぶり忘らえにけり」とある歌の語句を借りて名づけしなるべし』江戸市中の雜閙なる風俗を、優美なる雅文にて綴りたるもの。一卷。石川雅望(マサナガ)の著。

みやこ-の-はな 都花【名】「植」**みやこぐさ**(都草)■に同じ。

みやこ-の-ふじ 都富士【名】「地」**みやこのふじ**(都富士)■に同じ。

みやこ-びと 都人【名】都に住める人。みやこかたびと。みやこもの。古今「都人いかにと問はば山高みはれぬ雲ゐにわぶと答へよ」

みやこ-ぶ 都ぶ【動上二自】都らしくなる。萬葉「昔こそ難波田舎と言はれけめ今は都と都びにけり」「風習。

みやこ-ふう 都風【名】都にて行はるる

みやこ-ふじ 都富士【名】「地」**みやこのふじ**(都富士)■に同じ。

みやこ-べ 都邊・都方【名】都の方。萬葉「都べに立つ日近づくあくまでにあひ見て行かな戀ふる日多けむ」

みやこ-ほこり 都誇【名】地方よりの旅に、都に近づきたるを悦びほこること。土佐「都ぼこりにもやあらん、からくしてあやしき歌ひねり出せり」

みやこ-ほとり 都邊【名】■都の近邊。心集「都ほとりを厭ふ心深くて」■都近き地に住める人は、見聞廣く、智識に富めること。大鏡「都ほとりといふ事侍れば、目を見たまへて、產衣(ウブギヌ)に書きおきて侍りける、未だ侍り」

みやこ-まさり 都勝【名】都より又は都の物事よりまさりすぐれたること。若風俗「都まさりの女中、御座幕の物見に面影うつり」

みやこまつ 都松【名】そめどのまつ(染殿松)に同じ。

みやこまひ 都舞【名】やまごまひ(大和舞)「に同じ。

みやこみやげ 都土産【名】都より携へゆくみやげ。都のつと。二代男「都土産に送られける」「名所。

みやこーめいしよ 都名所【名】都にある

みやこもの 都者【名】都にて育ちたる人。都に住める人。みやこびと。用明天皇職人鑑「當國・他國・都者、上中下の奉公人」

みやーごもり 宮籠【名】祈願のために、神社にこもること。社殿への參籠。盧生夢記「宮ごもりの中におはしましけるが」

みやこーよしか 都良香【名】〔人〕儒者。幼名は言道。文章博士腹赤の甥。官、文章博士兼越前權介に至り、元慶三年卒す。年僅かに三十六。藻思富贍、よく詩文を屬す。集を都氏文集といふ。

みやこーれったう 宮古列島【名】〔地〕みやこしよたう(宮古諸島)に同じ。

みやこーをとこ 都男【名】きやうをとこ(京男)に同じ。大織冠「入鄕の五郎介が都男に揉まるれば、鹽しむ肌」

みやこーをどり 都踊【名】一都(京都)に流行する踊。平家女護島「都踊のぬき拍子」二京都市祇園町花見小路なる歌舞練場にて、毎年四月上旬より下旬にかけて催す舞踊。明治五年、この地に始めて博覽會の開設せられし時、土地の繁榮策として、時の府知事等、祇園町の樓主等に勸めて開催せしめしより起り、廓中の藝妓、地方(ヂカタ)・囃方・踊子の三隊に分れて、毎夜數回出演し、京都名物の一に數へらる。

みやこーをんな 都女【名】きやうをんな(京女)に同じ。三代男「都女の戀草の種」

みやーさうどう 宮騒動【名】ふぢはらよりつね(藤原賴經)を見よ。

みやざき 宮崎【名】〔地〕一日向國を管轄する縣。縣廳を宮崎町に置く。二日向國八郡の一。郡役所を宮崎町に置く。三日向區宮崎郡の町。同國第一の都會。縣廳及び郡役所の所在地。東京市を距る三百六十八里。

みやざき-じんぐう 宮崎神宮【名】日向國宮崎郡下北方村に鎭座せる官幣大社。祭神は神武天皇、なほ鸕鷀草葺不合(ウガヤフキアヘズ)尊・玉依比賣(タマヨリヒメ)命を配祀す。神武天皇崩御の後、天皇宮居の地たるによつて、健弊龍(ケンペイリウ)命の創祀せしものといふ。舊稱、宮崎ノ宮。

みやざき-の-みや 宮崎宮【名】前條を見よ。

みやざき-ぶんこ 宮崎文庫【名】はやしきふんこ(林崎文庫)を見よ。

みやざき-ぼんぽ 宮崎筠圃【名】〔人〕儒者。名は奇、字は子常、通稱は常之進。尾張國の人。京都に住む。伊藤東涯及び蘭嶼に學び、弘く經史に通じ、篆竹を畫くに長じ、淺井圖南・御園中渠・山科李渓と共に、世に平安の四竹と稱せらる。安永三年十二月歿す。年五十八。

みやざは-あざみ 宮澤薊【名】〔植〕まあざみ(眞薊)に同じ。

みやざぶらひ 宮侍【名】宮仕せる侍。平家「宮侍狩野の工藤一臈祐經」

みやーさま 宮樣【名】みや(宮)二を一層敬ひていふ語。

みやーじ 宮主【名】一神祇官の職員の一。ト部(ウラ)の、事に堪へたる者、これに任ぜられ、天皇の御卜(ウラ)に奉仕せしを、特に大宮主又は内宮主(ウチノミヤジ)といひ、中宮と東宮とにも、各所屬の宮主ありたり。續記「神祇官宮主」三代實錄「爲二東宮宮主一、皇太子卽位之後、轉爲二宮主一」伊呂波字類「宮主、ミヤジ(在二神祇官一)」二齋宮寮主神司の職員の一。齋院の忌火竈神祭(イミビノカマノカミマツリ)及び解除の事を掌りしもの。定員一人。從八位下相當。

みやーじ 宮仕【名】洒掃等の雜役に從事せし、下級の社僧。

みやしげ 宮重【名】次條の略。

みやしげ-だいこん 宮重大根【名】〔植〕大根の一品種。根莖は、太くして、直徑三寸内外、長さ一尺三四寸に達し、莖部淡綠色を呈し、味甘くして、煮食・鹽藏に適し、又、乾して貯ふるに宜し。尾張國西春日井(ニシカスガヒ)郡春日(カスガ)村字宮重の特產。德川時代には、藩主より禁中及び江戸幕府への獻上品の一となせり。をはりだいこん。

みやじ-だい 宮主代【名】宮主の不在の時などに、代りて、その事を行ひし者。

みやーしばゐ 宮芝居【名】德川時代に、江戸にて、正式に公許せられたる芝居以外、神社の境内などに、小屋掛して興行せし、小規模の芝居。ちんこしばゐ。みやぢしばゐ。寛天見聞記「湯島の天神、芝の神明、市ゲ谷八幡の地内に、昔より、宮芝居とてありしも、取拂はれ」

みやじま 宮島【名】〔地〕『嚴島神社の所在地たるによりていふ』いつくしま(嚴島)に同じ。其角「宮島や燈籠の火の明けやすき」

みやじま-ごえふ 宮島五葉【名】〔植〕はひまつ(這松)に同じ。

みやじま-ざいく 宮島細工【名】安藝國宮島にて製造し、嚴島神社參詣者に賣る、木彫又は竹製の細工物。

みやしろ 御社【名】やしろ(社)の敬稱。みむろ。枕「御社のかたより、赤き衣(キヌ)など著たる者どもなど連立ちて來るを」

みーやすし 見易し【形二】見安し【形二】見苦しからず。醜からず。みよし。めやすし。(見苦しに對して)枕「人あまたゐて、ありく者ども、見やすからず呼びよせて」

みやすんどころ 御息所【名】みやすどころ(御息所)の音便。古今二條后の、東宮のみやすん所と聞えける時」

みやーそう 宮僧【名】しやそう(社僧)に同

みやぞの 宮園【名】一〔人〕みやぞのらんぼうけん(宮園蘭鳳軒)の略。二みやぞのぶし(宮園節)の略。

みやぞの-らんぼうけん 宮園蘭鳳軒【名】〔人〕淨瑠璃宮園節の祖。初代宮古路園八の門人。初、師名園八を襲ぎ、寶曆中、

ろ。源氏「冠し給ひて、御やすみ所にまかて給ひて、御衣奉りかへて」二皇子・皇女を生み給へる女御・更衣の尊稱。みやすんどころ。「平安朝初期の語」おほみやすどころ(大御息所)參照。空穗「その更衣は、宰相の中將の姫みこの母なり。梅壺のみやすどころと云ひし」三皇太子・親王などの御妃の尊稱。「平安朝後期の語」皇室典範制定以後は、皇族の御配偶に規定せられたれど、明治年間前半の頃は、俗間に、この稱行はれたり」小右記「東宮御息所一品禎子」

みやず-ひめ 宮簀媛・宮酸媛【名】〔人〕尾張の國造(クニノミヤツコ)の女。日本武(ヤマトタケル)尊東征の時、伊勢神宮に姨倭姫(ヤマトヒメ)命に接見して後、媛の家に入り、凱旋の後、妃とせんことを約して出發せらる。東征の事終るや尊、信濃國を經て、又、媛の家に入り、草薙の劍を媛に託して、更に伊吹山の賊を平げんとし、病に罹りて薨ぜらる。草薙劍は、卽ち尾張國熱田神宮の神體として、今日に及べり。

みやす-まく 御休幕【名】幄舍などの如く、天皇の休ませたまふ處ならんか。中務内侍日記「還御の儀になる程に、このみやす幕へ入らせたまひぬ」

みやす-まふ 宮相撲【名】神社の境内にて興行する相撲。一茶「べったりと人のなる樹や宮相撲」

みやすんどころ 御息所【名】みやすどころ(御息所)の音便。古今二條后の、東宮のみやすん所と聞えける時」

みやーそう 宮僧【名】しやそう(社僧)に同

みやぞの 宮園【名】一〔人〕みやぞのらんぼうけん(宮園蘭鳳軒)の略。二みやぞのぶし(宮園節)の略。

みやぞの-ぶし 宮園節【名】『園八は、宮古路の弟子なるより、宮と園との二字を合はせて名とせるもの』そのはちぶし(園八節)に同じ。

みやぞの-らんぼうけん 宮園蘭鳳軒【名】〔人〕淨瑠璃宮園節の祖。初代宮古路園八の門人。初、師名園八を襲ぎ、寶曆中、

龍骨(ノブキ)科に屬する、多年生の羊齒植物。深山の岩蔭などに自生し、根莖は、横臥して、黑褐色の毛茸を生じ、葉、これより生じて、羽狀に深裂し、各裂片は粗鋸齒を有し、裏面に、圓形の子嚢群附著す。

みやまえんれいさう 深山延齡草【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する、多年生の草。北部の陰地に自生し、地下に塊莖を有し、地上莖は、高さ五六寸に達し、その頂端に、廣卵形なる葉三個輪生し、その中央より一花梗抽出し、綠色の萼、白色の花瓣各三片を有する花を開く。

みやまおくり 御山送【名】『みやま(御山)』參照』貴人の送葬。榮花「烟せぬみ山送の悲しさに雲の林は立ちや添ひけん」

みやまおさぎり 深山弟切【名】〔植〕一ひめおさぎり(姫弟切)に同じ。二次條の略。

みやまおさぎりさう 深山弟切草【名】〔植〕金絲桃(オトギリ)科に屬する、多年生の草。莖は、高さ七寸内外に達し、分岐せず、葉は、卵圓形にして、對生し、花は、黃色、五瓣にして、弟切草のに似、雄藥の多數にして、長く、殆ど花瓣に等しき點は、未央柳(ヒメオトギリ)と酷似す。しなのおとぎり。ひめおとぎり。

みやまおとし 深山落【名】聲の、み山より、麓の方へ聞ゆること。新六「何としてみやまおとしのせこ聲にやらはれながら鹿も棲むらん」

みやまおろし 深山颪【名】み山より吹きおろすこと、又、その風。千載「まきの戸をみ山おろしにたたかれてとふにつけても濡るる袖かな」綺俳諧奇人談「貞恕「顏鳥や深山颪をさそふ聲」

みやまがき 深山柿【名】〔植〕一やまがき(山柿)に同じ。二かもあらむ」

みやまがくれ 深山隱【名】山の奥に隱れをること。古今「吹く風と谷の水とし無かりせばみやまがくれの花を見ましや」源氏「御袴著の程も、いみじき心を盡すとも、かかる深山がくれにては、何のはえかあらん」

みやまかけす 深山懸巢【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。普通の懸巢に似たれど、頭上より背にかけて、大いに赤褐色なると、風切の外、翔の灰色なるとの差異あり。分布區域に於ても、北海道より西比利亞・歐洲に亙りて棲み、普通の懸巢の津輕海峽以南にのみ居ると異なり。

みやまがすみ 深山霞【名】〔植〕やまうつぎ(山空木)を云ふ。〔紀伊國の方言〕

みやまかぜ 深山風【名】み山に吹く風。源氏「一夜のみ山風に過ちたまへる惱ましさなり」

みやまかたばみ 深山酸漿草【名】〔植〕酸漿草(カタバミ)科に屬する、多年生の草。山地の樹陰に自生し、根莖は、匍匐して、節上に鱗片を有し、葉は、廣倒心臟形の三小葉より成り、毛茸あり。初夏、葉間より花莖生じて、二三寸に達し、中部に二箇の小苞を具へ、頂部に、白色にして、淡紅色を帶び、淡紅色の線條ある花一個を著く。又、時として、紅色の花を著くるもあり。蒴は柱狀卵形。えいざんかたばみ。てんれんさう。

みやまがは 深山川【名】深山の間を流るる川。新六「み山川こなたかなたの落合のみなわがくれにめぐる流木」

みやまかへで 深山槭樹【名】〔植〕一めうりのき(女瓜樹)に同じ。

みやまがまずみ 深山莢蒾【名】〔植〕忍冬(スイカヅラ)科に屬する落葉灌木。山地に自生し、高さ四五尺乃至七八尺に達す。葉

みやまがんぴ 深山雁皮【名】〔植〕瑞香(ジンチョウゲ)科に屬する灌木。四國に自生し、高さ五尺内外に達す。葉は、對生し、卵形、全緣にして平滑、枝の上端に、無梗にして、白色の合片萼を有する花、三四箇づつを生ず。いぬこがんぴ。

みやまがらし 深山芥子【名】〔植〕やまがらし(山芥子)に同じ。

みやまがらす 深山烏【名】〔動〕一深山に棲める烏。夫木「雪降ればみ山烏の羽がへして槇の梢に鷺ぞむれゐる」二燕雀類に屬する鳥。深山に穴居し。嘴細長くして、形も、嘴細(ホソ)鳥に似たれども、やや小く、全身黑色にして、絲紫の光澤を呈し、冬季、羽の根元、暗灰色となり、老いたるは、前頭部裸出す。「條の略。

みやまからまつ 深山唐松【名】〔植〕次條の略。

みやまからまつさう 深山唐松草【名】〔植〕毛茛(カラマツソウ)科に屬する、多年生の草。山地に自生し、高さ一二尺に達し、葉は、複葉にして、各小葉は卵形又は長楕圓形にして、粗大の鋸齒又は齒牙を具へ、又裂片をなせるもあり。白色の花を開き、やや新月形なる扁き實を結ぶ。みやまからまつ。

みやまぎ 深山木【名】深山に生ひてある木。雜攷「深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」

みやまきけまん 深山黃堇【名】〔植〕罌粟(ケシ)科に屬する、多年生の毒草。山地に自生し、高さ一尺内外に達す。葉は、一回又は二回羽狀複葉にして、互生し、各小葉は羽狀に分裂し、花は、黃色にして、距を有し、短き花梗ありて、總狀に排列し、連

みやまきしぎし 深山酸模【名】〔植〕まるばきしぎし(丸葉酸模)に同じ。

みやまきんばい 深山金梅【名】〔植〕薔薇科に屬する落葉灌木。山地に自生し、高さ一尺餘に達す。葉は、長き葉柄を具へて互生し、心臟形にして、先端尖り、深鋸齒あり。帶紅白色の四瓣を有する美花開き、楕圓形の實を結ぶ。

みやまくまやなぎ 深山熊柳【名】〔植〕鼠李(クロウメモドキ)科に屬する蔓狀の小灌木。高山に自生し、枝梢細くして柔靱、葉は、薄くして、卵形、乾性の膜質をなせる托葉あり、左右相合して、二尖頭を有する一體となり、白色の小花、小圓錐花序に開く。

みやまくまわらび 深山熊蕨【名】〔植〕水龍骨(ノブキ)科に屬する、多年生の羊齒植物。山地に自生し、葉は、二回羽狀複葉にして、地下の根莖より生じ、長さ二尺に達し、各羽片は細長くして、羽狀に深裂し、裂片はやや鎌の如き形をなし、葉柄と中軸とに、褐色の毛茸あり。子嚢群は、葉の上部のみに生ず。やぐるましだ。

みやまこめすすき 深山米薄【名】〔植〕禾本(クサ)科に屬する、多年生の草。北海道及び本州の高山に自生し、高さ四尺内外に達す。葉は、互生し、細長くして尖り、平行脈を具へて、二縱列に排列し、花は、兩性にして、何れも小形、二個づつ集まりて、小穗花序をなし、その花序、多數集まりて、更に圓錐花序をなす。

みやまざくら 深山櫻【名】一深山に生ふる櫻。於遲「片山に畑燒く男かの見ゆる深山櫻はよきて畑燒け」二〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉喬木。北海道中部に多く自生し、葉は、互生し、形、櫻のに似、葉腋より長き花梗を出し、白色、五瓣の花三四を著け、長楕圓形の核果を結ぶ。しろざくら。

みやまざと 深山里【名】深山にある人里。元眞集「嵐吹くみやま里なるをみなへしうしろめたくて歸る今日かな」

して開き、紅色・球形の核果を結ぶ。觀賞用に供せらるることあり。にはつつじ。はるぐさ。もくたちばな。をかつつじ。

みやましけ-しだ 深山しけ羊齒【名】〔植〕水龍骨(スヰリウ)科、しばしば屬の多年生草。葉は長さ七八寸にて、地下莖より生じ、葉柄・葉軸に淡褐色の鱗片を有し、葉面の全形は、略長楕圓形の二回羽狀複葉にて、各小葉は、鋸齒を有し、葉面に微細なる毛茸を具ふ。葉の裏面には、暗褐色の子嚢群を生ず。はくまうあので。

みやましば み山柴【名】み山に生ひてある柴。枕「み山柴おのがかまどにとりくべて朝げ夕げの烟立つめり」

みやましようま 深山升麻【名】〔植〕三葉(ミツバ)升麻の中、三出二回羽狀複葉を有するもの。あはぼ。いはんだら。しようま。

みやます 宮枡【名】昔、甲斐國二宮(ニノミヤ)神社にて用ひし枡。容量は、京枡の二升二合五勺に相當したり。

みやますみれ 深山菫【名】〔植〕菫菜(スミレ)科に屬する、多年生の草。我國、北海道と本州との山地に自生し、高さ三寸内外に達し、全體に毛茸あり。葉は、心臟形にして尖り、鈍鋸齒あり。托葉は、小くして尖り、分裂せず。春葉の間より、花莖出で、その頂端に、淡青色又は白色にして、距を有する五花瓣より成る、不整齊の離瓣花、一個づつ開く。

みやませうびん 深山魚狗【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。深山の谿流に棲息し、普通の魚狗(ヒヨク)より大きく、凡そ椋鳥(ムクドリ)ほどにして、嘴、長大、鮮明なる朱色をなし、頭上より上面一體は暗赤色、腰の邊に藍色の羽あり、下面は褐色。あかせうびん。みづこひどり。

みやませきれい 深山鶺鴒【名】〔動〕いはうびん(深山魚狗)に同じ。

みやまだ 深山田【名】深山にある田。奥山の田。萬代「み山田の奥の稻を刈積みて守る假庵に幾世經ぬらん」

みやまだいこんさう 深山大根草【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する、多年生の草。北海道・本州の諸高山に自生し、高さ四五寸に達す。葉は、圓き心臟形にして、掌狀に淺裂し、緣邊に齒牙あり、下部の葉は、長き葉柄を具ふ。五瓣・黄色の花、聚繖花序をなして開き、痩果を結ぶ。根は藥用となる。いちえふらげ。

みやまたうき 深山當歸【名】〔植〕なんぶたうき(南部當歸)に同じ。

みやまたからし 深山田芥子【名】〔植〕やまがらし(山芥子)に同じ。

みやまたにうつぎ 深山谷卯木【名】〔植〕うこんうつぎ(鬱金溲疏)に同じ。

みやまたねつけばな 深山種附花【名】〔植〕十字花科に屬する多年生の草。我國中央の高山草本帶に生じ、根は頗る長く、莖は、高さ僅かに一二寸に過ぎざれども、叢生す。葉は、莖上に互生し、長さ一寸、羽狀に分裂し、七八月の頃、微細なる白花、繖房狀總狀花序をなして開く。いはなづな。

みやまぢ 深山路【名】深山のみち。やまぢ。千載「み山路はかつ散る雪に埋もれていかでか駒のあとを尋ねん」

みやまちどり 深山千鳥【名】〔植〕鬲科に屬する、多年生の草。下野國日光その他の高山に自生し、高さ六七寸に達す。葉は、多からずして、下部のは卵狀楕圓形、上部のは狹小、極めて短き距を具へたる帶黄色の花、總狀花序をなして開く。につくわうちどり。

みやまつぐみ 深山鶫【名】深山に棲めき毛あり、特に裏面の葉脈には、白色の毛を生ず。花は紫紅色にて二三箇を開く。紫やしほ。はこつつじ。

みやまつばき 深山椿【名】深山に生ひてある椿。夫木「花に咲くみ山椿を折りはへて誰が色好む灰に燒くぞも」

みやまつばくら 深山燕【名】〔動〕あまつばめ(雨燕)に同じ。

みやまでら 深山寺【名】深山にある寺。太平踏みつけし雪解けにけり深山寺」

みやまとべら 山豆根【名】〔植〕莨(クラ)科に屬する常緑小灌木。暖地に自生し、高さ一二尺に達す。葉は、互生し、複葉にして、三個の小葉より成り、長き葉柄を具へ、各小葉は、卵狀楕圓形にして、全緣をなし、白色の蝶形花、總狀花序をなして開き、花後、莢を結び、成熟すれば黒色となり、中に一箇の種子を含む。根は大にして多肉、味頗る苦く、滯食の時、削り用ひて、吐劑とするに効ありといふ。いしやだふし。じやこつ。とべらぐさ。まめづる。やまにがき。

みやまどり 深山鳥【名】㊀深山に棲める鳥。㊁〔動〕燕雀類に屬する鳥。雀より小く、背部と翼とは赤黒色を呈し、よく囀る。

みやまぬかぼ 深山糠穂【名】〔植〕莎(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉はその下部にて莖を包み、上部は狹長。花は褐色・小形・長き芒を具へ、小穂狀を攅簇して、八九月頃生ず。山麓の濕地に自生す。ひめこすすき。

みやまのはなとどかぬえだぶり 深山花及籔枝振【名】やすなものぐるひ(保名物狂)を見よ。

みやまはこべ 深山蘩蔞【名】〔植〕石竹科に屬する、多年生の草。山間の陰地にごとき細長き多くの刺あり。たかねばら。

みやまはんのき 深山赤楊【名】〔植〕樺(シラカバ)科に屬する落葉喬木。本州の諸高山及び北海道・樺太に自生し、高さ、平地のは三四丈に達し、高山のは二三尺に過ぎず。樹皮は帶赤赫黒色にして、緑白色の斑點を有し、平滑。葉は、互生し、卵形にして、先端尖り、重鋸齒を具へ、粘性を有し、六月頃、單性の花、葇荑花序をなして、雌雄同株に開き、共に花冠を缺き、外形松毬に似たる堅果を結ぶ。木材は、専ら薪炭の料に供し、樹皮と果實とは、染料に供す。おほばやしやぶし。まるばはんのき。

みやまふゆいちご 深山冬懸鉤子【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉灌木。山地に自生し、莖は莖狀をなし、葉は、廣卵形にして、三裂又は五裂し、莖にも、葉にも、刺粗生し、夏、白色の花、圓錐花序をなして開く。みやまいちご。

みやまへ 宮前【名】神社の御前。ひろまへ。社前。

みやまべ 深山邊【名】深山のほとり。やまべ。新古今「ことしげき世をのがれにし深山邊の嵐の風も心して吹け」

みやまほどり 深山邊【名】前條に同じ。惠慶集「紅葉ゆゑみ山ほとりにやどりして夜の嵐にしづ心なし」

みやまもみぢ 深山槭【名】〔植〕あさのはかへで(麻葉槭)に同じ。

みやまやしやぶし 深山やしやぶし【名】〔植〕みねばりに同じ。

みやまやなぎ 深山柳【名】〔植〕楊柳(ヤナギ)科に屬する落葉灌木。高山に自生し、葉は卵形又は楕圓形を呈し、長さ一寸乃至一寸五分、緣邊に鋸齒あり。裏面には、白色の毛茸密生し、花は、單性・黄色、穂狀をなして、雌雄異株に開く。

みやまよめな 深山嫁菜【名】〔植〕紫苑(シヲン)科に屬する、多年生の草。我國、北海道・本州の山地に自生し、高さ二三尺に達す。葉は、互生し、長楕圓形にして、尖り、鋸齒あり、下面は、白毛を密生す。花は、頭狀花序をなして、枝頂に開く。

みやまらいおう 深山雷王【名】〔動〕ゆき」か「きよやす」なること、明かなり』朝臣。宇は耀。氏吉の子。貞觀中、文章得業生となり、元慶五年、對策及第し、累進して、從五位上・刑部大輔に至り、文章博士を兼ね、菅原道眞の、君寵を被りて、權威濕きを見るや、退避して、一身を全うすべきを勸む。意見封事十二條を上る。

に雪は降りつつ」㊁〔地〕武藏國入間(イルマ)郡川越町邊の舊稱。今、川越町に三芳野神社存し、又、上戸(カミト)即ち今の名細(ナグハ)村こそ三芳野の本地にして、今の川越は上戸より移りしなりといふ説もありて、近年、上戸の邊に、三芳野村の稱起る。伊勢「昔、男、武藏の國までまどひありきけり。

みやまをだまき 深山苧環【名】〔植〕毛莨(キンポウゲ)科に屬する、多年生の草。我國、北海道・本州の山地に自生し、高さ二三尺に達す。葉は、互生し、掌狀に分裂し、七八月の頃、微細なる白花、繖房狀總狀花序をなして開く。

みやまをだまき 深山苧環【名】〔植〕ふたりしづかに同じ。

みやまをみなへし 深山女郎花【名】〔植〕おとこへしに同じ。

みやみ 宮見【名】神社の御前にて、神事を見ること。

みやみやし 宮美し【形シク】宮殿の如く美麗なり。

みやもり 宮守【名】神社の守護。

みやもりべ 宮守部【名】神社の守護を掌る部民。

みやゐ 宮居【名】神社の社殿。

みやゐ 宮井【名】神社の境内にある井。

みやゐ 宮藺【名】〔植〕莎草科に屬する、多年生の草。我國、北海道・本州の山地に自生し、高さ二三尺に達す。葉は、莖上に互生し、長さ一寸、羽狀に分裂し、七八月の頃、微細なる白花、繖房狀總狀花序をなして開く。いはなづな。

みやゐ 宮井【名】神社の境内にある井。

みやゐ 宮藺【名】〔植〕莎草科に屬する、多年生の草。我國、北海道・本州の山地に自生し、高さ二三尺に達す。葉は、莖上に互生し、長さ一寸、羽狀に分裂し、七八月の頃、微細なる白花、繖房狀總狀花序をなして開く。

みやゐ 宮居【名】神社の社殿。

みやゐ 宮井【名】神社の境内にある井。

みやゐ 宮藺【名】〔植〕莎草科に屬する、多年生の草。我國、北海道・本州の山地に自生し、高さ二三尺に達す。葉は、莖上に互生し、長さ一寸、羽狀に分裂し、七八月の頃、微細なる白花、繖房狀總狀花序をなして開く

みりたりずむ（英 Militarism）【名】ぐんこくしゅぎ（軍國主義）に同じ。

みりーみり【貌】物の砕け又は潰れ割るる音。めりめり。

みーりん 味淋・味醂【名】米・米麹と清酒・燒酎又は酒精とを混和して、濾過したる酒。味甘美にして、飲用し、又、調味料としても賞用す。

みりんかす 味淋粕・味醂粕【名】味醂製造の際、濾過したる後に殘留する粕。

みりんじゃうゆ 味醂醤油【名】調味のために、味醂をまぜたる醤油。「同じ。

みりんしゅ 味醂酒【名】**みりん**（味醂）に同じ。

みりんちう 味醂酎【名】前條に同じ。太閤記「ぶだう酒・ろうけ・がねぶ・みりんちう」

みりんづけ 味醂漬【名】瓜・茄子・大根などの野菜、又は魚肉などを、味醂粕に漬くること、又、その漬けたる食品。

みりーめえとる 粍（佛 Millimeter）【名】米突（メエトル）法に於ける長さの單位。メエトルの一千分の一。我國の三厘三毛に相當す。

みりゆう（佛 Milieu）【名】【文】一の人物又は事件に關係を及ぼす、周圍のもの。即ち境遇・遺傳・風俗・習慣など。環境。

みりーりっとる 竡（佛 Millilitre）【名】米突（メエトル）法に於ける容量の單位。リットルの一千分の一。我國の〇・〇五四三五勺に相當す。

みる 水松・海松【名】一【植】水松科に屬する綠色藻類。我國中國及び北部の沿海に產し、低潮線下一尺乃至五尺の邊に多く、根は圓錐形に近く、幹は徑一二分の紐狀をなして直立し、上方に於て、數回、又、七寸乃至一尺に至る。生時は深綠色にして、先端のみ鮮綠色を呈すれども老成は

留」二**みるいろ**（水海色）【名】長さの一の單位。一時の千分の一。針金の直徑を測るに用ふ。

みる 見る・視る・看る・觀る・覽る【動上一他】一目に映して、存在を知る。二目に映して、感じ、又は樂しむ。ながむ。見物す。觀覽す。眺望す。三文字を見て、その意味を知る。讀む。盛衰記「法相三論・華嚴（ケゴン）・天台・眞言・佛心乃至小乘律藏に至るまで渡り見るに」四あふ。まみゆ。會見す。五女を寵愛す。**みそむ**（見初む）三參照。宇治「兵衞佐平貞文……、宮仕人は更なり、人の女（ムスメ）など、忍びて見ぬはなかりけり」六見て、善惡・吉凶などを判斷す。見て調ぶ。七身のまはりの世話をす。見取る。看護す。落窪「年頃、若うよりあひ添ひ奉りて、六十（ムソヂ）七十（ソヂ）になるまで見奉り」八こころみる。ためす。さぐり知る。推察す。土佐「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとて、するなり」九身に受く。被（カウ）る。蜻蛉「わが幸無く恥みるべき宿世（スクセ）のありければ」十妻とす。源氏「院の姫宮……同じくは、げにかやうならん人を見んにこそ、生ける限の心ゆくべきつまなれと思ひながら」

見がてり【句】見ながら。見がてら。萬葉「秋の田の穗むき見がてりわが背子がふさ手折りける女郎女かも」

見さい【句】見なされよ。見たまへ。御覽。薩摩歌「あれ見さいな、霧島山の横雲」大盡舞「大盡舞を見さいな」

見ず知らず【句】少しも、その顏を見知らず。一度も面會せしおぼえなし。新古今「君をまだ見ず知らざりし古の戀しさをさへ嘆きつるかな」

見度くても無し【句】**みたうもなし**（見度無し）に同じ。追善集十郎女俳諧「ふらふ

見たやう【句】云云の物事を見たると同樣なり。云云の物事の如し。見るやう。一代女「着も、生貝・燒玉子はありながら、煮しめ・大豆（マメ）・山椒の皮など挾むは、色町を見たやうに思はれて、しほらしければ」

見たら木菟（ミヽヅク）、飛んだら鳶（トンビ）、跳ねたら跳蟲（ハネムシ）【句】小兒の戲に、さまざまに作事（シワク）などして、相手の視線を己の方に注がしめ、相手のこれに欺かれて、視線を注ぎたる時に言ふ語。「じ。

見て取る【句】**みとる**（見取る）一に同じ。見ての極樂、住みての地獄【句】實際は、外部より見たるとは相違して苦しき處。聞いて極樂、見て地獄。〔諺語〕

見ぢ見る【句】『有りと有る』參照。『見るかぎりの。山家「山深み入りて見と見る物は皆あはれ催すけしきなるかな」

見ぬ商（アキ）は出來ぬ【句】實物を見ずして相談するは、不可能の事なり。〔諺語〕

見ぬ商は成らぬ【句】前條に同じ。〔諺語〕二代男「見ぬ商はならぬ、せめて、三野の西尾ほど美しければよいが」

見ぬが花【句】「見ぬ事清し」に同じ。〔諺語〕

見ぬが佛【句】「知らぬが佛」に同じ。

見ぬが佛、聞かぬが花【句】前條に同じ。〔諺語〕

見ぬ京の物語【句】**みぬきやうものがたり**（不見京物語）に同じ。

見ぬ事清し【句】裏面に潛める不潔・醜惡の事實を知らぬ者には、清げに見ゆ。〔諺語〕八笑人「見ぬ事清しだあ」

見ぬは極樂【句】「見ぬが佛」に同じ。〔諺語〕

見ぬ物清し【句】「見ぬ事清し」に同じ。「じ。

り燈火の下（モト）に、文（フミ）をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ」

見る穴へ陷る【句】見て知りながら、不注意のために、その中に陷る。〔諺語〕

見る石【句】『硯』の字を、偏（ツヒ）と旁（ツク）とに分解していふ語。**すずり**（硯）の異稱。和訓栞（菅原道眞「見る石のおもてに物も書かざりき竹の楊枝も使はざりけり」

見る影も無し【句】**みすぼらし**（見窄らし）に同じ。蜻蛉「荻水に見る影も無き翁かな」

見ると聞くとは大違（オホチガヒ）【句】實見すれば、かねて傳聞したるとは、甚しく違へり。聞くと見るとは大ちがひ。〔諺語〕

見る所【句】**みどころ**（見所）に同じ。源氏「見る所ありて思ひはじめし事なり」

見るに目の慾【句】見るに連れて、慾情起る。〔諺語〕東海道名所記「見るに目の慾さはるに煩惱（ナヤミ）」

見る見る【句】目の前に見ながら。みすみす。源氏「空しき御からを見る見る、なほおはするものと思ふかひなければ」

見る目【句】見て感ずる所。萬葉「里人の見る目はづかしさぶる子にさとはす君が宮出（ミヤヅカ）しりぶり」俗曲「かしく新屋歌の段「餘所の見る目もあはれなり」

見るは法樂（ホフラク）【句】見るのみは無代價なり。〔諺語〕

見る目の前【句】「目の前」に同じ。源氏「いみじき事も、見る目の前にておぼつかなからぬこそ常の事なれ」

見る目、見透（ミスカシ）【句】いかなる物事に對しても、見拔くだけの鑑識を具ふ。〔諺語〕

みーゆ 御湯【名】**ゆ**（湯）二三四五の敬稱。萬葉「み湯の上の樹村（キムラ）を見れば」源氏「宮の御湯もて寄せたまへるに、かき起されたまひて、程なく生れたまひぬ」大和「名取の御湯といふ事を、恆忠の君の妻（メ）詠みたりけるといふ」太平記「御湯殿（ドノ）

見る物を見ず【句】月經通ぜず。
見るやう【句】「見たやう」に同じ。八笑人「どうも藪藥屋の店を見るやうに、前置(まへおき)ばかり立派で」
見るを見眞似(れまね)【句】見て眞似ること。見様見眞似(ミヤウミマネ)。一代女「飯たく下女も、見るを見眞似に色作りて」
見れば目の毒【句】見るに連れて、慾心起り、身の害となる。〔諺語〕浦島年代記「見れば目の毒、皆おぢや、おぢや」
みるーいろ 水松色・海松色【名】㊀あゐみるちや(藍海松茶)に同じ。㊁襲(かさね)の色目の一。表は萌黄、裏は青。一說には、表は黒萌黄、裏は白なりと。
みるーがひ 水松貝・海松貝【名】〔動〕みるくひ(水松食)に同じ。夫木「打ち寄するみる貝ありて興謝の海の遊の浦に頃も經ぬべし」
みるく (英Milk)【名】㊀ぎうにゅう(牛乳)に同じ。㊁こんでんすみるく(煉乳)の略。
みるくーいろ ミルク色【名】淡き黄白色。
みるくーきゃらめる (英Milk-carmel)【名】ミルク入りのキャラメル。
みるくーせえき (英Milk-shake)【名】牛乳に鶏卵と氷とを混じ、機械にて攪拌して製したる飲料。
みるくーちよこれえと (英 Milk-chocolate)【名】ミルク入りのチョコレエト。
みるーくひ 水松食・海松食【名】〔動〕『介殻の口に、小松多く生じ、それを食ふが如きさまなるよりいふ』腹足類に屬する軟體動物。淡水の注入り砂泥の淺海を好み、主として、東海に産す。介殻は、やや楕圓形にして、後方に開き、三四寸。外面は暗褐色、少しく輪層をなし、内面は白色、鉸牙には大なる凹窪あり。强壯なる内靱を備へ、外套膜甚だ深く、水管長く、肉は、食用に適し、味淡泊なり。國姓爺合戰「人のみるくひ・忘貝」
みるくーふうど (英Milk-food)【名】牛乳を蒸發・乾固せしめ、食鹽・砂糖・糊精・澱粉類を混じたる固形の食品。熱湯に溶かし、牛乳の代用として、小兒の食用に充つ。

みるくーほおる (英Milk boil)【名】需に應じて、牛乳を飲ませ、傍ら麺麭(パン)類などを賣ぐ家。
みるくわ 水松科・海松科【名】〔植〕隱花植物、綠色藻類の一科。これに屬するもの十屬、我國に産するものは六屬なり。
みるちや 水松茶・海松茶【名】水松色に近き茶色。藍水松茶(アヰみるちや)と區別して、素水松茶(スみるちや)ともいふ。
みるな 水松菜・海松菜【名】〔植〕をかひじき(岡鹿尾菜)に同じ。
みるぶさ 水松房・海松房【名】枝の分岐して、房をなせる水松。髪そぎの時に用ひたりといふ。源氏「はかりなき千尋の底の水松房の生ひゆく末は我のみぞ見ん」
みるめ 水松和布・海松和布【名】〔植〕みる(水松)に同じ。伊勢「みるめ刈る方はいづこぞ棹さして我にをしへよあまの釣舟」
みるめ 視目【名】〔佛〕次條㊀は、元來、一つの物の名なるを、二つに分けていへる語。根岡志具佐「色至つて赤く、眼の光、鏡の如く、口耳の際まで切れて、首有りて形無き者出づるを見れば、人の一生の事を見届けて帳に記す横目役、見る目といへる者なり。閻王の前に進み出で」
みるめーかぐはな 視目嗅鼻【名】㊀〔佛〕だんだぐう(檀拏幢)に同じ。㊁世間のうるさき視聽。
みるめーのーせき 見目關【名】〔地〕近江國にありきといふ關。枕「關は、……、清見が關・みる目の關」
みるものーこじき 見物乞食【名】何によらず、見る物を欲しがること。
みるものーこひ 見物乞【名】前條に同じ。西鶴寺百首「くち惜しやつゐしようがましさし入に見る物こひの常のされ人」
みるら 密兒拉(希・羅 Myrtle)【名】㊀〔植〕『原語は苦味の義』撒機科に屬する喬木。原産地はアラビヤの南部及びアビシニヤの北部。高さ三丈に達し、葉は、三小葉より成る複葉にして、綠色四瓣の小花を著け、鏡頂・楕圓形の核果を結ぶ。㊁

前項の植物の幹より滲出する黄色の液の、乾燥固結せるもの。芳香と苛辣なる味とを有し、健胃劑・含嗽料等に供せらる。
みるらん みる蘭【名】〔植〕しらん(しゐらん)に同じ。
みーれう 未了【名】未だ了らぬこと。未了の因【句】〔佛〕前世よりの因緣の、現世に於て、未だ完了せぬもの。
みーれん 未練【名】㊀未だ練達せぬこと。未熟。宇治御前の體身、皆おりたるに、未練の者こそあらめ」盛衰記「船軍は、未練なるべし」㊁『心の熟練の足らぬ義』思ひ切り得ぬこと。慾深きこと。甲陽軍鑑「三十に餘り、四十に及びてもよき事も無くて、所領を望むは、盗人の内にても、一しほ未練の盗賊なり」
未練・未酌無し【句】斟酌する所なく、思ひ切りて扱ふ。浮世風呂「三日でも、節句でも、未練・みしやくはねえ」
みれんーがまし 未練がまし【形二】いかにも未練らし。
みろく 彌勒(梵 Maitreya)【名】㊀〔佛〕『慈氏と譯す』菩薩の一。名は阿逸多(無能勝と譯す)。一說に、阿逸多は姓、彌勒は名なりと。南天竺波羅門の家に生れ、釋迦如來の佛位を紹ぐ補處(ふしょ)の菩薩となり、佛に先ちて入滅し、兜率天の内院に生じて、その天の四千歳、即ち人界の五十六億七千萬歳を經、第十の滅劫(メツカフ)に、人界に下生(ゲシヤウ)し、華林園(クワリン)の龍華(リウゲ)樹の下に正覺(シヤウカク)を成(ジヤウ)じて、偏く人天(ニン)を化益(ケヤク)すといひ、又、初、過去の彌勒佛に値ひて、慈心三昧を修得せしより、慈氏と稱し、乃至成佛の後も、この名を立つといふ。慈尊。慈尊。後佛(ごぶつ)。當來の佛。榮花「左右の寶座には、彌勒・文殊(モンジユ)ぞおはします」㊁〔人〕ほていをしやう(布袋和尚)の異稱。
彌勒下生(ゲシヤウ)の曉【句】〔佛〕「彌勒龍華(リウゲ)の朝(アシタ)に同じ。著聞「菩提無量也、定期二彌勒下生之曉一」
彌勒の三尊【句】〔佛〕彌勒を中尊とし、華林(クワリン)菩薩を左脇士、大妙相菩薩を右脇士とする三尊。
彌勒の淨土【句】〔佛〕兜率(トソツ)天の内院の異稱。
彌勒の出世【句】〔佛〕「彌勒龍華(リウゲ)の朝」に同じ。
彌勒の世【句】〔佛〕彌勒の下生(ゲシヤウ)して、人天(ニン)を化益(ケヤク)したまふといふ世。源氏「長生殿のふるきためしはゆゆしくて、彌勒の世をぞかねたまふ」
彌勒龍華(リウゲ)の朝【句】〔佛〕彌勒が、兜率(トソツ)天の内院より、人界に生下(ゲシヤウ)して、華林園(クワリン)の龍華(リウゲ)樹の下に成佛すといふ時。盛衰記「彌勒龍華の朝まで、義仲が日本國を知行せんずる軍の緣日と成りたまへば」
みろくーこう 彌勒講【名】〔佛〕彌勒を念ずる講會。
みろくーじ 彌勒寺【名】東京市本所區林町にある、新義眞言宗豐山派の寺。萬德山・金剛院と號す。本尊は藥師如來。開山は宥鑁。德川家康の歸依を得て、元和元年、日本橋區馬喰(バクロ)町に建立せしもの、その初にして、二代將軍秀忠の時、本所三ノ橋の南に移りて、新義四箇役寺の一として、一派の寺務を督し、天和二年、再び今の地に移る。子院三あり。
みろくーじそん 彌勒慈尊【名】〔佛〕みろく(彌勒)に同じ。
みろくーだう 彌勒堂【名】彌勒の像を安置せる堂。
みろくーぶつ 彌勒佛【名】〔佛〕彌勒菩薩の、成佛後の稱。じぶつ(後佛)參照。正統記「壽命も增し、果報も進みて……、彼の時、又、滅に向ひて、彌勒佛出でたまふべし」
みろくーぼさつ 彌勒菩薩【名】〔佛〕みろく(彌勒)に同じ。
みろくーみ 彌勒御【名】〔佛〕彌勒菩薩も、いかばかり笑(ゑ)を含みたまひけん」
みろくーゑ 彌勒會【名】〔佛〕彌勒を勸請(クワンジヤウ)して、祈念する法會。榮花「志賀の彌勒會に參らせたまふ」
みろーみろ【貌】めろめろに同じ。盛衰記「若君(ワカ)、この有樣を見たまひて、淺ましげ

にぞ思して、みろみろとかひを造りたまふぞいとほしき」

みーわ 神酒【名】神前に供ふる酒。みき。〔古語〕萬葉「なき澤の森にみわ据ゑ祈れどもわが大君は高日知らしぬ」(一説に、この萬葉集のは、酒を醸す瓶にて、そのまま、神に供へしなりともいふ) 和名「日本紀私記云、神酒、和語云二美和一」

みわ 三輪【名】■〔地〕大和國磯城(キ)郡の町。奈良市を距る五里五町。奈良鐵道の停車場あり。酒と素麺とを名產とし、東に三輪山聳ゆ。萬葉「いにしへにありけむ人も我がごとか三輪の檜原にかざし折りけむ」■謠曲の一。大和國三輪の明神の、里女となりて、玄賓僧都の庵を訪ひ、終に神姿を現し、神樂を奏して遊びたまふ事を作れるもの。

みわがさき 三輪崎【名】■〔地〕三輪山の裾の、長く延びて、三輪川に臨める所なりといふ。謠曲(鉢木)「大和路や、三輪ゲ崎なる佐野のわたり」■今の紀伊國東牟婁(ムロ)郡三輪崎(ミワサキ)町の岬角なる三輪崎の古稱といふ。定家「三輪が崎夕汐させば村千鳥佐野の渡に鹽うつるかな」

みーわがは 三輪川【名】〔地〕大和國初瀬(ハツセ)川の、三輪町邊を流るる間の稱。

みわきーしゆう 身脇衆【名】戰國時代に、上杉家にて、若黨(ワカトウ)を呼びし語。甲陽軍鑑「歩(カチ)若黨を、上杉家にて身わき衆、信玄家にて二十人衆」

みわく 見分く【動四他】次條に同じ。〔古語〕榮花「晝よりも明かなる月なれば、何事も、殘なく見わかる」

みわく 見分く【動下二他】見て分つ。見て區別す。辨別す。「みさかひ。

みわけ 見分【名】見分くること。鑑別。

みわーざうめん 三輪索麺【名】大和國三輪町より產する索麺。若鳳爲「盆前になれば、三輪索麺十把貰ひて」

みわーしっさい 三輪執齋【名】〔人〕儒者。名は希賢、通稱は善藏、又、躬耕廬と號す。幼にして、父を喪ひ、商人某に育てられ、出でて、眞野氏を冒し、十九歳にして、佐藤直方の門に學び、又、本姓に復す。後、王陽明の說を喜び、一時鹿橋侯に仕へ、致仕の後、三都の間に往來すること數年。その言、優遊餘味あり、人をして心醉せしむ。延享元年、京師に歿す。年七十六。

みわーじんじや 三輪神社【名】おほみわじんじや(大神神社)の俗稱。

みわーしんたう 三輪神道【名】兩部神道の一。大和國の大神(オホミワ)神社にて、舊く唱道せしもの。もとは、專ら陰陽道によりしものの如くなれど、足利幕府の中頃より、眞言宗の僧徒の掌握する所となりて、兩部神道たるに至れり。

みーわする 見忘る【動下二他】前に見たる事ある物事を、後に至りて忘る。みそる。(見覺ゆに對して) 萬葉「はしきやし誰がさふれかも玉桙の道見わすれて君が來まさぬ」

みーわすれ 見忘【名】見忘るること。おもわすれ。謠曲(大原御幸)「御見忘はことわり、これは、信西(シンゼイ)が娘阿波の內侍がなれる果にて候」

みーわだ 水曲【名】川の曲りて、水の淀める處。千載「いづみ川の水のみわだのふみつけに岩間の氷る冬は來にけり」

みーわたし 見渡【名】見渡すこと、又、その所。みとほし。みやり。萬葉「見わたしの島の名高し」蜻蛉「御車ども立つるに、……、見わたしの北南に立てよとのたまへば」「る。一面に見遠る。

みーわたす 見渡す【動四他】遠く廣く見

みわたり 三渡【名】〔地〕今の伊勢國一志(イチシ)郡三渡村の地。昔は、海水灣入して、渡口三箇所に分れ、潮汐の干滿によりて、所を變へて、船を渡せりといふ。膝栗毛「三渡の藤九郎狐」

みわーどりゐ 三輪鳥居【名】〔建〕鳥居の形式の一。左右の柱の兩傍に、なほ一段低き鳥居ありて、各、扉あり、その他は、明神鳥居と同樣なるもの。今も、大和國三輪町の大神(オホミワ)神社に存す。三光の鳥居。

みわのーやしろ 三輪社【名】おほみわじんじや(大神神社)の俗稱。

みわびな 三輪雛【名】大和國三輪より作り出す雛人形。

みわべーじんじや 神部神社【名】駿河國靜岡市賤機(シヅハタ)山に鎭座せる國幣小社。祭神は大己貴(オホナムチ)命。創祀の年代は詳かならざれど、延喜の制、小社に列す。

みわーもり 酒盛【名】さかもり(酒盛)に同じ。〔古語〕散木「流れつるけこのみわもり數添ひてさやだの早苗とりもやられず」

みわーやま 三輪山【名】〔地〕大和國三輪町の東にある山。孤峯秀拔、松杉鬱茂し、大己貴(オホナムチ)命の住みたまへりし舊蹟。山麓に大神(オホミワ)神社あり。記「糸のまにまに尋ねゆきしかば、みわ山に至りて留まりにき」「神道」に同じ。

みわーりう 三輪流【名】みわしんたう(三輪神道)に同じ。

みーゐ 御井【名】ゐ(井)の敬稱。萬葉「高知るや日の御蔭の水こそは常(トコ)にあらめ御井の眞清水(マシミヅ)」同「藤原の御井……」

みゐ 三井【名】■〔地〕筑後國六郡の一。郡役所を北野町に置く。■〔地〕近江國大津市の西北部、三井寺の在る所。■みゐでら(三井寺)■の略。太平記「法水を、三井の流に汲み」

みゐ 御井【名】〔地〕筑後國の舊郡。明治二十九年、御原(ミハラ)・山本郡と合して、三井郡となる。

みゐーでら 三井寺【名】■をんじやうじ(園城寺)に同じ。■謠曲の一。駿河國の女、わが子千滿といふ者の行方を尋ねて、狂亂の姿にて、近江國三井寺に至り、折しも八月十五夜にて、住僧等、能力(リキ)に舞を舞はせなどせる處に、鐘樓の鐘を撞き鳴らし、歌舞をなすを、住僧の伴なひし少年の、これを認めて、わが母なりと知り、狂女もわが子と知りて、再會せし曲。

みゐでらーはんめう 三井寺斑猫【名】〔動〕へひりむし(屁放蟲)に同じ。

みゐでらーほふし 三井寺法師【名】てらほふし(寺法師)に同じ。平家「三位入道の一類、渡邊黨、さては三井寺法師にてぞ候はんずらん」

みねでらーます 三井寺枡【名】昔、近江國三井寺にて、その所領の年貢を納むるに用ひし枡。方四寸八分五厘、深さ二寸三分弱、容積、京枡の八合三勺に相當す。

みねーもり 御井守【名】主水司(モンドノツカサ)の職員の一。供御(クゴ)の水を酌む井の事を掌りしもの。

みーを 澪・水脈・水尾【名】『水尾の義と云ふ。尾は引き延へたるをいふ』河・海の中にて、船の通行に適する、底深き水路。みよ。萬葉「神山の山下とよみ行く水の水尾し絕えずば後もわが妻」

澪の標(シルベ)【句】みをつくし(澪標)に同じ。千載「五月雨に水のみかさや增さるらし澪のしるしも見えずなりゆく」

みを 三尾【名】〔地〕みほ(三穗)■を見よ。

みをうちーぶね 澪打船・水派打船【名】「水脈引(ビキ)の船」に同じ。

みをぎ 澪木・水脈木【名】■みをつくし(澪標)に同じ。■神事の時、僧尼の入るを禁ずるために立つる、標の木。

みをぎーぶね 澪木船・水脈木船【名】「水脈引(ビキ)の船」に同じ。

みをーぐひ 澪杭【名】みをつくし(澪標)に同じ。

みをーざさ 澪笹・水脈笹【名】通行する船に、澪を知らするために、海中に立ておく笹。水先案內のための笹。

みーをさめ 見收【名】一生の中に、最後として見る時、またこと。

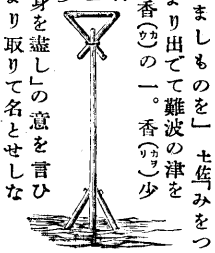
みーをし 御食【名】飲食したまふこと。御食事。〔古語〕紀「且當二飲食一、ミヲシセムトス」同「進レ食、ミヲシス」

みをーしるし 澪標・水脈標【名】みをつくし(澪標)に同じ。夫木「廣瀨川渡(ワタ)りの關のみをじるし水嵩(ミヅカサ)添ふらし五雨月の頃」同じ。

みをーすぢ 澪筋・水脈筋【名】みを(澪)に同じ。

みをーつーくし 澪標【名】『つは領格の助辭』■通行する船に澪を知らするために立ておく杭。水先案內のための杭。みをぎ。みをぐひ。みをのしるし。萬葉「遠つあふみ引佐(ヒキサ)細江のみをつくしあれをたのめて」

のめてあさましものを」 土佐 みをつくしのもとより出でて難波の津を來て」 ㊁香(カ)の一。香(カ)少しく辛く苦し。 ㊂〔書〕



(㊂しくつをみ)

『古歌に、多く澪標に「身を盡し」の意を言ひかけたるより取りて名とせしならん』大阪新町の遊郭の昔の細見。 勝旅漫錄「大坂の妓樓は、……、澪標に委しければ、ここに略せり」

みをづり 澪釣・水脈釣 【名】 黒鯛の釣り方。 とのさまづり。

みを-の-さき 三尾崎 【名】〔地〕近江國澁賀・高島二郡の界をなして、琵琶潮に突出すること、一里半餘なる明神崎の古稱。 萬葉「思ひつつ來れど來かねて水尾の崎眞長の浦をまたかへり見つ」

みを-の-せき 三尾關 【名】〔地〕**みほのせき**(三保關)に同じ。

みを-の-やくにさし 美尾谷國俊・箕尾谷國俊 【名】〔人〕**みほのやくにさし**(三保谷國俊)に同じ。

みを-びき 水脈引・澪引 【名】 澪の在る所を知らせて導くこと。水先案内。 萬葉「たてまつるみつぎの船は堀江よりみをびきしつつ朝風にかぢ引きのぼり」

水脈引の船 【句】 水脈引をする船。水先案内船。みをきぶね。みをうちぶね。 和名「水脈船、美乎比岐能布禰」

みを-やま 三尾山 【名】〔地〕近江國高島郡にある山。 夫木「みを山の柚のわれ木の片おちに捨てられながらふしはわかれず」

みをり 三節 【名】「三節の御酒」の略。 建武年中行事「三節の御酒(ミキ)【句】正月の三節會(セチヱ)に供する酒。 建武年中行事「三節のみき供じて後、一こんを供す」

三節の祭 【句】 伊勢大神宮の毎年の祭禮の内、最も主要なる、六月の月次(ツキナミ)祭と、九月の神嘗(カンナメ)祭と、十二月の月次祭との併稱。 日取は、外宮は十六日、内宮は十七日。

む

む 務 【名】 天武天皇の大寶元年三月に制定せし位階の中、諸臣に關する、六階の一。第四階、即ち勤(ツトム)の下、追(オヒ)の上に位し、天武天皇の時には、他の各階と同じく、更に大・廣の二階に分ちて、務大一位・務廣一位などの如く呼び、文武天皇の時のは、七位をこれに充て、正七位上・正七位下・從七位上・從七位下の四階に細別し、服色は、兩者共淺緑と定められたり。 務冠。 務位。

む 無 【名】 ㊀無きこと。有らぬこと。 ㊁〔佛〕存在せざること。實有ならざること。萬有の存在を否定すること。偏無妙無等の別あり。前者は、斷見に過ぎざる惑智の無にして、後者は、有・無の差別を超越したる聖智の無なり。禪宗にては、無字を悟道の關門とすること、眞言宗にて、阿字を觀道の要門とするに同じ。空。空無。虚無(コム)。(有(ウ)に對して)無にす 【句】 徒(イタヅラ)ならしむ。あだにす。無下(ムゲ)にす。 お夏清十郎戀連理の松「親子がいろいろ心を碎くも、お前方を夫婦にしたさ、その志を無になさるか」無になる 【句】 徒(イタヅラ)になる。甲斐無し。水泡に歸す。一代玄「今まで申した念佛が、無になり」 「を見よ。

無の目つき 【句】「有無(ウム)の目つき」に同じ。 名義抄「ナシ、ム・サハウド」

む 【助動】 ㊀推量の意。ん。 記「今こそは千鳥にあらめ後(ノチ)はなどりにあらむを」 ㊁未來の意。ん。「往かむ」

む 【感】 ㊀應答の聲。う。 宇治「卑下なる聲にて、むといらへて立ちぬ」 ㊁力を込むる時、口を閉ぢ發する聲。うん。むう。

む 無 【接頭】 物事を打ち消す意。「無藝」「無考(ムカウ)」「無勘定」「無責任」

む 【動他】 **うむ**(產む)の略。 【古語】 記「雁(カリ)子むと聞く」

む 六 【數】 **むつ**(六)に同じ。

むあい 無愛 【名】〔佛〕欲愛を離れたること。 ㊁**ぶあいさう**(不愛想)に同じ。 盛衰記「木曾、無愛に返事する樣は」

むあく-ふざう 無惡不造 【名】 心のままに惡事をなして憚らざること。 太平記「無惡不造の兵どもが、塔の九輪を下して」

むあん 無安 【名】 安穩ならぬこと。苦の多きこと。

む-い 無意 【名】 ㊀意思なきこと。無心。 ㊁〔哲〕**むいてき**(無意的)を見よ。(有意(イ)に對して)

む-い 無異 【名】 **ぶい**(無異)に同じ。

むいう-げ 無憂華 【名】〔佛〕**むうげ**(無憂樹)の誤讀。

むいう-じゆ 無憂樹 【名】〔佛〕**むうじゆ**(無憂樹)の誤讀。

むいう-びやう 夢遊病 【名】〔醫〕『英Sleep-walking 又 Somnambulism』**りこんびやう**(離魂病)に同じ。

む-いか 六日 【名】『六日(ムカ)の音便』 ㊀毎月の第六の日。むゆか。むよか。 ㊁日數六つ。「六日の間」

六日の菖蒲 【句】『五月五日の節句の翌日の菖蒲の義』時機に後れて、役に立たぬ物事の譬。〔諺語〕 新六「いかにせん今は六日のあやめぐさ引く人もなきわが身なりけり」 平家「むいかの菖蒲、會(エ)に逢はぬ花、いさかひ果てのちぎりかなとぞ笑はれける」

六日の菖蒲、十日の菊 【句】 前條に同じ。〔諺語〕

むい-かいさん 無意解散 【名】〔法〕法人が、その設立者又は社員の意志に基かずして、解散すること、即ちその破產、設立許可の取消、裁判所の命令、事業の成功不能などによる解散。(有意解散に對して)

むいか-どしこし 六日年越 【名】『正月七日は七日正月(ナヌカジヤウグワツ)の稱あるによりていふ』正月六日を年越として祝ふこと。昔は、この日、厄拂來りて、町内大いに賑ひたり。

むい-き 無意氣 【名】 **ぶいき**(無意氣)に同じ。 持統天皇歌軍法「あまり無意氣な御勘當、つらい親御の心や」

むい-ぎ 無意義 【名】 意義なきこと。存在又は言動の價値なきこと。無意味。

むいきもの 無意氣者 【名】 **ぶいきもの**(無意氣者)に同じ。 薩摩歌「手荒き薩男(サツ)のむいき者」

むいしき 無意識 【名】『英Unconsciousness』〔哲〕意識の無きこと。昏睡の時、又は爲さんとする考無くして爲す時の心の狀態是れなり。

むいしき-てつがく 無意識哲學 【名】〔哲〕『獨Philophie des Unbewussten. 同名の著書に本づきていふ』獨逸の哲學者ハルトマン(Hartmann)の說きたる哲學說。ヘ